大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XV



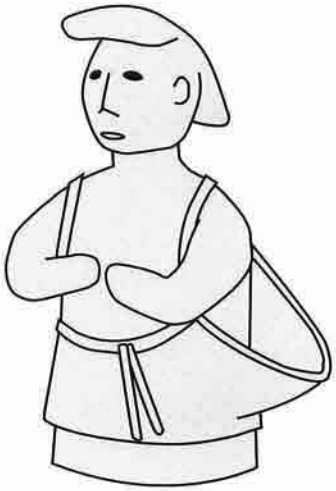
2006.11

財団法人　大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XV



2006.11

財団法人　大阪市文化財協会

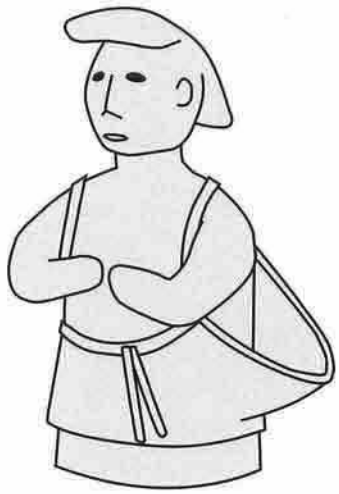


長原87号墳出土巫女形埴輪

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XV



2006.11

財団法人　大阪市文化財協会

序　　文

地下鉄谷町線の工事で長原遺跡が発見されて、早いもので30年が過ぎた。基本層序を基にした発掘調査成果の蓄積により、この地域の旧石器時代から現代に至るまでの歴史的な変遷が明らかになった。

本書では1979～95年度に行われた104件の調査を報告する。この中には44基の古墳や集落、平安時代の土地争議の木簡など多様な遺物・遺構が含まれる。本書の上梓によって、学界の研究進展や市民への普及活動に寄与できれば幸いである。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、ご理解、ご協力を賜った各関係機関の皆様方に、心より御礼申し上げる。

2006年11月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長　脇田　修

例　　言

一、本書は大阪市平野区に所在する長原遺跡の発掘調査報告である。1979～95年度にかけて行った104件の調査を報告する。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、第Ⅰ章第２節の表４・５に記した各調査の原因者の負担による。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣慎(当時)の指揮のもと、表４・５に記した担当者によって行われた。

一、本書の編集は、現場終了後に各調査担当者が作成した略報を基礎にして、2004年度に調査研究部研究資料課学芸員(現文化財研究部学芸員)寺井誠が行い、2005・2006年度に若干の修正を加えた。編集に際しては、研究資料課長(現同部事業担当課長)京嶋覚、研究資料課課長代理(現同部長原調査事務所長)松尾信裕の指揮を受けた。また、第Ⅱ章第１節の長原180号墳(NG88－56次調査)については調査課長(現同部技術管理・保存科学担当課長)田中清美、第Ⅲ章第１節の建築部材については調査課学芸員(現大阪歴史博物館学芸員)李陽浩、第Ⅶ章第２節のNG84－86次調査出土古式土師器については調査課学芸員(現同部学芸員)杉本厚典が担当し、担当個所の末尾に名前を付した。

一、木簡の墨書の釈文については文化財研究部保存科学室鳥居信子が担当し、建築学的見解は李陽浩から教示を得た。

一、金属器・木器の保存処理と整理は、文化財研究部保存科学担当係長伊藤幸司および鳥居が行った。

一、巻末の英文目次・要旨は、アメリカ合衆国・ワシントン州立大学のマシュー・バンペルト(Matthew W. Van Pelt)氏の助力を得て、寺井が作成した。

一、遺構写真の撮影はおもに各調査担当者が行い、一部は徳永圀治氏に委託した。また、NG84－25次調査の航空写真は朝日航洋株式会社による。

一、本書で報告した遺物、その他の資料は当協会が保管している。

一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には協会職員ならびに補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表する。

凡　　例

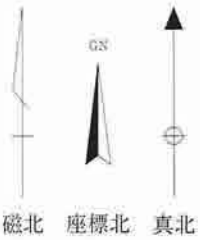
1．調査次数に冠せられるアルファベットについて、NGは長原遺跡を示し、たとえばNG98－３次という調査は1998年度の３番目の長原遺跡の調査であるということを意味する。また、第Ⅴ章第２節に登場するDDは出戸４丁目所在遺跡を示す。これは現在の長原遺跡に含まれるが、報告では調査当時の次数をそのまま用いた。なお、各調査を示す場合、本文中ではNGを冠するが、位置図などでは特に断らないかぎり省略することにした。

2．第Ⅱ章以降の各節の冒頭に掲載した層序表での、各々の地層における遺構欄で用いた記号は、←＝上面検出遺構、↓＝下面検出遺構、▼＝基底面検出遺構をそれぞれ示している。

3．遺構名の表記は、塀・柵(SA)、掘立柱建物(SB)、柱穴(SP)、土壙(SK)、溝(SD)、井戸(SE)、自然流路(NR)、そのほかの遺構(SX)の略号を冠した。遺構番号は長原遺跡の標準層序[趙哲済2001]を基本とした番号を冠し、以下は各節ごとに通し番号を付した。

4．遺物番号は、掲載したすべてに対して、各節ごとで通し番号を付した。

5．本書で用いた方位には、磁北・座標北・真北の３種類がある。これらの区別は右図の指北記号によって示した。



6．本書に報告する調査はいずれも2002(平成14)年３月以前のものであり、座標北および座標値は世界測地系ではなく、それらの調査で使用した旧来の日本測地系(国土平面直角座標第Ⅵ系)を用いている。

7．水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mを記した。

8．本書で用いた土器編年と器種名について、弥生土器は[寺沢薫・森井貞雄1989]、古墳時代の須恵器は[田辺昭三1966・1981]に、飛鳥・奈良時代の須恵器・土器は[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器は[佐藤隆1992]、平安時代後期以降の瓦器は[尾上実ほか1995]に従った。

9．註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。

本 文 目 次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　長原遺跡の発掘調査 …… 1
　第１節　長原遺跡の概要 …… 1
　　１）概要 …… 1
　　２）遺跡の立地と地形環境 …… 2
　　３）近年のおもな調査研究 …… 3
　第２節　今回報告する調査一覧 …… 8

第Ⅱ章　南・西南地区の調査 …… 11
　第１節　NG18次およびその周辺の調査 …… 11
　　１）調査地と周辺の概要 …… 11
　　２）調査の結果 …… 12
　　３）まとめ …… 30
　第２節　NG83－66次およびその周辺の調査 …… 31
　　１）調査地と周辺の概要 …… 31
　　２）調査の結果 …… 31
　　３）まとめ …… 36
　第３節　NG92－92次およびその周辺の調査 …… 37
　　１）調査地と周辺の概要 …… 37
　　２）調査の結果 …… 38
　　３）まとめ …… 54
　第４節　NG86－62および93－91次調査 …… 55
　　１）調査地と周辺の概要 …… 55
　　２）調査の結果 …… 56
　　３）まとめ …… 56

第Ⅲ章　西地区の調査 …… 57
　第１節　NG84－25次およびその周辺の調査 …… 57

1）調査地と周辺の概要 …… 57
2）調査の結果 …… 58
3）まとめ …… 88
第2節　NG91－70次およびその周辺の調査 …… 90
1）調査地と周辺の概要 …… 90
2）調査の結果 …… 90
3）まとめ …… 99
第3節　NG92－95および93－26次調査 …… 101
1）調査地と周辺の概要 …… 101
2）調査の結果 …… 101
3）まとめ …… 118

第Ⅳ章　中央地区の調査 …… 119
第1節　NG89－25次およびその周辺の調査 …… 119
1）調査地と周辺の概要 …… 119
2）調査の結果 …… 119
3）まとめ …… 128
第2節　NG92－2次およびその周辺の調査 …… 130
1）調査地と周辺の概要 …… 130
2）調査の結果 …… 132
3）まとめ …… 140

第Ⅴ章　北地区の調査 …… 143
第1節　NG93－37次およびその周辺の調査 …… 143
1）調査地と周辺の概要 …… 143
2）調査の結果 …… 143
3）まとめ …… 151
第2節　DD82－1次およびその周辺の調査 …… 152
1）調査地と周辺の概要 …… 152
2）調査の結果 …… 152
3）まとめ …… 158
第3節　NG84－34次およびその周辺の調査 …… 161
1）調査地と周辺の概要 …… 161
2）調査の結果 …… 161
3）まとめ …… 168

第Ⅵ章　東南地区の調査 …… 169

第1節　NG83－8次およびその周辺の調査 …… 169
1）調査地と周辺の概要 …… 169
2）調査の結果 …… 169
3）まとめ …… 179
第2節　NG91－1次およびその周辺の調査 …… 181
1）調査地と周辺の概要 …… 181
2）調査の結果 …… 181
3）まとめ …… 199
第3節　NG93－1次およびその周辺の調査 …… 201
1）調査地と周辺の概要 …… 201
2）調査の結果 …… 201
3）まとめ …… 212
第4節　NG86－3・64次およびその周辺の調査 …… 214
1）調査地と周辺の概要 …… 214
2）調査の結果 …… 215
3）まとめ …… 225
第5節　NG85－18次およびその周辺の調査 …… 227
1）調査地と周辺の概要 …… 227
2）調査の結果 …… 227
3）まとめ …… 234

第Ⅶ章　東・東北地区の調査 …… 235
第1節　NG87－67次およびその周辺の調査 …… 235
1）調査地と周辺の概要 …… 235
2）調査の結果 …… 236
3）まとめ …… 250
第2節　NG84－86次およびその周辺の調査 …… 251
1）調査地と周辺の概要 …… 251
2）調査の結果 …… 251
3）まとめ …… 262
第3節　NG84－4次およびその周辺の調査 …… 263
1）調査地と周辺の概要 …… 263
2）調査の結果 …… 265
3）まとめ …… 272

第Ⅷ章　遺構と遺物の検討 …… 273
第1節　長原古墳群集成 …… 273

1）はじめに …… 273
2）時期 …… 273
3）墳丘形態と外部施設 …… 274
4）主体部と副葬品 …… 274
第2節　長原117号墳出土の両耳付短頸壺について …… 287
1）はじめに …… 287
2）朝鮮半島における両耳付短頸壺 …… 287
3）日本における出土事例 …… 287
4）117号墳出土資料と類例の検討 …… 290
5）おわりに …… 291

引用・参考文献 …… 293

あとがき・索引

英文目次・要旨

原色図版目次

長原87号墳出土形象埴輪

上：鶏形埴輪

下：馬形埴輪

図　版　目　次

1　NG18次調査の遺構

上：長原71～74号墳（A区を南から）

中：長原74号墳周溝遺物出土状況

下：SD603完掘状況（A地区を南から）

2　NG83－38次調査の遺構

上：長原87号墳全景（北から）

中：長原87号墳墳丘断面と埴輪列

下：長原87号墳主体部（西から）

3　NG88－56次調査の遺構

上：長原180号墳全景（南から）

下：長原180号墳主体部（東から）

4　NG89－12・83－66次調査の遺構

上：NG89－12次奈良時代水田（南から）

中：NG83－66次奈良時代水田（南から）

下：NG83－66次SB401（北から）

5　NG87－70・89－69次調査の遺構

上：NG87－70次長原6Bi層上面全景（東から）

中：NG87－70次長原6Ai層上面全景（東から）

下：NG89－69次長原182号墳全景（東から）

6　NG92－92次調査の遺構（一）

上：長原200号墳検出状況（南から）

中：長原200号墳完掘状況（南から）

下：長原200号墳主体部（西から）

7　NG92－92次調査の遺構（二）

上：１区奈良時代水田全景（北から）

中：SR501埴輪出土状況（南東から）

下：３区平安時代遺構全景（東から）

8　NG92－45・94－67次調査の遺構

上：NG92－45次北区畦畔断面

中：NG94－67次平安時代遺構全景（南から）

下：NG94－67次SE402断面（北から）

9　NG84－25次調査の遺構（一）

上：A区古墳時代遺構全景（航空写真：右が北）

下：B区古墳時代遺構全景（東から）

10　NG84－25次調査の遺構（二）

上：長原113号墳（東から）

中：長原116・117号墳（上から）

下：長原117号墳（北西から）

11　NG84－25次調査の遺構（三）

上：SB702（南から）

中：B区南側の古墳時代溝群（南から）

下：SE701木器出土状況

12　NG84－25次調査の遺構（四）

上：A区奈良時代水田全景（航空写真：右が北）

中：A区北東部奈良時代水田（航空写真：右が北）

下：SX601（南から）

13　NG86－91次調査の遺構

上：長原166号墳全景（東から）

中：長原166号墳第１主体部（南東から）

下：長原166号墳周溝韓式系鍋出土状況

14　NG89－36・90－66次調査の遺構

上：NG89－36次古墳時代遺構全景（北から）

中：NG89－36次SX701検出状況（西から）

下：NG90－66次SD407完掘状況（北東から）

15　NG91－70・93－14次調査の遺構

上：NG91－70次SE701断面

中：NG91－70次SD402断面（北から）

下：NG93－14次完掘状況（北から）

16　NG93－80・89－15次調査の遺構

上：NG93－80次SD601（北西から）

中：NG89－15次調査地西部完掘状況（東から）

下：NG89－15次SD401（北から）

17　NG92－95次調査の遺構

上：古墳時代遺構全景（北から）

中：SB703

下：SB711～713（北東から）

18　NG93－26次調査の遺構

上：SB714・SE701（東から）

中：SD709・713(北から)
下：SD709遺物出土状況(南から)
19 NG89－25次調査の遺構
上：古墳時代遺構完掘状況(北から)
中：SB701(北から)
下：長原6Ai層上面検出水田(北から)
20 NG92－2次調査の遺構(一)
上：SE401～403およびSD401(南から)
中：SE401断面(北から)
下：SE401曲物検出状況(北から)
21 NG92－2次調査の遺構(二)
上：SE402曲物検出状況(南から)
中：SE403曲物検出状(南から)
下：SE402断面(南から)
22 NG90－13・95－2次調査の遺構
上：NG90－13次SD602完掘状況(南から)
中：NG95－2次完掘状況(北から)
下：NG95－2次SK402断面(東から)
23 NG93－37・87－43次調査の遺構
上：NG93－37次長原199・201・202号墳
(東から)
中：NG93－37次長原204号墳(北から)
下：NG87－43次第5層基底面全景(東から)
24 DD82－1次調査の遺構
上：SE301遺物出土状況
中：SE302
下：SE305
25 NG91－16・88－90次調査の遺構
上：NG91－16次東壁断面図(北西から)
中：NG88－90次SE401(北から)
下：NG88－90次SE402(北から)
26 NG84－34次調査の遺構
上：SX801墳丘断面(2区西壁)
中：SX801周溝遺物出土状況(西から)
下：SX802周溝遺物出土状況
27 NG83－8・86－23次調査の遺構
上：NG83－8次SX701(西から)
中：NG83－8次SD601・602
およびSX601(西から)
下：NG86－23次NR601(西から)
28 NG89－47・81－12次調査の遺構
上：NG89－47次平安～鎌倉時代
遺構全景(西から)
中：NG89－47次SB404柱穴内石製礎板(南から)
下：NG81－12次SX401出土状況
29 NG91－1次調査の遺構(一)
上：長原16B層上面化石林全景(南東から)
中：縄文時代石器ブロック検出状況(南から)
下：SD902(南東から)
30 NG91－1次調査の遺構(二)
上：長原183～186号墳(北から)
中：長原183号墳(北から)
下：長原184号墳
31 NG92－5次調査の遺構
上：SD902(南東から)
中：長原198号墳(南西から)
下：SK710遺物出土状況(南東から)
32 NG89－48次調査の遺構
上：旧石器ブロック検出状況(東から)
中：NR901・SD901検出状況(北から)
下：調査地北西部柱穴群(北から)
33 NG93－1次調査の遺構(一)
上：弥生時代水田断面(南から)
中：弥生時代水田全景(南東から)
下：弥生時代水田北東部(北東から)
34 NG93－1次調査の遺構(二)
上：NR901(北から)
中：SK801高杯出土状況(東から)
下：SE701完掘状況(北から)
35 NG86－3・64次調査の遺構(一)
上：旧石器時代石器ブロック
中：横長剥片出土状況
下：石核出土状況
36 NG86－3・64次調査の遺構(二)
上：NR901(南から)
中：SD901(北から)
下：NR902(南から)
37 NG93－56次調査の遺構
上：調査地東北部古墳時代遺構(北から)
中：SB701(北西から)
下：SD703遺物出土状況(南から)
38 NG85－18・87－56・87－81次調査の遺構
上：NG85－18次長原129号墳(南から)
中：NG87－56次SD709・710(東から)
下：NG87－81次長原178号墳および
SD707・708(西から)

39　NG87－67次調査の遺構
上：SK801(東から)
中：SX701(北西から)
下：SD712～714(南東から)
40　NG84－6次調査の遺構
上：SX703周溝(北から)
中：SX702周溝(北から)
下：SX703上層埴輪出土状況
41　NG84－86・84－4次調査の遺構
上：NG84－86次SE701遺物出土状況
中：NG84－4次SD701遺物出土状況
下：NG84－4次SD702遺物出土状況
42　NG95－77次調査の遺構
上：縄文海進時の生痕化石
中：SD801完掘状況(東から)
下：SX701断面(西から)
43　NG92－25次SE701出土建築部材
44　NG92－2次出土木簡・NG94－67次出土緑釉陶器

挿　図　目　次

図1　長原遺跡の位置と地区割 …… 1
図2　長原遺跡周辺の地形分類図 …… 2
図3　本書で報告する調査地位置図 …… 8
図4　NG18次などの調査地位置図 …… 11
図5　NG88－56次東壁断面図 …… 12
図6　NG88－40次平断面図 …… 13
図7　NG88－40次出土スクレイパー …… 14
図8　NG18次調査地における古墳と
古代の溝の分布 …… 14
図9　NG18次長原71～74号墳出土遺物 …… 15
図10　NG18次長原76号墳実測図 …… 16
図11　NG18次長原76号墳出土埴輪 …… 17
図12　NG18次長原77・79号墳および
C－5区出土遺物 …… 18
図13　NG88－40次出土鳥形埴輪 …… 19
図14　NG83－38次長原87号墳実測図 …… 20
図15　NG83－38次長原87号墳主体部実測図 …… 21
図16　NG83－38次長原87号墳出土遺物 …… 21
図17　NG83－38次長原87号墳出土埴輪(1) …… 22
図18　NG83－38次長原87号墳出土埴輪(2) …… 23
図19　NG88－56次長原180号墳平面図
および主体部実測図 …… 24
図20　NG88－56次長原180号墳墳丘断面図 …… 24
図21　NG88－56次長原180号墳出土遺物 …… 25
図22　長吉川辺1丁目一帯の古墳と
飛鳥～奈良時代の溝の分布 …… 27
図23　NG89－12次奈良時代水田平面図 …… 28
図24　NG18次SE401実測図 …… 29
図25　NG18次SE401出土遺物 …… 29
図26　NG83－66次などの調査地位置図 …… 31
図27　NG83－66次南壁断面図 …… 32
図28　NG24次古墳～平安時代遺構配置図 …… 32
図29　長原15・39号墳平面図 …… 33
図30　NG83－17次長原44号墳平面図 …… 33
図31　NG83－66次奈良時代水田平面図 …… 34
図32　NG83－66次周辺古墳および畦畔分布図 …… 34
図33　NG21次奈良時代水田平面図 …… 35
図34　NG83－66次平安時代遺構配置図 …… 36
図35　NG92－92次などの調査地位置図 …… 37
図36　NG92－45次南区南壁断面図 …… 38
図37　NG89－69次北区北壁断面図 …… 39
図38　NG92－73次SX901平面図 …… 39
図39　NG86－66次長原155～159号墳と
その周辺の古墳 …… 40
図40　NG89－69次長原182号墳出土遺物 …… 41
図41　NG89－69次南トレンチ古墳時代遺構平面図 41
図42　NG92－92次長原200号墳実測図 …… 42
図43　NG92－92次長原200号墳主体部 …… 43
図44　NG92－92次長原200号墳出土遺物 …… 43
図45　NG87－70次飛鳥～奈良時代遺構配置図 …… 44
図46　NG89－69次飛鳥時代水田平面図 …… 45
図47　NG92－45次奈良時代水田平面図 …… 46
図48　NG92－73次飛鳥～奈良時代水田平面図 …… 47
図49　NG92－92次奈良時代水田平面図 …… 48
図50　NG92－92次SR501実測図 …… 48
図51　NG92－92次1区SR501内埴輪出土状況 …… 48
図52　SR501および長原6Ai層出土遺物 …… 49
図53　長吉長原4丁目一帯の奈良時代水田 …… 50
図54　NG92－92次平安時代遺構配置図 …… 51
図55　NG94－67次平安時代遺構配置図 …… 52
図56　NG94－67次SE402断面図 …… 52
図57　NG94－67次出土遺物 …… 53

図58　NG86－62および93－91次調査地位置図 …… 55
図59　NG93－91次北壁断面図 …… 55
図60　NG93－91次遺構配置図 …… 56
図61　NG93－91次SD403断面図 …… 56
図62　NG84－25次などの調査地位置図 …… 57
図63　NG84－25次層序模式図 …… 59
図64　NG86－91次南壁断面図 …… 59
図65　NG89－36次南壁断面図 …… 59
図66　NG84－25次出土石器 …… 60
図67　NG84－25次A区古墳時代遺構配置図 …… 61
図68　NG84－25次A区長原113号墳実測図 …… 62
図69　NG84－25次A区長原113号墳出土遺物 …… 63
図70　NG84－25次A区古墳出土遺物 …… 64
図71　NG84－25次A区長原116号墳実測図 …… 65
図72　NG84－25次A区長原117号墳実測図 …… 66
図73　NG86－91次長原166号墳実測図 …… 67
図74　NG86－91次長原166号墳第1主体部実測図　67
図75　NG86－91次長原166号墳第2主体部実測図　68
図76　NG86－91次長原166号墳出土鉄製品 …… 69
図77　NG86－91次長原166号墳出土須恵器 …… 71
図78　NG84－25次B区古墳時代遺構配置図 …… 73
図79　NG84－25次B区掘立柱建物実測図（1） …… 74
図80　NG84－25次B区掘立柱建物実測図（2） …… 75
図81　NG84－25次B区古墳時代出土遺物 …… 76
図82　NG84－25次B区SE701実測図 …… 77
図83　NG84－25次B区SE701出土土師器 …… 78
図84　NG84－25次B区SE701出土須恵器・木製品　79
図85　NG89－36次古墳時代遺構配置図 …… 80
図86　NG89－36次古墳時代遺構平断面図 …… 80
図87　NG89－36次出土遺物 …… 81
図88　NG89－36次出土滑石製品実測図（1） …… 81
図89　NG89－36次出土滑石製品実測図（2） …… 82
図90　NG89－36次出土臼玉計測値 …… 83
図91　NG84－25次奈良時代水田平面図 …… 84
図92　NG86－91次奈良時代水田平面図 …… 85
図93　NG89－36次飛鳥～奈良時代遺構配置図 …… 85
図94　NG90－66次遺構配置図 …… 86
図95　NG84－25・89－36・90－66次出土遺物 …… 86
図96　NG84－25次B区鎌倉時代水田平面図 …… 87
図97　NG89－36次鎌倉時代遺構配置図 …… 88
図98　NG89－36次SE401実測図 …… 88
図99　NG84－25次調査地周辺の古墳時代遺構配置図89
図100　NG91－70次などの調査地位置図 …… 90
図101　NG93－80次2区東壁断面図 …… 91
図102　NG89－15次古墳～鎌倉時代遺構配置図 …… 91
図103　NG91－70次古墳～平安時代遺構配置図 …… 92
図104　NG91－70次出土遺物 …… 93
図105　NG91－70次SE701実測図 …… 94
図106　NG93－14次古墳時代遺構配置図 …… 94
図107　NG93－80次古墳時代遺構配置図 …… 95
図108　NG93－80次出土遺物 …… 95
図109　NG93－80次西区SD601実測図 …… 96
図110　NG89－15次SD401断面図 …… 96
図111　NG89－15・91－70次調査地と
その周辺の平安時代遺構配置図 …… 97
図112　NG91－70次SD402断面 …… 97
図113　NG89－15・91－70・93－80次
平安～鎌倉時代出土遺物 …… 98
図114　NG93－80次鎌倉～室町時代遺構配置図 …… 98
図115　調査地周辺の古墳時代遺構配置図 …… 100
図116　NG92－95・93－26次調査地位置図 …… 101
図117　NG92－95次遺構配置図 …… 102
図118　NG92－95次A群遺構実測図 …… 103
図119　NG92－95次B群遺構実測図 …… 104
図120　NG92－95次C群遺構実測図 …… 105
図121　NG93－26次遺構配置図 …… 106
図122　NG93－26次SE701断面図 …… 107
図123　NG93－26次SE701出土遺物 …… 108
図124　NG93－26次SE701・702出土遺物 …… 109
図125　NG93－26次SK701出土遺物（1） …… 110
図126　NG93－26次SK701出土遺物（2） …… 111
図127　NG93－26次SK701上層・SK703出土遺物　112
図128　NG93－26次SD714出土遺物 …… 113
図129　NG93－26次SD707～709・711出土遺物　114
図130　NG93－26次出土遺物（その他） …… 115
図131　NG93－26次出土双孔円板 …… 116
図132　NG92－95・93－26次および近隣の
古墳時代遺構配置図 …… 117
図133　NG89－25次などの調査地位置図 …… 119
図134　NG89－5次東壁断面図 …… 120
図135　NG89－25次南壁断面図 …… 120
図136　NG89－5次縄文時代遺構配置図 …… 121
図137　NG89－5次出土石鏃 …… 121
図138　NG89－25次古墳時代遺構配置図 …… 122
図139　NG89－25次古墳時代遺構出土遺物 …… 123
図140　NG89－25次飛鳥時代遺構配置図 …… 124
図141　NG89－25次飛鳥～奈良時代水田平面図 …… 125
図142　NG89－5・25次飛鳥～奈良時代出土遺物　126

図143　NG92－79次飛鳥～奈良時代遺構配置図 ‥ 126
図144　NG89－25次鎌倉時代遺構配置図 …… 127
図145　NG95－29次SE401実測図とその位置 …… 128
図146　西ムラ・長原古墳群と
　　NG89－25次調査地の関係 …… 129
図147　NG92－２次などの調査地位置図 …… 130
図148　NG92－２次北壁断面図 …… 131
図149　NG92－２次古墳時代遺構配置図 …… 132
図150　NG89－13次SD601断面図 …… 133
図151　NG89－13次SK501断面図 …… 133
図152　NG89－13次遺構配置図 …… 133
図153　NG90－13次飛鳥～奈良時代遺構配置図 ‥ 134
図154　NG90－13次SD602出土遺物 …… 134
図155　NG86－13・87－２次調査地
　　および周辺の水田 …… 135
図156　NG92－２次SE401～403・SD401平面図 136
図157　NG92－２次SE401～403断面図 …… 136
図158　NG92－２次SE401出土木簡 …… 137
図159　NG92－２次SE401～403出土遺物 …… 138
図160　NG90－13次鎌倉時代遺構配置図 …… 138
図161　NG92－２次鎌倉時代遺構配置図 …… 139
図162　NG95－２次鎌倉時代遺構配置図
　　およびSK402断面図 …… 140
図163　NG95－２次SK402出土遺物 …… 140
図164　木簡出土位置と推定条里 …… 141
図165　NG93－37次などの調査地位置図 …… 143
図166　NG87－43次南壁断面図 …… 144
図167　NG93－37次断面図 …… 144
図168　NG93－37次縄文時代遺構配置図 …… 145
図169　NG93－37次縄文時代出土遺物 …… 146
図170　NG93－37次古墳分布図 …… 148
図171　NG93－37次出土遺物 …… 149
図172　NG93－37次長原204号墳墳丘断面図 …… 150
図173　NG87－43次室町時代遺構配置図 …… 150
図174　DD82－１次など調査地位置図 …… 152
図175　DD82－１次断面図 …… 153
図176　NG91－16次東壁断面図 …… 153
図177　NG88－90次北壁断面図 …… 154
図178　DD82－1次調査地区割および遺構配置図 ‥ 155
図179　DD82－1次出土遺物 …… 156
図180　DD82－1次SK303出土遺物 …… 157
図181　NG88－90次遺構配置図 …… 157
図182　NG88－90次検出井戸実測図 …… 158
図183　NG88－90次出土遺物 …… 159
図184　NG91－16次遺構配置図 …… 160
図185　NG91－16次SD601・SE409断面図 …… 160
図186　NG84－34次などの調査地位置図 …… 161
図187　NG84－34次調査地周辺の弥生時代の遺構 162
図188　NG84－34次弥生前期土器 …… 162
図189　NG84－34次２区断面図
　　およびSX801平面図 …… 163
図190　NG84－34次SX801出土遺物 …… 164
図191　NG84－34次３区断面図
　　およびSX802平面図 …… 165
図192　NG84－34次SX802出土遺物（１） …… 165
図193　NG84－34次SX802出土遺物（２） …… 166
図194　NG84－34次４区断面図
　　およびSX803平面図 …… 167
図195　NG23次SX804実測図 …… 167
図196　NG23次長原100号墳周溝平面図 …… 168
図197　NG23次長原100号墳出土遺物 …… 168
図198　長原100号墳と周辺の古墳分布 …… 168
図199　NG83－８次などの調査地位置図 …… 169
図200　NG83－８次南区南壁断面図 …… 170
図201　NG83－８次出土石器 …… 170
図202　NG89－47次出土縄文時代晩期土器 …… 170
図203　NG83－８次出土庄内式期土器 …… 170
図204　NG89－47次弥生時代遺構配置図 …… 171
図205　NG83－８次南区庄内式期～
　　飛鳥時代遺構配置図 …… 171
図206　NG83－８次奈良時代水田平面図 …… 172
図207　NG81－12次飛鳥～奈良時代水田平面図 ‥ 173
図208　NG86－23次奈良時代遺構配置図 …… 174
図209　NG89－47次奈良時代遺構配置図 …… 174
図210　NG86－23次NR601および周辺の遺構 …… 175
図211　NG81－12次平安～鎌倉時代遺構配置図 ‥ 175
図212　NG81－12次SX401平面図および出土遺物 176
図213　NG89－47次平安～鎌倉時代遺構配置図 ‥ 176
図214　NG89－47次出土平安～鎌倉時代遺物 …… 177
図215　NG83－８次鎌倉時代遺構配置図 …… 178
図216　NG83－８・86－23次平安
　　～鎌倉時代出土遺物 …… 178
図217　NG86－23次鎌倉時代遺構配置図 …… 179
図218　NG91－１次などの調査地位置図 …… 181
図219　NG91－１次南壁断面図 …… 182
図220　NG91－１次西壁断面図 …… 182
図221　NG92－５次東壁断面図 …… 183
図222　NG92－５次東壁断面図 …… 183

図223 NG91－1次化石林および
ナウマンゾウ足跡化石分布図 …… 184
図224 NG92－5次ナウマンゾウ足跡化石分布図 185
図225 NG91－1次縄文～弥生時代遺構配置図 ‥ 187
図226 NG92－5次弥生時代遺構配置図 …… 188
図227 NG91－1次長原183～186号墳配置図 …… 189
図228 NG91－1次出土遺物 …… 190
図229 NG92－5次長原198号墳平面図 …… 191
図230 NG91－1次古墳～飛鳥時代遺構配置図 ‥ 193
図231 NG92－5・87－85・89－60次
古墳～飛鳥時代遺構配置図 …… 194
図232 NG92－5・87－85次出土遺物 …… 195
図233 NG91－1次鎌倉～江戸時代遺構配置図 ‥ 196
図234 NG92－5次鎌倉～江戸時代遺構配置図 ‥ 198
図235 NG91－1・92－5次弥生時代遺構配置図 199
図236 NG93－1次などの調査地位置図 …… 201
図237 NG93－1次北壁断面図 …… 202
図238 NG89－48次長原13層石器分布図 …… 203
図239 NG93－1次石器分布図 …… 204
図240 NG94－83次長原13A・12A層石器分布図 204
図241 NG89－48次弥生時代遺構配置図 …… 205
図242 NG93－1次弥生時代遺構配置図 …… 206
図243 NG93－1次出土弥生土器 …… 206
図244 NG93－1次SK801実測図 …… 206
図245 NG89－48・93－1次弥生時代遺構配置図 207
図246 NG89－48次古墳～奈良時代遺構配置図 ‥ 208
図247 NG89－48・93－1・94－83次
古墳～飛鳥時代出土遺物 …… 209
図248 NG93－1次古墳～江戸時代遺構配置図 ‥ 210
図249 NG93－1次SE701実測図 …… 211
図250 NG94－83次古墳～飛鳥時代遺構配置図 ‥ 211
図251 NG92－53次古代遺構配置図 …… 212
図252 NG92－63次中世遺構配置図 …… 212
図253 NG93－1次調査地周辺の水田と遺構 …… 213
図254 NG93－1次などの調査地位置図 …… 214
図255 NG86－3・64次南西壁断面図 …… 214
図256 NG93－56次東西方向断面図 …… 215
図257 NG86－3・64次旧石器平面・垂直分布図 216
図258 NG86－3・64次縄文～弥生時代
遺構配置図 …… 217
図259 NG87－36次縄文～弥生時代遺構配置図 ‥ 218
図260 NG93－56次古墳～飛鳥時代遺構配置図
およびSB701実測図 …… 219
図261 NG93－56次SD703出土遺物 …… 220
図262 NG93－56次各遺構実測図 …… 221
図263 NG93－56次SE701・702出土遺物 …… 222
図264 NG93－56次各遺構出土遺物 …… 223
図265 NG87－36次古墳時代SX701の位置と実測図224
図266 NG93－56次中世遺構配置図 …… 225
図267 NG85－18次などの調査地位置図 …… 227
図268 NG87－81次北区北壁中央断面図 …… 228
図269 NG87－81次古墳～飛鳥時代遺構配置図 ‥ 228
図270 NG85－18次古墳～飛鳥時代遺構配置図 ‥ 229
図271 長吉長原東3丁目西部の古墳～飛鳥時代
遺構配置図 …… 230
図272 NG85－18次長原7Ai層出土遺物 …… 231
図273 NG85－18次SD601平面図 …… 232
図274 NG87－56次飛鳥～奈良時代遺構配置図 ‥ 232
図275 NG87－56次調査地周辺の平安時代遺構配置図
…… 233
図276 NG87－67次などの調査地位置図 …… 235
図277 NG87－67次断面模式図 …… 237
図278 NG87－67次SK801実測図 …… 237
図279 NG81－3次遺構配置図 …… 238
図280 NG81－3次SK701出土遺物 …… 238
図281 NG87－67次弥生時代遺構配置図 …… 238
図282 NG87－67次SK801・SB701・SD701出土遺物
…… 239
図283 NG87－67次SX701実測図 …… 240
図284 NG87－67次SX701出土遺物 …… 240
図285 NG84－6次5区SD708平面図 …… 241
図286 NG84－6次調査地全体図 …… 241
図287 NG84－6次SD708出土遺物(1) …… 242
図288 NG84－6次SD708出土遺物(2) …… 243
図289 NG84－6次SD707・SX703出土遺物 …… 243
図290 NG84－6次3区平面図 …… 243
図291 NG84－6次SX702出土遺物 …… 244
図292 NG84－6次4区平面図 …… 245
図293 NG84－6次1区平面図 …… 245
図294 NG84－6次2区平面図 …… 246
図295 NG84－6次2区落込みおよびSD703・705
出土遺物 …… 246
図296 NG84－6次SX703上層土器溜出土遺物 ‥ 247
図297 NG84－6次SX703上層出土形象埴輪 …… 248
図298 NG87－67次古墳時代遺構配置図 …… 249
図299 NG87－67次古墳時代遺物 …… 249
図300 NG84－86次などの調査地位置図 …… 251
図301 NG83－65次南壁断面図 …… 252

図302　NG85－17次出土縄文土器 …… 252
図303　NG83－65次弥生時代遺構配置図 …… 253
図304　NG80－１次絵画土器拓影 …… 253
図305　NG84－86次とNG16次調査地の関係 …… 253
図306　NG84－86次東区遺構配置図 …… 254
図307　NG84－86次西区遺構配置図 …… 254
図308　NG84－86次SE701実測図 …… 254
図309　NG84－86次SE701－1a層出土土器 …… 256
図310　NG84－86次SE701－1a・1b層出土土器　259
図311　NG84－86次SE701－２層出土土器 …… 260
図312　NG85－17次出土遺物 …… 261
図313　NG83－65次SK706 …… 262
図314　NG80－１次奈良時代遺構配置図 …… 262
図315　NG84－４次などの調査地位置図 …… 263
図316　NG95－77次北壁・東壁断面図 …… 265
図317　NG95－77次SD801・SK801平面図 …… 267
図318　NG95－77次SD801と周辺遺構との関係 …… 267
図319　NG95－77次出土遺物 …… 267
図320　NG84－４次各トレンチ配置図 …… 268
図321　NG84－４次SD701・702実測図 …… 268
図322　NG84－４次SD701出土遺物 …… 269
図323　NG84－４次SD702・包含層出土遺物 …… 270
図324　NG88－６次遺構配置図 …… 271
図325　NG88－６次出土遺物 …… 271
図326　長原古墳群の変遷図 …… 274
図327　図328・329の位置 …… 275
図328　長原古墳群分布図(北半) …… 276
図329　長原古墳群分布図(南半) …… 277
図330　長原古墳群１・２期 …… 278
図331　長原古墳群３・４期 …… 279
図332　両耳付短頸壺の分類と
　　朝鮮半島・日本の類例 …… 288
図333　日本出土の両耳付短頸壺の分布 …… 289
図334　長原117号墳出土遺物 …… 290

表目次

表1　長原遺跡の調査・研究略年表 …… 3
表2　長原遺跡の標準層序 …… 5
表3　長原遺跡東北地区の基本層序 …… 6・7
表4　調査地一覧(1) …… 9
表5　調査地一覧(2) …… 10
表6　NG88－40次層序表 …… 12
表7　NG88－56次層序表 …… 12
表8　NG83－66次層序表 …… 32
表9　NG92－45次層序表 …… 38
表10　NG89－69次層序表 …… 39
表11　NG93－91次層序表 …… 55
表12　NG84－25次層序表 …… 58
表13　NG86－91次層序表 …… 58
表14　NG89－36次層序表 …… 58
表15　NG84－25次B区掘立柱建物一覧 …… 76
表16　NG93－80次層序表 …… 91
表17　NG89－5次層序表 …… 120
表18　NG89－25次層序表 …… 120
表19　NG92－2次層序表 …… 131
表20　NG87－43次層序表 …… 144
表21　NG93－37次層序表 …… 144
表22　DD82－1次層序表 …… 153
表23　NG91－16次層序表 …… 153
表24　NG88－90次層序表 …… 154
表25　NG88－90次検出井戸一覧 …… 158
表26　NG83－8次層序表 …… 170
表27　NG91－1次層序表 …… 182
表28　NG92－5次層序表 …… 183
表29　NG93－1次層序表 …… 202
表30　NG86－3・64次層序表 …… 214
表31　NG93－56次層序表 …… 215
表32　NG87－81次層序表 …… 228
表33　NG83－65次層序表 …… 252
表34　NG95－77次層序表 …… 264
表35　長原古墳群主体部検出古墳一覧 …… 275
表36　長原古墳群一覧表(1) …… 280
表37　長原古墳群一覧表(2) …… 281
表38　長原古墳群一覧表(3) …… 282
表39　長原古墳群一覧表(4) …… 283
表40　長原古墳群一覧表(5) …… 284
表41　長原古墳群一覧表(6) …… 285
表42　長原古墳群周辺の古墳 …… 286
表43　日本出土の両耳付短頸壺の搬入例 …… 289
表44　日本で生産されたと思われる両耳付短頸壺A類および蓋 …… 289

写真目次

写真1　NG83－38次長原87号墳鶏形埴輪(63)出土状況 …… 21
写真2　長原200号墳主体部鉄剣(鉄刀)出土状況 …… 43
写真3　長原200号墳主体部上須恵器出土状況 …… 43
写真4　NG87－70次SD701 …… 45
写真5　NG89－69次SR6b04 …… 45
写真6　NG92－73次SR6a11 …… 46
写真7　NG92－92次1区SR501埴輪出土状況 …… 46
写真8　NG94－67次SP401遺物出土状況 …… 53
写真9　NG86－59次長原4B層準の耕作溝 …… 57
写真10　NG84－25次長原113号墳出土馬形埴輪 …… 62
写真11　長原166号墳第1主体部出土鉄製品 …… 68
写真12　長原166号墳第2主体部金環出土状況 …… 70
写真13　NG89－25次現地説明会風景 …… 119
写真14　NG89－25次SB705～707 …… 122
写真15　NG89－25次SD702出土馬歯 …… 122
写真16　NG89－5次出土鉄製ヤス …… 126
写真17　NG95－29次SE401 …… 128
写真18　NG90－13次甕(2)出土状況 …… 134
写真19　NG93－37次現地説明会風景 …… 143
写真20　NG93－37次長原199号墳周溝遺物出土状況 147
写真21　NG93－37次長原204号墳周堤断面 …… 150
写真22　NG91－16次SE409検出状況 …… 156
写真23　NG92－5次ナウマンゾウ足跡化石 …… 185
写真24　NG93－1次水田上面弥生土器出土状況 207
写真25　NG89－48次SD703平底深鉢(4)出土状況 209
写真26　NG87－36次SX701(南から) …… 224
写真27　NG95－77次磨面のある礫 …… 266
写真28　NG84－4次SD701木製品出土状況 …… 268
写真29　長原117号墳出土両耳付短頸壺(1) …… 290
写真30　長原117号墳出土両耳付短頸壺(2) …… 290

第Ⅰ章　長原遺跡の発掘調査

第１節　長原遺跡の概要

１）概要

長原遺跡は大阪市平野区の南東部に位置する、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。行政的には南北約2.3km、東西約2.0kmの範囲が埋蔵文化財包蔵地に指定されており、便宜的に西南・南・西・中央・北・東南・東・東北の８地区に分けられている（図１）。1974年の地下鉄谷町線延長工事

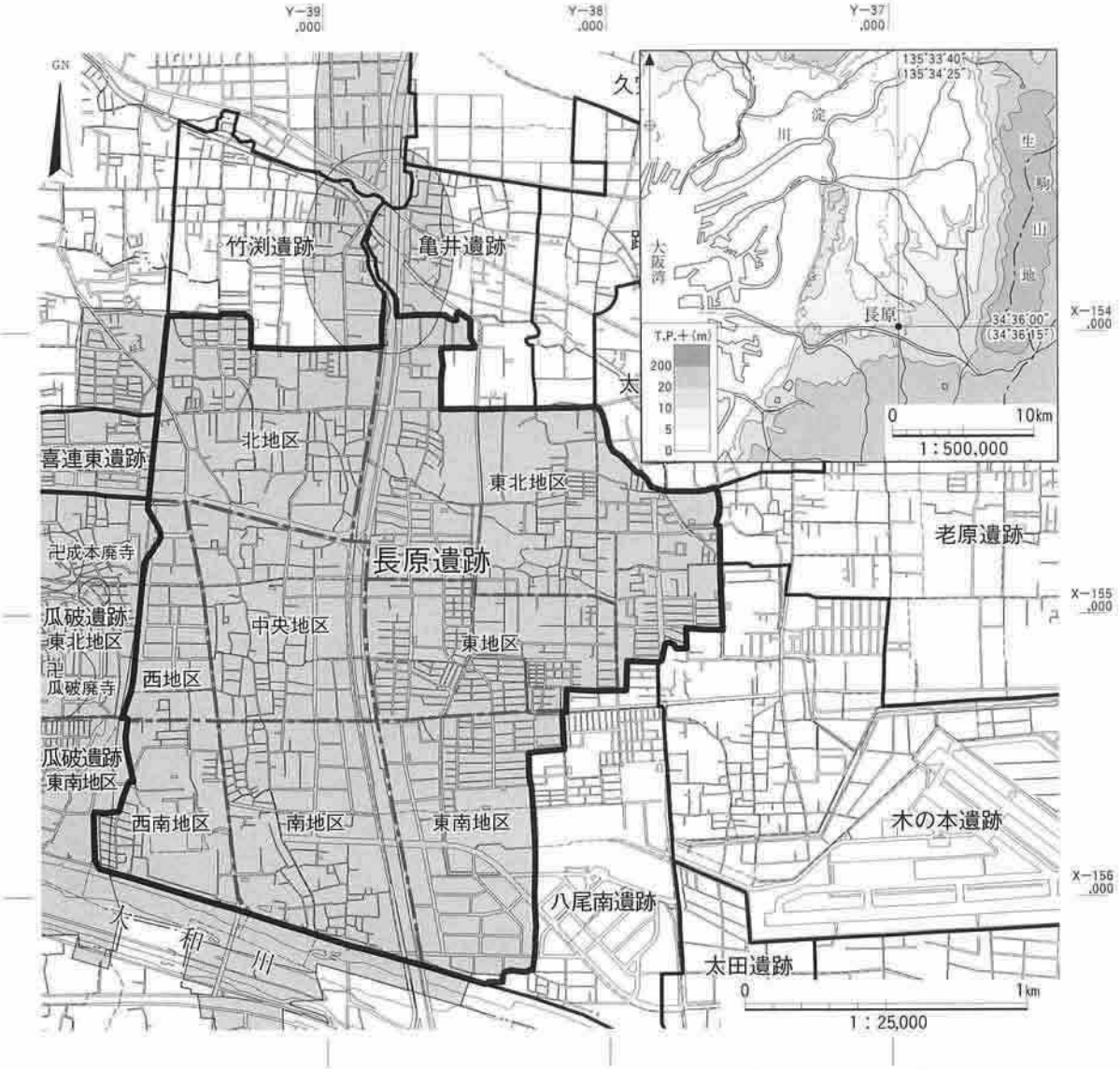


図１　長原遺跡の位置と地区割（右上の枠内は世界測地系の緯度・経度を示す）

の際に、初めて発掘調査が行われて以来[長原遺跡調査会1978]、区画整理事業や下水道工事、住宅建設などに伴って多くの調査が行われてきた。1979年以前はおもに長原遺跡調査会が調査を担当し、1979年以降は大阪市文化財協会が継続して調査を行っている。大阪市文化財協会では約30年の調査成果を基にこれまで計43冊の報告書を刊行している。

2）遺跡の立地と地形環境

長原遺跡は生駒山地と上町台地に挟まれた河内平野の南側に位置し、瓜破台地から東に広がる沖積平野にまたがる。ここでは非常に多様な堆積環境が見られる。

瓜破台地を形成する低位段丘構成層は、西側では急な傾斜で沖積層に潜り込むが、東縁は南西から北東に向って緩やかに沖積平野に埋没する。よって、西南・南・西・中央の各地区では低位段丘面の埋没深度は比較的浅くなっている。これらの地域については表2のように標準層序が設定されている[趙哲済2001・2003]。

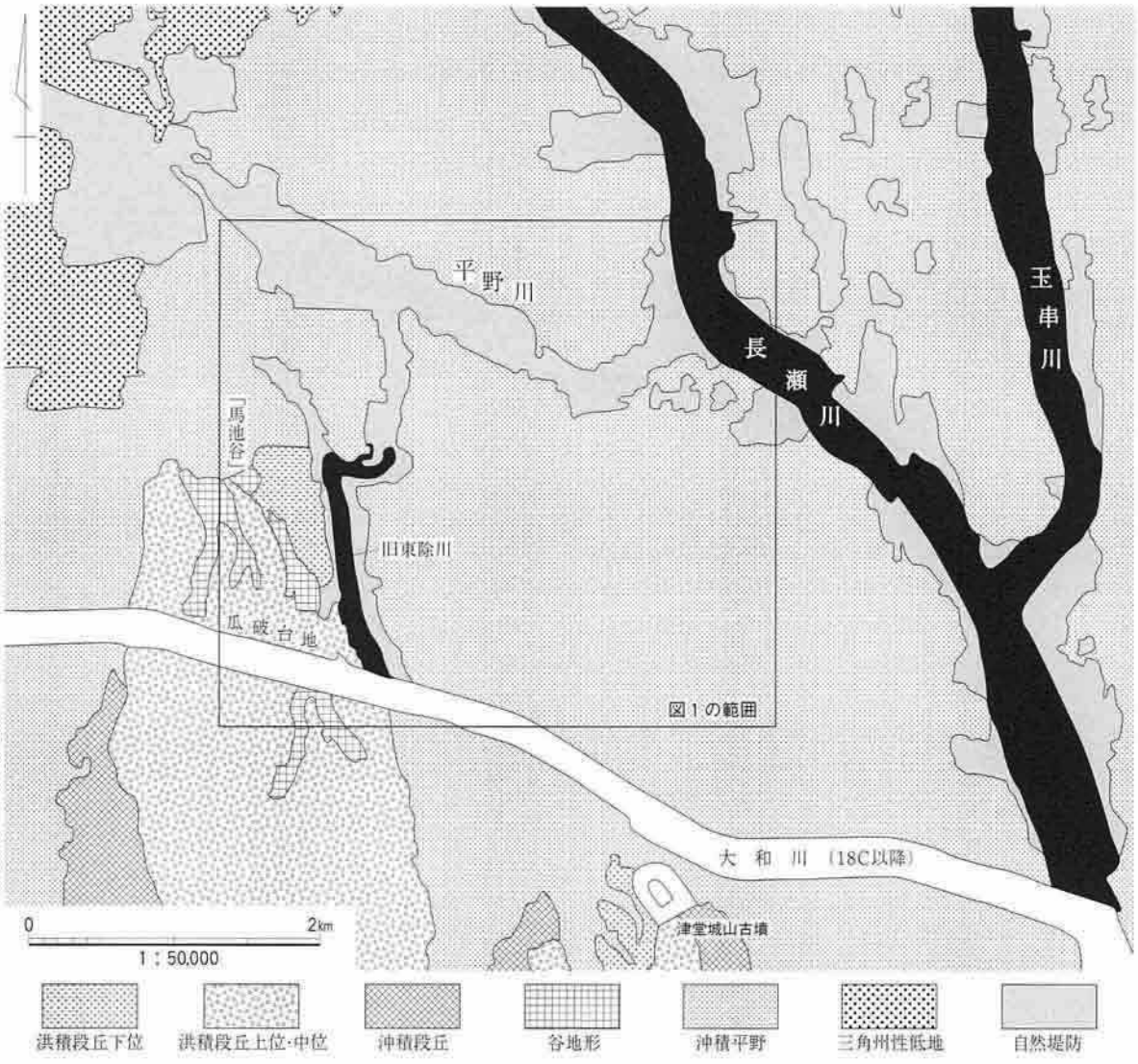


図2　長原遺跡周辺の地形分類図（土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆）

一方、長原遺跡の東・東北地区は沖積層が厚くなり、特に東北地区は平野川をはじめとする幾筋もの河川と自然堤防が見られ、沖積層は厚いところで6mに達する。これらの状況については長吉東部区画整理事業に伴う東北地区の調査の進展で、年々地層についての知見が蓄積し、表3のような東北地区の標準層序が確立されている[高橋工ほか2000など]。

なお、本書では層序を述べる場合、基本的に長原遺跡の標準層序を用いて報告し(表2)、東北地区については六反層序と一部並立して記述した(表3)。

3)近年のおもな調査研究

約30年の調査の蓄積でさまざまな調査成果が挙げられた。主要なものを羅列したのが表1である。長原遺跡は旧石器時代以降の複合遺跡であるので、各時期の調査研究の蓄積は著しい。詳細な内容は各引用文献に譲るとして、以下で平安時代までの各時期の成果の概要を簡略に示したいと思う。

旧石器時代については東南地区である長吉川辺3丁目で長原13層準の石器ブロックが多数見つかっており[大阪市文化財協会1995・1997a]、NG90−62次調査では平安神宮火山灰(AT)以下の長原14層でナイフ形石器などが出土している[趙哲済1991など]。また、東北地区の調査の進展に伴い、NG97−12・52次調査では現地表下6.5mの阪手火山灰降灰層準で、後期旧石器時代の石器製作址が発見された[大阪市文化財協会2000b]。

縄文時代についてはNG8次や82−6次調査で晩期の住居跡や墓が見つかっているものの[大阪市文化財協会1982・1983a]、それ以外では遺物が包含層から得られる程度で、遺構とともにまとまって検出されることはきわめて稀であった。しかし、長吉六反2丁目のNG99−41次調査において押型文・撚糸文土器とそれらが伴う遺構が検出され、小規模ではあるものの縄文時代早期の居住跡が確認された[大阪市文化財協会2002d]。また、長吉六反1丁目のNG95−77次(本書第Ⅶ章第3節)やNG97−12次調査ではこの時期の縄文海進による生痕化石が発見されていて、周辺の生活環境を想定すること

表1　長原遺跡の調査・研究略年表

西暦	内容(括弧内は次数：文献)
1974	地下鉄谷町線工事現場で長原遺跡発見
1974〜76	地下鉄工事に伴う長原遺跡の調査 縄文時代晩期や弥生時代後期の竪穴住居、塚ノ本古墳などを発見(1：調査会1978・大文協1982)
1979	大阪市文化財協会設立
1980	長吉・瓜破土地区画整理事業に伴う調査が開始
1982	長原一ケ塚古墳発見(82−27：大文協1990)
1983	長吉川辺3丁目で弥生時代の水田を検出 (82−41：大文協1999a)
1985	長原七ノ坪古墳で横穴式石室を検出 (85−23：高井健司1986・1987a)
1984〜85	地下鉄出戸駅前再開発に伴う調査で古墳時代の集落と古墳を検出(84−25：本書第Ⅲ章第1節)
1987	高廻り古墳群で船形埴輪などの形象埴輪発見 (86−109・87−35：大文協1991)
1991	長吉川辺3丁目で平安神宮火山灰層(AT)より下からナイフ形石器などが出土(90−62：趙哲済1991)
1992	平安時代の「長原里」木簡出土(92−2：本書第Ⅳ章第2節)
1993	長原200号墳の調査(92−92：本書第Ⅱ章第3節)
1995	長吉長原東1丁目で5世紀の高床式建物検出・鳥足文タタキの土器多数出土(95−36：櫻井久之1996a・b・1998) 長吉東部地区土地区画整理事業に伴う調査が開始
1997	長吉六反1丁目で旧石器ブロック発見 (97−12・52：大文協2000b)
1999	長吉長原東1丁目で弥生〜古墳時代の集落検出 (99−15：大文協2002a)
2000	長吉六反2丁目で縄文時代早期の押型文・撚糸文土器が多数出土(99−41：大文協2002d)
2003	長吉長原東1丁目で粘土槨をもつ長原213号墳発見 (02−08：大文協2005)

ができる。

弥生時代については、東南地区の長吉川辺３丁目で中期前葉に廃絶する水田が検出されていて、その一部を本書第Ⅵ章第３節で報告する。また、東北地区でもNG97－52次[大阪市文化財協会2000b]やNG99－19次[大阪市文化財協会2002d]などで同時期の水田が検出されている。また、中期～後期の集落は遺跡東地区の自然堤防上で、中期の墓は東南地区や東地区の集落の周辺で、後期の墓は東南地区で見つかっている[高橋工2000・杉本厚典2003]。

古墳時代前期の遺構・遺物は、弥生時代に引き続き東南地区や東地区で検出されていて、本書第Ⅶ章第１節で報告する方形周溝墓(NG84－６次)や同第２節の庄内式期の井戸(NG84－86次)もそれに当る。近年、東地区のNG02－８・03－６次調査でこの時期の方形・円形周溝墓が検出された[大阪市文化財協会2005]。

古墳時代中期以降の長原遺跡全体の集落と生産域の問題については[高橋工1999]で論じられている。中期になるとまず長原東・東北地区一帯に集落が形成される。これらは「長原東ムラ」と呼ばれ、初期須恵器や韓式系土器が伴う。一方、西・南・中央地区に広がる「長原西ムラ」は、東ムラが衰退するころに登場し、後期前半まで存続する。古墳は前期末から後期前半まで造営されており、本書の第Ⅷ章第１節でその概要を示し、長原古墳群の集成を行った。

飛鳥時代では、長原西地区や東北地区で掘立柱建物群が見つかっている。西地区の建物群は「馬池谷」の西側の細長く延びる尾根状の高まりに立地し、全部で12棟の建物が検出されている[大阪市文化財協会2001b：pp.74－80]。さらに、北側の「馬池谷」では建物群と同じ時期の多量の牛馬骨が出土しており[久保和士ほか2000]、東北地区のNG96－66次調査では掘立柱の抜取り穴から、ウシの四肢骨が並べられた状態で出土している[久保和士1999]。また、長原遺跡全域で水田や水路が見つかっていて、東除川もこの頃に開削されたと考えられている。

奈良時代も飛鳥時代と同様に全域で水田が広がっているが、同時期の建物は点々と分布しており、最近では東北地区で奈良～平安時代初頭の集落が見つかった[村元健一2003]。集落に伴う祭祀遺物も多く、NG01－14次調査では多量の牛馬骨とともに、人面墨画土器が多量に出土している[大阪市文化財協会2004b]。

奈良時代末に遺跡南・西・中央地区では東除川の決壊による洪水によって、水田が厚い砂礫層に埋まってしまうが、平安時代中頃以降には建物が散在するようになる。この時期の集落の動向については[佐藤隆1992]で整理されている。また、東北地区における近年の成果については[村元2003]でまとめられている。　(寺井)

表2　長原遺跡の標準層序（[趙2003]の表2を転載）

層序			層序概念図	岩相	層厚(cm)	自然現象自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C.14yB.P	時代
沖積層（難波累層）	最上部	NG0層		現代盛土	–				近代・現代
		NG1層		現代作土	15-25				
		NG2層		含細礫灰褐～黄褐色シルト質砂	6-24		↓小溝群・畝間　青花・唐津・瀬戸美濃・備前など		近世
		NG3層		含細礫淡黄褐～灰色粘土質シルト	12-20	所見無	←地震 ↓小溝群・畝間・島畑　輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器（Ⅳ－1～5）	（400）	室町
		NG4A層		暗灰褐色礫質砂～シルト 10～45cm	含細礫黄灰色中粒砂	8-15		瓦器（Ⅲ－1～Ⅳ－3）	
		NG4B層	i		褐灰色砂質シルト	av.20	瓦器 黒色土器 陶磁器 須恵器 土師器	←水田面 ↓小溝群・畝間　瓦器（Ⅱ～Ⅲ）	鎌倉
			ii		含細礫黄灰色中粒砂	av.5			
			iii		灰色砂質シルト	av.15		←水田面 ↓小溝群・畝間　瓦器（1～Ⅱ）	（800）
		NG4C層	i		明黄褐色砂質シルト	av.20	▽掘立柱建物	←水田面　平安Ⅰ～Ⅲ期	平安
			ii		にぶい黄褐色シルト質砂	av.20			
		NG5A層		灰色砂礫、シルト質細粒砂薄層を挟在		10-80		平城宮Ⅴ～Ⅵ	
		NG5B層		青灰色細粒～極細粒砂		2-8	←銀跡		奈良
		NG6A層	i	暗青灰色砂・粘土質シルト		≦20	タニシ	←水田面　平城宮Ⅲ	（1300）
			ii up	暗緑灰色中粒～細粒砂		≦5		←ヒトと偶蹄類の足跡	
			ii lw	粘土質シルト薄層と極細粒砂薄層の互層		av.10		←水田面	飛鳥
		NG6B層	i	含砂・礫黒褐色～暗灰色シルト質粘土		≦15	タニシ	飛鳥Ⅲ～Ⅳ	
			ii	灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂		≦5	←乾裂	飛鳥Ⅲ	
		NG7A層	i	含砂灰色粘土		av.10		←水田面	
			ii	含砂黒褐色シルト質粘土		av.15		←水田面 ↓掘立柱建物　飛鳥Ⅰ・TK209	（1400）
	上部	NG7B層	o	明黄褐色砂礫～暗オリーブ灰色粘土質シルト		≦250		←土手　TK10	古墳後期
			i	黒褐色砂・礫質粘土・黒色シルト		≦35	長原古墳群	埴輪Ⅴ期・TK23-47～MT15	（1600）
			ii	褐色極粗粒砂・粘土質シルト互層		≦170		埴輪Ⅱ期　TK216	古墳中期 古墳前期
			iii	暗褐色粘土質シルト		≦5		←水田面	
		NG8A層		青灰～黄灰色砂・礫～粘土		≦40	↓方形周溝墓・竪穴住居	布留式・庄内式・畿内第Ⅴ様式	（1700）
		NG8B層		暗褐色砂質シルト		av.10	←方形周溝墓・溝	弥生後期	
		NG8C層	i	にぶい黄褐色極粗粒砂～中粒砂		av.25		畿内第Ⅲ～Ⅳ様式・凸基式石鏃	（2000）
			ii	灰色シルト質粘土		av.10	←水田面・溝・ヒトの足跡	←石器製作址・畿内第Ⅱ様式・石斧	弥生中期
			ii	黄褐色シルト質粘土		≦15		木葉形石鏃	
		NG9A層		黒褐色砂・シルト質粘土		3-15	←乾裂	←自然流路の堆	弥生前期
		NG9B層	i	灰オリーブ～黒褐色砂礫		≦90		畿内第Ⅰ様式・長原式・石鏃	
			ii	暗灰黄色シルト質粘土，植物片多含		10-40		畿内Ⅰ様式・堅杵	
			iii	灰オリーブ色シルト質粘土		3-14	土偶 石棒		（2600）
			iv	暗灰オリーブ色シルト質粘土，植物片多含		8-50	アラカシ イヌガヤ	長原式・石錐の柄・弓	縄文晩期
			v	灰オリーブ色シルト・砂		10-35	▽石器製作址 ▽土器溜集		
		NG9C層	i	黒褐～褐灰色含シルト質粘土		2-8	←乾裂	▽竪穴住居・貯蔵穴　←滋賀里Ⅳ式 凹基式石鏃	（3000）
			ii	灰色シルト質粘土～砂礫		2-10			縄文後期
			iii up	オリーブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土		7-25			
			iii lw	暗灰色シルト～粘土質粗粒砂		av.5	←火山灰層準（ＢＢ７？）	縄文	
		NG10層		緑灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト		≦80	←地震	北白川上層Ⅱ～Ⅲ式	
		NG11層		灰色シルト質粘土		≦16	←乾裂		
		NG12A層	i	腐植質黒褐色礫質粘土～シルト		≦15		里木Ⅱ式・北白川Ｃ式・石鏃	←4740±140SI（GaK-14942）
			ii	オリーブ黒色シルト質砂，礫混り		≦20			←4900±140SI（GaK-14941）
		NG12B層	i	暗褐色細粒砂質シルト		av.20	←地震？		
			ii	暗黄灰色シルト～灰色礫混り砂		av.10	（火山灰の２次堆積あり）		
			iii	黒灰色シルト～オリーブ黒色シルト質粘土		av.10	←シカ・トリの足跡	船元Ⅱ式	縄文中期
			iv	黄灰色砂礫～灰色シルト質粘土		≦15	▽土壙 ▽石器製作址	凹基式石鏃	←4900±100Cb（GaK-14941）
	中部	NG12C層	i	黒褐色～オリーブ黒色シルト～粘土		≦25			
				黒褐色～灰色粗粒砂		5～10			
			ii	黒褐色シルト質粘土，植物片多含		av.10			縄文前期
				灰色中～粗粒砂，礫混り		av.40	甲殻類の巣穴の化石		
			iii	オリーブ黒色シルト		≦20			
				灰色砂、一部シルト質		≦30			
				黄灰色ガラス質火山灰		≦5	←槇大路火山灰層（Ah）		←6300
		NG12D層	i	オリーブ黒色極細粒砂質シルト		20～30	←大腰	押型文土器	縄文早期
			ii	灰色礫混り砂、シルト薄層を挟む		≦60		有茎尖頭器・細石刃	縄文草創期
	下部	NG13A層	i	灰色細粒シルト		≦5			
			ii	灰黄～灰白色細粒シルト（火山灰質）		av.7	←乾裂	▽石器製作址　掻器・ナイフ形石器・剥片・石核	（15000）
低位段丘構成層	最上部	NG13B層	i	黄褐～灰黄色シルト質粘土		≦5		剥片・石核	
			ii	黄灰色粗粒シルト質火山灰		≦5	←平安神宮火山灰層（AT）		←25000
		NG13C層		暗灰黄～暗褐色シルト質粘土		av.12	↓乾燥		後期旧石器
	上部	NG14層	up.	灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土		20-80		剥片	
			lw.	灰色砂礫～砂質シルト			▽石器製作址	掻器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器	
	下部	NG15層	up.	黄灰色～緑灰色粘土～砂礫		150-450			
			lw.	シルト・砂礫			ヒメマツハダ ←ナウマンゾウの足跡		
中位段丘構成層	上部	NG16A層		暗灰～灰青色シルト・礫混り砂互層		≦150			
		NG16B層	i	暗褐色泥炭質粘土；沼沢地性層		≦20	←化石林、ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石		
			ii	灰色火山灰質砂質粘土～シルト；河成～沼沢地性層		≦25	←姶良火山灰層準（Ａｓ－４） ←北花田火山灰層層準（ＫＴｚ）		←87000 ←91000
			iii	灰色砂礫；河成層		≦260	↓ゾウの足跡状の凹み		
		NG17A層		オリーブ灰色砂質粘土；古土壌		av.10			中期旧石器
		NG17B層	i	オリーブ灰色砂混り粘土質シルト；沼沢地性層		av.20			
			ii	緑灰色粗粒砂質シルト；河成～沼沢地性層		av.10	←ナウマンゾウ臼歯（ラメラ片）		
			iii	緑灰色極粗粒砂～礫；河成層		av.10			
		NG18層		緑灰色砂質シルト～緑灰色砂礫		av.65	←ゾウの足跡状の凹み		
		NG19層		暗緑灰色砂質粘土～緑灰色砂礫		av.50			
				緑灰色砂混り粘土質シルト 上方細粒化 下部で粗粒砂～砂礫		ca.280			
		NG20層		オリーブ黒色泥炭～泥炭質粘土		ca.100			
		NG21層		暗緑灰色細粒砂質シルト		ca.40			
	中部	NG22層		含貝化石砂～粘土		ca.200			（12万年）

←：上面検出遺構
↓：下面検出遺構
▽：地層内検出遺構
Cb：炭　Si：土壌

表3　長原遺跡東北地区の基本層序

	層序		層序概念図	主たる岩相	層厚(cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	模式地	NG層序との対比	時代
沖積層上部層I	RK0層			現代客土						近代・現代
	RK1層			現代作土	10-20				1	
	RK2層	i		オリーブ灰色細～中粒砂混り粘土質シルト	≦15	暗色帯	↓小溝群	NG96-66北部	2	江戸
		ii		灰～オリーブ灰色細粒砂混りシルト	≦15					
		iii		オリーブ灰色細粒砂混りシルト	≦15					
		iv		灰色粘土質シルト	≦10		↓小溝群・畝間　国産陶磁器(96-66次)			
	RK3層	i		灰オリーブ色粗粒砂混りシルト	≦20			NG95-57 NG96-9	3	室町～鎌倉
		ii		黄褐色粘土質シルト	≦10		↓島畠溝　中国製青磁(96-9次)			
		iii		灰オリーブ色粗粒砂混りシルト質細粒砂	5-15					
		iv		オリーブ色シルト質極細粒砂	≦20		↓小溝・水田(99-41次)　瓦器(C-Ⅲ～Ⅳ期；96-9次)			
	RK4A層			黄褐色シルト質極細粒砂～礫混り粗粒砂	15-20		↓自然流路　瓦器(C-Ⅲ期；97-52次)	NG96-79 NG97-12 NG97-52	4A	
	RK4B層	i		オリーブ褐色粘土質シルト	≦15		↓不整形落込み　瓦器(C-Ⅲ期；96-9次)	NG96-9	4B	
		ii		オリーブ褐色シルト	≦10		↓土器埋納遺構　瓦器(C-Ⅲ期；96-9次)			
		iii		黄褐～暗灰黄色シルト～中粒砂 ≦55cm / 灰オリーブ色シルト～細粒砂	10		▽井戸 平安Ⅲ新～平安Ⅳ新 ↓掘立柱建物　瓦器(C-Ⅱ期)平安Ⅳ期(96-9次)			
		iv		黄褐～暗灰黄色シルト～中粒砂 ≦55cm / オリーブ褐色粘土質シルト	10		瓦器(C-Ⅱ期)平安Ⅳ期(96-9次)			
	RK4C層	i		オリーブ褐色中粒砂混りシルト	8		平安Ⅲ期(96-40次)	NG96-40	4C	平安
		ii		黄褐色中粒砂混りシルト	≦8		↓溝			
		iii		灰オリーブ色中粒砂混りシルト	6-10					
		iv		にぶい黄褐色中粒砂混りシルト	8-12		↓溝			
		v		暗灰黄褐色シルト	≦14		↓溝　平安Ⅲ期(96-40次)			
		vi		灰黄褐色細粒砂混りシルト	10		↓土器埋納遺構　平安Ⅱ～Ⅲ期(96-40次)			
		vii		暗灰黄色中～細粒砂混りシルト	5-20		↓溝　平安Ⅰ・Ⅱ期(96-40次)			
	RK5層			暗褐色～黒褐色シルト～細粒砂 ≦70cm / 暗灰黄色シルト質細粒砂	≦15		↓鍬跡	NG96-66	5A・B～6A	奈良
	RK6A層			暗灰黄色細粒砂質シルト	10		▽溝・掘立柱建物 TK43～平城宮土器Ⅵ ↓溝・土壙　飛鳥Ⅰor Ⅱ(96-79次)	NG96-79	6B～7A	飛鳥
	RK6B層			灰色シルト	10		↓溝・土壙・井戸　飛鳥Ⅰor Ⅱ(96-79次)			
	RK6C層			暗灰色粘土質シルト	10		↓溝			
	RK7A層	i		オリーブ褐色シルト～細粒砂	≦40	植物遺体多	←溝(97-43次)　飛鳥Ⅱ(97-43次)	NG97-43	7B0	
		ii		灰色砂礫	≦70		TK209(97-43次)			
		iii		黄褐色細～粗粒砂	≦180		TK10新相(97-43次)	NG97-43	7Bi	古墳後期
		iv		暗オリーブ灰色粘土質シルト～明黄褐色砂礫	≦250		▽土手状遺構(95-57次)　TK10(95-57・97-52次など) / ←堤防状盛土(98-20次)	NG95-57 NG96-66		
		v		黒色シルト～粘土質シルト	30		▽溝(00-6次)　▽水平断層(99-41次)　TK23・47(97-41次)	NG97-41		
		vi		灰黄色砂礫	≦210		TK23・47(96-66次など)	NG96-66		
		vii		灰オリーブ色中粒砂～砂礫	≦110		TK216(98-20次)	NG97-43		
	RK7B層	i		灰オリーブ色シルト	5-25	植物遺体を多く含む	←踏込み←盛土(98-19・20、00-6次) 水田(00-6次)　曲物(97-12次)	NG96-79 NG97-12 NG97-41	7Bii	
		ii		オリーブ黒色粘土質シルト	7	植物遺体を多く含む	←水田(99-19・41次)　土師器(船橋O-Ⅰ／Ⅱ；97-12次)	NG97-12		古墳前期
	RK8A層			暗緑灰色シルト	5-20		布留式土師器(96-66次)	NG96-66	7Biii	
	RK8B層			緑灰色粘土質シルト	7		←水田面(99-19次)　庄内～布留式土師器(96-9、97-41・52次)	NG96-66		
	RK8C'層			暗灰色シルト	≦10		弥生Ⅴ様式(96-9次)	NG96-9		弥生後期
	RK8C層			暗緑灰色シルト	5-20		弥生Ⅴ様式(96-66次)	NG96-66		



([高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000]を一部修正)

第２節　今回報告する調査一覧

本書では図３のようにこれまで用いられている長原遺跡の地区分けを採用するが、西南地区と西地区、東地区と東北地区は同一の章で報告することにした。

今回扱う調査総数は104件で、表４・５に一覧を示した。　（寺井）



図３　本書で報告する調査地位置図

表4　調査地一覧(1)

番号	調査次数	面積	調査地番	調査の原因	担当者	調査期間	章一節
1	NG88－40	115㎡	平野区長吉川辺1丁目	明治橋架替工事取り付け擁壁築造工事	清水和明	1988年8月22日～9月20日	2－1
2	NG18	1,562㎡	同　長吉川辺1丁目	長吉小学校分校校舎建設	京嶋覚	1979年4月20日～10月26日	2－1
3	NG88－56	120㎡	同　長吉川辺1丁目	馬野和繁氏による建設工事	田中清美	1988年10月31日～11月21日	2－1
4	NG89－12	110㎡	同　長吉川辺2丁目	大阪市水道局による建設工事	岡村勝行	1989年5月10日～5月25日	2－1
5	NG83－38	935㎡	同　長吉川辺1丁目	大阪市住宅供給公社住宅建設	木原克司	1983年10月4日～12月26日	2－1
6	NG84－28	6㎡	同　長吉川辺2丁目	下水管敷設	田中清美・京嶋覚	1984年8月7日～8月30日	2－2
7	NG84－46	24㎡	同　長吉川辺2丁目	長原下水	藤田幸夫	1984年10月9日	2－2
8	NG83－66	374㎡	同　長吉川辺2丁目	川辺会館建設	植木久	1984年2月6日～4月6日	2－2
9	NG21	27㎡	同　長吉川辺3丁目	大阪市下水管推進工法用発信坑建設工事	鈴木秀典	1979年8月1日～9月20日	2－2
10	NG83－17	148㎡	同　長吉川辺2丁目	長吉川辺2丁目配水管付設工事	黒田慶一	1983年6月23日～8月18日	2－2
11	NG24	17㎡	同　長吉川辺3丁目	大阪市下水管推進工法用到達坑建設工事	森毅・京嶋覚	1979年11月12日～11月29日	2－2
12	NG89－69	128㎡	同　長吉長原4丁目	福田秀吉・福田隆氏による建設工事	京嶋覚・佐藤隆	1989年12月4日～12月19日	2－3
13	NG92－92	283㎡	同　長吉長原4丁目	矢下氏・大野氏による建設工事	高橋工	1993年4月1日～4月9日	2－3
14	NG86－66	360㎡	同　長吉長原3～4丁目、長吉川辺2丁目	長吉長原地区内下水管渠築造工事	富山直人	1986年11月6日～87年3月20日	2－3
15	NG83－11	330㎡	同　長吉長原3丁目	大阪市平野区長吉、八尾市若林地区電力供給用送配電路新設工事	田中清美	1983年4月20日～5月21日	2－3
16	NG87－70	128㎡	同　長吉長原4丁目	タツミ開発(株)による共同住宅建設	京嶋覚	1987年12月14日～12月25日	2－3
17	NG94－67	67㎡	同　長吉長原4丁目	樋口氏による建設工事	久保和士	1995年1月12日～1月25日	2－3
18	NG92－73	97㎡	同　長吉長原4丁目	樋口照夫氏による建設工事	小田木	1992年12月14日～12月25日	2－3
19	NG92－45	228㎡	同　長吉長原4丁目	南佐多郎氏による建設工事	佐藤隆	1992年10月1日～10月30日	2－3
20	NG86－13	270㎡	同　長吉長原	長原下水(夜間)	長山雅一・永島暉臣慎	1986年5月13日～9月30日	2－3
21	NG93－91	40㎡	同　瓜破東8丁目	深山氏による建設工事	松本百合子	1994年3月14日～3月24日	2－4
22	NG86－62	45㎡	同　長吉長原西3丁目、瓜破東6丁目・8丁目	貨物線下水管暗渠工事	木原克司	1986年10月28日～10月31日	2－4
23	NG86－59	38㎡	同　長吉長原西1丁目	出戸再開発ビル地下連絡通路工事	黒田慶一	1986年10月18日～10月25日	3－1
24	NG86－91	390㎡	同　長吉長原1丁目	森本氏による事務所ビル建設工事	高井健司	1987年2月3日～3月31日	3－1
25	NG84－25	8,600㎡	同　長吉長原西1丁目	出戸駅前最開発ビル建設工事	伊藤純	1984年7月30日～85年5月31日	3－1
26	NG89－36	330㎡	同　長吉長原1丁目	宮本松枝氏による建設工事	櫻井久之	1989年8月1日～9月22日	3－1
27	NG90－66	175㎡	同　長吉長原西1丁目	ウノスプランニング(株)による建設工事	清水和明	1991年1月21日～2月12日	3－1
28	NG89－15	475㎡	同　長吉長原西2丁目	辰巳長作・悦司氏による建設工事	木原克司・前田勝己	1989年5月25日～6月12日	3－2
29	NG91－70	335㎡	同　長吉長原西2丁目	長原会館建設工事	高橋工	1992年2月10日～3月23日	3－2
30	NG93－14	250㎡	同　長吉長原西2丁目	森則幸氏による建設工事	高橋工	1993年5月13日～6月2日	3－2
31	NG93－80	125㎡	同　長吉長原西2丁目	松原富三氏による建設工事	大庭重信	1994年1月19日～2月16日	3－2
32	NG93－26	120㎡	同　長吉長原西2丁目	福田氏による建設工事	高橋工	1993年7月13日～7月31日	3－3
33	NG92－95	300㎡	同　長吉長原西2丁目	創価学会による建設工事	岡村勝行	1993年3月12日～4月16日	3－3
34	NG20②	15㎡	同　長吉長原3丁目	大阪市下水管推進工法用到達壕建設工事	永島暉臣慎	1979年6月12日～6月20日	4－1
35	NG89－25	364㎡	同　長吉長原3丁目	東野稔氏による建設工事	高橋工・佐藤隆	1989年6月26日～8月25日	4－1
36	NG95－29	50㎡	同　長吉長原3丁目	林氏による建設工事	伊藤純	1995年7月17日～7月25日	4－1
37	NG92－79	120㎡	同　長吉長原3丁目	秋山正夫氏による建設工事	岡村勝行	1993年1月8日～1月20日	4－1
38	NG89－5	160㎡	同　長吉長原3丁目	東野充氏による建設工事	高橋工・上野裕子・鈴木京子	1989年4月17日～5月31日	4－1
39	NG87－2	150㎡	同　長吉長原1丁目他	下水管渠築造工事	富山直人	1987年4月1日～5月26日	4－2
40	NG86－79	250㎡	同　長吉長原1丁目他	長吉長原地区内下水管渠築造工事	富山直人	1986年12月15日～87年3月31日	4－2
41	NG83－10	23㎡	同　長吉長原2丁目	長原地区下水管渠造築工事	松尾信裕・趙哲済	1983年4月23日～4月30日	4－2
42	NG83－12	19㎡	同　長吉長原1丁目	長原地区下水管渠築造工事	趙哲済	1983年5月24日～6月1日	4－2
43	NG84－27	10㎡	同　長吉長原1丁目	長原下水2(都整関連)	鈴木秀典	1984年8月4日～8月7日	4－2
44	NG90－13	560㎡	同　長吉長原1丁目	(株)長谷工都市開発による建設工事	清水和明・上野裕子	1990年5月9日～8月1日	4－2
45	NG89－13	150㎡	同　長吉長原1丁目	若井和三松氏による建設工事	高井健司	1989年5月15日～6月8日	4－2
46	NG92－2	99㎡	同　長吉長原1丁目	長吉総合病院による建設工事	清水和明	1992年4月6日～4月28日	4－2
47	NG83－36	64㎡	同　長吉長原1丁目	関西電力送電線付替	木原克司	1983年9月7日～9月16日	4－2
48	NG95－2	55㎡	同　長吉長原1丁目	矢下雅保氏による建設工事	高橋工	1995年4月5日～4月18日	4－2
49	NG87－43	17㎡	同　長吉出戸5丁目	樋口氏による共同住宅建設	高井健司	1987年9月21日～9月29日	5－1
50	NG93－37	3,077㎡	同　長吉出戸5丁目	大阪市市民局による平野区民センター等建設工事	藤田幸夫・筒井史	1993年8月17日～12月8日	5－1
51	NG85－79	95㎡	同　長吉出戸6丁目	ゼネラル石油(株)長吉町給油所改築工事	伊藤純	1986年3月12日～3月29日	5－1
52	DD82－1	110㎡	同　長吉出戸4丁目	大阪市下水管渠築造工事(出戸下水)	田中清美	1982年9月6日～10月8日	5－2
53	NG91－16	95㎡	同　長吉出戸4丁目	長尾襄氏による建設工事	田中清美	1991年5月22日～6月7日	5－2
54	NG88－90	240㎡	同　長吉出戸2丁目	杉中駒太郎氏による建設工事	木原克司	1989年3月13日～3月31日	5－2
55	NG25	16㎡	同　長吉出戸7丁目	大阪市下水道管渠築造工事(到達竪坑)	京嶋覚	1980年1月26日～2月12日	5－3
56	NG23	32㎡	同　長吉出戸7丁目	大阪市下水道管渠築造工事(到達竪坑)	森毅	1979年9月17日～10月13日	5－3
57	NG84－34	51㎡	同　長吉出戸3丁目	下水工事	積山洋	1984年9月6日～10月18日	5－3
58	NG84－74	20㎡	同　長吉出戸3丁目	下水工事	藤田幸夫	1985年1月25日	5－3

表5　調査地一覧(2)

番号	調査次数	面積	調査地番	調査の原因	担当者	調査期間	章一節
59	NG81－12	101㎡	同　長吉川辺3丁目	ゼネラル石油(株)長原給油所新築工事	京嶋覚	1982年3月11日～4月17日	6－1
60	NG86－23	91㎡	同　長吉川辺3丁目	飛行場(南)幹線下水管渠築造工事	南秀雄	1986年6月26日～7月25日	6－1
61	NG87－72	78㎡	同　長吉川辺3丁目	飛行場(南)幹線下水管渠築造工事	高井健二	1987年12月18日～88年1月14日	6－1
62	NG89－47	270㎡	同　長吉川辺3丁目	安田光憲氏による建設工事	木原克司・前田勝己・鈴木京子	1989年9月21日～11月15日	6－1
63	NG83－8	504㎡	同　長吉川辺3丁目	(仮称)サンシャイン新築工事	京嶋覚	1983年4月18日～6月29日	6－1
64	NG91－1	2,346㎡	同　長吉川辺3丁目	大阪市住宅供給公社による建設工事	趙哲済・平田洋司	1991年4月1日～11月16日	6－2
65	NG87－85	37㎡	同　長吉川辺3丁目	関西電力(株)による建設工事	櫻井久之	1988年2月8日～2月17日	6－2
66	NG89－60	33㎡	同　長吉川辺3丁目	関西電力(株)による市道川辺町線管路新設工事	佐藤隆	1989年11月6日～11月15日	6－2
67	NG92－5	954㎡	同　長吉川辺3丁目	関西電力(株)建設工事	岡村勝行・大成可乃	1992年4月15日～8月12日	6－2
68	NG92－53	26㎡	同　長吉川辺3丁目	兼高恒産(株)による建設工事	岡村勝行	1992年10月28日～11月5日	6－3
69	NG92－27	15㎡	同　長吉川辺3丁目	高津興産(有)による建設工事	田島富慈美	1992年7月13日～7月16日	6－3
70	NG89－48	440㎡	同　長吉川辺3丁目	(仮称)平野更正園建設	今津啓子	1989年9月26日～90年1月15日	6－3
71	NG93－1	1,158㎡	同　長吉川辺3丁目	大阪市民生局による建設工事	田中清美	1993年4月1日～8月30日	6－3
72	NG92－63	88㎡	同　長吉川辺3丁目	辻岡克彦氏による建設工事	岡村勝行	1992年11月19日～12月2日	6－3
73	NG94－83	43㎡	同　長吉川辺3丁目	大倉建設(株)による建設工事	田中清美	1995年3月14日～3月30日	6－3
74	NG87－36	67㎡	同　長吉川辺3丁目	飛行場(南)幹線下水管渠築造工事	櫻井久之	1987年8月27日～10月1日	6－4
75	NG85－63	120㎡	同　長吉川辺3丁目	大阪市土木局カルバート建設	木原克司・山崎栄・鶴田眞佐子	1986年1月16日～2月1日	6－4
76	NG86－3・64	2,270㎡	同　長吉川辺3丁目	大阪市住宅供給公社八尾南分譲住宅建設	高井健二	1986年4月16日～10月11日	6－4
77	NG93－56	650㎡	同　長吉川辺3丁目	宮本憲一氏による共同住宅建設工事	京嶋覚	1993年10月4日～11月26日	6－4
78	NG87－81	160㎡	同　長吉長原東3丁目	堀内清司氏による共同住宅建設	京嶋覚	1988年2月2日～2月27日	6－6
79	NG85－18	450㎡	同　長吉長原東3丁目	大同ドリンコ倉庫兼事務所建設工事	富山直人	1985年6月17日～8月10日	6－6
80	NG87－56	200㎡	同　長吉長原東3丁目	松野マンション建設	高井健二	1987年10月26日～12月4日	6－6
81	NG86－56	103㎡	同　長吉長原東2丁目	地下階段建設	黒田慶一	1986年10月13日～10月20日	7－1
82	NG86－20	37㎡	同　長吉長原東2丁目	モービル石油中環長吉給油所改築	櫻井久之	1986年5月29日～6月5日	7－1
83	NG81－4	20㎡	同　長吉長原東2丁目	長吉長原地区下水管渠築造工事	鈴木秀典	1981年8月26日～8月29日	7－1
84	NG81－6	18㎡	同　長吉長原東2丁目	長吉長原地区下水管渠築造工事	鈴木秀典	1981年9月4日～9月7日	7－1
85	NG81－5	6㎡	同　長吉長原東1丁目	長吉長原地区下水管渠築造工事	鈴木秀典	1981年8月31日～9月3日	7－1
86	NG81－3	20㎡	同　長吉長原東1丁目	長吉長原地区下水管渠築造工事	鈴木秀典	1981年8月19日～8月25日	7－1
87	NG86－44	80㎡	同　長吉長原東2～3丁目、長吉長原東1～2丁目	長吉長原地区内下水管渠築造工事	木原克司・櫻井久之	1986年8月22日～9月18日	7－1
88	NG86－55	100㎡	同　長吉長原東1丁目	長吉長原地区内下水管渠築造工事	木原克司・黒田慶一・櫻井久之・富山直人	1986年10月6日～87年3月31日	7－1
89	NG87－8	64㎡	同　長吉長原東1～2丁目	下水管渠築造工事	富山直人・内田好昭	1987年4月1日～5月26日	7－1
90	NG84－6	131㎡	同　長吉長原東1丁目	長吉長原地区内下水管渠築造工事	京嶋覚	1984年4月23日～	7－1
91	NG87－67	213㎡	同　長吉長原東1丁目	長吉中学校増築	櫻井久之	1987年12月4日～12月26日	7－1
92	NG84－75	10㎡	同　長吉長原東2丁目	下水工事	黒田慶一	1985年2月1日	7－1
93	NG83－65	30㎡	同　長吉出戸8丁目	関西電力管路新設工事	木原克司・植木久・田中清美・京嶋覚・森鼓・積山洋・黒田慶一・伊藤純	1984年2月6日～2月25日	7－2
94	NG84－86	55㎡	同　長吉出戸8丁目、長吉六反2丁目	関西電力管路新設工事	黒田慶一	1985年2月26日～4月16日	7－2
95	NG85－17	85㎡	同　長吉出戸8丁目	大阪市土木局カルバート建設	高井健二	1985年6月17日～7月23日	7－2
96	NG80－1	30㎡	同　長吉出戸8丁目	大阪市下水管渠築造工事(押込口)	京嶋覚	1980年4月21日～5月12日	7－2
97	NG84－5	120㎡	同　長吉出戸8丁目	下水工事	植木久	1984年4月23日～7月6日	7－2
98	NG80－2	17㎡	同　長吉出戸8丁目31	八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)	京嶋覚	1980年6月2日～7月17日	7－2
99	NG84－18	153㎡	同　長吉出戸8丁目	下水工事	木原克司	1984年6月25日～8月7日	7－2
100	NG88－6	50㎡	同　長吉六反1丁目	(株)ビーバーハウスによる建設工事	木原克司・加茂恵	1988年4月19日～4月28日	7－3
101	NG95－77	100㎡	同　長吉六反1丁目	大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設	寺井誠	1996年2月7日～3月17日	7－3
102	NG84－49	25㎡	同　長吉六反2丁目	地中送電線工事	積山洋	1984年10月24日～11月6日	7－3
103	NG84－4	213㎡	同　長吉六反5丁目	下水工事	田中清美	1984年4月23日～6月4日	7－3
104	NG93－77	60㎡	同　長吉六反5丁目	空港敦水路改修工事	京嶋覚	1994年1月10日～1月27日	7－3

(註)下水工事に伴うNG81－3・4・5・6次調査、NG84－4・5・6・18・34・46・74・75次調査、NG87－2・8次調査についてはそれぞれ一括して受託しているが、各調査地が離れているため、個別の調査として扱った。

第Ⅱ章　南・西南地区の調査

第１節　NG18次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではNG18・83−38・88−40・88−56・89−12次調査を報告する（図４）。当地は一ケ塚古墳（長原85号墳）をはじめとして、古墳がたくさん見つかっていることで知られている。

NG18次調査は長吉小学校分校（現川辺小学校）建設に伴って行われた第２期目の調査である。第１期目のNG13次調査では、手違いにより重機掘削で包含層がすべて除去され、十分な調査をすることができなかったが、埴輪が多く出土したことから古墳群の存在が予想された。第２期目のNG18次調査では、図８のような15個所のトレンチを工事の進捗状況にあわせて調査した。その結果、古墳９基（**長原71～79号墳**）、飛鳥～奈良時代の溝、平安時代の井戸といった遺構が検出された。

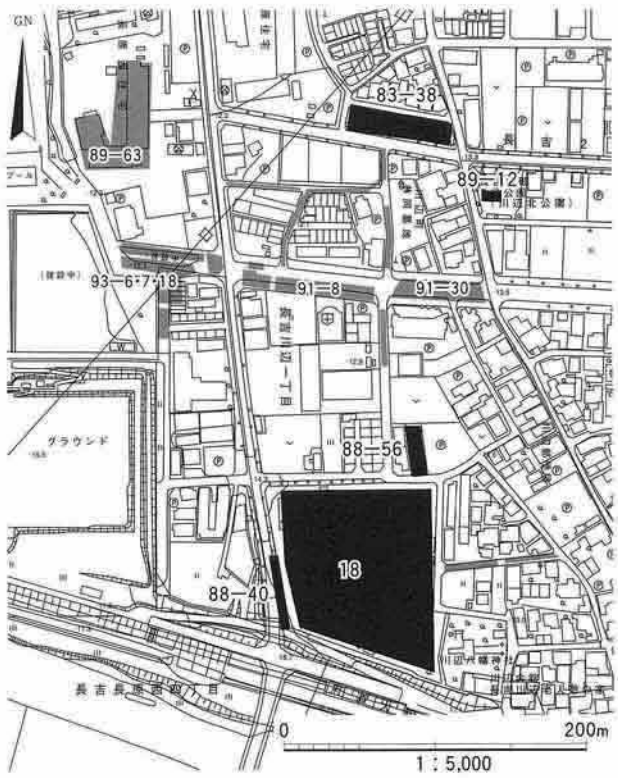


図４　NG18次などの調査地位置図

NG83−38次調査地は旧東除川の流路内に位置し、川廃絶後は溜池として利用されていたようである。池の埋土や川砂を除去すると、調査地の西側が包含層が良好に残っていることが明らかになった。精査の結果、須恵器大型甕を主体部にもつ造出し付方墳（**長原87号墳**）が検出され、馬形・人物形・鶏形などの形象埴輪が出土した。

NG88−40次調査地は川辺小学校の西側に当り、大和川に架かる明治橋架替え工事に伴う擁壁工事を行うに当って、調査が実施された。長原６層までの地層や長原12B層は残っていたものの、存在が予想された古墳は検出されなかった。

NG88−56次調査地は川辺小学校の北東に位置する。試掘調査で古墳の墳丘が良好に残っていることが確認されたため、本調査に至った。調査の結果、須恵器の大甕を主体部とする方墳（**長原180号墳**）が検出された。

NG89−12次調査地は川辺北公園内に位置し、試掘調査でGL−2.7～2.9mに長原6Ai層と思われる地層が良好に残っていることが明らかになった。本調査では長原6Ai層準の水田を良好な状態で検出

することができた。

2）調査の結果

i）層序

表6　NG88－40次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	赤黒色シルト質砂	10	作土				近・現代
2	1	暗青灰色シルト質砂	10	作土				
3	2	灰オリーブ色砂質シルト	10	作土				江戸時代
4	2	灰オリーブ色砂質シルト	10～15	作土				
5	3	灰オリーブ色細粒砂混りシルト	10	作土				室町時代
6	3	灰オリーブ色細粒砂混りシルト	10	作土				
7	3	灰オリーブ色細粒砂混りシルト	＜10	作土				
8	4B	灰褐色砂混りシルト	15	作土				鎌倉時代
9	4B	オリーブ褐色砂質シルト	10～15	作土				
10	4B	にぶい橙色粗粒砂混りシルト	10～15	作土				
11	4B	明褐色粗粒砂混りシルト	10	作土				
12	4B	褐色砂質シルト	20	作土				
13	5A	灰白色粗粒砂	20	水成				奈良時代
14	5B	灰白色シルト混り細粒砂	20～30	水成		←水田畦畔		
15	6Ai	明褐色砂質粘土	10	作土				
16	12B	灰色砂質粘土	＜10	水成				縄文時代
17	12B	灰～暗灰色粘土	＜10	水成				
18	12B	灰白色粘土質シルト	20					
19	12B	灰色シルト	10	水成		▼NR1201		
20	13A	緑灰色砂質シルト	20					旧石器時代
21	13B	緑灰色粘土	30					
22	13B	緑灰色シルト質粘土	＞30					
23	14	明緑灰色粘土質シルト	20					
24	14	黄橙色シルト混り細粒砂	20					
25	14	暗赤褐色粗粒砂～礫	＞20					

表7　NG88－56次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	黒灰色砂礫混りシルト	20	作土				近・現代
2	2	褐色シルト混り砂礫	30～50	水成				江戸時代
3	2	灰黄褐色シルト質細粒砂	30	水成				
4	4A	灰黄褐色砂礫	20	水成				室町時代
5	4B	灰褐色砂礫混りシルト	20	作土				鎌倉時代
6	5	灰～灰褐色砂礫	40	水成		←水田畦畔		奈良時代
7	6Ai	灰褐色砂礫混りシルト	20～30	作土				
8	7	黒褐色～赤褐色粘土質シルト	10					
9	13	灰～褐灰色粘土質シルト	＞20					旧石器時代

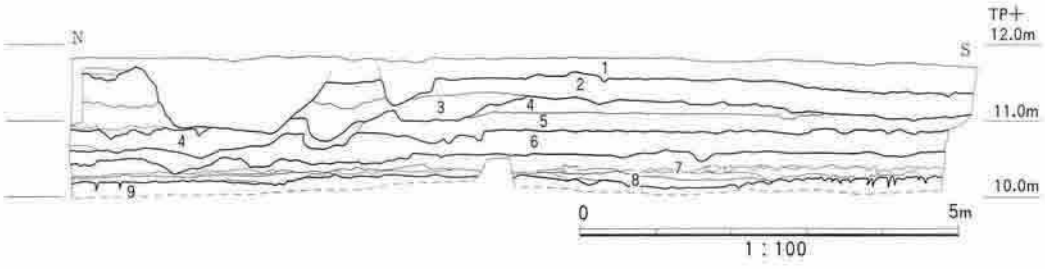


図5　NG88－56次東壁断面図

NG88－40次調査地では長原13層や14層上面が南側に低くなることから、南側で長原６層や12B層が残っていた(図６・表６)。長原12B層に該当すると思われる第16・17・19層では火山灰が検出された。

NG88－56次調査では古墳の墳丘や周溝に係わる埋土以外はすべて重機で除去したため、層序は断面観察のみによる(図５・表７)。長原５層は厚さ40cmあまりで、それによって埋められる長原6Ai層上面には畦畔が残っていた。

ii)遺構と遺物

a．縄文時代の遺構と遺物

NG88－40次調査地において、長原12B層内で流路NR1201・1202、土壙SK1201が検出された(図６)。

東西方向の流路NR1201は灰白色砂の水成層で埋まっていた。底付近でサヌカイト製のスクレイパー1が出土した。

1は長さ10.9cm、幅7.5cm、厚さ2.45cmの方形に近い形状である(図７)。自然面を残す大型の剥片を利用し、打点側を背・腹面の両方から調整して、刃部を作りだしている。

b．古墳時代の遺構と遺物

NG18次調査

本調査では古墳が９基(長原71～79号墳)検出された(図８・図版１上)。いずれも上部が削平されており、主体部が残っているものはなかった。

長原71号墳：A区で検出した方墳で、長原72号墳と周溝を共有してい

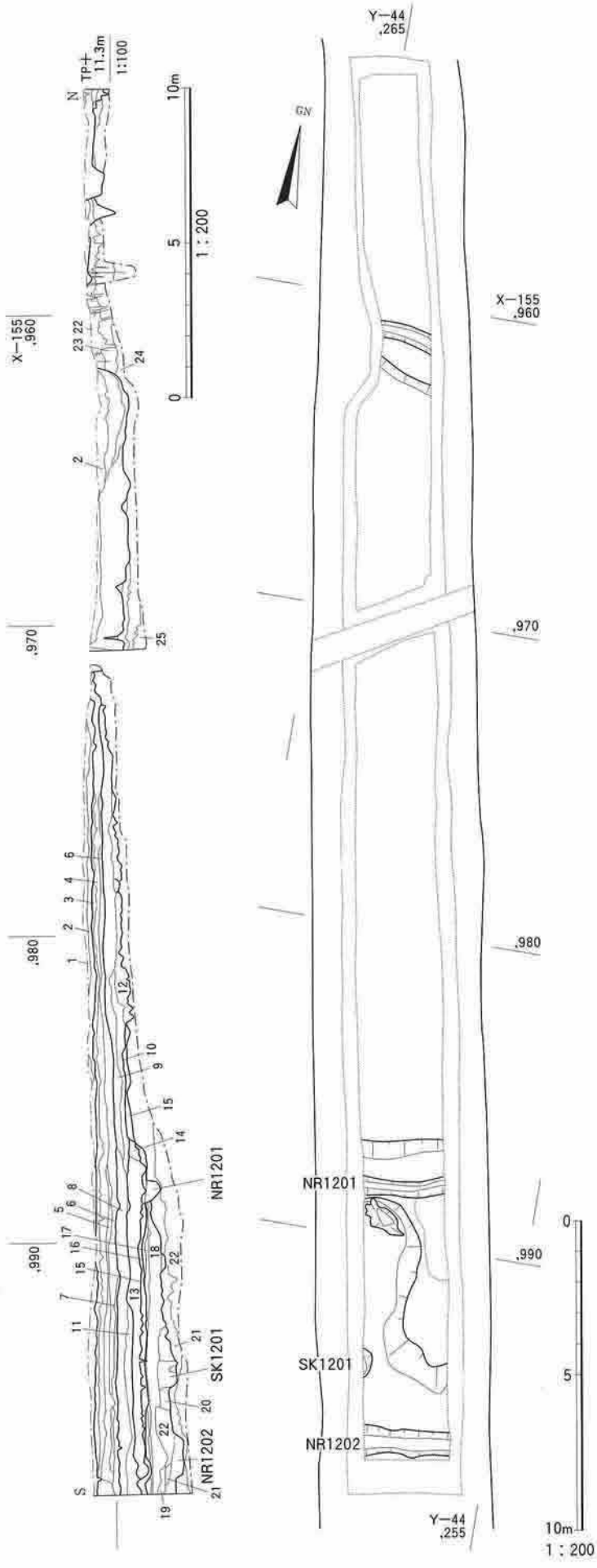


図６　NG88－40次平断面図

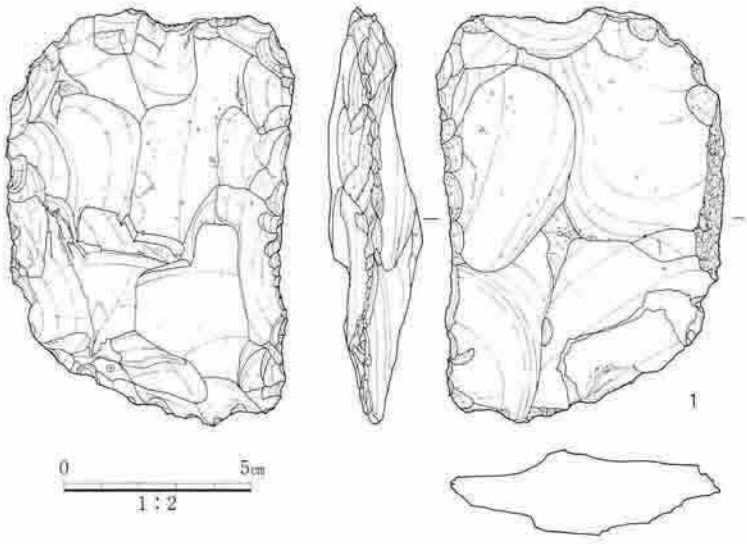


図7　NG88－40次出土スクレイパー

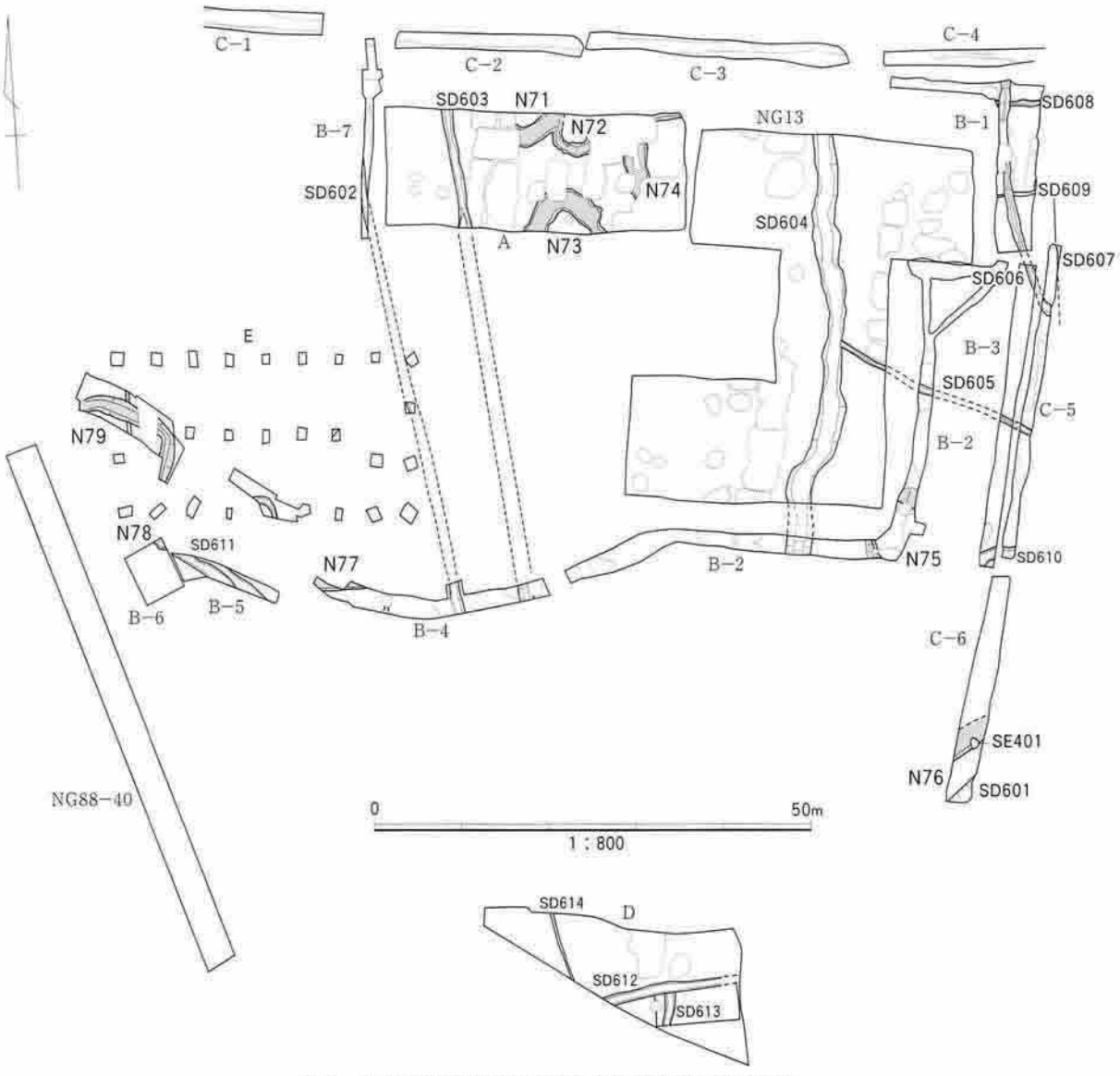


図8　NG18次調査地における古墳と古代の溝の分布

るが、切合い関係は確認することができなかった。北側の調査地外まで広がることから、規模は不明である。４方向にスカシのある須恵器高杯の脚部2が出土した(図９)。

長原72号墳：東西３m、南北３m以上の墳丘をもつ方墳である。周溝からタテハケが施される円筒埴輪の口縁部3が出土した(図９)。

長原73号墳：東西５m以上の墳丘をもつ方墳である。周溝から須恵器杯身6・7、杯蓋4・5、把手付椀8、壺9・10が出土した(図９)。4～8はTK208型式に該当すると思われる。9は体部に凹線と櫛描波状文が巡る。

長原74号墳：東西４m以上、南北７m以上の墳丘をもつ方墳である。周溝は深さ0.10～0.15mあり、黒色粘土が堆積していた。図版１中のように周溝から須恵器杯蓋11・12、高杯14～17、同蓋13、甕18、壺19が出土した(図９)。14・16は有蓋高杯で、15・16の脚部にはスカシ孔はない。これらの

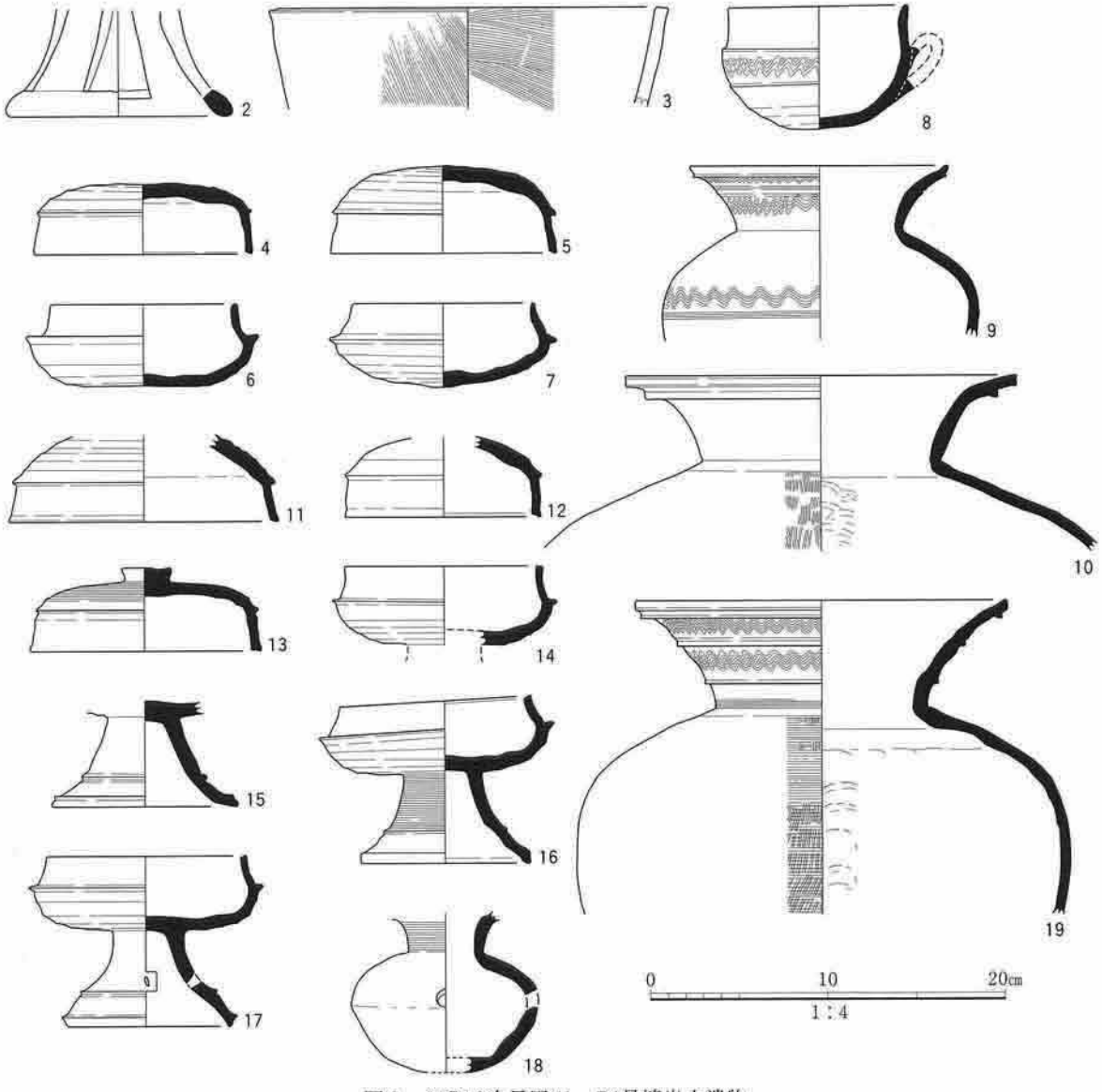


図９　NG18次長原71～74号墳出土遺物

71号墳(２)、72号墳(３)、73号墳(４～10)、74号墳(11～19)

須恵器はTK208型式に該当すると思われる。

長原75号墳：Ｂ－２区の南東隅で検出した古墳で、墳丘の一辺が６ｍ以上ある方墳と思われる。高まりが残っていたのみで、周溝は残っておらず、出土遺物もなかった。

長原76号墳：Ｃ－６区の南端で検出した。墳丘の残りが比較的良かったことから調査終了後、砂で埋め戻して保存されていたが、1994年度の区画整理事業で道路予定地となったため再調査(NG94－39次)された[大阪市文化財協会1999e：pp.85－92]。それによると、墳丘の盛土は約0.2m残存し、周溝幅は約1.5m、深さ0.1mである(図10)。

出土した円筒埴輪・朝顔形埴輪は図11のようになる。すべて窖窯焼成で、調整はタテハケのみのものと断続的(Ｂ種)ヨコハケ・連続的(Ｃ種)ヨコハケがある。長原古墳群の２期に位置づけられる。詳細は前掲の文献を参照されたい。なお、NG94－39次調査では周溝から平行タタキが施された韓式系軟質土器も出土している。

長原77号墳：Ｂ－４区の西端で周溝の一部が検出された。北側のＥ区の調査では墳丘が検出されていないことから、南側にあると思われる。周溝は深さ0.3mあまりあり、須恵器甕39や埴輪が出土した。埴輪には円筒40・朝顔形41・鳥形42・草摺形43の各種がある(図12)。40は二次調整にヨコハケが用いられ、残存部に線刻が見られる。42は頭部が欠損し、残存高は32㎝である。羽は貼付けと線刻によって表現されている。後述するNG88－40次の51の鳥形埴輪や**長原87号墳**の63の鶏形埴輪に施されているような脚の表現は見られない。

長原78号墳：Ｂ－６区の北端で周溝の一部が検出された。この残存部が古墳のどの位置になるのかは不明である。

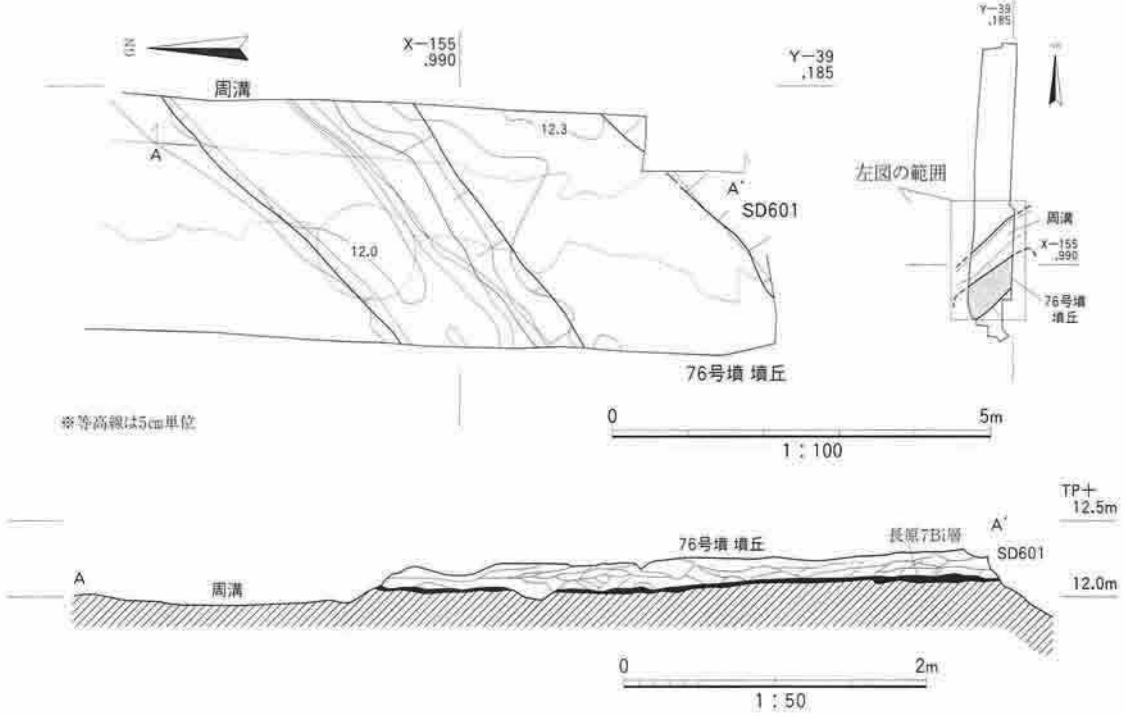


図10　NG18次長原76号墳実測図([大阪市文化財協会1999e]の図55を再トレース)

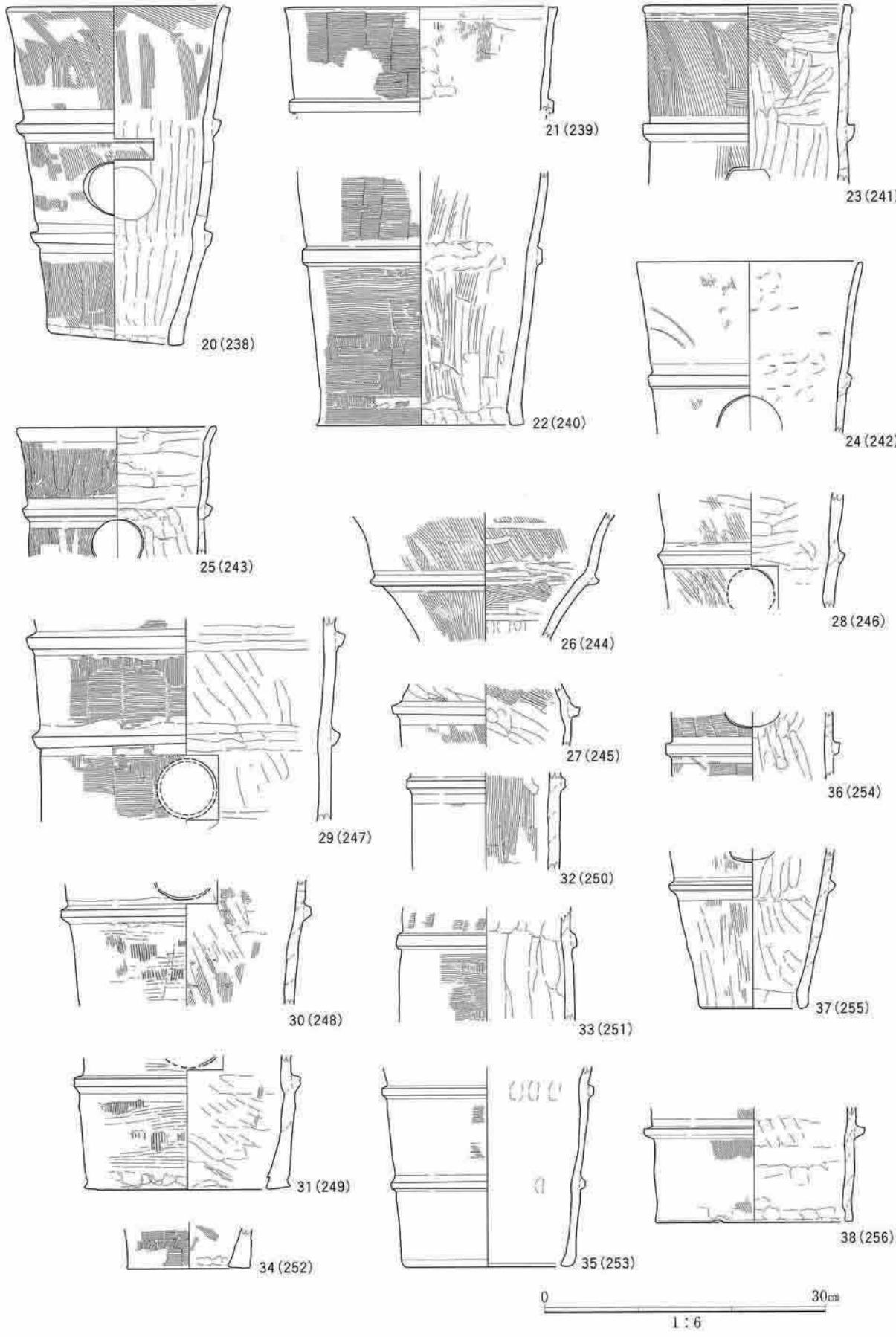


図11　NG18次長原76号墳出土埴輪（[大阪市文化財協会1999e]の図56を再トレース。括弧内は旧番号）

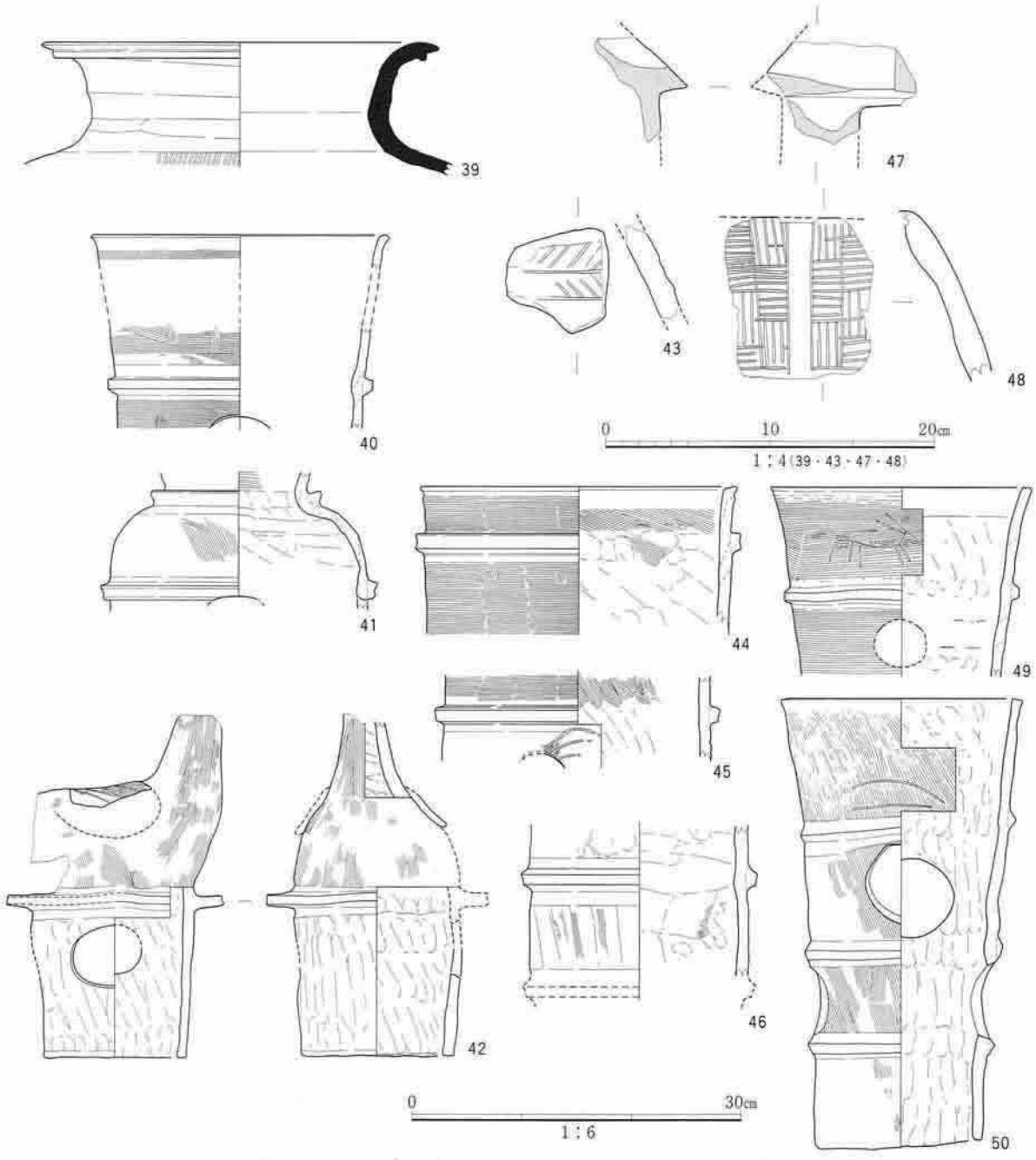


図12　NG18次長原77・79号墳およびC－5区出土遺物

77号墳(39～43)、79号墳(44～48)、C－5区(49・50)

長原79号墳：E区の西で検出された一辺9mの方墳である。周溝は幅1.5～2.0m、深さ0.3mあり、埋土の上層は灰白色シルト、下層は黒褐色粘土であった。周溝から円筒埴輪44～46や家形埴輪47・48が出土した(図12)。44・45はB種ヨコハケが施されている。47にはベンガラが残り、48には網代の表現が見られる。

このほか遊離資料であるが、円筒埴輪49・50を報告する(図12)。49は連続的なヨコハケが施され、その後にシカと思われる動物の線刻画が描かれている。50は完形に復元でき、最上段には線刻が施される。

NG88－40次調査

前述の**長原78・79号墳**に近接していることから、古墳が存在することが予想されたが、調査地内では検出されなかった。埴輪片が中・近世の地層に多く含まれることから、おそらくこの時期の開発で破壊されたものと思われる。本調査では、遊離資料であるが図13のような鳥形埴輪**51**が良好な状況で出土した。

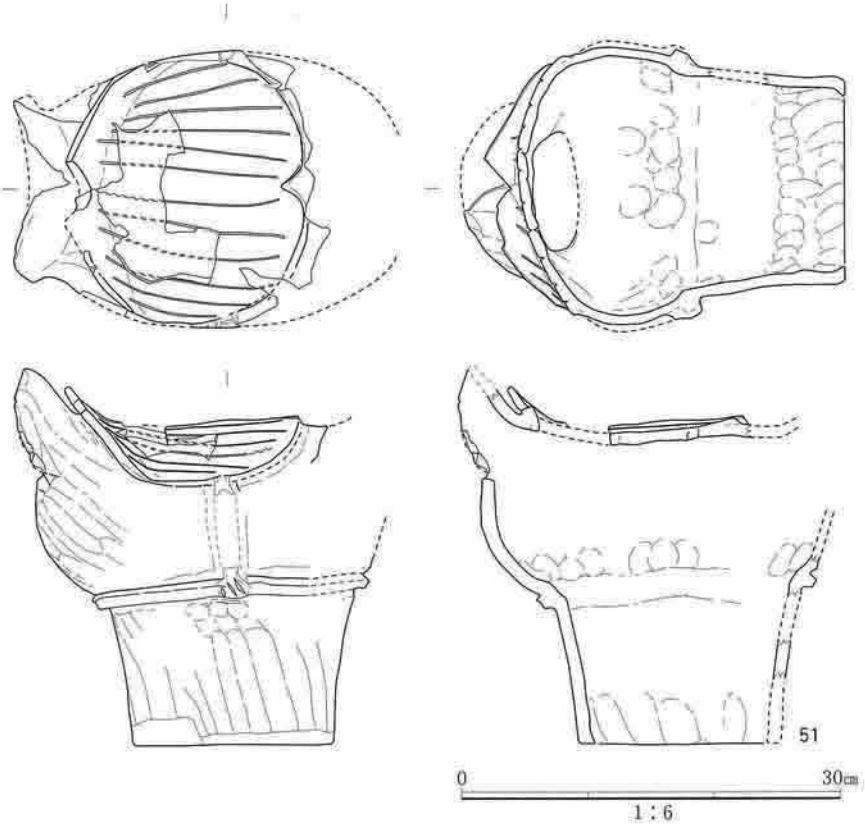


図13　NG88－40次出土鳥形埴輪

51は現存高30.0cm、前後幅29.5cm、左右幅21.8cm、円筒部高11.5cm、同底部径16.1cmある（図13）。頭部を欠くため、鶏か水鳥かは判断できない。全体は明橙色を呈し、窖窯焼成である。鳥の形態はやや扁平な球状の胴部に尾、羽、脚を貼付けている。胴部は粘土を積み上げ、最後に天頂部を頸から尾にかけて少しづつ充填している。尾は馬蹄形に突出し、胴部に接する内側に長径10.2cmの孔を開けている。羽の先端は三角形に突出している。表面は頸部から尾部へ左右６本づつの線刻を施し、羽毛を表現している。脚は両側の羽の下端から粘土紐を貼りつけ、タガの上で線刻し、爪を表現している。稚拙な表現のため、ミズカキの有無は不明である。調整は表・裏面とも全面ナデで、内面では円筒下部・鳥の胴体下部で粗く、指頭圧痕が明瞭に残っている。

NG83－38次調査

長原87号墳：造出しを有する方墳である（図14・図版２上）。墳丘は北辺の長さ12.0m、高さ1.0mあり、造出しは幅3.0m、長さ2.0m、高さ0.65mある。墳丘は河道で大きく破壊されていたものの、造出し部分には埴輪の列が残っており（図版２中）、西辺部分では須恵器大甕を転用した主体部が検出された（図15・図版２下）。

墳丘は長原7Bi層の上に、黄灰～灰色粘土や黒色粘土質シルトを墳丘中央部から外側に向って盛土されていた。造出しは長原7Bi層が除去された部分に、墳丘本体が築造された後に盛土されていた。

主体部の掘形は東西0.90m、南北0.75mの楕円形を呈し、深さは0.45mある。棺身には須恵器大甕**57**を用い、口縁部を東に向けて埋置してあった。口縁部には土師器鍋**56**を底部から挿入して、周囲の隙間に円筒埴輪の破片を詰め込んでから、灰白色粘土で目貼りをして閉塞していた。棺内には有機物を含む黒色粘土が堆積していたが、人骨や副葬品は見つからなかった。

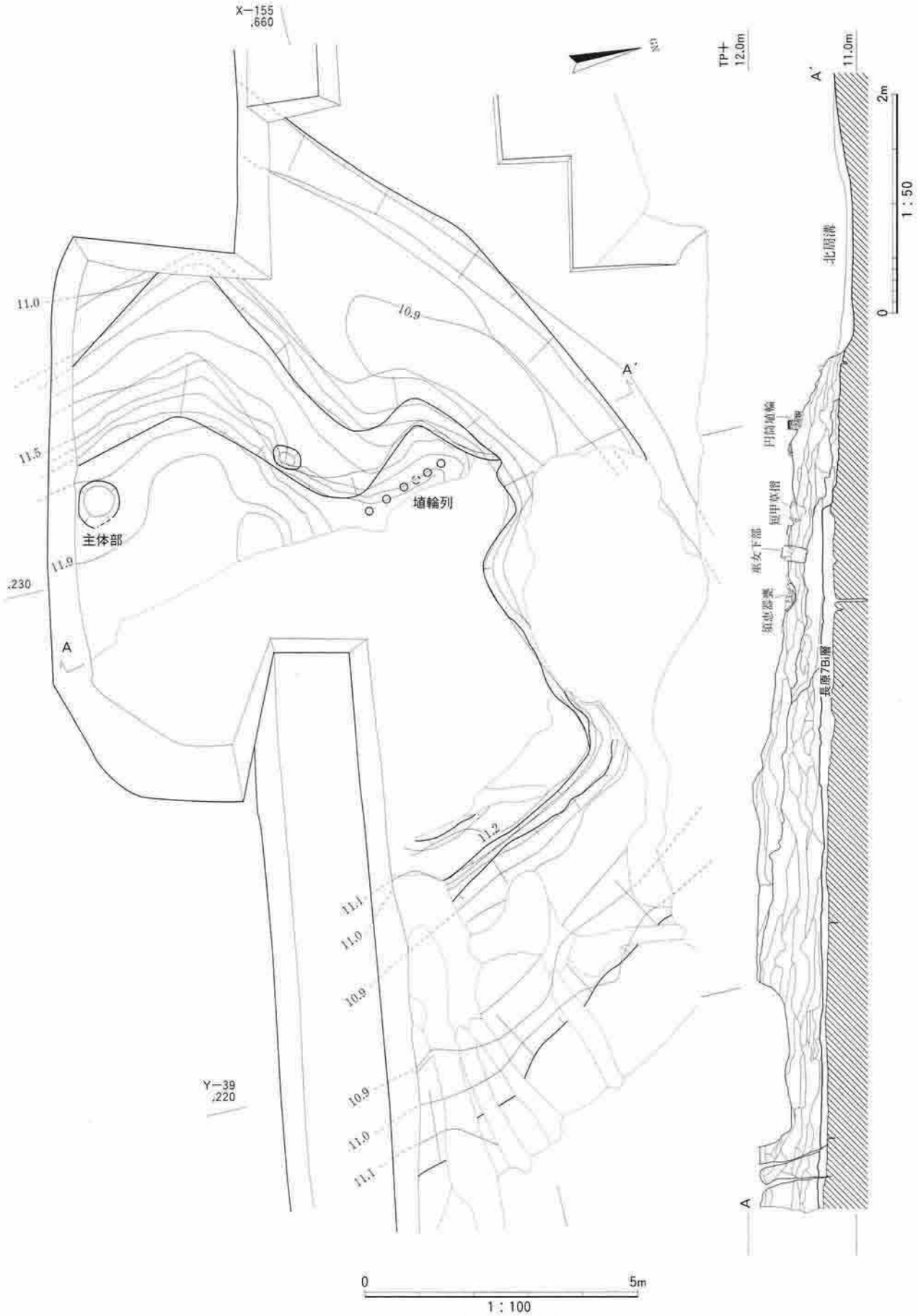


図14　NG83−38次長原87号墳実測図



写真1　NG83−38次長原87号墳鶏形埴輪(63)出土状況

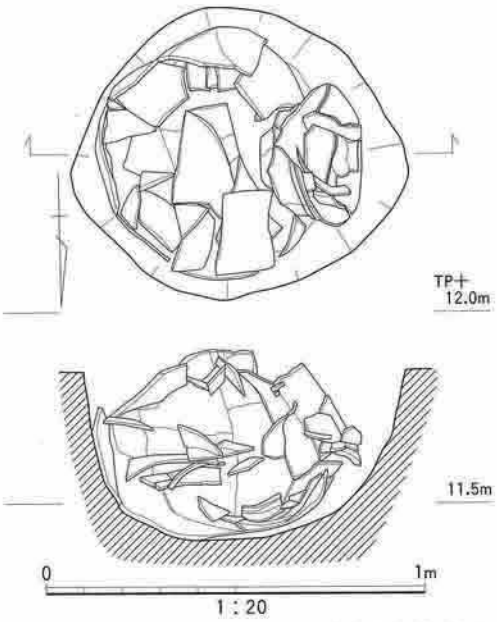


図15　NG83−38次長原87号墳主体部実測図

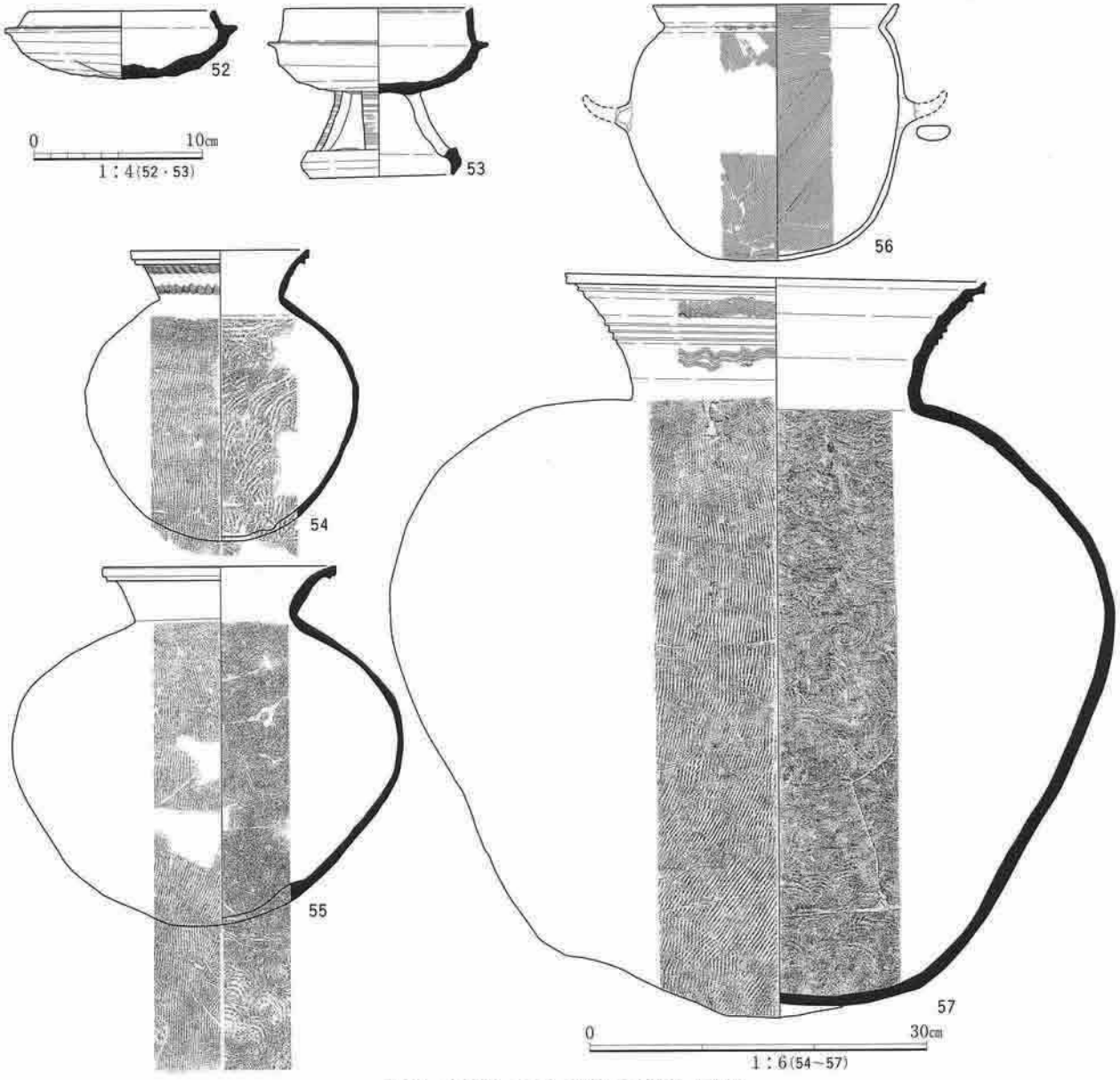


図16　NG83−38次長原87号墳出土遺物

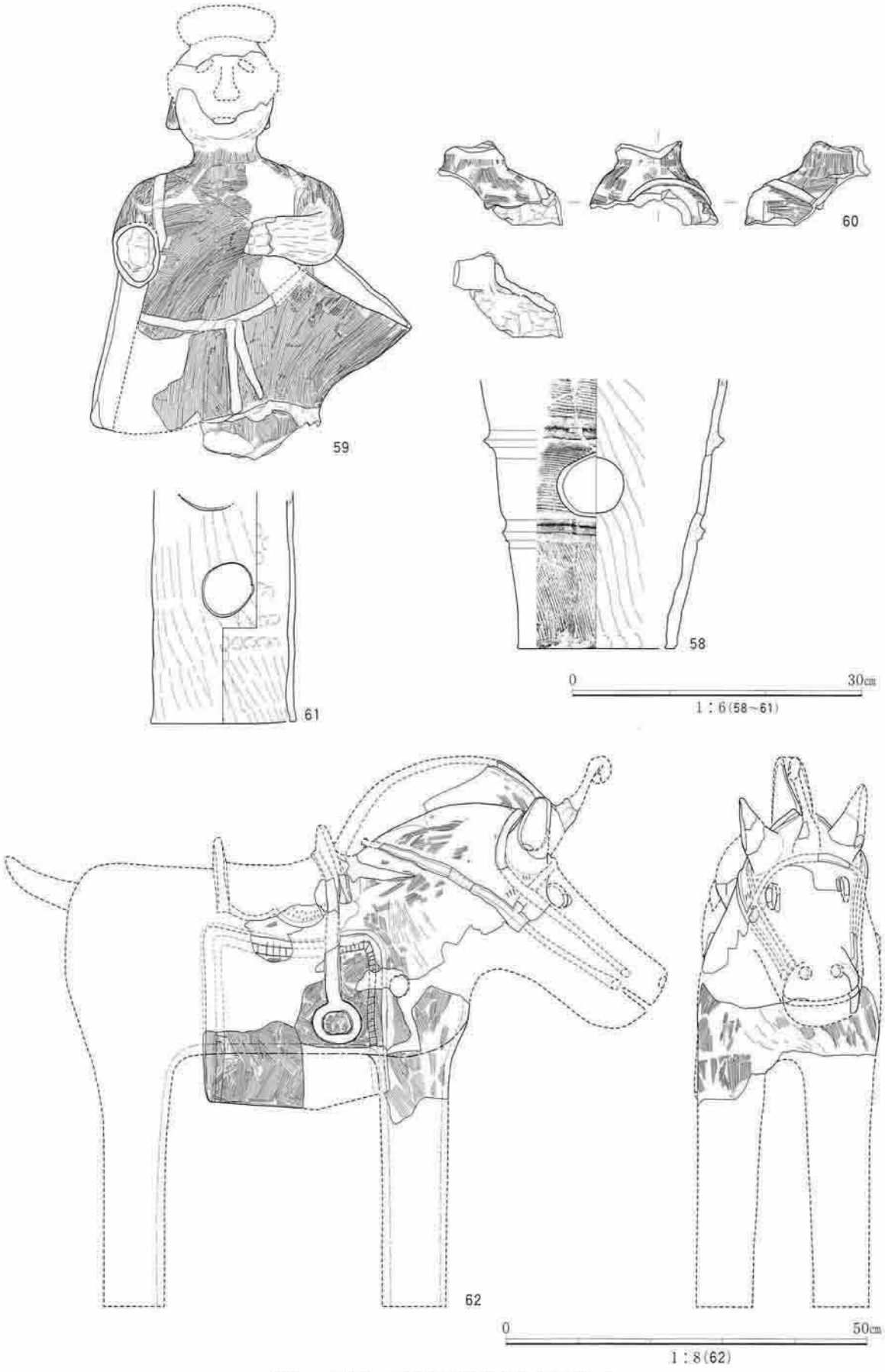


図17　NG83－38次長原87号墳出土埴輪（1）

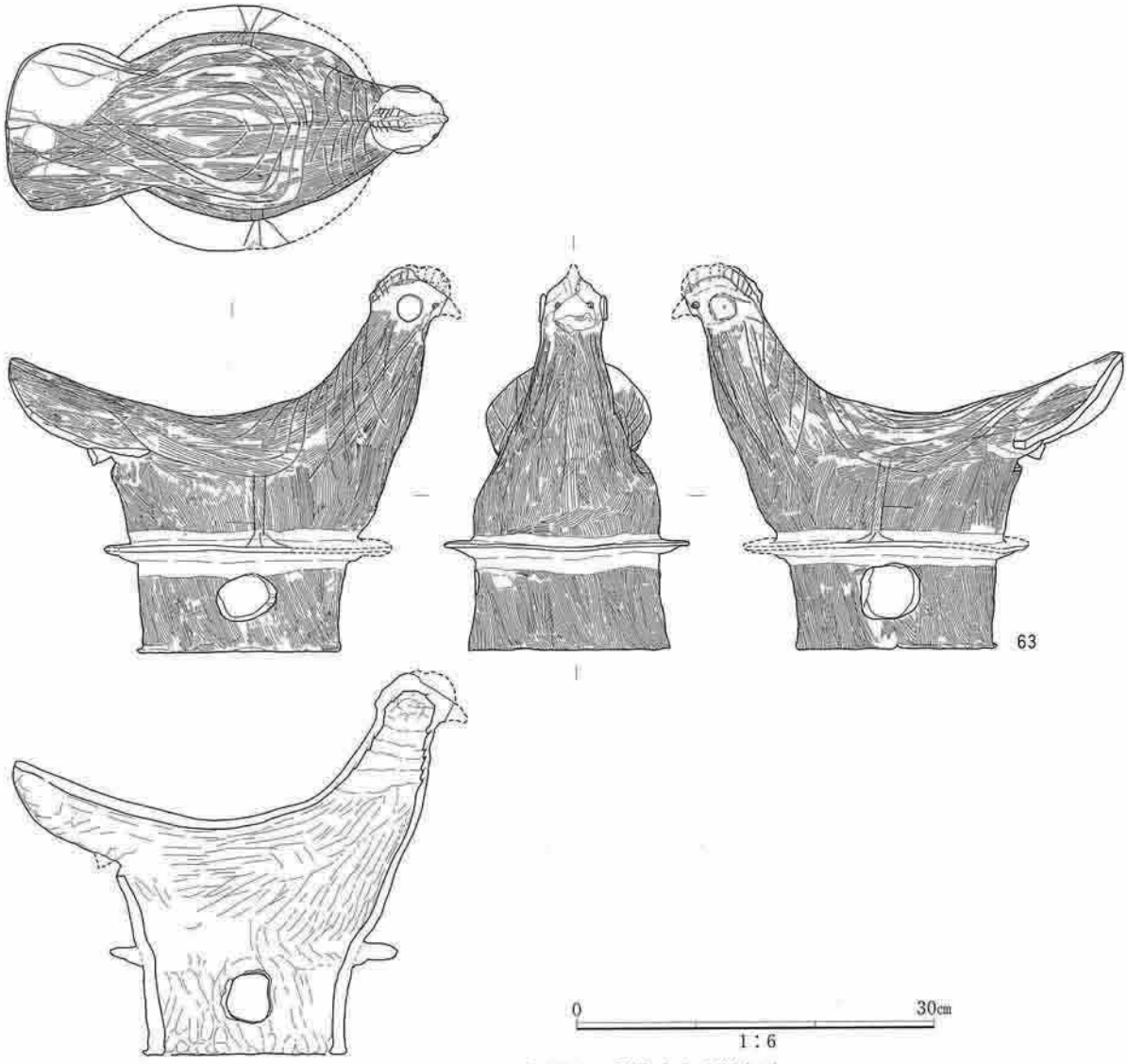


図18　NG83−38次長原87号墳出土埴輪（2）

56は棺の蓋に用いられていた土師器鍋である（図16）。内外面ともハケ調整で仕上げられる。須恵器は主体部に用いられた大甕57に加え、杯身52、高杯53、甕54・55がある（図16）。52は周溝から出土した。底部が丸いことからMT15型式と判断でき、ほかの遺物より新しい。53は造出しで出土した。脚部に3方向の方形スカシが施される。TK23型式に属する。54・55は造出しの埴輪列の中で埋置されていたものである。54の内面には車輪文当て具痕が残っている。57は器高65㎝、口径37㎝、最大径60㎝ある。

また、埴輪には円筒・蓋・馬形・人物形・鶏形・草摺形があり、円筒・馬形・人物形・鶏形埴輪を図示した（図17・18）。58は円筒埴輪で、最下段はタテハケのみであるが、それより上はヨコハケが施される。59・60は人物形埴輪である。59は上半身のみが残存している巫女形埴輪で、［田中清美1998］で紹介されている。「島田髷」のような髪形をし、丸顔である。意須比（おすい）という衣を右肩から垂らし、襷（たすき）をかけ、腰紐で結び留めている。左腕を前方にのばし、何かを捧げもっているかのようである。60は肩の部分で、襷が斜めに架かった表現がされている。59と同様に巫女形埴輪の一部と思われる。61は形象埴輪の脚台で、出土状況から59に伴うものと推定される。器表はナデで仕上げられる。

円形のスカシが3個所に残っていて、うち2つは対の位置にある。62は馬形埴輪で、顔の部分と脚部、胴部下半が欠損する。いわゆる飾り馬であり、鞍や障泥・輪鐙・面繋・手綱の表現がある。63は鶏形埴輪で、雄鶏をほぼ実大で作っている。粘土で全体を成形した後、鶏冠や目は粘土を貼りつけて、羽・脚はヘラ状の工具による線刻で表現されている。鶏の下には鍔をはさんで短い脚台が作られている。

（寺井）

NG88－56次調査

長原180号墳：調査個所のほぼ中央部で検出された。古墳の東部については調査範囲外であるため明らかでない。墳丘は後世の水田耕作によって階段状に抉り取られていたが、旧状を比較的良く留めていた。墳丘は基底部で、東西5.8m、南北6.0m あり、ほぼ正方形を呈する（図19左・図版3上）。残存する墳丘は高さが周溝の底から約0.6mあり、古墳時代の旧地表（長原7Bi層）をベースに、灰～褐

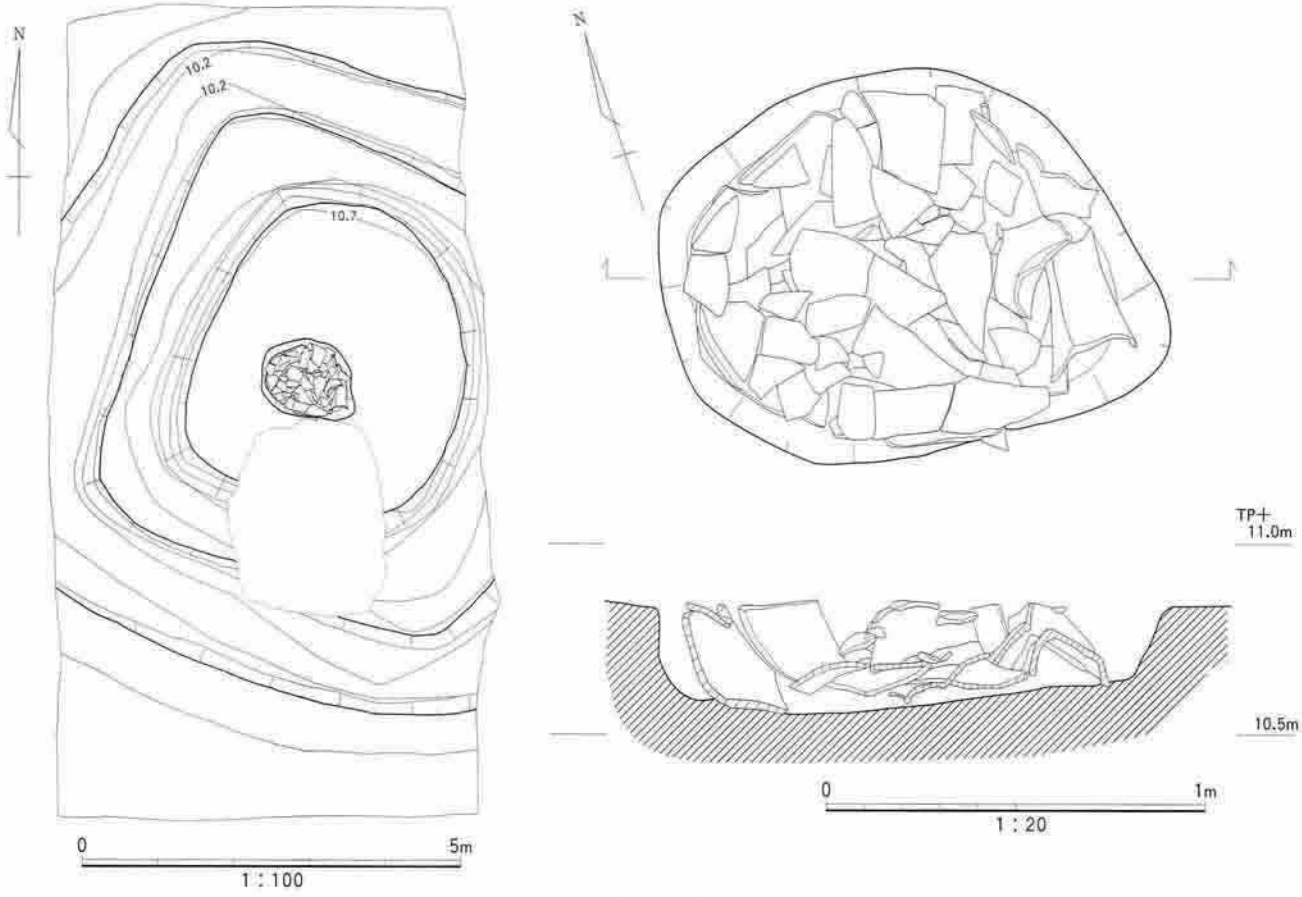


図19　NG88－56次長原180号墳平面図および主体部実測図

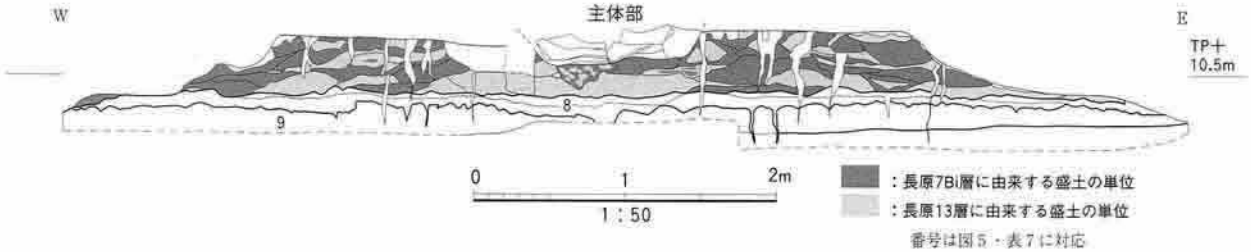


図20　NG88－56次長原180号墳墳丘断面図

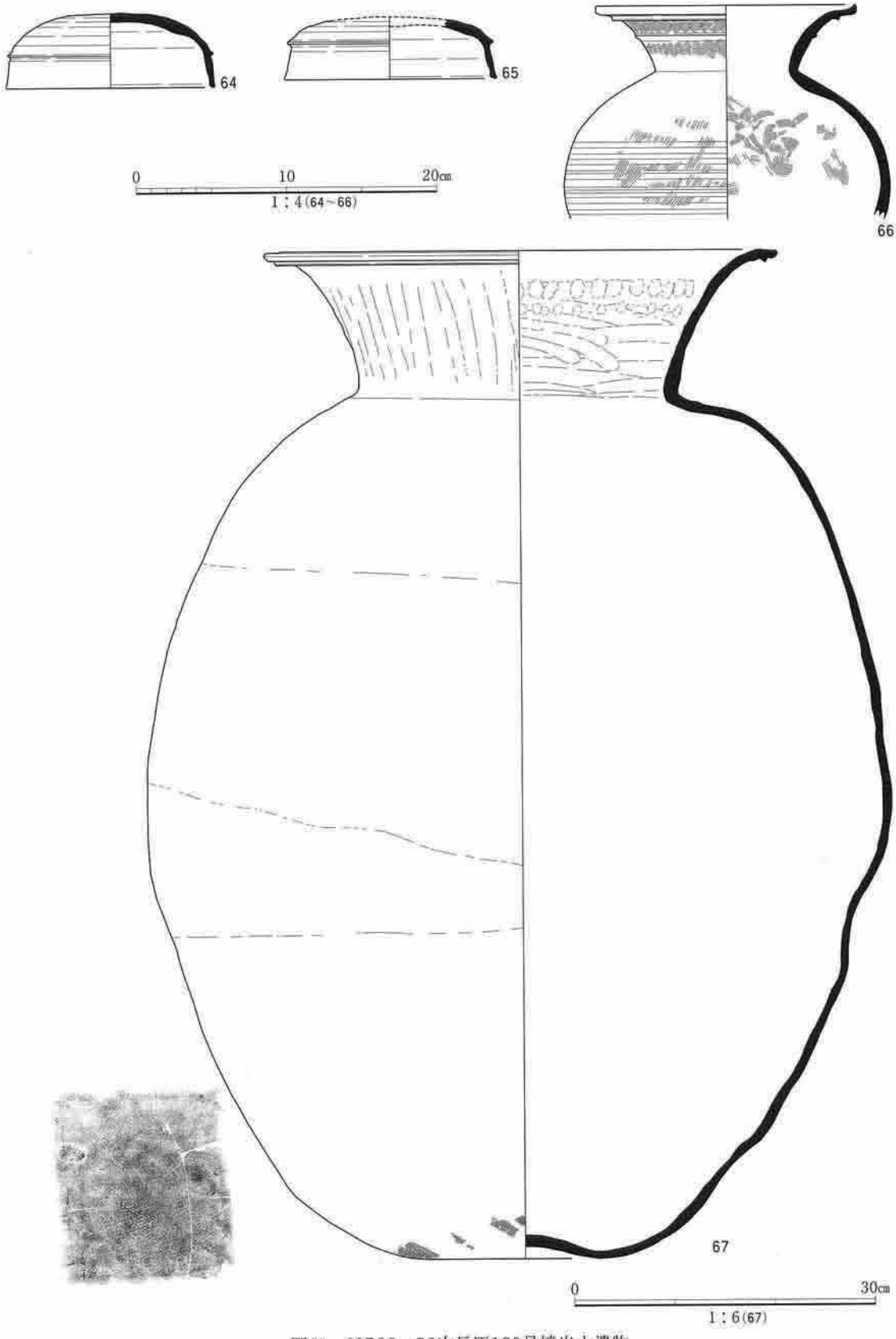


図21　NG88－56次長原180号墳出土遺物

灰色粘土質シルト(長原13層)および黒色粘土質シルト(長原 7Bi層)を外側から中央に向かって盛り上げて築成している(図20)。

周溝は各辺とも中央部が深く、コーナーで浅くなっており、その幅は墳丘の北西部で0.9m、南西部は 1.4mを測る。東周溝については調査範囲外に広がるため明らかでないが、 1 m前後であろう。周溝内には黒色粘土・粘質シルトが堆積しており、北周溝の東部でON46段階とみられる須恵器広口壺66が出土した(図21)。体部の下半部を欠損しているが、口径約17cmあり、頸部には2条の突帯と櫛描波状文が巡る。体部の外面は細筋の平行タタキの後、粗いカキメ調整を施している。内面には細い同心円状の当て具の圧痕が残る。

主体部は須恵器大型甕67を転用した土器棺で、墳丘のほぼ中央部に位置しており、一部を長原4B層準の水田で攪乱されていたが、残存状況は比較的良好であった(図19右・図版3下)。棺の主軸方向はほぼ東西であり、東に口縁部が向く。土器棺内には人骨や装身具などの副葬品は認められなかったが、棺内には外部から転落した状態で、須恵器杯蓋64・65が出土した(図21)。

大型甕67の口径は約48cm、器高約100cmあり、最大径は体部の中程にあるが、全体に焼け歪んでいる。体部は長胴で、底部の中央は大きく凹んでおり、細かい斜格子タタキが残る。口縁端部の直下に1条の突帯があり、口頸部の内外面の調整はユビオサエおよびナデである。TK216型式に属するものと思われる。

棺内から出土した須恵器杯蓋の口径は前者が13.2cm、後者が13.8cmあり、天井部は前者が後者より丸い。ともに天井部の2／3以上をヘラケズリ調整しており、TK208型式に属するものであろう。

以上から本古墳は長原2期に属する。　(田中)

c．飛鳥～奈良時代の遺構

NG18次調査(図8)

SD601・607：SD601はC－6区で検出されたものである。NG94－39次で再調査され、その内容がSD601としてすでに報告されている[大阪市文化財協会1999e：pp.85－92]。長原76号墳の墳丘を切り、少なくとも幅2.5m以上、深さ1.0m以上ある。埋土は長原6Aii層に相当する砂礫層で埋まっていたことから、掘削は長原6Bi層準と思われる。この溝はNG94－47次調査のSD601に続き[大阪市文化財協会1999e：pp.93－96]、C－5区のSD607に続くと思われる。

SD602・603：SD602は幅0.6m、深さ0.7m、SD603は幅1.0m、深さ0.8mの溝である(図版1下)。これらは北からやや西に振る方向に平行に延びる。

SD604・605：SD604は幅3.0m、深さ1.0mあり、ほぼ南北方向に延びる。SD605は東側でSD604に接続する細い溝である。

SD606～608：SD606は幅0.65m、深さ0.7mの南北方向に延びる。SD608・609はいずれも東西方向に延びる溝で、SD606に切られていることから、先行して存在したことがわかる。

このほかSD610～614も検出範囲が狭く、詳細はわからなかったが、古代の溝である。

以上のSD601～614は長原6Bi層準で機能していたと思われ、近隣ではこれらと一連の溝も見つかっている(図22)。

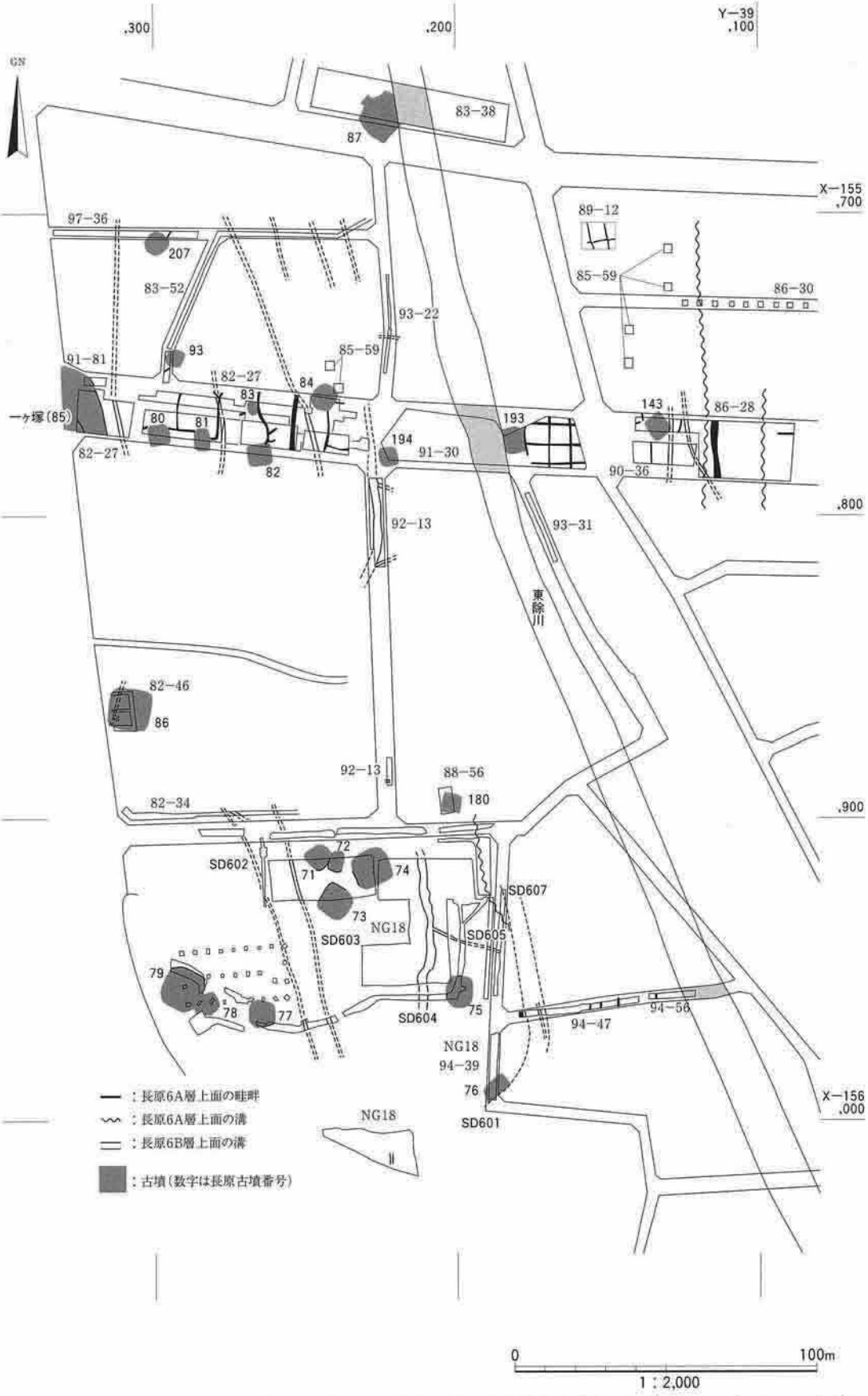


図22　長吉川辺１丁目一帯の古墳と飛鳥～奈良時代の溝の分布([大阪市文化財協会1999e]の図63に加筆)

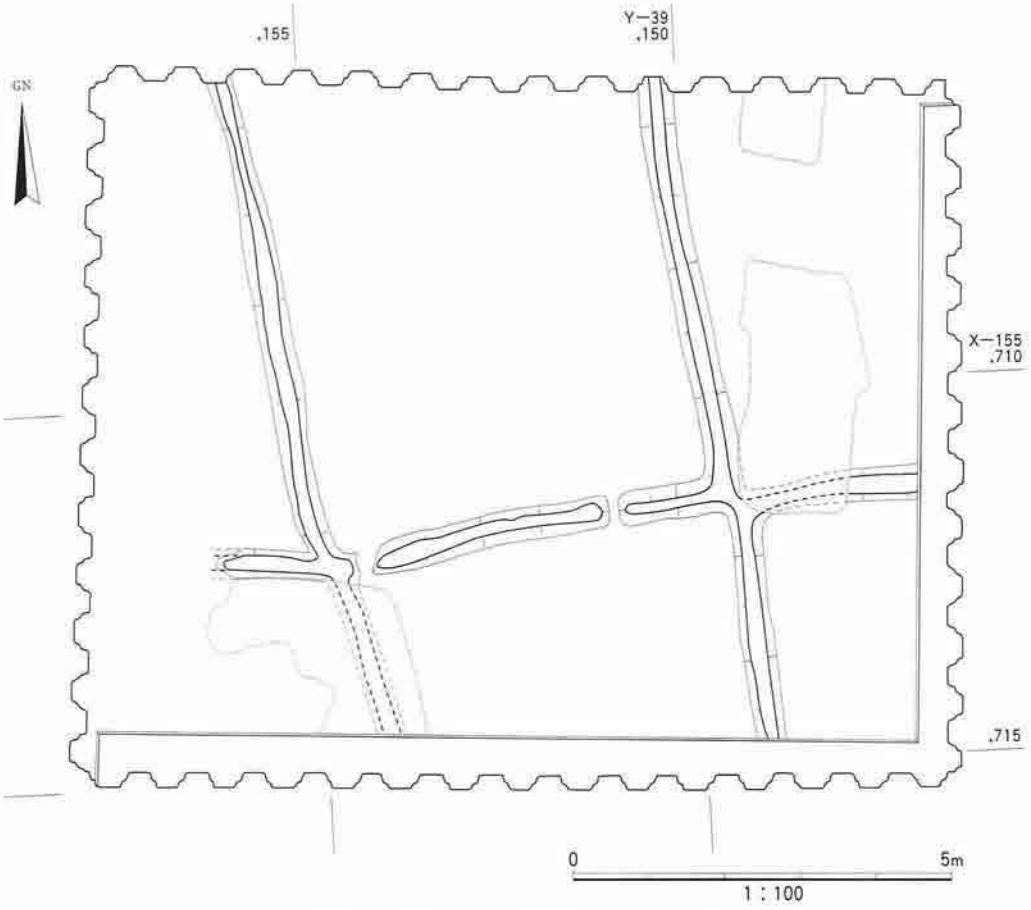


図23　NG89−12次奈良時代水田平面図

NG89−12次調査

長原6Ai層上面で6筆分の水田が検出された(図23・図版4上)。1筆を完全に検出したものはなく、正確な規模はわからないが、調査区北中央で検出されたものは東西5.5m、南北6.5m以上ある。畦畔は食い違って交わり、水口は中央東西のものに2個所で見られた。水田面には顕著な高低差は認められないが、周辺の調査成果から、基本的にはこの水田は南と東の方向に低くなっているものと思われる。また、断面の観察で、作土中に下層の偽礫が多く混じることや、畦畔が脆弱な状態であったことが窺えたことから、この水田があまり耕起されないうちに砂礫層によって埋没したのであろう。

d．平安時代の遺構と遺物

NG18次調査地のC－6区で井戸SE401が検出された(図24)。この井戸はNG94－39次で再調査され、その報告の際にすでにその内容が明らかにされているが[大阪市文化財協会1999e：pp.85−92]、ここではそれに基づいて記述を行った。

この井戸は素掘りで、直径は1.05～1.25m、深さ1.5mあり、深さ0.7mよりも下位の部分では直径が小さく、2段掘りになっている。よって、曲物などの井戸側が存在した可能性もある。埋土の上層は灰黄褐色砂礫とシルトの互層で、下層は暗褐色粘土層で、一部に水成の砂礫層が介在する。

出土遺物には土師器皿68～74、甕75、羽釜76、黒色土器椀77・78、瓦器椀79・80、白磁碗81に加え、須恵器甕の体部を再利用した風字硯82がある(図25)。68～73は小皿で、口径は9～10cm程度で

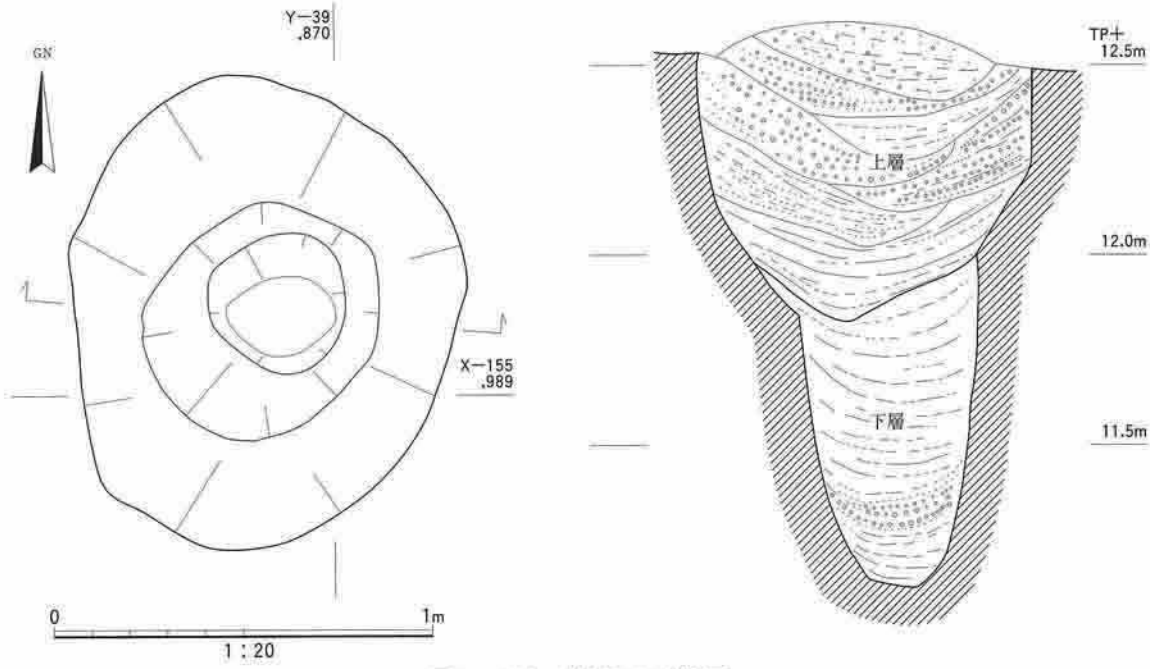


図24　NG18次SE401実測図

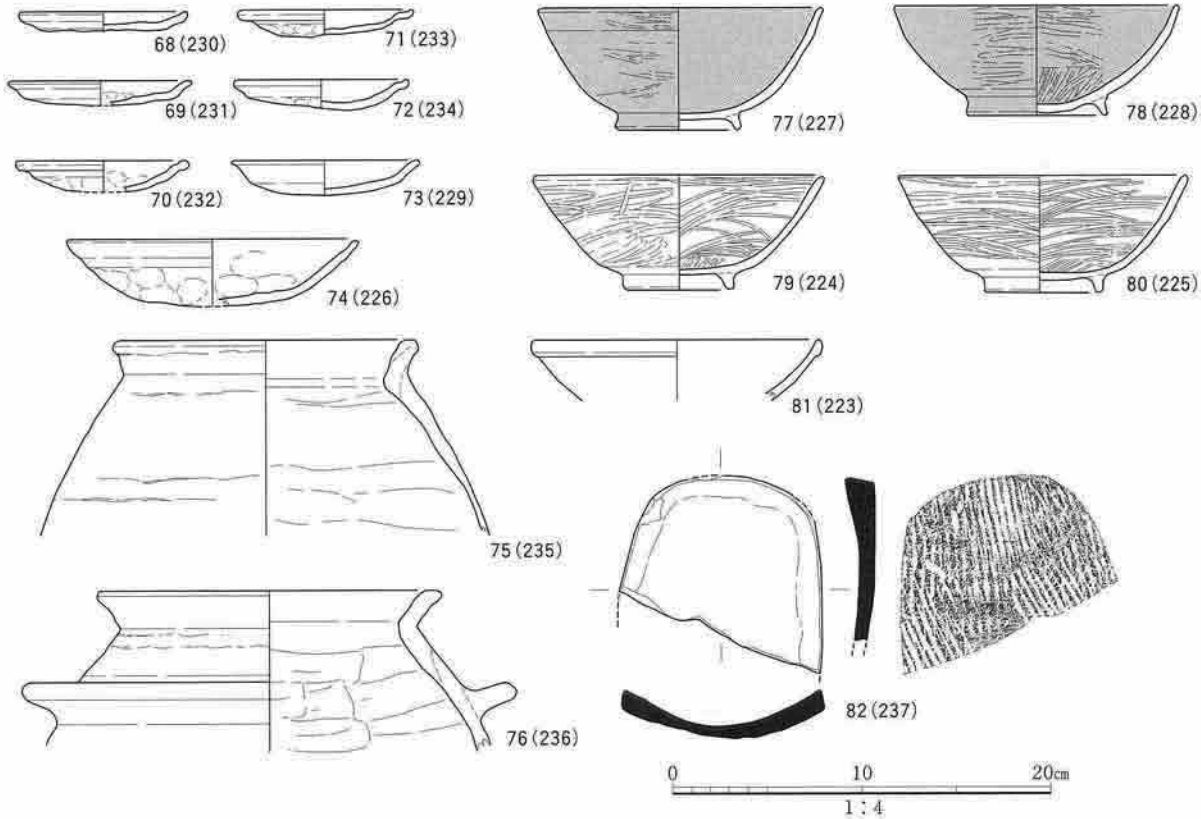


図25　NG18次SE401出土遺物（括弧内は［大阪市文化財協会1999e］の番号）

ある。69・73は口縁部を外反させ、68は軽く内側につまむ。70～72は「て」字状口縁をもつ。74は中型の皿で、口縁部外面に2段のヨコナデが施される。75は口縁部が短く分厚いが、体部は薄く作られている。76は口縁端部に面をもち、鍔は分厚く、上向きに作られている。外面に粘土紐の接合痕が見られ、体部の内面はヘラケズリで仕上げられる。

77は器表の磨滅が進んでいるが、ていねいなヘラミガキが施された痕跡が残る。78は77よりも若干器高が低く、瓦器に近い焼成である。内外面にヘラミガキが密に施される。79・80は高台が高く、内外面のヘラミガキがていねいに施され、80は底部外面にもヘラミガキが施される。81は玉縁の口縁を有する。82は側面に硯を製作する際の摩痕があり、内面に墨の痕跡が残る。

以上の遺物は平安時代Ⅳ期古段階のものであろう。

3）まとめ

本節では古墳11基をはじめ、飛鳥時代の溝、平安時代の井戸を報告した。

長原古墳群では後世の削平のため、主体部が残っている古墳はほとんどないが、本節では大型の須恵器甕を主体部にする**長原87・180号墳**を報告することができた。現段階では長原古墳群で須恵器甕を主体部にしたものはこの2基だけである。また、**長原87号墳**の造出しでは埴輪列が良好に残っていて、その中に須恵器甕が2体横向きにして据えられていた。埴輪列の中に須恵器を据えた例は長原131号墳でも確認されているが[大阪市文化財協会1993a：pp.158－178]、これがどういった意味があるのか今後検討する必要がある。

飛鳥時代後半（長原6Bi層準）になると古墳を避けるようにして水路が掘られ、墳丘に接続する畦畔が延びる。後述する長吉川辺2丁目（同章第2節）や長吉長原4丁目（同章第3節）でも同様に古墳を避けて水田開発が進められている。ただ、**長原76号墳**はこの段階の溝**SD601**に一部を破壊されていることから、古墳が築造されて200年あまりで墳丘の破壊が始まっていたことになる。

（寺井）

第２節　NG83−66次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではNG21・24・83−17・83−66・84−28・84−46次調査の報告を行う(図26)。この中で前３者の調査は全体もしくは一部が長吉川辺３丁目にあり、厳密には本報告の東南地区に属するが、本節の核となるNG83−66次調査地に近接するためにここで報告することにした。

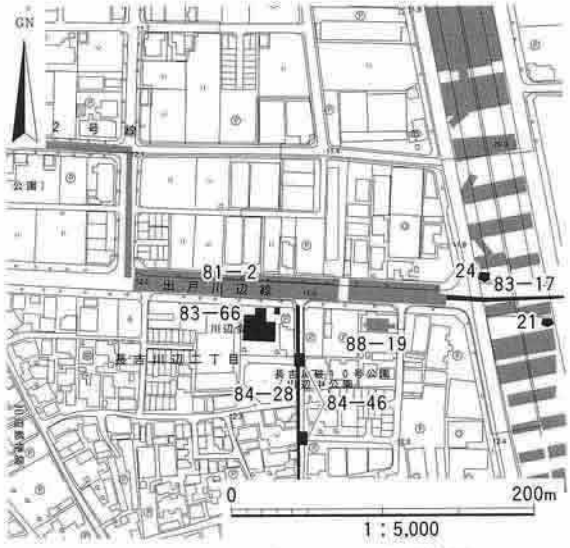


図26　NG83−66次などの調査地位置図

調査地の近隣では古墳や奈良時代の水田が見つかることが多い。NG83−66次調査地の北側で行われた区画整理事業の調査(NG81−２次)では方墳15基や奈良時代の水田、平安時代の火葬遺構などが見つかっている[大阪市文化財協会1989]。また、NG88−19次調査では長原179号墳が検出され、木棺直葬の主体部から鉄刀が出土した[岡村勝行・清水和明1990]。

NG21・24次調査は下水工事に伴う調査である。いずれも20㎡前後の小さな調査であったが、NG21次調査では奈良時代の水田が、NG24次調査では平安時代の掘立柱建物、奈良時代の水田に加え、**長原39号墳**が検出された。

NG83−17次調査は配水管設置のために、中央環状線を横断するトレンチが設定された。道路と交わる部分は工事立会で済ませ、歩道部分は本調査を行った。その結果西側のトレンチでは**長原44号墳**の一部が検出された。

NG83−66次調査は川辺会館建設に先立って行われた。調査の結果、平安時代の掘立柱建物や奈良時代の水田が検出された。

NG84−28・46次調査は下水管敷設に伴う調査である。46次調査では２個所の竪坑が掘削され、竪坑のひとつで**長原120号墳**の周溝が検出された。

２）調査の結果

ｉ）層序

図27はNG83−66次調査の南壁断面図で、表８はその観察表である。第０〜4a層は重機で掘削したため、断面のみでの観察である。第4c層は第4b層よりも砂礫が優勢で、基底面で平安時代の掘立柱建物、柵、溝を検出した。第８層は長原13A層に相当すると思われる。当調査地では出土遺物はないが、北側のNG81−２次調査では当層から旧石器時代のサヌカイトフレイクが出土した[大阪市文化財協会1989：p.27]。

表8　NG83－66次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	30					近・現代
1	1	現代作土	20					
2	2	緑灰色砂礫混り中～細粒砂	15					江戸時代
3	3	緑灰色砂礫	15	水成				室町時代
4a	4A	灰黄褐色砂礫	40	水成				
4b	4B	灰褐色砂礫混りシルト	10	作土		↓耕作溝		鎌倉時代
4c	4C	灰褐色細礫混りシルト～細礫	15	作土		▼SB401・SA402～404		平安時代
5a	5A	黄灰色粗粒砂	50	水成				奈良時代
5b	5B	緑灰色極細粒砂～シルト	10	水成				
6a	6Ai	灰色粘土	15	作土		←水田畦畔		
7	7	黒灰色粘土質シルト	10					飛鳥時代
8	13A	灰白色粘土質シルト						旧石器時代

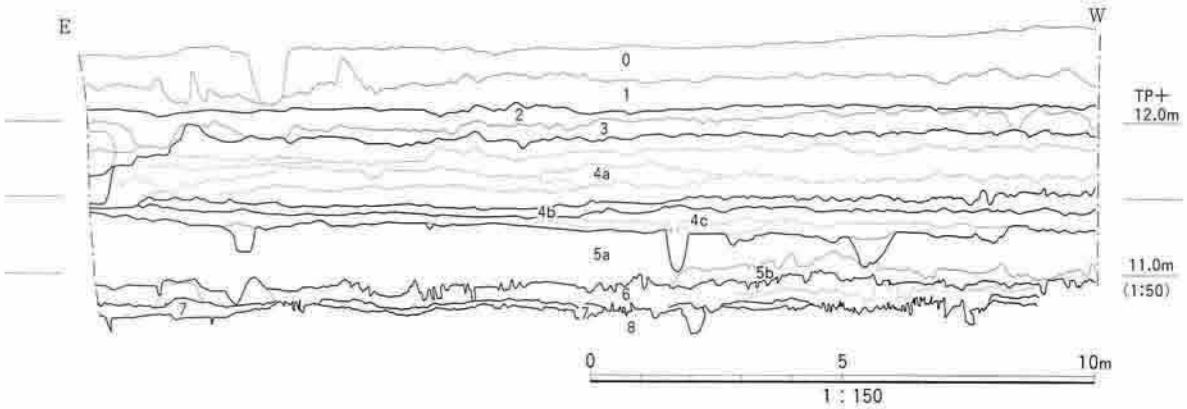


図27　NG83－66次南壁断面図

ii)遺構と遺物

a．古墳時代の遺構

NG24次調査

長原39号墳：古墳の南辺の一部が検出された(図28左)。上位の長原6Ai層準の水田に削られたため、残存している盛土の厚さは0.1m以下である。周溝にはオリーブ黒色粘土が堆積し、ヨコハケを施した窖窯焼成の埴輪片が数点出土した。

当調査地に北接して大阪文化財センターが調査した62トレンチがあり、古墳の続きが検出されてい

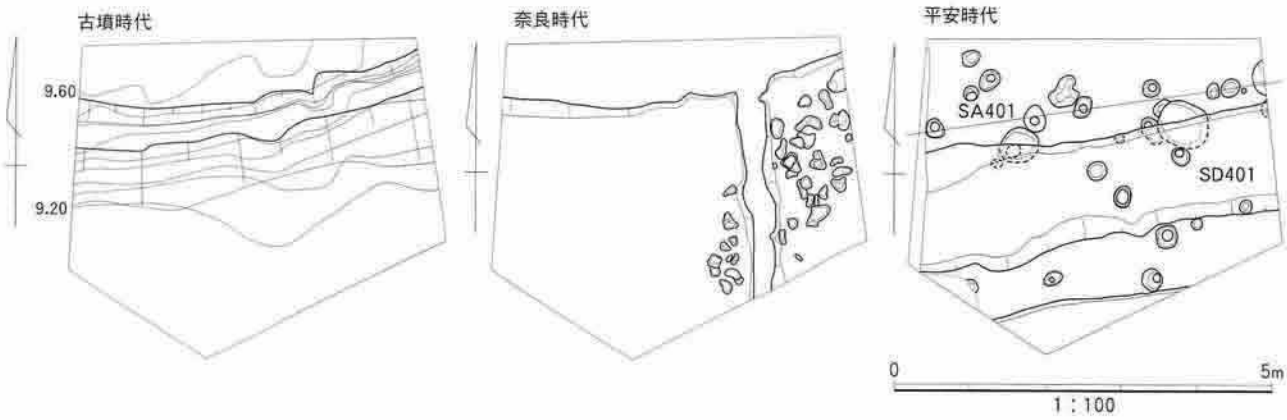


図28　NG24次古墳～平安時代遺構配置図

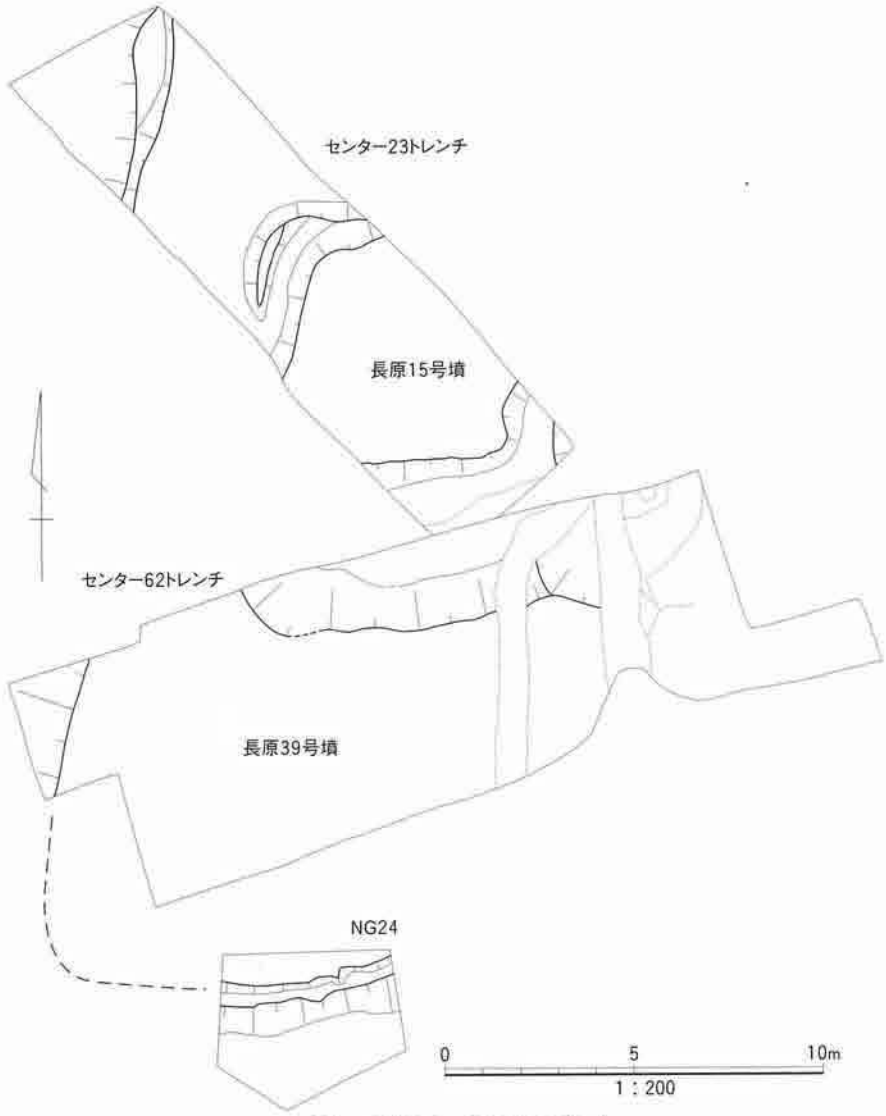


図29　長原15・39号墳平面図

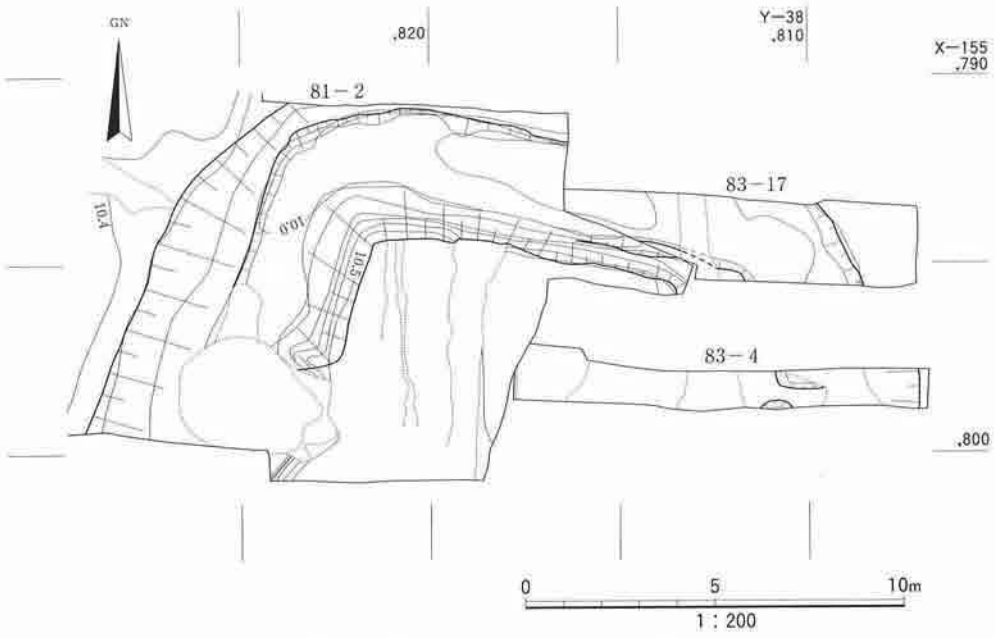


図30　NG83−17次長原44号墳平面図

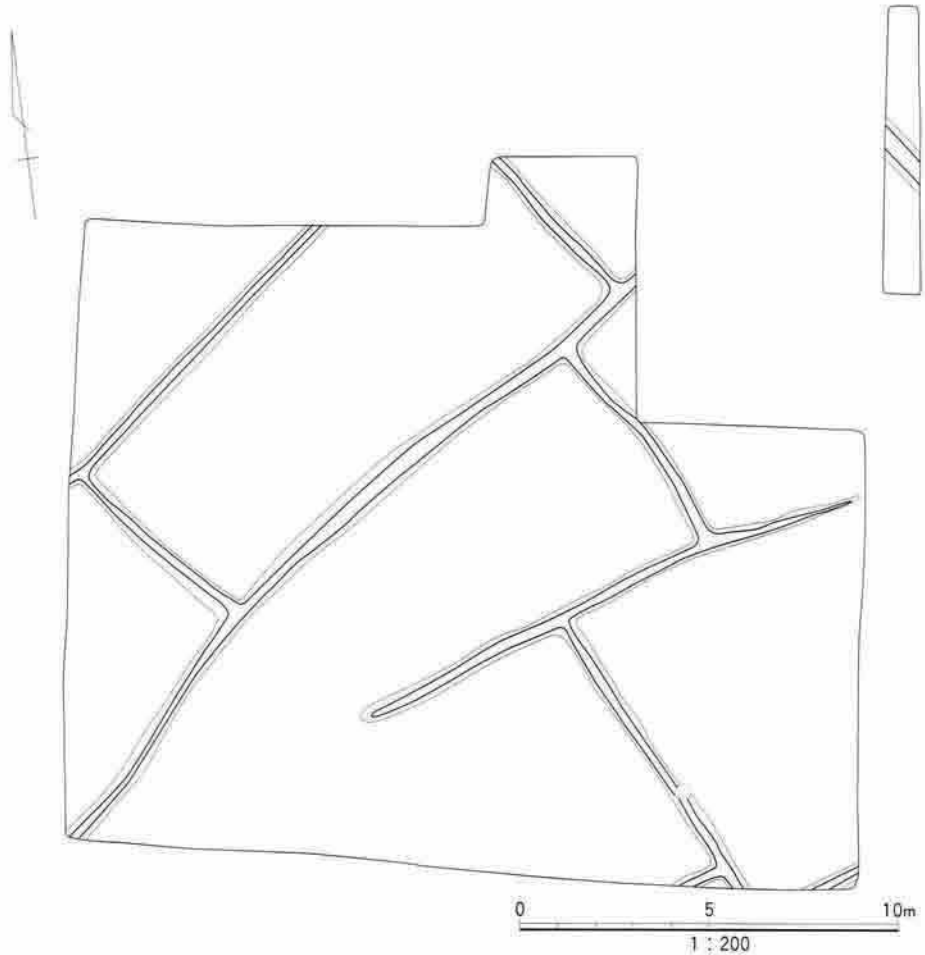


図31　NG83－66次奈良時代水田平面図

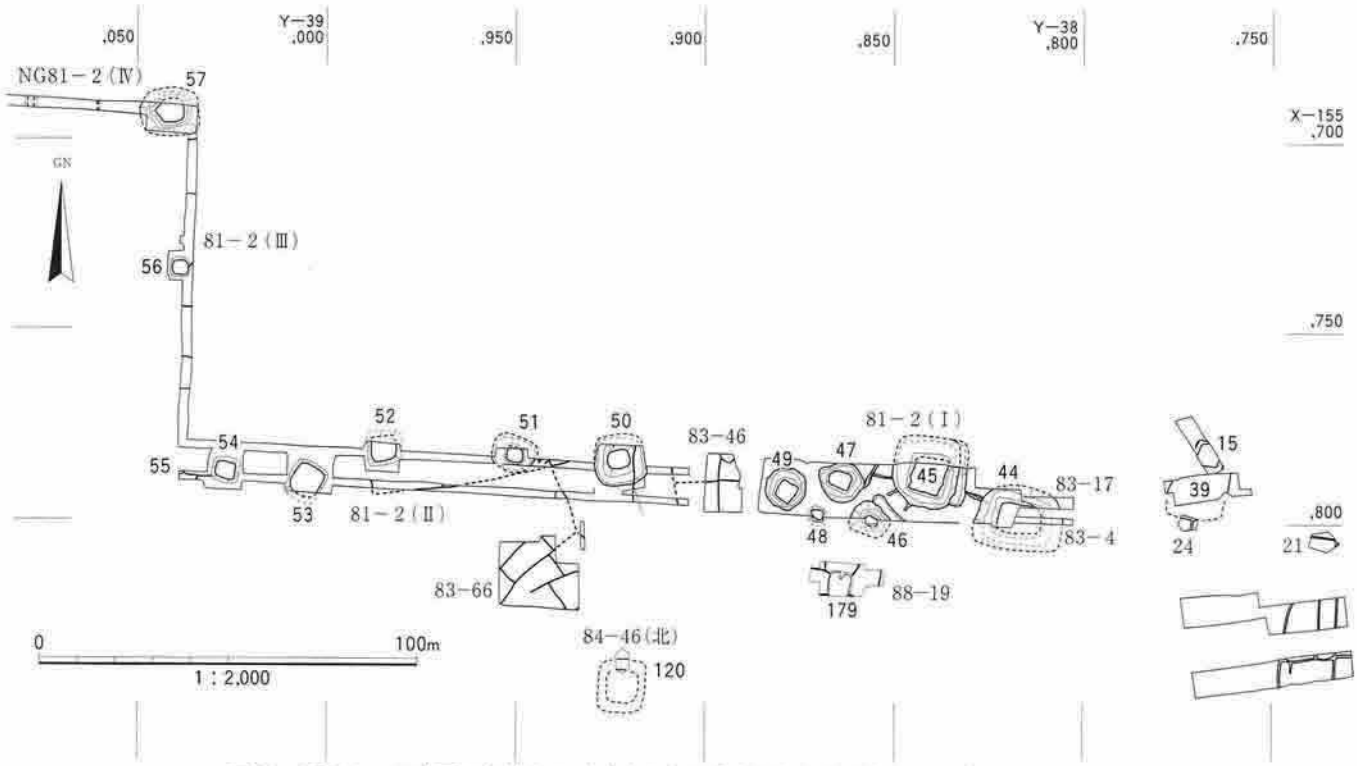


図32　NG83－66次周辺古墳および畦畔分布図（[大阪市文化財協会1989]の図59に加筆）

る[大阪文化財センター1978：p.48]。これから東西15m、南北８mの墳丘をもつと推定される(図29)。

NG83−17次調査

長原44号墳：古墳の周溝の北東隅が検出された(図30)。同一の古墳はNG81−２次調査やNG83−４次調査でも検出されていて、すでに[大阪市文化財協会1989：pp.30−37]で報告されている。それによると、墳丘東西幅は基底部で11.8m、周溝も含めると21.6mの規模になる。南半分は未調査のため、南北の長さはわからない。周溝からは出土した円筒埴輪はいずれも無黒斑である。Ｂ種ヨコハケが施されたものが多いが、一部タテハケのみのものもある。

NG84−46次調査

長原120号墳：北側の竪坑で、幅約２m、深さ0.1mの周溝が検出された(図32)。南側に墳丘があったと想定される。

ｂ．奈良時代の遺構

NG21・24次調査

NG21次調査ではほぼ正南北・正東西の畦畔が検出された(図33)。また、NG24次調査では**長原39号墳**に取り付く畦畔が検出された(図28中)。いずれも長原6Ai層上面検出遺構である。

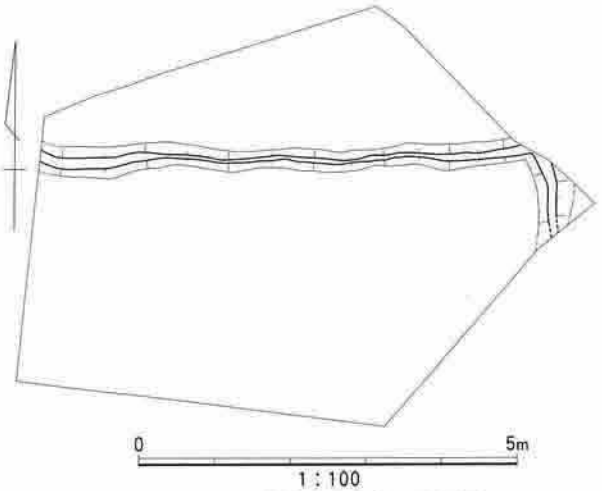


図33　NG21次奈良時代水田平面図

NG83−66次調査

第6Ai層上面で畦畔を伴う水田跡が検出された(図31・図版４中)。畦畔は上端0.15～0.20m、下端0.40～0.50mで、高さ0.05～0.10mの断面台形を呈する。南西−北東方向のものと南東−北西方向のものが「Ｔ」字状に結合し、十字に交わるものはない。水田の一筆当りの面積は約80㎡である。

ｃ．平安時代の遺構

NG24次調査

柵と多数の柱穴、溝が検出された(図28右)。

SA401：東西方向に延びる柵で、柱間隔は2.0mである。柱穴の掘形は円形で直径0.25m、柱痕跡は0.1mある。柱穴から緑釉陶器碗の底部が出土した。

SD401：SA401の南側でほぼ平行して延びる溝で、幅1.2m、深さ0.2mある。SA401と直接前後関係を示すものは見つからなかったが、多数の柱穴を切って掘られていることから、SA401より後出する可能性が高い。なお、時期を決定できるような遺物は出土していない。

NG83−66次調査

長原4C層基底面で、総柱の掘立柱建物・柵・溝が検出された(図34)。

SB401：桁行３間(6.7m)、梁間２間(4.5m)の総柱の掘立柱建物である(図版４下)。柱穴は直径0.2m未満の円形で、柱痕跡はわからなかった。

SA402：SB401の東6.5mのところで検出された柵である。方向はSB401の梁間と平行する。柱穴

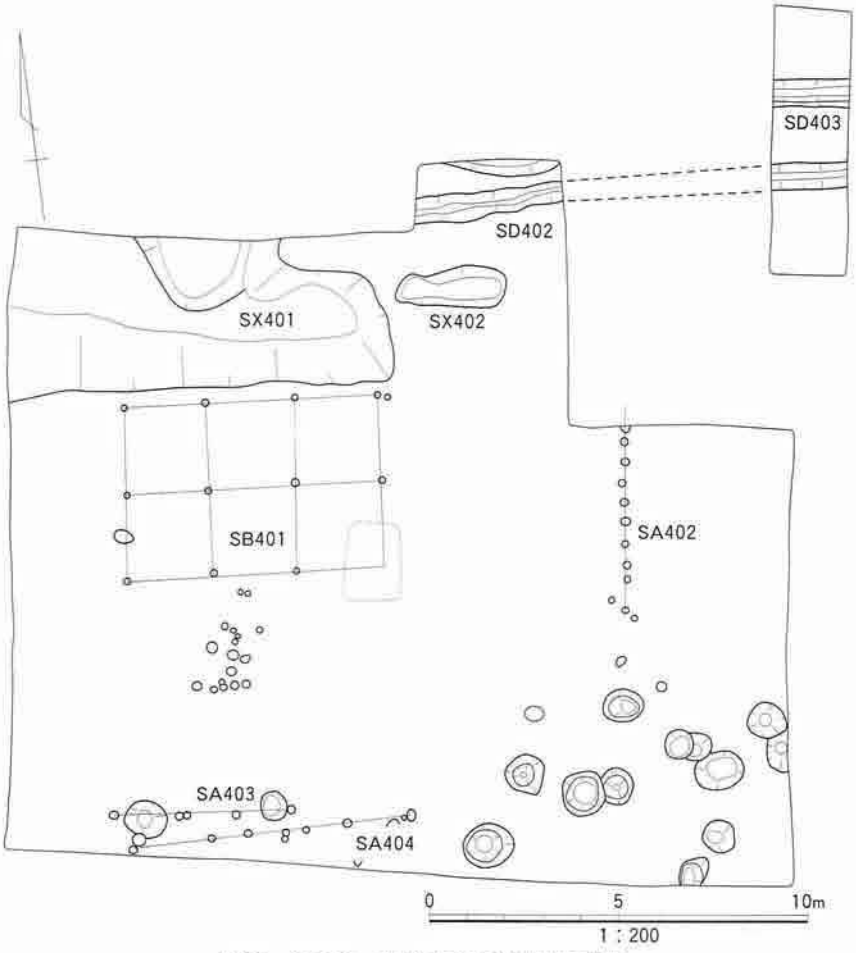


図34　NG83－66次平安時代遺構配置図

は直径約0.2mで、柱間は0.5m前後である。

SA403・404：調査地の南側で検出された東西方向の柵である。SA404の方が東で北に振れていて、近接しているため、同時存在はしないと思われる。南側に延びて建物になる可能性も残る。

このほか、SX401・402は深さが0.1m以下の浅い窪みで、SD402・403は幅0.5m、深さ0.2mの平行して延びる溝である。また、調査地の南東には群集した土壙群が分布する。

以上の遺構について、遺物が少ないため詳細な時期はわからない。

3）まとめ

以上の調査では古墳3基（長原39・44・120号墳）、奈良時代の水田、平安時代の集落跡が検出された。当地は長原塚ノ本古墳の南西部に当り、小古墳が多く分布することで知られている。

奈良時代の水田（長原6Ai層準）については近隣でも見つかっている。畦畔の方向は一定ではなく、古墳に接続するものも多い。長原6Ai層上面の標高が南西が高く、北東が低い傾向にあり、畦畔の方向も地形に規制されたものと思われる。

平安時代の集落については、NG83－66次調査地の約150m東で方形区画を伴う建物群が見つかっており、その時期は平安時代Ⅲ～Ⅳ期古段階に当る［大阪文化財センター1978］。NG83－66次やNG24次調査で検出された建物群もこの時期に該当するものと思われる。（寺井）

第３節　NG92−92次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では長吉長原４丁目で行われたNG83−11・86−66・87−70・89−69・92−45・92−73・92−92・94−67次調査を報告する（図35）。当地区の東側には塚ノ本古墳（長原１号墳）があり［大阪文化財センター1978、長原遺跡調査会1978］、それ以外にも小方墳が多く見つかっていることで知られている。

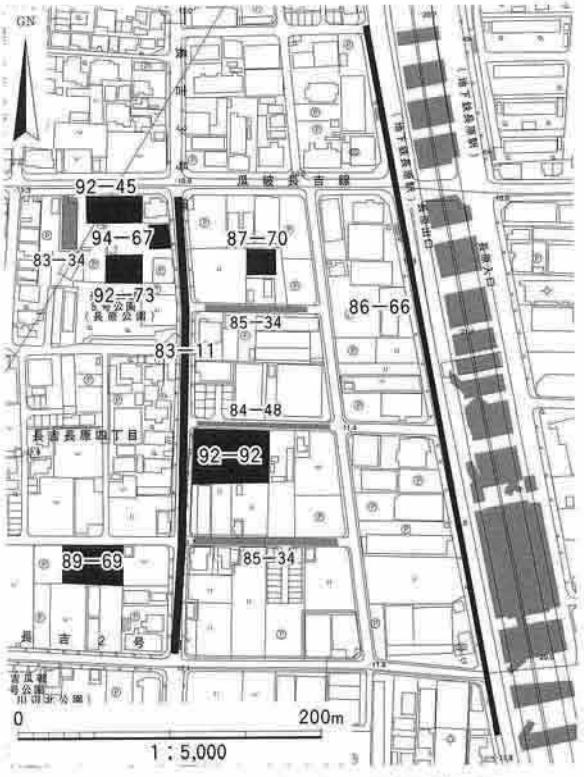


図35　NG92−92次などの調査地位置図

NG83−11次調査は関西電力による埋設管設置に伴う調査で、区画整理事業に伴うNG82−19次調査地に平行する［大阪市文化財協会1990］。NG82−19次調査では古墳が５基検出されたが、本調査では特に顕著な遺構は見つからなかった。

NG86−66次調査は中央環状線沿いの下水管渠築工事に伴って行われた。A〜Qの17個所ある人孔部分については平面的な調査を行い、管路部分については立会調査の上で、遺構が確認された場合のみ本調査に切り替えることにした。調査の結果、小方墳が５基（**長原155〜159号墳**）検出された。

NG87−70次調査は試掘の結果、地層が良好に残っていることが明らかになった。近隣で古墳が多く検出されていることから、当地でも古墳が見つかることが予想され、本調査が実施された。本調査の結果、古墳は検出されなかったが、飛鳥〜奈良時代の水田が検出された。

NG89−69次調査は東西方向のトレンチを南北２本設定した。北側のトレンチの東端で古墳を検出し、事業者・大阪市教育委員会文化財保護課と協議をした結果、調査期間を延長して、東側を拡張した。その結果、一辺約７ｍの墳丘をもつ方墳（**長原182号墳**）が明らかになった。

NG92−45次調査は試掘で地層が良好に残っていたことから、東西方向のトレンチを南北２本設定して、調査が行われた。調査の結果、奈良時代の水田が検出された。

NG92−73次調査は試掘で地層が良好に残っていたことから、東西方向のトレンチを南北２本設定して、調査が行われた。調査の結果、飛鳥〜奈良時代の水田が２面検出された。また、落込みに長原９〜12層が残っていたことから、石器遺物を確認する調査も行われたが、石器は出土しなかった。

NG92−92次調査は２件のマンション建設に伴って、同時に行われた調査である。それぞれの工事敷地内に２本ずつ計４本のトレンチを設定した。調査の結果、平安時代の建物跡、奈良時代の水田に加え、**長原200号墳**が検出された。**長原200号墳**は木棺直葬の主体部が残っており、鉄剣（または刀）

表9　NG92－45次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0・1	0・1		100	盛土・作土				近・現代
2	2	灰オリーブ～暗オリーブ色 砂礫混り砂質シルト	10	作土				江戸時代
3	2～3	オリーブ褐～暗オリーブ色 砂礫混りシルト	15	作土				室町時代
4	3～4	黄褐～暗オリーブ色 シルト混り砂礫	15	作土		▼↓耕作溝		
5	5	にぶい黄～灰オリーブ色 極細粒砂～砂礫	50	水成		←水田畦畔	土師器・須恵器・サヌカイト片	奈良時代
6a	6Ai	オリーブ灰～暗オリーブ色 シルト混り中粒砂～砂混りシルト	20	作土			土師器・須恵器	
6b	6Aii	オリーブ灰～緑灰色細～中粒砂	25	水成層		←水田畦畔		
6c	6Bi	オリーブ灰～オリーブ黒色 シルト質粘土	25	作土				飛鳥時代
7	7Ai	オリーブ黒～黒褐色粘土質 シルト～シルト質粘土	20	作土				
8	9～12	灰オリーブ～暗灰黄色シルト～粘土	10	古土壌	火山灰を含む			縄文時代
9	13	灰～緑灰色粘土	>50					旧石器時代

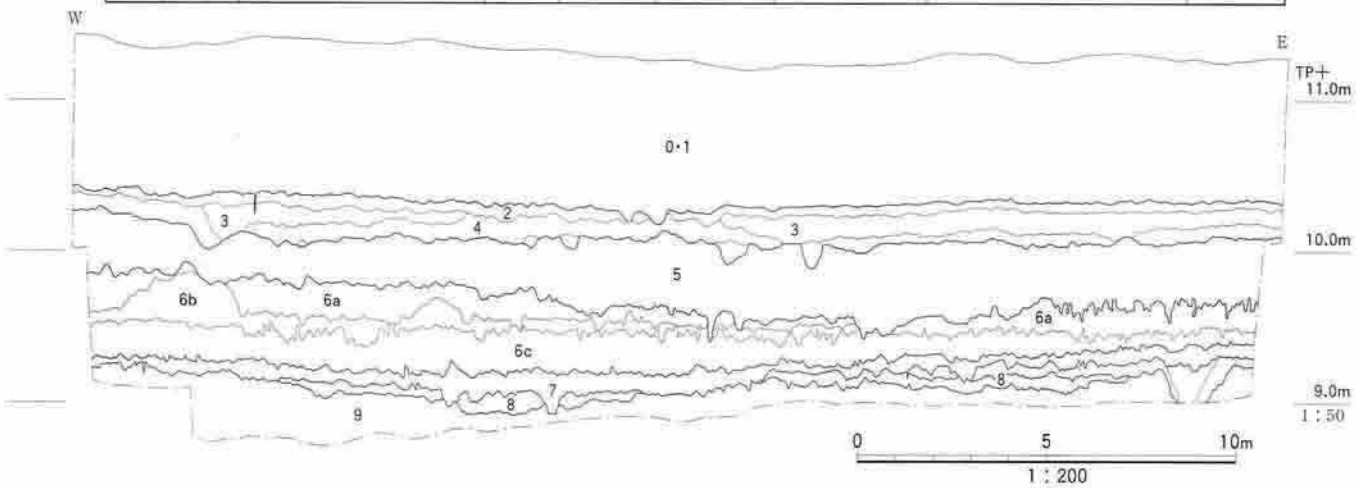


図36　NG92－45次南区南壁断面図

や供献土器が出土した。この成果についてはすでに[高橋工1993]で紹介されている。

NG94－67次調査はNG92－45次調査地の南東に位置する。調査期間と工事深度の関係で長原4B層まで重機掘削し、長原4C層基底面しか調査することができなかったが、平安時代中期の井戸や多数の柱穴が検出された。なお、この調査で出土した緑釉の花文陶器は[久保和士1995]ですでに紹介されている。

2)調査の結果

i)層序

本節で扱う調査地はいずれも地層が良好に残っていた。ここではもっとも北で行われたNG92－45次調査の南区南壁の断面図(図36・表9)と、もっとも南側で行われたNG89－69次調査の北区北壁の断面図を示す(図37・表10)。

ii)遺構と遺物

表10　NG89－69次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0・1	0・1		60	盛土・作土				近・現代
2	2	灰黄～黄褐色シルト混り細粒砂～砂礫	45	作土				江戸時代
3	3～4B	灰黄～黄褐色シルト混り細粒砂	20～40	作土				鎌倉・室町
4	4C	にぶい黄～灰黄褐色砂混りシルト	20	作土		↓畦畔の痕跡 ▼土壙・溝・ピット	土師器・黒色土器・平瓦	平安時代
5	5	黄褐色細～粗粒砂	≦15	水成				奈良時代
6a	6Ai	灰黄褐色～黒褐色シルト	≦10	作土				
6b	6Aii	灰黄褐色～黒褐色シルト	≦5	水成層		←水田畦畔		
6c	6Bi	灰黄褐色～黒褐色シルト	≦10	作土		▼SX701		
7	7Ai	黒褐色砂質シルト～シルト	≦10					飛鳥時代
8	7Bi	第9・10層に由来する偽礫	10	古墳盛土				古墳時代
9	7Bi	黒色粘土質シルト	10					
10	13	オリーブ灰色砂混りシルト	>25					旧石器時代

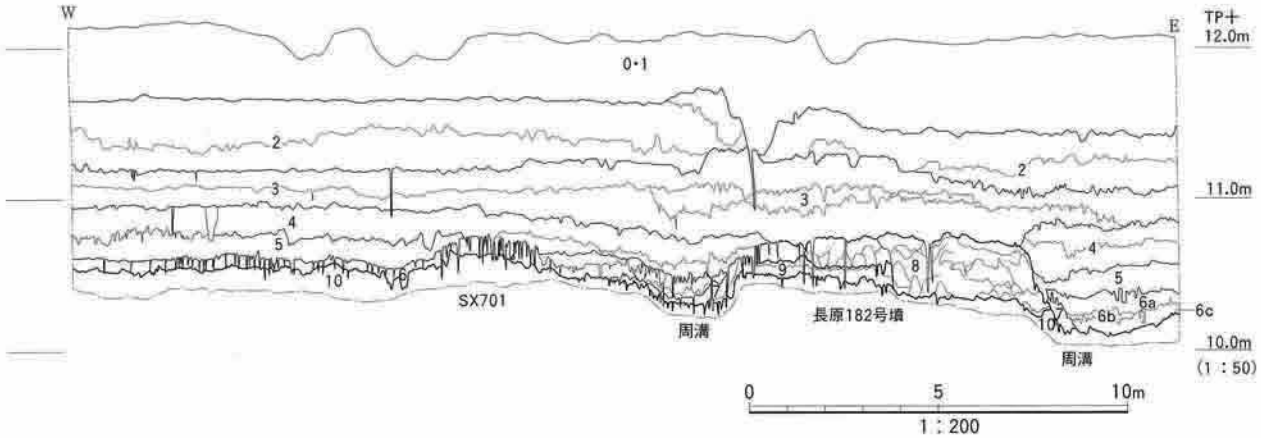


図37　NG89－69次北区北壁断面図

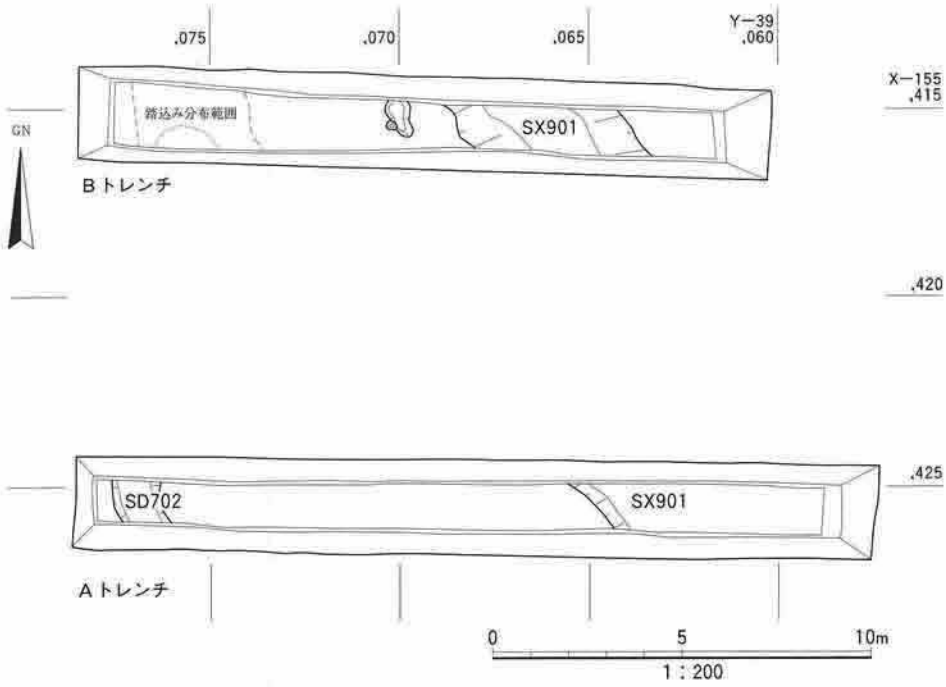


図38　NG92－73次SX901平面図

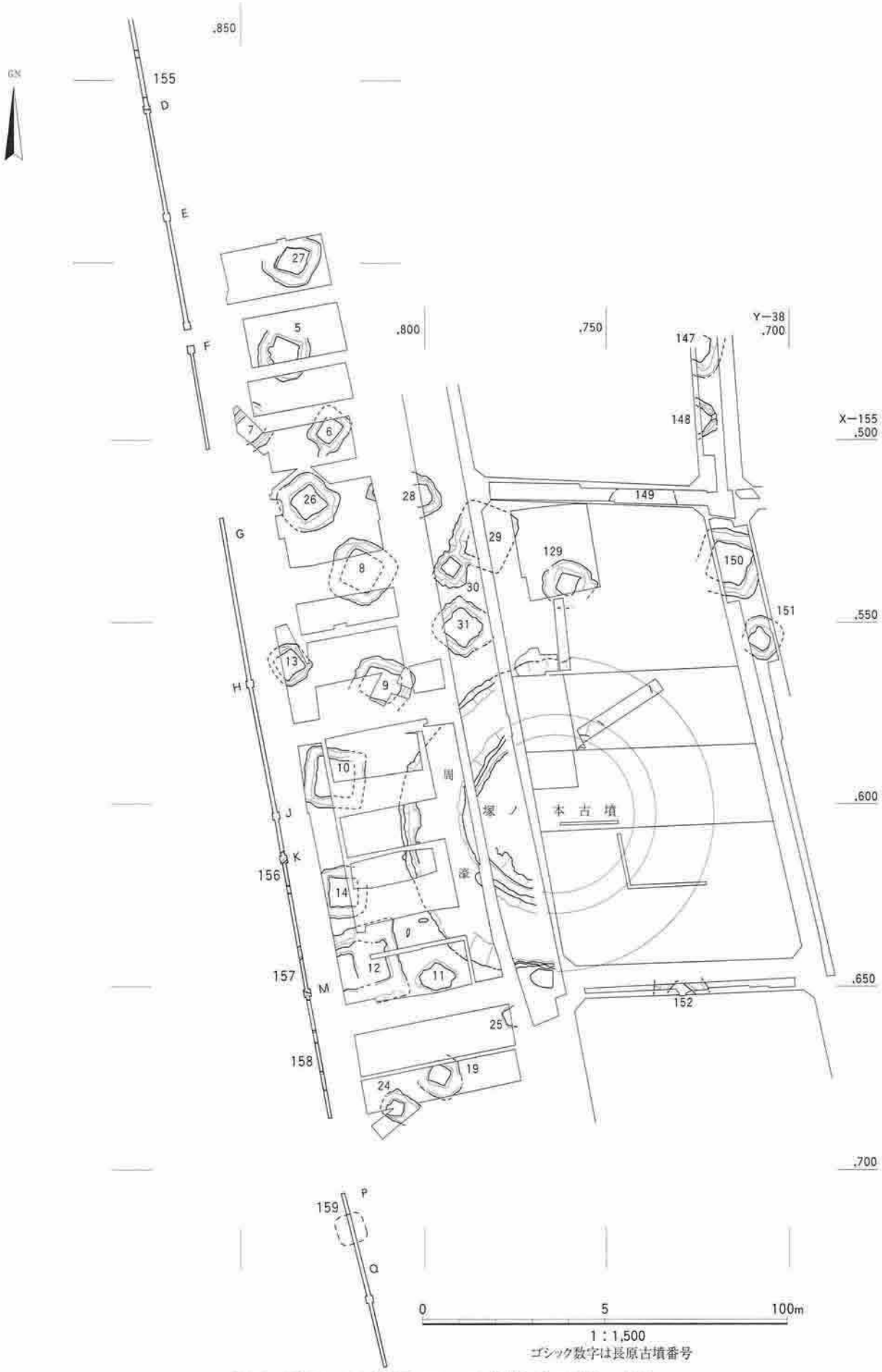


図39　NG86－66次長原155～159号墳とその周辺の古墳

a．縄文時代の遺構

NG92−73次調査で長原9〜12層で埋まる南北方向の窪み**SX901**を検出した(図38)。北区の幅は約3.5m、深さ0.1mで、南区では深さ0.2mあり、東側の肩は検出されなかった。石器遺物の確認調査を行ったが、出土しなかった。

b．古墳時代の遺構と遺物

NG86−66次調査

5基の古墳が検出された(図39)。いずれも幅0.5m程度の細いトレンチであるため、墳丘規模などで不明な点が多い。

長原155号墳：墳丘の南北長が10.0m、周溝を含めると16.0mある。周溝の深さは0.3m、墳丘の残存高は周溝高から0.7mあり、盛土の厚さは0.3mである。方墳と思われる。円筒埴輪とともに馬形埴輪と思われる破片も出土した。

長原156号墳：周溝を含めた確認長が13.0m、周溝幅3.0mあり、方墳と思われる。周溝の深さは0.3m、墳丘の高さは周溝基底面から0.6mで、盛土は0.1m残っていた。

長原157号墳：周溝を含む確認長が15.0m、周溝幅5.0mあり、方墳と思われる。墳丘盛土は0.28m残っていた。

長原158号墳：墳丘の南北長が9.5m、北側の周溝幅が3.5m、南側が5.2mある。墳丘の高さは周溝基底面から0.4mで、盛土は0.15m残っていた。川西編年Ⅳ期に比定される円筒埴輪が数点出土した。

長原159号墳：調査地の南端で検出した古墳である。トレンチ内では北側が大きく攪乱されており、南側の周溝の一部と墳丘を確認したに留まる。

NG89−69次調査

長原182号墳(図41・図版5下)：墳丘が一辺約7m、周溝幅は西周溝で約2mある方墳である。東周溝は長原6層準の水田に削られており、幅はわからない。墳丘の盛土は西半分では旧地表である長原7Bi層の上面に、長原7Bi層の偽礫、続いて長原

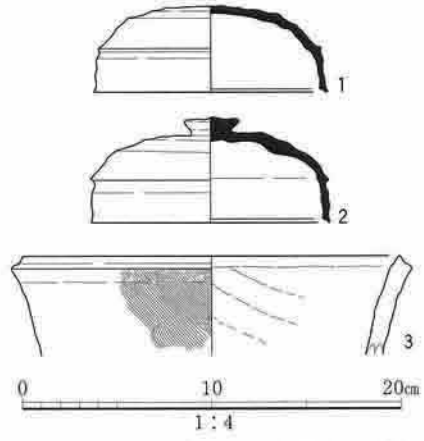


図40　NG89−69次長原182号墳出土遺物

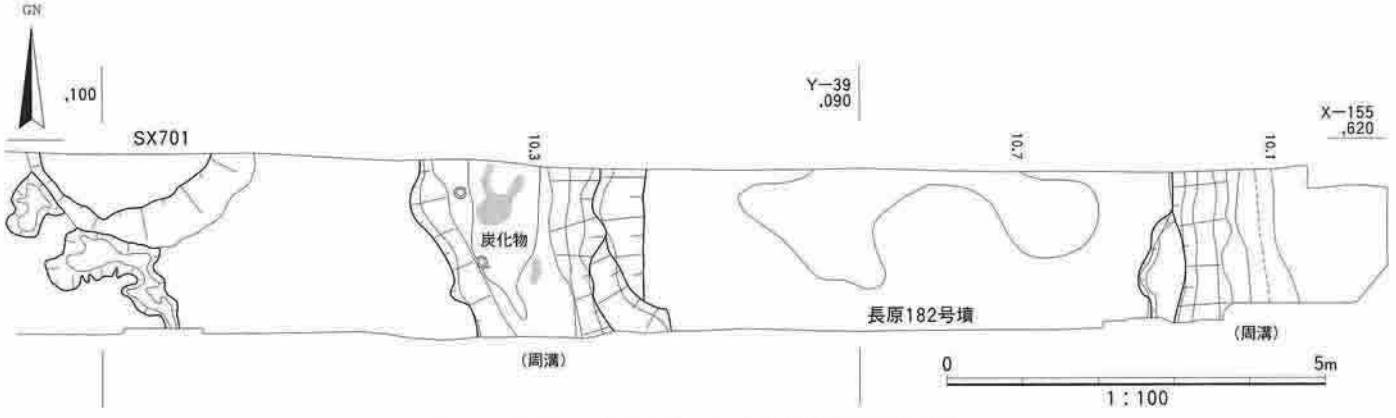


図41　NG89−69次南トレンチ古墳時代遺構平面図

13層の偽礫が盛られているが、東半分では一度長原7Bi層を掘って、地表を下げ、それから盛土が行われていた(図37)。おそらく東半分は墳丘の西半分の盛土を行うために掘られ、そののち西半分に継ぎ足すようにして東半分が造られたのであろう。

遺物は周溝から須恵器杯蓋1・高杯蓋2、墳丘上からは円筒埴輪の口縁部3が出土した(図40)。1は口径12.0cm、器高4.7cmあり、TK23型式に該当する。3は外面にタテハケが施される。

SX701(図41)：**長原182号墳**の西約６ｍの地点で検出された。長原7Bi層(図37の第９層)が削り残されてできた高まりである。盛土も周溝もないが、長原６層準で破壊された古墳の可能性がある。

NG92－92次調査

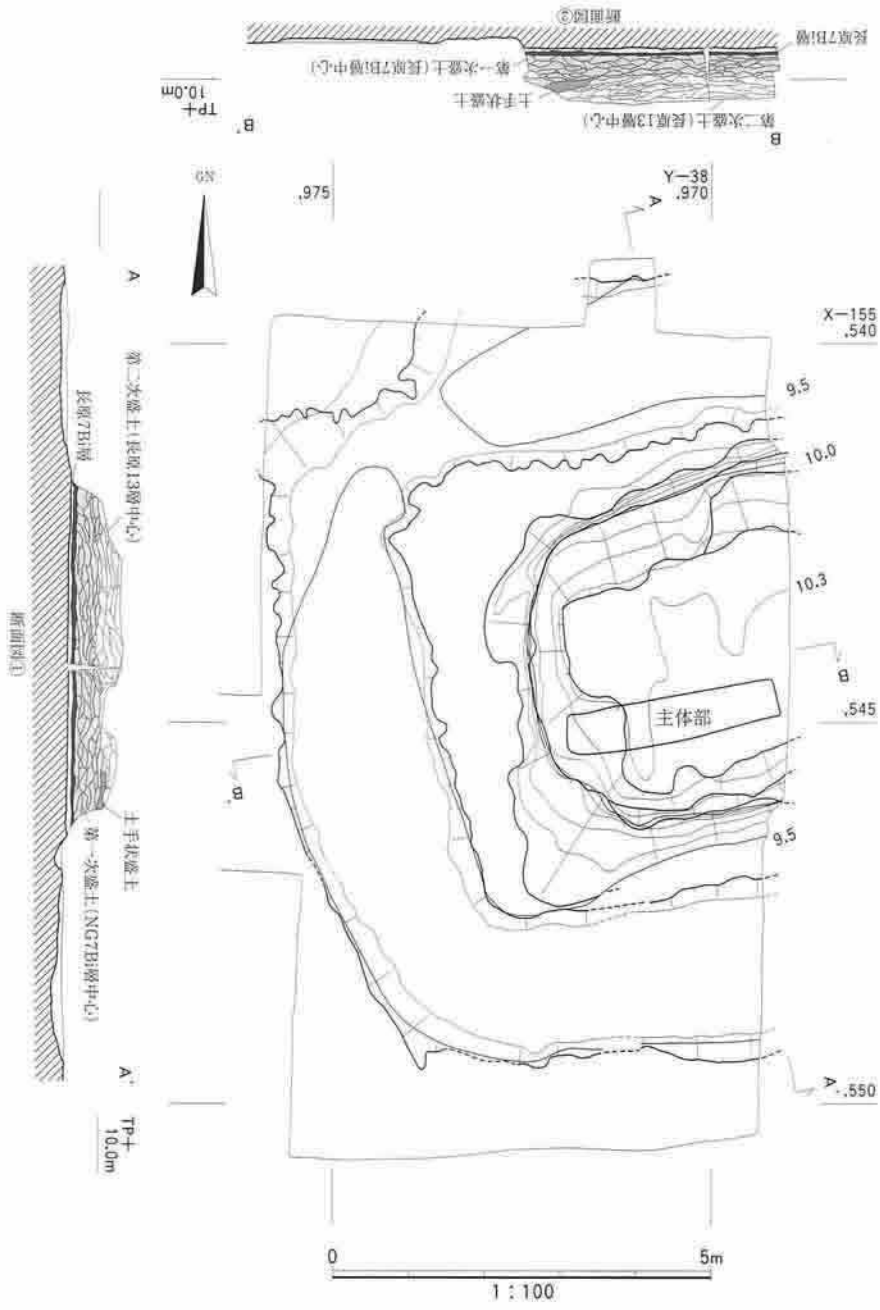


図42　NG92－92次長原200号墳実測図

長原200号墳：４区東部で検出された方墳である(図42、図版６上・中)。墳丘規模は西辺を参考にすると一辺6.3mあり、幅1.4～2.5m、深さ約0.1ｍの周溝が巡る。墳丘は若干の変形を受けていると考えられるが、保存状態はおおむね良好で、墳丘の高さは0.9mある。また墳頂部に木棺を直葬した埋葬施設１基を確認した。

墳丘の断割り調査の結果、盛土は厚さ65cmほどが遺存しており、大きく２回に分けて盛られていた。下部の盛土の厚さは25～35cmほどで、東西断面でみると中央部がやや低くなっており、おもに長原7Bi層を盛り上げている(第一次盛土)。上部の盛土の厚さは最大で35cm遺



写真2　長原200号墳主体部鉄剣(鉄刀)出土状況

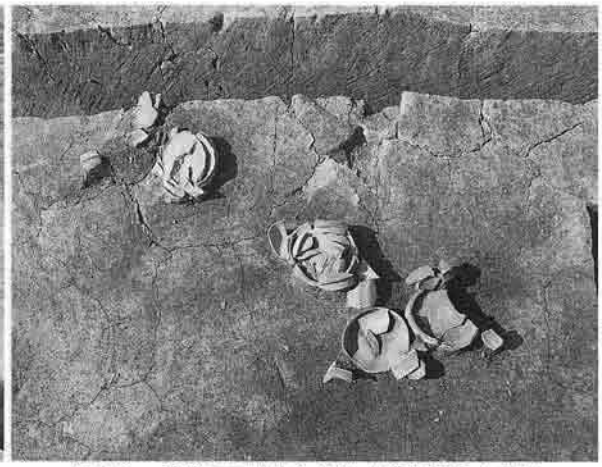


写真3　長原200号墳主体部上須恵器出土状況

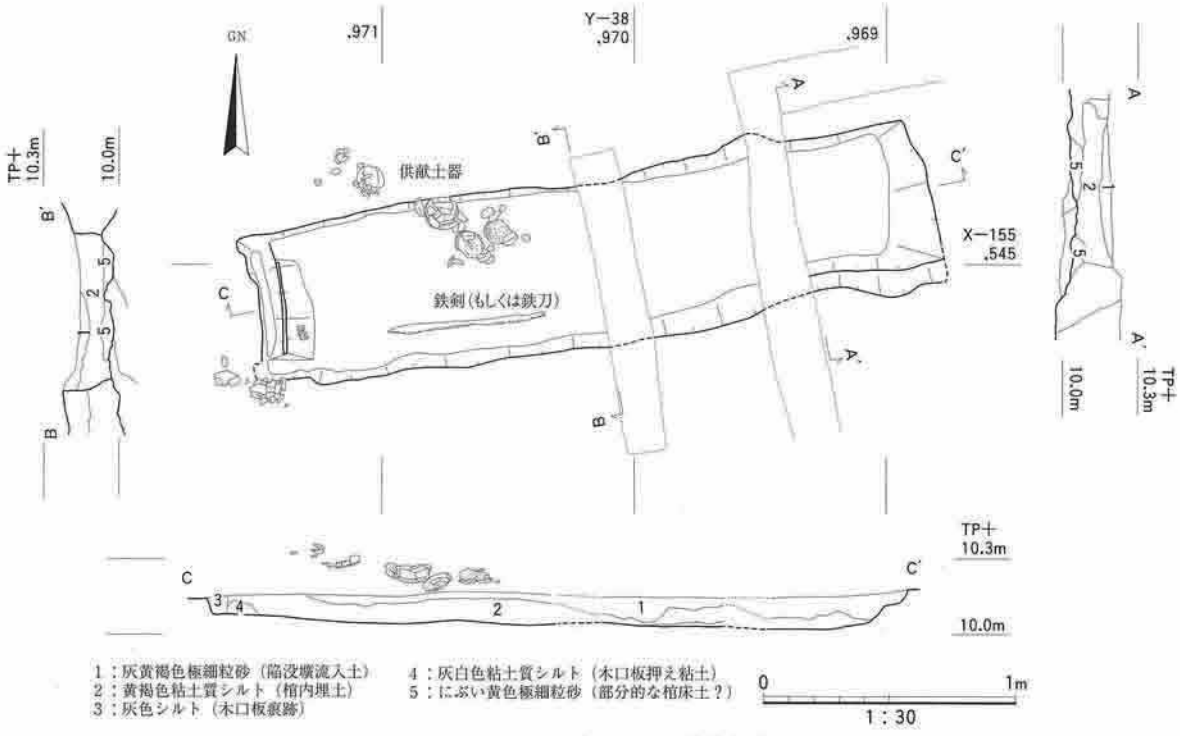


図43　NG92−92次長原200号墳主体部

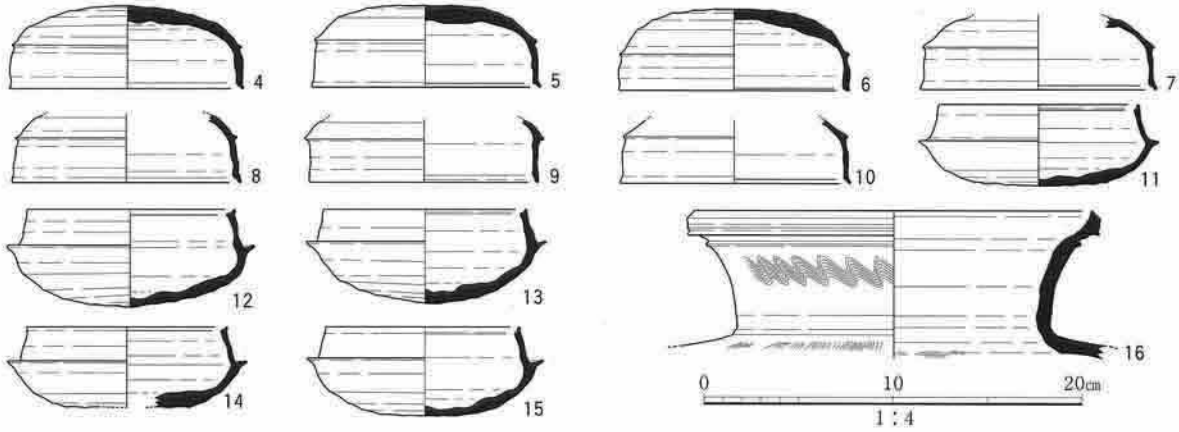


図44　NG92−92次長原200号墳出土遺物

主体部(4～15)、周溝(16)

存しており、おもに長原13層を盛り上げている(第二次盛土)。また第一次盛土上面の周縁部には、平面隅丸方形に、幅約50cm、高さ20cmで土手状に小規模な盛土を行っていた。これは第二次盛土の崩落を防ぐ土留めの機能を果していた可能性がある。また、墳丘東側の第一次盛土上面と第二次盛土中から土師器片が出土し、墳丘を構築する過程で何らかの祭祀が行われた可能性がある。

木棺痕跡の規模は、中央部での長さが2.72m、幅は0.6m弱で、深さは0.12～0.13mである(図43・図版6下)。長軸は東西方向で座標西より10°南に振り、またその位置は墳丘の中央から約1m南へずれている。断面では、底面は平坦で凹みはなく、箱形木棺で、長側板が底板上に立てられる形態であったことがわかる。西端部では、棺材が立ち腐ってシルトに置き換わった個所があり、小口付近の構造が復元できた。長側板の痕跡は小口板の外方へ突出し、長側板で小口板を挟む形態であることがわかる。細い溝状に検出された棺材の痕跡から、長側板・小口板の厚さはいずれも5cm程度であったと想定される。小口板の内側には灰白色シルトを盛った高まりがあり、これによって小口板を内側から押えていたと考えられる。この灰白色シルトの下からは長軸方向に木目をもつ底板材の残片が出土し、このことから灰白色シルトは底板の上に置かれたということができる。鉄釘・鎹などの棺材を固定する金具は出土しなかった。東端部では崩落の際の土層の乱れからか小口部の構造はわからなかった。

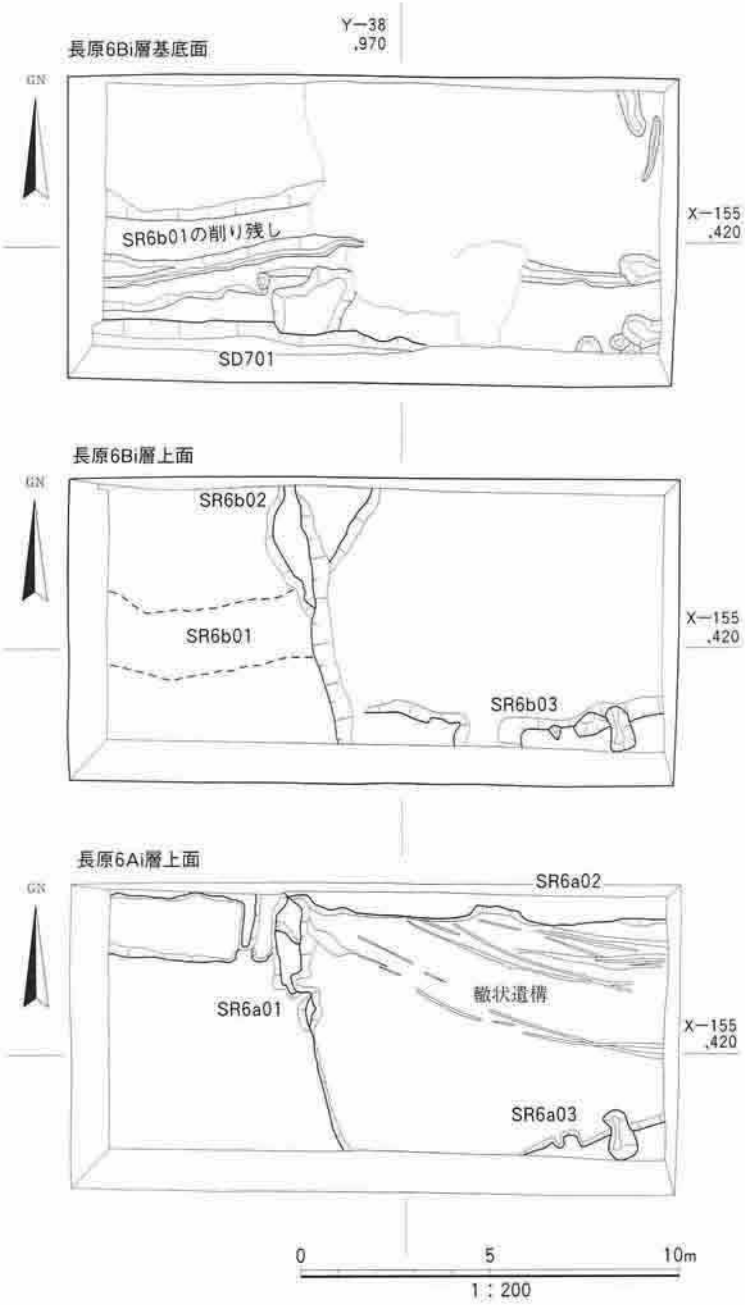


図45　NG87−70次飛鳥～奈良時代遺構配置図

木棺を埋葬するための墓壙は平・断面の精査でも発見できなかった。木棺痕跡の横断面の観察によると木棺底部は、第一次盛土上面に少々の偽礫を介して接しており、同盛土終了後に木棺を設置し、第二次盛土で覆ったものとみてよい。

木棺内南西部では、底面に接して鉄剣(または刀)一振りが出土した

(写真2)。ほかに副葬品はない。朱またはベンガラもなく、使用されていなかったようである。底面はほぼ平坦であり、棺の幅の広狭もないことから埋葬頭位は不明であるが、鉄剣の位置からみて西頭位であろうか。木棺内の埋土は黄褐色粘土質シルトで、墳丘盛土が薄汚れた感じのもので、層厚8㎝前後を測る。この層は木棺の腐朽によって棺蓋上の盛土が落下したものと考えられる。このことから、木棺は墳頂からさほど深からぬところに設置されたものと考えられる。

墳頂部の埋葬施設上には、ほぼその輪郭にそって灰黄褐色極細粒砂が分布し、この層からは須恵器杯身11〜15、杯蓋4〜10や壺片がまとまって出土した(図43・44、写真3)。この層は墳丘・木棺内埋土とは明確に分離できることから、木棺が腐朽、陥没してできた壙内に堆積し、須恵器は木棺直上の盛土上に置かれていたと考えられる。出土した杯はおおむねTK23型式に該当する。なお、主体部から出土した鉄剣(または刀)は残存状況がきわめて悪く、実測はできなかった。

周溝は全体に遺存状況が芳しくなく、埋土も上位層の水田耕土とほとんど区別がつかなかった。須恵器壺16(図44)をはじめ、少量の須恵器・土師器が出土したが、上位層から踏込まれたものもあるようである。埴輪片はごく少量が出土したが、墳丘に樹立されていたとするには少なすぎ、当初からなかったと思われる。古墳築造当初の周溝の深さは、墳丘盛土下に保存されていた長原7Bi層の厚さが7〜8㎝なので、20㎝弱であったものと考えられる。



写真4　NG87−70次SD701



写真5　NG89−69次SR6b04

c．飛鳥〜奈良時代の遺構と遺物

NG87−70次調査

長原6Bi層基底面で、東西方向に延びる溝SD701が検出された(図45上・写真4)。南肩がわからないので幅はわからないが、深さは0.3m以上ある。埋土は褐灰色粘土で、長原7Ai層準の遺構に位置づけられる。

長原6Bi層上面では畦畔SR6b02と堤状の盛土SR6b03が検出された(図45中・図版5上、註1)。また、長原6Bi層基底面で東西方向の高まりが検出され、長原6Bi層準の耕作による削り残しと考え、

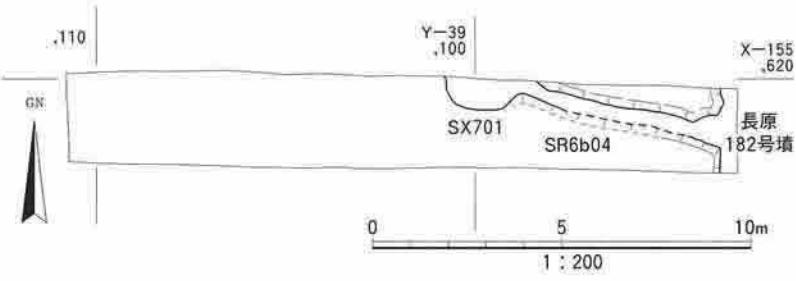


図46　NG89−69次飛鳥時代水田平面図

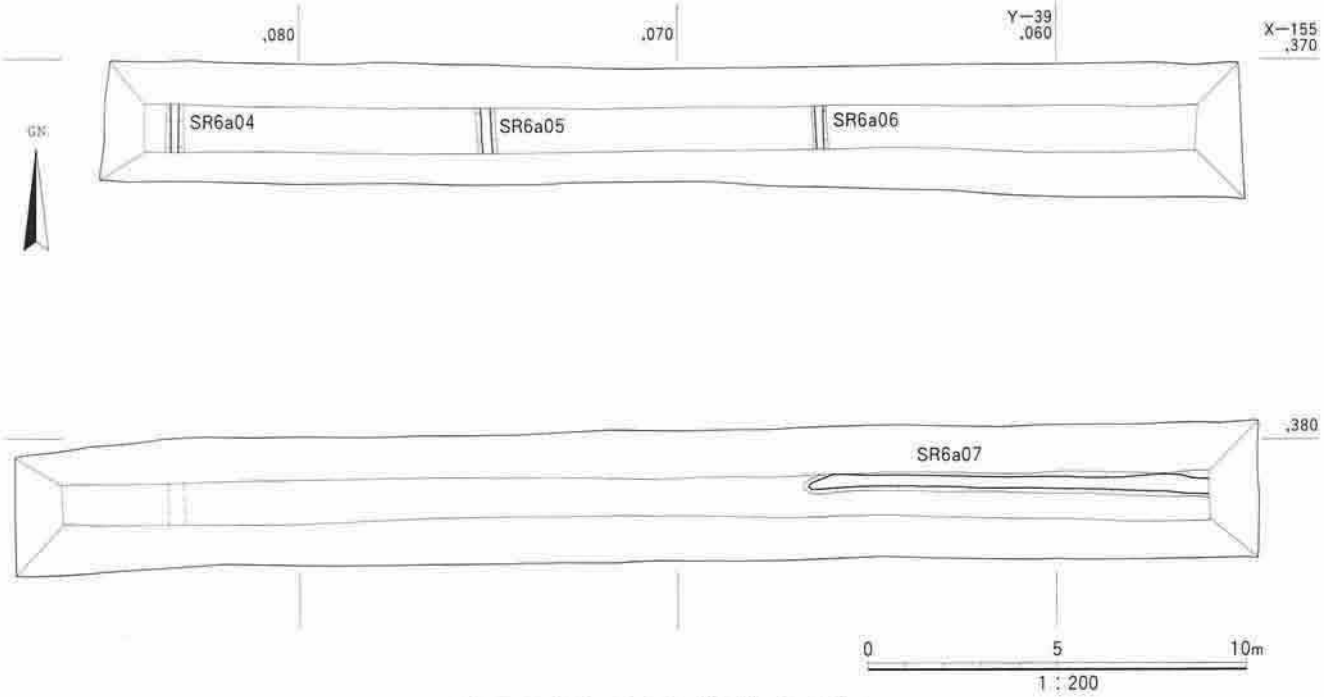


図47　NG92−45次奈良時代水田平面図

SR6b01と命名した。SR6b01は基底部の幅が1.4～1.6mあり、本来はSR6b02に繋がっていたと思われるが、上面が残っていないことから長原6Ai層準の耕作で削られたのであろう。SR6b03は幅1.4m以上、高さ0.5mあり、灰色粘土と砂で構築されていた。南側の状況はわからないが、両側に堤を設けた水路の一部ではないかと思われる。

長原6Ai層上面で畦畔SR6a01・6a02および堤状の盛土SR6a03が検出された(図45下・図版5中)。SR6a01は調査地北壁に沿って延び、SR6a02はこれに直交する方向に延びる。これらの畦畔で区切られる南東側の水田上面には轍の痕跡と思われる細い溝がゆるい弧を描くように残っていた。SR6a03はSR6b03が残ったもので、長原6Ai層準のものではない。この段階には機能していなかったと思われる。

NG89−69次調査

長原6Bi層上面で長原182号墳とSX701の間に取り付く畦畔SR6b04が検出された(図46・写真5)。

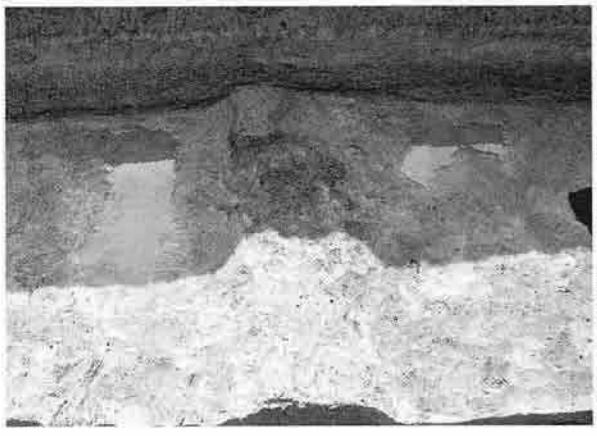


写真6　NG92−73次SR6a11



写真7　NG92−92次1区SR501埴輪出土状況

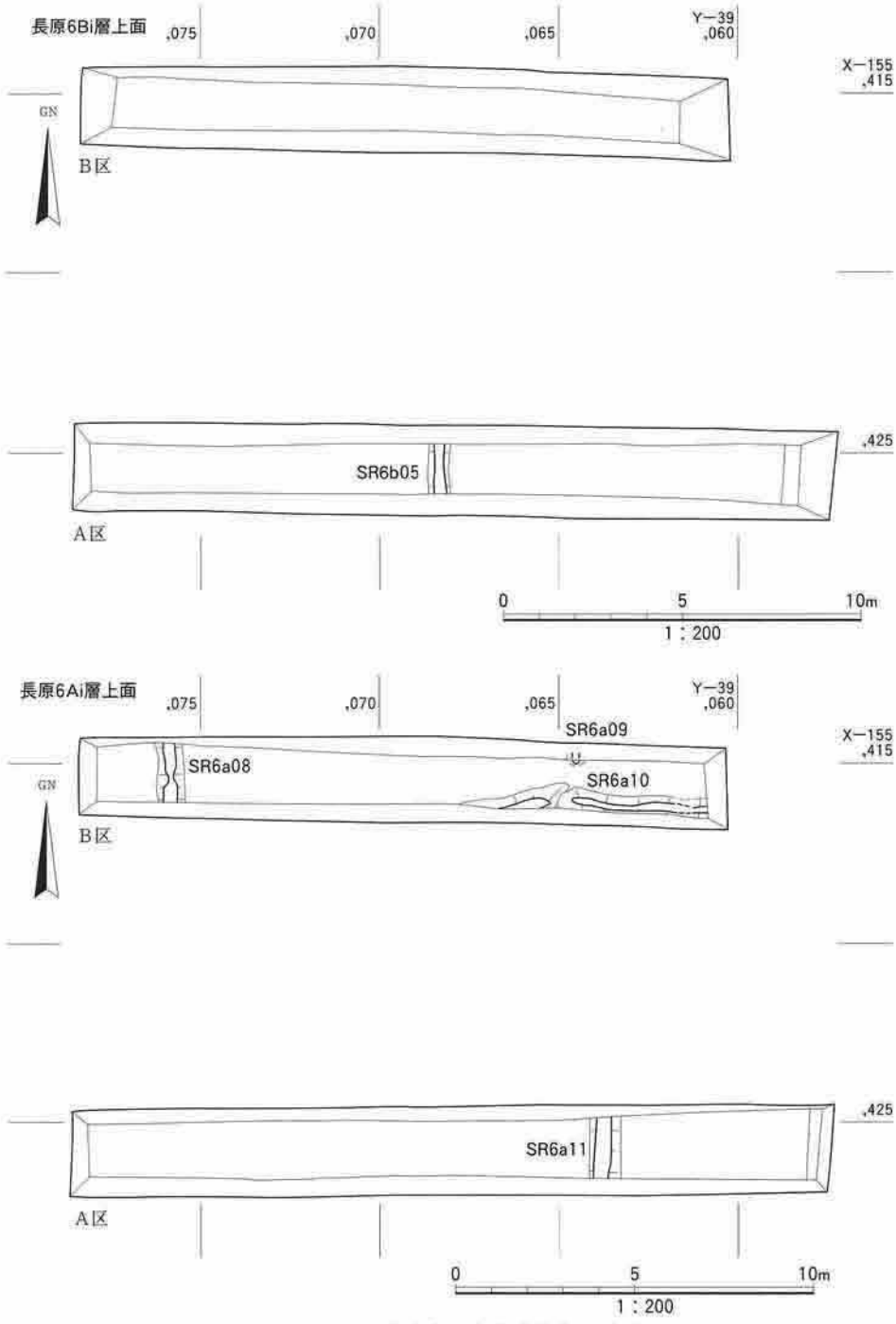


図48　NG92−73次飛鳥〜奈良時代水田平面図

東で南に10°ほど振っており、幅0.5m、高さは0.06m以下である。なお、長原6Ai層上面は長原5層準の洪水によって削られていて、畦畔は検出されなかった。

NG92−45次調査

長原6Bi層上面では水田畦畔が検出されたが、長原6Ai層準の耕作で削られ、残りが悪かったため、図示していない。また、長原6Ai層上面では南北方向の畦畔SR6a04〜6a06、東西方向のSR6a07が検出された(図47・図版8上)。幅0.4〜0.5m、高さ0.1mで、いずれも延びる方向はほぼ正方位である。SR6a04〜6a06の間隔は8.3〜8.7mあり、畦畔を境に西側の水田面が東側より数cm高い作りになって

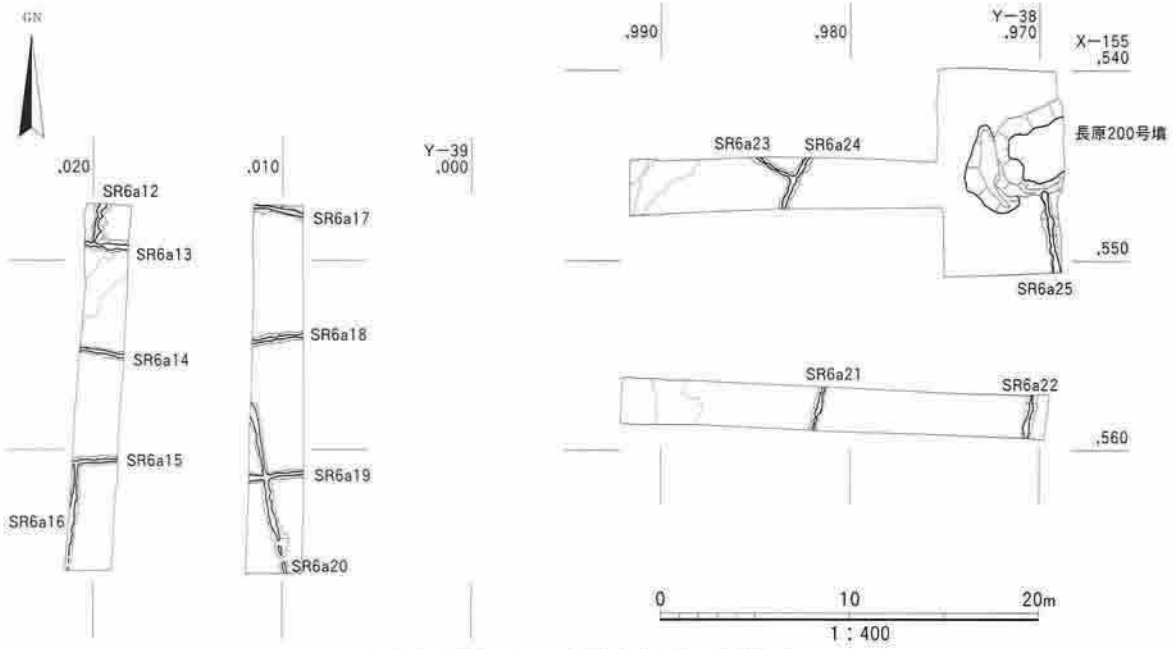


図49　NG92－92次奈良時代水田平面図

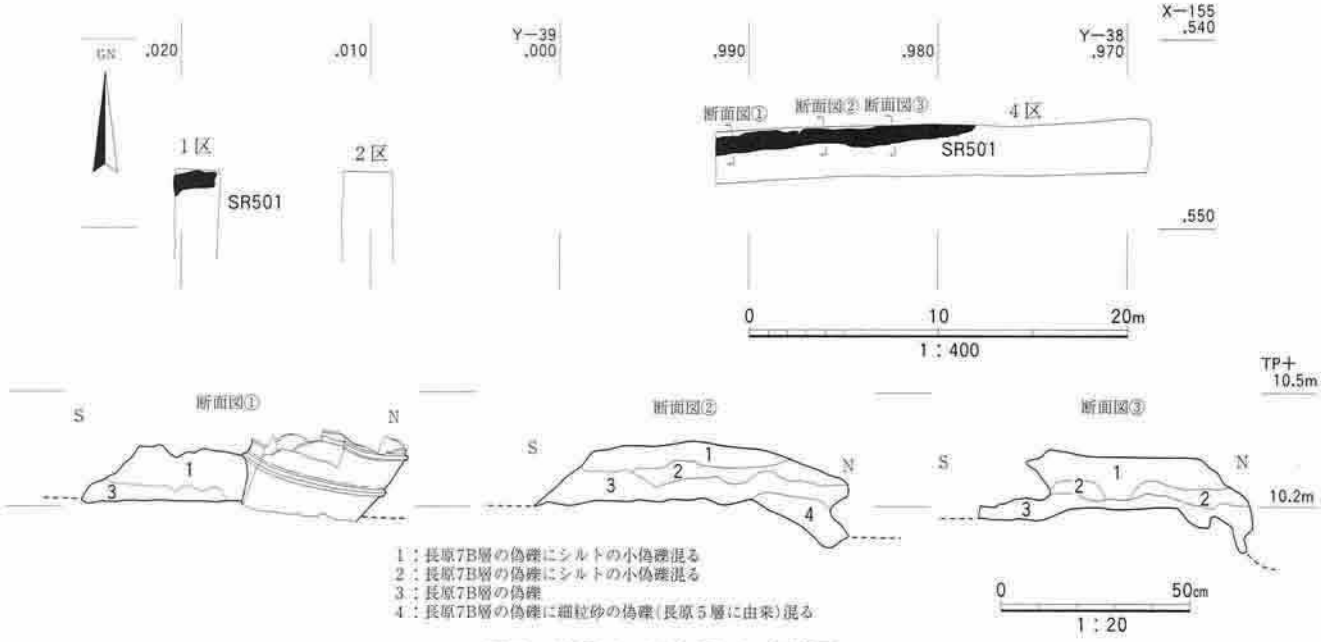


図50　NG92－92次SR501実測図

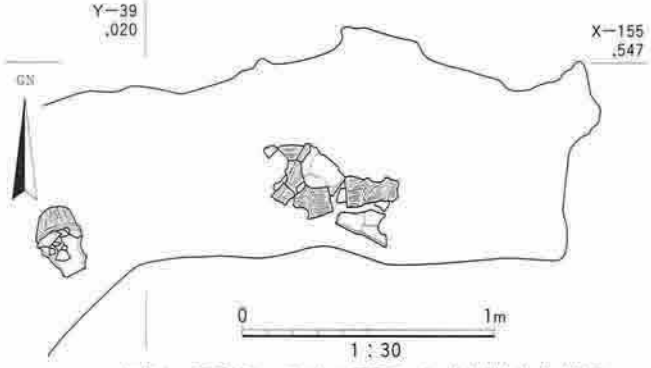


図51　NG92－92次１区SR501内埴輪出土状況

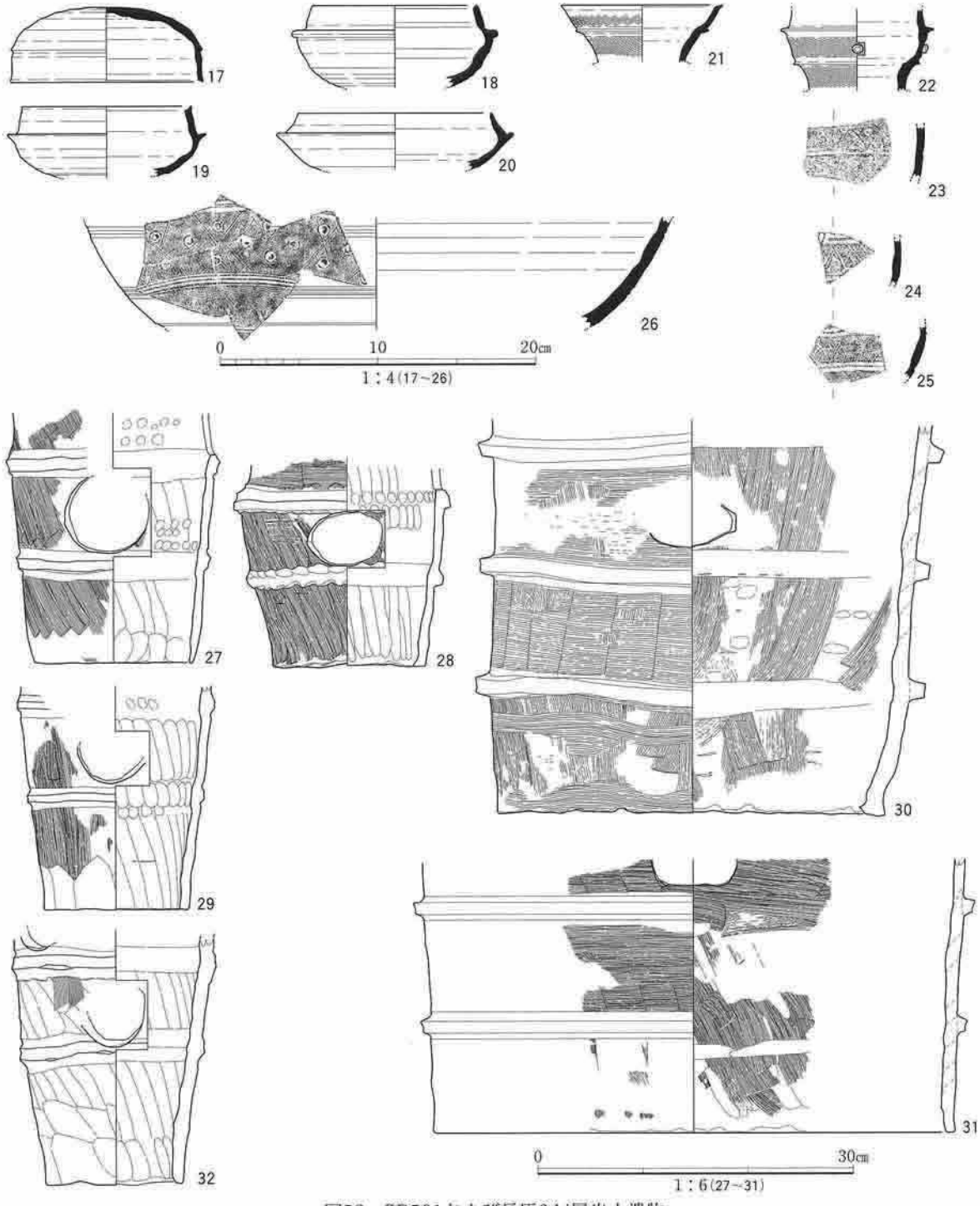


図52　SR501および長原6Ai層出土遺物

SR501(17～31)、長原6Ai層(32)

いる。

NG92－73次調査

長原6Bi層上面で畦畔SR6b05が検出された(図48上)。幅0.5m、高さ0.05mである。この畦畔を境にして西側の水田面が東側より数cm高くなっている。

また、長原6Ai層上面でも水田畦畔が検出された(図48下・写真6)。SR6a08・6a11は幅0.8m、高さ0.05m以下である。東西方向の畦畔SR6a10は水口が存在する。水田面は畦畔を境に北東が低く、

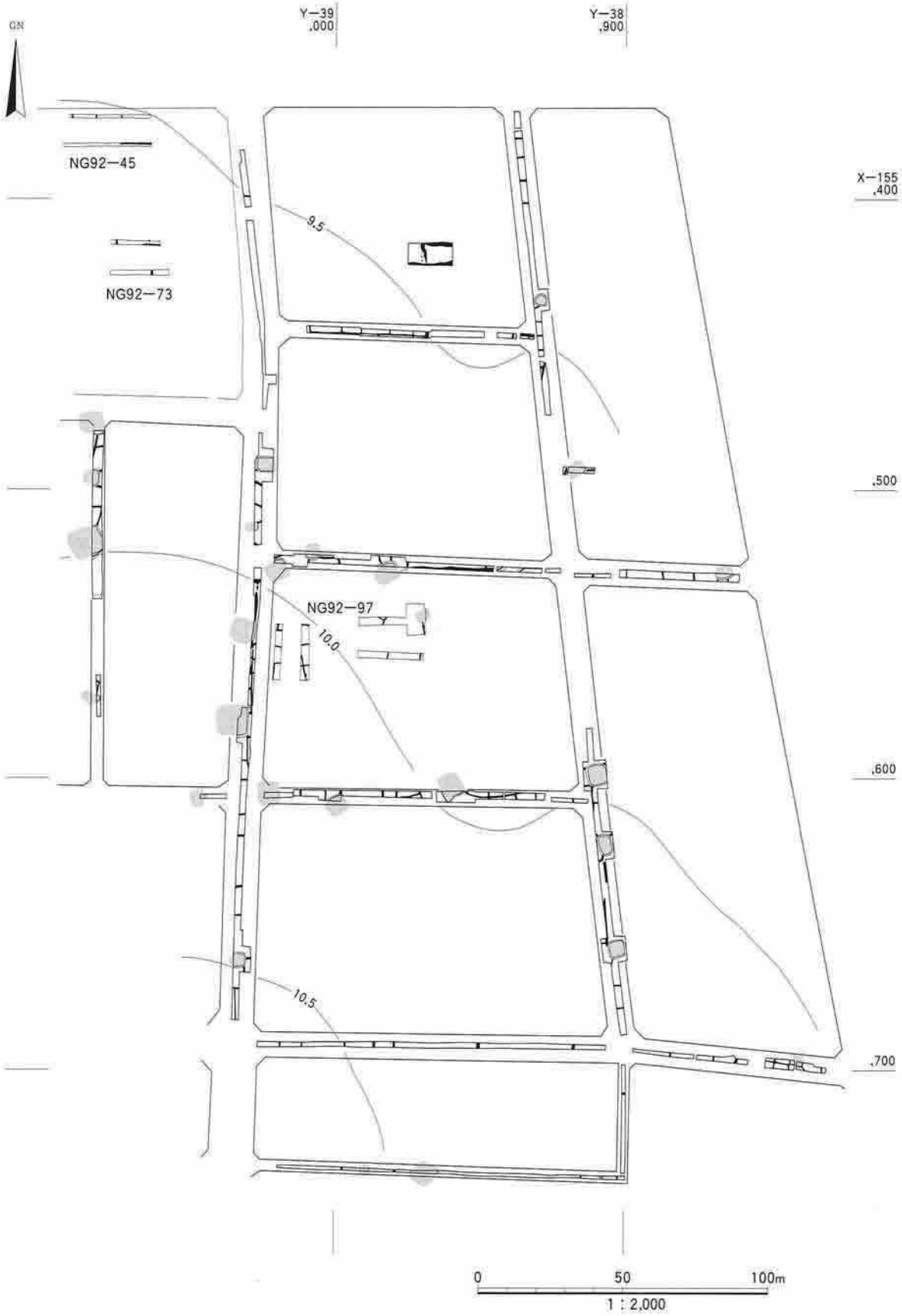


図53　長吉長原４丁目一帯の奈良時代水田（[大阪市文化財協会1993a]の図168を一部改変）

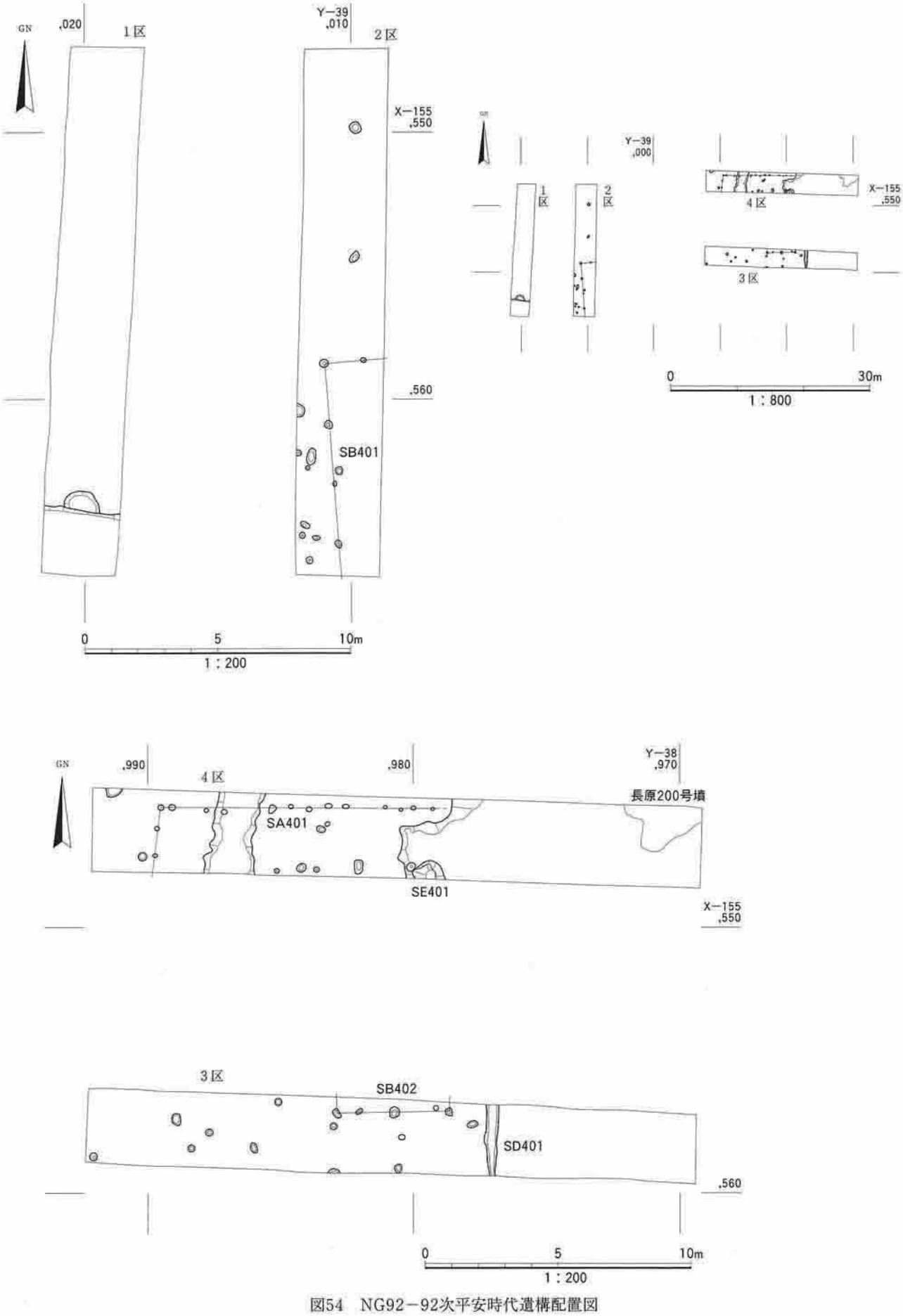


図54　NG92−92次平安時代遺構配置図

南西が高くなっている。

NG92－92次調査

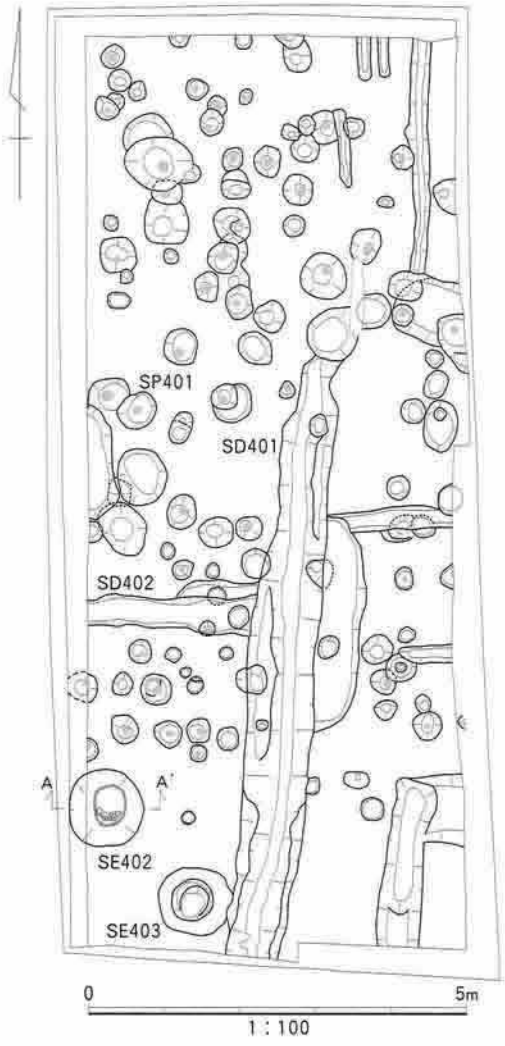
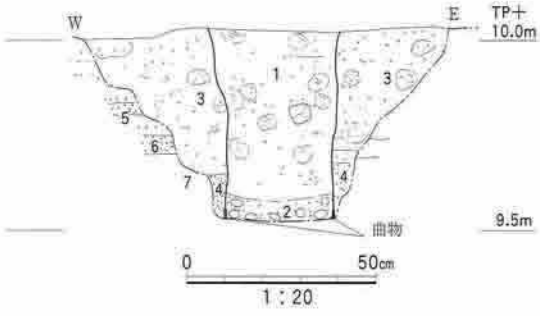


図55　NG94－67次平安時代遺構配置図
（網掛けは柱痕跡を示す）



1：偽礫を多く含む暗灰黄粗粒砂質シルト
2：偽礫を多く含む緑黒色粗粒砂
3：偽礫を含む黄褐色シルト質粗粒砂
4：緑灰～オリーブ黒色粗粒砂砂混り粘土質シルト
5：黄褐色細粒砂～粗粒砂（長原5A層）
6：緑灰色極細粒砂（長原5B層）
7：オリーブ黒色粘土質シルト（長原6Ai層）

図56　NG94－67次SE402断面図

水田畦畔が検出された(図49・図版７上)。畦畔の幅は0.3～0.5m、高さは最大で0.2mある。北約20mに位置するNG84－48次調査地では幅0.6～0.8mある大畦畔が検出されていることから[大阪市文化財協会1992c]、当調査地のものは小畦畔である。なお、いずれの畦畔も正方位ではない。SR6a25は長原200号墳の墳丘に取り付いていた。

また、１・４区において長原５層途中面で幅1.0m前後、高さ0.15mの畦状遺構SR501が検出された(図50・51、写真７)。この遺構は長原５層の砂礫層が一旦堆積した後に、長原7Bi層に由来する偽礫で盛土されている。盛土内には埴輪や須恵器が多く含まれていることから(図版７中)、近隣の古墳を破壊して盛土を築いたのであろう。また、この遺構は長原５層準の洪水で被災した後の水田復興のための大畦畔、もしくは洪水の流路を遮断するための築堤などが考えられるが、いずれにしても引き続き起こった洪水によってその役目を果たさずして埋没したのであろう。

盛土内からは須恵器杯身18～20、杯蓋17、壺21、筒形器台22、高杯形器台26や円筒埴輪27～31が出土した(図52)。須恵器23～25は細片で、凹線や線刻の格子文などが施されていて、高杯形器台の一部かもしれない。埴輪はすべて窖窯焼成で、30・31は大型品である。また、32は長原6Ai層から出土した(図52)。

ｅ．平安時代の遺構と遺物

NG92－92次調査

長原４層基底面で掘立柱建物・柵・井戸が検出された(図54)。

SB401：２区南部で検出された掘立柱建物で、梁行２間以上(柱間1.5m)、桁行３間以上(柱間2.3m)である。個々の掘形は円形で、直径は0.2～0.3m程度である。

SB402：３区で検出された掘立柱建物で、梁行２間

分(柱間2.2m)のみが調査区内にかかった(図版７下)。

SA401：４区で検出された柵で、東西8.3m以上、南北２m以上を検出した。個々の直径は0.1～0.15mほどで、掘形が削平されているか、杭を打込んだものと考えられる。

SE401：４区南壁際で検出された井戸で、深さ約0.7mである。曲物を井戸側として用いており、最下段の１段だけが遺存していた。

以上の遺構のほかにもピット・溝などが検出された。これらの遺構から出土する土器は、土師器・須恵器・黒色土器で瓦器を含まない。このことから本調査地は平安時代の集落の一部に当ると考えられる。

NG94−67次調査

長原4C層基底面で井戸や溝、多数の柱穴が検出された(図55・図版８中)。柱穴の多くは柱痕跡が残っているものであったが、柱の組合せはわからなかった。井戸は２基検出した。直径は0.4～0.5mで、SE402の底には曲物の一部が残っていた(図56・図版８下)。SE403もSE402と規模がほぼ同じであることから、本来は曲物の井戸側があった可能性が高い。



写真８　NG94−67次SP401遺物出土状況

SD401は幅0.9m、深さ0.2mあり、北側ほど次第に浅くなり、調査地中央やや北でなくなる。SD402はSD401に接続するが、埋土が共通することから同時に存在していたことがわかる。

出土遺物には緑釉陶器碗33・土師器杯A34・黒色土器A類椀35・同B類椀36がある(図57)。33は重機掘削中に出土したものである。高台径は6.3cmあり、見込みに花文を削り出している。そのつくりから９世紀後半に平安京周辺の窯で焼かれたと考えられる[久保和士1995]。34は長原4C層から出土したもので、外面には横方向のヘラミガキが施される。平城宮土器Ⅴに位置づけられ、長原５層から遊離したものと思われる。35・36はSP401の掘形から出土した(写真８)。35は内面に細かいハケメが残り、外面はユビオサエとナデで仕上げる。36は全面にヘラミガキを施している。これらは平安時代Ⅲ期古段階に位置づけられる。

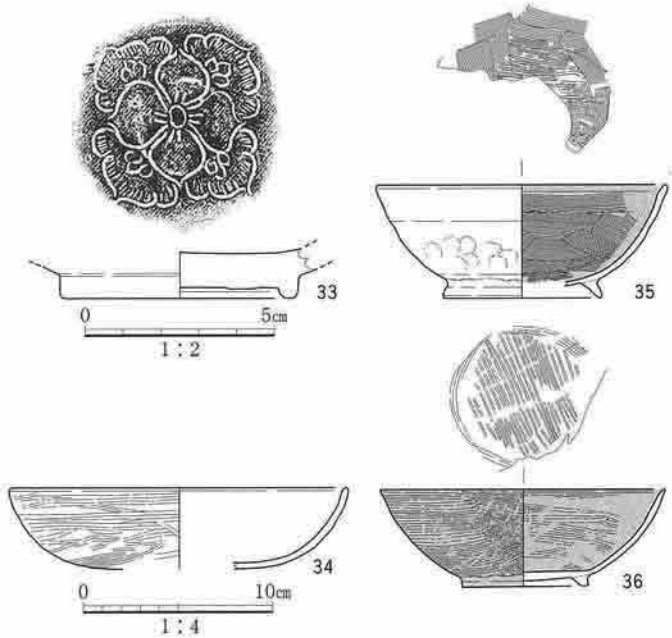


図57　NG94−67次出土遺物

重機掘削中(33)、長原4C層(34)、SP401(35・36)

3）まとめ

古墳時代の本地域は古墳群で占められる、本節で報告した**長原155～159・182・200号墳**のように、一辺が10m以下の方墳が多く、時期のわかるものの多くは長原３期に属する。また、**長原200号墳**は主体部が残っている希有な例である。

飛鳥～奈良時代になると本地域一帯は水田になる。図53は長原6Ai層上面の水田の広がりを示したものである。この地域は南東が高く、北西が緩やかに低くなる地形を呈する。畦畔は古墳が多く分布する地域(X－155,500以南)では、正方位をとり、かつ連続的に延びるものは見られない。古墳の高まりを残しながら、開発が進められたことがわかる。一方、古墳が希薄になる地域(X－155,500以北)ではほとんどの畦畔が正方位に延びるようになる。

長原５層準の洪水後、当地にはしばらく人が住んだ痕跡は見られないが、11世紀前半頃(平安時代Ⅲ期)になると長原遺跡一帯で建物遺構などが見られるようになる。本節で報告したNG92－92次や94－67次はこの時期の集落関係の遺構になる。　(寺井)

註)

(１)本節で報告対象の長吉長原４丁目一帯では長原6Bi・6Ai層準の両方で多くの畦畔を検出した。遺構番号の煩雑さを避けるため本節に限って、長原6Bi層準なら上２桁を**6b**、長原6Ai層準なら**6a**を冠し、下２桁には各層準での通し番号を振った。

第4節　NG86−62および93−91次調査

1）調査地と周辺の概要

本節では長原遺跡西地区のNG86−62および瓜破遺跡東南地区のNG93−91次調査を報告する（図58）。当地域は「馬池谷」の西側で、飛鳥時代の掘立柱建物群が多く見つかっていることで知られている［大阪市文化財協会2001b：pp.74−80］。

NG86−62次調査は城東貨物線下を横断する下水管渠施設（シールド工法）に伴う竪坑部分の調査である。貨物線の東側（発進坑）と西側（到達坑）にそれぞれ36㎡、9㎡のトレンチを設定して調査を行った。その結果、東側のトレンチでは大きく攪乱されて、包含層の残りは悪く、西側のトレンチでは長原2〜4層の作土層を確認したが、顕著な遺構は検出されなかった。

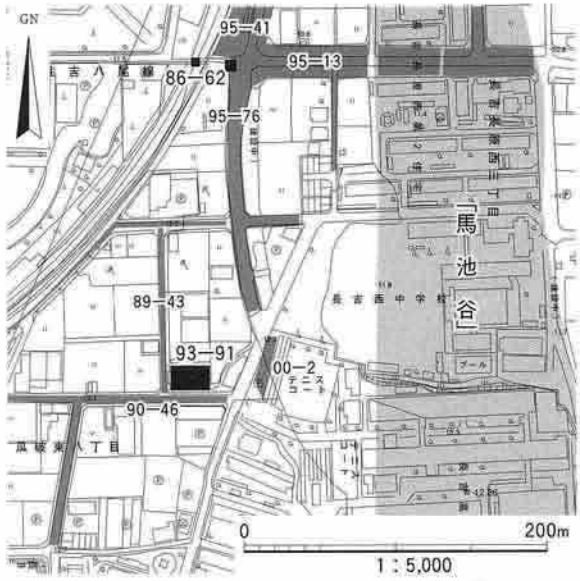


図58　NG86−62および93−91次調査地位置図

NG93−91次調査は、試掘調査（NG93−79次）で遺構が見つかったために実施された。本調査では、中世〜現代の包含層を確認し、中世の溝などを検出した。

表11　NG93−91次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	90					近・現代
1	1	現代作土	10	作土				
2	2	暗オリーブ褐色砂質シルト	5	作土		▼SE201·SK201·202	近世磁器・陶器	江戸時代
3	3	にぶい黄褐色砂質シルト	10	作土			瓦器・土師器・須恵器	室町時代
4	4	黄褐色粘土質シルト	10	作土		▼SP401·SD401〜403	土師器	鎌倉時代
5	14	黄橙色シルト〜粘土						旧石器時代

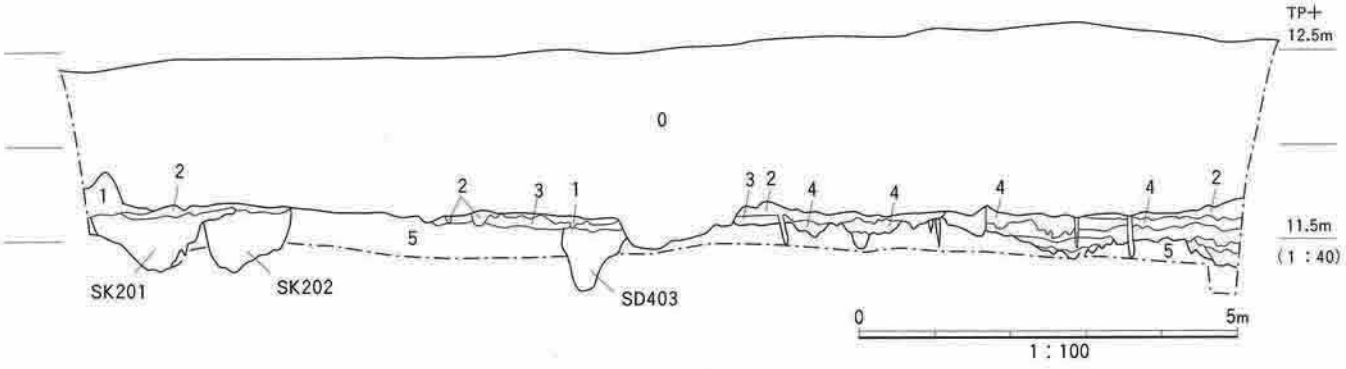


図59　NG93−91次北壁断面図

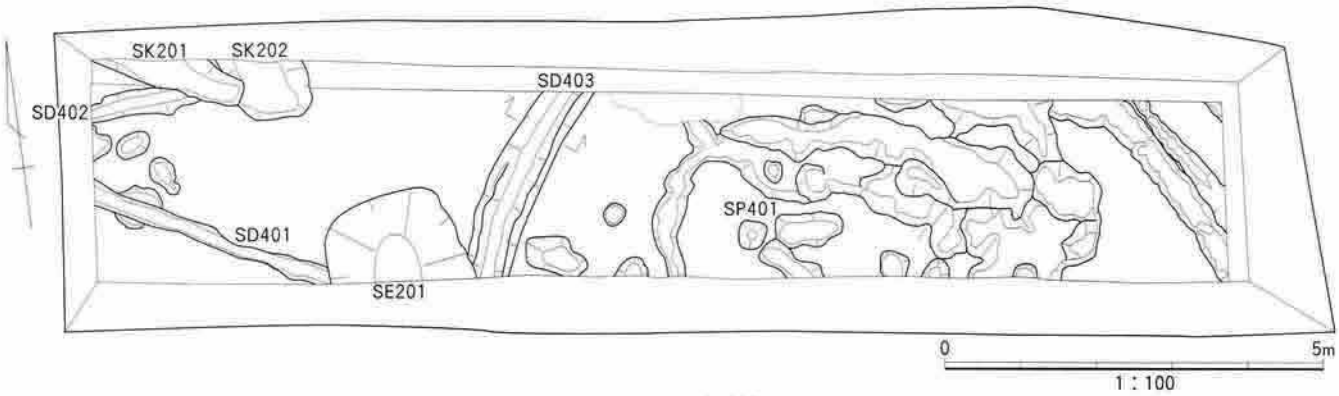


図60　NG93－91次遺構配置図

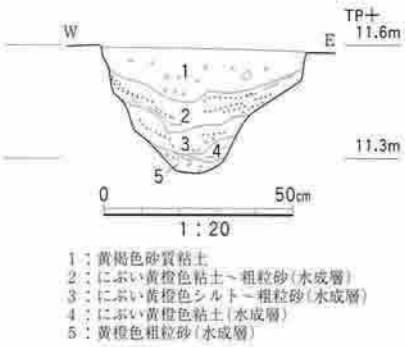


図61　NG93－91次SD403断面図

2）調査の結果

i）層序

NG93－91次調査地の北壁で地層を確認した（図59・表11）。長原２～４層は合計しても厚さ20㎝程度である。東側の地山が低くなるのは、当地が小丘陵の東斜面に位置するためである。

ii）遺構と遺物

NG86－62次の西側トレンチでは長原２～４層準の耕作溝が３面で見つかった。いずれも東西方向であった。

NG93－91次調査では、長原２～４層基底面で中世以前の柱穴、中世の溝、近世の井戸・土壙といった遺構が検出された（図60）。

SP401：一辺0.3～0.4mの隅丸方形を呈し、深さが0.2mある柱穴である。柱痕跡は直径0.1mあまりで、柱が抜取られた痕跡があった。ほかに組合う柱穴がなく、時期も不明である。

SD401：幅0.2m、深さ0.1mの溝である。埋土は明黄褐色の砂質シルトで非水成層である。遺物は出土していないが、中世のものと思われる。

SD402：幅0.3m、深さ0.2mの溝である。水流の痕跡はない。中世のものと思われる。

SD403：幅0.5m、深さ0.3mの溝である。埋土には水流の痕跡があり、遺物には少量の瓦器・土師器が含まれていた（図61）。

SE201：東西1.9m、南北1.2m以上の隅丸方形を呈し、深さは0.5mある。埋戻されており、近世磁器や瓦が出土した。

SK201・202：調査地の北西隅で検出した浅い土壙である。SK201から近世磁器の破片が出土した。

3）まとめ

近隣では飛鳥時代の掘立柱建物が多く見つかっているが、本節の調査では検出されなかった。中世の溝SD403は水流の痕跡があったことから、灌漑用の溝と思われる。なお、100m北東のNG97－49次調査では平安時代Ⅲ期古段階の灌漑遺構が見つかっており［大阪市文化財協会2001b：pp.58－64］、この時期以降、馬池谷の西側の瓜破台地上は耕作地として利用されていたと思われる。　（寺井）

第Ⅲ章　西地区の調査

第１節　NG84－25次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では長吉長原西１丁目のNG84－25・86－59・90－66次、および長吉長原１丁目のNG86－91・89－36次調査を報告する（図62）。NG86－91・89－36次調査は本来なら長原遺跡中央地区に含まれるが、NG84－25次調査地に近接していることから本節で報告することにした。

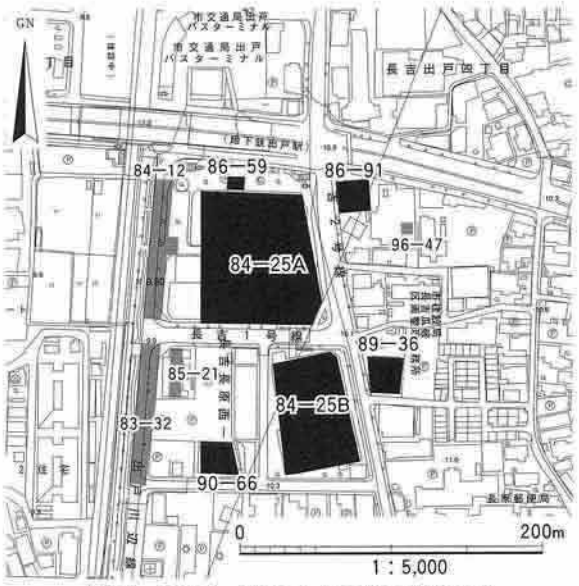


図62　NG84－25次などの調査地位置図

NG84－25次調査は地下鉄出戸駅前の再開発ビルに伴って行われた8,600㎡の大規模な調査である。まず、北側のＡ区が着手され、そこが終了してから南側のＢ区の調査が行われた。調査の結果、Ａ区では造出しを有する方墳２基を含む７基の古墳（**長原113～119号墳**）が、Ｂ区では掘立柱建物・溝・井戸などの古墳時代中～後期の集落遺構が多数検出された。Ｂ区の調査終了に伴い、1985年５月12日には現地説明会が行われた。

NG86－59次調査は出戸駅前再開発ビルの北側正面に、出戸駅の出入口を建設する工事に伴って行われた。小面積の調査であるため顕著な遺構は見つからなかったが、須恵器や埴輪片が出土した。写真９は長原4B層準の耕作溝である。

NG86－91次調査地は長居公園通の南に位置し、NG84－25次Ａ区の北東に当る。工事深度はGL－1.9mであったが、それ以下で古墳が検出されたため、その部分だけGL－1.9mよりも深く調査した。調査の結果、主体部を２基有する方墳（**長原166号墳**）が検出され、主体部からはミニチュアの鉄製農工具や金環などの副葬品が出土した。この成果の一部は[高井健司1987b・1988・1989]ですでに報告されている。


写真９　NG86－59次長原4B層準の耕作溝

NG89－36次調査地はNG84－25次Ｂ区の道路

表12　NG84－25次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0～3		●	盛土・作土		←島畠		室町～現代
2	3～4A	灰白～灰色砂層	>50	作土・水成		←畦畔		鎌倉時代
3	4B	明褐灰色シルト	10	作土				
4	4B	明褐灰色粘土質シルト	30	作土				
5	5	黄褐色粗～中粒砂	10	水成		←畦畔		
6	6Ai	灰～褐灰色細粒砂質シルト	10	作土				奈良時代
7	7Bi	黒褐～黒色シルト層	5～10			▼掘立柱建物など		古墳時代
8	13						石器	旧石器時代

表13　NG86－91次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	オリーブ黒色細粒砂～シルト		作土		←耕作溝		現代
2	2	灰オリーブ色細粒砂～シルト	20	作土		▼SK401・402、SD401		江戸時代
3	4B	明褐色細粒砂	30	水成		←動物の足跡		鎌倉時代
4	4B	灰白色シルト	20					
5	5	灰白色中～細粒砂	20	水成		←畦畔		奈良時代
6	6Ai	灰白色粘土質シルト	30	作土				
7	7Ai	黄灰色粘土	20			←長原166号墳		飛鳥時代
8	7Bi	黄灰色シルト	10					古墳時代
9	13	灰白色粘土						旧石器時代

表14　NG89－36次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	50	盛土				現代
1	1	現代作土	10	作土				
2	2	緑灰～灰白色砂礫混り粘土質シルト	10	作土				江戸時代
4a	4A	灰色砂礫	<5	水成				鎌倉時代
4b	4B	灰色砂礫混りシルト質粘土	25	作土		↓耕作溝		
5	5	浅黄色砂礫	60	水成		←畦畔		
6a	6Ai	褐灰色粘土	20	作土				奈良時代
6b	6Ai or 6Bi	褐灰色砂礫混り粘土	10	作土				
6c	6Bii	褐色砂礫	薄	水成				
7a	7Ai	褐灰色砂礫混り粘土	15	作土		↓畠畝間・轍跡		飛鳥時代
7b	7Bi	褐灰色砂礫混りシルト	10			▼溝・土壙		古墳時代
8	13	淡黄色粘土質シルト						旧石器時代

を挟んで東隣に位置する。調査の結果、鎌倉時代の井戸・溝・土壙、飛鳥～奈良時代の耕作関係遺構、古墳時代中期の集落関係遺構が検出された。

NG90－66次調査地はNG84－25次B区の西側に位置する。敷地内に南北に3本のトレンチを入れて調査を行った。調査の結果、古墳～平安時代初頭の遺構が検出された。

2)調査の結果

i)層序

NG84－25次調査地は全体的に北側が緩やかに下がる地形である(図63・表12)。第2層は上部が長原3層、下部が長原4A層に相当すると思われるが、重機で掘削したため、境界を十分観察できなかった。上面では砂を盛り上げて、島畠を作っている。

NG84－25次A区の東側に位置するNG86－91次調査地では現代作土の下で作土とそれを覆う水成

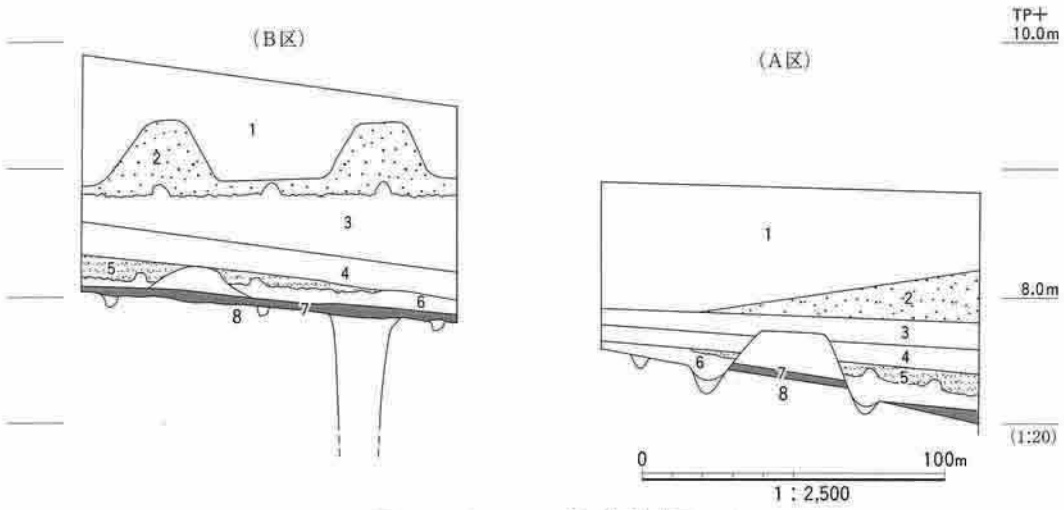


図63　NG84－25次層序模式図

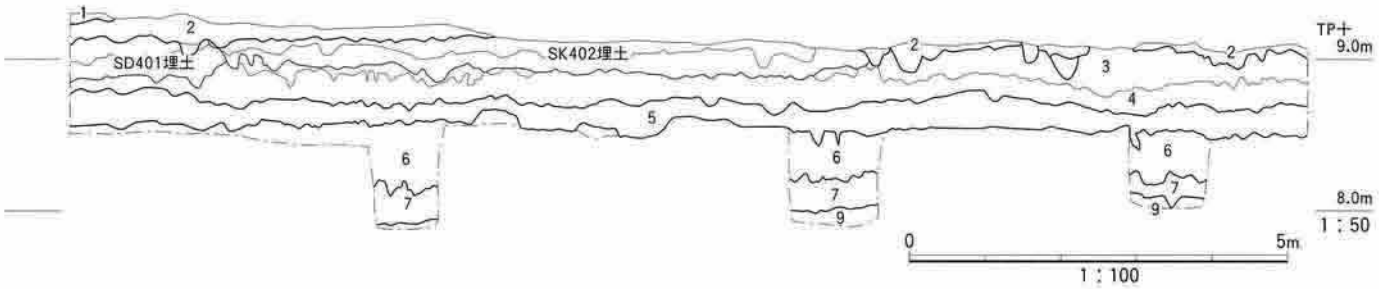


図64　NG86－91次南壁断面図

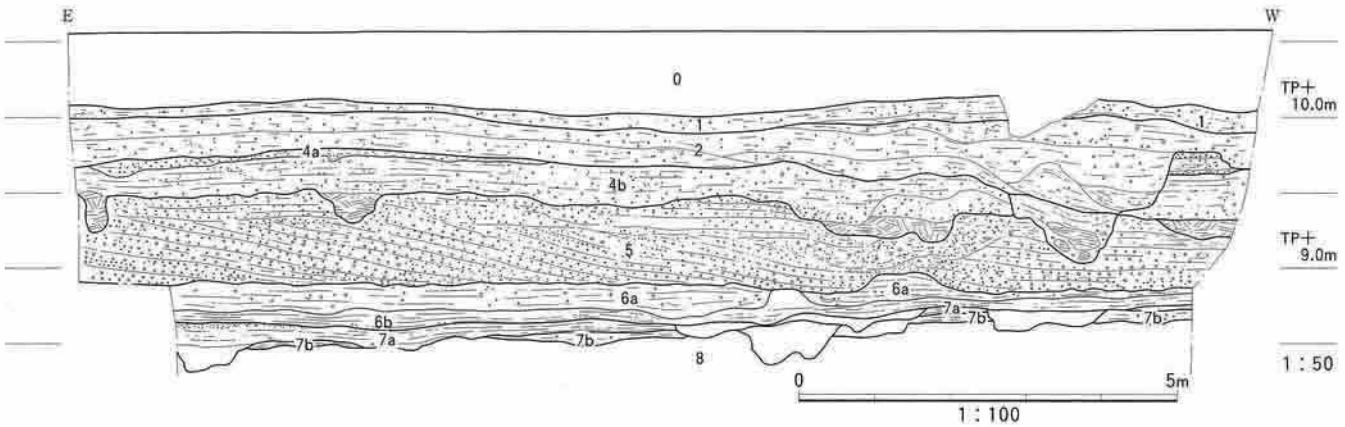


図65　NG89－36次南壁断面図

層が確認された(図64・表13)。古墳の盛土は後述するように長原２層(図64の第２層)を除去した時点で確認された。盛土の直下には長原7Bi層の暗色帯が残っていた。

NG84－25次Ｂ区の東側に位置するNG89－36次調査地では現代から長原7Bi層までの各層が良好に残っていた(図65・表14)。第6b層は長原6Ai層準で耕作された際に生じた加工時形成層の可能性がある一方で、長原6Bi層の可能性も残す。第6c層は水成の薄層で、長原6Bii層と判断した。

ii)遺構と遺物

ａ．旧石器時代の遺物

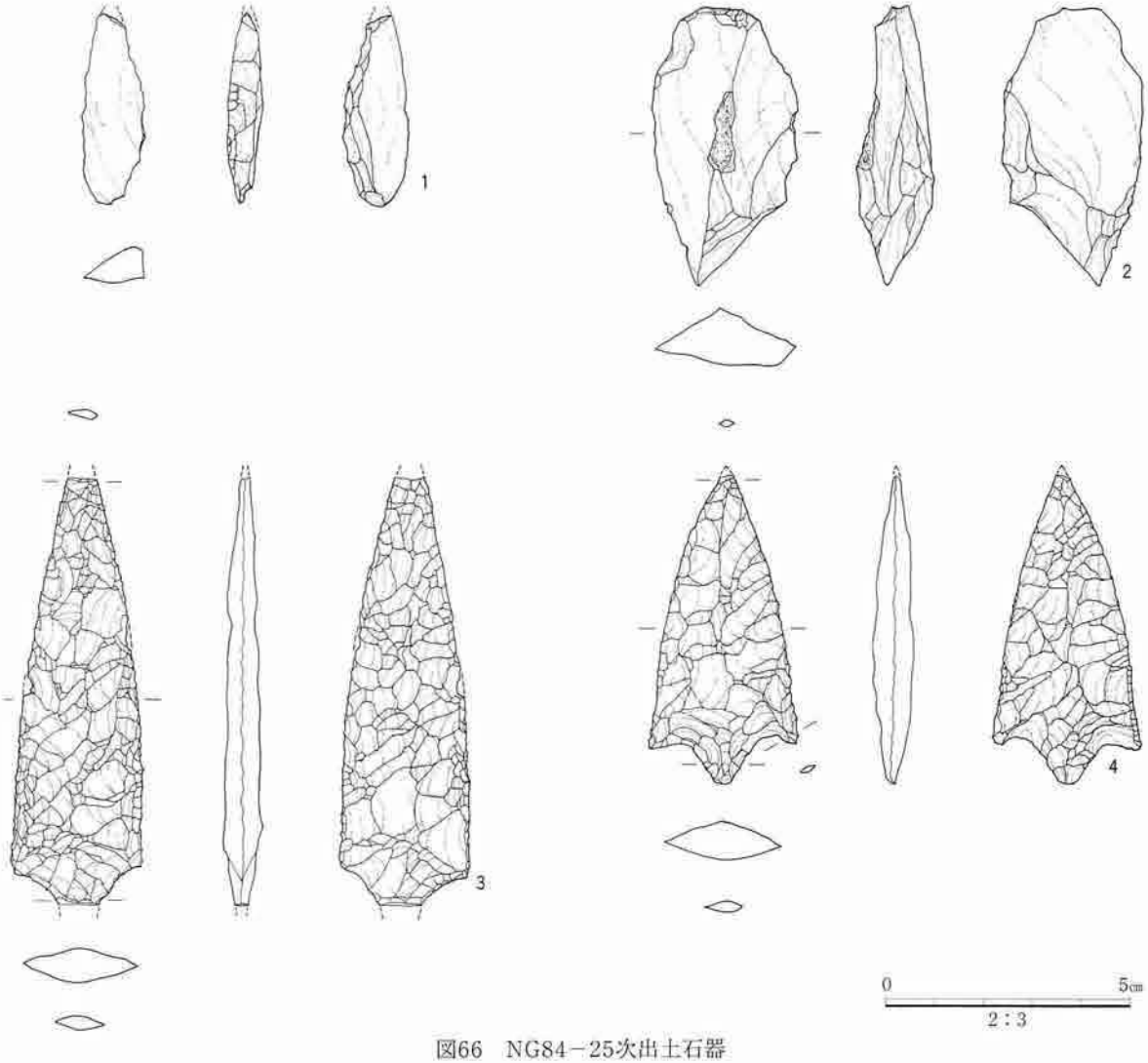


図66　NG84－25次出土石器

長原6Ai層基底面（1・3）、長原13層（2・4）

NG84－25次調査では長原13層から石器が出土し、ナイフ形石器1、横長剥片2、有茎尖頭器3・4を図化した（図66）。いずれもサヌカイト製である。1・3は長原6Ai層と長原13層の境界で、2・4は長原13層から出土した。1は横長剥片を素材とし、打面側に細部調整を施している。3は先端と基部が欠損していて、残存長は8.7㎝、4は先端がわずかに欠損していて、全長は6.2㎝である。3・4はいずれも側縁に微細な細部調整が施されている。

なお、当調査では遊離資料であるが、石鏃や石庖丁といった縄文～弥生時代の石器が多く出土した。

b．古墳時代の遺構と遺物

NG84－25次A区

古墳7基と2条の平行する溝が検出された（図67・図版9上）。

古墳はいずれも墳丘の盛土は厚さ数㎝しか残っていなかった。これらの古墳は現地説明会資料などで1～7号墳と公表されてきたが、それぞれ本節の**長原113～119号墳**に該当する。

長原113号墳（図68・図版10上）：北側に造出しを有する方墳である。墳丘は東西12m、南北14mあり、周溝の幅は約3mである。また、造出しは幅4m、長さ3mである。

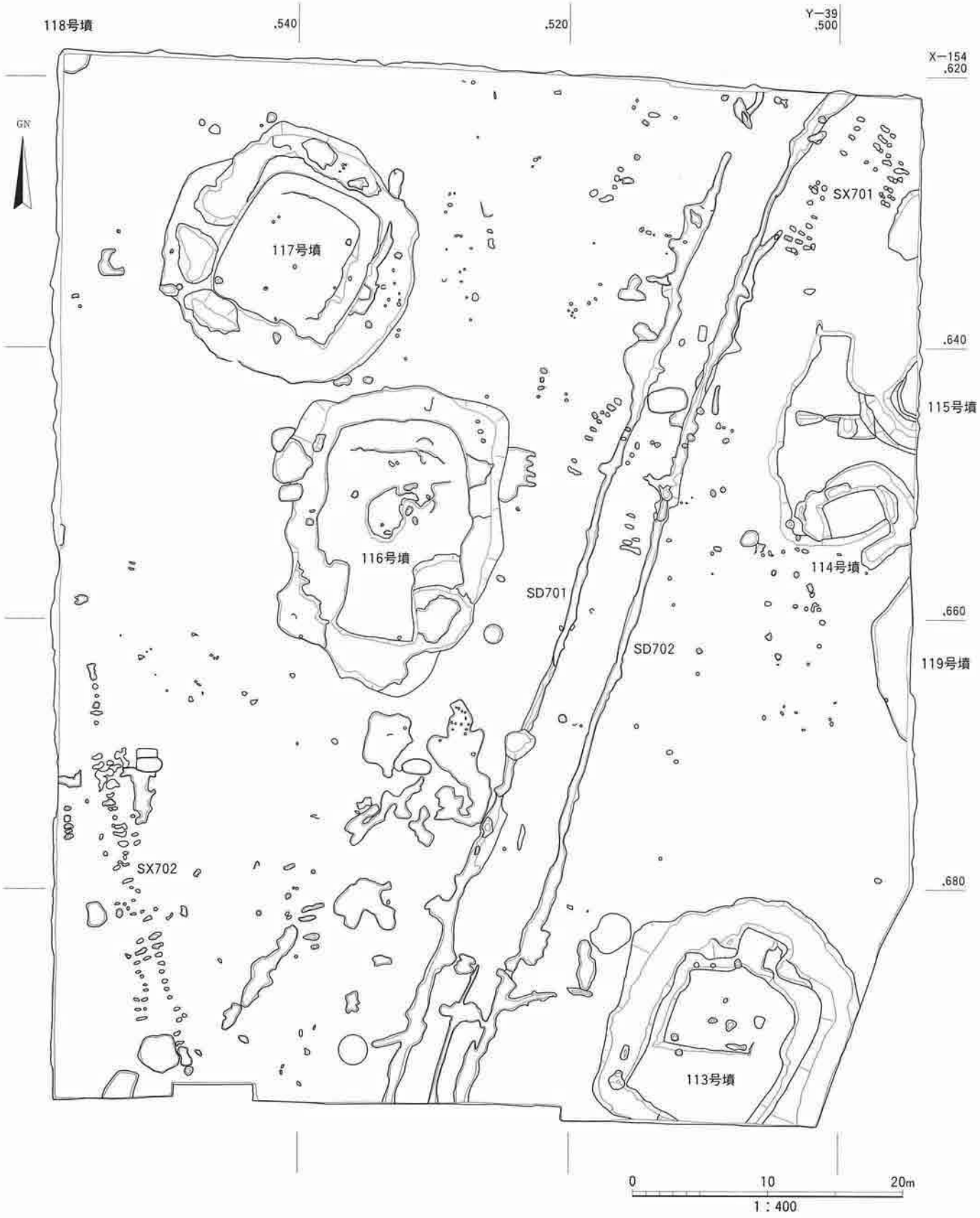


図67　NG84－25次A区古墳時代遺構配置図

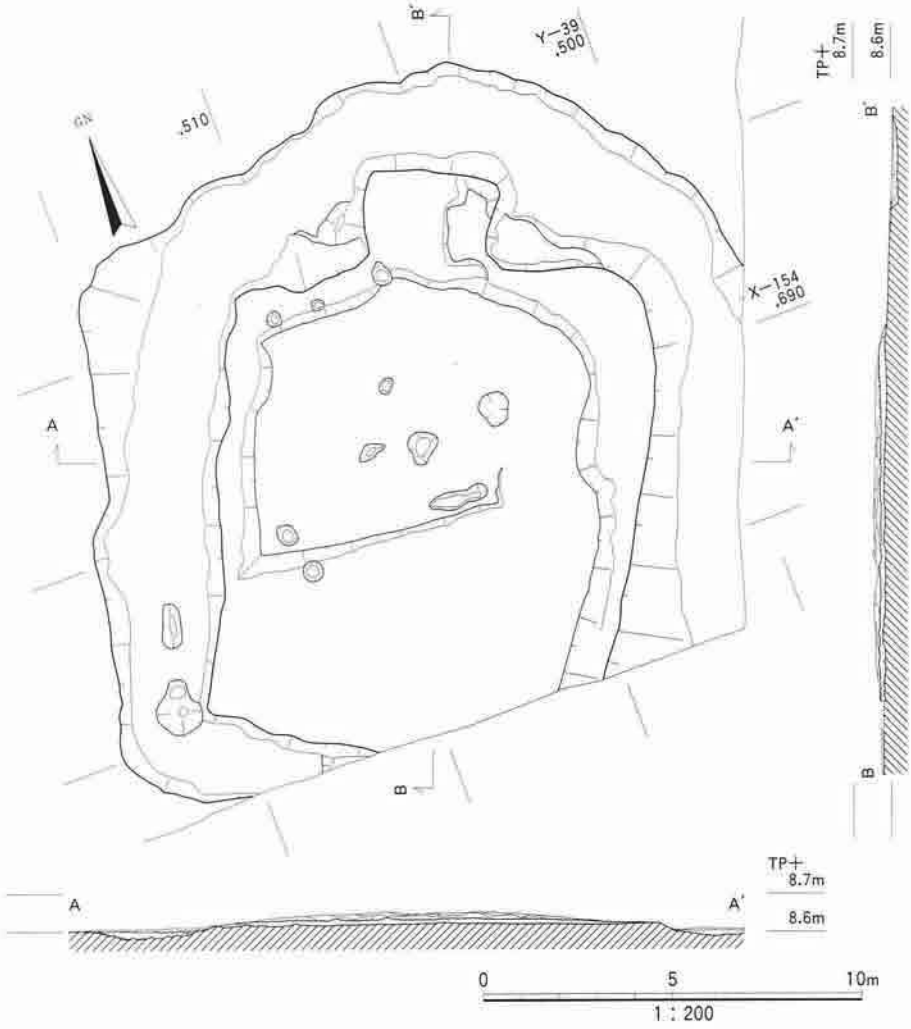


図68　NG84－25次A区長原113号墳実測図

造出しの東側付け根付近から鉄刀18が出土した。また、周溝からは須恵器や円筒・朝顔・家形・衣蓋・人物・馬形埴輪が出土し、須恵器杯身26～28、杯蓋19・20、壺5～7、円筒埴輪8・9、衣蓋形埴輪の立飾り10、人物形埴輪11、馬形埴輪12～17、鉄刀18を図示した(図69・70)。

須恵器杯および蓋は天井部に丸みがあり、裾近くまで回転ヘラケズリが及び、口縁端部は凹む。TK23型式に属する。5は口径19.5cm、器高31.8cmあり、体部は平行(擬格子)タタキで整形された後、カキメが施される。6は台付壺である。体部上半にカキメを施し、底部を平行(擬格子)タタキで整形した後、脚部を接合している。口縁部は稜で文様帯がつくられ、波状文が施される。また、脚部は2条一組の稜で文様帯がつくられ、その間に波状文を施し、三角形のスカシが穿たれる。7は口径22.8cm、残存高33cmあり、口縁部には櫛描波状文が施される。体部外

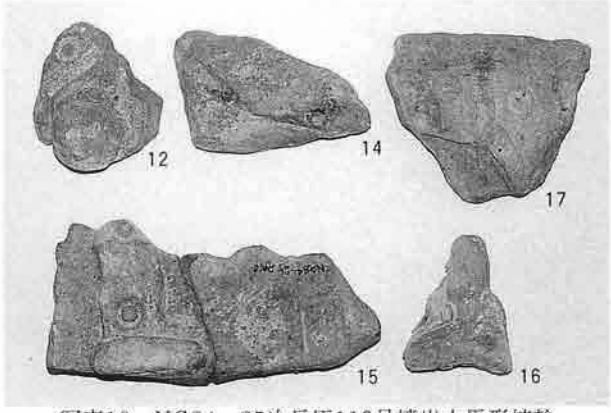


写真10　NG84－25次長原113号墳出土馬形埴輪

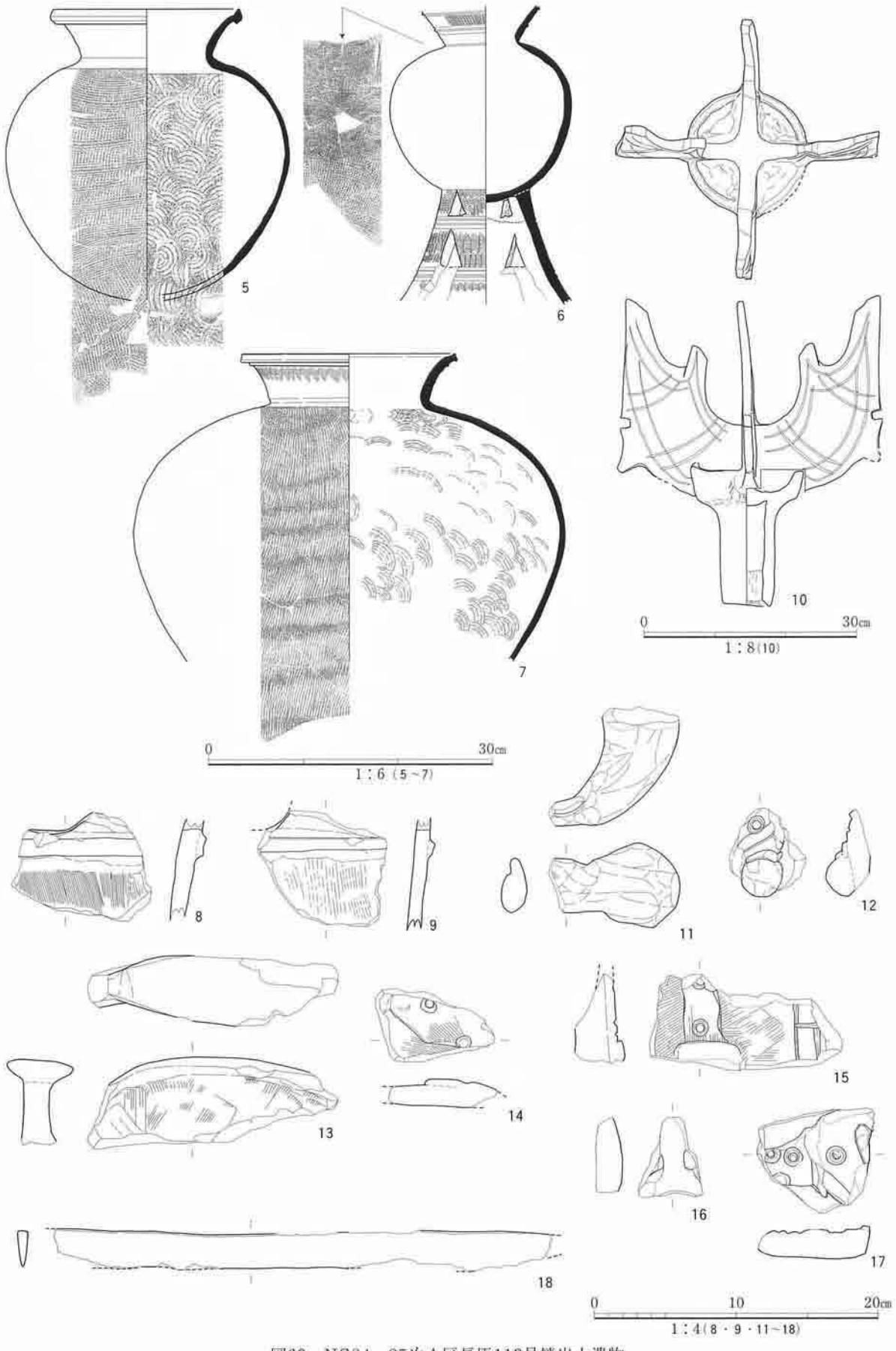


図69　NG84－25次A区長原113号墳出土遺物

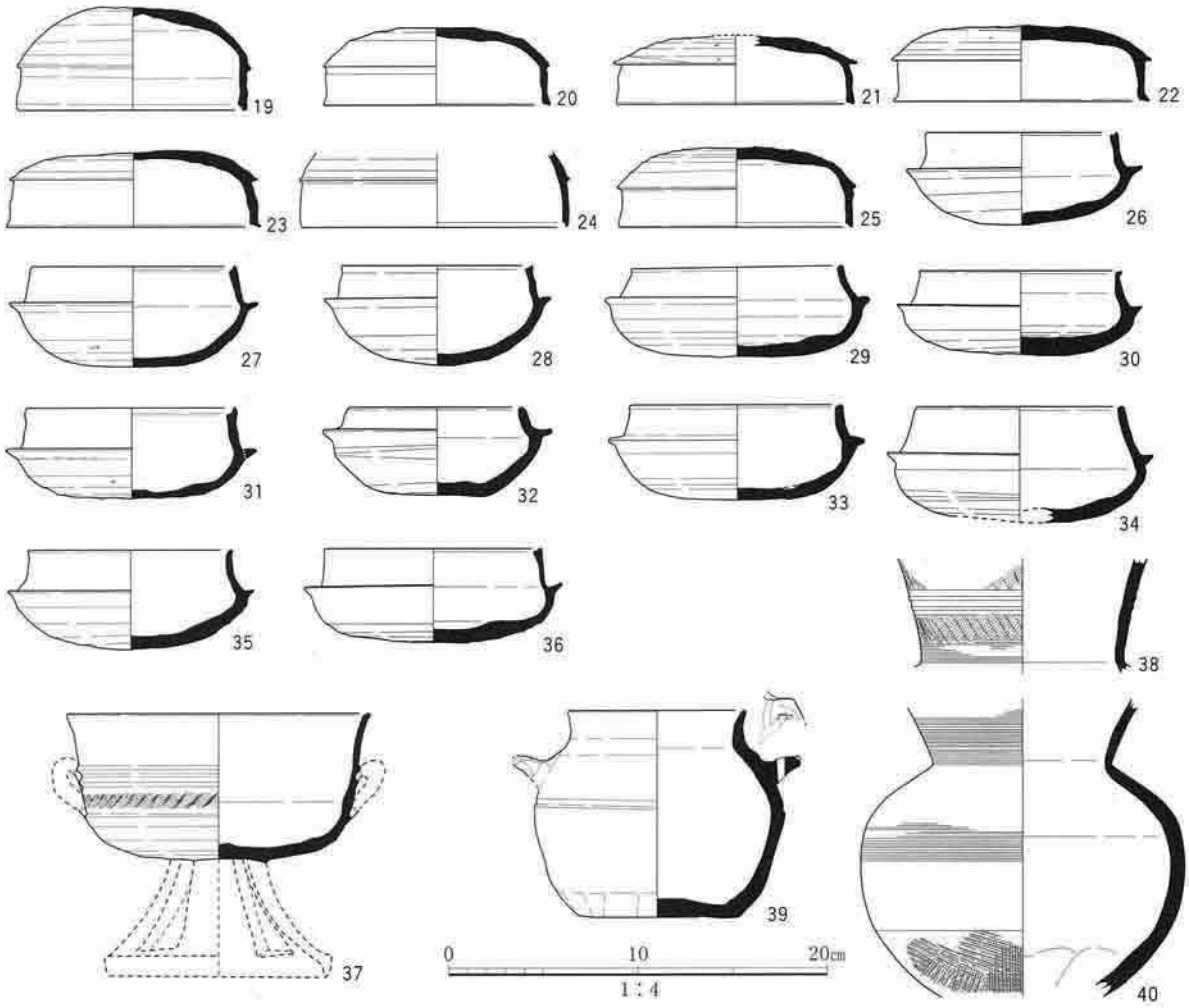


図70　NG84－25次A区古墳出土遺物

113号墳(19・20・26～28)、114号墳(29～31)、115号墳(21～23・32～35)、114・115号墳上(37)、116号墳(24・38)、117号墳(25・36・39・40)

面には平行タタキが施され、内面は同心円の当て具痕跡をナデ消している。なお、この甕の破片の一部は、約30m北西の**長原116号墳**からも出土した。

8・9はタテハケ調整が外面に見られる。10はほぼ完形に残る衣蓋形埴輪の立飾りである。内側と外側にひとつずつ鰭飾りが付き、外形に沿って2条の線刻を施した後、その内側を2条の線刻で3分している。11は人物埴輪の腕の部分である。

12～17は馬形埴輪の破片で、12以外は遊離資料であるが、本古墳に伴う可能性が高いため、ここに掲載した(写真10)。13は鬣で断面がT字形を呈する。12は鈴、14は障泥、15・16は鐙の表現がある。17は雲珠を突帯と竹管文で表現しており、中央に円孔がある。

鉄刀18は残存長35.0cm、幅2.8cmある。腐食が進行しているために細部の観察が困難であるが、切先は図の右側、刃部は下側にあったと思われる。断面は残存状況から判断した推定である。

以上の遺物から本古墳は長原3期に位置づけられる。

長原114号墳：一辺が4.5～5mの方墳で、周溝の幅は2mである。周溝から須恵器杯身29～31が出土した(図70)。29は口縁端部が丸く仕上げられ、ON46段階のものであろう。また、30・31は

TK208型式である。

以上の遺物から本古墳は長原２期に位置づけられる。

長原115号墳：**長原114号墳**の北側に位置する方墳である。調査区外に延びていることから全体の大きさはわからない。

周溝からは須恵器杯身**32**～**35**、杯蓋**21**～**23**が出土した(図70)。また、**長原114・115号墳**の検出作業中に、須恵器無蓋高杯**37**が出土した(図70)。須恵器杯身は口縁端部が丸く仕上げられており、おおむねON46段階に属する。

以上の遺物から本古墳は長原２期に位置づけられる。

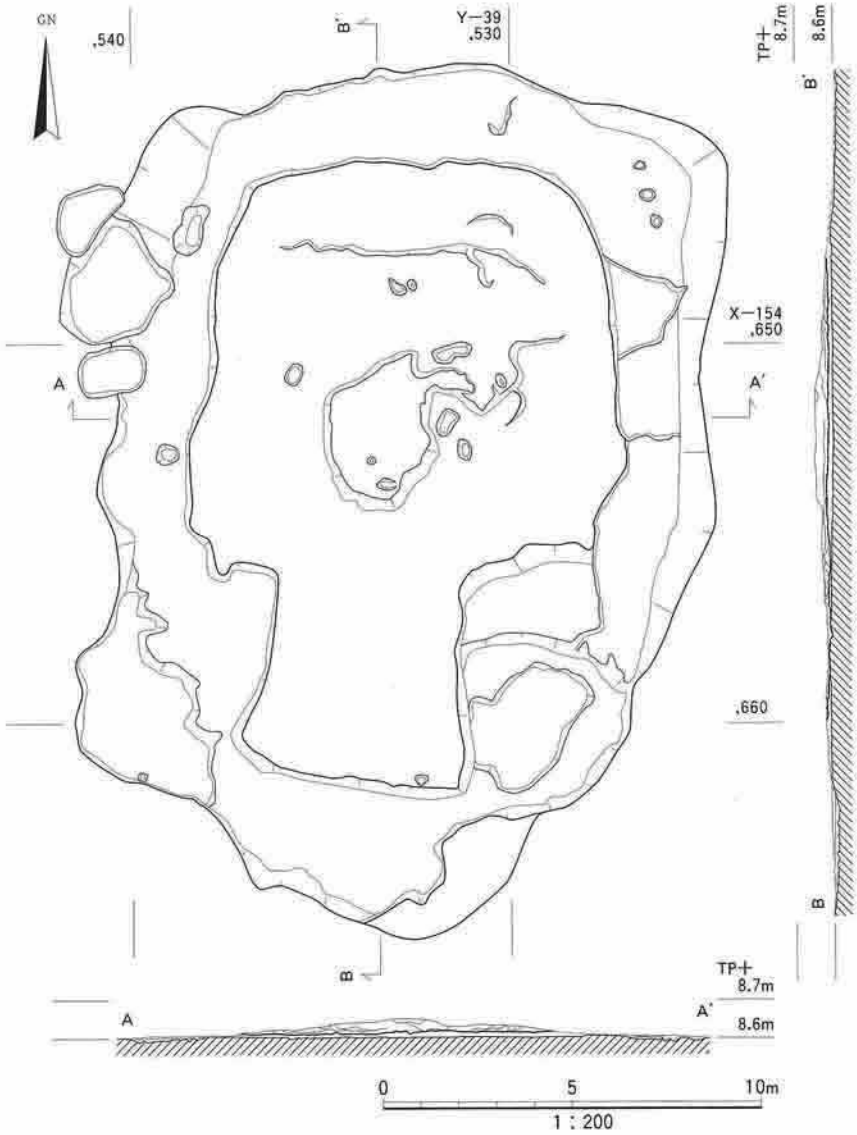


図71　NG84−25次A区長原116号墳実測図

長原116号墳(図71・図版10中)：南側に造出しがある方墳で、前方後方墳と呼ぶべき形態である。墳丘は一辺11mで、造出しは幅は７m、長さは５mある。

本古墳周溝からは須恵器杯蓋**24**・壺**38**が出土した(図70)。**24**は残存部が少ないが、ヘラケズリが天井部と口縁部の境近くまで施されているため、TK208型式に属すると思われる。**38**は口縁部に波状文が施される。

以上の遺物から本古墳は長原２期に位置づけられる。

長原117号墳(図72､図版10中・下)：**長原116号墳**の北側にある方墳で、一辺が10～11m、周溝幅が最大５mある。TK208型式に該当する須恵器杯身**36**・杯蓋**25**・両耳付短頸壺**39**・壺**40**が出土した(図70)。**39**は肩に縦方向に孔が穿たれた耳を有し、最大径部分に凹線が施される。体部の最下部には断続的なヘラケズリが施される。朝鮮半島南西部(全羅道)に系譜が求められる形態で、類例を含めた検討は第Ⅷ章第２節で行った。

以上の遺物から本古墳は長原２期に位置づけられる。

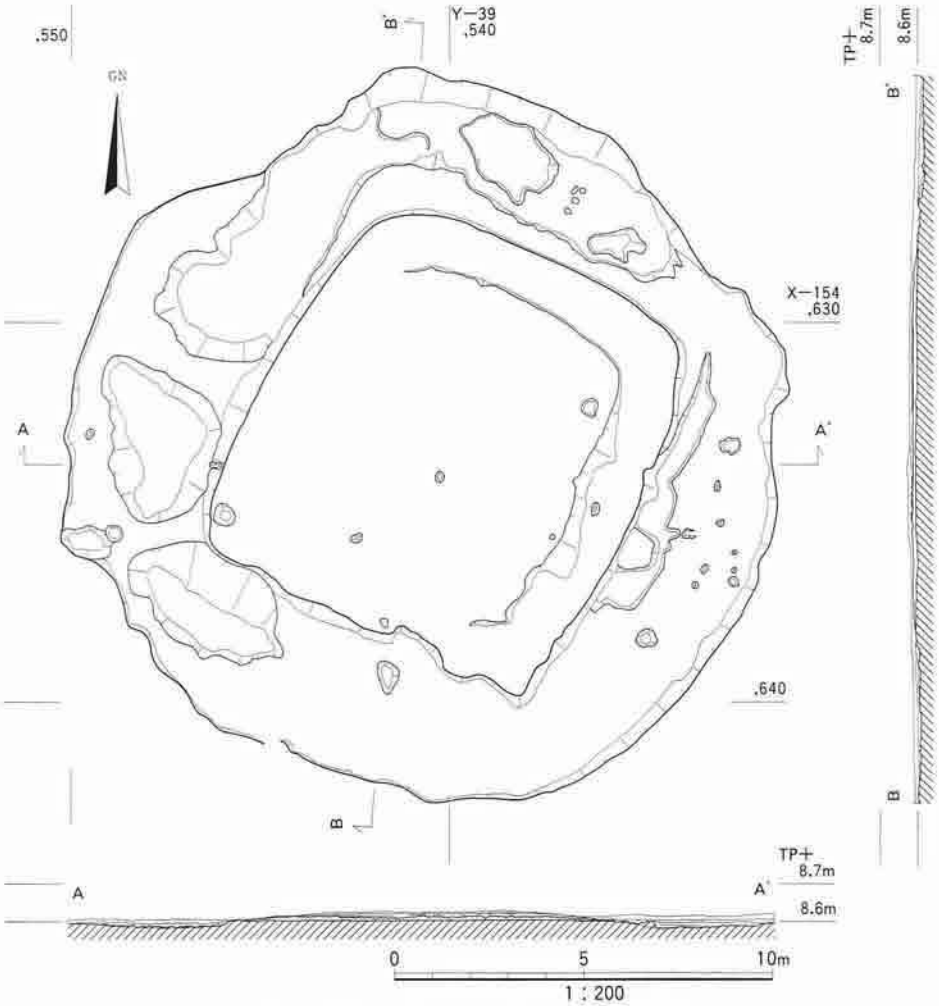


図72　NG84－25次A区長原117号墳実測図

長原118・119号墳：調査地に周溝しかかかっていないため、詳細は不明である。

SD701・702：上記の古墳群の中を通り抜ける平行した2条の溝である(図67)。溝の間隔は5mあり、道路側溝の可能性がある。

なお、調査地の南西部や北東部で東西方向の短い溝が南北に並んでいる個所(**SX701・702**)がある(図67)。調査時には検討されていないが、後述するNG89－36次調査の**SX703**のような道路状遺構であった可能性がある(図93左)。

NG86－91次調査

現代盛土・旧耕土を除去し、排水用側溝を掘削した時点で、調査区北西隅に古墳(**長原166号墳**)の存在することが判明した(図73・図版13上)。調査が進むにつれ、墳丘の遺存状態が良好でかつ、主体部に副葬された鉄器・須恵器の一部が調査区外へ続くことから、調査範囲を南・西側へ拡張した。

墳丘はその上部が後世の水田耕作等によって削られ、元の形状を正確に留めていないが、周溝内の埋土を取り除くと、墳丘の辺およびコーナーが明瞭に検出できた。墳形は方墳と考えられ、一辺の長さは7m以上である墳丘の外側には幅約3m、深さ0.2～0.3mの周溝が巡るが、コーナー部分の形状は墳丘基底部ほどシャープでなく、隅丸である。墳丘の高さは上面が削られているため不明であるが、

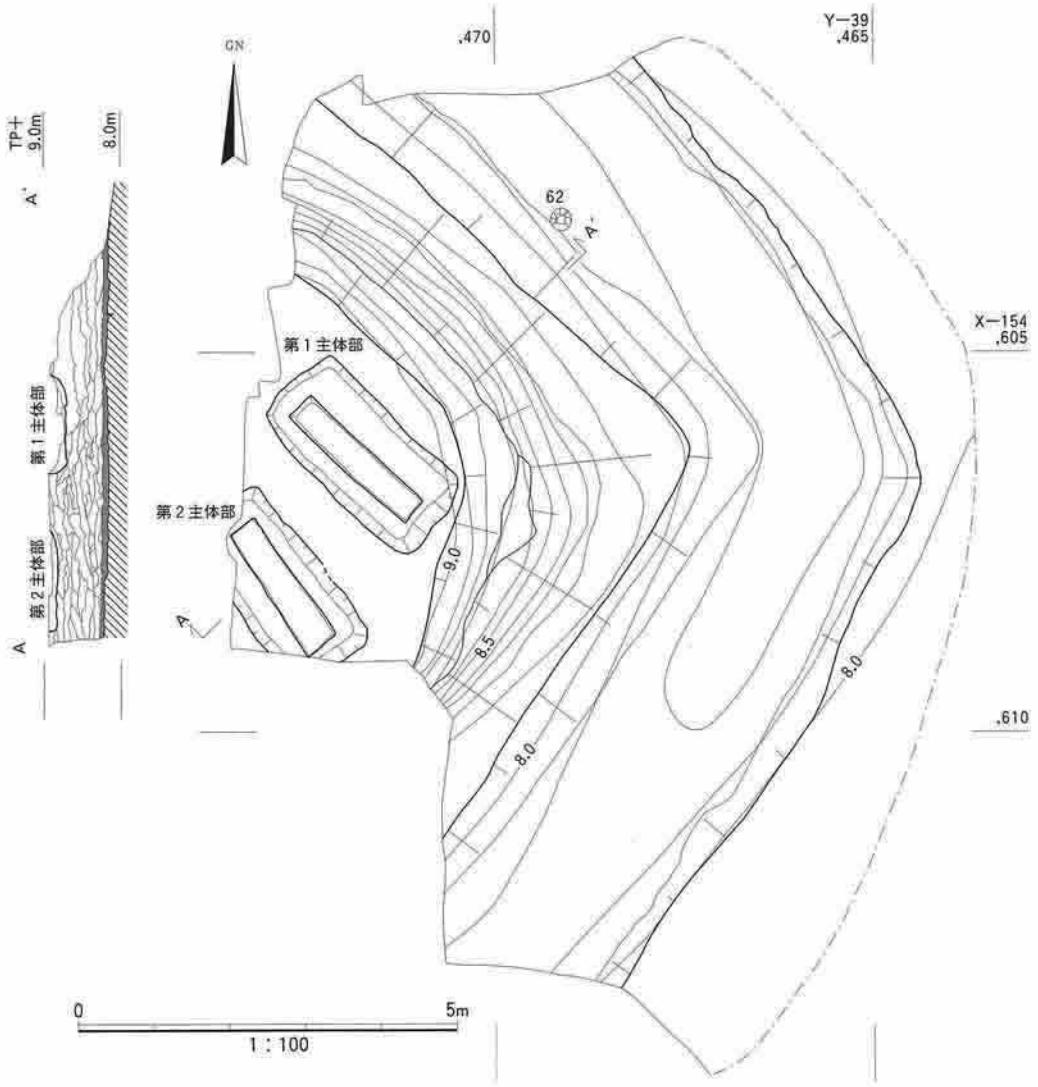


図73　NG86－91次長原166号墳実測図

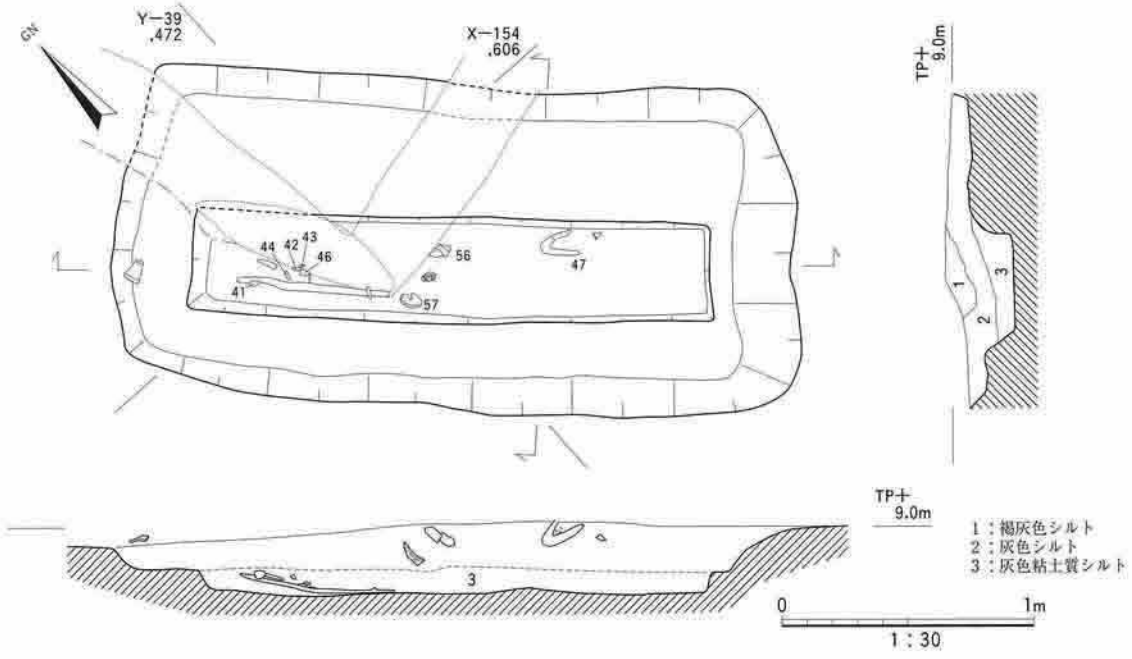


図74　NG86－91次長原166号墳第１主体部実測図

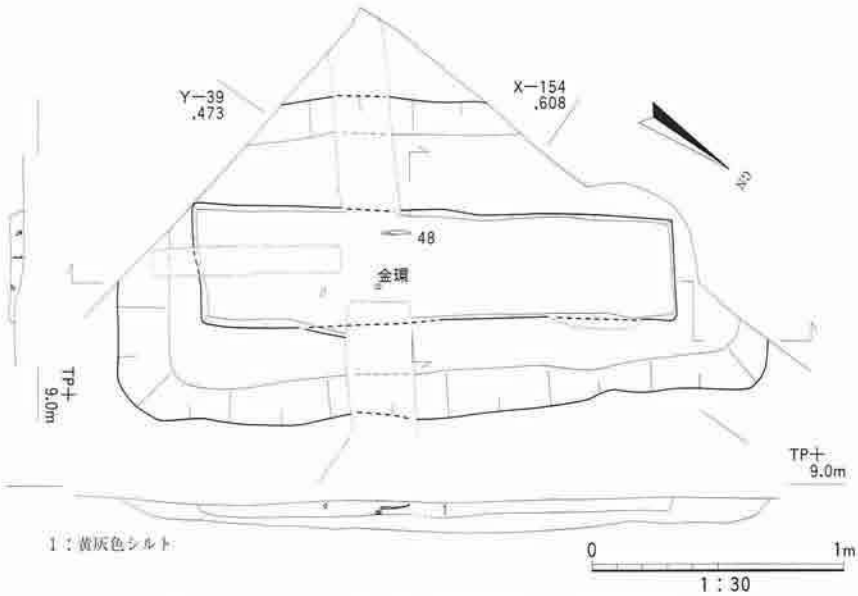


図75　NG86－91次長原166号墳第２主体部実測図

検出面と周溝底の比高は1.2mである。

墳丘の上面で主体部２基が検出された。ともに墳丘の北東辺に平行するもので主軸はおよそ45°西に振れる。これらの主体部のうち北東側のものを**第１主体部**、南西側のものを**第２主体部**と呼ぶ。

第１主体部の墓壙は長さ2.9m、幅1.3mのやや不整形な長方形を呈する(図74・図版13中)。墓壙内を慎重に掘下げるとU字形鍬先47・須恵器片が出土し、約0.1m程度の深さで棺の痕跡を確認した。U字形鍬先は棺外副葬であり、棺の腐朽で陥没したために出土状況が斜めに傾いていたと思われる。

棺の大きさは長さ約2.1m、幅約0.4mを測る。検出できた棺痕跡は、断面の観察からほぼ棺底と考えられ、棺内からは鉄製の斧41～43、手鎌44、鋤先45、不明鉄製品46、剣が出土した(図76・写真11)。

41は長さ2.9cm、刃部幅1.5cm、袋部幅0.7cmである。袋部の内側の長径は0.4cmしかないにもかかわらず、木質が残っていることから、本来は柄が挿入されていたと思われる。42は長さ3.0cm、刃部幅2.1cm、袋部幅0.9cmである。袋部には木質の痕跡はないが、袋部内面は滑らかな面を有することから本来は柄が挿入されていた可能性がある。以上の２点については明瞭な刃は作りだされておらず、普通の袋状鉄斧よりもきわめて小さいことから、非実用品であったと考えられる。

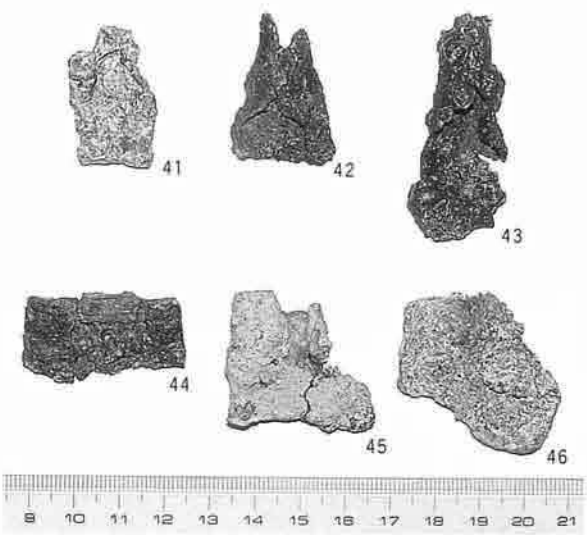


写真11　長原166号墳第１主体部出土鉄製品

43は長さ4.8cm、復元刃部幅2.0cm、袋部幅1.0cmである。袋部内面には木質が残っていることから、柄が挿入されていたと思われる。腐食が進んでいるため刃部が作りだされているかどうかはわからなかったが、大きさから実用品であった可能性も残される[関川尚功1987]。

44は刃部は残っておらず、幅3.6cm、残存長1.8cmで、袋部に木質が残る。ミニチュアの鋤先の可能性も残る。45は幅3.2cm、長さ2.9cmあり、袋部に木質が残る。非常に小さいため、非実用であっ

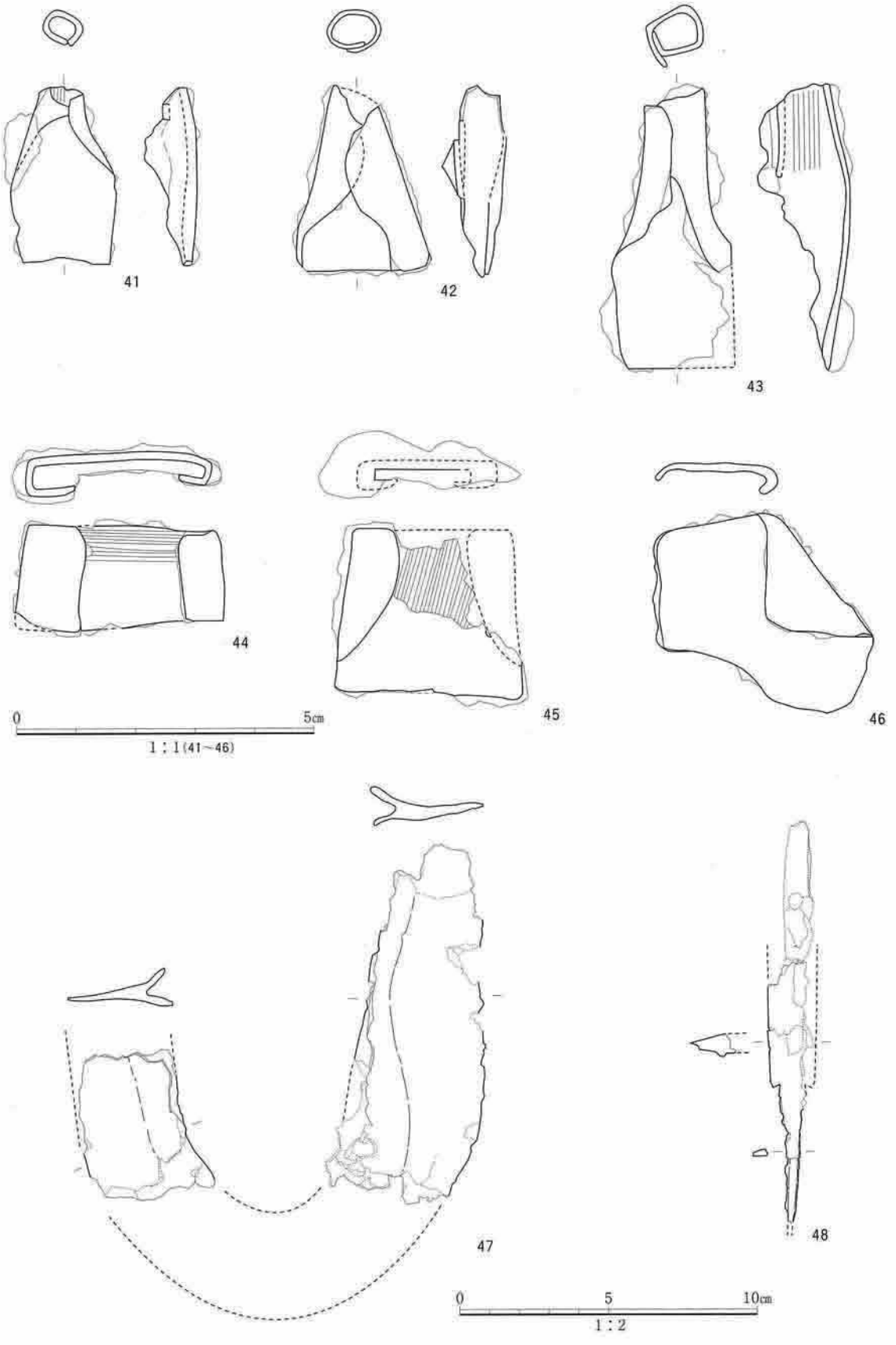


図76　NG86－91次長原166号墳出土鉄製品
第１主体部(41～47)、第２主体部(48)



写真12　長原166号墳第２主体部金環出土状況

たと思われる。

46は折返しのある鉄製品で、曲刃鎌の柄を挿入する部分の可能性がある。

鉄剣は出土時には長さ60cmあまりあったが、残存状況がきわめて悪かったため、取り上げることができなかった。

U字形鏃先47は出土時はほぼ完形であったが、腐食が進んでいたためうまく取り上げることができなかった。本来は長さ15cm、幅13cm程度の大きさで、きれいなU字形を呈するものであった。内縁に着柄溝があり、断面Y字形を呈する。

第２主体部は第１主体部の南西に平行して存在する(図75)。墓壙の一部は調査区外に出ているが、長さ約2.5m、幅1.3mある。棺の痕跡は墓壙のほぼ中央に位置し、長さ1.8m、幅0.4～0.5mである。棺内のほぼ中央からは金環(写真12)・鉄鏃48がそれぞれ１点ずつ出土した。

48は残存長11.5cm、推定元幅2.0cm、最大厚0.8cmあり、切先と茎尻は残っていない(図76)。逆刺があり、逆刺の下は箆被と思われる膨らみがあり、茎に続く。出土状況から図のように復元した。

以上の２基の主体部は、検出された墳丘上面の端に位置する。墳丘の中心が確定できないため推定の域を出ないが、中心となるべき主体部が調査区外に存在する可能性がある。なお、主体部から人骨・歯が見つからなかったため、頭位方向は不明である。

古墳に伴う土器と考えられるものは、墳丘上面・主体部上・墳丘斜面および周溝から出土した。そのほとんどが須恵器で、若干の埴輪片と韓式系土器の鍋62が含まれる(図77)。

第１主体部直上の窪みからは須恵器筒形器台の口縁部56および脚部57が出土した。56は口径16.3cm、頸部径5.2cmある。２条と１条の稜で文様帯が作られ、櫛描波状文が施される。壺の可能性もあるが、頸部の締まりがきついため、前述のとおり筒形器台の口縁部と考えた。57は２条の稜で文様帯が区分され、波状文が施される。また、下から２段目には長方形の、３段目には円形のスカシが施される。残存部分が少ないので断定はできないが、長方形スカシと円形スカシはそれぞれ交互に８方向に存在したと思われる。脚裾から約８cmの高さのところでさらに内傾することから、これより上の部分は脚部の付根が括れて円筒部に移行するのであろう。56と57について胎土や焼成が類似することから同一個体の可能性もある。

第２主体部直上からは須恵器壺53が出土した。口頸部は稜によって３分され、櫛描波状文が施される。肩部は凹線で文様帯が分けられ、肩部に櫛描列点文、それ以下の文様帯に櫛描波状文が施される。

墳丘上からは須恵器杯50・同蓋49が出土した。49は天井部に手持ちのヘラケズリを施した後に、ナデが施される。50の底部は回転ヘラケズリである。いずれも口縁端部は丸く仕上げられる。

周溝からは様々な器種の須恵器や韓式系土器が出土した。

須恵器杯52・同蓋51はいずれも底部・天井部が手持ちヘラケズリである。

54は壺の口縁部である。外面はヨコナデで仕上げられる前に縦方向の平行タタキが施されている。

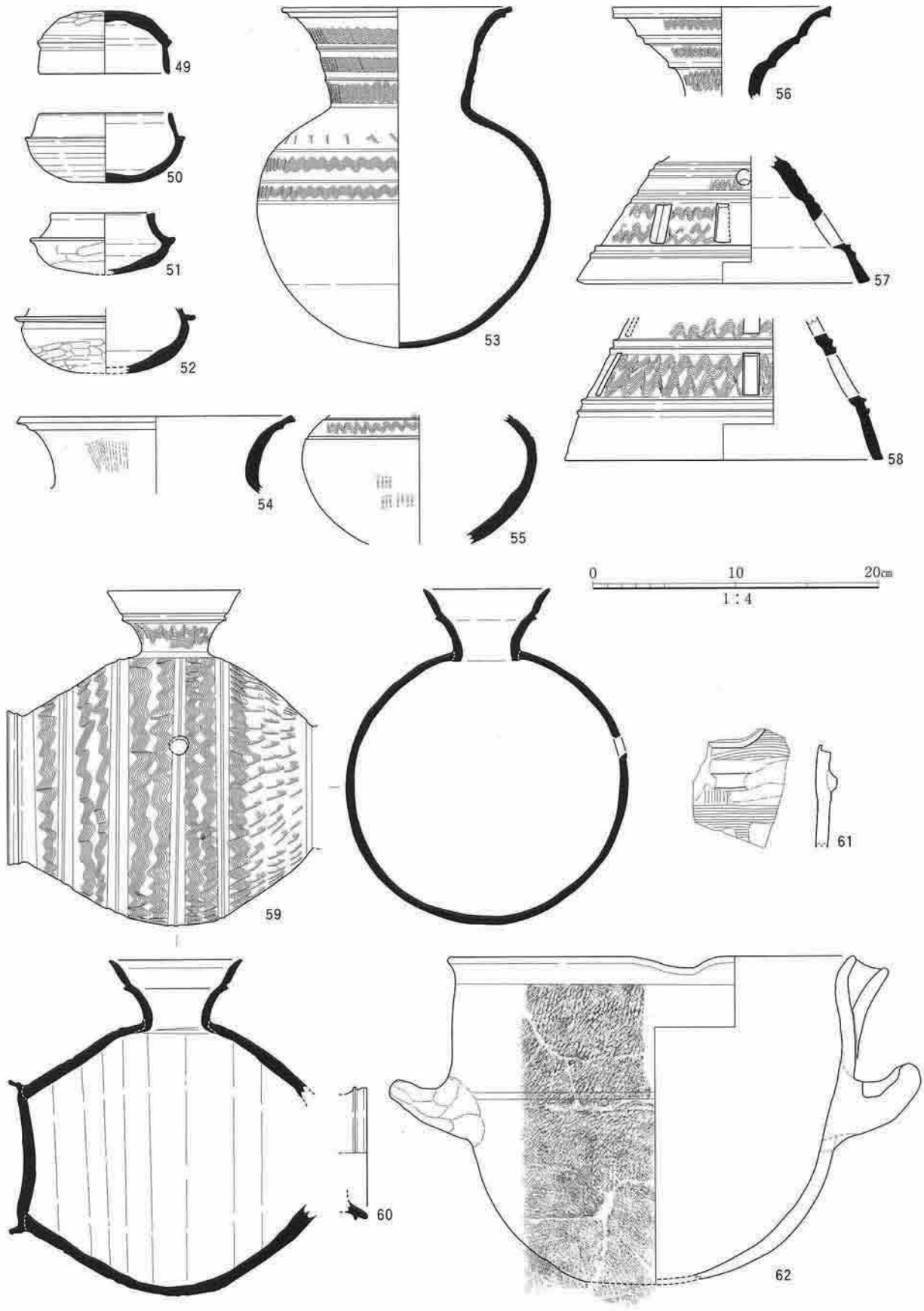


図77　NG86－91次長原166号墳出土須恵器

第１主体部直上(49・50)、第２主体部直上(53)、周溝(51・52・54～62)

周溝内ではこれ以外に外面に縦方向の平行タタキが施され、内面は強いナデで仕上げられる壺・甕の破片が多数出土したが、復元できなかったため図化しなかった。

55は壺の体部で、瓶の可能性もある。肩部に凹線が２条施され、その間に櫛描波状文が施される。体部下半はヨコナデで仕上げられているが、部分的に縦方向の平行タタキメの痕跡が見られる。

58は器台の脚部である。脚裾径が22.2cmあり、脚裾から直立に近い角度で立ち上がり、内傾して伸びる。２条の稜によって文様帯が区分され、波状文が施された後、５方向に方形スカシが施される。

59はほぼ完形に復元できる樽形瓶である。体部については図の向って右側の方が器壁が厚く、内面にユビオサエが多く残る。外面には櫛描波状文が施された後、２条の凹線で区切って文様帯がつくられている。波状文については切合いが確認できる個所はすべて右側が左側に切られている。また、波状文が施されていない右側には櫛描列点文が施される。この櫛描列点文は波状文を切っていて、列点文同士では切合いのわかる個所はすべて左側が右側に切られる。また、右側を下にした場合、列点文は時計回りの方向に施されている。なお、左側は胴部の擬口縁を含めて覆うように円板が接合され、縁には稜をもつ。口縁部は中央を円形に切り取って接合されていて、頸部のナデは体部の波状文や凹線を切っている。二重口縁で、波状文が施されている。以上のことから、まず、図の右側を下にして中膨らみの円筒形の体部が成形され、波状文・凹線が施された後、倒立させて列点文が施されたことが推定される。そして、体部の一連の成形・施文が終わってから口縁部が取り付けられていることがわかる。

60も樽形瓶の左右いずれかの端である。色調や焼成が59と異なるため、本古墳には少なくとも２個体の樽形瓶が供献されていたことがわかる。

円筒埴輪61はヨコハケで仕上げられて、窖窯焼成である。内面にはベンガラと思われる赤色顔料が付着する。川西編年のⅣ期のものである。なお、この古墳から出た埴輪は非常に少なく、61自体は本古墳に本来伴っていなかった可能性が高い。

韓式系土器鍋62は周溝で口縁部が下を向いて、つぶれた状態で出土した(図版13下)。短い口縁部をもち、正面には片口がある。体部には粗い縄文タタキが施される。体部に１条の凹線を巡らせた後、挿入によって把手を付けている。器壁は厚いところで１cm近くあり、砂粒を多く含む。

周溝内出土の須恵器には転落状況を示すものや、墳丘上のものと接合する例もある。墳丘斜面出土のものもあわせて、多くはもと墳丘上にあったと推定できる。

以上の土器のうち、須恵器はTK73型式もしくはTK216型式に当るものである。したがって本墳の築造時期は５世紀中頃と考えて大過なかろう。

NG84－25次Ｂ区

掘立柱建物・竪穴遺構・井戸・溝・土壙などの遺構が多数検出された(図78・図版９下)。

まず、調査時に認定することができた掘立柱建物は16棟ある(図79・80、表15)。16棟中12棟が総柱建物で、非常に高い割合を示す。SB702がもっとも大きく、掘形の直径が0.8m前後、柱痕跡の直径が0.2～0.3mある(図版11上)。柱穴からの出土遺物は細片が多いが、SB703の柱穴からは完形近くに復元できる土師器高杯63が出土した(図81)。

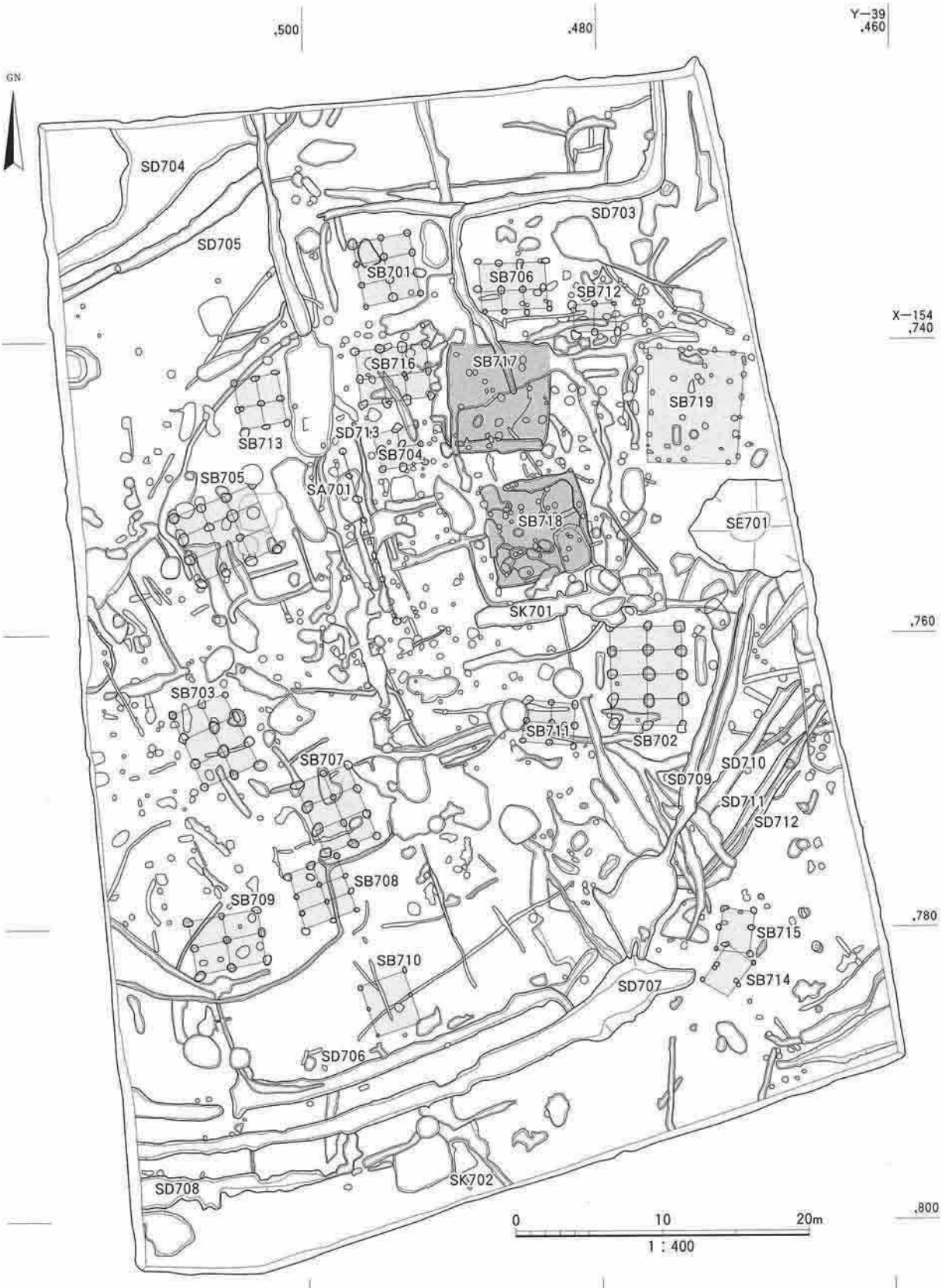


図78　NG84－25次Ｂ区古墳時代遺構配置図

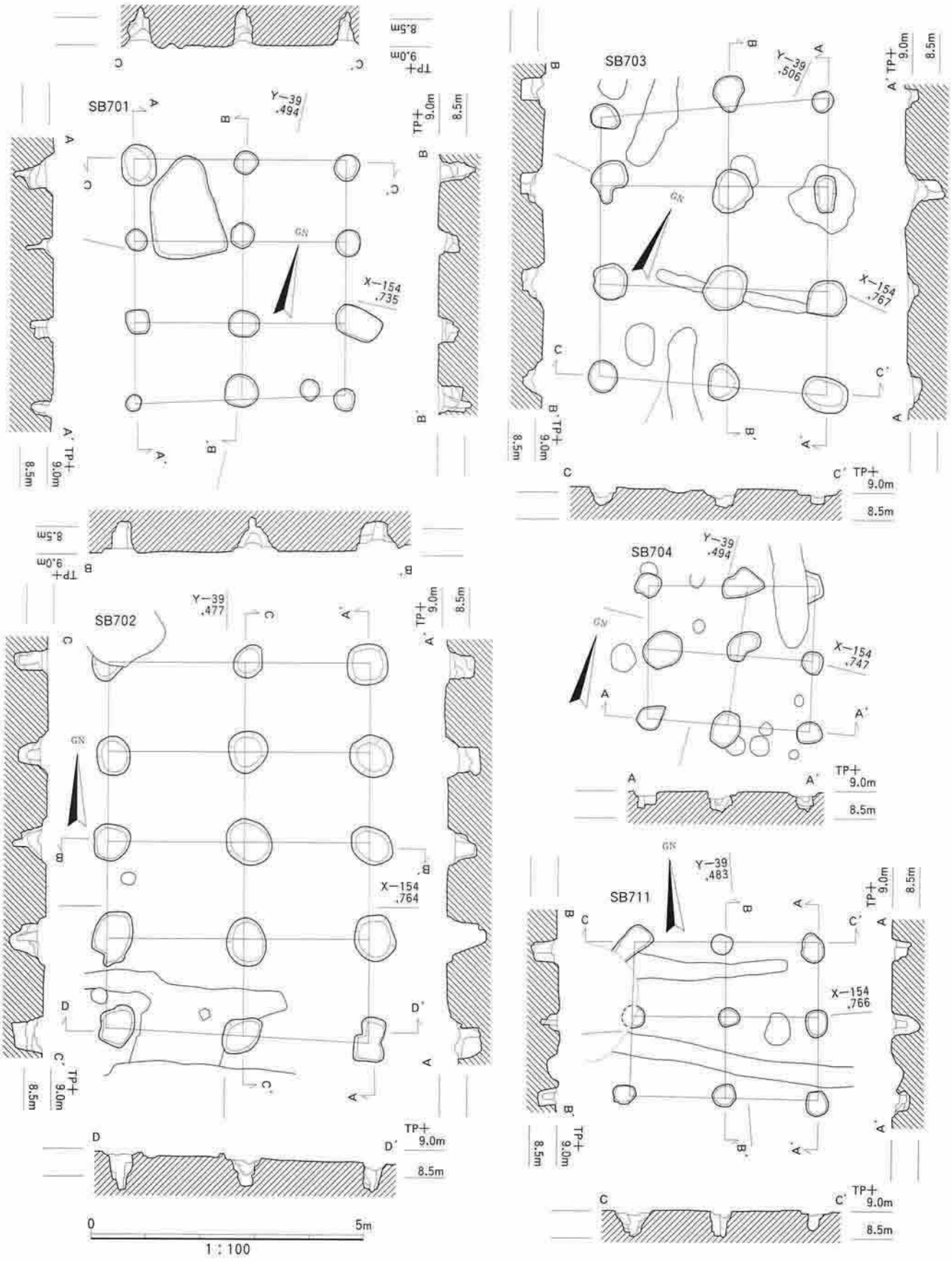


図79　NG84－25次B区掘立柱建物実測図（1）

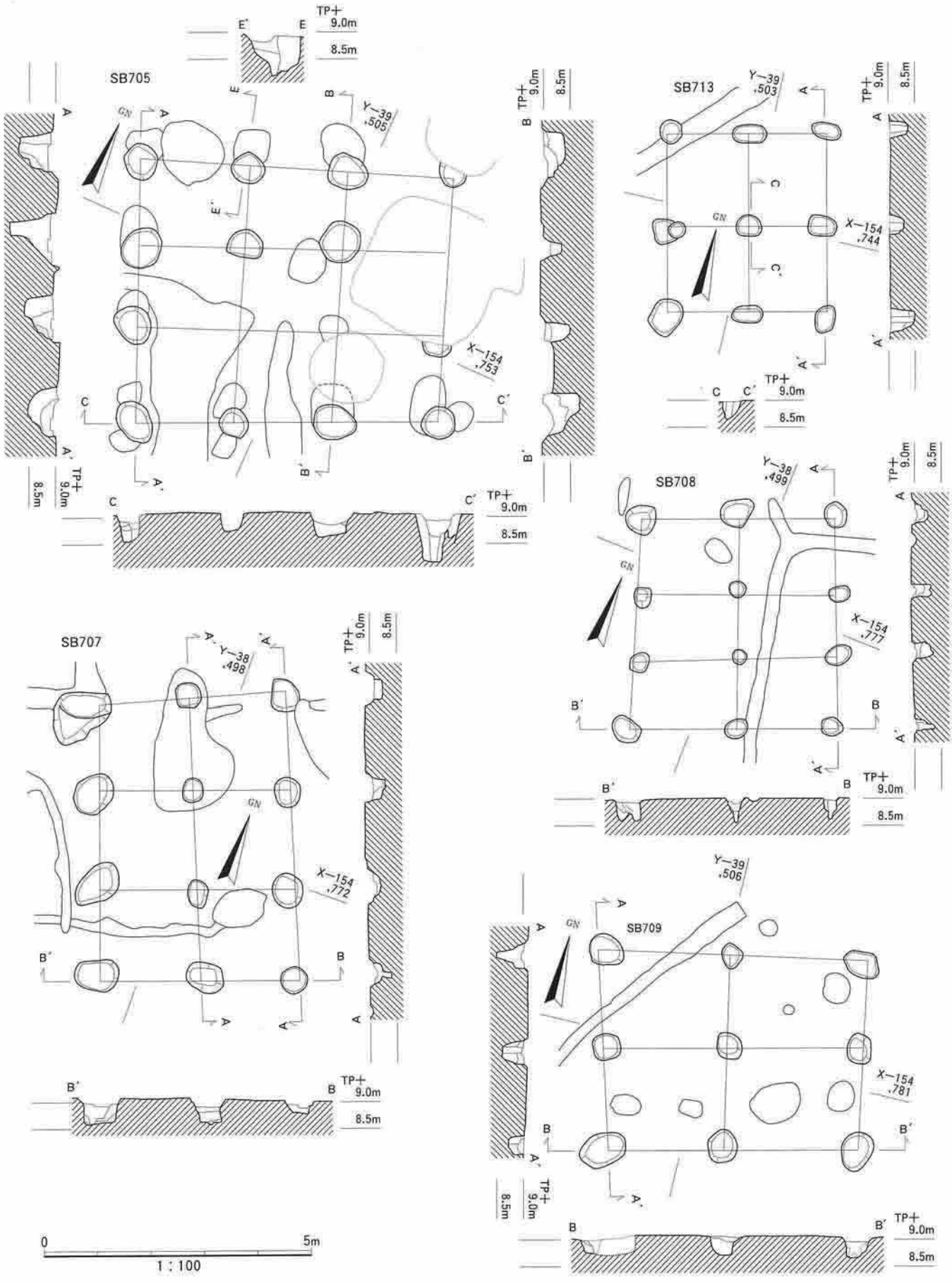


図80　NG84－25次B区掘立柱建物実測図（2）

表15　NG84－25次B区掘立柱建物一覧

遺構番号	構造	桁行(間)	梁間(間)	桁長(m)	梁長(m)	面積(㎡)
SB701	総柱	3	2	4.2	4.0	16.8
SB702	総柱	4	2	7.0	4.8	33.6
SB703	総柱	3	2	5.3	3.8	20.1
SB704	総柱	2	2	3.0	2.7	8.1
SB705	総柱	3	3	5.6	4.6	25.7
SB706	総柱	3	2	4.5	3.4	15.3
SB707	総柱	3	2	5.2	3.5	18.2
SB708	総柱	3	2	4.0	3.8	15.2
SB709	総柱	2	2	4.5	4.0	18.0
SB710	側柱	2	1	3.4	3.0	10.2
SB711	総柱	2	2	3.5	2.8	9.8
SB712	側柱	2	1	3.0	2.0	6.0
SB713	総柱	2	2	3.4	2.8	9.5
SB714	側柱	2	1	3.0	2.0	6.0
SB715	側柱	2	1	3.0	2.2	6.6
SB716	総柱	3	2	4.8	3.5	16.8

SB717・718は調査時は認識できなかったが、方形に窪んでいるため、竪穴住居の可能性がある。SB717は南北7.4m、東西7.0m、SB718は一辺7.0mである。いずれも主柱穴は確認されていない。

SB719は直径0.2m前後、深さ0.3～0.4mの柱穴が約1m間隔で並び、大きさは南北7.2m、東西6.2mある。何らかの建物の可能性があるが、調査時に建物として認識されていなかったため、断面などの記録はない。ただ、[花田勝弘2002：p.255]で指摘されているように、大壁建物になる可能性がある。

このほか、柱穴は多数検出された。SA701のようにまっすぐ並ぶものは柵になる可能性がある。

溝は多数検出された。この中でSD706～712は平行して弧状に延び、建物群の南側を画する溝の可能性が高い(図版11中)。また、SD703～705についても、これらの溝の北側で遺構が希薄になることから、北を画する溝であったと考えられる。このほか、L字状に曲がったり、まっすぐ延びたりする溝が数多くあるが、ほかの遺構とともに密集して検出されたため、性格はわからない。出土遺物にはSD704から須恵器高杯71、SD705から須恵器杯身67、SD707から須恵器杯身68・製塩土器74、SD709から須恵器高杯蓋69が出土した(図81)。74は椀形を呈し、紀伊産と考えられる[高橋工1994]。

土壙は円形や楕円形などさまざまな形状のものが多数検出された。SB702の北側にあるSK701はいくつもの土壙が重なって一つになったものである。部分的に炭や焼土がたくさん含まれていた。SK702は調査地の一番南にある土壙で、須恵器杯身66・有蓋高杯72が出土した(図81)。

井戸SE701はSB719の南側で検出された(図82・図版11下)。上端は直径約6mの不整円形で、深さは約4mある。井戸の埋土からは多量の土師器・須恵器・木製品が出土し、土師器壺75・76、甕77

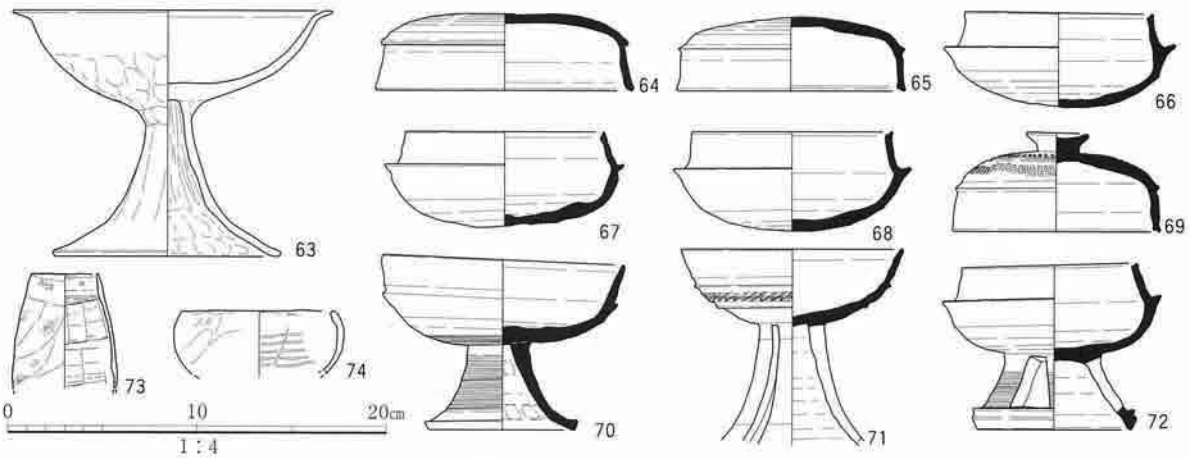


図81　NG84－25次B区古墳時代出土遺物

SB703(63)、SK702(66・72)、SD709(69)、SD704(71)、SD705(67)、SD707(68・74)、長原7Bi層(64・65・70・73)

～87、須恵器壺88・89、楯材90、扉材91を図示した(図83・84)。

75・76は体部の割に口縁部が長いという点で壺としたが、共伴している甕に形態が近い。78は他の甕に比べ、口縁部が短く、ハケも粗いが、器面が荒れているため細部の調整は観察できない。79～87は同じような形態を呈する。この中で81～85は内面にヘラケズリが施されるが、それ以外はハケが、一部はハケのちユビナデが施されている。

88・89は同じような形をした須恵器壺である。89の体部については、上半に平行(擬格子)タタキを施してから、カキメ調整を行った後、底部に平行(擬格子)タタキが施される。内面は体部上半から最大径にかけて同心円の当て具痕跡があり、底部のユビオサエが当て具痕跡を切っている。このユビオサエは底部タタキの際に付いたと思われる。(寺井)

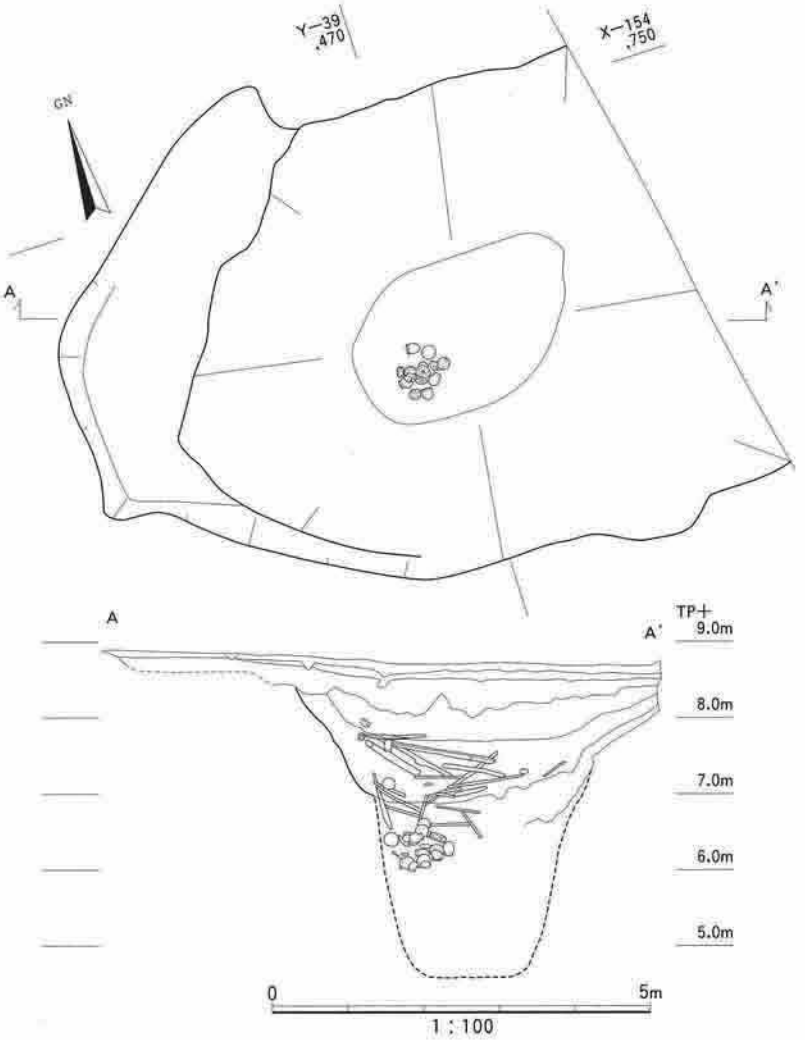


図82　NG84－25次B区SE701実測図

90は全長140.5cm、幅15～16cmの板材で、片面のほぼ中央に突起(全長81.5cm、幅3.5cm)を造出し、断面はT字型を呈する。この突起の長手方向両端にはそれぞれ枘穴があるが、形状が異なる。片方では突起の幅と同じ大きさの平面長方形の枘穴(13cm×2.8cm、深さ2.3cm)が突起の端に接して貫通せずに開けられ、もう片方では突起端部上面中央に長さ10.5cm、幅1.5cm、深さ1.5cmの枘穴が貫通せずに穿たれる。またそれら枘穴に接するように、突起の片側に直径4.5～5.5cmの軸吊穴2つが内法間隔61.4cmで開けられており、いずれも貫通している。軸吊穴は突起に食い込んでおり、その部分は直線となっている。板全体の厚みは突起の両側で異なり、軸吊穴のあるほうで2cm(端部)、反対側では突起から材端部に向かって徐々に薄くなり、端部で3.5cmである。突起の板からの立ち上がりは、軸吊穴のあるほうで2.4cm、反対側が1.0cmである。この材は扉の楯材と考えられる[宮本長二郎1996：pp.363－366]。両開きの扉を吊りこみ、扉左右に方立が取り付くかたちであろう。問題はその方立の仕口が左右で異なることであるが、その理由についてはよくわからない。突起上面に枘穴がある形式が元来のもので、もう一方は破損などによってその部分を新たに造り替えた可能性が考えられる。また、通

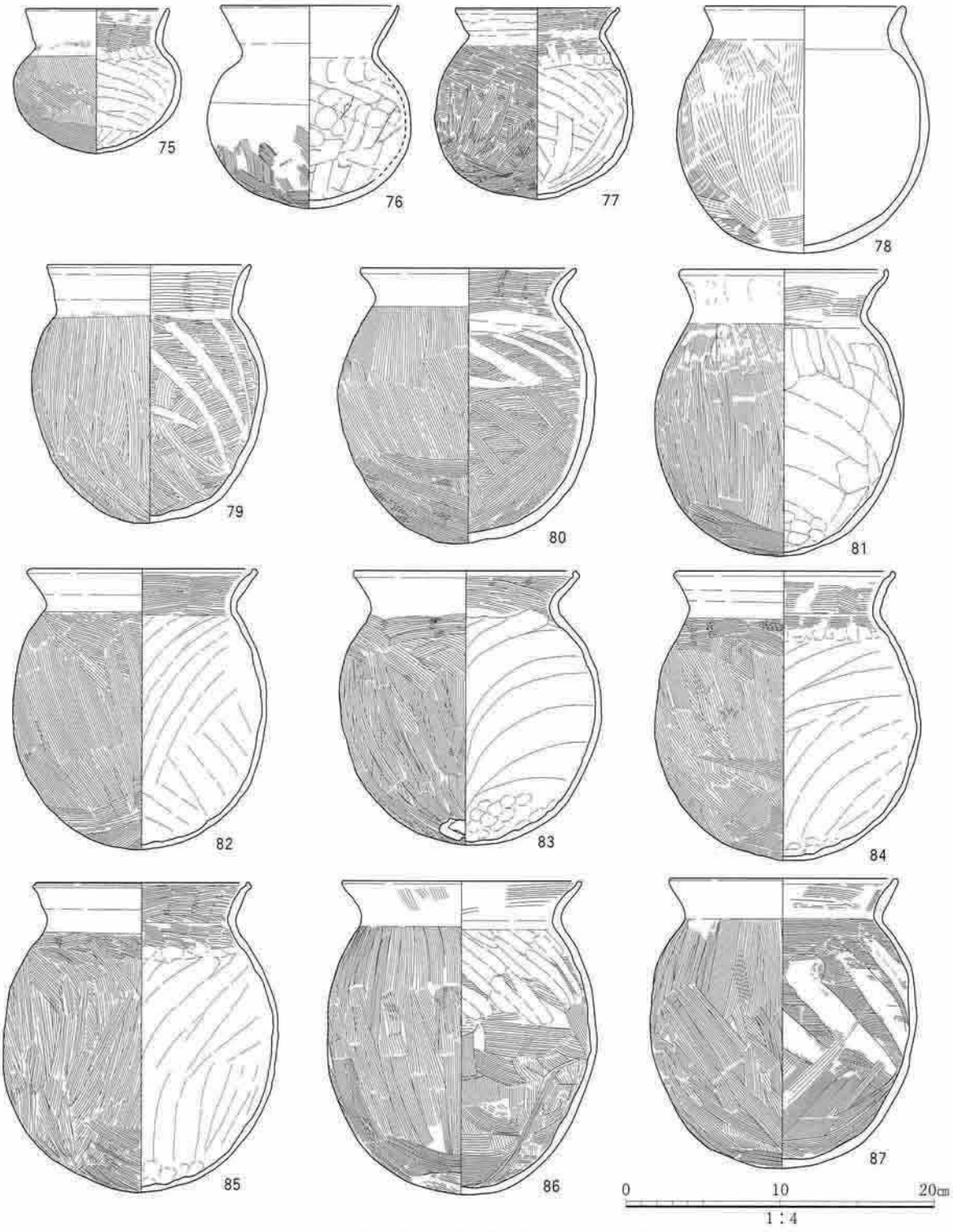


図83　NG84－25次B区SE701出土土師器

常の楣材では材の両端に欠込仕口のある例が多いが、この材にはない。かわりに材の長辺片側両端部を斜めに、もう片側を円弧状に削いでおり、これが壁や柱などとの取付きにかかわる仕事になる可能性があるが、詳細は不明である。

91は扉材である。残存長66.5cm、幅34.3～34.7cmの一木からなる扉材で、一方に扉軸を造り出す。扉の厚さは軸側が2.3cm、端部が1.2cmである。扉軸の長さは7.3cm、軸径は根元側で長径３cm、短径

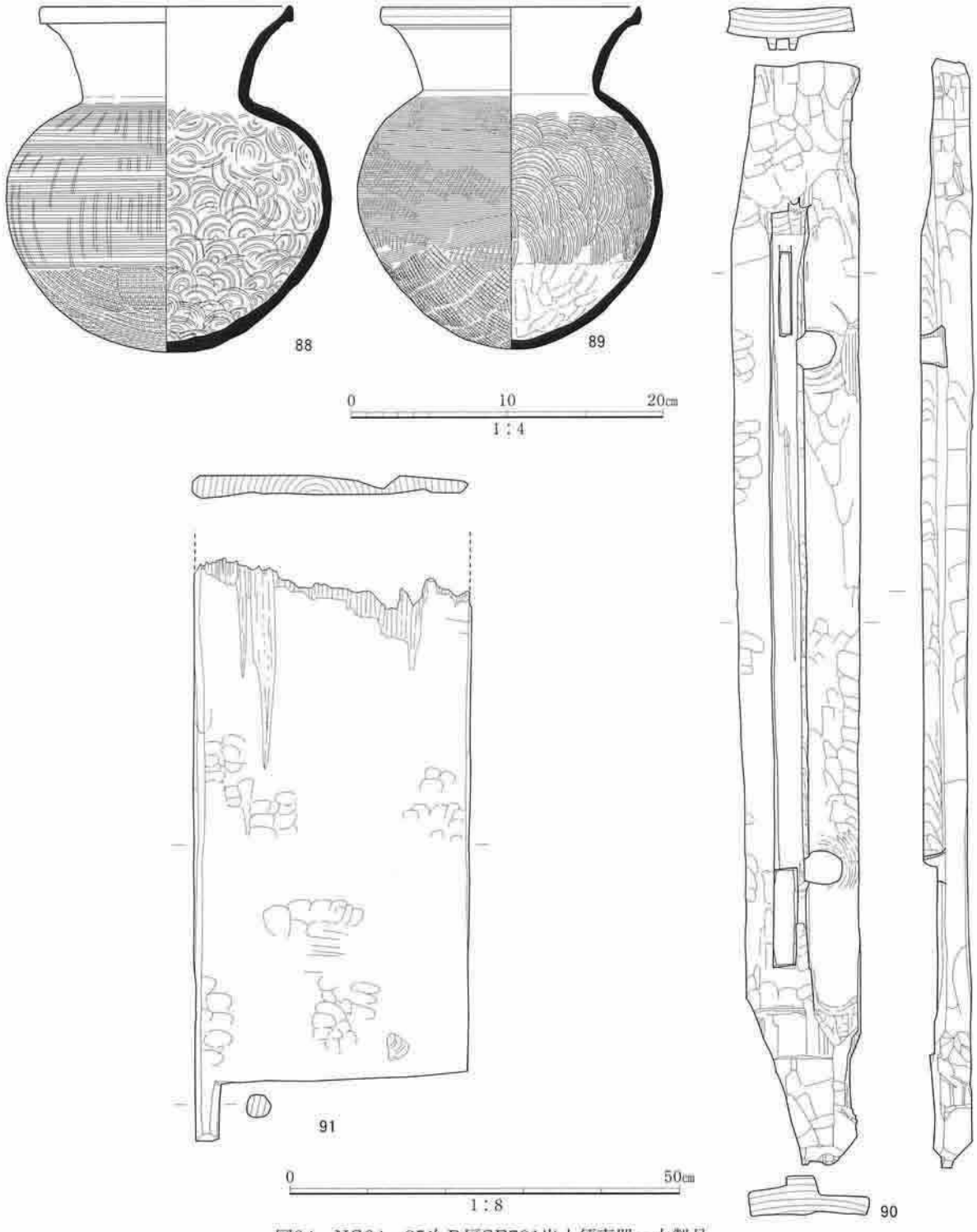


図84　NG84－25次B区SE701出土須恵器・木製品

2.5cmの楕円形である。閂受けなどは造り出さない[松岡良憲1997]。扉の幅は完存しており、両開きであったとすると、軸径を除いた全幅は約62～63cmとなり、上記の楣材90の軸吊穴内法寸法とほぼ合致する。この点から、両材は同一の建物に用いられた可能性が高いと考えられる。　（李）

また、長原7Bi層からは須恵器杯蓋64・65、無蓋高杯70、製塩土器73が出土した(図81)。64・65はTK208型式で、集落域の時期の上限を示すものと思われる。73は大阪湾岸系のものである。

NG89－36次調査

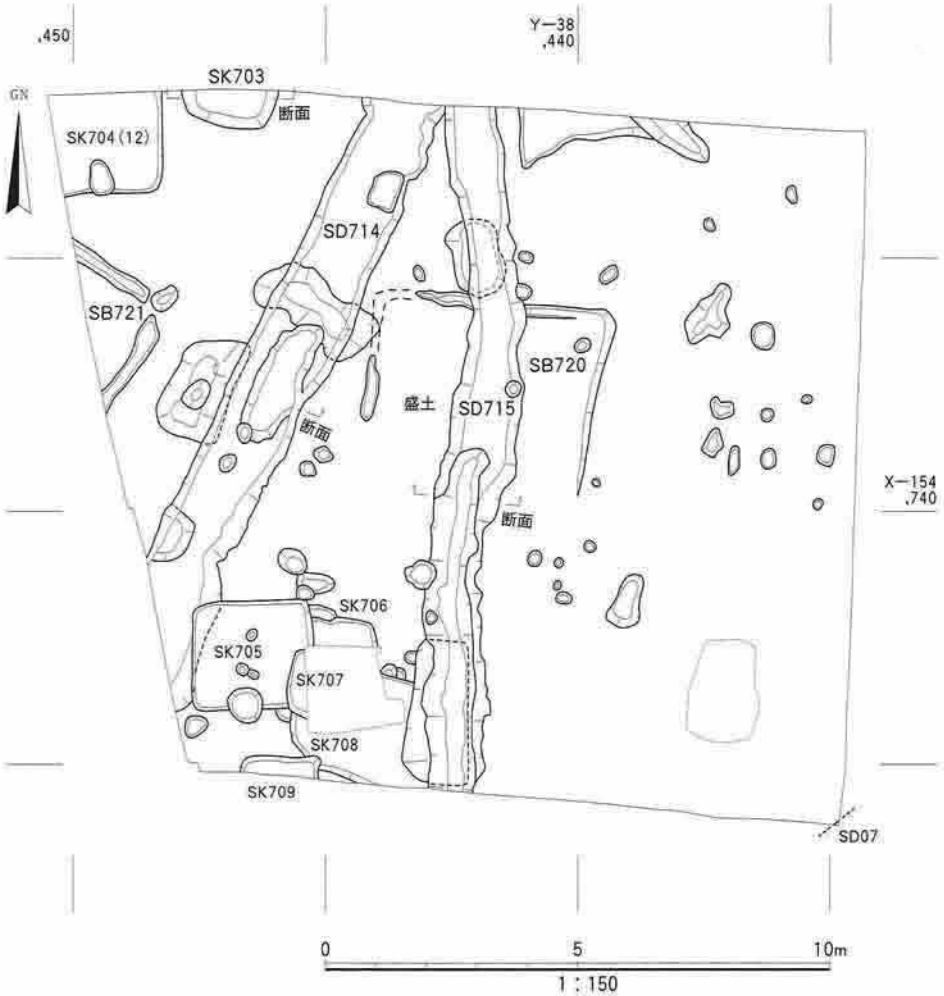


図85　NG89－36次古墳時代遺構配置図

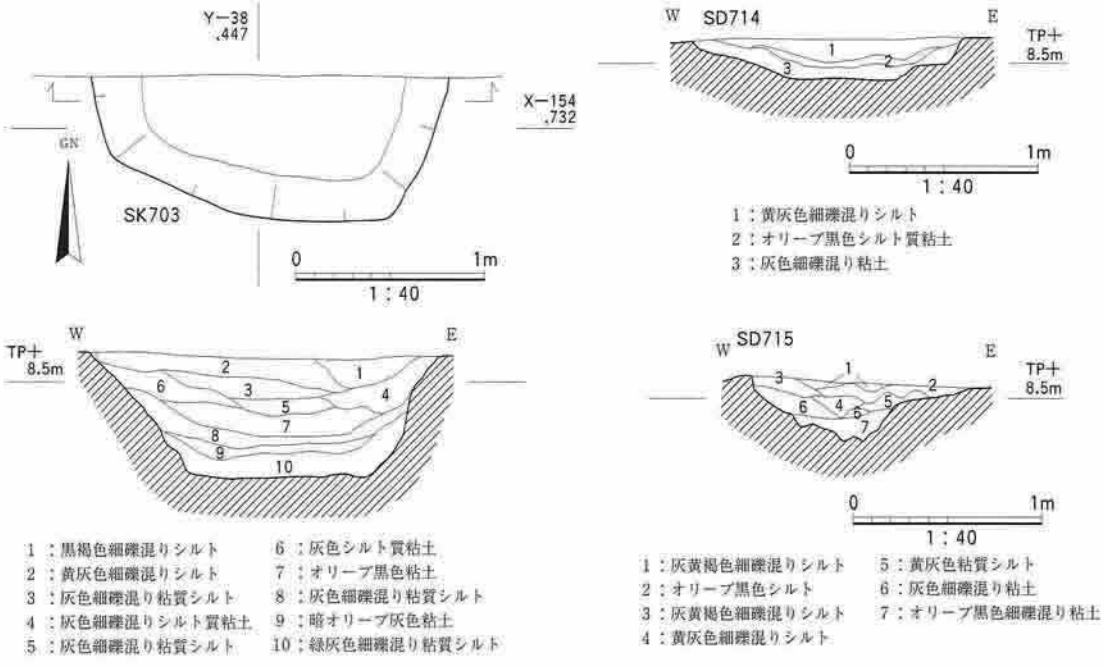


図86　NG89－36次古墳時代遺構平断面図

竪穴住居・溝・土壙が検出された(図85・図版14上)。

SB720：東西4.2m、南北3.5m以上の竪穴住居と思われる遺構である。北側と西側には周壁溝が残っていたが、柱穴や炉・竈といった施設は見つからなかった。中央をSD713に切られている。

SB721：幅が0.2m程度、深さは0.1m未満の溝が直交する方向に延びていることから、竪穴住居の周壁溝の可能性がを考えた。これらの溝で囲われた範囲で、0.5m四方で40点あまりの臼玉が集中して出土した地点があった。

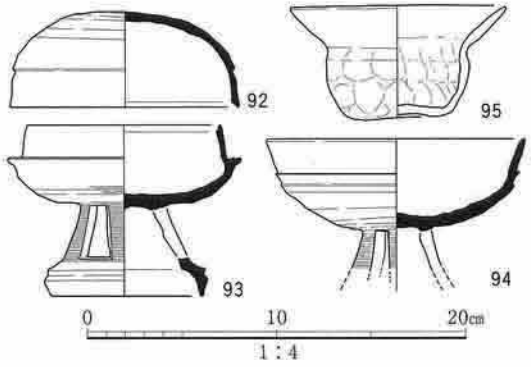


図87　NG89－36次出土遺物

SK705(92)、SD715(93)、長原7Bi層(95)、長原7Ai層(94)

SD714・715：SD714は幅1.7m、深さ0.2mの南西－北東方向に、SD715は幅1.3m、深さ0.2mの南北方向に延びる(図86)。SD714はSD715に切られることから、SD714が先行する。SD715からTK23型式に該当する須恵器有蓋高杯93が出土した(図87)。なお、SD714はNG84－25次B区のSD709

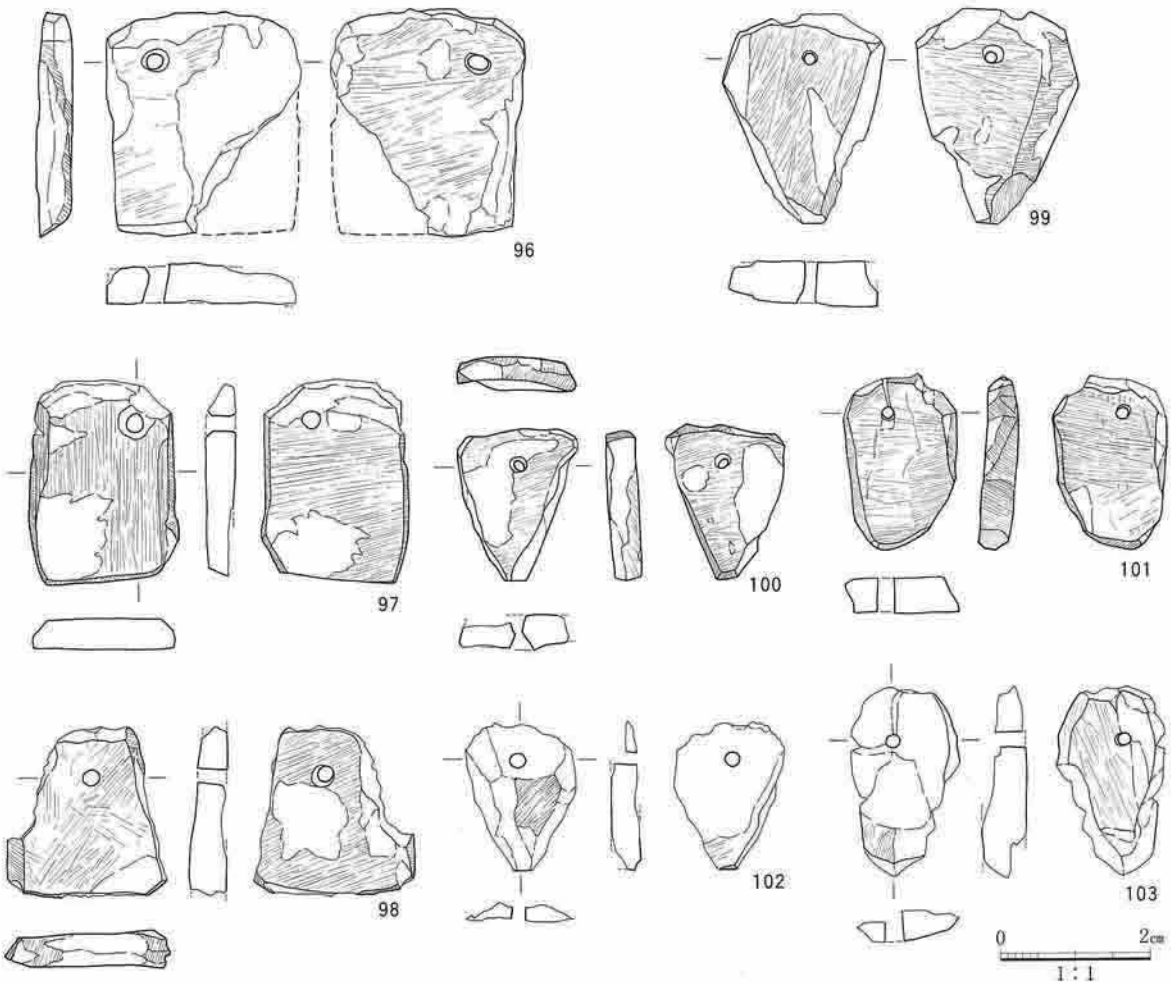


図88　NG89－36次出土滑石製品実測図(1)

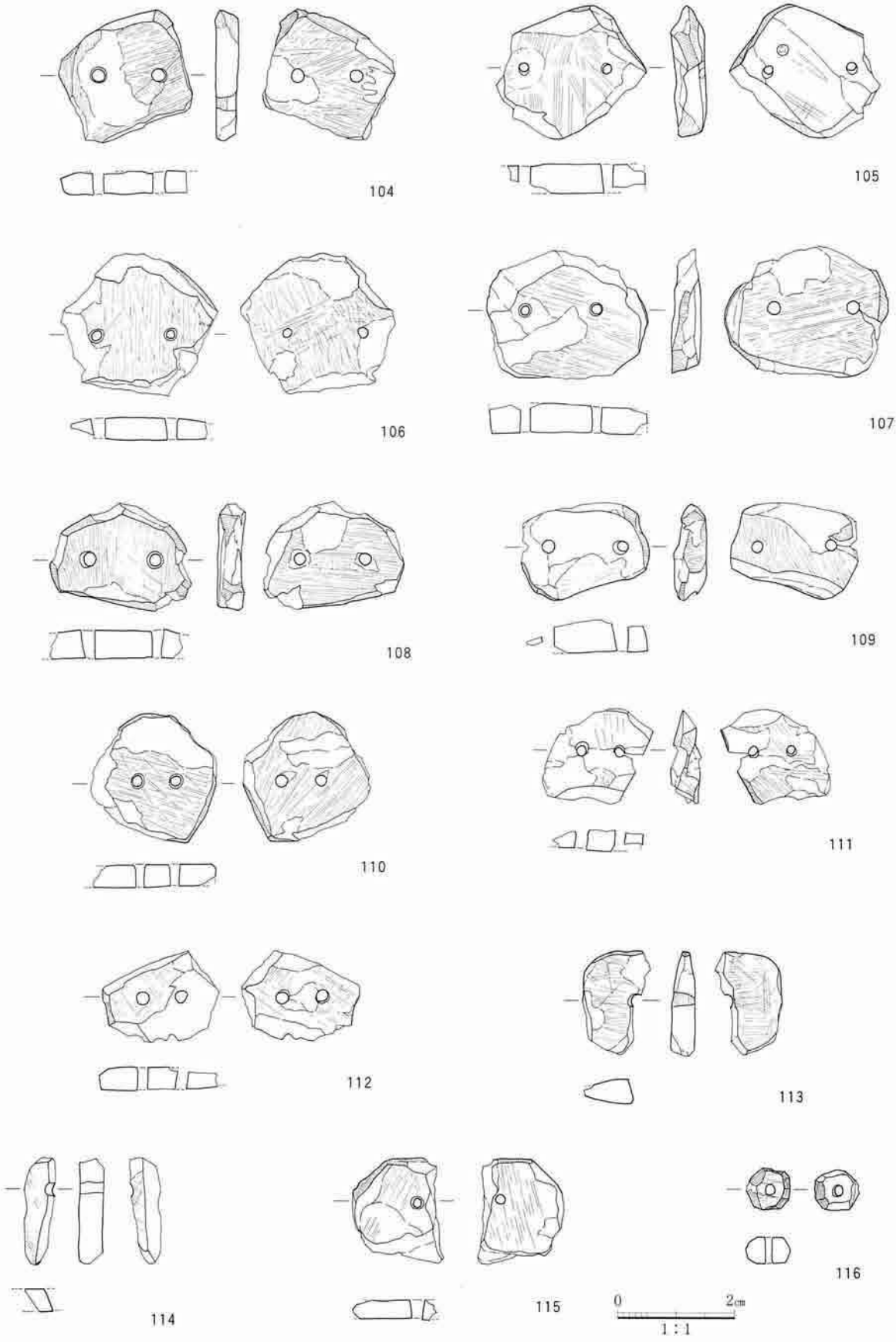


図89　NG89－36次出土滑石製品実測図(2)

～712と方向が等しく、SD715についてもこれより東側で遺構が少ないことから、いずれも集落を区画する溝と考えられる。

SK703：調査地北西部で検出され、北側は調査地外に拡がる(図86)。深さは0.6mある。

SK704～709：いずれも方形の浅い土壙である。SK705からTK23型式に該当する須恵器杯蓋92が出土した(図87)。

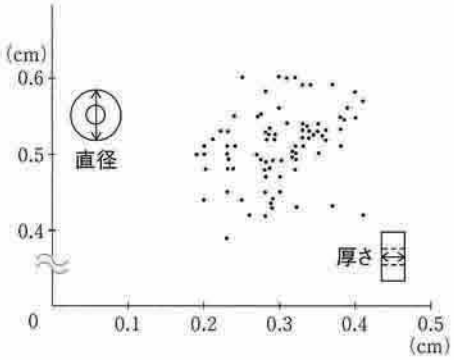


図90　NG89－36次出土臼玉計測値

なお、このほか長原7Bi層から土師器壺95、長原7Ai層からはTK47型式に該当する須恵器無蓋高杯94が出土した(図87)。95は完形で、口縁部が大きく広がり、体部にはユビオサエが明瞭に残る。

本調査地で注目されるのは滑石製品の多さである。斧形３点(96～98)、剣形５点(99～103)、双孔円板12点(104～115)、臼玉105点(116など)あり、114については剣・斧形の可能性もある(図88・89)。剣形・斧形および双孔円板についてはいずれも長原7Ai層から出土したものであるが、表裏両面を一定方向に研磨し、側面は縦方向に面取りしていることから、当調査地で出土しているTK23もしくは47型式に併行する時期のものと思われる。臼玉は前述のとおり、SB721など古墳時代中期の遺構や包含層から多く出土した。直径が0.4～0.6cm、厚さが0.2～0.4cmあり、大きさにばらつきがある(図90)。

NG90－66次調査

Ａ区中央で土壙SK710が検出された(図94)。南北５m、東西２m以上の不整形で、深さは0.2mある。TK47もしくはMT15型式の須恵器片が出土した。

ｃ．飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG84－25次Ａ区

長原５層に覆われていたため、長原6Ai層準の水田および畦畔が良好な状態で検出された(図91、図版12上・中)。畦畔は幅0.4～0.6m、高さ0.1mあり、基本的に正方位に延び、古墳に接続する部分だけ不規則になる。水田面は南東が高く、北西が低い。

NG84－25次Ｂ区

長原５層が残っていたのが東端のみであったため、水田もこの範囲でしか検出されなかった。また、調査地南東部の畦畔に区画された中に盛土遺構SX601が存在する(図91・図版12下)。

SX601は直径約５m、高さ0.4mあり、黄褐色細粒砂やシルトの偽礫で構成される。盛土中から土師器甕118・片口鉢119が出土した(図95)。118の外面はユビオサエで仕上げられる。119は内面に放射状の暗文が施されているが、全体的に器面が荒れているために暗文の構成や外面の調整はわからない。119については飛鳥Ⅲに属すると思われ、当遺構の年代も７世紀後半に位置づけられる。

NG86－91次調査

直交する２条の畦畔SR601・602が検出された(図92)。SR601は長原166号墳の墳丘コーナーに取り付き、２個所に水口が付く。それぞれの畦畔は幅0.8m、高さ0.1mである。

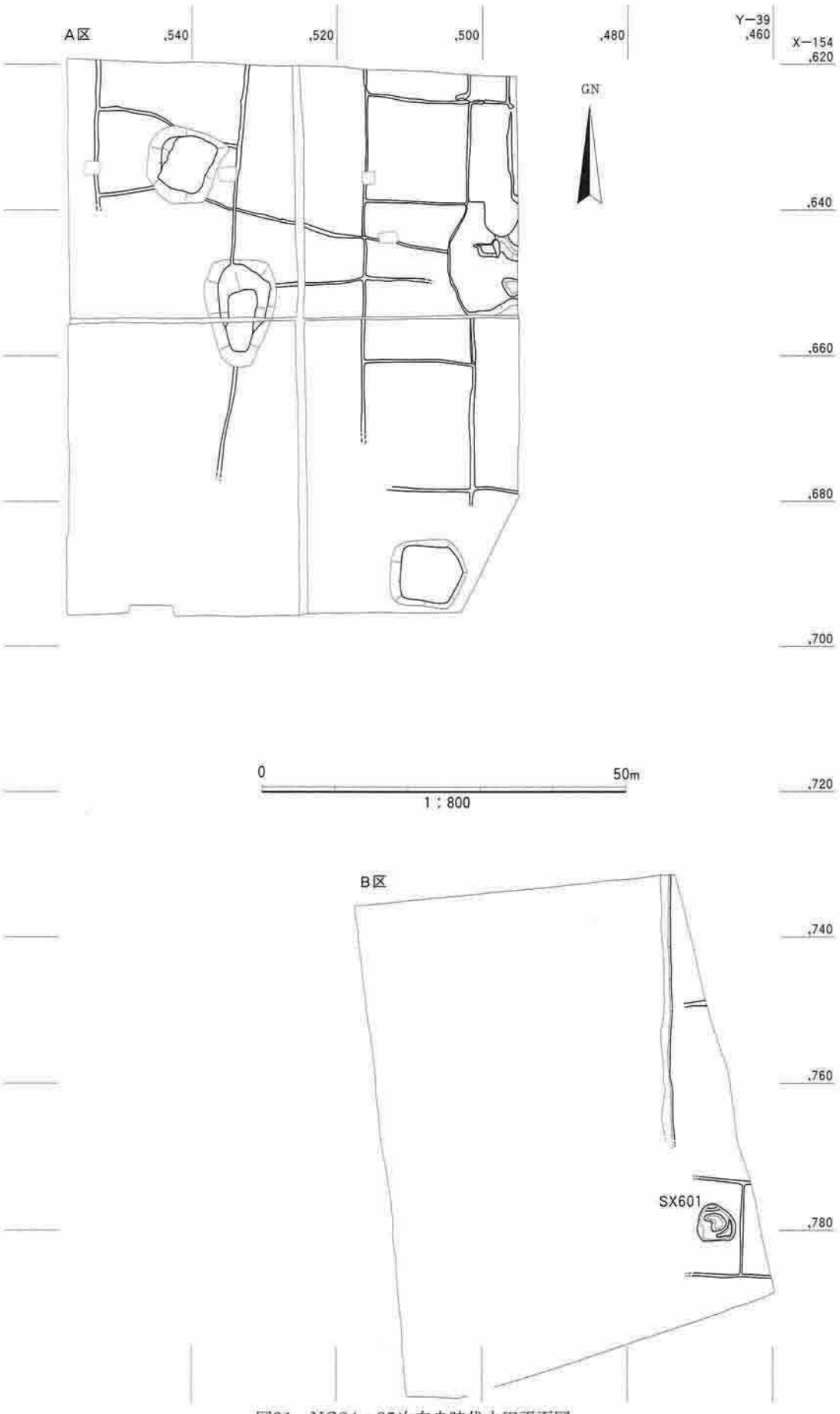


図91　NG84－25次奈良時代水田平面図

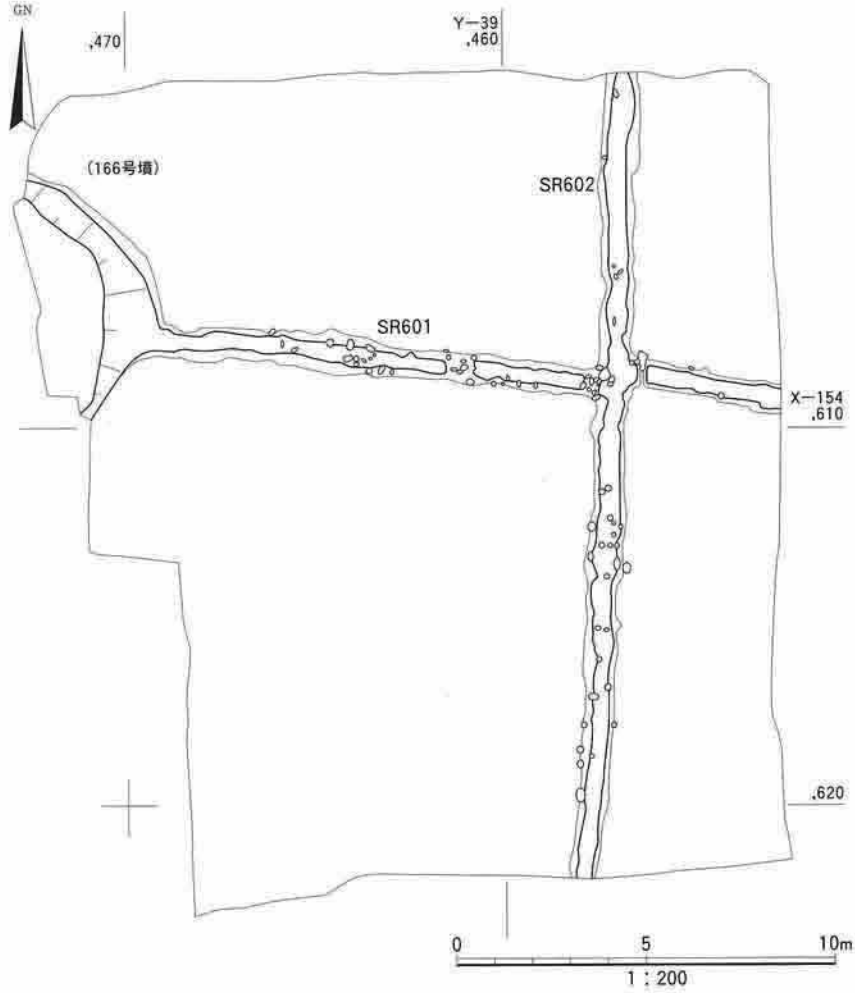


図92　NG86－91次奈良時代水田平面図

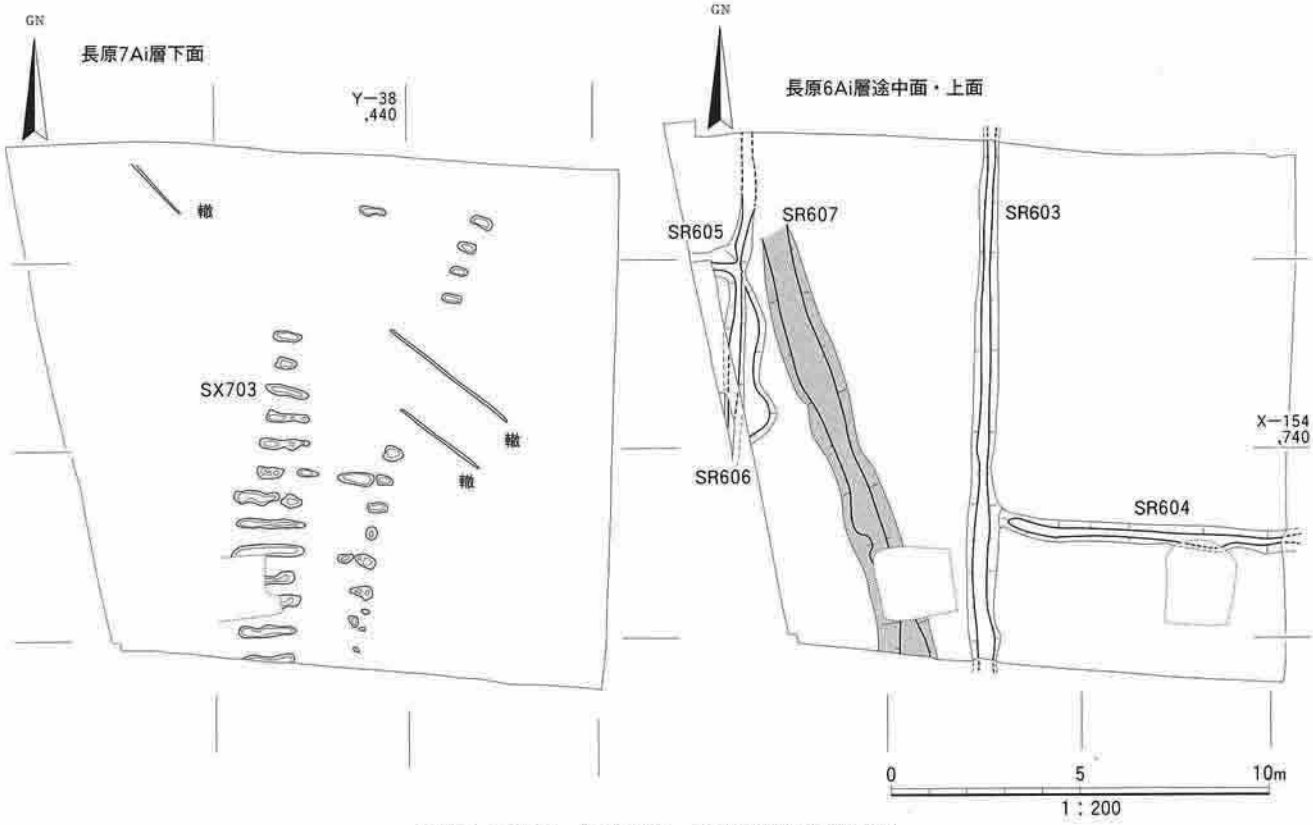


図93　NG89－36次飛鳥～奈良時代遺構配置図

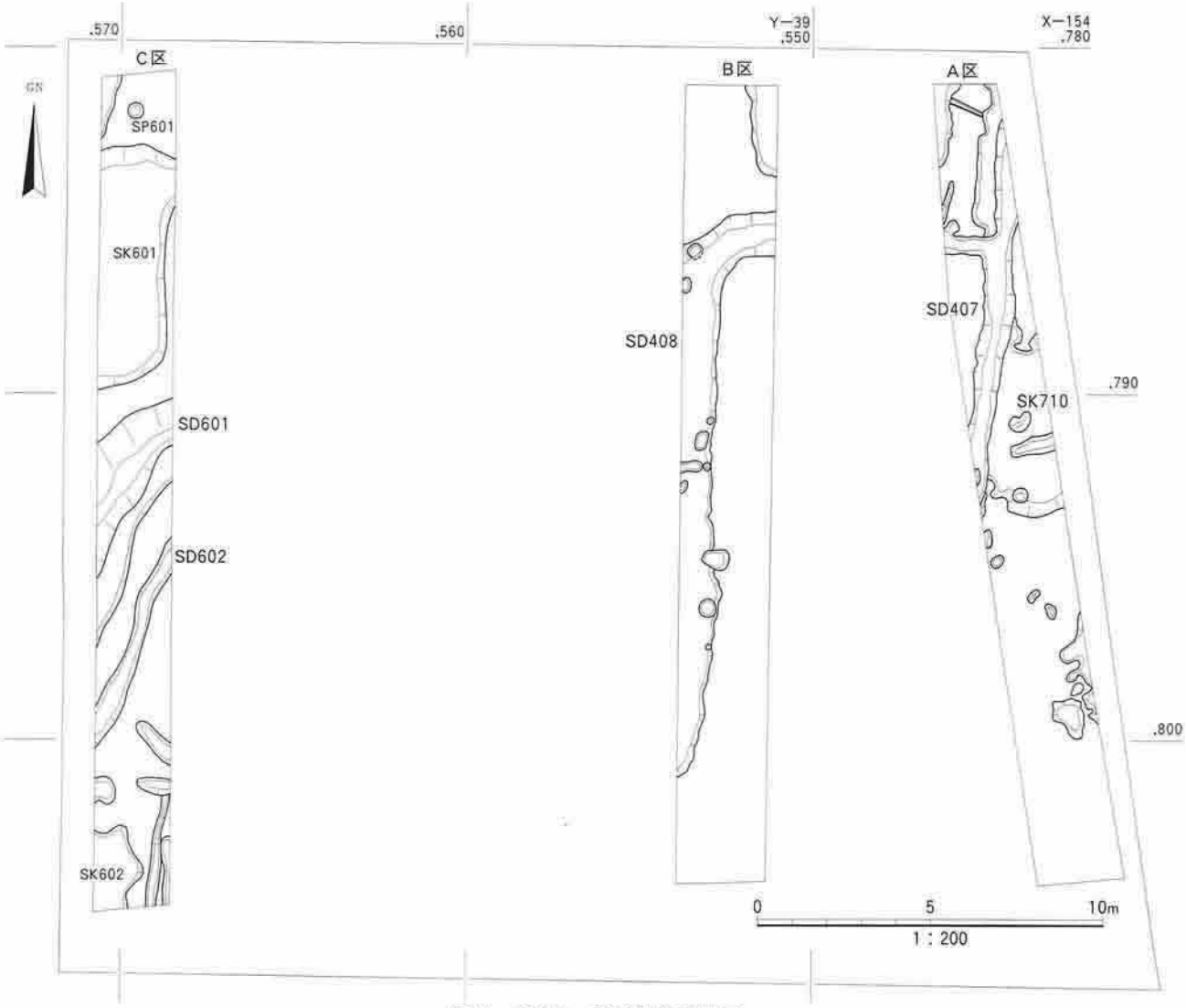


図94　NG90−66次遺構配置図

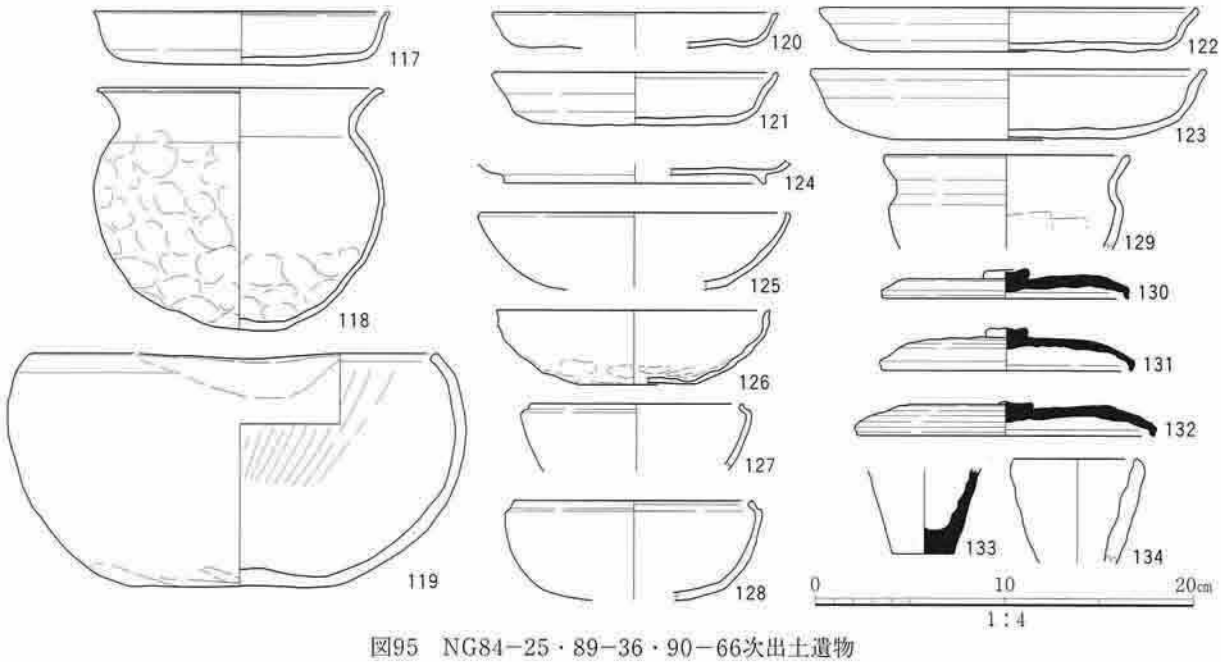


図95　NG84−25・89−36・90−66次出土遺物

NG84−25次SX601(118・119)、NG89−36次長原5層(117)、NG90−66次SD601(120～134)

NG89－36次調査

長原7Ai層下面で短い溝群SX703と車輪の轍が検出された(図93左・図版14中)。前者は東西方向の溝が縦一列に平行して並んでいるため、調査時は畠跡と考えられた。ただ、一定の幅で短い溝が並んでいることから、[京嶋覚2001b]で指摘されているような道路状遺構の可能性もある。

轍は長原7Ai層を切っていて、南東－北西方向に延びる。２条の轍の間隔は1.5mである。

長原6Ai層途中面では畦畔SR603～606が検出された(図93右)。いずれもほぼ正方位に延びる。これらは長原6Ai層の削り残しであり、長原6Ai層準と理解できる。

また、長原6Ai層上面では上記の畦畔とは方向が異なる畦畔SR607が検出された。この畦畔は長原6Ai層上に盛土して作られていることから、長原6Ai層準で水田が作り直されたことを示していると思われる。

なお、本調査地の長原５層からは土師器杯A117が出土した(図95)。117は口縁端部が内側に肥厚し、内面に暗文は見られない。平城宮土器Ⅴに位置づけられる。

NG90－66次調査

C区で奈良時代の溝SD601・602、土壙SK601・602、柱穴SP601が検出された(図94)。

SD601は南西－北東方向に延びる溝で、幅約２m、深さ0.3mある。埋土下層は水成堆積である。

出土遺物には土師器杯A120・121、皿A122・123、皿B124、椀125・126、鉢127・128、壺129、須恵器杯B蓋130～132、壺133、製塩土器134がある(図95)。120～123は口縁端部が弱く外反し、端部が内側に弱く肥厚する。いずれも暗文はない。130～132は全体的に器高が低く、口縁端部が外反しない。133の底部には糸切り痕が残る。これらの遺物はおおむね平城宮土器Ⅵに位置づけられる。

d．鎌倉時代の遺構と遺物

NG84－25次B区

長原4B層を作土とする水田が検出された(図96)。畦畔は東西方向、もしくは南北方向に延びる。東半は削平が進んでいて、畦畔の残りが悪かった。

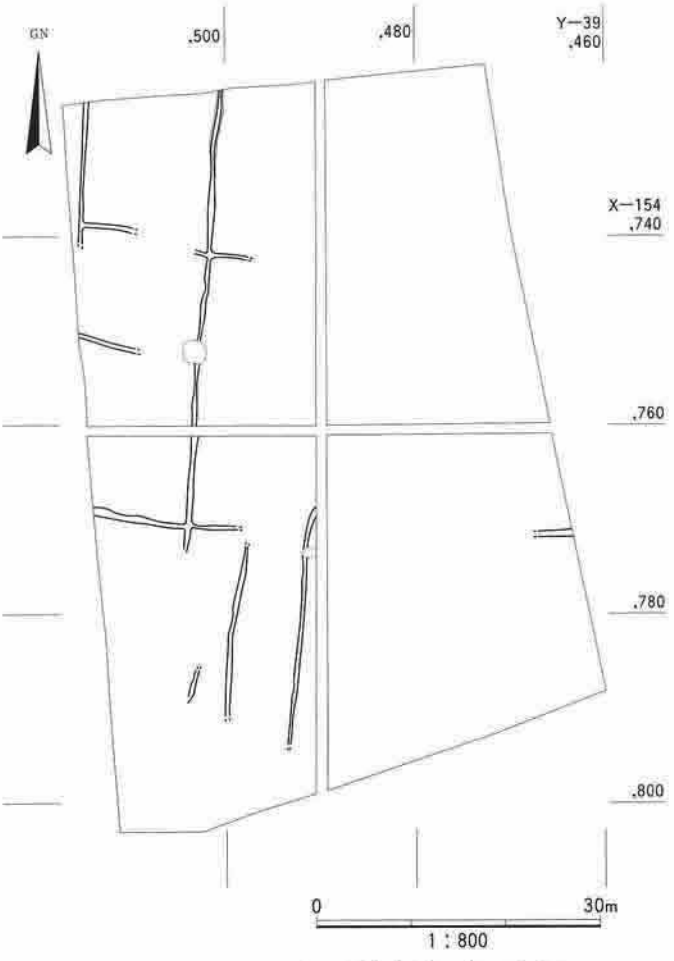


図96　NG84－25次B区鎌倉時代水田平面図

NG89－36次調査

長原4B層(図65の第4b層)下面で溝SD401～406、同層基底面で井戸SE401、土壙SK401～403が検出された(図97)。

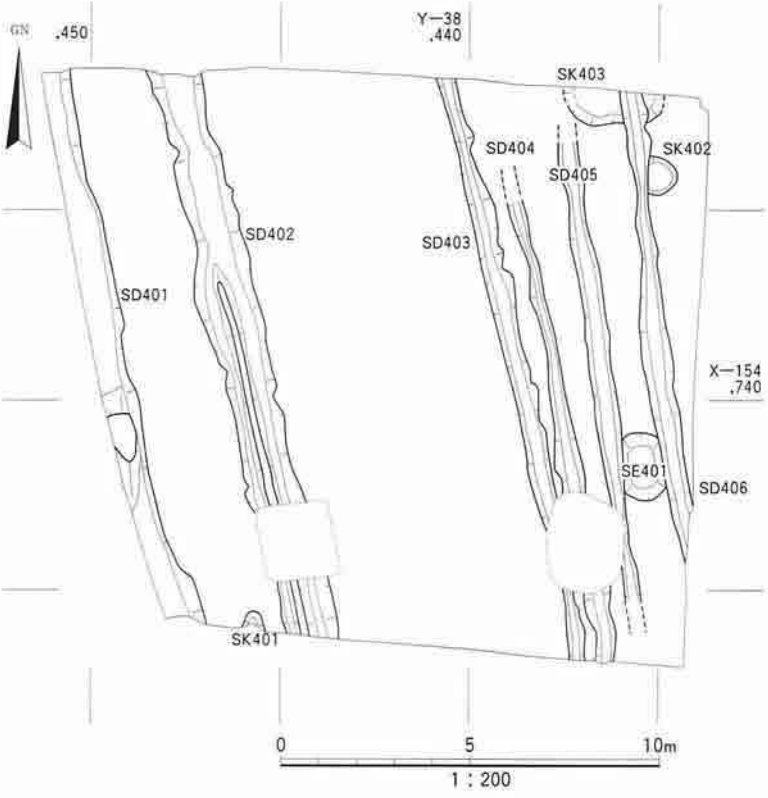


図97　NG89－36次鎌倉時代遺構配置図

SD401～406は幅0.5～0.8mあるが、深さは0.1m未満である。北から約15°西に振った方向に延びる。耕作関係のものであろう。

SE401は掘形が直径0.9m程度で、底に曲物が2段残っていた(図98)。深さは約0.7mで、当地の長原5層の下面よりやや下のレベルになる。

土壙SK401～403はいずれも深さ0.1m程度の浅いものである。

NG90－66次調査

A区でほぼ南北方向に延びる溝SD407が検出された(図94・図版14下)。SD407には、SD408が直交して取付く。

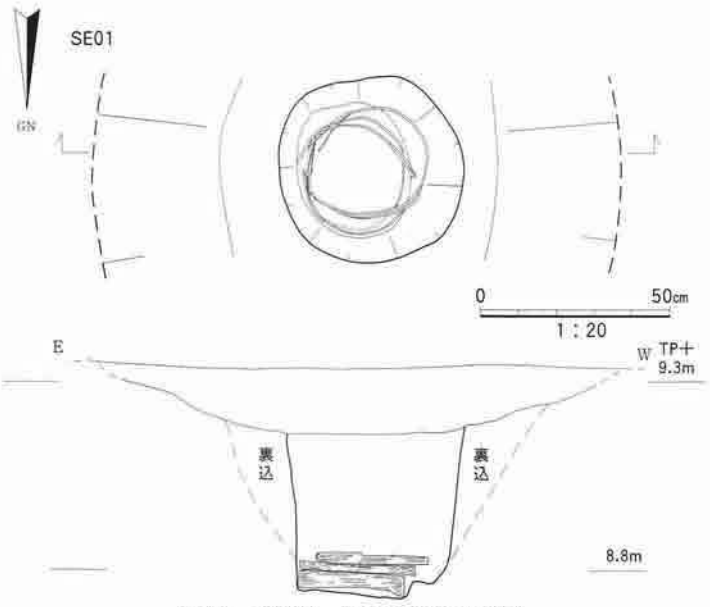


図98　NG89－36次SE401実測図

3)まとめ

本節で報告した地域は、古墳群と集落域が接する地域に当る(図99)。古墳は本節で報告した8基のほかに、110～112・197号墳も存在する[大阪市文化財協会1992c：pp.77－90]。もっとも古い須恵器を出す古墳は、TK73もしくは216型式の166号墳であるが、その南東に位置するNG96－47次調査地のSX01についても同じ時期の須恵器がまとまって出土していることから古墳の可能性が残される[大阪市文化財協会1999f]。そして、これに続いてON46段階の114・115号墳、TK208型式の100・113号墳、TK23型式の111号墳が登場する。また、110・111号墳では円筒埴輪に加え、朝顔・衣蓋・家・馬などの形象埴輪が伴っており、113号墳と共通する。

長原166号墳においては、長原古墳群では珍しく主体部が2基検出された。主体部には金環や鉄剣・ミニチュアの鉄製農工具が副葬されており、被葬者の階層を推定する手掛りとなろう。

集落域では計21棟の掘立柱建物・竪穴住居が検出された。大体TK208型式以降の須恵器が多いこ

とから、古墳の造営と集落の営みに重なる時期があることがわかる。なお、集落域ではTK10型式の須恵器がもっとも新しく、6世紀中頃に断絶する。これは長原遺跡の「西ムラ」の終焉の時期でもある。

（寺井）

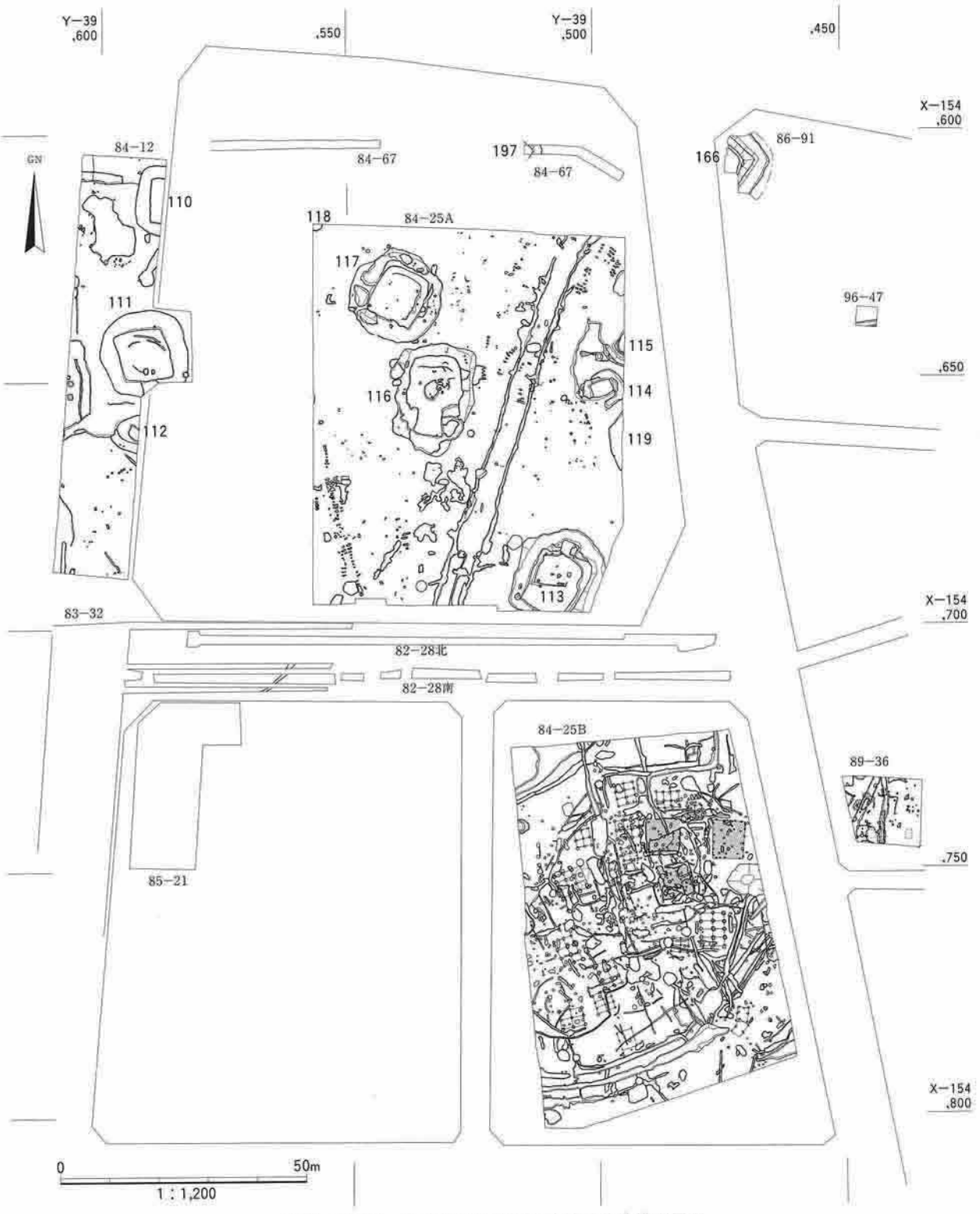


図99　NG84−25次調査地周辺の古墳時代遺構配置図

第２節　NG91－70次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では長吉長原西２丁目の東側に所在するNG89－15・91－70・93－14・93－80次調査を報告する（図100）。この一帯は1983年度や1985年度の土地区画整理事業に伴って多くの調査が実施されており、古墳時代中期や平安時代の集落跡が検出されている。

NG89－15次調査は当初は南北２m、東西40mのトレンチを２本設定して行っていたが、調査開始後まもなく、平安時代後期の掘立柱建物や区画溝が検出され、トレンチを拡張し、平面的な把握に努めた。その結果、畠作を想定しうるような遺構も検出され、屋敷地内の土地利用を知るうえで良好な資料を得ることができた。

NG91－70次調査は試掘調査（NG91－38次）で遺構が検出され、調査に至った。予算の都合上、工事対象地全体の調査ができず、４本のトレンチを設定して調査が行われることとなった。その結果、古墳時代中期の集落関係遺構が検出された。

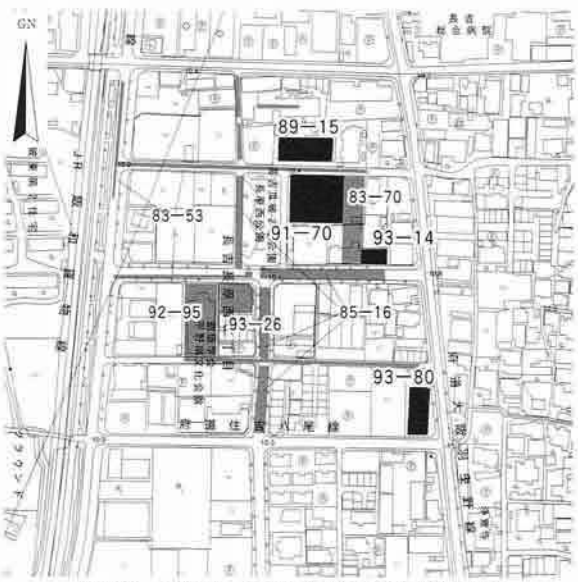


図100　NG91－70次などの調査地位置図

NG93－14次調査はマンション建設に先立って行われた。現代盛土を除去すると長原13層が露出し、古墳時代中期の掘立柱建物や溝が検出された。

NG93－80次調査は建物の基礎杭が打たれる部分に２本のトレンチを南北方向に設定して行われた（図114）。上記３調査とは異なって、地山が低くなり、長原２～7Bi層までの各層が残っていて、古墳時代の掘立柱建物や室町時代の東西方向の溝が検出された。

２）調査の結果

ｉ）層序

当地区では、NG93－80次調査地以外の調査で現地表から浅いレベルで長原13層が検出された。NG93－80次調査地で標高が低いのは、「馬池谷」から延びた小さい谷が当地にかかっているためと思われる。図101・表16ではNG93－80次調査地の層序を示した。

ii）遺構と遺物

ａ．古墳時代の遺構と遺物

NG89－15次調査

SD701：北東－南西方向に延びる溝である（図102）。最大幅0.8mあり、方向的にNG83－53次調査

表16　NG93－80次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0	現代盛土	100					現代
2	2	オリーブ灰色含中礫粗粒砂～細粒砂	20					江戸時代
3a	3	灰白色極細粒砂	10	水成				室町時代
3b	3	灰黄色中～粗粒砂	10	水成		←水田・SD301		
3c	3	にぶい黄色含細礫シルト質細粒砂	10	作土			須恵器・土師器・瓦・瓦質土器	
3d	3	灰黄褐色含細礫細粒砂質シルト	10～20	作土				
4a	4A	暗い灰黄色極細粒砂～細粒砂	10	水成				鎌倉時代
4b	4Bi	灰色含砂礫粘土	60					
4c	4Biii～4C	灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂	15	作土			土師器・黒色土器	平安時代
5	5	灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂	5	水成				奈良時代
6	6	暗灰黄色シルト質粘土	15	作土		▼SD601		
7	7Bi	灰黄褐色粘土質シルト	10			▼SB702･703､SK705		古墳時代
8	13	オリーブ灰～灰白色粘土						旧石器時代

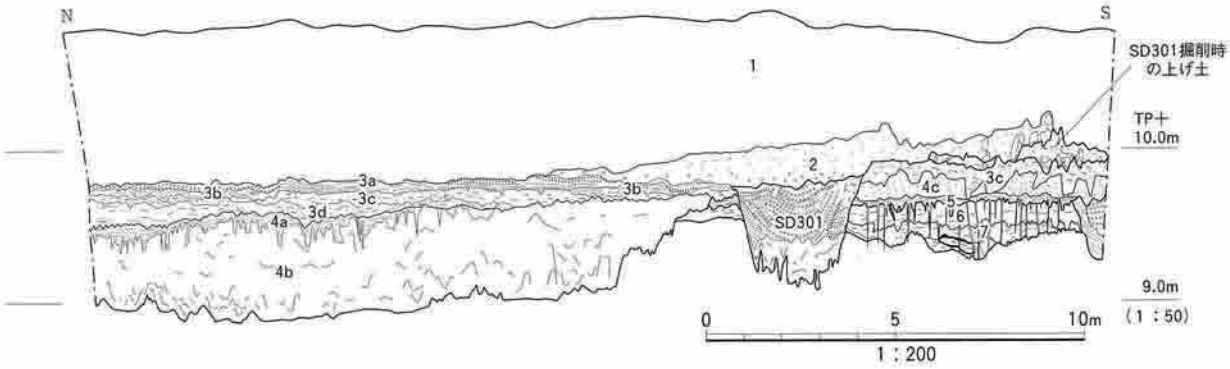


図101　NG93－80次２区東壁断面図

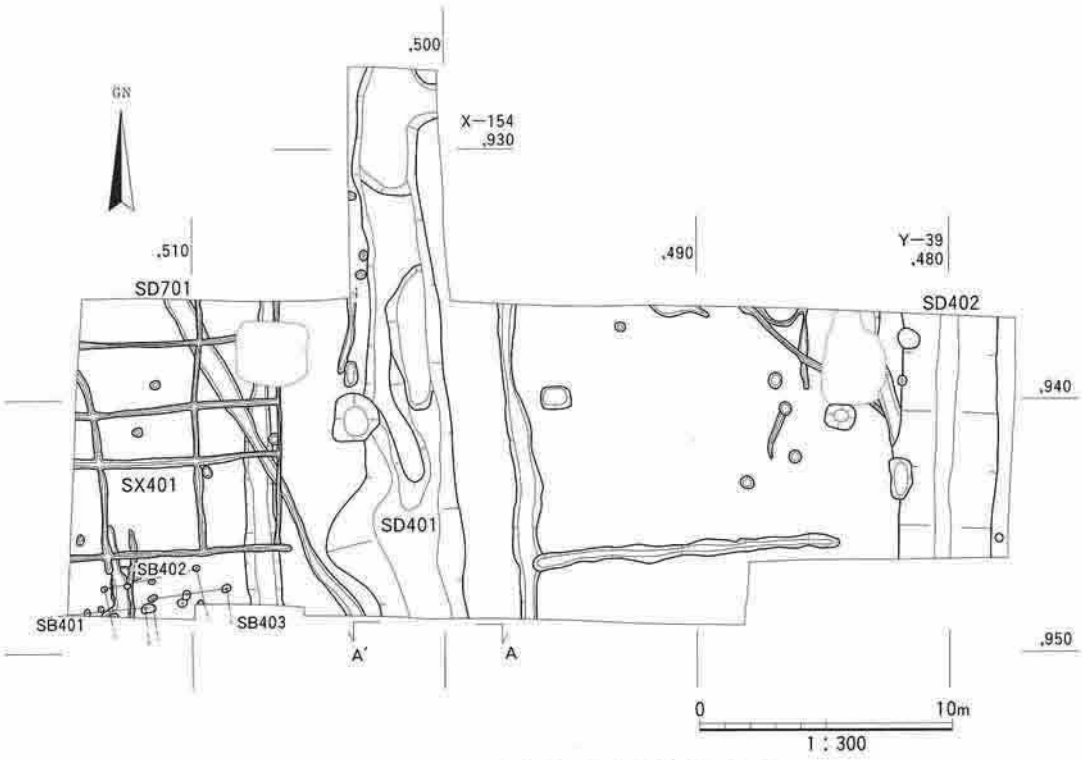


図102　NG89－15次古墳～鎌倉時代遺構配置図

地で古墳時代中期のSK37に切られる溝(註１)に繋がると思われる[大阪市文化財協会1992b]。

NG91－70次調査

長原４層基底面で土壙や井戸といった遺構が多数検出された(図103)。

SK701：Ⅰ区壁際で検出されたため、全容は明らかでないが、直径2.1m、深さは0.15mほどの土壙で、埋土は灰色シルトである。須恵器把手付椀27が出土した(図104)。

SK702：攪乱に当っているため、全容はわからないが、東西約2.5m、深さ約0.1mで灰色シルトが埋土である。須恵器杯身25・把手付椀26が出土した(図104)。

SK703：Ⅳ区で検出され、拡張して全体を把握した。東西約５m、南北約４mで、中央部を長原２層下面の溝によって攪乱されており、もっとも深い部分で0.05mしかなく、遺存状況もよくなかった。埋土は黒色極細粒砂～シルトで、少量ではあるが焼土・炭を含んでいた。この落込み内では柱穴などは検出されなかった。土器の組合せや埋土の状況なども、同一調査地内にあるNG83－70次調査のSK39と類似している[大阪市文化財協会1992b：pp.80－86]。これらの土壙は埋土・土器の組成・住居跡に似た平面形態などの共通点があるが、その機能については明らかでない。

出土遺物には土師器甕5～8、甑9、須恵器杯身13・14、杯蓋10～12、有蓋高杯20～22、同蓋15～19、無蓋高杯23・24がある(図104)。5は口縁端部が上に面をもち、体部が張ることから、布留式の系譜を引くものである。10～14は口縁端部に面をもつ。10は天井部に丸みをもつことから、有蓋高

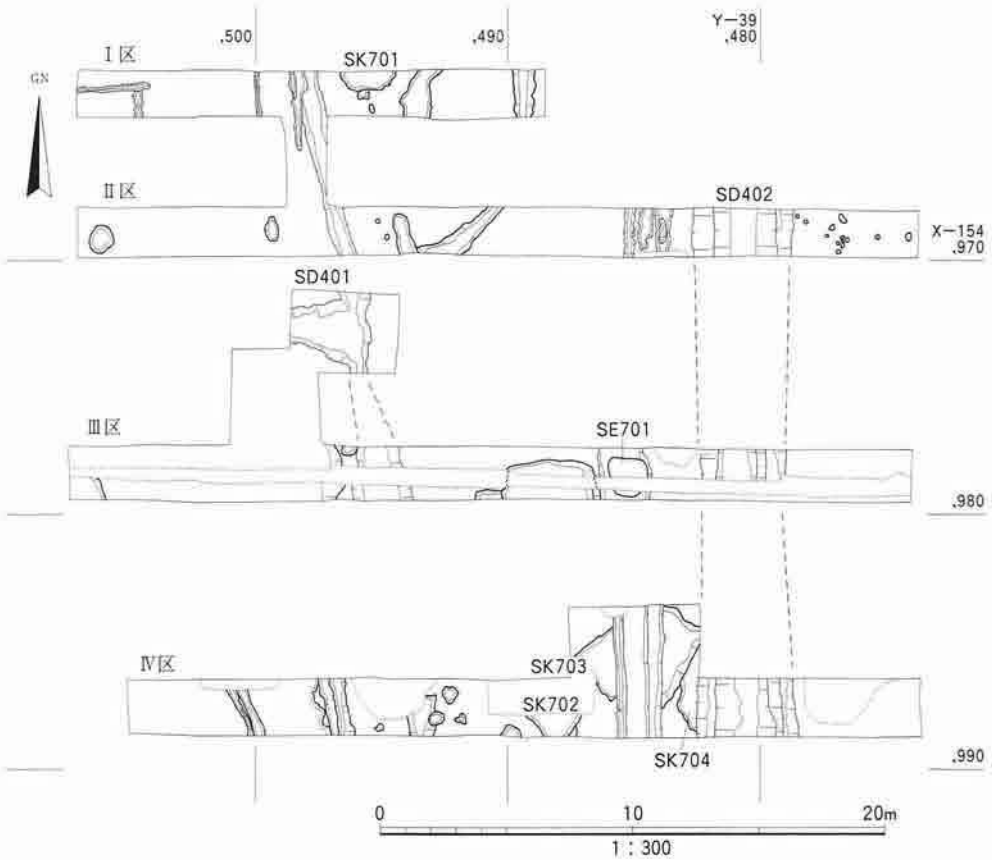


図103　NG91－70次古墳～平安時代遺構配置図

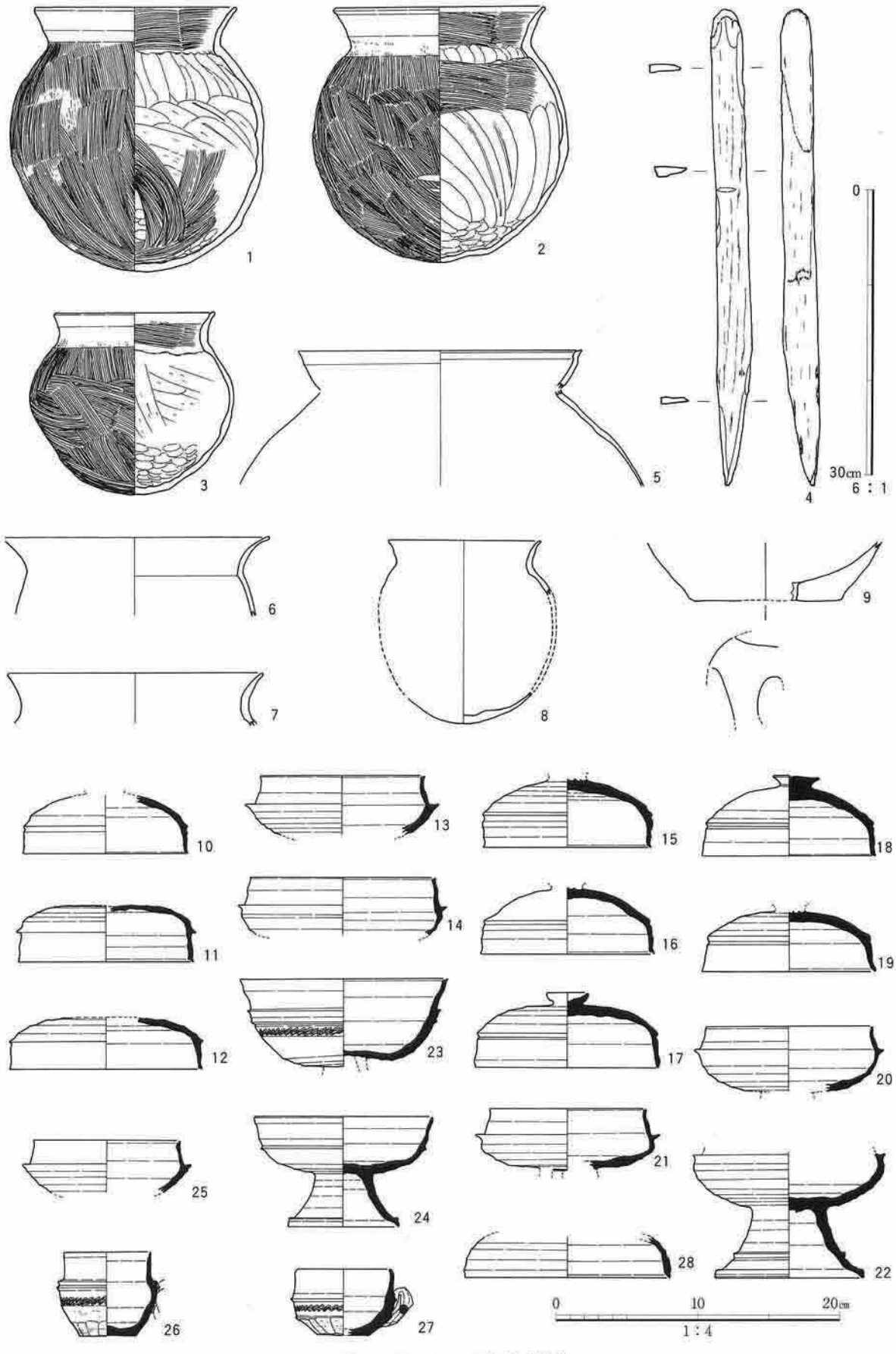


図104　NG91－70次出土遺物

SE701(1～4)、SK701(27)、SK702(25・26)、SK703(5～24)、SK704(28)

杯の蓋の可能性を残す。20・21には杯底部にスカシが穿たれた跡が残っているが、22～24にはない。これらの須恵器はON46段階の良好な一括資料である。

SE701：Ⅲ区の 長原２層下面の溝の基底面で検出された(図105・図版15上)。直径 1.65mある素掘りの井戸で、検出面より1.9mまで掘り下げたがそれ以上は危険と判断して掘削を断念した。検土杖を用いた探査によると深さは、検出面から約2.3mである。埋土はおおまかに上下２層に分けられた。下層は長原13～15層の偽礫で埋戻された層である。上層はラミナが顕著であることから自然に堆積した層である。しかし、上層の中にも長原13層に由来する大きな偽礫が含まれていることから、水漬きの状態で埋戻されたか、あるいは掘形の崩落があったものと考えられる。また、下層の上方からは完形の土師器甕1～3と剣形木製品4が出土した(図104)。1～3は体部外面を全面ハケで仕上げている。4は先端を尖らせて加工されている。

その他、SK704などでは６世紀に下る須恵器杯蓋28が出土した(図104)。本調査地の南側にあるNG85－16次のSD52[大阪市文化財協会1993a：pp.103－111]やNG86－41次のSE01[大阪市文化財協会1993b：pp.43－46]も同時期の遺構である。

NG93－14次調査

現代作土基底面で掘立柱建物や溝などが検出された(図106・図版15下)。

SB701：調査地中央部で検出された小型の掘立柱建物で、梁

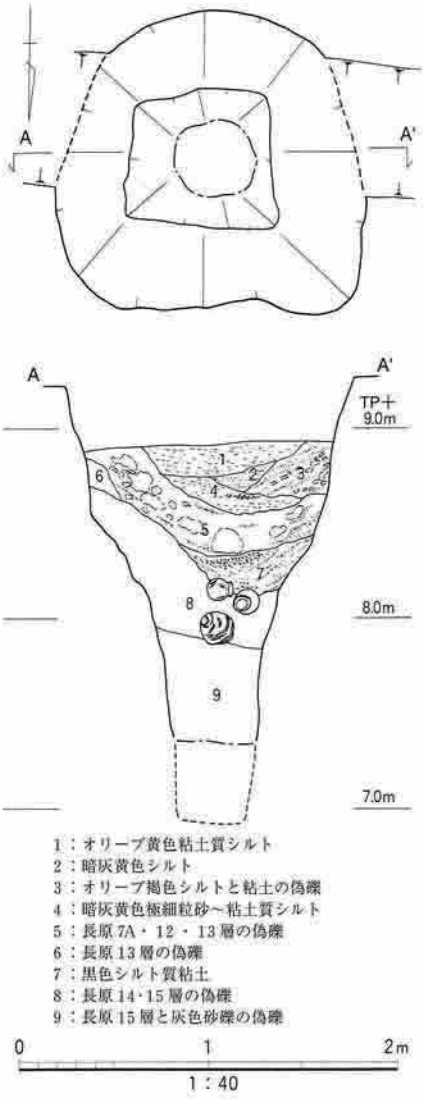


図105　NG91－70次SE701実測図

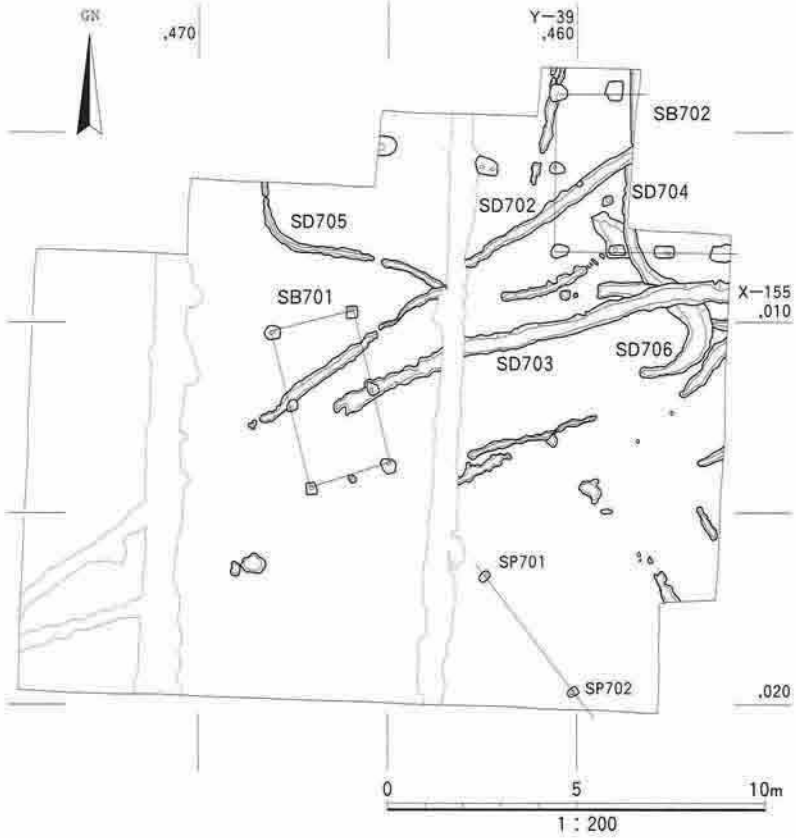


図106　NG93－14次古墳時代遺構配置図

行は2間(2.15m)、桁行は2間(4.25m)である。柱穴は一辺0.8m前後の隅丸方形で、深さは約0.2m、柱痕跡の直径は0.1mほどである。長軸の方位は北で西へ14°振る。

SB702：調査地北西隅で検出された掘立柱建物で、梁行は2間(4.2m)、桁行は3間(4.5m)以上である。柱穴は一辺0.5m程度で、深さ約0.4～0.5m、柱痕跡は0.1～0.15mほどである。長軸の方位はほぼ正東西である。

SD702：幅0.3m、深さ0.1mで、にぶい黄色極細粒砂を埋土とする。NG83－70次調査のSD37と一連のものである[大阪市文化財協会1992b：p.75]。

SD703：幅0.5m、深さ0.1mで、灰黄色極細粒砂を埋土とする。底面は凹凸が激しい。埋土や切合いからみてこの溝は溝群の中でもっとも新しい。

SD704：幅0.3m、深さ0.1mで、灰黄色粘土質極細粒砂を埋土とする。SD703に切られるが、本来は東に延びていたと思われる。

SD705：幅0.2m、深さ0.05mで、灰色極細粒砂を埋土とする。

SD706：幅0.8m、深さ0.15mで、灰黄色極細粒砂を埋土とし、馬蹄形の平面形態を有する。性格は不明である。

SP701・702：一辺0.3m、深さ0.35mの掘形をもつ柱穴で、NG85－16調査で検出されたSB03[大阪市文化財協会1993a：p.61]に柱筋がほぼ一致する(図115)。両者は一連の遺構である可能性があり、一連であればSB03は柵の可能性がある。

NG93－80次調査

西区の中央で掘立柱建物、南端で土壙が検出された(図107)。

SB703・704：いずれも側柱建物である。SB703は北東－南西方向に延び、2間(2.2m)×1間(1.1m)以上の規模である。SB704は北からやや西に振った方向に延び、南北2間(2.2m)以上、東西2間(2.0m)以上の規模である。

SK705：深さ0.2m程度の浅い窪みで、調査区外に広がる。焼土

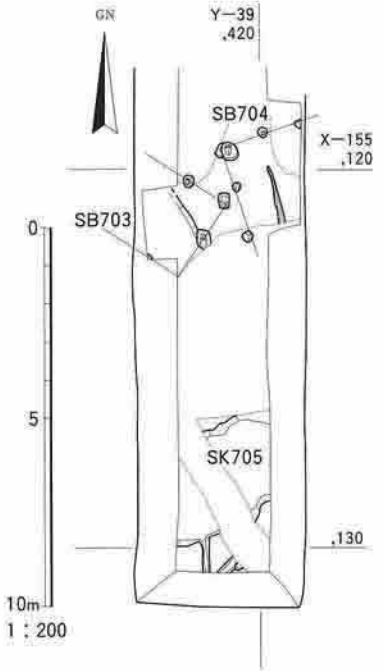


図107　NG93－80次古墳時代遺構配置図

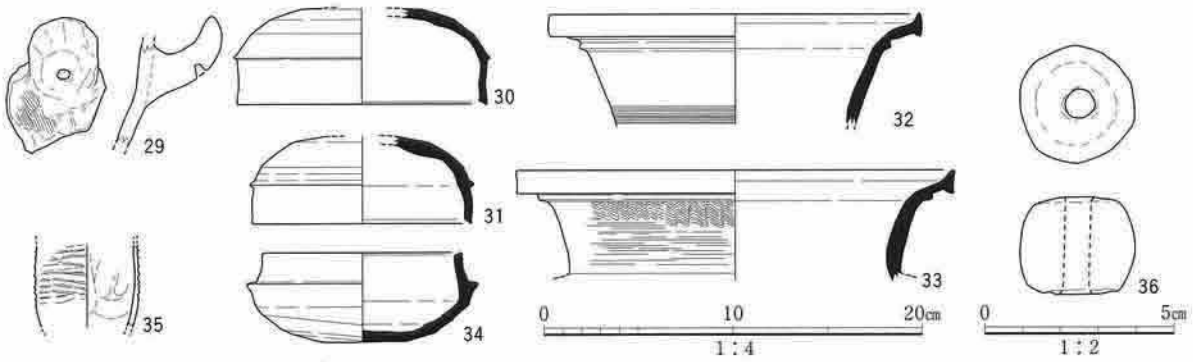


図108　NG93－80次出土遺物

SK705(29～33)、長原7Bi層(34・35)、SD601(36)

や炭、スサを含む焼土塊とともに須恵器・土師器が出土し、土師器把手29、須恵器杯蓋30・31、甕32・33を図示した(図108)。

また、東区の南端では炭化物のラミナが数層にわたって堆積している部分があった。ここから須恵器杯身34、製塩土器35が出土した(図108)。34は底部が丸みを帯び、口縁部の端面はあいまいな面をもつ。35は外面に横方向の平行タタキ、内面に縦方向のナデを施す。色調は暗灰色で、1㎜大の砂粒を多く含む。

b．飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG93－80次調査

西区の長原6層基底面で溝SD601が検出された(図109・図版16上)。上端の幅1.2m、深さ0.7mのV字溝である。溝は、下層に細礫～極粗粒砂の水成層が薄く堆積したのち、ラミナの発達した粘土層で徐々に埋没し、最後に偽礫を多く含む埋土で埋められている。出土遺物はSK705を掘削した際に混入したと考えられるものがほとんどであり、遺構の明確な時期を決めることができなかったが、検出面や埋土から長原7A層準、もしくは6Bi層準と思われる。

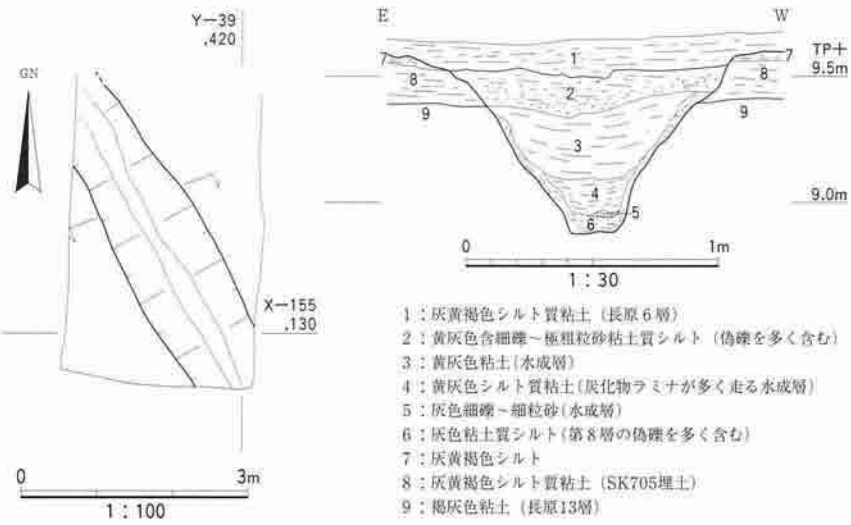


図109　NG93－80次西区SD601実測図

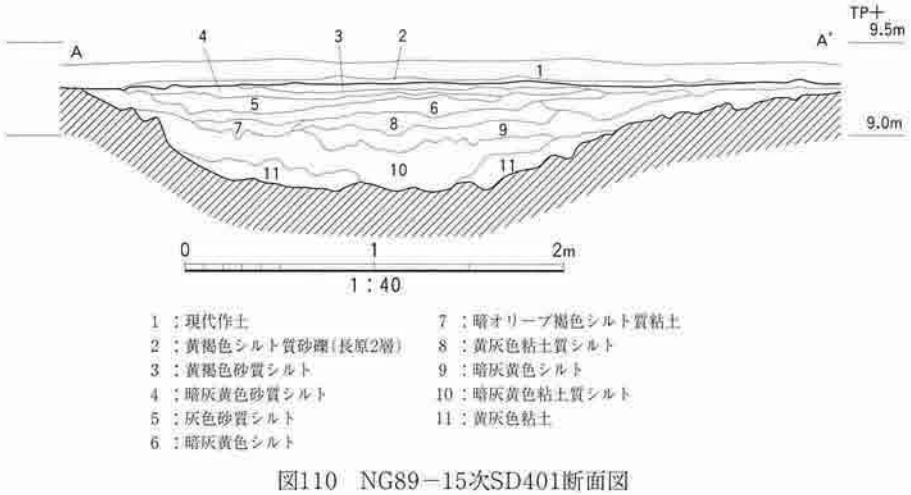


図110　NG89－15次SD401断面図

この溝の北側の延長上にはNG85－16次のSD32がある。もし、同一の溝であるならば、少なくとも45mにわたって延びることになる。

36はSD601下層から出土した須恵質の土製品である(図108)。最大径3.1cm、高さ2.5cmの上下の角がとれた円柱状のものであり、中央に径0.7cmの孔がある。重さは31.16gである。土錘の一種と思われる。

c．平安～鎌倉時代の遺構と遺物

NG89－15・91－70次調査

区画溝や掘立柱建物、畠状遺構などの遺構が検出された(図

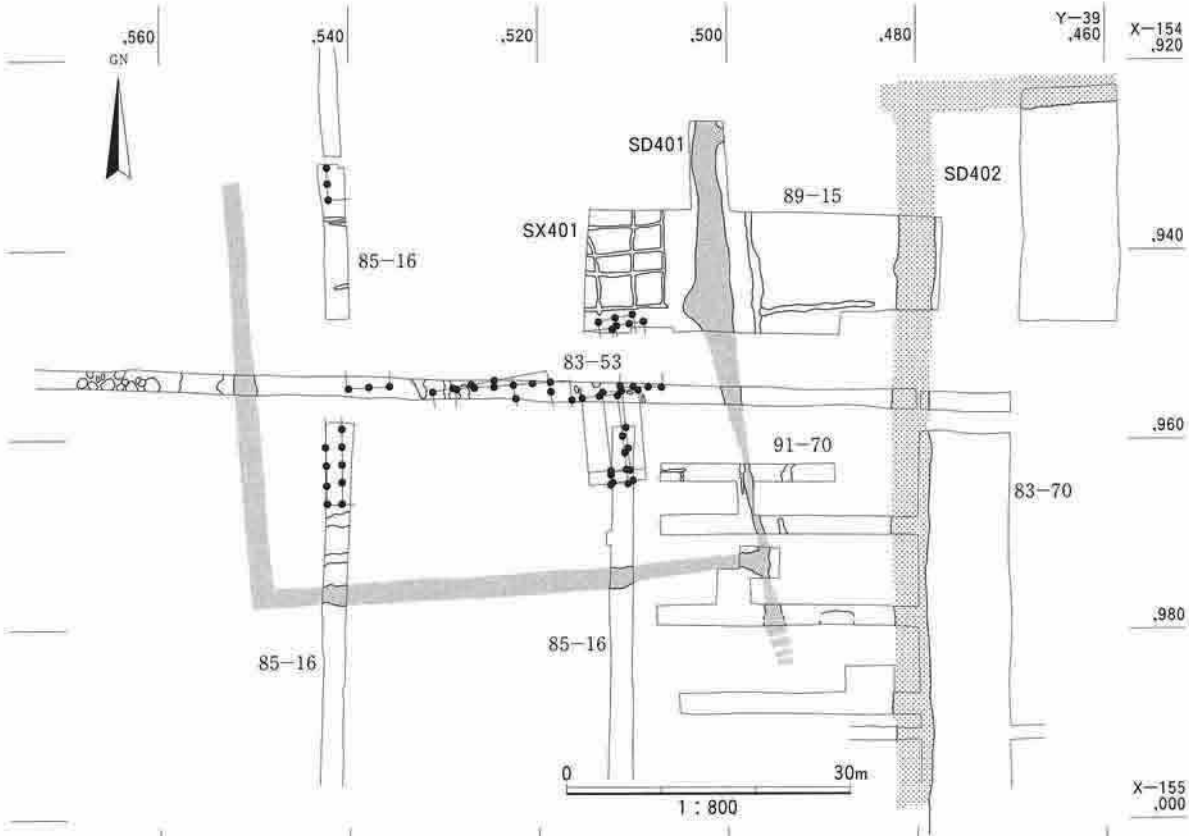


図111　NG89－15・91－70次調査地とその周辺の平安時代遺構配置図（[大阪市文化財協会1993a]の図92に加筆）

102・111、図版16中）。

SD401：両調査で検出された溝である（図110・111、図版16下）。NG83－53・85－16次調査でも一連の溝が検出され、53m四方の屋敷地を区画する溝と考えられる[大阪市文化財協会1993a：p.129]。この溝はNG89－15次調査地でもっとも残りがよく、幅３m、深さ0.6mあり、断面は逆台形を呈する。NG91－70次調査では既往の調査からⅡ・Ⅲ区で区画溝の隅が検出されると予想され、精査した結果、X＝－154,972.9m、Y＝－39,496.3mの地点でやや西に鋭角に屈曲するのを確認できた。同Ⅲ区では南へも延びているのが確認されたが、Ⅳ区では検出されず、これ以南に延びないと考えられる。

出土遺物にはNG89－15次調査の黒色土器Ａ類椀**37**・瓦器椀**38**がある（図113）。**38**は口縁端部内面に沈線が巡り、内外面ともに細かいヘラミガキが施されている。楠葉型の11世紀後半に位置づけられる。なお、NG83－53・85－16次

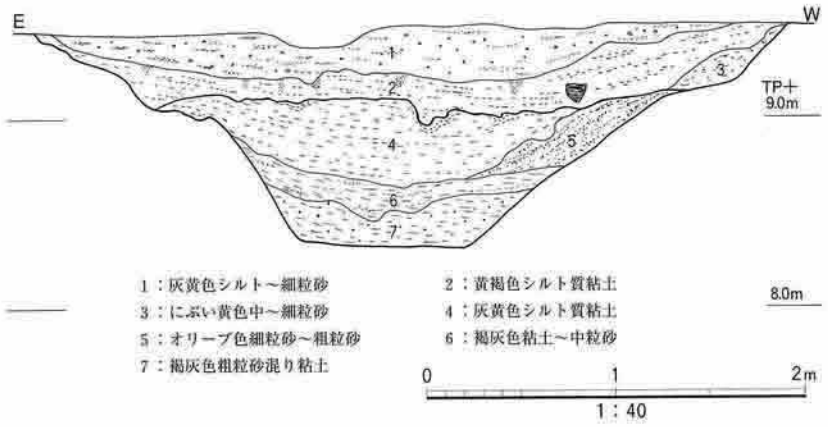


図112　NG91－70次SD402断面

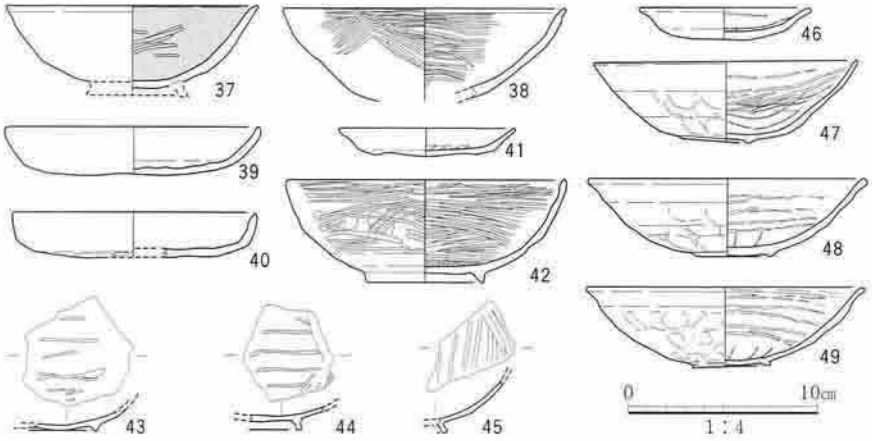


図113　NG89－15・91－70・93－80次平安～鎌倉時代出土遺物
89－15次SD401(37・38)、91－70次SD402(39～45)、93－80次SX402(46～49)

調査では灰釉陶器碗や黒色土器B類椀などの遺物が出土した。

SD402：両調査地で検出された南北方向の溝である(図111・112、図版15中)。

NG83－70・85－1次調査でも一連の溝が検出され、[大阪市文化財協会1992b：pp.129－136]では坪境溝として報告されている。幅4m、深さ1.4mあり、断面は整った逆台形で、二段掘りになる部分もある。埋土はおおまかに2層に分かれ、上層の堆積物は砂質、下層は粘土質で、ともにラミナが観察できるが、下層の方がより顕著である。両層の堆積の間には時間的な間隙があったらしく、下層上面で足跡が検出された。NG91－70次調査では下層から土師器皿40、瓦器椀42・44・45、上層から土師器皿39、瓦器皿41・椀43が出土した(図113)。下層出土の瓦器はすべて外面に磨きが施さ

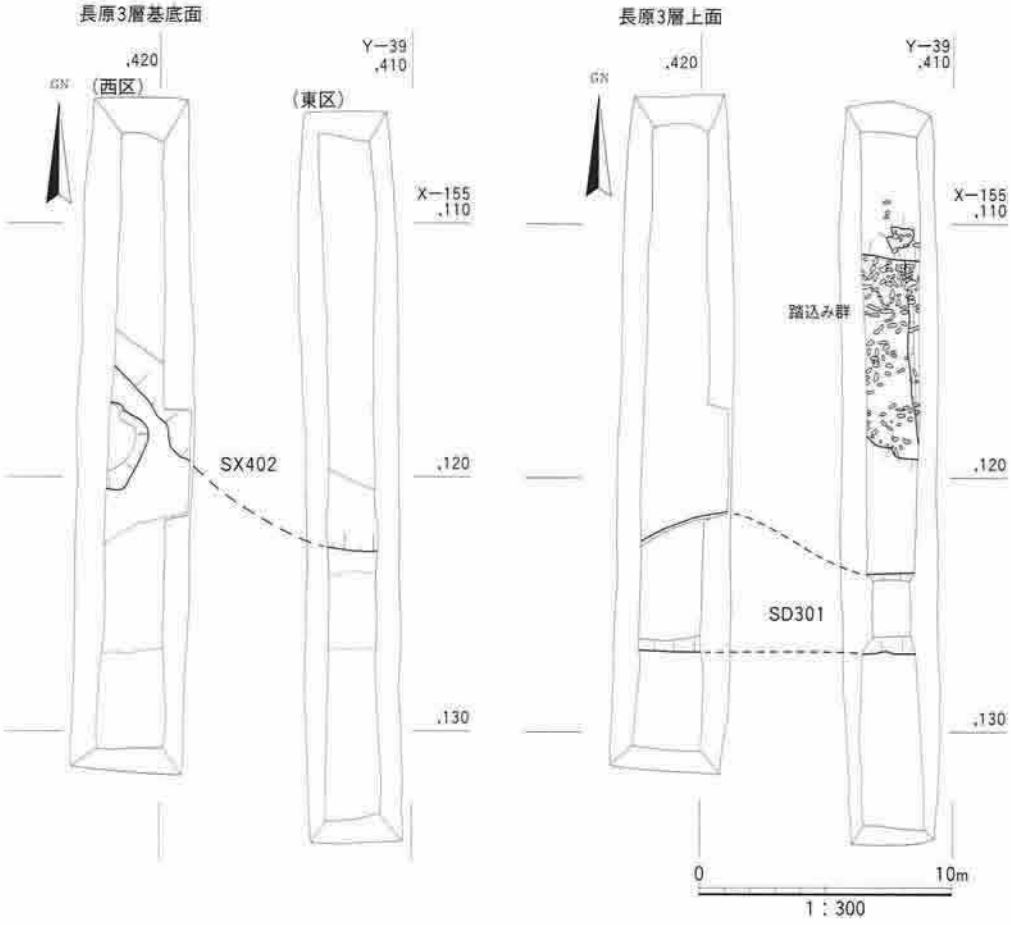


図114　NG93－80次鎌倉～室町時代遺構配置図

れていることからⅡ－2期に当り、12世紀中頃に位置づけられる。また、上層の出土遺物は13世紀初頭のものと思われる。

SB401～403：NG89－15次調査地の南西隅で検出された、いずれも北面が検出された東西2間の掘立柱建物である(図102)。南側のNG83－53次調査でも柱穴が検出されているが、建物としてつながらないため、どのような平面形態になるかは不明である。

SX401：SB401～403の北側で検出された、溝で格子状に区切られた遺構である(図102)。溝は幅0.2～0.3m、深さ0.05mある。それぞれの溝には切合いがなく、建物群にまで延びていないことから、畠の区画溝と思われる。

NG93－80次調査

SX402：長原3層(図101の第3c層)基底面で検出された落込みで、深さは0.6m程度ある(図114左)。埋土は水成の粘土層であるが、ラミナが著しく変形している。瓦器Ⅲ46、椀47～49が出土した(図113)。ミガキが疎で、高台が退化していることから、Ⅲ－3期で13世紀前半に位置づけられる。

d．室町時代の遺構

NG93－80次調査の長原3層(図101の第3c層)上面で、踏込みの残る水田面と東西方向の溝SD301が検出された(図114右)。SD301は幅3～5m、深さ0.6mある。南側に分布する客土はこの溝を掘り上げた際の排土と思われる。

なお、この溝はNG85－1次調査で検出された東西方向の坪境溝より200m南に当り、条里推定地割線上からややはずれることから、坪境の溝ではなく、灌漑用の水路と思われる。

3)まとめ

当地域は古墳時代長原遺跡の「西ムラ」に当り、近隣の調査も進展していることから全容が明らかになりつつある。今回報告対象の調査では掘立柱建物・井戸・土壙・溝が検出され、近隣では竪穴住居もある(図115)。

出土遺物は須恵器型式でいうON46段階からTK10型式まであることから、5世紀後半から6世紀中頃の時期幅があり、これは「西ムラ」の存続時期と一致する。

平安時代中期には方形区画溝SD401を有する屋敷地が登場する。区画は約53m四方の約2.5段の正方形になると推定される[大阪市文化財協会1992b：pp.132－136]。区画内には畠と考えられる遺構や掘立柱建物があり、NG83－53次調査ではトリベと思われる土師質小椀が、火災を被った建物の柱穴から出土している。溝の埋土から11世紀後半の瓦器38が出土していることから(図113)、この時期には廃絶していたと思われる。

上記の屋敷地の廃絶後には正方位の溝SD402が掘削される。この溝はNG92－2次出土の木簡(第Ⅳ章第2節)の成果を基にすると、長原里の25坪と26坪を画することになる。　(寺井)

註)

(1)[大阪市文化財協会1992b]の図103では、図示されているが遺構名はついていない。

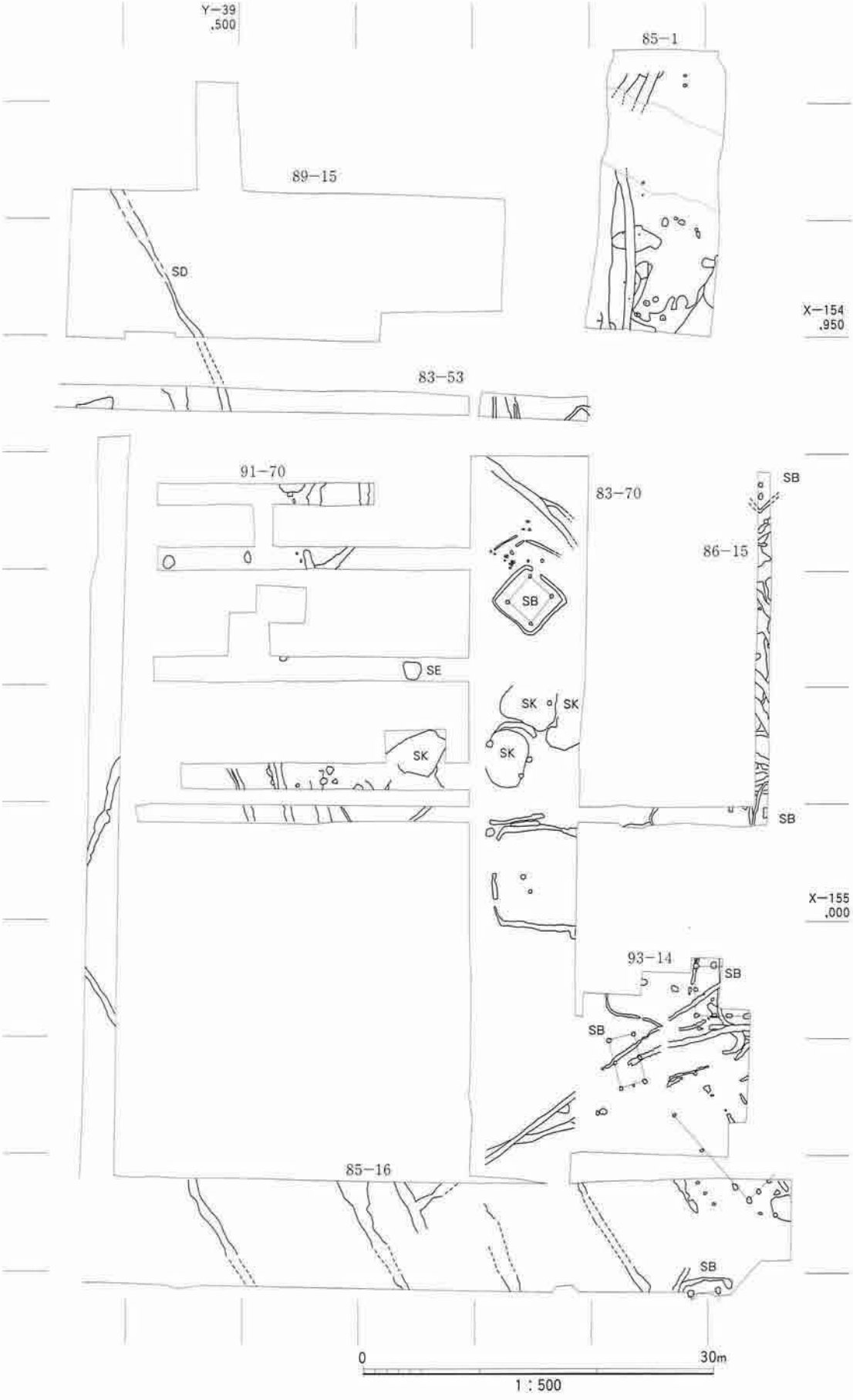


図115　調査地周辺の古墳時代遺構配置図

第３節　NG92−95および93−26次調査

１）調査地と周辺の概要

本節では長吉長原西２丁目の西側に所在するNG92−95・93−26次調査を報告する（図116）。

NG92−95次調査は[岡村勝行1993]で紹介された調査である。掘立柱建物が多数検出された。

NG93−26次調査地は前述のNG92−95次調査地の東隣に位置する。長原7Bi層がきわめて良好に残っていて、古墳時代中期の竪穴住居や井戸など多くの遺構が検出された。

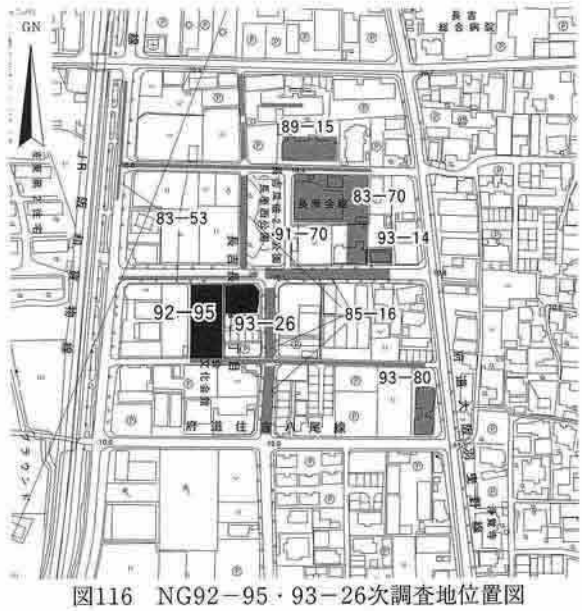


図116　NG92−95・93−26次調査地位置図

２）調査の結果

ｉ）層序

NG92−95次調査地では長原３層を除去すると、長原13層が露出し、古墳時代の遺構が現れた。NG93−26次調査地では、長原２～３層を除去すると長原7Bi層が検出された。この地域の長原２～３層は厚さ0.1～0.2m程度である。

ii）遺構と遺物

NG92−95次調査

長原３層基底面で古墳時代中期の掘立柱建物・柵・柱穴・溝といった遺構が検出された（図117・図版17上）。柱穴は組合うものも含め約200基が検出され、個所が４個所に集中する。これらの群を北からＡ～Ｄ群と呼称し、遺構の説明を行う。

Ａ群では溝３条に加え、柱穴は約60基検出され、掘立柱建物５棟、柵１条が検出された（図118）。

SB701：２間以上（3.5m）×２間以上（3.3m）の総柱建物である。柱掘形は0.4m×0.5mの隅丸長方形が主体で、柱痕跡は直径0.1～0.15mである。**SB702**と平行するが、1.5mと近接し、柱掘形の長辺の向きが異なる。

SB702：２間以上（3.7m）×２間以上（3.0m）の総柱建物である。隅柱が深い特徴を考えると、３間以上ある可能性が大きい。柱掘形は大きいもので一辺0.7mだが、0.4m×0.5mの隅丸長方形が一般的である。柱痕跡は0.13m前後である。

SB703：２間（3.5m）×３間（3.0m）の側柱建物である（図版17中）。柱掘形は0.4m×0.5mの隅丸長方形で、柱痕跡は0.1～0.15mで、0.13m前後が多い。**SB701**の柱穴を切る。

SB704：２間（2.7m）×２間（3.6m）の側柱建物である。柱掘形が0.2m×0.3mの小型の隅丸長方形が主体となることが特徴的である。柱痕跡は0.1～0.13mで、0.1mが多い。

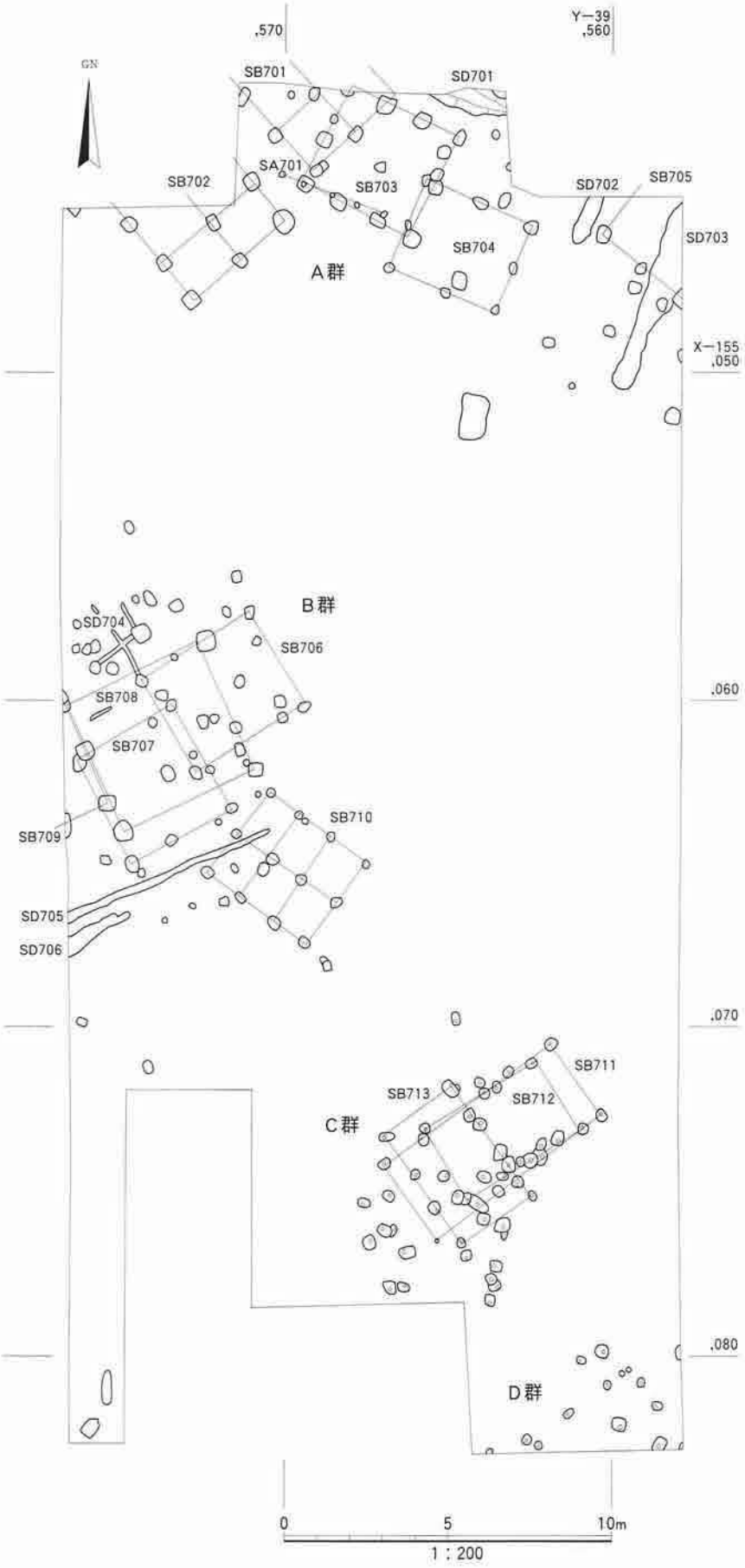


図117　NG92−95次遺構配置図

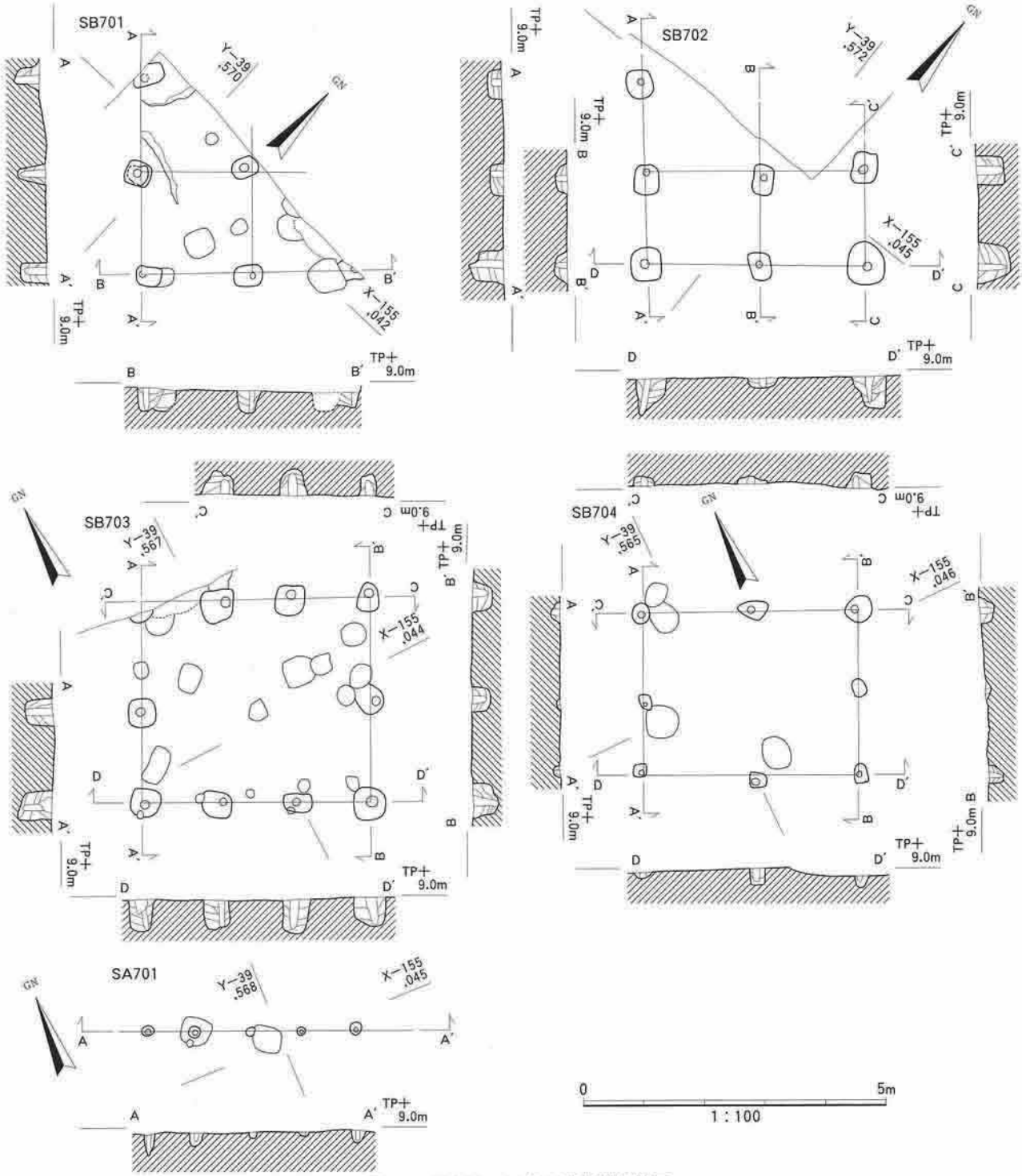


図118　NG92－95次A群遺構実測図

SB705　2間(3.0m)分の柱列が検出され、建物は調査区北東側に延びると思われる。柱掘形は0.5m×0.4mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.15mである。

SA701：4間(3.4m)分の柱列が検出された。柱掘形は0.15～0.2mの円形で、柱痕跡は0.05～0.07mである。SB703を切り、SB704と方向軸が近い。

SD701：調査区北端で検出された東西方向の幅1.0m、深さ約0.2mの溝である。TK23もしくは47型式と思われる須恵器甕の破片がまとまって出土した。建物群を区画する溝の可能性がある。

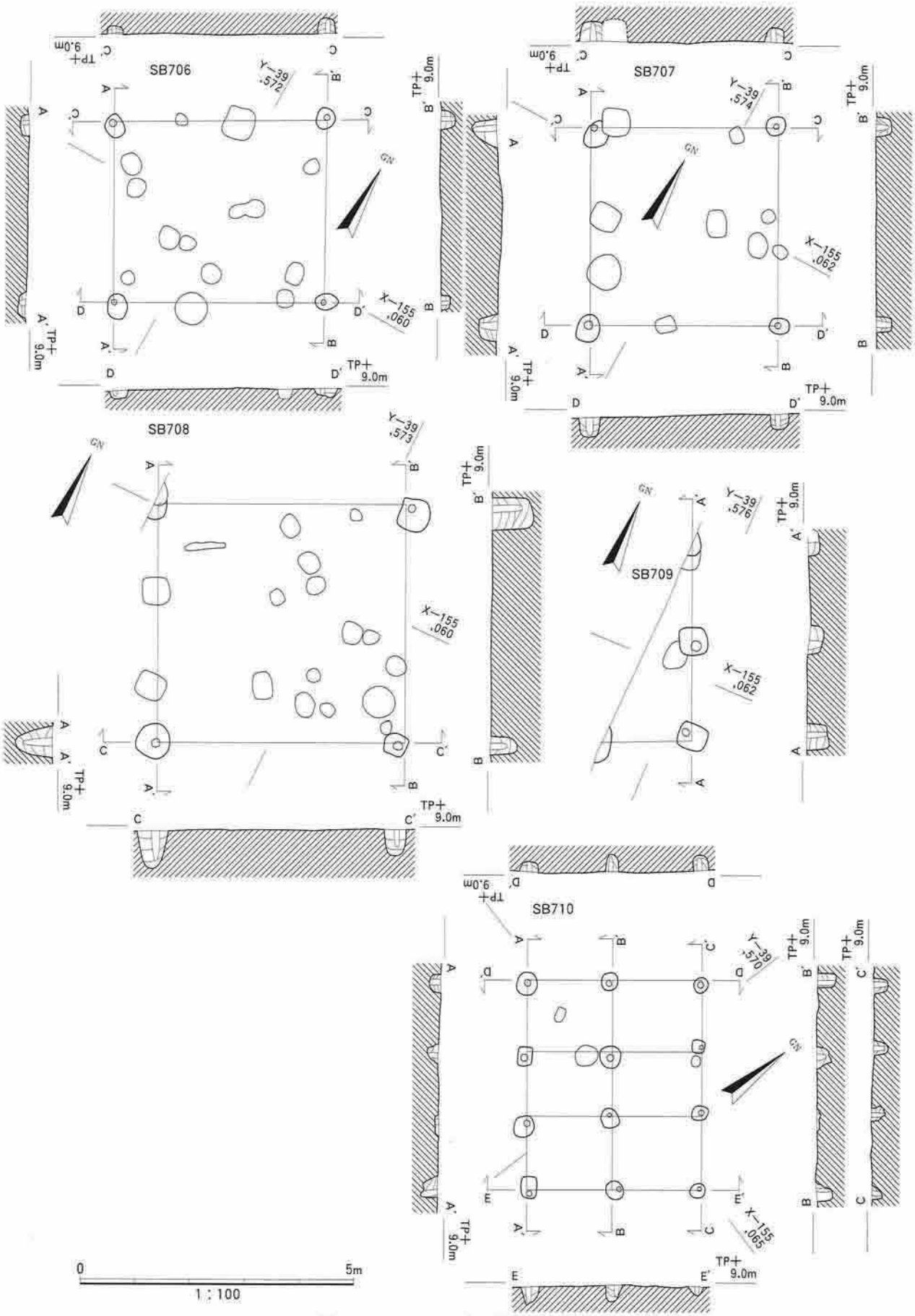


図119　NG92−95次B群遺構実測図

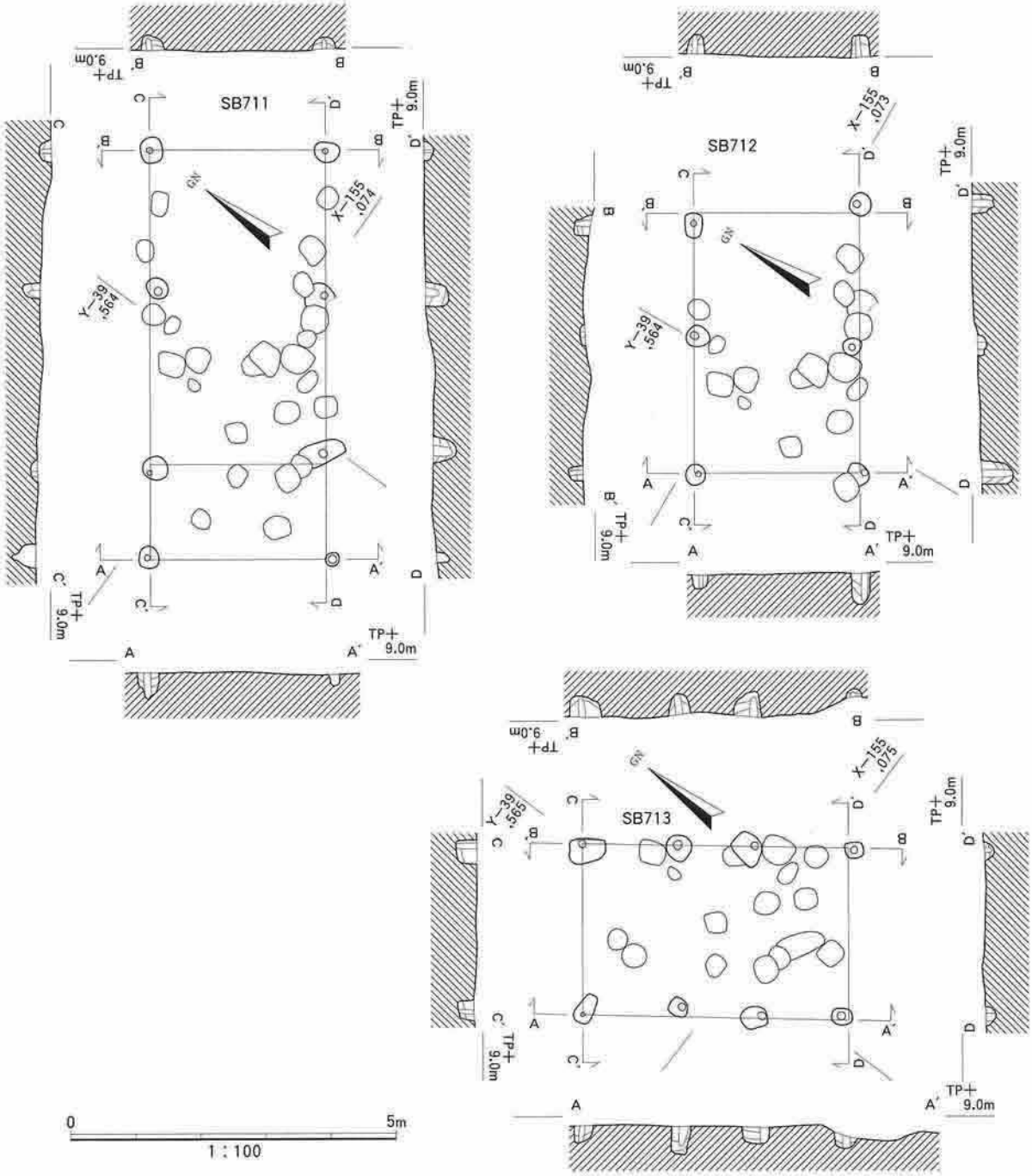


図120　NG92−95次C群遺構実測図

SD702・703：調査区北東端で検出された幅0.5ｍ、深さ約0.05～0.1ｍの浅い溝である。底面は凹凸が著しい。

Ｂ群では柱穴約70基、溝３条が検出され、建物５棟分が復元された(図119)。

SB706：１間(3.9m)×１間(3.3m)の建物で、柱掘形は0.4m×0.5mの歪な円形～隅丸方形を呈する。柱痕跡は直径0.1～0.12mあった。竪穴住居の柱穴であった可能性も残る。

SB707：１間(3.4m)×１間(3.6m)の建物で、柱掘形は0.4m×0.5mの歪な円形である。柱痕跡は直径0.1～0.15mである。竪穴住居の柱穴であった可能性も残る。

SB708：１間(4.5m)×１間(4.5m)の建物である。柱掘形は0.6m×0.6mの隅丸方形で、深さが0.6

～0.7mあり、他の柱穴に比べて深いことが特徴である。また、柱痕跡は直径0.13～0.15mである。竪穴住居の柱穴であった可能性も残る。

SB709：2間(3.5m)以上×1間以上の建物で、調査区西側に延びる。柱掘形は0.5m×0.5mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.15mある。

SB710：2間(3.2m)×3間(3.9m)の総柱建物である。柱掘形は隅丸方形で、0.3m×0.4mとほかの建物と比べると小型である。柱痕跡は直径0.1m前後である。

SD704：柱穴をつなぐ幅0.1～0.2m、深さ0.05mの小さな溝で、性格は不明である。

SD705：B地域の柱群の南で検出された幅0.2～0.3m、深さ0.15mの溝で、西側の調査地外に延びる。TK23もしくは47型式の須恵器が出土した。建物を区画する溝の可能性がある。

SD706：B群の南で検出された幅0.3～0.4m、深さ0.1mの溝である。西側の調査地外に延びる。SD705と同様に建物を区画する溝の可能性がある。

C群では約60基の柱穴が検出された。A・B群より、さらに密集度が高く、柱の組合せがわかりにくかった。北東－南西方向の二筋に、柱が密集する傾向が窺え、このうちのいくつかが組み合い、建物長軸の柱列となると考えられるが、その場合に短軸幅が2.7mと広すぎる問題がある。やや大胆に復元せざる得ない(図120・図版17下)。

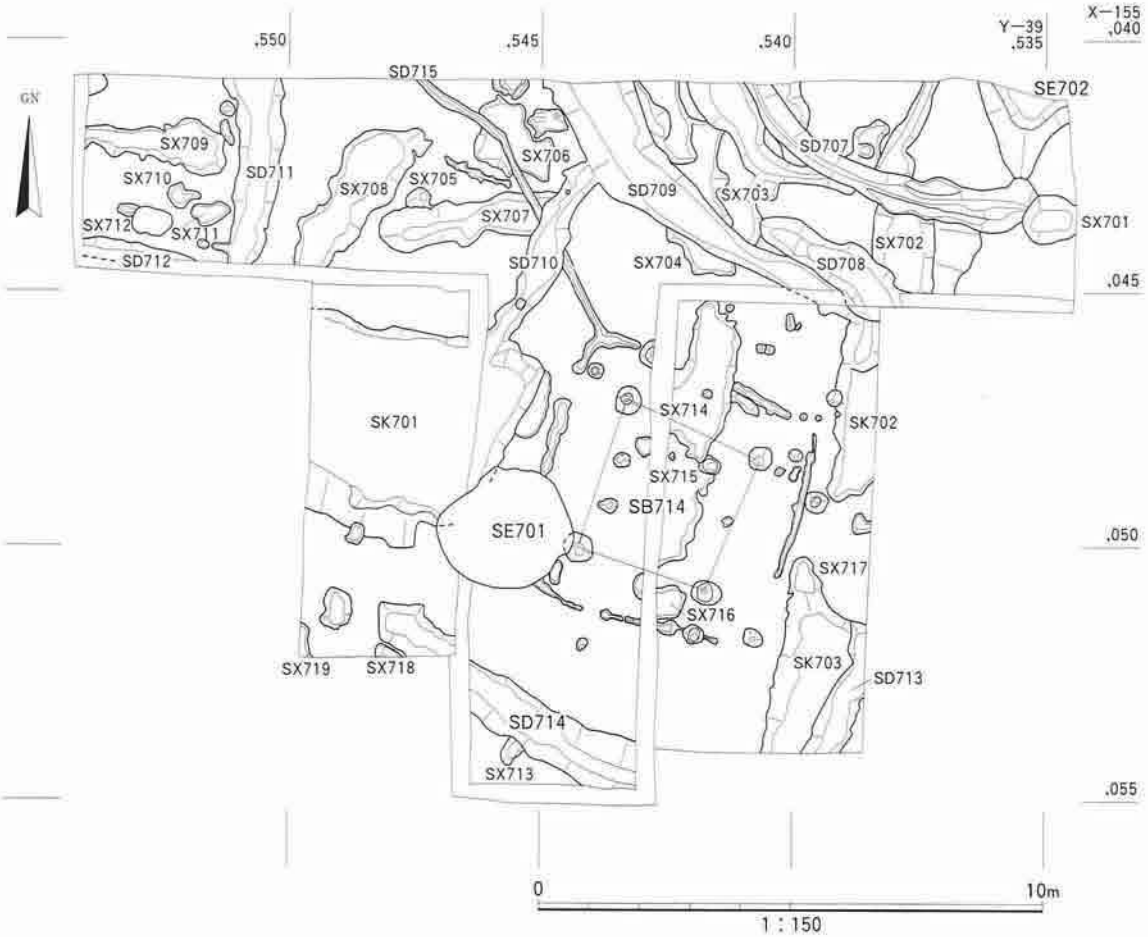


図121　NG93－26次遺構配置図

SB711：1間(2.7m)×3間(6.3m)の側柱建物である。柱掘形は歪な円形で、直径0.3～0.5mが主体である。柱痕跡は直径0.08～0.12mである。南西側の柱間が小さく、庇の可能性もある。

SB712：1間(2.6m)×2間(4.1m)の側柱建物である。柱掘形は歪な円形あるいは隅丸方形で、直径0.3～0.4mが主体である。柱痕跡は直径0.1～0.12mである。

SB713：1間(2.7m)×3間(4.1m)の建物である。柱掘形は隅丸方形で、一辺0.2m～0.5mあり、柱痕跡は直径0.1～0.13mある。SB711・712と異なり、北西－南東方向を軸とする。

D群では柱穴15基が検出されたが、組合せははっきりしなかった。

以上のように掘立柱建物を中心に遺構を報告したが、柱穴の重複が激しいことから、少なくとも同じ群内で建物の建替えが頻繁に行われたことがわかる。建物の向きについては地形に影響され、北西－南東方向もしくはこれに直交する向きのものが多い。

NG93－26次調査

古墳時代中期から後期の竪穴住居SB714、井戸SE701・702、溝SD707～715、土壙SK701～703、窪みSX701～719が検出された(図121)。以下では、主要な遺構について説明する。

SB714：一辺5m程度の4本柱の竪穴住居である(図版18上)。周壁溝とその北西のコーナーから北西にのびる排水溝SD715をもつ(図版18中)。柱穴には明確に柱痕跡が残っていて、抜取りが確認できたものもあった。SE701に切られることから5世紀後半頃に位置づけられる。

このほかいくつか柱穴が検出された。柱痕跡が残ったものが多く、本来、竪穴住居や掘立柱建物を構成していたものと思われるが、復元できなかった。

SE701：直径2.5m前後、深さ1.2mの素掘りの井戸である(図版18上)。埋土は上中下の3層に分けたが、大きくみると、上・中層は埋戻し土、下層は自然堆積層である(図122)。

出土遺物は多量の土師器・須恵器がある。土師器には椀1・2、把手3、高杯4～6、甕7～15がある(図123)。3は把手付椀の把手であろうか。4・5はいずれも杯部が椀形を呈するものである。12は二重口縁の甕である。15は外面を粗いタテハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。

須恵器には杯身21～29、杯蓋16～20、把手付椀30、高杯32・33、同蓋31、𤭯34、壺35、甕36、筒形器台37がある(図124)。上層と中層で杯を比較すると、中層がTK23型式でおさまるのに対し、上層はMT15型式の29が含まれ、若干の時期差が見られる。37は筒部の上下に鍔状の突帯を巡らせ、2条の稜によって4分割し、カキメの後、櫛描波状文が施され、4方向に長方形のスカシを穿つ。スカート状に広がる脚部も2条の稜で区分され、カキメの後、櫛描波状文が施されている。

SE702：深さ0.5mの素掘りの井戸である。堆積状況から周囲から土砂が流入して自然に埋没したと判断した。出土遺物には土師器甕38・39、壺40、須恵器杯身43、杯蓋41・42、有蓋高杯44があ

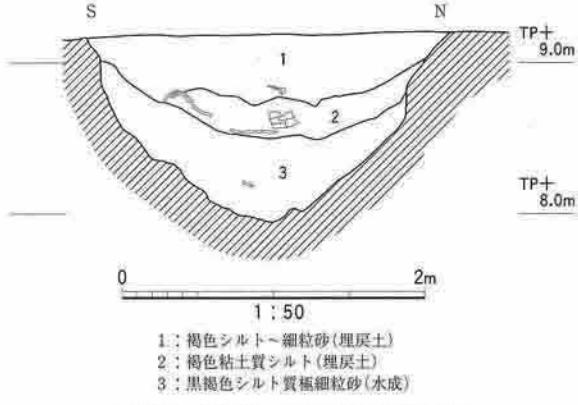


図122　NG93－26次SE701断面図

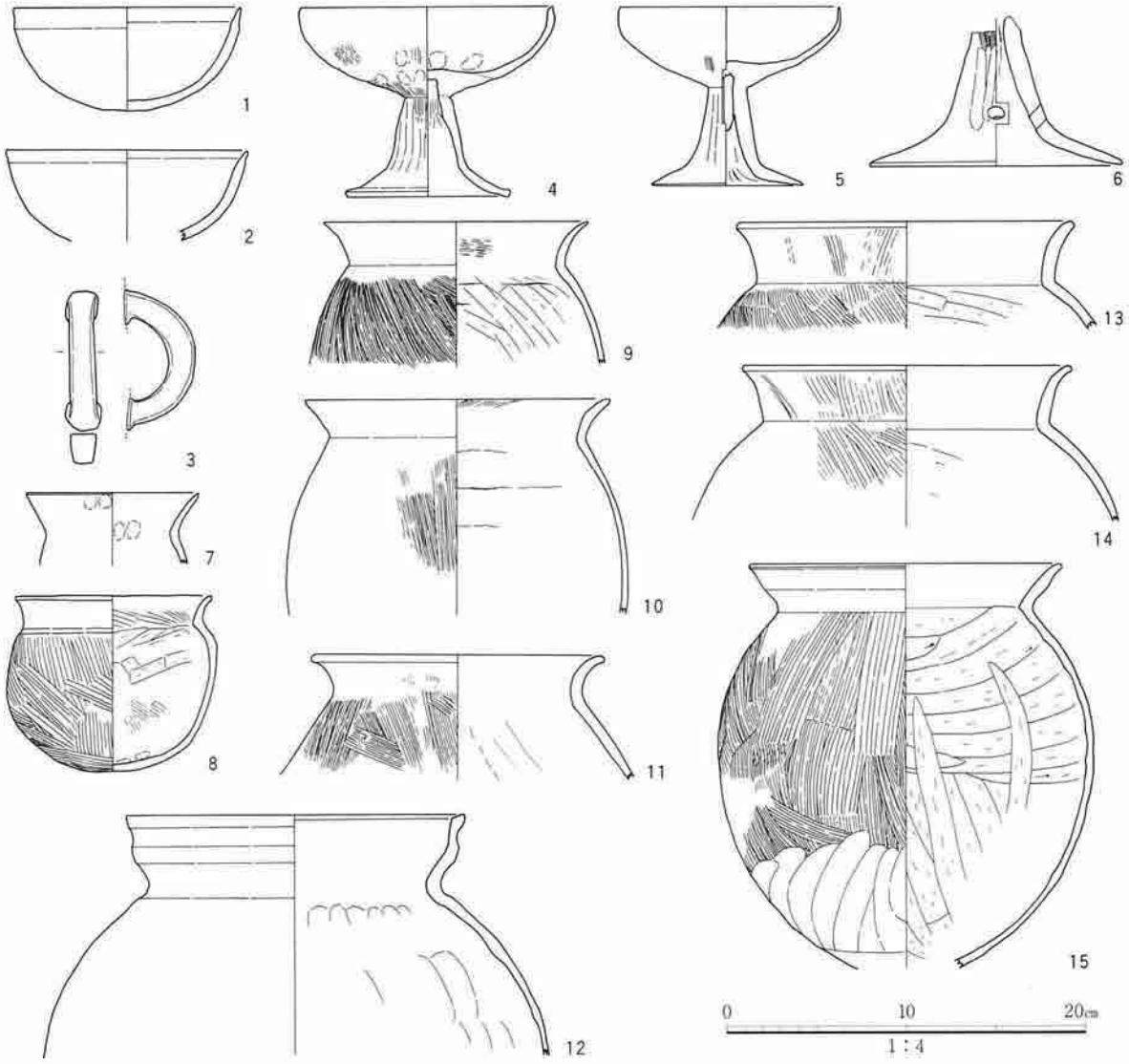


図123　NG93－26次SE701出土遺物

る(図124)。41は焼け歪んでいる。43はTK208型式に位置付けられる。

SK701：東西４ｍ以上、南北４ｍ、深さ0.2ｍの土壙である。北東にSD709が取付く。北側の肩の部分に須恵器甕の底部が出土していることから、もともと須恵器甕が据えてあった可能性がある。

この土壙からは多量の土師器・須恵器が出土した。土師器には椀45、高杯46～48、壺49～51、甕52～54、甑55がある(図125)。53・54は長胴甕で53には不安定な平底がつく。55は底部が破損しているが、中心に１つとその周囲に３つの蒸気孔を配するものと思われる。

須恵器には杯身65～81、杯蓋56～64、有蓋高杯84・85、同蓋82・83、𤭯86～88、壺89・90、高杯形器台91がある(図126)。これらはTK23型式に位置づけられる。

また、この土壙の上層からも土師器甕92、壺93、甑94、須恵器杯身107～118、杯蓋95～106、有蓋高杯120、同蓋119、甕121が出土した(図127)。

SK702・703：位置的にSB714に平行して並ぶ土壙である。周壁溝と近接するため、竪穴住居の土手の存在を想定すると、これらの土壙は共存しないと考える。SK703から須恵器𤭯122が出土した(図

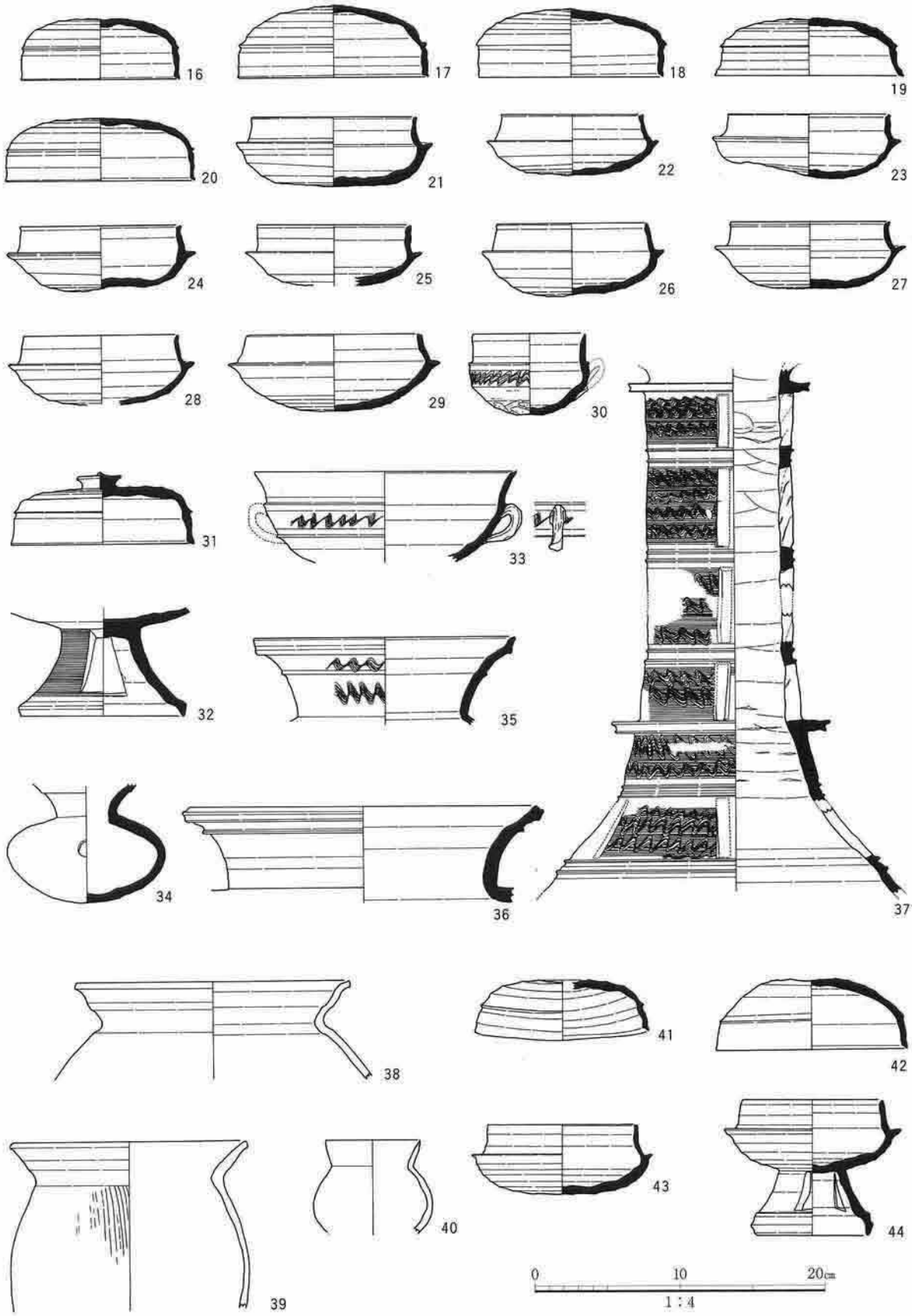


図124　NG93－26次SE701・702出土遺物

SE701(16～37)、SE702(38～44)

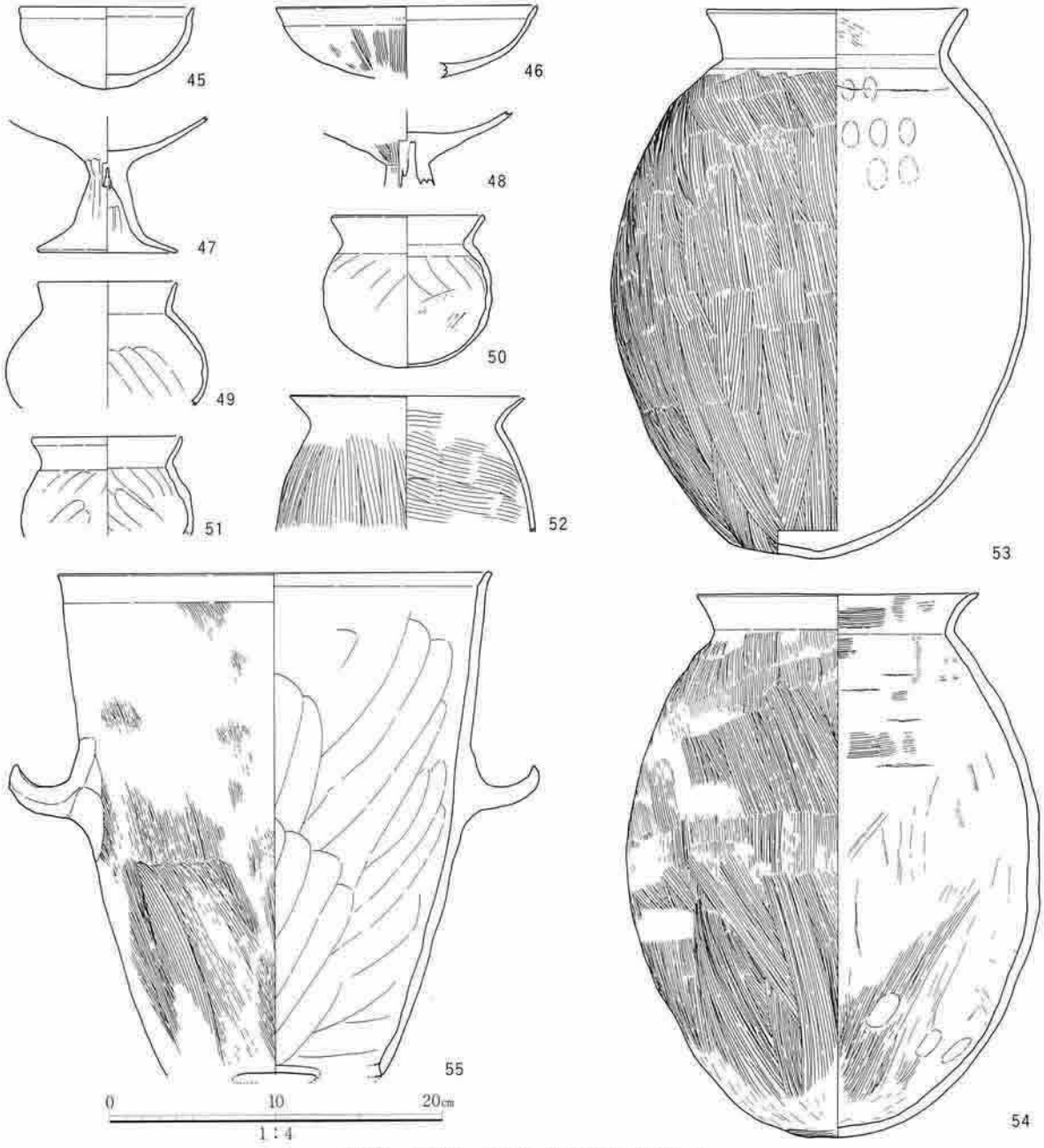


図125　NG93－26次SK701出土遺物(1)

127)。

SD707：幅0.7m、深さ0.2mの弧状に延びる溝である。出土遺物には須恵器杯身165～168、杯蓋164、壺169・170、双孔円板233がある(図129・131)。165～167はTK23もしくは47型式、164・168はMT15型式である。233は一方の面で途中で穿孔が終わっている。

SD708：幅0.9m、深さ0.2mの溝である。出土遺物には土師器甑171、須恵器杯身173、杯蓋172、把手付椀174、無蓋高杯175、壺176がある(図129)。172・173はTK23型式である。175は脚の4方向に円孔が施される。176は底部に平行タタキメが残る。

SD709：幅1.4m、深さ0.2mの溝である(図版18中・下)。出土遺物には土師器高杯177、甕178～182、須恵器杯身186～192、杯蓋183～185、有蓋高杯194、同蓋193、壺195、双孔円板234がある(図

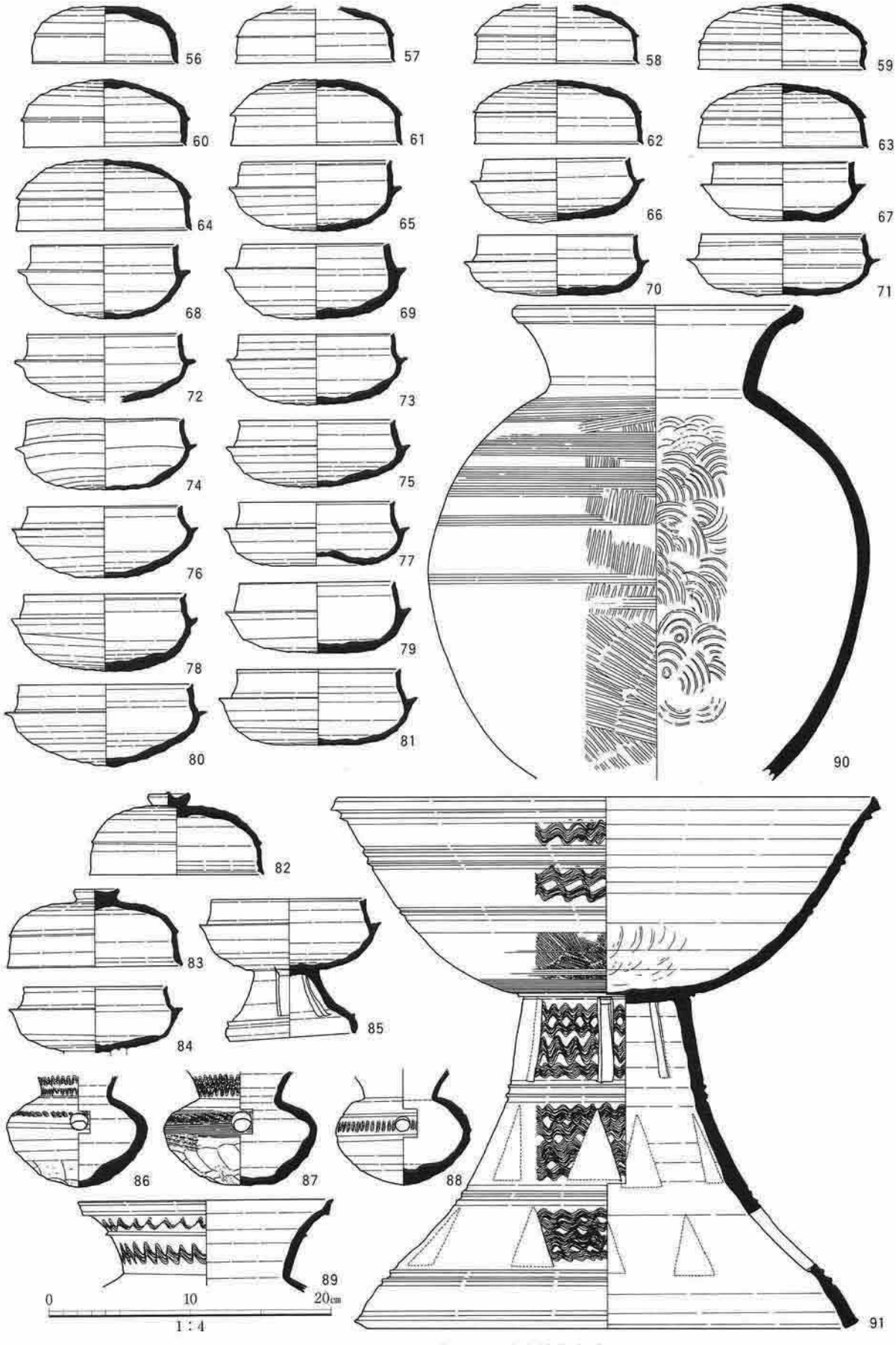


図126　NG93－26次SK701出土遺物（2）

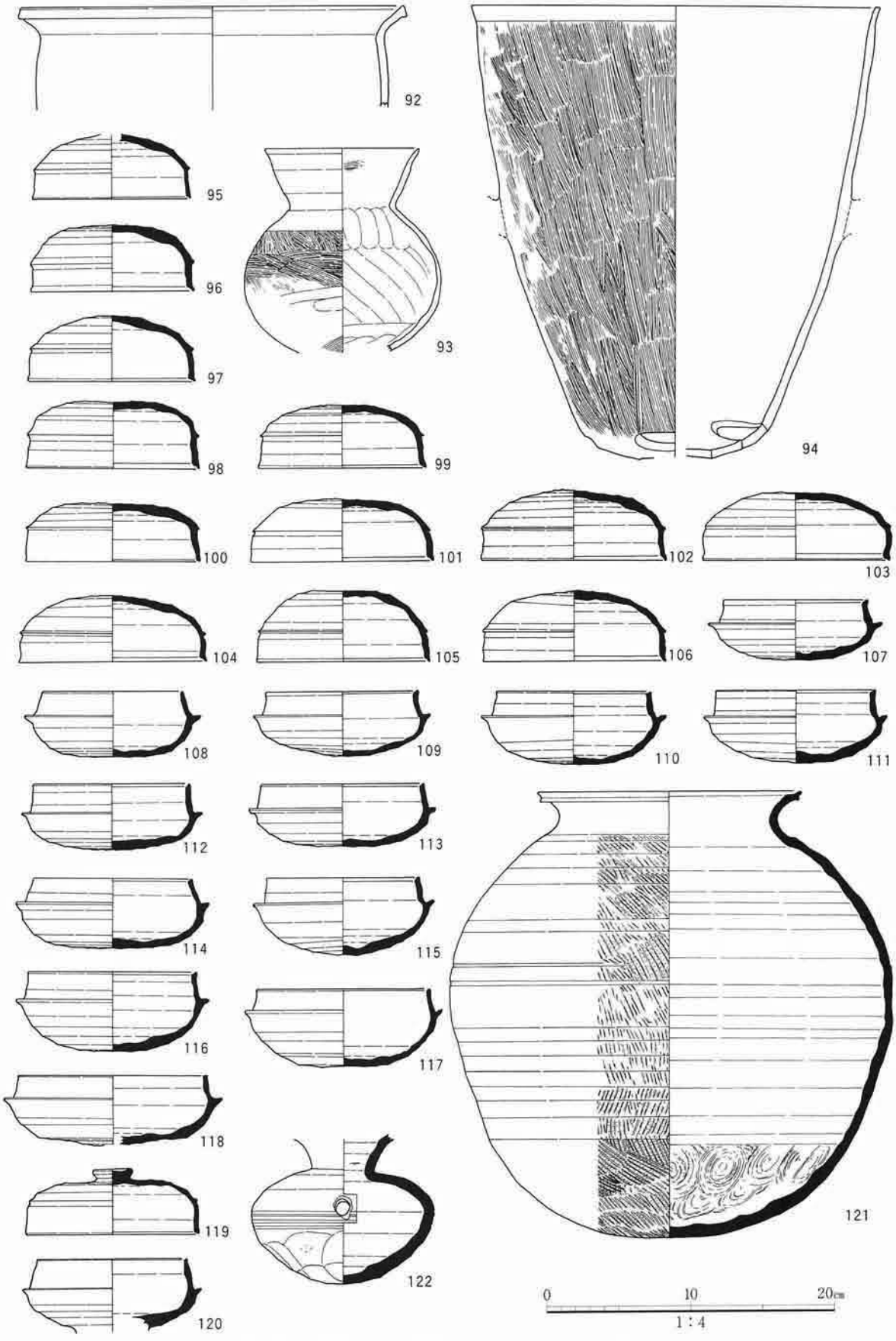


図127　NG93－26次SK701上層・SK703出土遺物

SK701上層(92～121)、SK703(122)

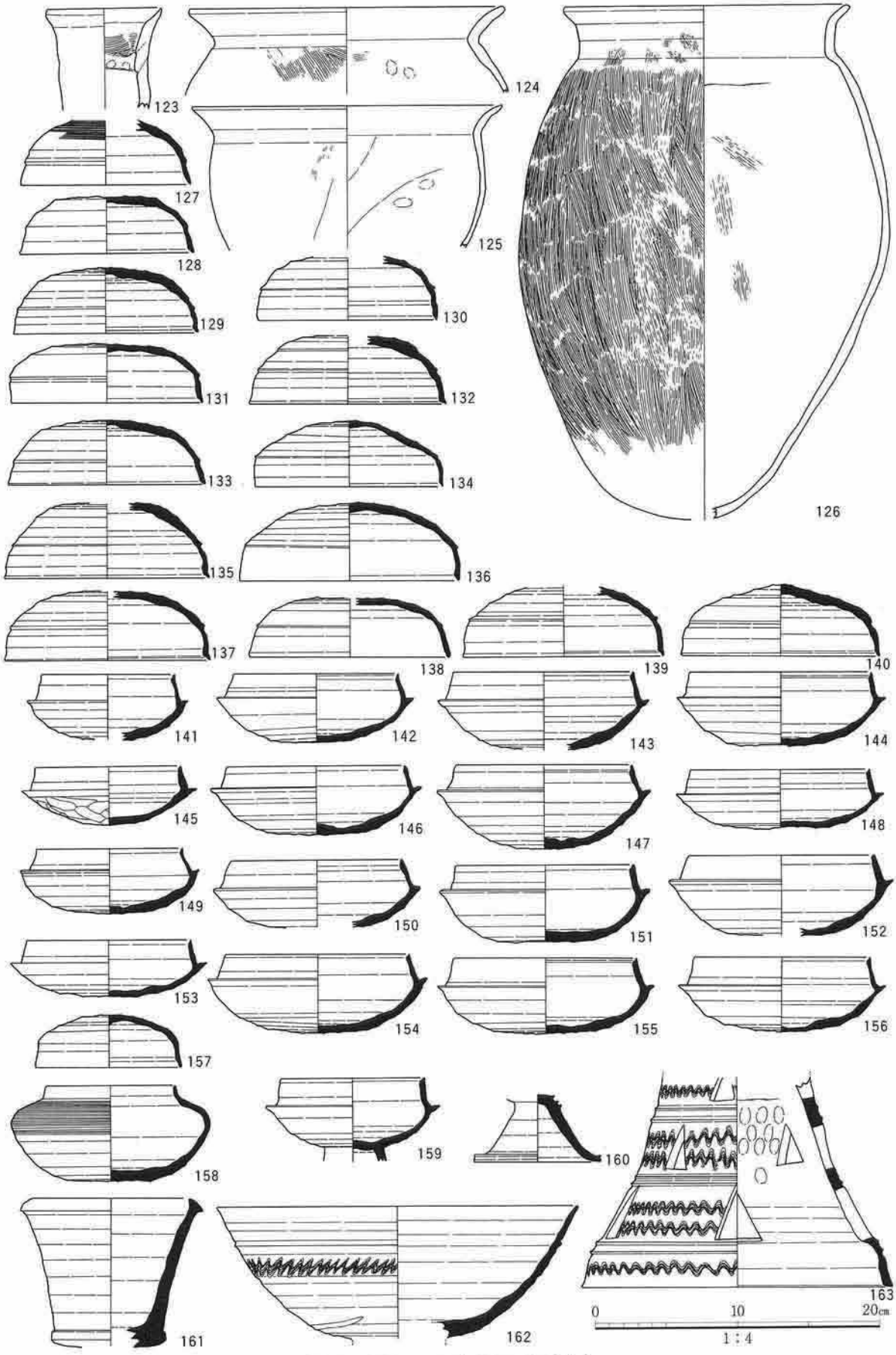


図128　NG93－26次SD714出土遺物

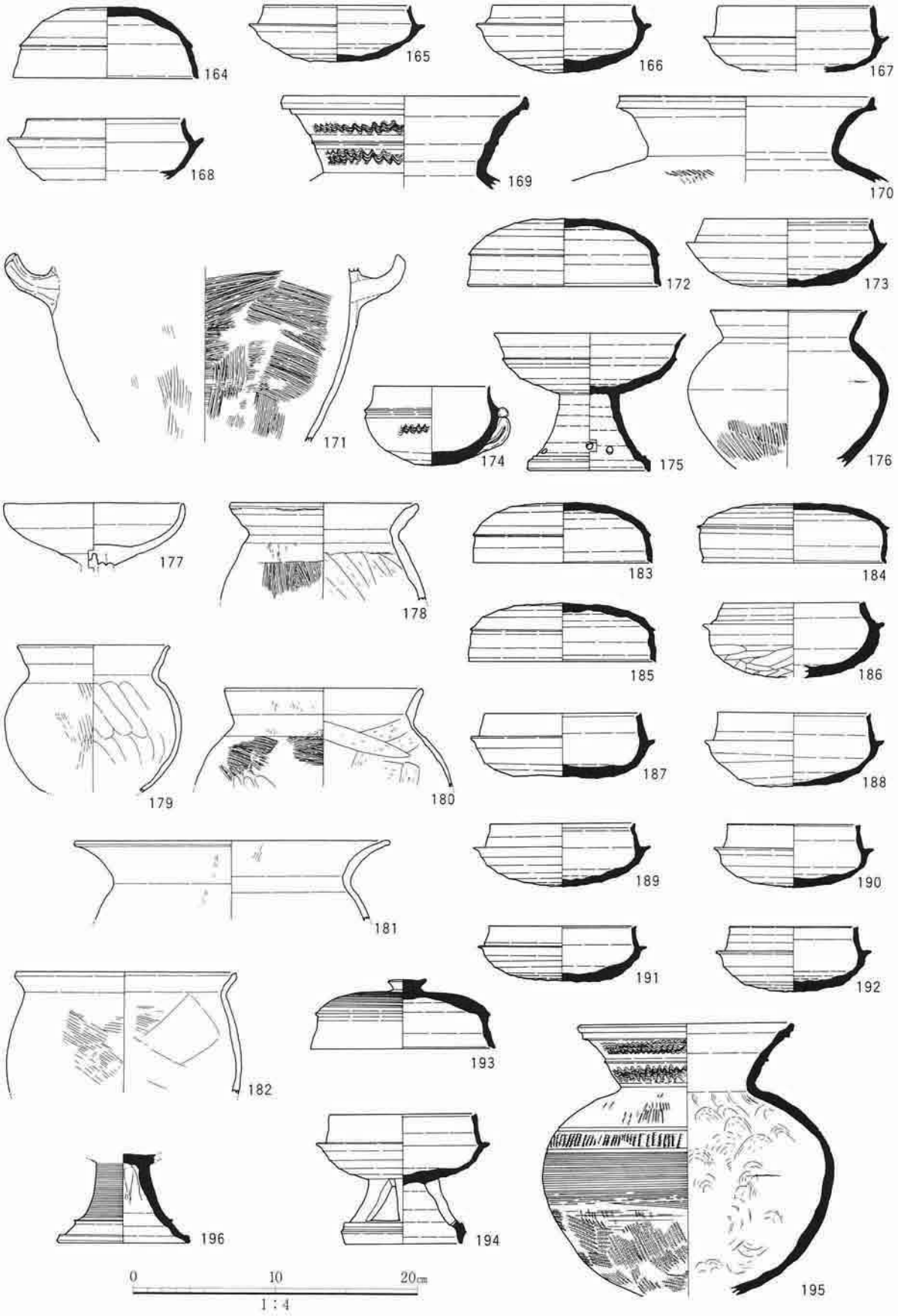


図129　NG93－26次SD707～709・711出土遺物

SD707(164～170)、SD708(171～176)、SD709(177～195)、SD711(196)

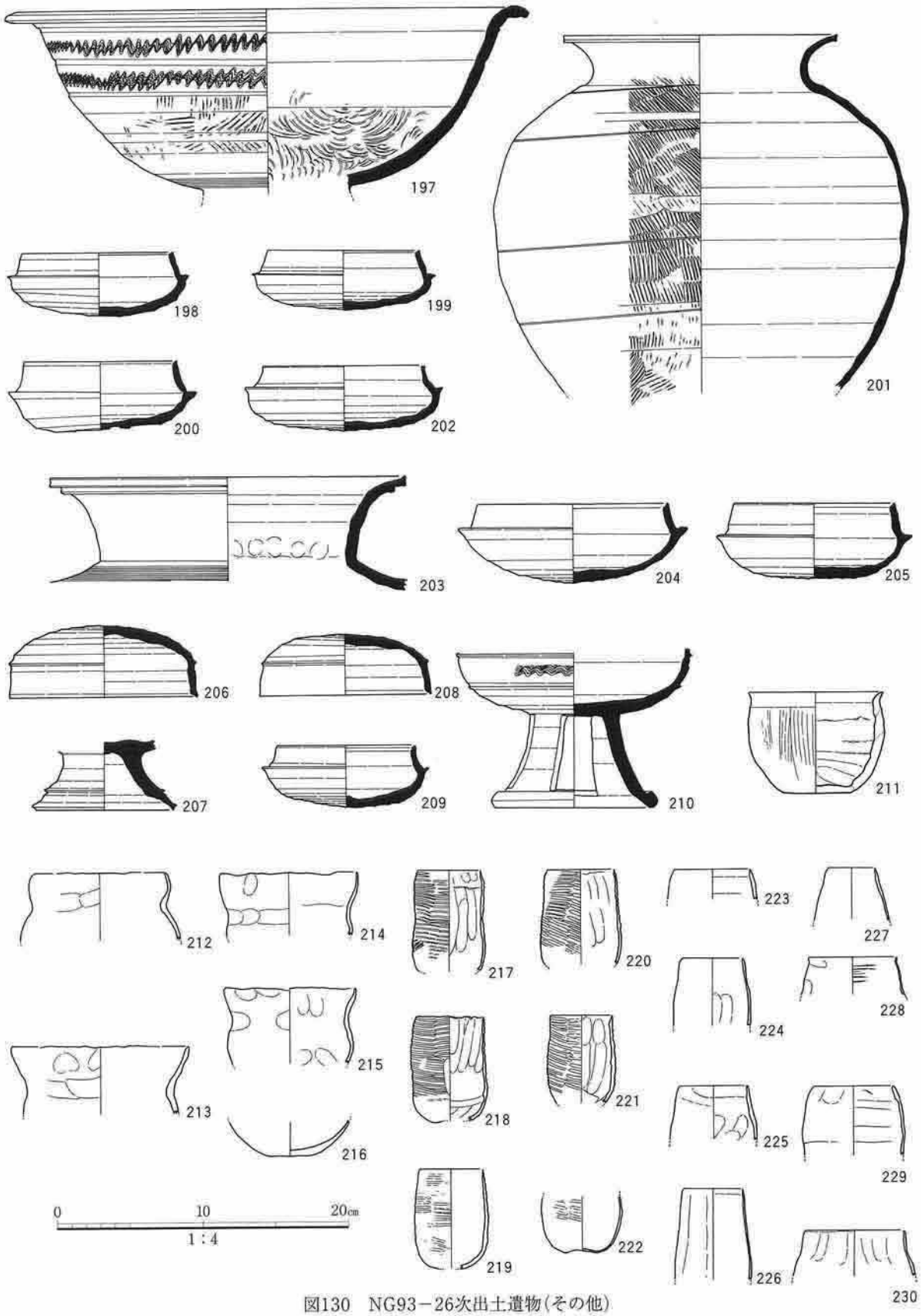


図130　NG93－26次出土遺物(その他)

SD710(197)、SD713(198～201)、SX702(202・203)、SX706(204)、SX708(205・228)、SX709(206)、SX707(207)、SX714(208～210)、SX715(211)、SE701(216・218・219・229・230)、SK701上層(212～215・224・225)、SK701(220～223)、SD710(227)、長原７層(217・226)

129・131)。186は底部に手持ちのヘラケズリが施されており、TK73型式に該当するものであるが、それ以外の杯はTK23もしくは47型式でおさまる。195は体部上半に凹線を施し、櫛描列点文で埋めている。

SD710：幅0.7m、深さ0.2mの溝である。須恵器高杯形器台197が出土した(図130)。杯底部にはタタキメが残り、内面には同心円の当て具痕が残る。

SD711：幅0.8m、深さ0.1mの南北に延びる溝である。須恵器高杯196が出土した(図129)。脚部にはカキメが施される。

SD713：幅0.7m、深さ0.2mの溝である。須恵器杯身198～200、甕201が出土した(図130)。これらの須恵器はTK23型式に該当する。

SD714：幅1.0m、深さ0.3mの溝である。下層は自然堆積で、上層は地山の偽礫を多く含み、埋め戻されたものとみられる。この溝からは大量の土師器・須恵器が出土した。中には口径の大きなものの中に中・小型の須恵器を入れ子にした状態で投棄されているものもあった。この溝の上層はSE701の上層と同時期であり、長原西ムラの終焉を示す事象として興味深い。

出土遺物には多量の土師器・須恵器がある(図128)。土師器には壺123、甕124～126がある。123は内面に接合痕を残し、ハケが施されている。126は長胴甕で口縁端部は丸くおさまる。外面は10条／cm程度の細かいタテハケが施され、内面もハケが施されていたと思われるが、器面が荒れているためわからない。

須恵器には杯身141～156、杯蓋127～140、有蓋高杯159、高杯脚部160、捏ね鉢161、壺158、同蓋157、高杯形器台162・163がある。杯はおおむねMT15型式に位置づけられる。

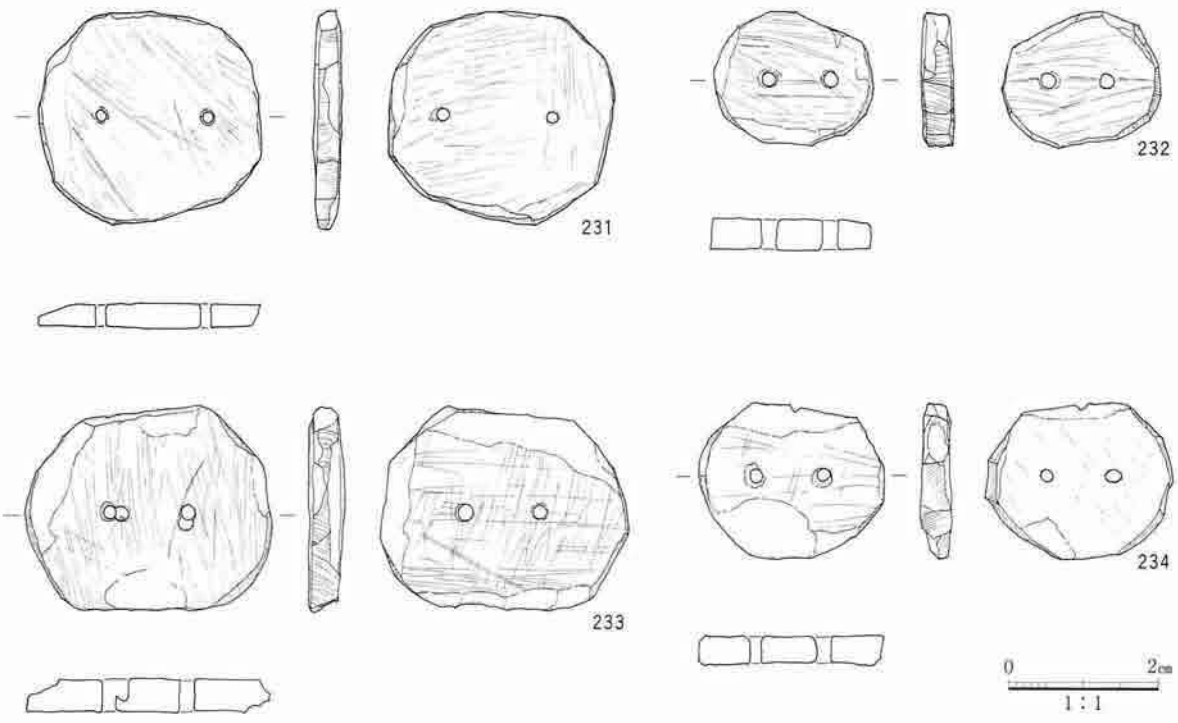


図131　NG93－26次出土双孔円板
SD707(233)、SD709(234)、SD715(231・232)

SD715：竪穴住居SB714から延びる幅0.2m、深さ0.1mの溝である。滑石製双孔円板231・232が出土した(図131)。

このほか、SX702から須恵器杯身202・甕203、SX706から須恵器杯身204、SX708から須恵器杯身205、SX709から須恵器杯蓋206、SX707から須恵器高杯脚部207、SX714から須恵器杯身209・杯蓋208・高杯210、SX715から軟質平底深鉢211が出土した(図130)。ここから出た須恵器は古いものでTK23型式、新しいものでMT15型式である。211は外面にタテハケが施され、内面には接合痕が残る。

なお、本調査では製塩土器が多量に出土した(図130)。212～216は黄褐～褐灰色を呈し、胎土に粗粒砂や細礫を含む。217～222は外面に平行タタキが施され、褐色を呈する備讃瀬戸系である。223～

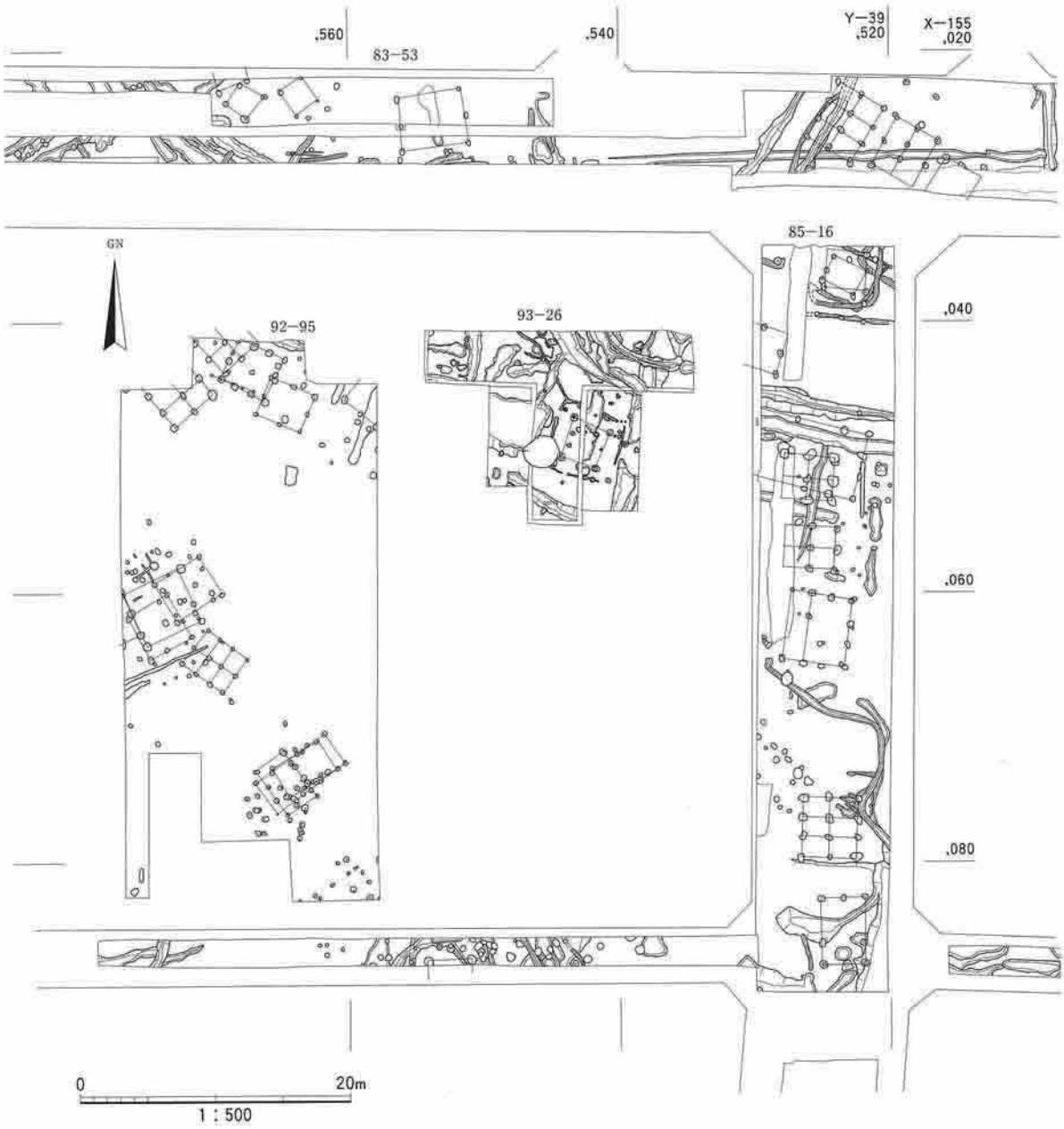


図132　NG92－95・93－26次および近隣の古墳時代遺構配置図

230は灰白色を呈する大阪湾岸系のものである。

3）まとめ

本節では古墳時代中～後期の集落関係の遺構の報告を行った。

NG92－95次調査では多数の柱穴が検出され、13棟の掘立柱建物を認定することができた。この中で総柱建物は３棟あり、全体が検出されたSB710で２間(3.2m)×３間(3.9m)と長原遺跡では標準的な大きさといえる。側柱建物についても、面積が10㎡前後と標準的かやや小さめである。また、１間×１間のSB706～708については柱間隔が広いことから、上部が削平された柱穴だけが残った竪穴住居であった可能性が高い。これらはＡ～Ｄ群の柱穴が密集する地点に分布することから、大体10m程度の間隔を空けて、同時存在したのは３棟前後であったと推測される。

NG93－26次調査では須恵器型式でいうTK23型式からMT15型式の時期の遺構が密集して検出され、遺物も多量に出土した。特に、井戸や土壙・溝には埋め戻しが確認され、土師器・須恵器が大量に投棄されていた。

近隣では東隣のNG85－16次調査[大阪市文化財協会1993a]や北隣のNG83－53次調査[大阪市文化財協会1992b]などが行われており、同様に集落関係の遺構が多数検出されている(図132)。本節の成果も含めて総合すると、溝によって区切られた数棟の掘立柱建物・竪穴住居が基本単位として抽出でき、それに井戸が伴っている姿が窺える。ただ、須恵器型式でいうMT15型式の頃に井戸や土壙が埋められており、その際に大量の土器が投棄されている。これは「馬池谷」東側の古墳時代集落(「西ムラ」)が終息に向っていることを示しているものと思われる。　(寺井)

第Ⅳ章　中央地区の調査

第１節　NG89－25次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では長吉長原３丁目で行われたNG20②・89－５・89－25・92－79・95－29次調査を報告する(図133)。これらの調査地の西側の街区ではNG85－23次調査において、片袖の横穴式石室をもつ長原七ノ坪古墳が調査されている[高井健司1986・1987a]。

NG20②次調査は下水管敷設工事に伴って行われた夜間の調査で、**長原38号墳**が検出された。

NG89－５・92－79次調査地は中央環状線に面する。前者の調査では長原7Ai層から鉄製のヤスが出土しており、[上野裕子・鈴木京子1989]で紹介されている。

NG95－29次調査はマンション建設に伴って行われた。長原13層上面まで掘削したが、平安時代と思われる井戸以外、顕著な遺構は見つからなかった。

NG89－25次調査地は上記の調査地と同じ街区の南西に位置する。調査の結果、古墳時代の掘立柱建物や竪穴住居など多くの遺構が検出され、1989年８月20日に現地説明会を実施した(写真13)。この調査の成果についてはすでに[佐藤隆1989]や[高橋工・佐藤1991]で公表されている。

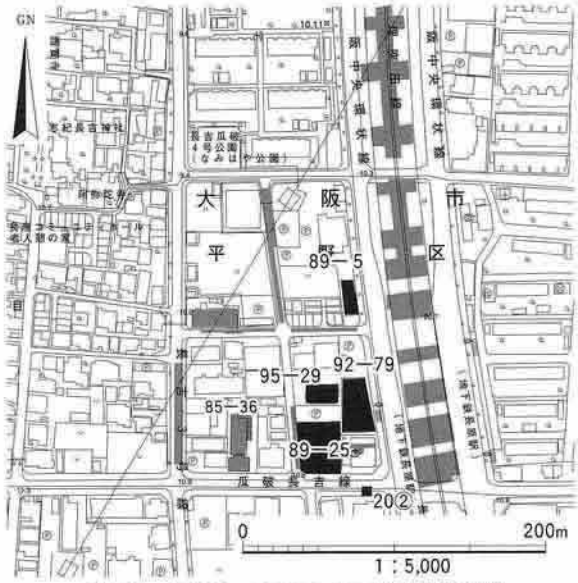
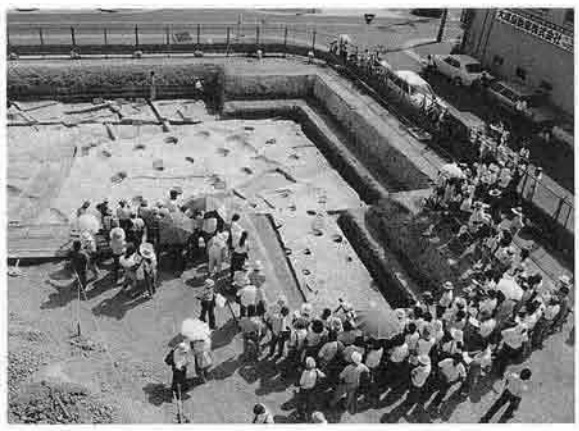


図133　NG89－25次などの調査地位置図


写真13　NG89－25次現地説明会風景

２）調査の結果

ｉ）層序

NG89－５次次調査では現代作土が除去されると、長原4A層に該当する砂礫層が露出した。さらに、当地では長原４～７層に加え、薄層ではあるものの長原9C層や12層が残っていた(図134・表17)。

表17　NG89－5次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0	現代盛土	60	盛土				近・現代
2	1	現代作土	15	作土				
3	1	現代作土	10	作土				
4	4A	にぶい黄色中粒砂	15	水成				鎌倉時代
5	4B	灰オリーブ色砂質シルト	15	作土				
6	4B	黄灰色中粒砂混りシルト	15	作土				
7	4C	褐灰色粗粒砂混りシルト	10					平安時代
8	5A	灰オリーブ色砂礫～極細粒砂	35	水成				奈良時代
9	5B	緑灰色シルト～浅黄色細粒砂	5	水成		←水田畦畔		
10	6Ai	緑灰色シルト	30	作土				
11	6Aii	オリーブ灰色極細粒砂	5	水成		←畦畔痕跡		
12	6Bi	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20	作土				飛鳥時代
13	6Bi	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20	作土				
14	6Bi	暗赤灰色シルト	10					
15	7Ai	黒褐色シルト質粘土	10	作土		▼SD901	鉄製ヤス	
16	9C	黄灰色粘土質シルト	＜5				石鏃	縄文時代
17	9C	灰色シルト	＜5					
18	12	褐灰色中粒砂混りシルト	5					
19	13	明青灰色シルト			上面に乾痕			旧石器時代
20	14	緑灰色粘土			上面に乾痕			

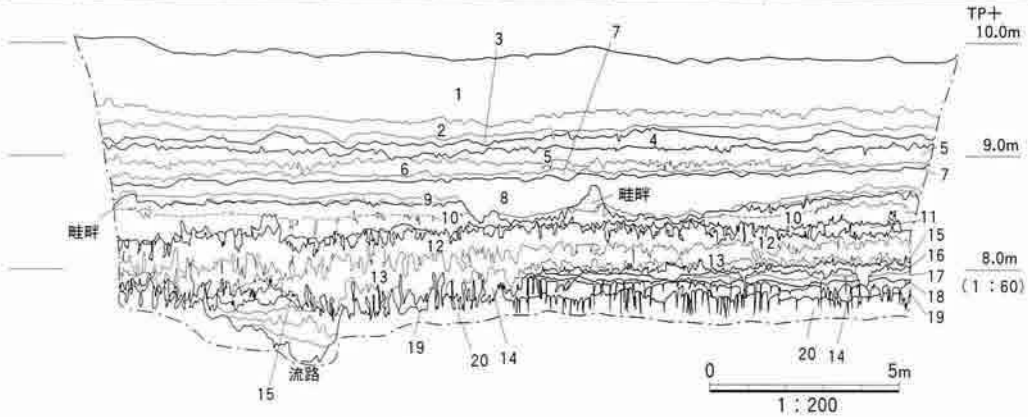


図134　NG89－5次東壁断面図

表18　NG89－25次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土および現代作土	130	盛土・作土				近・現代
1	4B	灰オリーブ色シルト	20	作土				鎌倉時代
2	5	明黄褐色砂礫～細粒砂	50	水成		←SR604～608		奈良時代
3	6Ai	オリーブ黒色粘土質シルト	30	作土		←SR601～603		
4	6Bi	暗オリーブ砂質シルト	20	作土		▼SB701～707，SA701，SD701～709		飛鳥時代
5	13	明黄褐色シルト	>20					旧石器時代

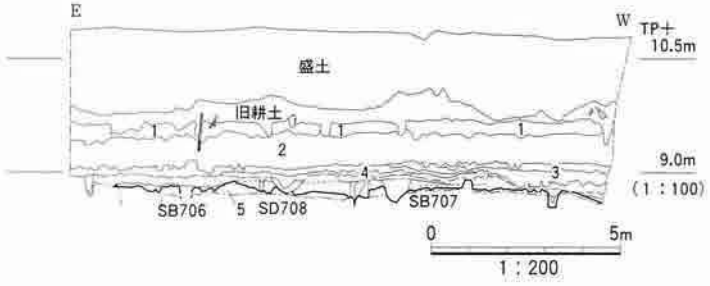


図135　NG89－25次南壁断面図

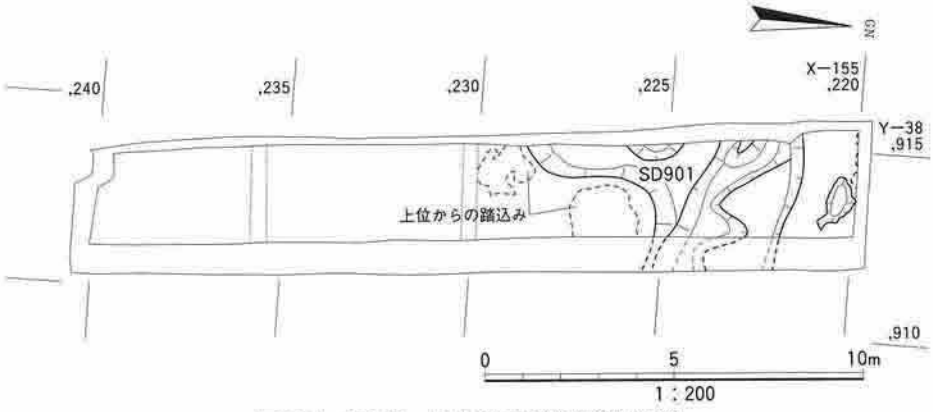


図136　NG89－5次縄文時代遺構配置図

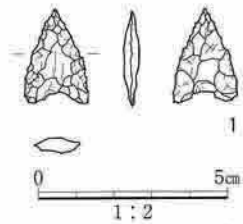


図137　NG89－5次出土石鏃

NG89－25次調査でも現代作土が除去されると、長原4A層に該当する砂礫層が露出した。そして、この層以下には長原6Ai・6Bi層が残っていて、長原6Bi層基底面では古墳時代中期の掘立柱建物や竪穴住居・溝といった遺構が見つかった(図135・表18)。

ii)遺構と遺物

a．縄文～古墳時代の遺構と遺物

NG89－5次調査では長原7Ai層(第15層)基底面で溝SD901が検出された(図136)。幅4.5m、深さ0.5～0.6mあり、西肩はさらに幅が広がっている。埋土の最下層はにぶい黄褐色砂礫で、上部ほど細粒化する。出土遺物がなく、時期は不明であるが、長原12層準～7B層準のものと考えておきたい。上位の窪みに長原7Ai層が垂れ込んでいることから、最終的には飛鳥時代まで窪みが残っていたことになる。

また、当調査の長原9C層(第16層)から凹基式の石鏃1が出土した(図137)。

b．古墳時代の遺構と遺物

NG20②次調査

長原38号墳：古墳の盛土と周溝が検出されたが、夜間の調査であったため、十分な記録ができなかった。位置は図146の通りである。周溝から須恵器壺・甕が出土した。

NG89－25次調査

4棟の掘立柱建物SB701～704、3棟の竪穴住居SB705～707、1列の柵、およびそれらに伴うとみられる溝などが検出された(図138・図版19上)。

掘立柱建物はいずれも総柱建物で、柱穴には長原13層の偽礫が含まれる。

SB701：桁行3間(5.4m)、梁間2間(4.2m)ある。柱の間隔は桁行で約1.8m、梁間で約2.1mと梁間の方がやや広い。柱穴は不整円形で、側柱の柱穴が大きく、直径0.7～0.9m、束柱のものは小さく、直径0.4～0.5mある。柱痕跡の直径は確認できるもので0.17mほどである。ほとんどが建物が廃絶したときに抜き取られたようであるが、柱材が残っていたものもある。柱穴から出土した遺物は少ないが、土師器竈や須恵器杯がある。竈片は後述する竪穴住居SB706で出土した破片と接合した。

SB702：2間×1間以上で、西側は調査区外に拡がる。規模や柱穴の並び方がSB701と類似しているため、同様の建物であった可能性がある。

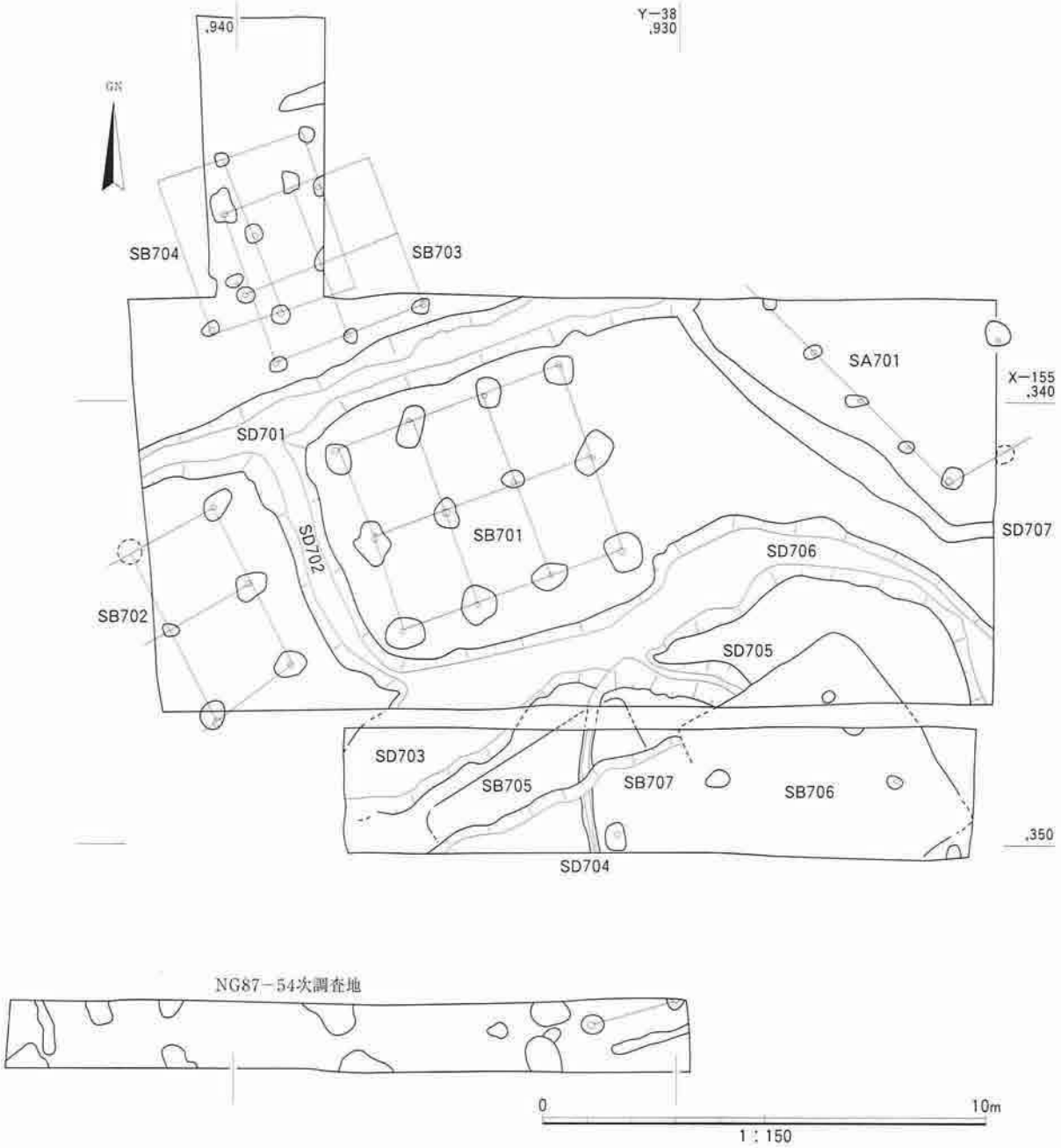


図138　NG89−25次古墳時代遺構配置図



写真14　NG89−25次SB705～707



写真15　NG89−25次SD702出土馬歯

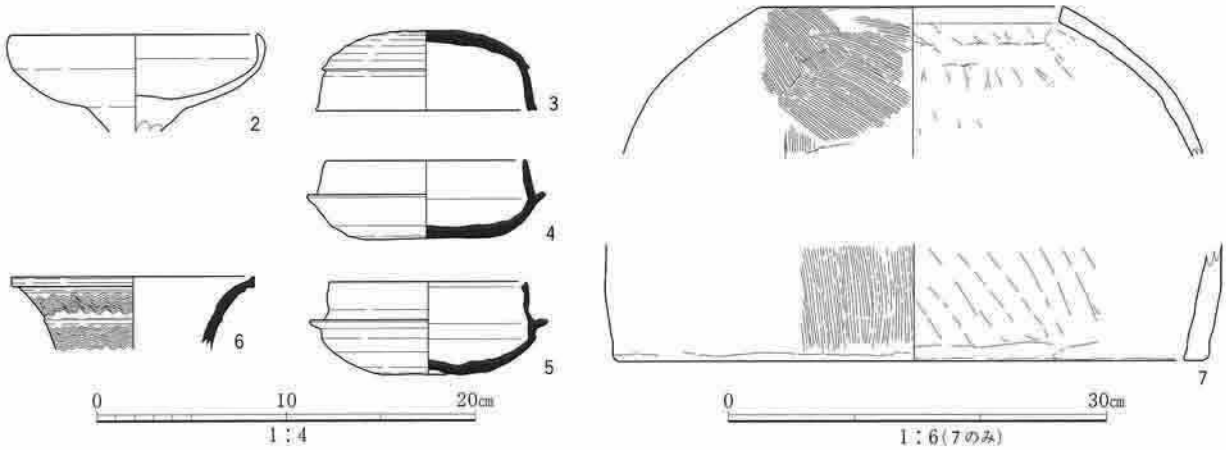


図139　NG89－25次古墳時代遺構出土遺物
SD701(2～6)、SB706(7)

SB703・704：いずれも桁行２間、梁間２間、規模はおよそ3.7m×3.3mである。同様の建物が建替えられたのであろう。柱穴は直径0.4～0.5mの不整円形で、柱痕跡の直径は約0.1mである。柱穴には遺物はなかったが、SB703の柱穴を覆っていたSD701の埋土からTK23もしくはTK47型式の須恵器杯が出土した。

SB705～707：調査区南部で竪穴住居が３棟が重なり合って検出された(写真14)。お互いの切合いや後述する溝との切合いから、SB705→706→707という順に建替えられたと考えられる。３棟とも周壁溝はない。柱穴がよくわからない部分もあったが、４本柱であったと思われる。

SB705は一辺の長さが約5.3mの方形または長方形で、かなり上が削られているため、床面は残っていない。SB706は5.2m×4.8mの方形に近い長方形で、地面を大まかに掘り窪めた後に底の凸凹に土を入れてならし、床をつくっている。SB707は比較的大きく、一辺が６m以上ある。南隣のNG87－54次調査で検出された柱穴、盛土はそれぞれ、SB707の柱穴、床をつくった埋土になると考えられる。

SB706・707の北東辺中央には炭や焼土が認められた。SB706からは土師器の竈7(図139)・甑の破片が出土しており、この種のセットが用いられていたと考えられる。このほか須恵器蓋杯・高杯・甕、土師器高杯・甕などが出土している。須恵器杯蓋・高杯は、TK23もしくはTK47型式に当たる(註１)。

SA701：調査区北東部でほぼ等間隔に並んだ杭の列が検出され、柵と考えられる。北西―南東へ延び、調査区東端で北東へ曲がっている。間隔は 1.3～1.5mあり、杭穴は直径0.3～0.5mの不整円形を呈する。杭は角材を用いており、先を削って尖らせている。埋土からは時期がわかるような遺物は出土していない。

SD701～707：調査区北半部のSD701・707のほかは、南半部に集中している。幅は0.2～2.0mとさまざまで、深さは0.15～0.2mある。SD702は南半部でSD703と合流するが、切合いははっきりしない。同様にSD703～706についてもよくわからない。しかし、溝の位置から考えると、SD701・702は掘立柱建物に、SD703～706は竪穴住居に伴うと思われる。SB705に伴うと思われるSD705がSB706に切られ、SB706に伴うとみられるSD704がSB705を切り、SB707に切られていることは、竪穴住居の先後関係を考える上で手がかりとなる。出土遺物には土師器・須恵器・馬歯があり、須恵器はTK

23～TK47型式に当たる(図139)。馬歯はSD702・703から出土し、SD702のものは下顎骨の一部が残る(写真15)。

SD707はSA701に沿って掘られ、やはり調査区東端で曲がっており、この柵に伴うと思われる。SD701との切合いはよくわからない。

c．飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG89－25次調査

長原6Bi層基底面で溝２条が検出された(図140)。同一面で前述の古墳時代の遺構も検出したが、これらはいずれも古墳時代の遺構を切り、埋土が灰黄褐色粘土質シルトであることから、長原7Ai層準の遺構と考えた。また、この段階では下位のSD701の窪みが残っていた。

SD708：幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.2mある。２条の溝が重なった状態で検出されたのは、掘り直しが行われたためと思われる。

SD709：幅0.2m、深さ0.05m以下で、SD708と直交する方向に延びる。耕作の際にできた犁跡の可能性がある。

長原6Bi層上面では南北２条(SR601・602)、東西１条(SR603)の畦畔が検出された(図141上)。長原6Ai層準の耕作で上面が削平され、畦畔は痕跡を残している程度である。畦畔の幅は0.3～0.5mで、SR601・602の間隔は４m前後である。畦畔が交叉する部分には水口は見られない。

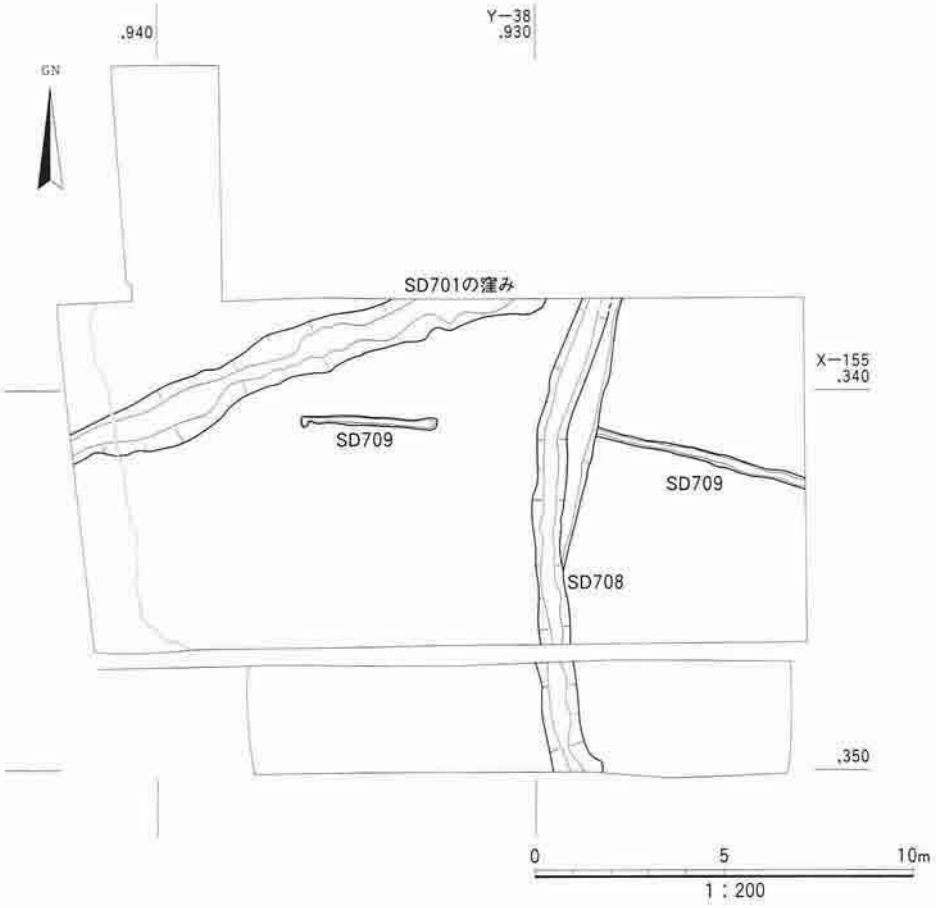


図140　NG89－25次飛鳥時代遺構配置図

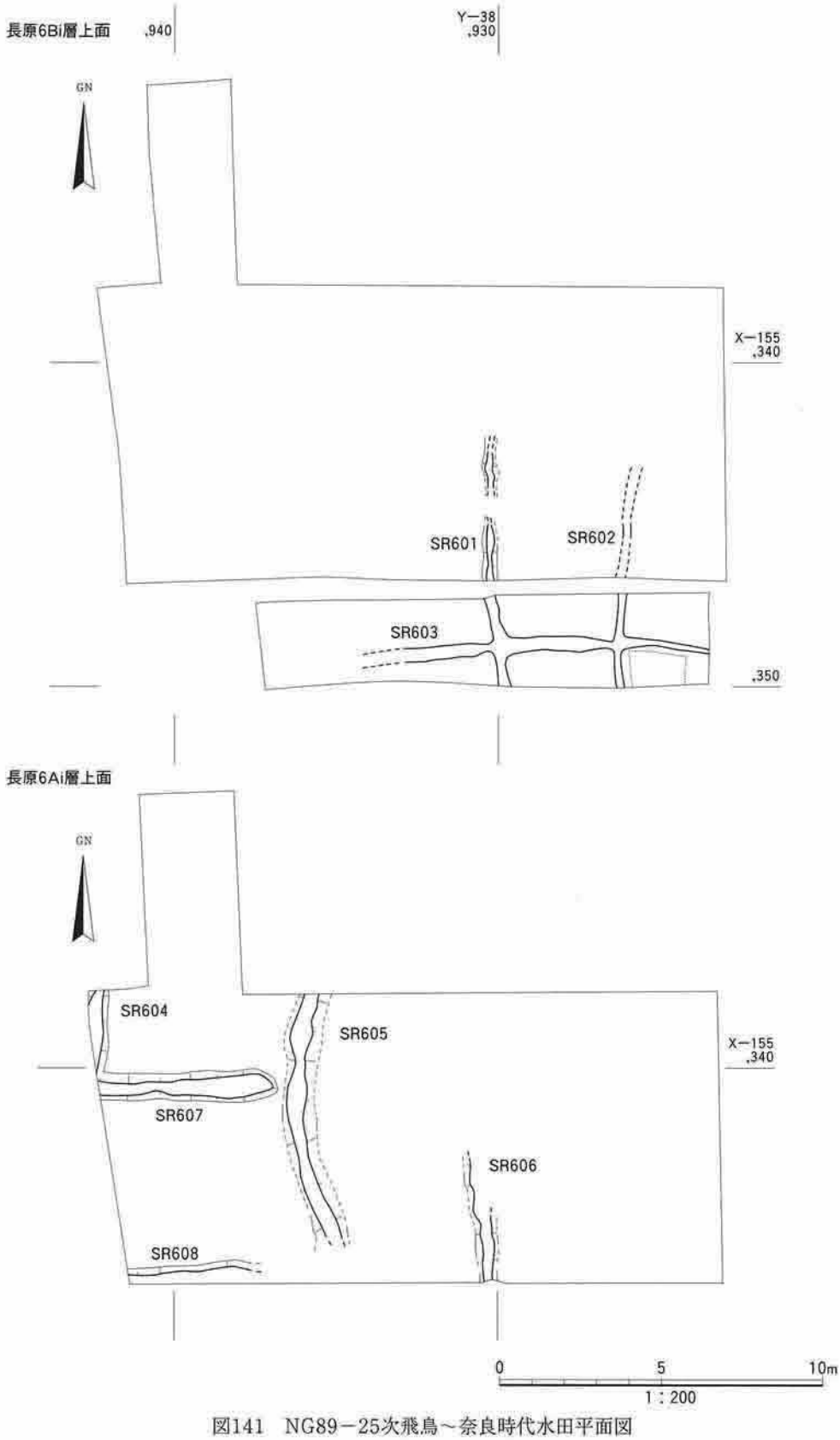


図141　NG89－25次飛鳥～奈良時代水田平面図

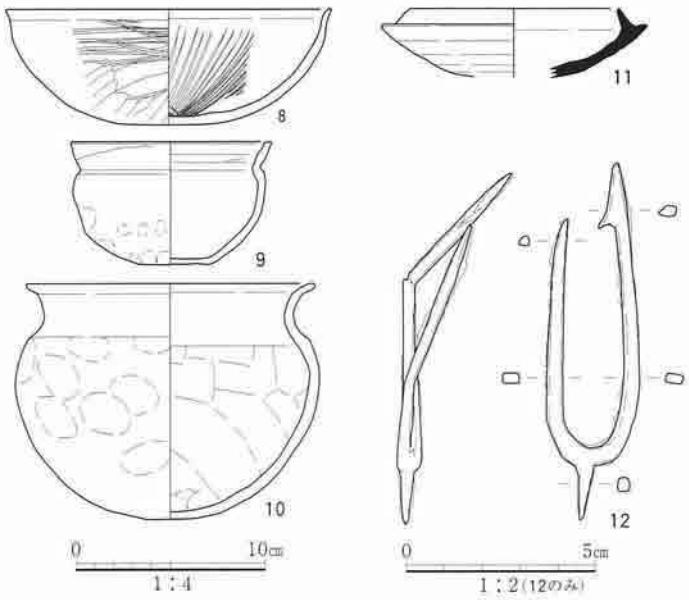


図142　NG89－５・25次飛鳥～奈良時代出土遺物

NG89－５次(８・10～12)、NG89－25次(９)

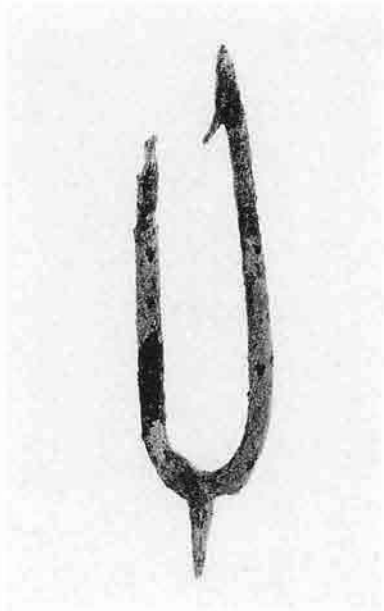


写真16　NG89－５次出土鉄製ヤス

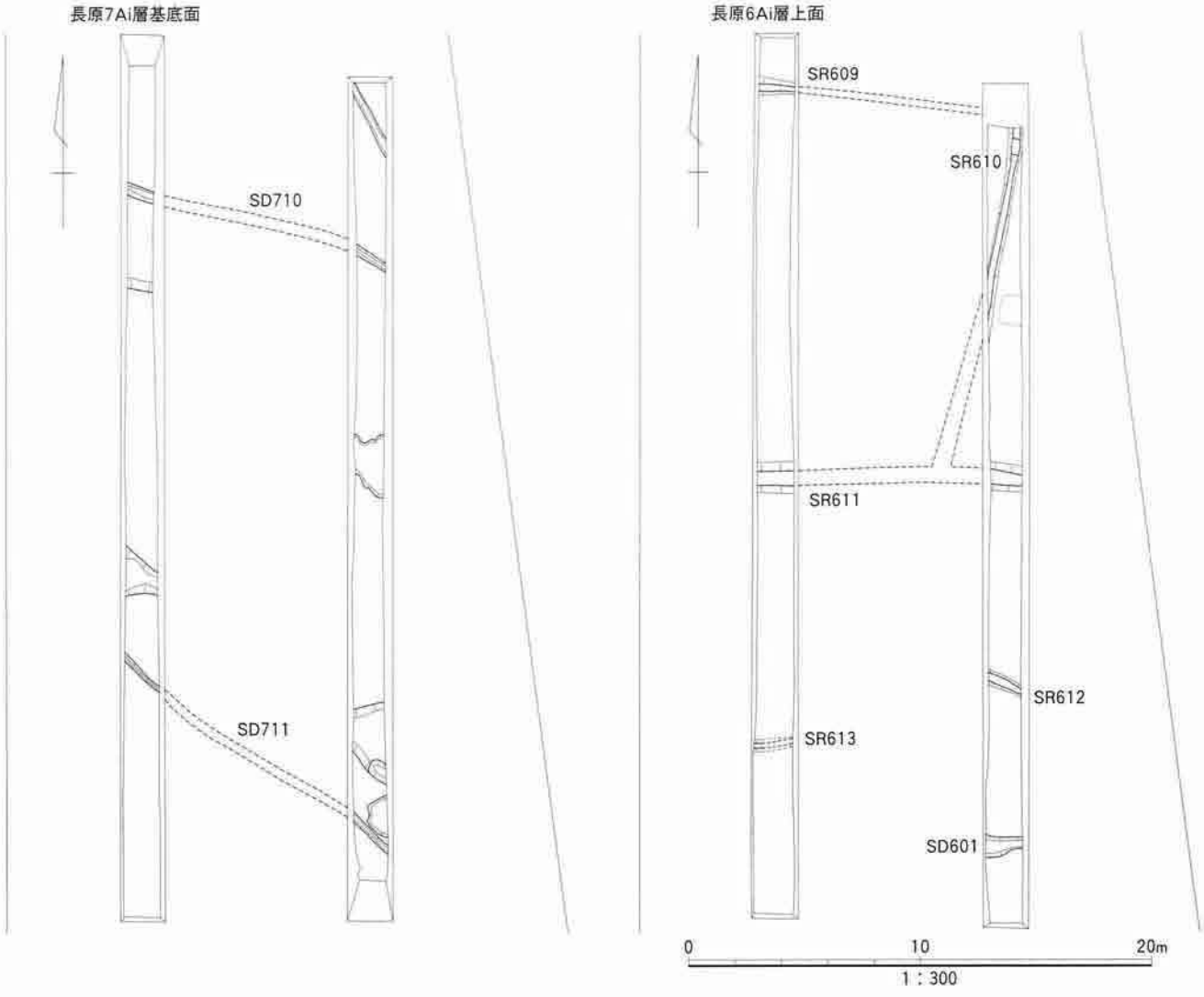


図143　NG92－79次飛鳥～奈良時代遺構配置図

長原6Ai層上面では南北方向3条(SR604～606)と東西方向2条(SR607・608)の畦畔が検出された(図141下)。畦畔の高さは0.1～0.15m、幅0.8～1.0mあり、畦畔間の距離は5.5～6.3mである。SR607がSR605にT字状に接続する部分に水口がある。

この水田を覆う長原5層からは土師器甕9が出土した(図142)。

NG89－5次調査

長原7Ai層(図135・表17の第15層)から、飛鳥Ⅱに位置づけられる土師器杯C8、須恵器杯11に加え、鉄製ヤス12が出土した(図142)。12は全長9.4cmのU字形を呈する二股のヤスである(写真16)。2つの先端のうち、片方には逆刺が残っている(註2)。また、土師器甕10は長原5層から出土した(図142)。

NG92－79次調査

長原7Ai層基底面では、南東－北西方向の溝SD710・711が検出された(図143左)。いずれも幅0.1～0.15m、深さ0.15m程度で、北西方向に水が流れた跡が観察することができた。

長原6Ai層上面では、水田畦畔SR609～613、溝SD601が検出された(図143左)。SR609～611は方向から図のように復元されると思われるが、SR612・613についてはわからない。SD601は東西方向の浅い溝で、西側のトレンチでは検出されていない。

d．平安～鎌倉時代の遺構

NG89－25次調査

長原4B層下面で南北方向の溝が数条検出された(図144)。耕作に係わるものと思われる。なお、西約10mの地点に位置するNG86－60②次調査では平安時代の建物跡が見つかっているが[大阪市文化

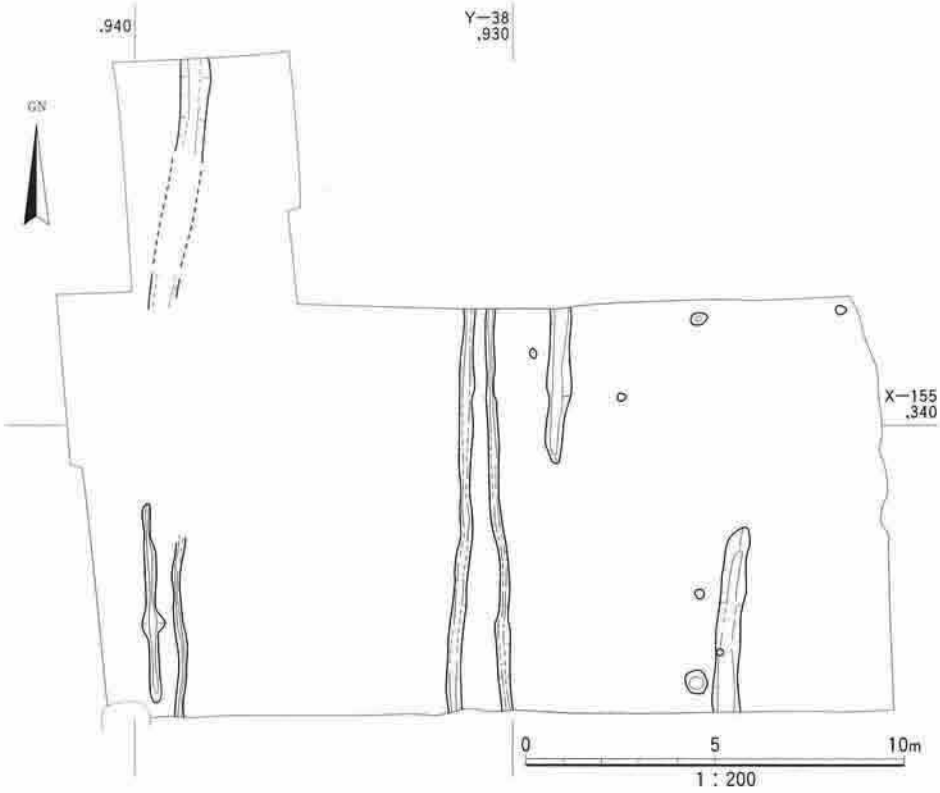


図144　NG89－25次鎌倉時代遺構配置図

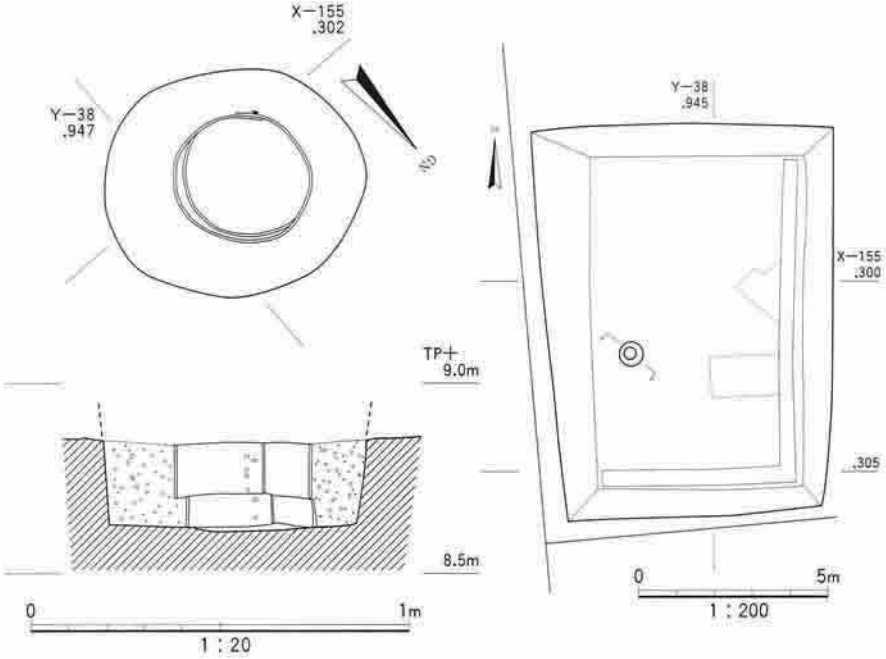


図145　NG95－29次SE401実測図とその位置



写真17　NG95－29次SE401

財協会1993b：pp.59－111]、本調査では柱穴は検出されなかった。

NG95－29次調査

井戸SE401が検出した(図145・写真17)。この井戸は長原５層を掘り抜き、掘形が長径0.7m、短径0.6mの楕円形を呈し、曲物を転用した井戸側を有する。時期決定できるような遺物は出土しなかったが、近隣で平安時代の集落が見つかっていることから、平安時代に属する可能性がある。

３)まとめ

本節では長吉長原３丁目における３件の調査成果を報告した。まず、NG89－25次調査で古墳時代の建物群を検出したことが挙げられる。この建物群は総柱の掘立柱建物と竪穴住居の方位がほぼ等しいこと、出土遺物の時期が５世紀末と限られることから、建物群はほぼ同時存在したと考えていいであろう。また、北東で接するNG85－77次や86－36次調査ではこれらの建物群を画すると思われる溝が検出され、さらに東側の中央環状線一帯では、長原古墳群３期(須恵器型式のTK23・47型式)に該当する長原２～４、35～38、155号墳がある。よって、溝で区画される建物群に小さな古墳群が近接した姿が想定できる(図146)。

また、NG89－25次調査地の西約100mに位置するNG93－76次調査では、建物跡は見つからなかったものの、５世紀末の溝・土壙などが検出され、滑石製臼玉が50点以上出土した[大阪市文化財協会1999c：pp.121－140]。特に溝SD701は東西方向に弧状に延び、北側に存在する集落を画するものと思われる。また、北東約50mには長原古墳群３期の88・89・153・154号墳のまとまりがあり、建物群と小さな古墳群がセットで存在する。なお、NG93－76次調査に西接するNG94－19・20次調査では長原7Ai層が残っていたため、後世の大規模な削平は考えにくいにもかかわらず、古墳時代の遺構は希薄であった[大阪市文化財協会1999e：pp.109－125]。

以上から小古墳群と溝で区画された建物群で構成される単位の存在が想定できる。また、時期はい

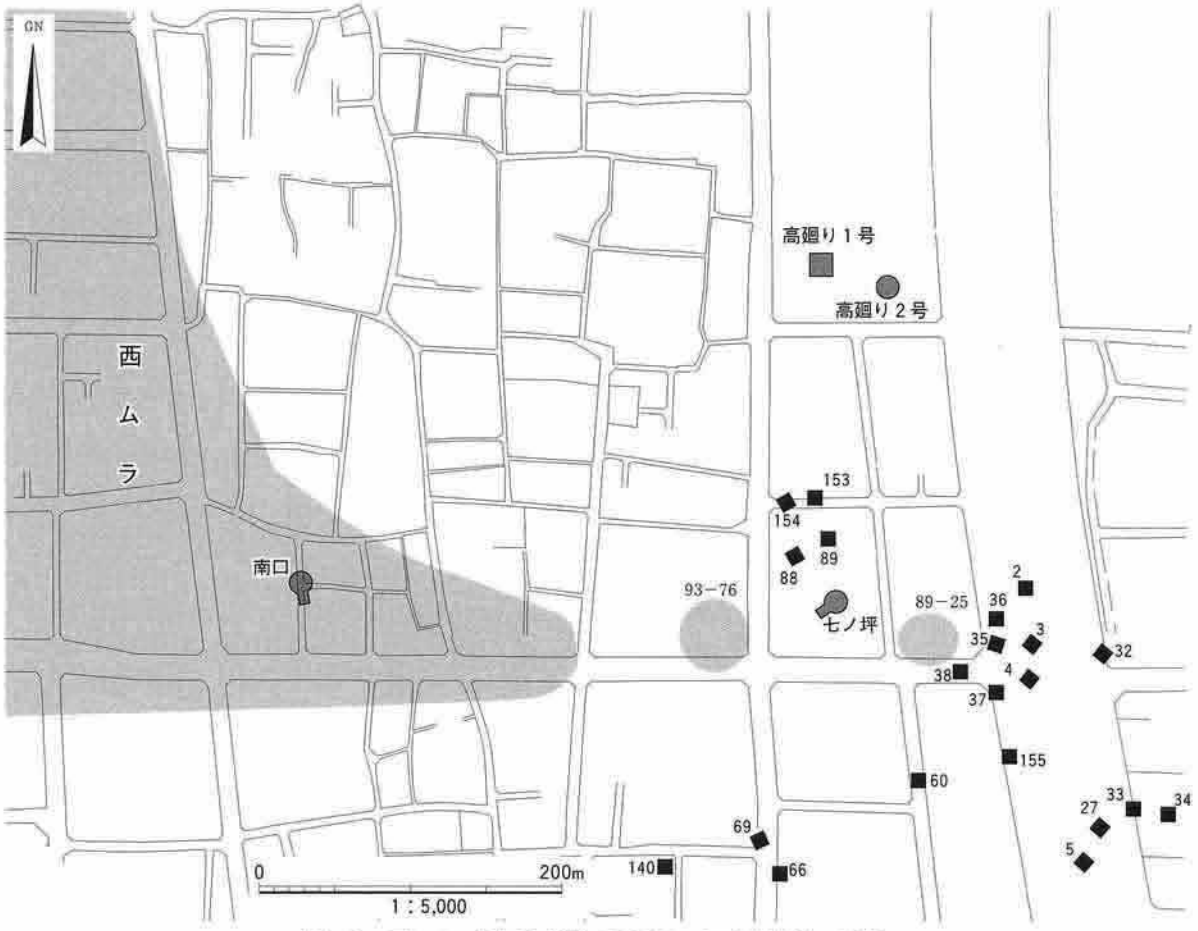


図146　西ムラ・長原古墳群とNG89－25次調査地の関係

ずれも長原古墳群でいう３期に位置づけられ、長原「西ムラ」がもっとも拡大する時期にも当ることから、集落が希薄だったところに点的に居住地がつくられたことが想定される。

ただ、これらの点的な単位は長くは続かず、６世紀前半には少なくとも廃絶している。この廃絶の契機として考えられるのが、七ノ坪古墳(130号墳)や南口古墳(181号墳)といった長原古墳群４期の古墳の築造であり、長原「西ムラ」も範囲を縮小する傾向にある。　(寺井)

註)

(１)[大阪市文化財協会1994：pp.23－28]では本調査地の南側のNG87－54次調査で検出されたSP01・02と、SB706・707の柱穴が一連の掘立柱建物SB701として報告されているが、方向に無理があることから、本節では調査時の見解通り別の遺構として扱っている。

(２)[上野・鈴木1989]では全長を12cmと書いているが、本節の報告文のとおり、全長9.4cmが正しい数値である。

第２節　NG92－２次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では長吉長原１丁目に所在するNG83－36・89－13・90－13・92－２・95－２次調査と、長吉長原２丁目で下水工事に伴って行われたNG83－10・12次および86－79・87－２次調査を報告する（図147）。この地域は広範囲ではあるものの、調査数は少なく不明な点が多い。

NG83－10・12次および84－27次調査は下水工事に伴って行われた。これらの調査ではGL－４ｍ（TP＋6.6m）まで掘削し、長原５～７層を確認することができた。NG83－36次調査は送電線用の鉄塔建設に先立って行われた。４ｍ四方のトレンチを４つ設定して調査を進めた結果、長原6Ai層準の水田畦畔が検出された。以上３調査については規模が小さく、特に顕著な遺構は見つからなかった。

NG86－79・87－２次調査は大阪中央環状線の西沿いで行われた。いずれも人孔部分を調査し、そ



図147　NG92－２次などの調査地位置図

の他の部分は立会調査を行った。いずれの調査でも古代の水田が見つかった。

NG89－13次調査地は旧東除川の南岸に当たり、水田遺構の存在が予想された。調査は諸般の事情で、GL－1.2mまでを重機により掘削し、それ以深をすべて人力で掘下げた。その結果、長原5層準の土壙と思われる掘込みや、奈良時代の水田などを検出した。

NG90－13次調査はマンション建設に先立って行われた。当地は旧東除川の川筋に当り、GL－1.5～2mにわたって堆積する砂礫層を、堤状の構築物がないかどうか確認しながら重機で除去し、本調査を行った。調査の結果、奈良時代の水田などを検出した。

NG92－2次調査は長原総合病院内の建設工事に伴って実施された。調査の結果、鎌倉時代や奈良時代の水田や平安時代の井戸が検出された。井戸からは治暦2(1066)年の紀年が記された土地争議

表19　NG92－2次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	100					近・現代
1	1	黒褐色シルト質粗粒砂	10～20	現代作土				
2	2	暗灰黄色シルト質粗粒砂	10	作土				江戸時代
3	3	オリーブ灰色含礫シルト質中粒砂	10～20	作土				室町時代
4a	4Bi	黄褐色含礫シルト質極粗粒砂	20	作土		▼SD401～403, SX401		鎌倉時代
4b	4Biii	暗灰黄色含礫シルト質極粗粒砂	15	作土		▼SE401～403, SD404		
5a	5A	オリーブ黄色極粗粒砂	15～30	水成				奈良時代
5b	5B	緑灰色シルト質極粗粒砂	15～30	水成				
6a	6Ai	明オリーブ灰色含礫極細粒砂質シルト	10	作土		←水田畦畔		
6b	6Aii	灰色粘土	10	水成				
6c	6Bi	黄灰色含粗粒砂シルト質粘土	10	作土		←水田畦畔		飛鳥時代
7	7Bi	黒褐色含極粗粒砂シルト質粘土	10	暗色帯		▼SD701～707		古墳時代
8	9	灰オリーブ色中粒砂～細粒砂質シルト	5					縄文時代
9	12	灰黄色中粒砂質シルト	10					
10	13	灰白色中～細粒砂質シルト	>10					旧石器時代

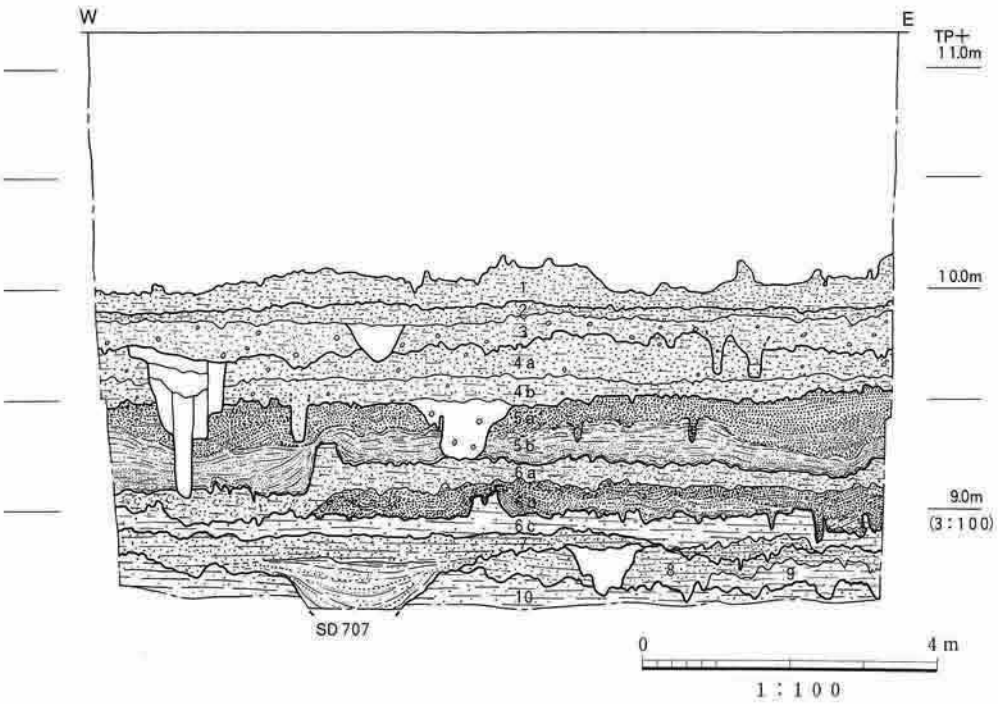


図148　NG92－2次北壁断面図

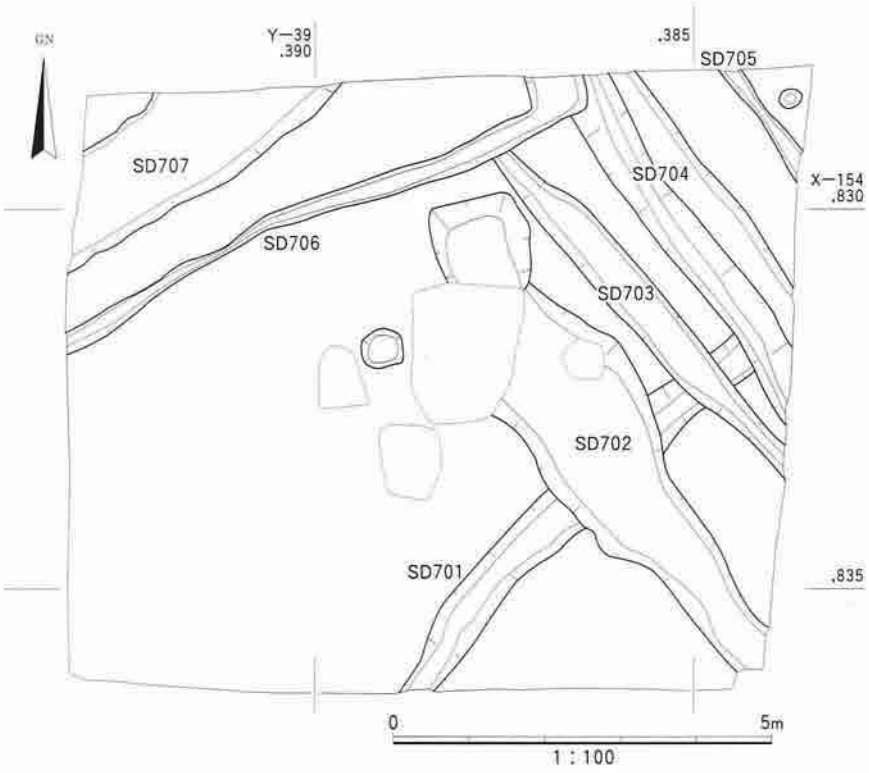


図149　NG92－２次古墳時代遺構配置図

に係わる木簡が出土し、[清水和明・鳥居信子1996]で資料紹介が行われている。

NG95－２次調査は工事の掘削深度がGL－1.2ｍまででであったため、長原５層上面までの調査であったが、調査の結果、鎌倉時代の水溜遺構を検出した。

２)調査の結果

ｉ)層序

図148はNG92－２次調査地の北壁断面図で、層序表は表19のとおりである。本調査では調査期間が短かったため、現代盛土～長原３層と長原６層を重機で掘削した。断面観察では長原6Ai層上面や6Bi層上面で水田畦畔を確認した。

ii)遺構と遺物

ａ．古墳時代の遺構

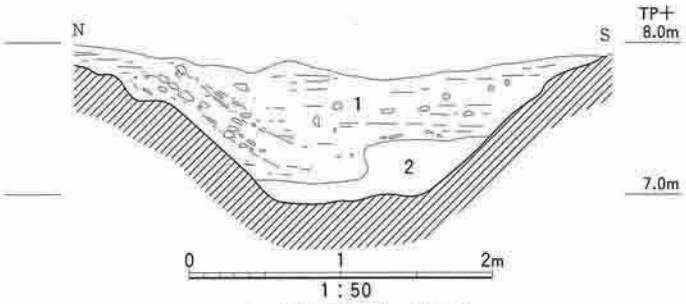
NG92－２次調査では長原7Bi層(図148の第７層)基底面において、溝SD701～707が検出された(図149)。SD704やSD707は深さが0.2～0.3ｍで、SD704は西側が１段深くなる。これ以外の溝の深さは0.1ｍ程度である。SD702～705は北西－南東方向に平行に延びる。これらは出土遺物から５世紀後半ごろの溝と思われる。

ｂ．飛鳥～奈良時代の遺構

NG89－13次調査

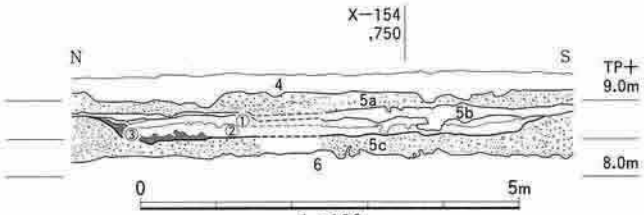
長原6Ai層基底面で東西方向の溝SD601、同層上面で水田畦畔SR601・602が検出された(図152)。SD601は幅約４ｍ、深さ0.8ｍの逆台形の断面を有し、長原6Bi層を切る。埋土に偽礫が多く含まれることから、人為的に埋め戻されたと考えられる(図150)。SR601は西でやや北に振る方向であるが、SR602はほぼ正東西方向である。これらの間隔は17.5ｍである。

また、断面観察で長原５層の堆積途中に掘られた土壙SK501が確認された(図151)。平面形態は不明であるが、南北の長さは約６ｍで、深さは0.2ｍである。埋土中からは炭片とともに土師器甕や鍋などの破片がまとまった出土した。これは長原５層準の洪水に中断があり、一時期地表面が形成されて人間の活動があったことを示すものである。このような洪水の合間の人間活動の痕跡はNG92－92次調査地の畦状遺構SR501や(第Ⅱ章第３節)、NG96－14・41次調査地の足跡や鋤跡でも窺える[大



1：地山偽礫を多量に含む埋土
2：灰色粘土

図150　NG89－13次SD601断面図



4：下部に礫が多い礫混りシルト（長原4Biiiもしくは4C層）
5a：灰白色砂礫（水成層：長原５層）
5b：灰白色シルト（長原５層）
5c：オリーブ灰色細粒～粗粒砂（水成層：長原５層）
6：灰色粘土（作土層：長原6Ai層）
①：オリーブ黄色砂礫
②：緑灰色シルト～極細粒砂
③：黒色シルト～極細粒砂
※①～③はSK501埋土

図151　NG89－13次SK501断面図

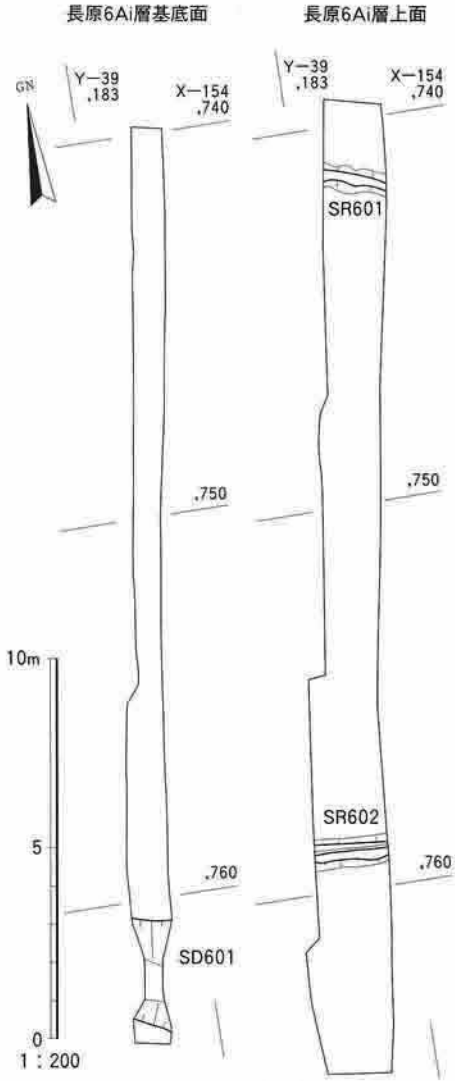


図152　NG89－13次遺構配置図

阪市文化財協会2001a：p.139]。

NG90－13次調査

長原6Ai層基底面で溝SD602、同層上面で水田畦畔SR603・604が検出された(図153)。

SD602は幅約10m、深さ２mにおよぶ(図版22上)。埋土は３層に細分でき、下部は極粗粒砂を中心とする砂層である。中部・上部は炭化物を多量に含む粘質の強いシルトであるが、両者の境に踏込み状のラミナの変形が認められる。また、流路を北西方向に延長すると出戸池がある。

出土遺物には土師器高杯1・甕2と須恵器杯3がある(図154・写真18)。1は杯部があまり広がらない形態である。杯底部に接合痕が明瞭に残り、全面ユビオサエが残る。2は体部下半にハケメが残り、上半はユビオサエやナデで仕上げられる。これらは飛鳥時代前半のものであろう。3は口縁端部にあいまいな面をもち、ヘラケズリは底部の１／２にしか及んでいない。TK10型式に属する。

NG92－２次調査

断面観察で長原6Ai層(図148の第6a層)上面や長原6Bi層(同第6c層)上面で水田畦畔が確認された(図148)。長原6Ai層上面では畦畔を境にして北西隅が0.2m低くなっていた。

NG86－79・87－２次調査

長原6Bi層準の水田とそれに伴う畦畔SR605～609が検出しされた(図155)。ここで検出された畦畔はNG86－109・87－35次調査地[大阪市文化財協会1992a]や、大阪文化財センターによる城山(そ

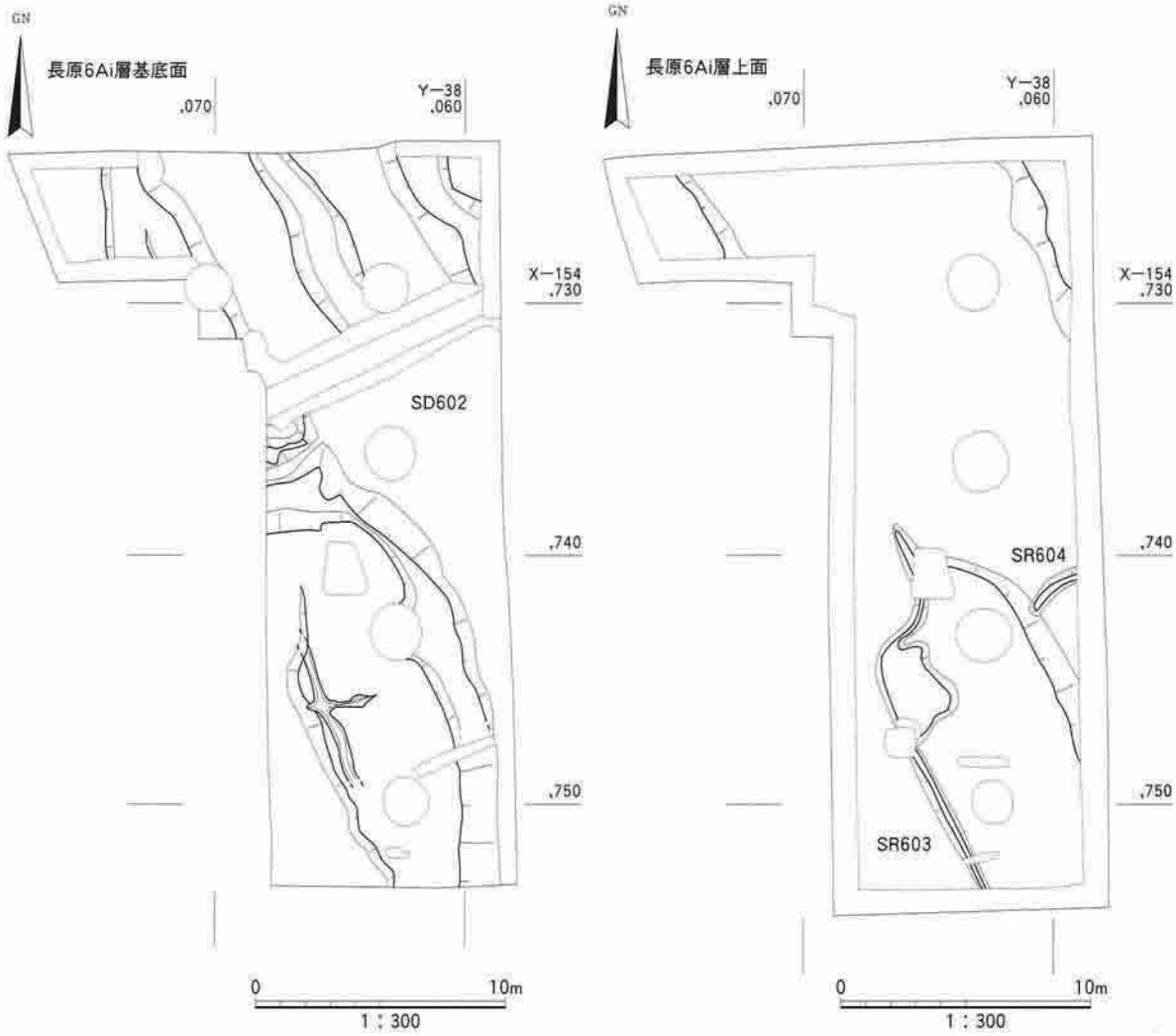


図153　NG90−13次飛鳥～奈良時代遺構配置図

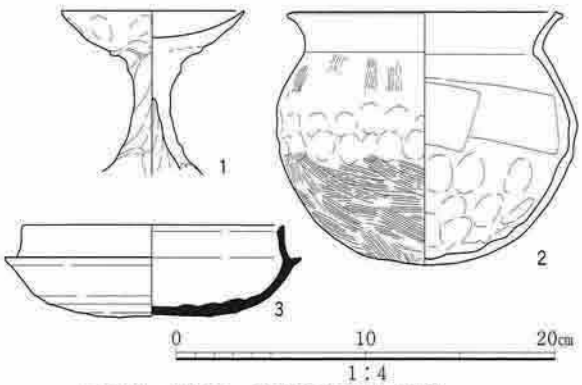


図154　NG90−13次SD602出土遺物



写真18　NG90−13次甕(2)出土状況

の３)調査地[大阪文化財センター1986c]で検出された水田畦畔と連続するものと思われる(図155)。

ｃ．平安時代の遺構と遺物

NG92−２次調査では、長原4Biii層(図148の第4b層)基底面でSE401～403の３基の井戸のほか、溝SD401や多数の柱穴が確認された(図156)。

SD401：南北方向の溝で、幅1.1m、深さ約0.2mである。埋土の最下部に水成堆積物が認められた。

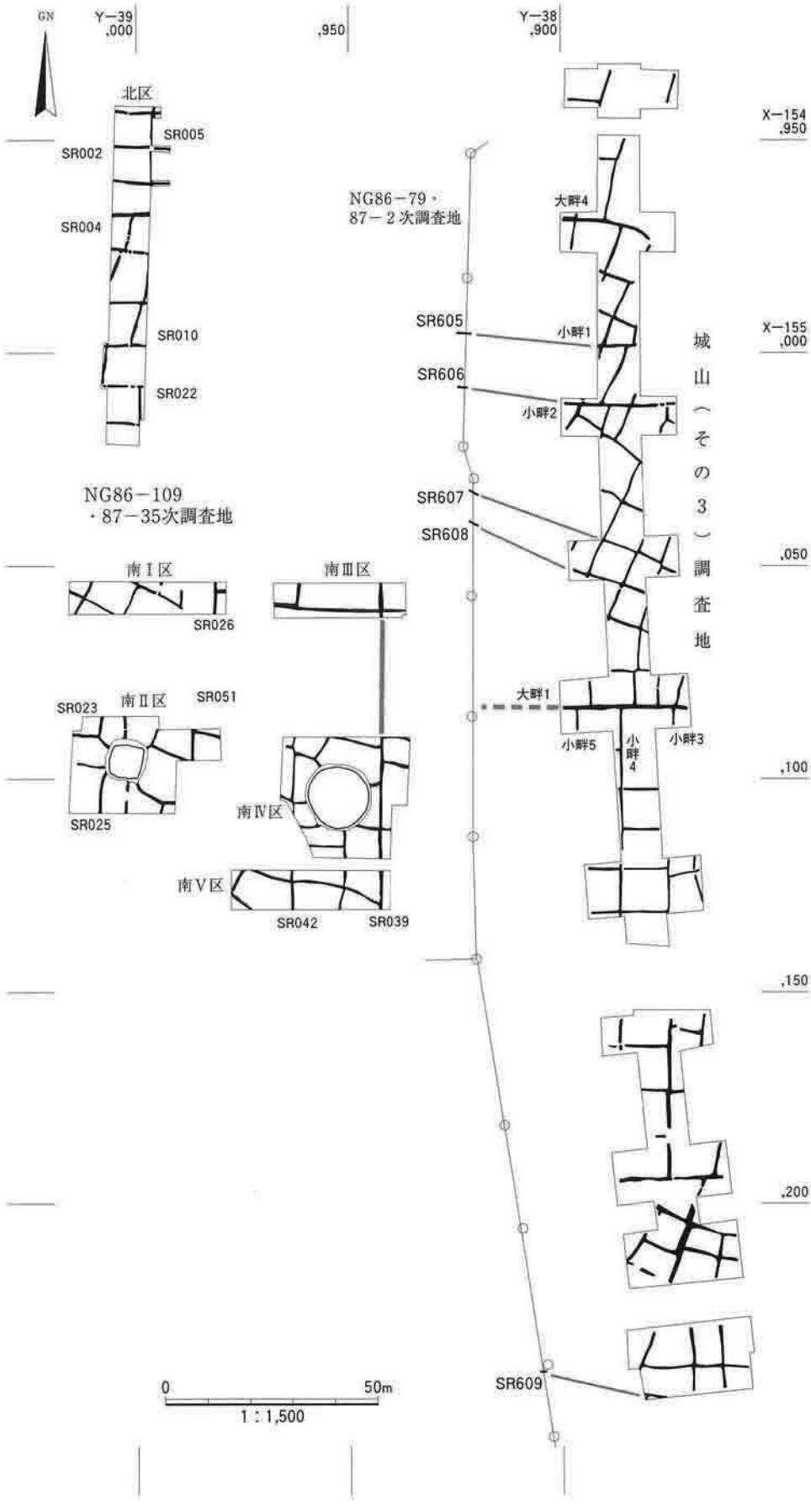


図155　NG86−13・87−2次調査地および周辺の水田

南側はSE401によって壊されている。さらにその南側では検出されなかった。

3基の井戸はほぼ東西に一直線に並んでいる。しかも、廃絶したときの埋戻し土は同時のものである(図157)。したがって、3基の井戸が同時に使用されたと考えられる。

SE401は3基の井戸の中央に位置する。現存する深さ約170cmで、底に直径約40cmの曲物を2段据えて水溜としていた。下段の曲物は高さ24cm、上段は11cmである。水溜の周囲には曲物を固定した埋戻し土が確認できるが、曲物の中とその上位は、水成堆積物の暗オリーブ色細粒砂質シルトである。よって、水溜はもともとこの高さまでで、その上は素掘りになっていたと考えられる。この水成堆積

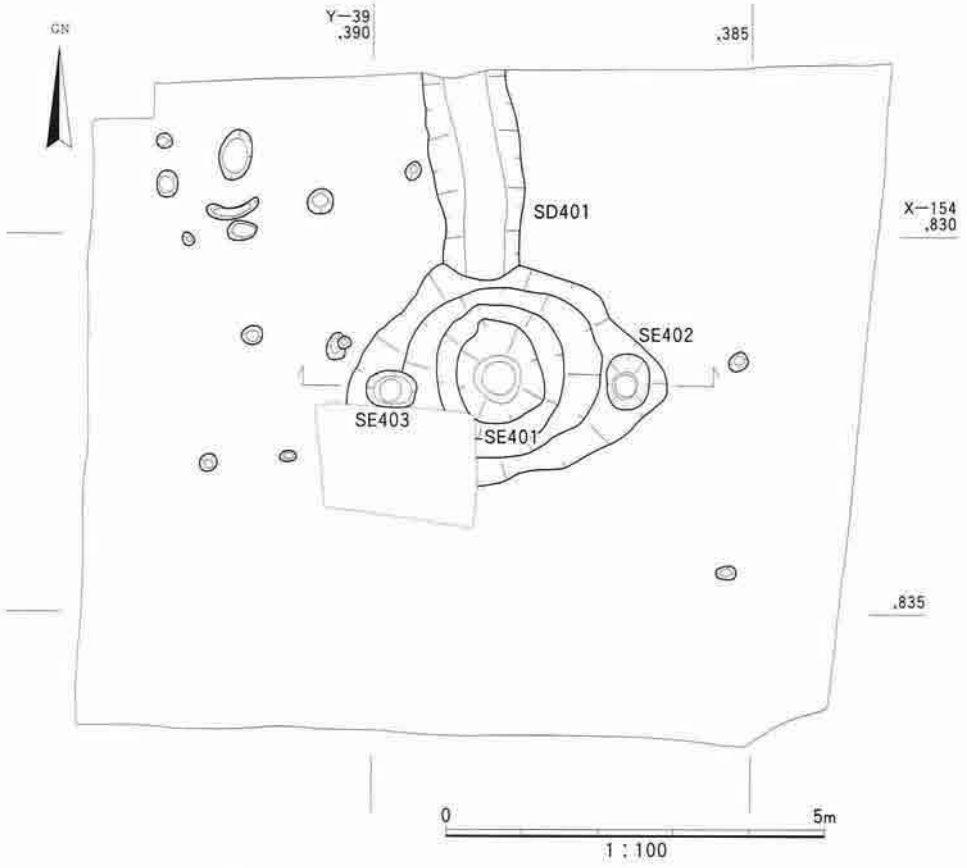


図156　NG92－2次SE401～403・SD401平面図

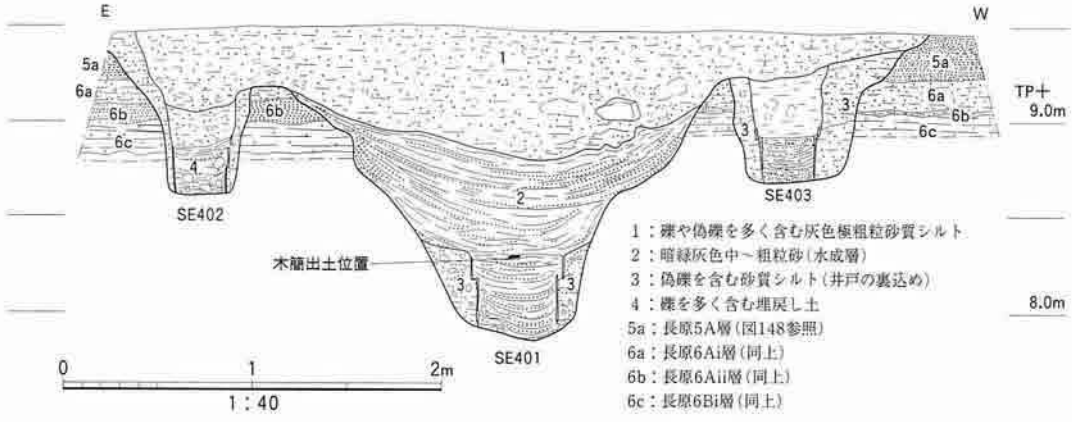


図157　NG92－2次SE401～403断面図

物の中からは、水溜の最上部で「治暦二(1066)年六月廿一日」銘の木簡4、素掘りの部分で木製鉢5が出土した。いずれも井戸が廃絶した後に廃棄されたものである。

一方、SE401の両脇に設置されたSE402・403は、現存する深さ約0.9mで、どちらもほぼ同じ深さに作られている。SE402の底には直径30cmの曲物が3段以上確認されたが、上段は腐植が著しく、数cmの高さが遺存するのみであった。しかし、掘形の埋戻し土は深さ60cmが確認され、本来の水溜は同程度の深さと推定される。曲物の内部は水成堆積物で埋まっており、その中位に土師器小皿6が正置されていた。

SE403もSE402とほぼ同じ構造に作られている。底で確認された曲物は、直径30cmのものが2段であったが、やはり、本来の水溜は60cm以上であったと推定される。また、曲物の内部に溜った水成堆積物の中位に、土師器小皿7が正置されていたこともSE402と同じである。2枚の土師器小皿は、井戸の廃絶にともなって行われた祭祀に関連して埋納されたものと考えられる。

SE401の曲物の内部からは、木簡4と木製鉢5に加え、小片であるが土師器小皿、黒色土器B類椀などが出土した(図158・159)。木簡4は全長35.2cm、最大幅6.1cmで、頭部は円頭状に整形している。下端から1.0cmと10.3cmの位置に、0.7cmの間隔で2個ずつの小孔が穿孔されている。隣合う小孔の間には紐ずれによると思われる痕跡があることから、棒のようなものに括り付けていたと考えられる。文字は片面にのみ全部で92字が記載され、裏面には刀でつけたような細かい傷が無数についていた。5は内側を刳り貫いてから轆轤によって整形した挽物の鉢で、柾目材を横木取りして作っている。口縁部の直径は22.6cmで、焼けて歪んだ点を除けばほぼ正円であり、内外面とも轆轤回転でていねいに削られてい

制止　津則永私苧畝事
合壹畝　在長原里卅五坪□
右件苧畝平大夫殿御出擧米僧戒能所負代　則永所負代制止者
制止如件但沍汰之故者戒能私随宅苧畝二者會賀御□仁
平大夫殿者戒能□代被制止者
治暦二年六月廿一日

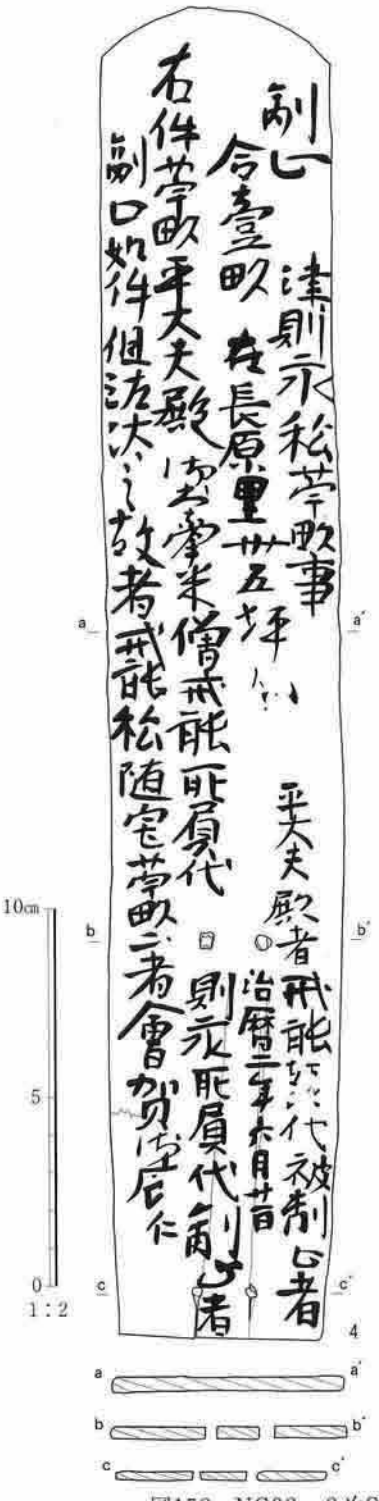


図158　NG92－2次SE401出土木簡

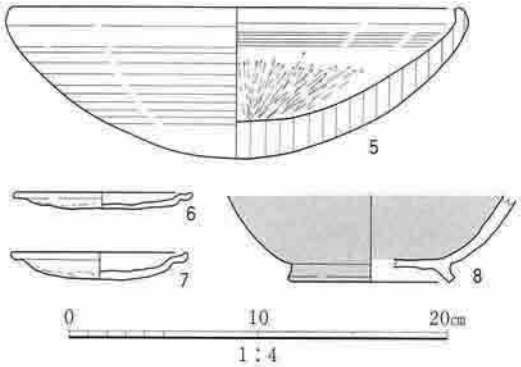


図159　NG92－２次SE401～403出土遺物
SE401(５)、SE402(６)、SE403(７・８)

る。また、内面には不定方向の刃物傷が多数残っている。

SE402の曲物の内部からは「て」字状口縁の土師器小皿6、皿の破片、掘形からは須恵器の破片が出土した(図159)。SE403の曲物の内部からは、「て」字状口縁の土師器小皿7、黒色土器Ｂ類鉢8に加え、黒色土器Ａ類椀、Ｂ類椀、瓦器椀などの破片が出土した。瓦器椀は実測できなかったため図示していないが、内外面にていねいなヘラミガキが施されるものである。

３基の井戸を同時に埋め戻した土からは、土師器皿、椀、羽釜、黒色土器Ａ類椀、Ｂ類椀、Ⅰ期の瓦器椀、須恵器、瓦などの破片が出土した。

これらの出土遺物から３基の井戸に時期差は認められず、また、6・7が平安時代Ⅳ期古段階に位置づけられることから、瓦器が出現した直後の11世紀後半頃の年代が想定される。その年代はSE401で

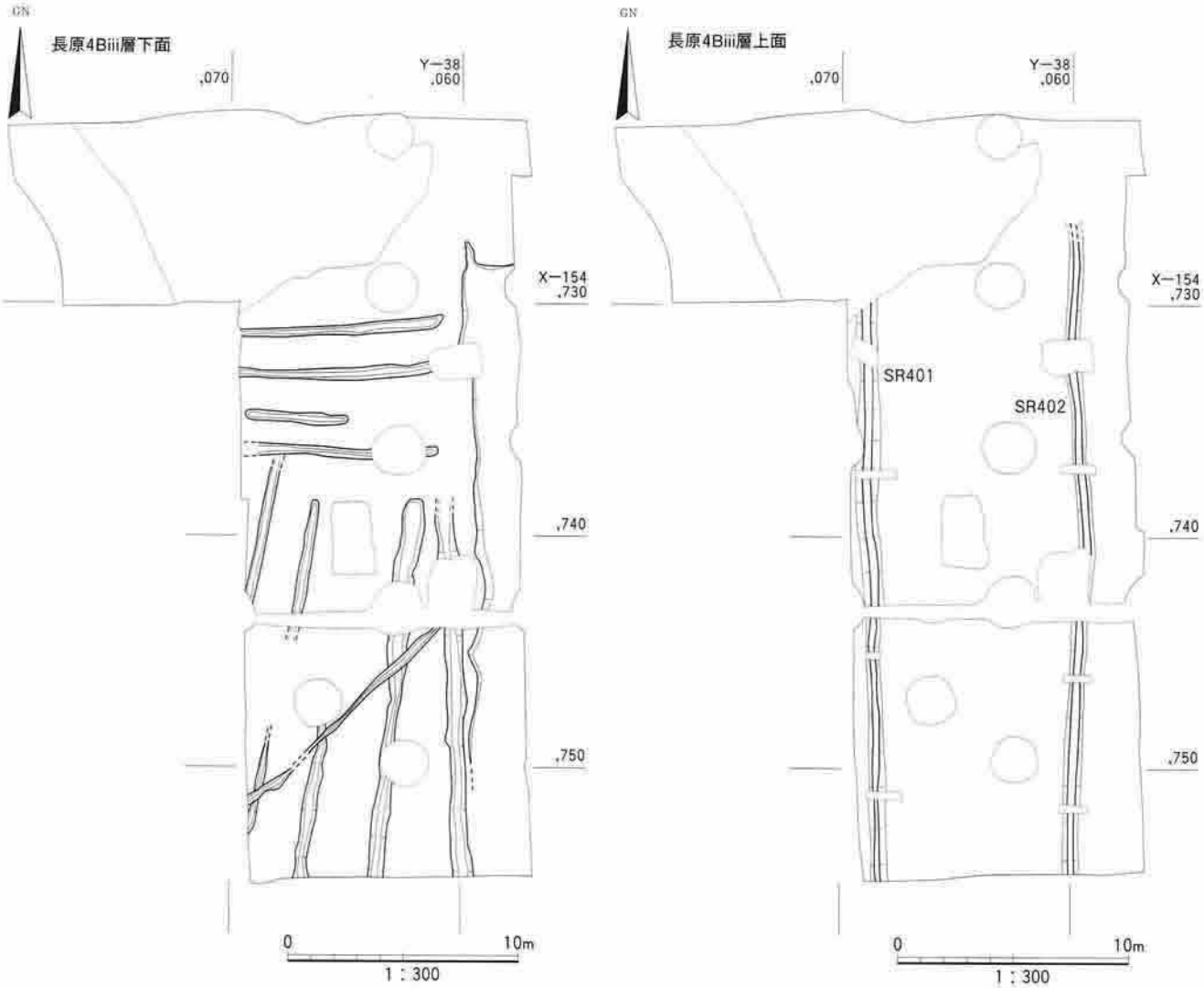


図160　NG90－13次鎌倉時代遺構配置図

出土した木簡の年代と整合する。

d．鎌倉時代の遺構

NG90－13次調査

長原4Biii層（もしくは長原4C層）上面で南北に平行して延びる畦畔SR401・402が検出された（図160右）。幅0.6～0.8mで、それぞれの間隔は8.5mある。この作土の下面では東西および南北方向の耕作溝が検出された（図160左）。

NG92－2次調査

長原4Bi層（図148の第4a層）基底面で溝SD402～404、浅い落込みSK401が検出された（図161）。溝はいずれも東でやや北に振った方向に平行に延び、深さ0.2m前後で、埋土に水成堆積物は認められなかった。13世紀前半に位置づけられる瓦器椀や土師器が出土した。

SK401は長径が4mを越える不定形の土壙で、深さは0.2m程度である。13世紀前半ごろの瓦器片とともに土師器・瓦の破片が多量に出土した。

NG95－2次調査

長原4Bi層基底面で溝・土壙が検出された（図162上・図版22中）。

SD405：幅約0.7m、深さ0.2mの溝である。ほぼ直角に曲る。

SD406：幅約0.7m、深さ0.2mの溝である。SK402に取付いている。

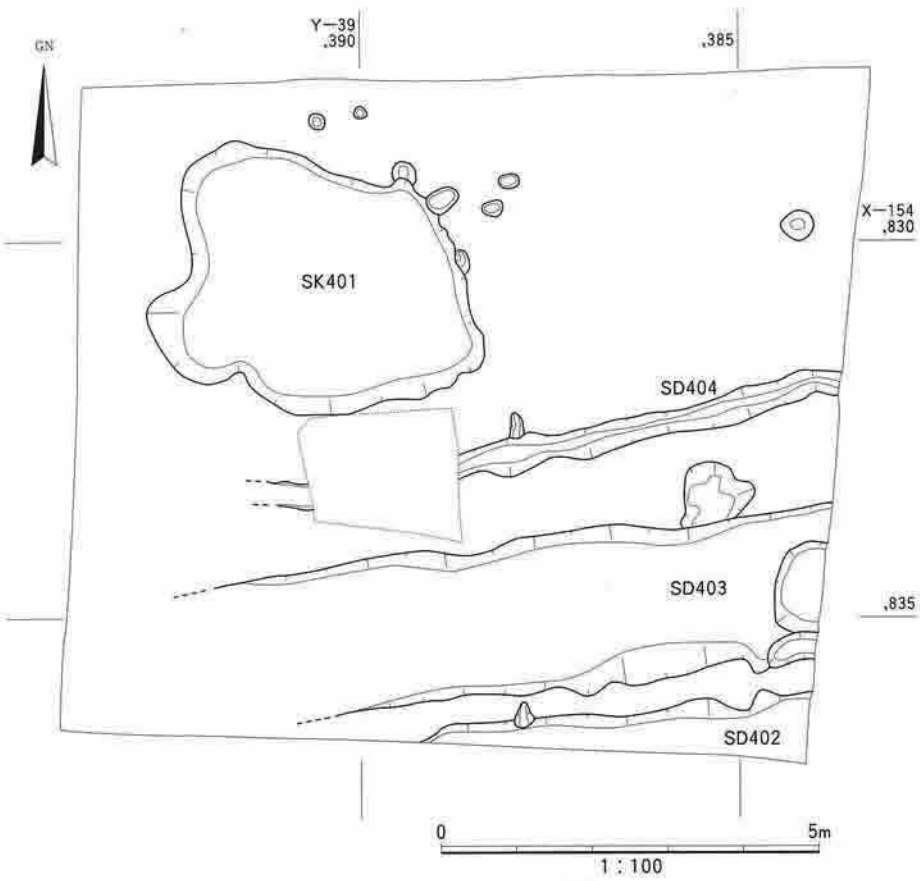


図161　NG92－2次鎌倉時代遺構配置図

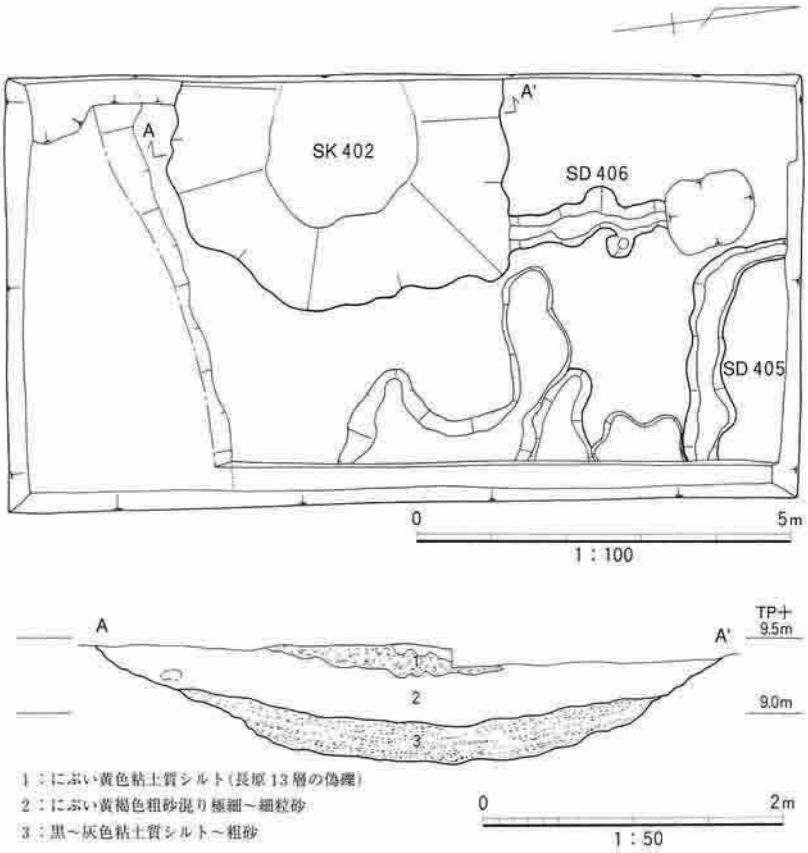


図162　NG95－2次鎌倉時代遺構配置図およびSK402断面図

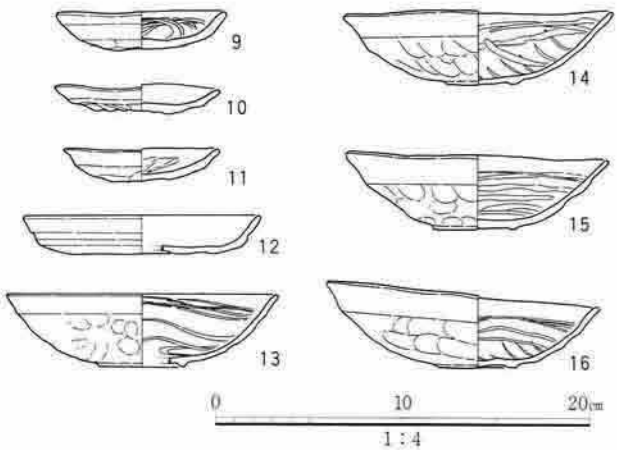


図163　NG95－2次SK402出土遺物

SK402：南北4.6m、東西3m以上、深さ0.75mある。全体は検出されなかったが、平面形はほぼ円形を呈するものと考えられる。埋土は3層に分層できた(図162下・図版22下)。3層はラミナが顕著にみられ、水漬きの状態であったようである。現状では、本層内の水準で若干の湧水がある。この層からは遺物はほとんど出土しなかった。2層はラミナこそ見られないものの、明らかに埋戻したという形跡もない。土器の出土状態がほぼ水平であることから、土砂が少しずつ流入して堆積したものと考えられる。1層は地山の偽礫を含み、埋戻された土である。2層からは土師器皿12、瓦器皿9～11、椀13～16が出土した(図163)。13～16は器高が低く、高台が退化したもので、Ⅲ－3期に該当し、13世紀前半に位置づけられる[尾上実ほか1995]。

この遺構は下層の堆積状況から水を溜めるためのものと考えられる。近隣は耕作地であり、灌漑用に蓄えたのであろう。

3)まとめ

本節では長吉長原1丁目(以下、「同地区」と略称)で行われた調査を報告した。広域にもかかわらず、調査数が少ないのは主要幹線沿いでしか調査が行われていないためである。逆にこれが同地区の中央部において、古い村落の名残を残すことになり、地下に埋没している東除川の流れの方向も現存する道路から窺うことができる。

古墳時代の遺構については本節での報告は少なかったが、同地区の南東では高廻り古墳群が見つかっており、さらに南側では長原古墳群の南群が広がる。また、同地区西側に当るNG92－2次調査では

古墳時代の遺構が断片的に見つかっているが、これは長原古墳時代集落の「西ムラ」の一部であろう。現在、同地区中央部の調査が進んでいないため、集落域がいびつな形に復元されているが、未調査地域の調査が進めば新たな展望が見えることであろう。

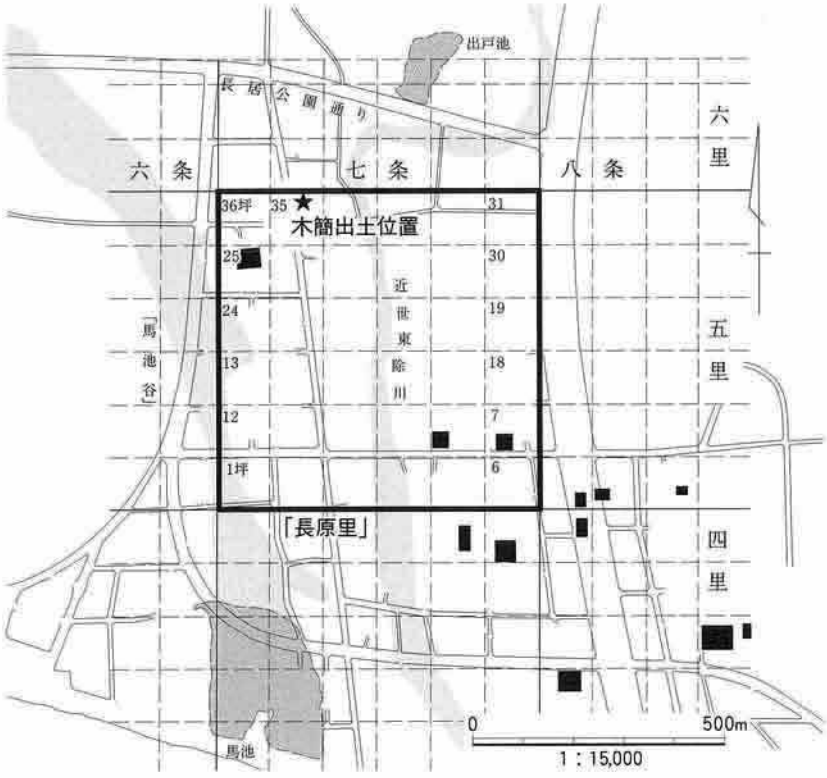


図164　木簡出土位置と推定条里

飛鳥～鎌倉時代については水田や耕作関係の遺構が検出された。同地区が飛鳥時代以降大規模に水田化されたことを窺わせるが、NG92－2次調査で見つかった平安時代の井戸のように、居住地は散在していたのであろう。

ここで、本節の調査成果でもっとも特筆される、NG92－2次調査地の井戸SE401から出土した木簡を取り上げたい。この重要性についてはすでに[清水・鳥居1996]で指摘されていて、その内容を整理すると以下のようになる。

まず、「治暦二年」という紀年が記されていることから、正確な年代が明らかである。加えて、これまで11世紀後半頃に想定されていた平安時代Ⅳ期古段階の土師器と共伴していることから、これまでの年代観をさらに裏付けることができた。

第2に、「長原」という地名が記されていたということである。長原の地名が文献に登場するのは、今までは『平安遺文』の保延3(1137)年「河内國長原字先生君」が最古のものであったことから、1066年の段階でこの辺りが「長原」と呼ばれていたことがわかる。また、「長原里卅五坪」と記されていたことから、条里制でいう丹北郡七条五里である当地が「長原里」の35坪に当ることも明らかになった(図164)(註1)。

第3に、在地豪族津氏の一員である則永と、僧侶の戒能、中央貴族の一人と思われる平大夫の3人が土地を巡って争っている様子が窺える。冒頭に「制止」という文字が大きく書かれていることから、何らかの行動を禁止することを告示する「制札」に該当するものである。その「制止」の内容は、「平大夫殿」によって「津則永」が苧(からむし＝繊維の原料になる商品作物)を作っていた「長原里卅五坪」の「壹畝」の使用を禁ずるというものである。

なお、「制止」の理由については複雑な事情が考えられるものの、以下の説が考えられる。

a)「津則永」が「平大夫」に債務のある僧侶「戒能」に負債したことに起因して、「平大夫」が「津則永」

の畠(「壹畝」)を差し押さえた。

b)「平大夫」は「戒能」に債権を持っていたが、担保がすでに「會賀御□(厨もしくは庄か？)」に差し押さえられていたため、「會賀御□」に負債のあった「津則永」の畠を差し押さえた。

c)同一の「苧畝」に対し、「戒能」と「津則永」がそれぞれ別件の負債を担保としたため、「戒能」の債権者である「平大夫」が、「津則永」の行った担保設定を無効とした。

ただ、この木簡に登場する人物が記された文献はないため、現状ではこれ以上の結論を出すのは困難である(註2)。　(寺井)

註)

(1)[京嶋1999・2001a]では、この木簡の末尾の「會賀御□」に着目している。「會賀」は『日本書紀』や『延喜式』では「衛我」や「恵我」などとして登場する、「長原」よりも古い地名で、以前は「長原」は「會賀」に含まれていたと考えている。また、「會賀」の次に登場する「御」は天皇に関わる単語に付けられる接頭語で、別の文献では「會賀」が牧であったということが記されている。以上のことから、「長原里」はかつては広大な皇室領として認識されていた会賀御牧の範囲に含まれていたが、11世紀以降は西琳寺や醍醐寺などの荘園も設定されるようになり、土地争いが起こりやすい環境にあったことを推定している。

(2)近年、佐々木恵介氏が中世の制札の原型を考えるのにこの木簡を取り上げている[佐々木恵介2004]。それによると、制札とは禁制を不特定多数に告知するために木札に書いて掲示したもので、もっとも古い例としては文治元(1185)年の北条時政制札(八尾市玉祖神社所蔵)が挙げられている。中世のものが整然と書かれているのに対し、長原遺跡出土の木簡は「制止」と書きだされているものの、内容が錯綜している。ただ、立て札によって命令を示したという点で、制札につながる可能性を示唆している。

第Ⅴ章　北地区の調査

第１節　NG93－37次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではNG85－79・87－43・93－37次調査を報告する（図165）。

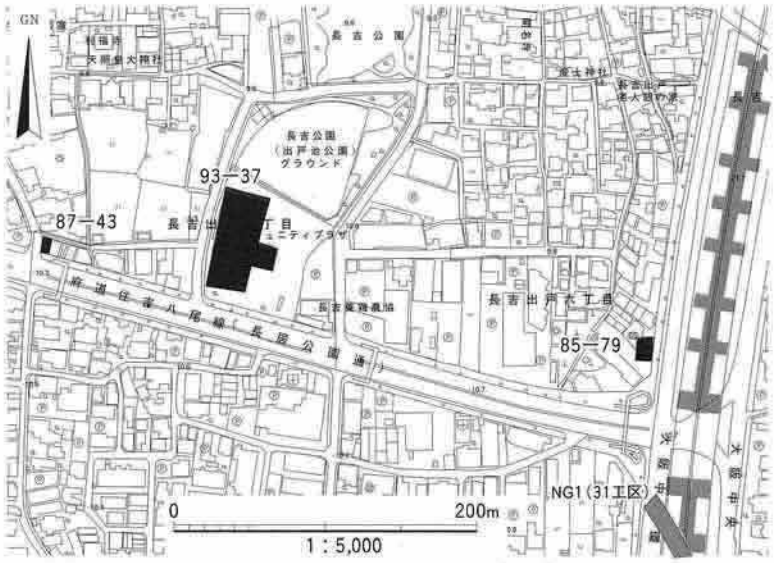


図165　NG93－37次などの調査地位置図

NG85－79次調査地は大阪中央環状線に長居公園通が突き当たる角の北西に位置する。南約100mの地点には地下鉄谷町線延長工事の31工区がある。工事の掘削深度がGL－3.2m（≒TP＋7.3m）であったため、中世の面までしか平面調査ができなかったが、施工業者と協議して、３個所で深掘を行い、弥生時代の包含層や長原13層の上位の地層で、火山ガラスを含む褐灰色～灰黄褐色シルト層が確認された。

NG87－43次調査地はNG93－37次調査地の西約100mの地点に位置し、南側は長居公園通（敷津長吉線）に面する。17㎡という小規模な調査であったが、室町時代の掘立柱建物が検出された。

NG93－37次調査地は旧出戸池の埋立地に当る。さらに当地は旧東除川が東に折れ、再び北流する曲り角の地点であったと考えられている。1993年２～３月に２個所で試掘調査が実施され（NG92－90・95次）、古墳１基（**199号墳**）と縄文時代の包含層を確認したため、本調査を実施するに到った。調査の結果、さらに古墳５基（**長原201～205号墳**）が発見され、1993年11月13日に現地説明会が実施された（写真19）。


写真19　NG93－37次現地説明会風景

２）調査の結果

ｉ）層序

表20　NG87－43次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	現代作土	20	作土				近・現代
2	2	暗灰黄色シルト	20				江戸時代以降の遺物	江戸時代
3	2～3	灰白色シルト	5					
4	3	浅黄色細～粗粒砂	60	水成			瓦質土器・瓦・土師器	室町時代
5	3	灰色シルト	20			▼SB301	瓦質羽釜・瓦器椀・瓦	
6	4	灰白色細粒砂～シルト	>30					

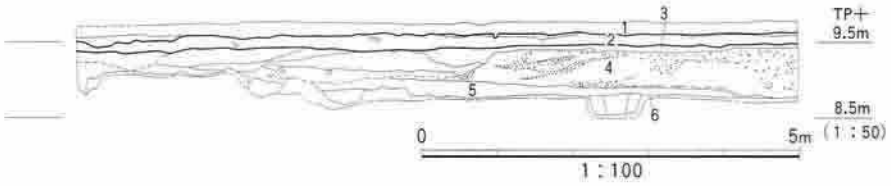


図166　NG87－43次南壁断面図

表21　NG93－37次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物・含有物	時代
1	6	黄灰色シルト質粘土	20～30	作土				奈良時代
2	7A	灰色粘土	20～30	作土			土師器杯C7	飛鳥時代
3	9～12	黒色粘土～シルト質粘土	20				土壌化した横大路火山灰	縄文時代
4	12D	暗灰黄色細粒砂質シルト	20				横大路火山灰	
5	12D	暗オリーブ色細粒砂質シルト	20					
6	13A	灰オリーブ色細粒砂質シルト						旧石器時代

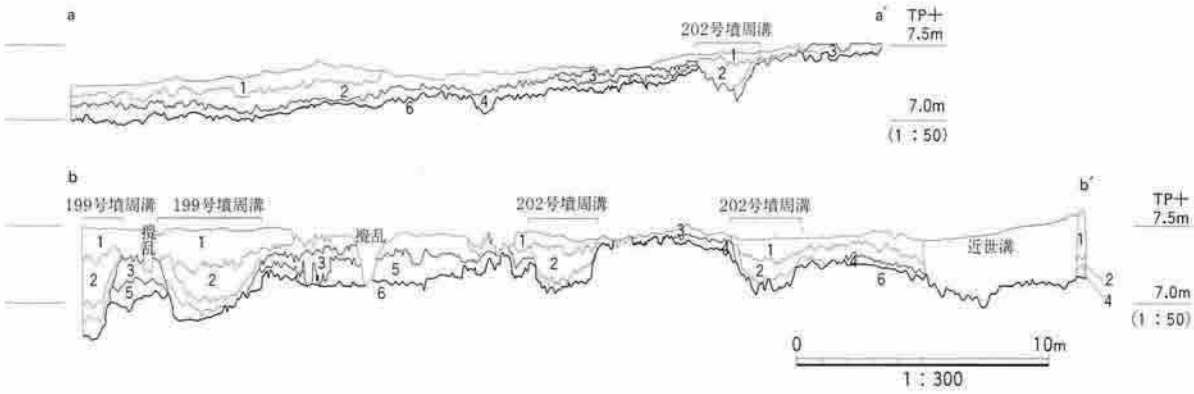


図167　NG93－37次断面図

NG87－43次調査では15世紀までの地層を確認することができた(図166・表20)。第３層は東側で第４層に切り込み厚くなる。第４層はラミナが発達した水成層である。

NG93－37次調査では長原６層より上位の地層は削平されていて、それ以下の地層が残っていた(図167・表21)。断面の位置は図168に示した。

長原7A層と想定される第２層からは土師器杯C7が出土した(図171)。7は内面に放射状の暗文があり、径高指数は30で、飛鳥Ⅱに位置づけられる。また、第４層からは横大路火山灰が検出されたことから、長原12D層と思われる。

ii)遺構と遺物

ａ．縄文時代以前の遺構と遺物

NG93－37次調査地では、第３層を埋土とするピットと土壙が検出された(図168)。調査区中央付



図168　NG93－37次縄文時代遺構配置図

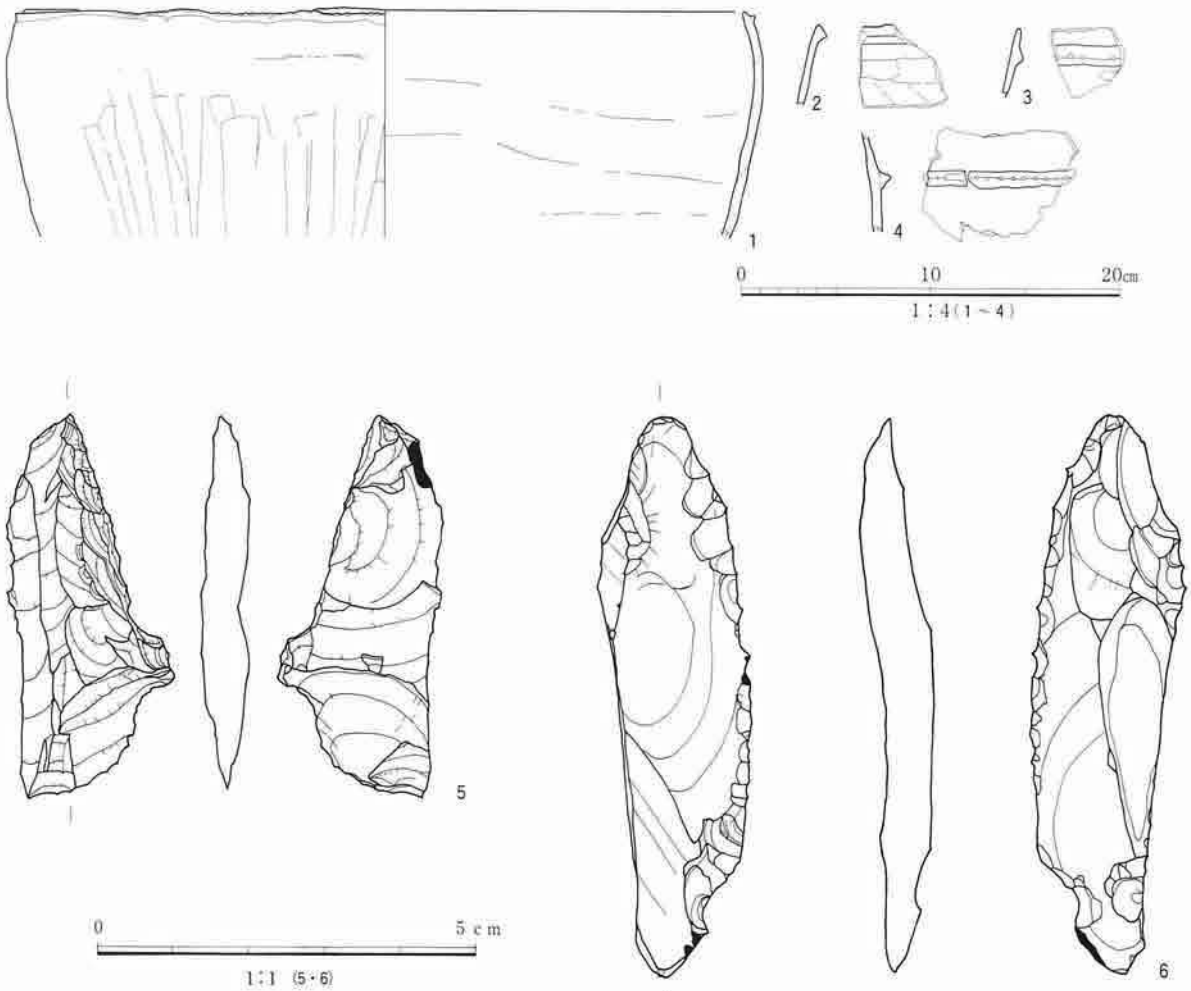


図169　NG93－37次縄文時代出土遺物

近(長原201号墳墳丘の下位層)の４つのピットは方形をなし、住居の柱穴の可能性がある(SB901)。ピットは直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.3mのものであり、土壙は長軸2.5m、短軸1.0m、深さ0.3mの楕円形である。

これら遺構の中からの遺物はなかったが、包含層から縄文時代晩期長原式の深鉢1～4や石器が出土した(図169)。1は口縁端部に低い突帯があり、刻み目が施されている。外面には縦方向のケズリが施され、内面には接合痕が明瞭に残る。2は口縁端部の外側に突帯が付き、刻み目はない。3は口縁端部からやや下がったところに突帯が付き、刻み目が施される。4は体部で、刻み目突帯が巡る。

石器は石鏃５点、楔形石器１点、細部調整のある剥片１点、剥片と思われるもの４点が出土し、楔形石器5、細部調整のある剥片6を図示した。5は２段階の加撃が確認される楔の本体である。最初の加撃は、図の横方向から行われており、左図の右側縁に一連の打撃痕が認められることから、打縁と考えられる。その結果、右図にみられる打瘤が凹み、リングが大きく屈曲したネガティブな剥離面が生じている。その後、打縁の位置を90°変えて加撃し、左図の左側縁では上からの裁断面が生じ、また、右図の下では下からの剥離面が生じている。図の上端を打縁、下端を刃縁として楔に使用したものと考えられる。

6は掻器と思われ、底面のある板状の石核から剥離した横長の剥片を素材としているとみられる。背面・腹面とも、剥片の打面側から二次剥離が行われた後に、剥片縁に細部調整剥離を施して、刃部としている。また、細部調整の段階で、下部の両側縁には抉り状の剥離が行われ基部を作っている。剥片縁側の抉りは両面から、打面側の抉りは背面側から剥離が行われている。二次剥離の剥離角は比較的浅く、薄い剥片が剥離されている。背面の二次剥離は左図左外方から打撃されたと思われるが、同図上部左にあった割れ傷を起点に副次的に剥離したと考えられる。剥片縁に当る側縁(右図右側縁)は2個所で折れている。中央から下端にある折れは、二次剥離後、細部調整前に折れている。上部の折れは二次剥離の時か、細部調整前に折れている。

この石器は製作工程や風化度から、縄文時代の古い段階か後期旧石器時代後半に属するものと思われる。

第4層を埋土とするピットと土壙は、南端と中央より北に集中する。南端で並ぶピットは、直径は0.1～0.5m、深さは0.1～0.2mである。遺物はなかった。中央より北にあるピットは小さく浅いものであるが、深鉢の底部が1点出土している。また土壙は調査区北端にあり、直径1.0m、深さ0.6mで、遺物はなかった。包含層から石器が14点(石鏃10点、剥片4点)出土した。

第5層を埋土とするピット、土壙はなかった。

なお、第3～5層出土石器はすべてサヌカイト製で、石鏃は凹基式石鏃である。

b．古墳時代の遺構と遺物

方墳が6基検出された(図170・図版23上)。以下、各古墳について概要を記す。

長原199号墳：試掘(NG92－90次)で検出された。古墳の規模は、周溝の内側で6.0m×9.0m、周溝の幅3.0m、深さ0.6mである。第13Ai層に由来する偽礫を多く含む盛土は数cm残っていたが、主体部は検出されなかった。

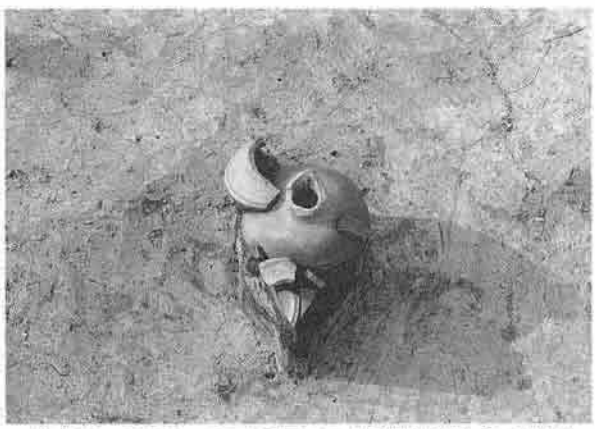


写真20　NG93－37次長原199号墳周溝遺物出土状況

遺物は、周溝の南辺から須恵器有蓋高杯の蓋**10・11**、無蓋高杯**12**、壺**13**が、周溝の西辺から土師器小型丸底壺**8**・長胴甕**9**が出土した(図171・写真20)。須恵器はTK73型式に該当することから、古墳の時期は5世紀中頃で、長原2期に位置づけられる。

長原201号墳：**長原199号墳**の西に隣接し、近世溝や攪乱に切られる。古墳の規模は、周溝の内側で7.0m×7.0m、周溝の幅3.0m、深さ0.3mである。盛土と主体部は残っていなかった。周溝に転落した状態で土師器高杯の脚部**14**が出土し、周溝から円筒埴輪片が多数、朝顔形埴輪片と須恵器片が数点出土した(図171)。この円筒埴輪には弧状のヘラ記号をもつ**16・17**や、シカのような線刻をもつ**18**がある。また、**19～21**についてはB種ヨコハケが施されている。これらの埴輪は直径約20～25cmで、調整も焼成も雑多であるが、いずれも窖窯焼成で、ヨコハケがみられる。これらの埴輪から、この古



図170　NG93－37次古墳分布図

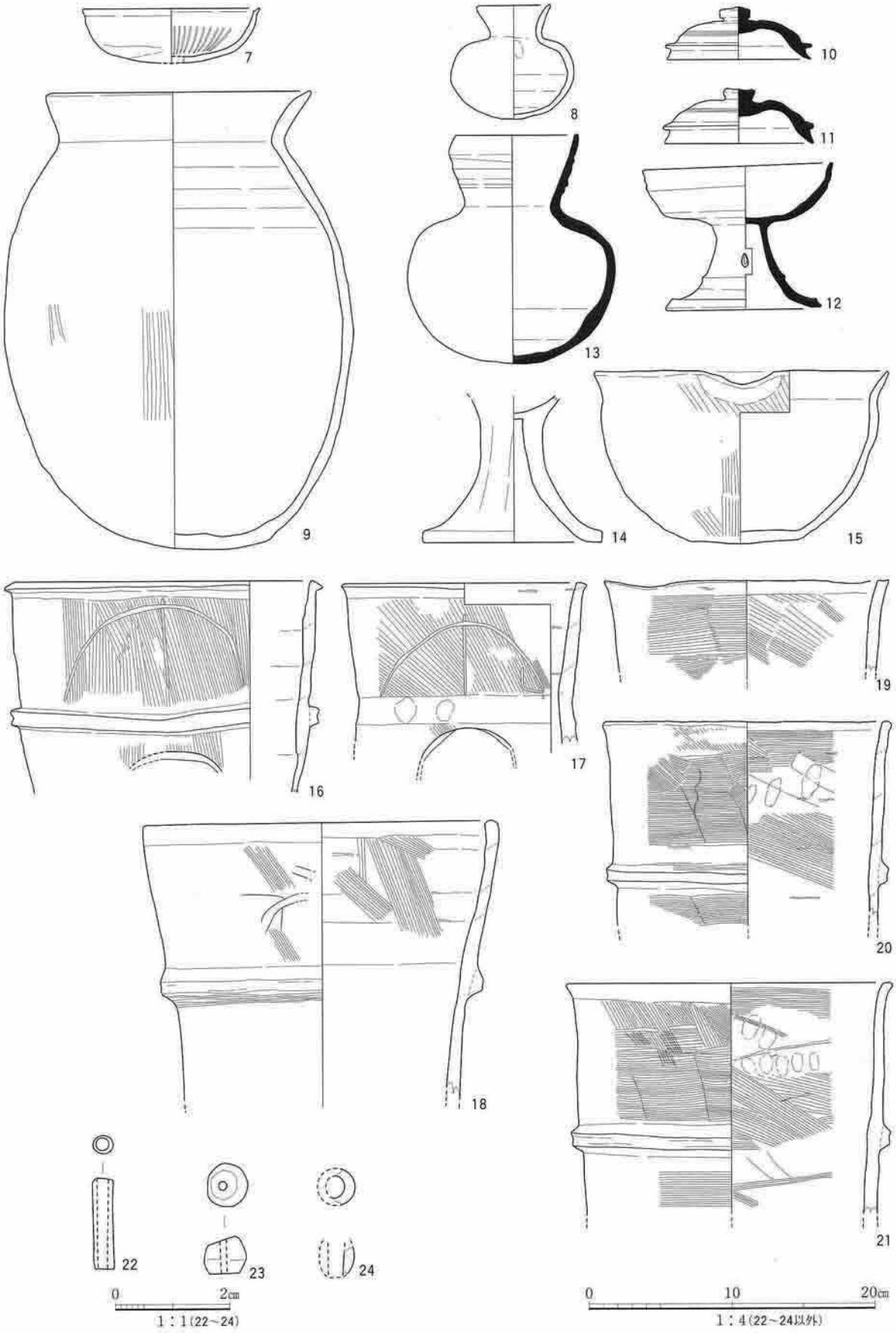


図171　NG93－37次出土遺物

長原7A層(7)、長原199号墳(8～13)、201号墳(14・16～24)、202号墳(15)

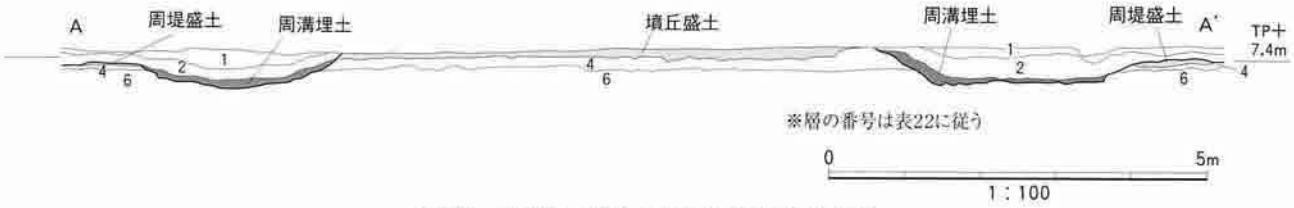


図172　NG93－37次長原204号墳墳丘断面図

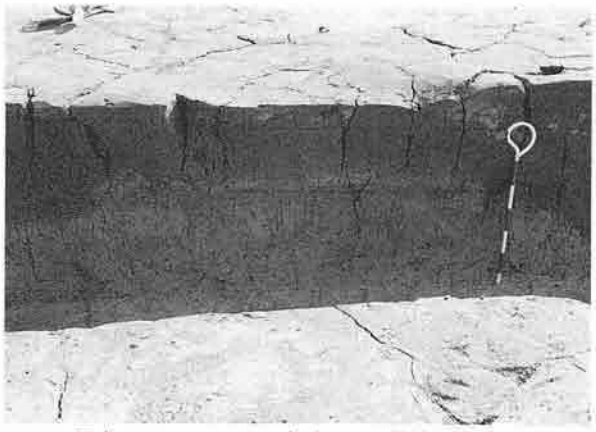


写真21　NG93－37次長原204号墳周堤断面

墳は長原２期に位置づけられる。

なお、墳丘上の攪乱の土の中から、瓦・埴輪とともにガラス製小玉２点、滑石製管玉１点が出土した(図171)。22は直径0.5cmの完形で、濃い青色を呈する。23は土を水洗選別して見つけたものである。24は半分に割れていて、直径0.4cm、長さ1.6cmで、孔の直径は0.2cmある。いずれも濃い青緑色を呈する。

長原202号墳：**長原201号墳**の北西に隣接する。古墳の規模は、周溝の内側で6.0m×6.0m、周溝の幅3.0m、深さ0.3mである。盛土はすべて削平されていて、主体部も残っていない。周溝内からの遺物は、須恵器甕の破片が多く、円筒埴輪と朝顔形埴輪が破片で少量出土した。また、土師器片口鉢15が出土した(図171)。

長原203号墳：調査区中央やや西寄りに位置する(図版23中)。墳丘と周溝の中央を近世溝に削られていたため、古墳のコーナーが検出されたにすぎないが、周溝の内側で6.0m×6.0mと復元できた。周溝から須恵器の破片が少量出土した。

長原204号墳：調査区北西隅に位置する。攪乱により、周溝・墳丘ともに一部削られていた。古墳の規模は、周溝の内側で8.0m×8.0m、周溝の幅3.0m、深さ0.5mである。周溝の外側に周堤が残る部分があり、幅1.0m、盛土の厚さは最大で0.1mである(図172・写真21)。墳丘の盛土は0.10～0.15m残存していたが、主体部は残っていなかった。遺物は、周溝内から高杯などの土師器片や須恵器の甕片が少量出土した。

長原205号墳：調査区東辺で周溝のコーナーが検出された。調査区外へ延びるため、平面プランはわからなかったが、方墳と考えられる。周溝には黒褐色シルト質粘土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

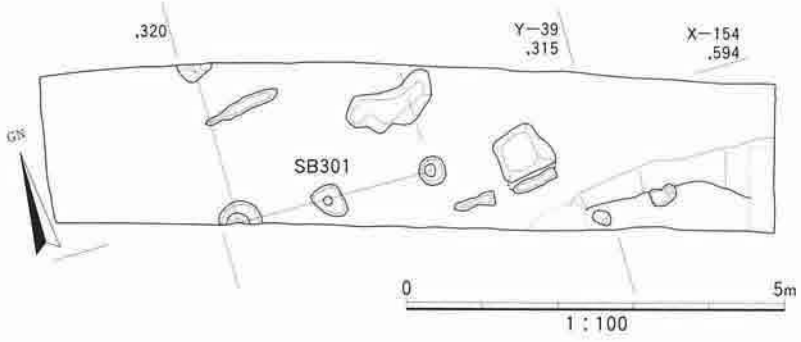


図173　NG87－43次室町時代遺構配置図

c．室町時代の遺構

NG87－43次調査では、長原３層に相当する第５層基底面で掘立柱建物などの遺構が検

出された(図173・図版23下)。

SB301：桁行1間(2.2m)以上、梁行2間(2.6m)の正方位に延びる掘立柱建物である。南西隅の柱穴からは15世紀頃の瓦質羽釜の破片が出土した。

このほか、小溝や土壙などの遺構を検出したが、出土遺物が少量でかつ細片であるため、遺構の性格や詳細な年代は不明である。

3)まとめ

NG93－37次調査で見つかった6基の古墳(**長原199・201～205号墳**)は長原古墳群の北群を構成する。これまで約30基あまりが検出されているが、調査密度が低いため、今後も未知の地点から発見される可能性が高い。

古墳はいずれも削平を受けているため、主体部は発見されなかったが、**長原204号墳**では周堤が残っていた。長原で周堤が検出された古墳は長原181号墳(南口古墳)[大阪市文化財協会1995：pp.181－232]、190号墳[久保和士1992]に次いで3例目になる。上記の2古墳は長原古墳群でも大きな部類であるが、一般的な大きさの古墳で周堤が発見されたのは初めてである。

主軸の方向はほかの古墳からやや離れた位置にある**長原204号墳**だけが正方位に近いが、それ以外はいずれも北西－南東(北東－南西)方向である。また、**長原199・201・202号墳**はそれぞれ隣接するが周溝を共有しない。

また、古墳墳丘の下などからは縄文時代の遺物が多く出土した。長原式土器についても図化できないような細片が多数ある。当地一帯に当該期の集落があったことを示すものであろう。　(寺井)

第２節　DD82−1次およびその周辺調査

１)調査地と周辺の概要

本節ではDD82－１および、NG88－90・91－16次調査を報告する(図174)。

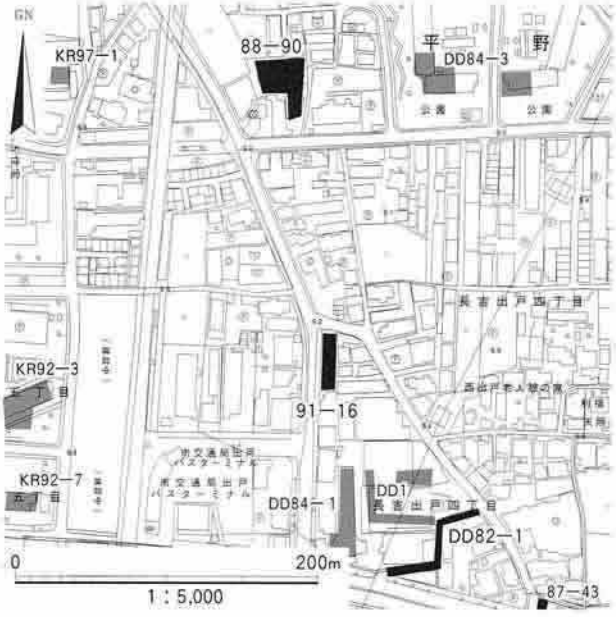


図174　DD82－１次など調査地位置図

DD82－１次調査地は、かつて出戸４丁目所在遺跡と呼ばれており、1979(昭和54)年の調査(DD1次)で古墳～室町時代の遺構が広がっていることが明らかになった。本調査は下水管渠築造工事に伴い、全長約100mにおよぶトレンチを図178のように分割して行われた。調査の結果、鎌倉～室町時代の遺構・遺物が多数検出された。

NG88－90次調査地は長原遺跡の北西端近くに位置し、東100mにあるDD84－３・85－１次調査では庄内式期の土器溜や、鉄刀・長頸鏃などを副葬した長原210号墳などが検出されている[大阪市文化財協会1999a：pp.63－96]。なお、本調査は中世の遺構を調査した後、長原６層を重機で掘削し、NG89－８次調査に引き継がれ、周堤のある弥生時代後期の竪穴住居が検出された[今津啓子1989・1991]。

NG91－16次調査地はNG88－90次調査地の南約200mの地点に位置する。調査は建物の基礎が及ぶ最小限の範囲で行われ、地層が良好に残っていることが確認された。

２)調査の結果

ｉ)層序

いずれの調査地も地層は良好に残っていた。

DD82－１次調査では、長原５層までの地層を確認した(図175・表22)。長原５層以下の地層もサブトレンチによって観察したが、調査時には長原層序との対応はできなかった。

南側のNG91－16次調査では東壁を基に層位断面図を作成した(図176・表23・図版25上)。長原13層上面は北側がゆるやかに下がっており、それより上位の地層も厚みを増す。

NG88－90次調査では北壁で層序を観察した(図177・表24)。第6a～6f層については、長原６層に当る思われるが、長原6A・B層のいずれに該当するかは確定できなかった。

ii)遺構と遺物

ａ．古代の遺構

表22　DD82－1次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	50					近・現代
1	1	黒～暗緑灰色砂礫混りシルト	20	現代作土				
2a	2	淡灰褐色砂混りシルト	15	水成			陶磁器	江戸時代
2b	2	褐色砂礫混りシルト	20～50	水成			陶磁器	
2c	3	褐色シルト混り砂礫	15～25	水成			室町時代後半の瓦	室町時代
3	3	暗褐～暗灰色砂礫～砂礫混りシルト	15					
4	4B	黄色シルト	15					鎌倉時代
5	5	青灰色シルト偽礫を含む褐色粗粒砂～シルト・暗灰色シルト質粘土	120	水成				奈良時代
6	6以下	青灰色極細粒砂～シルト・暗灰色シルト質粘土	140					
7	6以下	黒灰～暗灰色シルト質粘土・明灰色砂混り粘土	50					
8	6以下	灰色砂質粘土	>20					

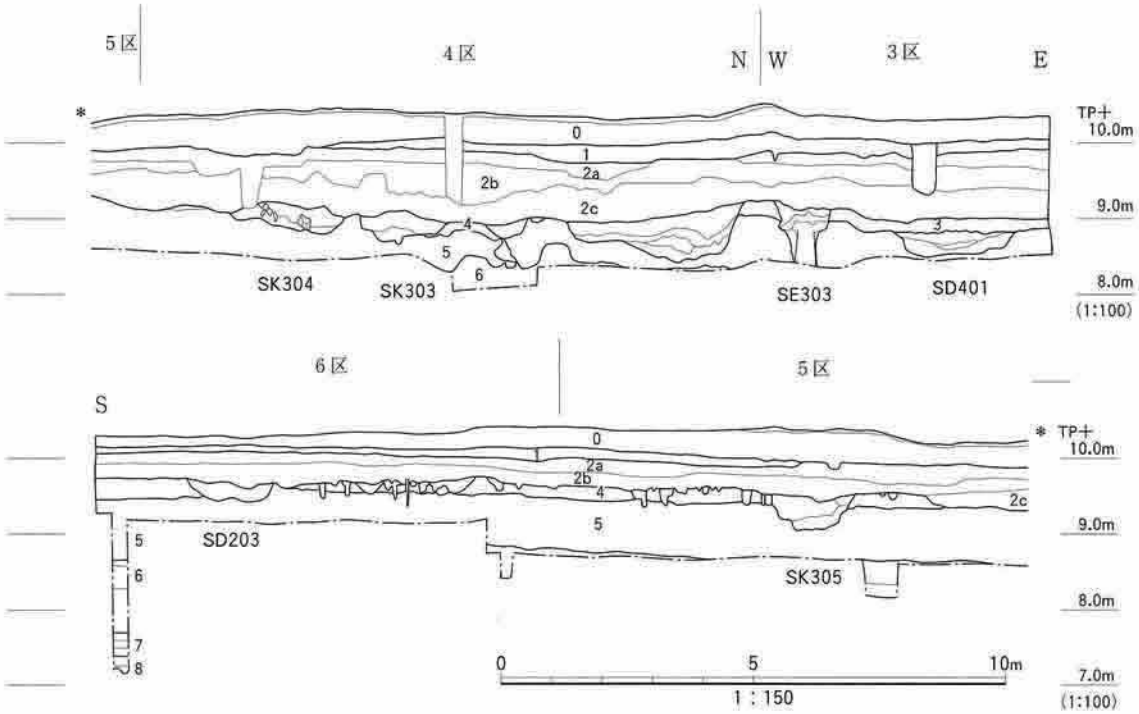


図175　DD82－1次断面図

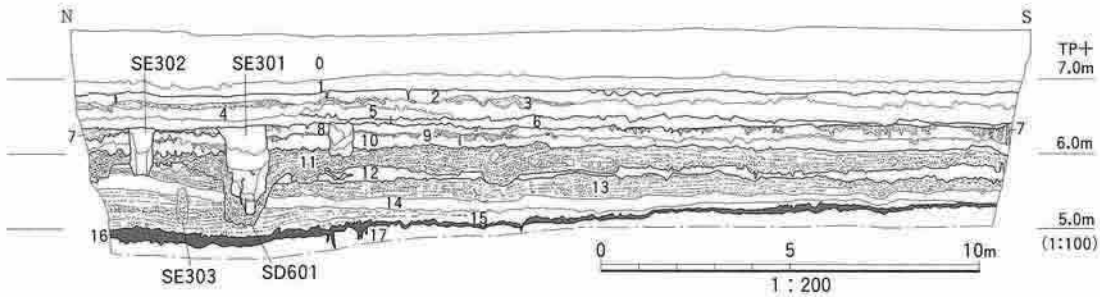


図176　NG91－16次東壁断面図

DD82－1次調査では、長原5層から土師器杯A1、甕2、須恵器壺3が出土した(図179)。1は内面に放射状の暗文が施されている。3の底部には糸切り痕が残る。

表23　NG91－16次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	60					近・現代
1	1	黒色砂礫混りシルト	20	現代作土				
2	2	灰オリーブ色砂礫混りシルト	15	作土				江戸時代
3	2	灰オリーブ色シルト混り砂礫	15～20	水成				
4	2	暗オリーブ灰色砂礫混りシルト質粘土	15～25	作土		←踏込み		
5	2	暗灰黄色含砂礫シルト	20	作土			肥前陶磁	
6	3	暗オリーブ色シルト混り砂礫	5～15	作土				室町時代
7	4A	オリーブ色砂礫～細粒砂	5～20	水成				鎌倉時代
8	4Bi	灰オリーブ色含細粒砂粘土質シルト	15	作土		←踏込み		
9	4Bii	にぶい黄色極細粒砂	6	水成				
10	4Biii	灰オリーブ色含砂礫粘土質シルト	20	作土		←踏込み・耕作痕		
11	5	灰オリーブ～灰色砂礫	35～50	水成				奈良時代
12	6Ai or 6Bi	暗オリーブ灰色極細粒砂混りシルト	20	作土		←SD601		
13	6Bii	緑灰色細粒砂～細粒砂質シルト	30	水成				飛鳥時代
14	7A or 7B	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20				円筒埴輪	古墳～飛鳥
15	8	暗緑灰色含細粒砂シルト	10～50	水成				弥生時代
16	9～12	黒褐色粘土質シルト	6～20					縄文時代
17	13	オリーブ灰色含砂礫シルト質粘土						旧石器時代

表24　NG88－90次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	100					近・現代
1	1	現代作土	20	作土				
2a	2	オリーブ灰色細粒砂	20					江戸時代
2b	2	オリーブ灰色シルト質細粒砂	10					
4a	4B	オリーブ褐色シルト質細粒砂	20					鎌倉時代
4b	4B	オリーブ褐色シルト質細粒砂	20			▼SE401～408		
5	5	にぶい黄色細粒～粗粒砂	60					奈良時代
6a	6	暗緑灰色シルト	20～40					
6b	6	暗緑灰色細粒砂質シルト	20～40					
6c	6	灰オリーブ色細粒～粗粒砂	20					
6d	6	暗緑灰色シルト	20～30					
6e	6	暗緑灰色極細粒砂質シルト	20～40					
6f	6	暗緑灰色極細粒砂質シルト	20～40					
7a	7B	黒灰色砂礫混り粘土質シルト	30					
7b	7B	(竪穴住居周堤)						弥生時代後期
7c	7B	(竪穴住居貼床)						
8	13	灰黄色シルト質粘土						旧石器時代

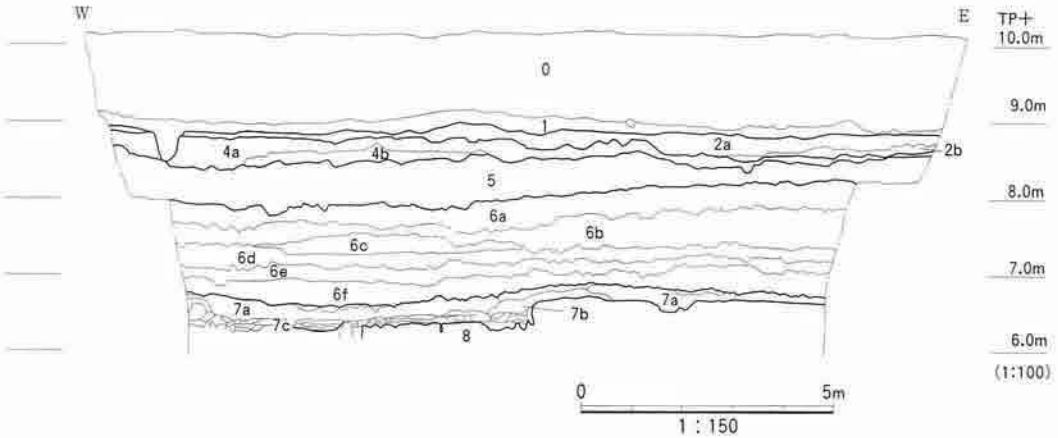


図177　NG88－90次北壁断面図

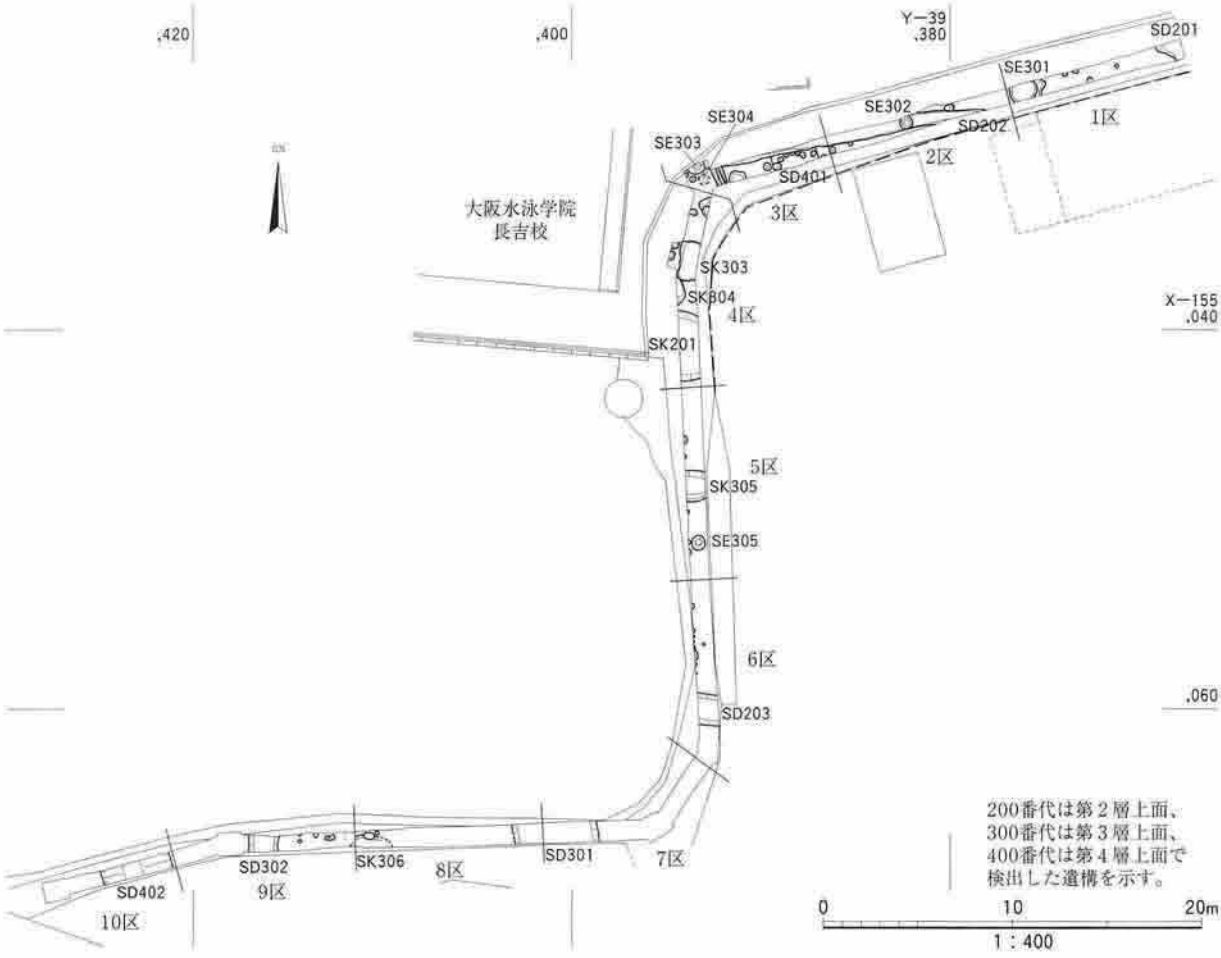


図178　DD82－１次調査地区割および遺構配置図

NG91－16次調査で溝SD601が検出された(図184)。幅0.7～0.8m、深さ0.5～0.7mあり、断面は逆台形を呈する。溝内には第５層と同じ砂礫層が堆積する。底の高低差や砂礫のラミナの方向から、南東から北西に向って流れていたものとみられ、長原6Ai層準の水田に伴う用排水路と思われる。

ｂ．鎌倉時代の遺構と遺物

DD82－１次調査

鎌倉～室町時代の井戸・溝・土壙・柱穴が検出された(図178)。

井戸はいずれも直径１mほどの円形掘形で、第４層上面で検出された。

SE301：最下段に曲物を入れ、その上に木桶を２段以上重ねていた。埋土から室町時代の土師器皿が12枚重なって出土し(図版24上)、4～6を図示した(図179)。

SE303：木桶を２段以上重ねてつくった井戸である。室町時代の土師器皿7が出土した。

SE302・304・305：曲物の上に羽釜を３段以上重ねて作った井戸である(図版24中・下)。SE305に利用されていた羽釜10は、口縁部が内傾し、端部が玉縁状に肥厚するもので、13世紀末頃と推定される。ここからは土師器皿8、瓦器椀9も出土している(図179)。9はⅣ－２型式で、13世紀後半に推定されるものである。

SK303：４区に位置する幅２m以上のやや大型の土壙で、第４層上面で検出された。15～16世紀初頭に属する瓦質鉢20・21や備前焼擂鉢22～24、土師器羽釜25とともに大量の瓦が出土した(図180)。

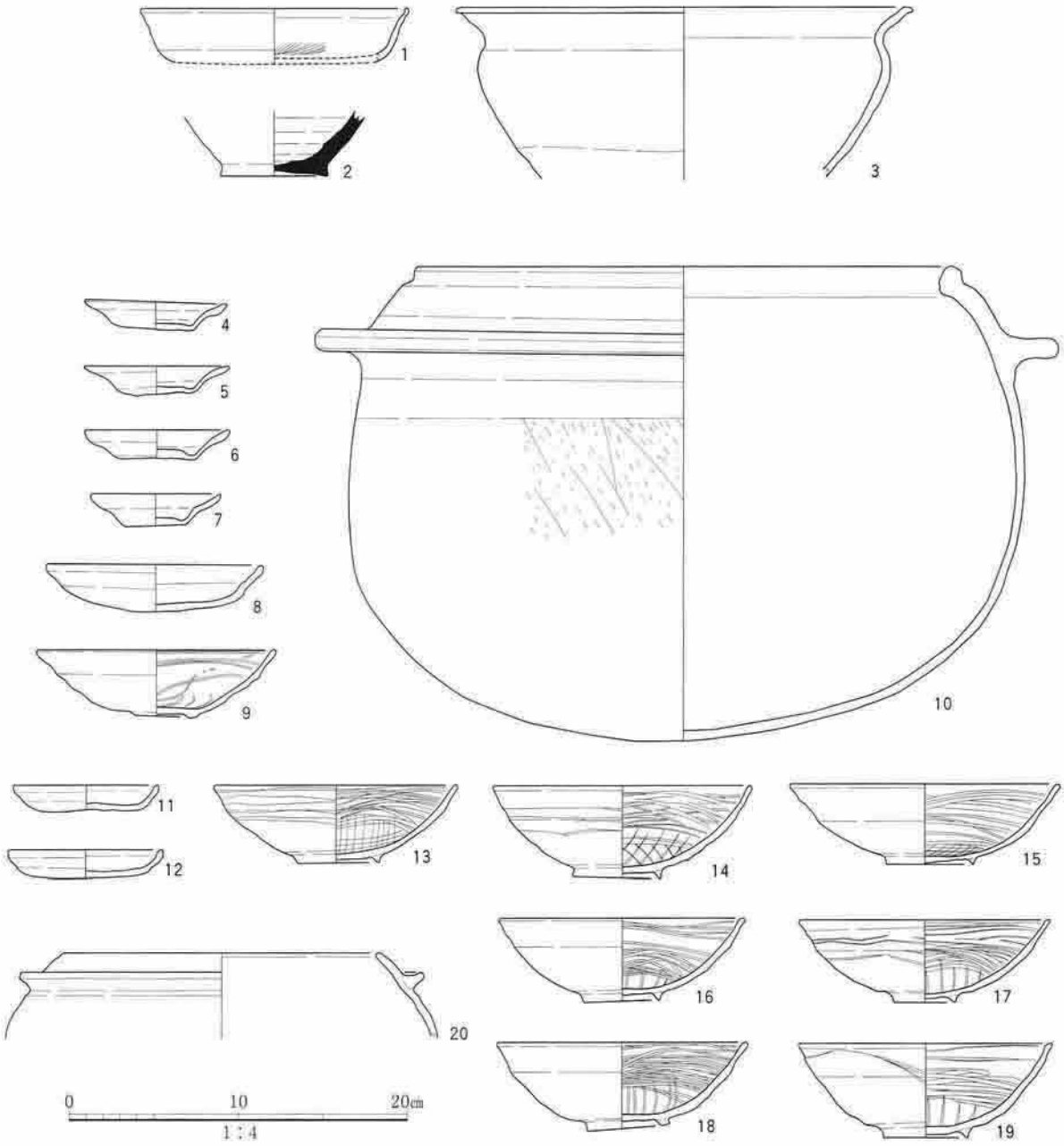


図179　DD82－1次出土遺物

1～3：第5層、4～6：SE301、7：SE303、8～10：SE305、11～20：SD401

瓦には巴文軒丸瓦26や唐草文軒平瓦27・28、波頭文軒平瓦29がある。

SD401・402：いずれも第5層上面で検出した。幅は2.5～3.7mあり、深さは0.4m程度である。両溝の心心間の距離は約45mである。SD401からは瓦器椀11～19や土師器羽釜20が出土した。瓦器碗はⅡ－2もしくは3に位置づけられ、12世紀第3四半期に推定される。

NG88－90次調査

長原4B層（図176の第4b層）基底面で、井戸8基、土壙1基が検出された（図181・182、図版25中・下）。表25の時期は井戸側に用いられた羽釜の形態を基にし、羽釜がない場合は瓦器などの出土遺物を基に判断した。羽釜の年代については[森島康雄1990]を、瓦器の年代については[尾上実ほか1995]

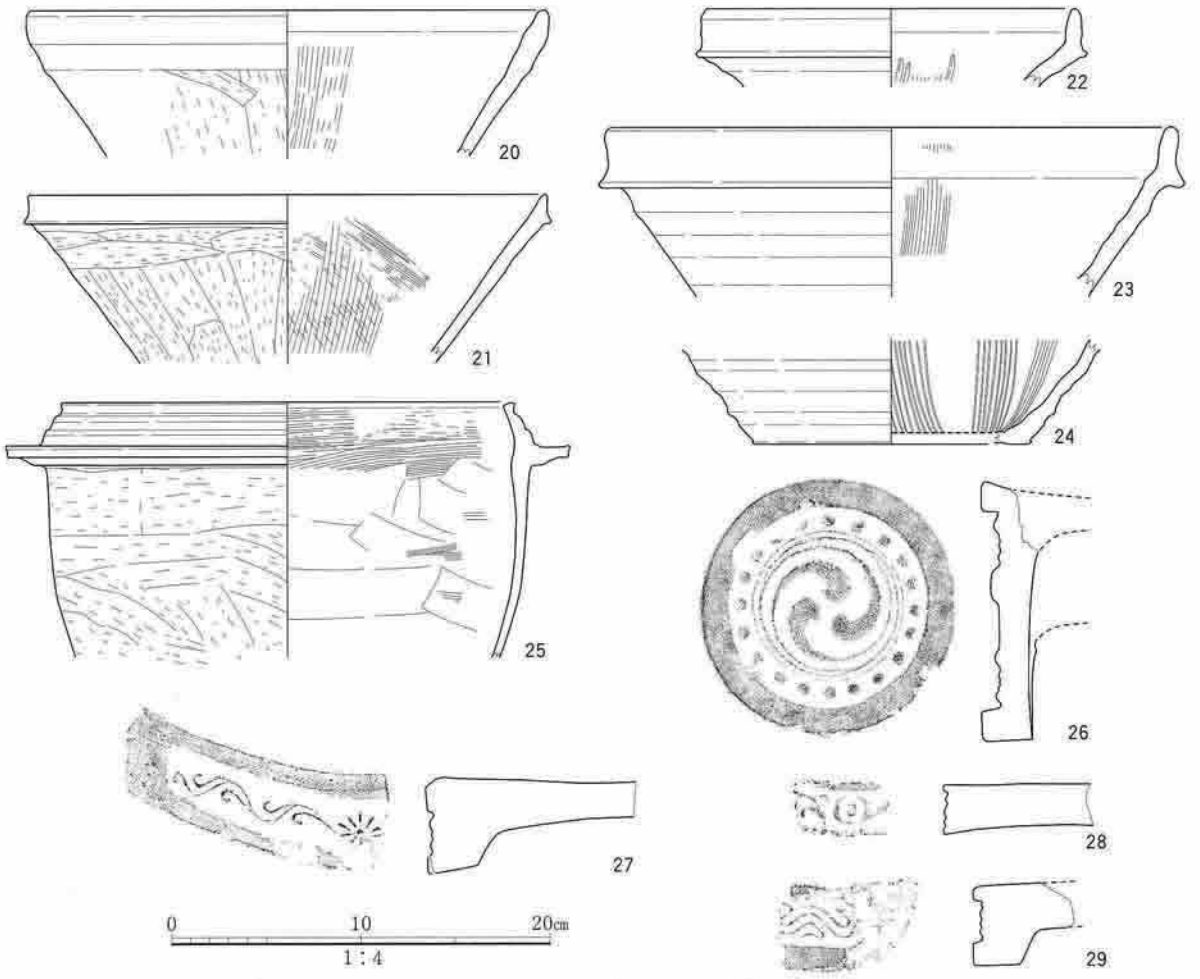


図180　DD82－1次SK303出土遺物

を参照した。

それぞれの井戸は羽釜や曲物・桶を転用して作られている。出土遺物には土師器皿39～43や瓦器皿44・45、椀46～50、須恵器甕37、常滑焼甕38、青磁碗、平瓦51がある(図183)。瓦器椀は高台の断面が三角形で、ミガキが比較的粗である。本調査地の第4a層から出土した50についても、井戸から出土したものと時期差はなく、Ⅲ－2期と思われる。平瓦は凸面に縄タタキが施され、凹面に布目が残る。

NG91－16次調査

第3層基底面で井戸が3基検出された(図184)。いずれも壁面で検出したもので、平面的な把握は十分でない。この中でSE409は直径1.2～1.5m、深さ1.2m以上の楕円形の掘形内に、底を抜いた曲物を数段重ねた後、陶質の井筒を積んでいた(図185・写真22)。井筒内にはオリーブ黒色細粒砂質シルトが堆積しており、瓦器椀・土師器小皿・白磁などが出土し

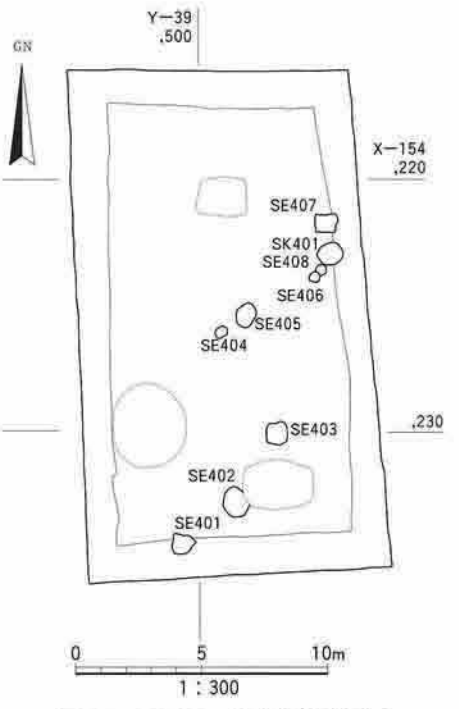


図181　NG88－90次遺構配置図

た。井戸の時期は出土遺物からみて13世紀中頃と思われる。なお、陶質の井筒は直径約46cmで、室町時代以降の瓦製の井筒に比べてやや小型であり、この時期としては類例の少ないものである。

井戸は廃棄時に井筒の上部を抜取った後、灰オリーブ色シルトの偽礫を多量に含む黒色砂礫混りシルトで埋められていた。

3)まとめ

本節報告の調査ではいずれも鎌倉時代の井戸が見つかった。西側には喜連東遺跡の中世集落があり、その集落の東縁に当るのであろう。また、SE402から出土した平瓦51は大型で一般集落で使われるとは考えがたい。地籍図を見ると、調査地は小字「戸ノ本(塔ノ本)」に当り、周辺では「山王」・「寺山」といった寺院に関すると思われる地名が存在することから、当地周辺に寺院が存在した可能性がある。

表25　NG88－90次検出井戸一覧

遺構番号	掘形の平面形	井戸側の構造	おもな出土遺物	時期	備考
SE401	長辺0.8m、短辺0.75mの隅丸方形	羽釜６段	土師器小皿・瓦器椀	13世紀後半	
SE402	長径1.22m、短径1.00mの楕円形	曲物５段	須恵器大甕・瓦器椀・平瓦	13世紀初頭	
SE403	長辺0.85m、短辺0.8mの隅丸方形	曲物１段＋桶	須恵器大甕・瓦器椀・瓦片	13世紀初頭	
SE404	長径0.52m、短径0.42mの楕円形	羽釜２段以上	土師器小皿	12世紀後半	上部が削平を受ける
SE405	直径0.80～0.85mの円形	羽釜と推定	土師器小皿	12世紀中葉	井戸側は抜取られ残存せず
SE406	直径0.45mの円形	曲物１段以上	羽釜	12世紀後半	SE408の掘形を切る
SE407	東西0.9m、南北0.65～0.75の長方形	羽釜１段＋曲物	土師器小皿・瓦器	13世紀後半	
SE408	長径0.35m以上、短径0.4mの楕円形	羽釜1段+曲物3段以上	土師器小皿・瓦器	12世紀後半	SE406の掘形に切られる

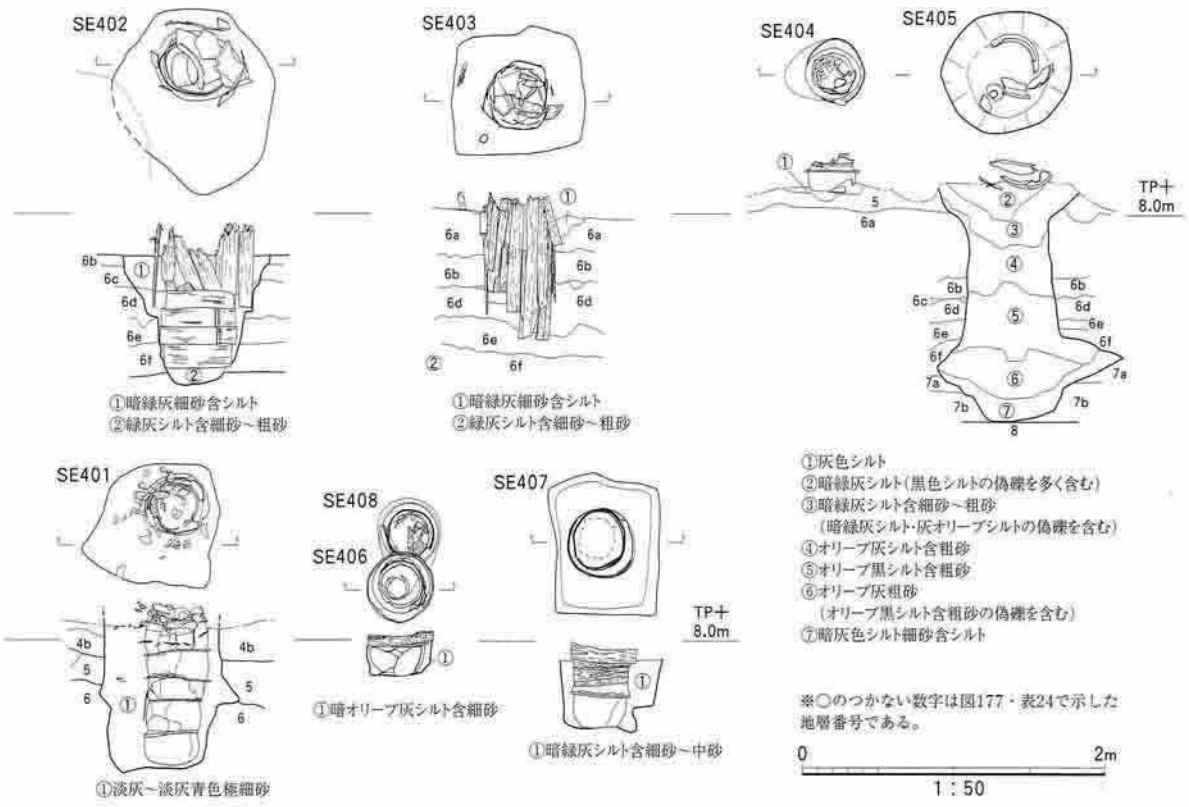


図182　NG88－90次検出井戸実測図

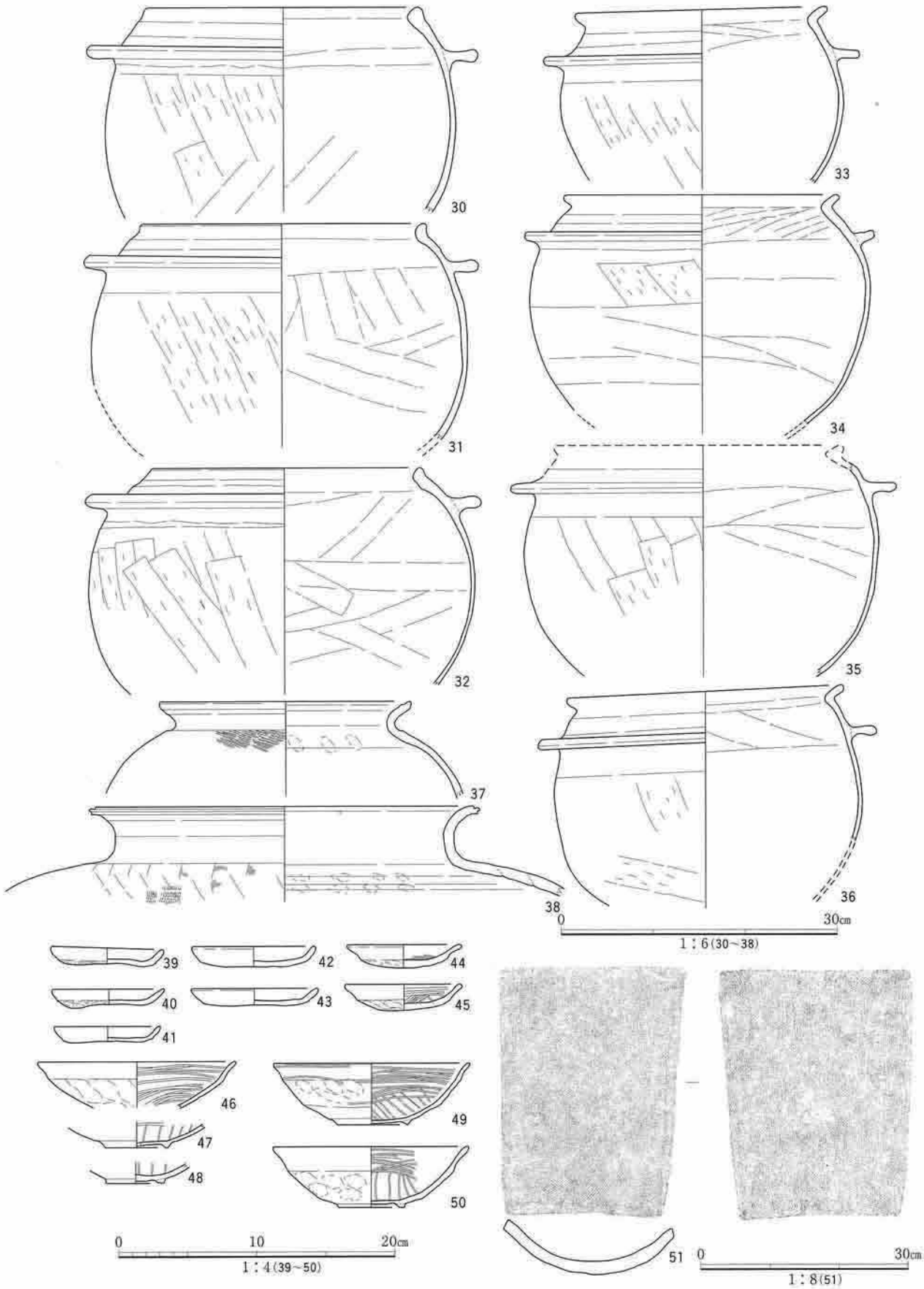


図183　NG88－90次出土遺物

SE401(30～32)、SE402(37・38・44・48・51)、SE403(39～41・45～47)、SE404(33・42・43)、SE405(49)、SE406(34)、SE407(35)、SE408(36)、第4a層(50)

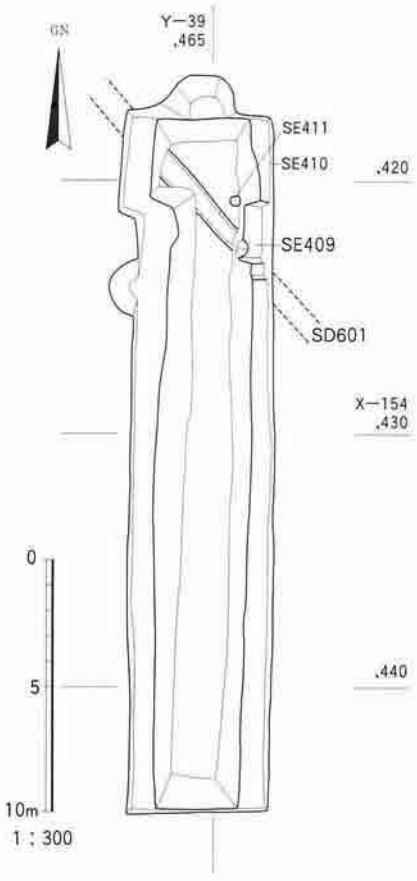
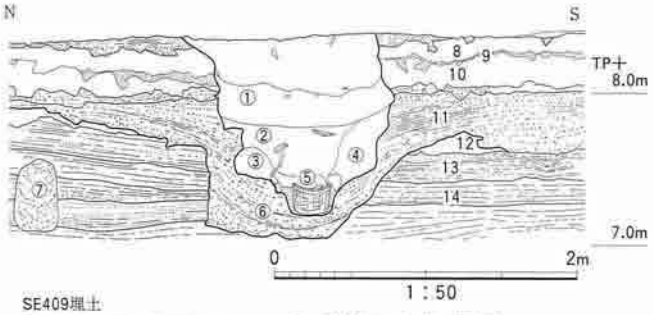


図184　NG91−16次遺構配置図



SE409埋土
①：黒褐色灰色砂礫混りシルト
②：灰黄褐色砂礫混りシルト
③：暗灰黄褐色シルト混り細粒砂
④：灰褐色シルト混り砂礫
⑤：灰黄色シルト混り細粒砂
⑥：オリーブ灰色砂礫（SD601埋土＝長原５層）
⑦：緑灰色砂礫（SE411埋土）
そのほかの数字は図176・表23に従う。

図185　NG91−16次SD601・SE409断面図



写真22　NG91−16次SE409検出状況

また、調査地の南東部には「堂ノ前」・「寺東」・「茶ヤ前」といった門前町と思われる小字名もある。出土遺物とあわせて考えると、調査地周辺には門前町が形成されていたのかもしれない。

（寺井）

第３節　NG84－34次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではNG84－34次およびNG23・25次、84－74次調査を報告する(図186)。いずれも下水工事に伴う小規模なトレンチ調査である。なお、NG23・25次調査については長吉出戸７丁目に位置するため、本来なら東北地区に属するが、NG84－34次調査地に近接していることから、本節で報告することにした。

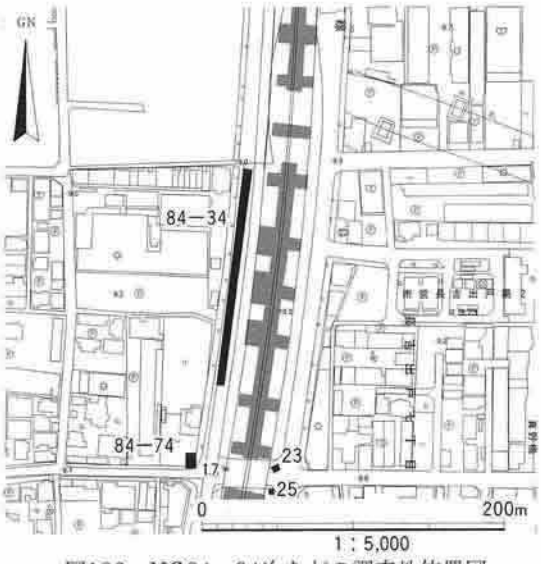


図186　NG84－34次などの調査地位置図

NG84－34次調査地は平野区長吉出戸３丁目に位置する。近接して城山遺跡ANおよびＡトレンチがあり[大阪文化財センター1986a]、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代中期の小方墳が検出されている。本調査では北から第１～４区を設定し、土留め工事をしてから調査に取りかかった。調査の結果、畿内第Ⅳ様式の土器が供献された方形周溝墓が３基検出された。

NG23次および25次調査は城山遺跡Ａトレンチの南側に位置する。NG23次調査では弥生時代中期の細長い落込みと古墳の周溝が検出された。前者は後述するように方形周溝墓の溝の可能性がある。NG25次調査では古墳や方形周溝墓が検出されなかったが、縄文時代晩期から弥生時代中期の包含層が検出され、当該時期の多数の遺物が出土した。

NG84－74次調査は下水工事に伴うもので、顕著な遺構・遺物は発見されなかった。

２）調査の結果

ｉ）層序

NG84－34次１区はGL－４ｍまで攪乱を受けていたため、地層は失われていたが、第２～４区は地層が良好に残っていた(図189・191・194)。推定される長原層序は註記に記した。いずれの地区でもTP＋6.5m前後のレベルで、弥生時代後期から古墳時代前期の黒色シルト質粘土層が検出され、長原7Biii層に比定される。また、方形周溝墓は長原8B層に比定される暗緑灰色シルト層をベースにしている。

ii）遺構と遺物

ａ．弥生時代前期の遺物

NG84－34次４区の長原8B層から畿内第Ⅰ様式の壺2・甕4が出土し、同区の長原7B層に相当すると思われる地層から壺1、３区の方形周溝墓SX802周溝内から甕3が出土した(図188)。1は口縁部に孔が２つ並び、本来は２孔１対であったと思われる。頸部には沈線が２条巡る。2は壺の肩部で、沈

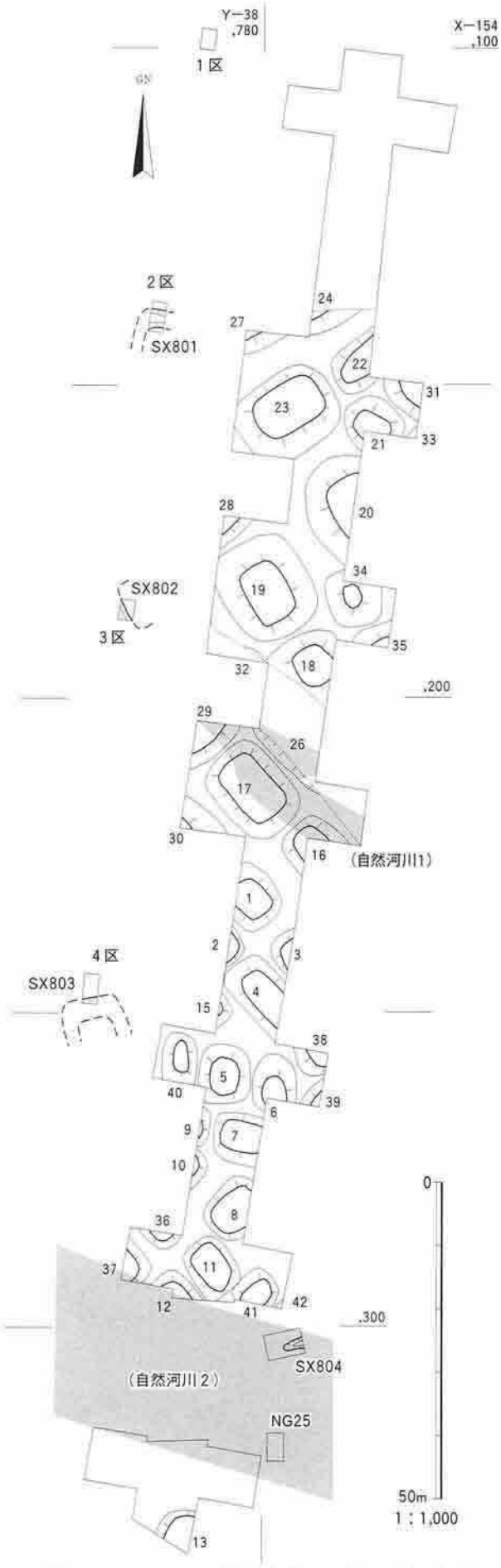


図187　NG84−34次調査地周辺の弥生時代の遺構
数字は城山遺跡の方形周溝墓の番号を示す

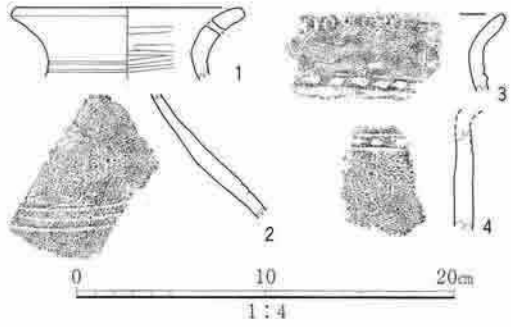


図188　NG84−34次弥生前期土器

線が3条施される。3は短く外反する口縁をもち、口縁端部には刻み目が施される。頸部には沈線とその間に連続刺突文が施される。4も同様の文様が施される。

NG25次調査ではTP+5.7m付近のオリーブ黒色粘土層や粗粒砂層から縄文時代晩期から弥生時代中期の土器や石器が出土した。

NG84−34次4区の北約50mや南約50mの地点では弥生時代前期以前に埋没した旧河川(自然河川1・2)が検出されていて[大阪文化財センター1986a]、NG25次調査地も自然河川2の推定範囲に存在する(図187)。また、同区の南東約30mに位置する城山遺跡の5号方形周溝墓の盛土内からも弥生前期の土器が多く出土している。よって、4区やその周辺に弥生時代前期の集落が存在した可能性がある。

b．弥生時代中期の遺構と遺物

NG84−34次調査

方形周溝墓が3基検出された。

SX801：2区で方形周溝墓の北東隅が検出された(図189、図版26上・中)。周溝の幅は約2.5mあり、深さは1m強である。盛土は黒色シルトの偽礫を多く含む暗緑灰色砂質シルトからなり、厚さは0.7m強である。周溝は盛土の流土で埋まっており(図189の17〜19層)、最終的に長原7Biii層に相当する黒色粘土に覆われる。出土遺物には壺5〜10があり(図190)、流土である17A層(図189)から出土していることから、本来

は墳丘上に置かれていたものが転落したものと考えられる。

5〜9は広口壺で6はその底部と思われる。5・6は口縁端部が垂下し、簾状文が施されている。6は下半にヘラミガキが施され、内面は上半にはナデ、下半にはハケメが残る。体部には焼成後の打ち欠きがある。7は口縁部に2孔1対の孔が穿たれていて、体部はナデ肩で、下半に最大径をもつ。頸部および体部にはヘラミガキが施され、体部内面には粘土紐の接合痕がよく残っている。8は口縁端部に

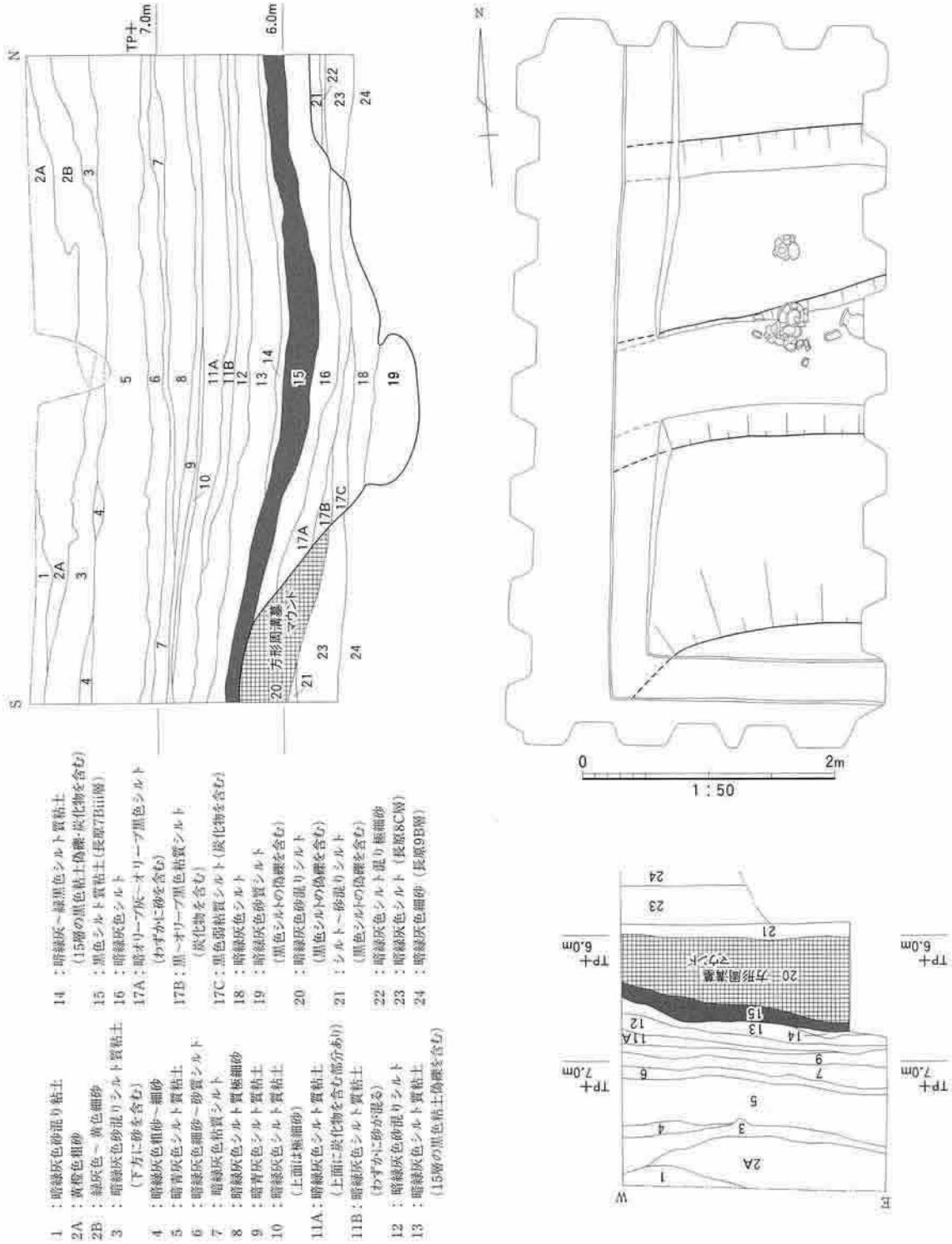


図189　NG84−34次2区断面図およびSX801平面図

凹線状の凹みがあり、肩部にヘラによる列点が施される。体部外面は上半はナデで、下半は縦方向の粗いヘラミガキである。内面にはヘラケズリが施される。9は外面については8と同じく粗い縦方向のヘラミガキであるが、内面はナデで仕上げられる。口縁部は焼成後に打ち欠かれている。5～7、9は角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。10は口縁端部が凹線状に凹み、焼成前に２孔１対の小孔が穿たれる。体部上半にはやや左上がりの粗い平行タタキの後、粗いハケが施され、下半は縦方向のヘラミガキである。体部には煤が付着する。以上の土器について、河内Ⅳ－３様式に相当する。

SX802：３区で方形周溝墓の南西辺が検出された(図191・図版26下)。墳丘の盛土は長原8B層に相

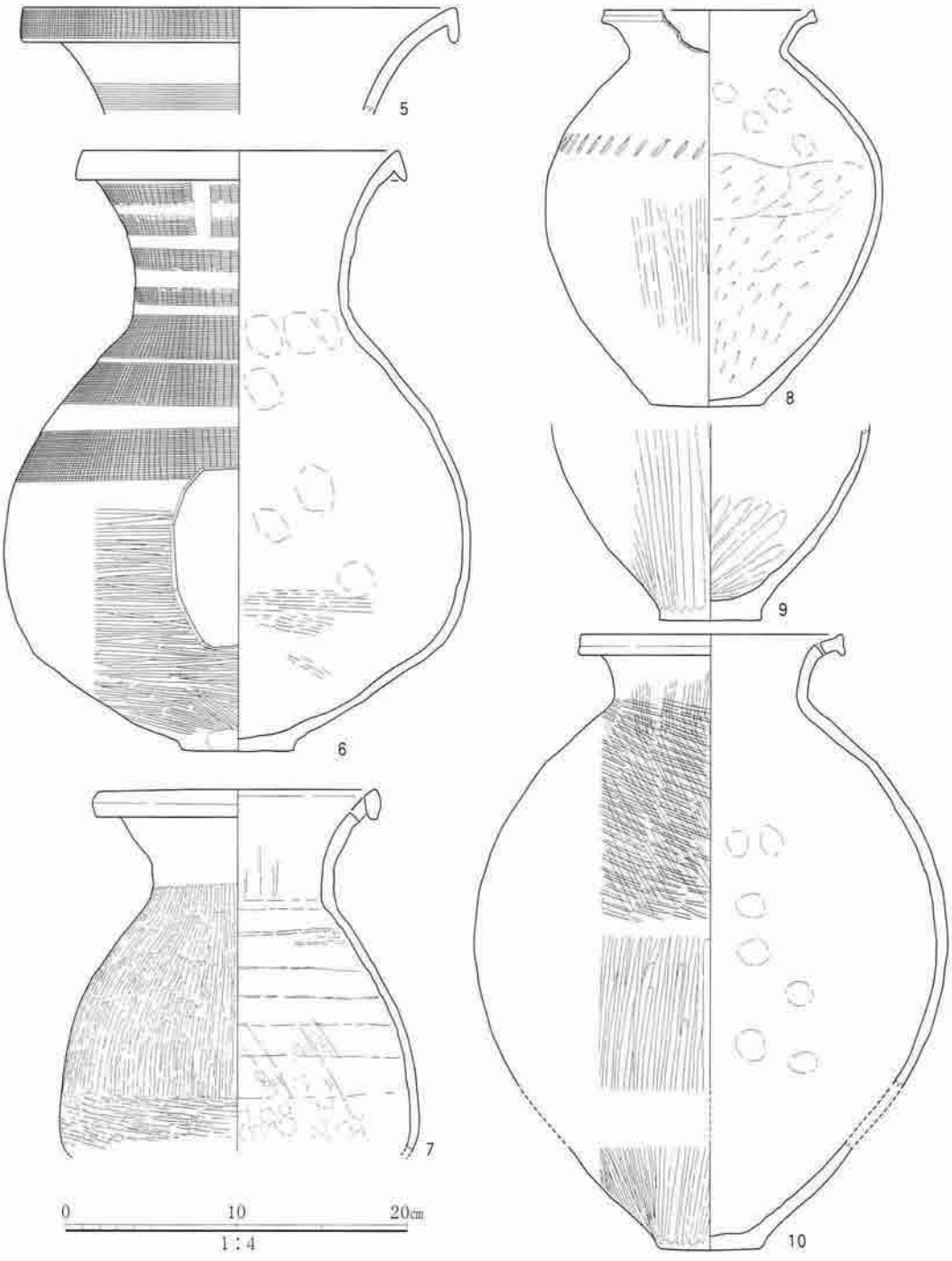
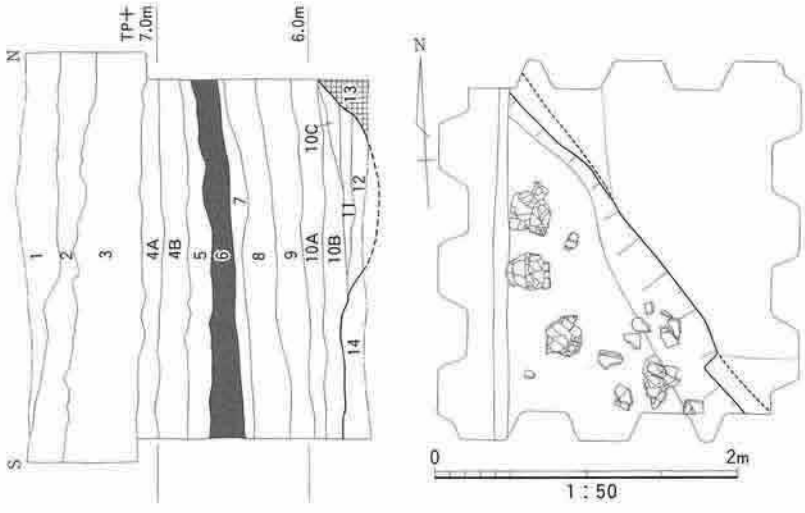


図190　NG84－34次SX801出土遺物

当する暗緑灰色極細粒砂(図191の14層)をベースにして、この地層に由来する偽礫で盛られていた。周溝の幅は1.5m以上で、墳丘高は周溝底から0.6m以上ある。遺物はSX801と同様に、墳丘の流土から壺11〜14、甕15、高杯16・17が出土した(図192・193)。

11は球形に近い体部に、比較的よくしまった頸部が外反して立上がる。頸部から体部中央にかけて、波状文と直線文が交互に施されている。文様帯間の幅は狭い。外面は体部下半にヘラミガキとナデが施されている。内面はナデを基本とし、頸部にはシボリメが見られ、中央付近に一条のヘラ先による浅い沈線が巡る。12は簾状文が施され、典型的な生駒西麓の胎土を用いており、体部最大径は底部近くまで下がっている。外面は最大径の位置を境にして、ヘラミガキの方向に変化が見られ、このヘラミガキは底部外面にも及んでいる。内面調整も最大径の位置



1　：オリーブ灰色細砂(2層がラミナ状に入る)
2　：灰色極細砂〜シルト質細砂
　(植物遺体を含み、1層がラミナ状に入る)
3　：灰オリーブ色粗砂
4A：暗緑灰色シルト質極細砂
4B：暗緑灰色シルト質極細砂
　(4A層よりシルト質が強い)
5　：暗緑灰色細砂混り粘質シルト
　(植物遺体を含み、6層の土が斑紋状に混る)
6　：黒色粘質シルト
　(炭化した植物遺体を含む、長原7層)
7　：黒色シルト質粘土
8　：オリーブ黒色シルト質粘土
　(7層より粘質が強い)
9　：オリーブ黒色シルト質粘土
　(8層よりシルト質が強い)
10A：黒(褐)色シルト質粘土
　(9層より粘質が強い)
10B：オリーブ黒色粘質シルト(細砂を含む)
10C：オリーブ黒色細砂混り弱粘質シルト
11　：緑黒色細砂混り弱粘質シルト
　(黒色粘土の小偽礫を含む)
12　：暗緑灰色極細砂(黒色粘土の小偽礫を含む)
13　：暗緑灰色極細砂(やや粘質、マウンド盛土)
14　：暗緑灰色極細砂(周溝墓のベース、長原8B層)

図191　NG84−34次3区断面図およびSX802平面図

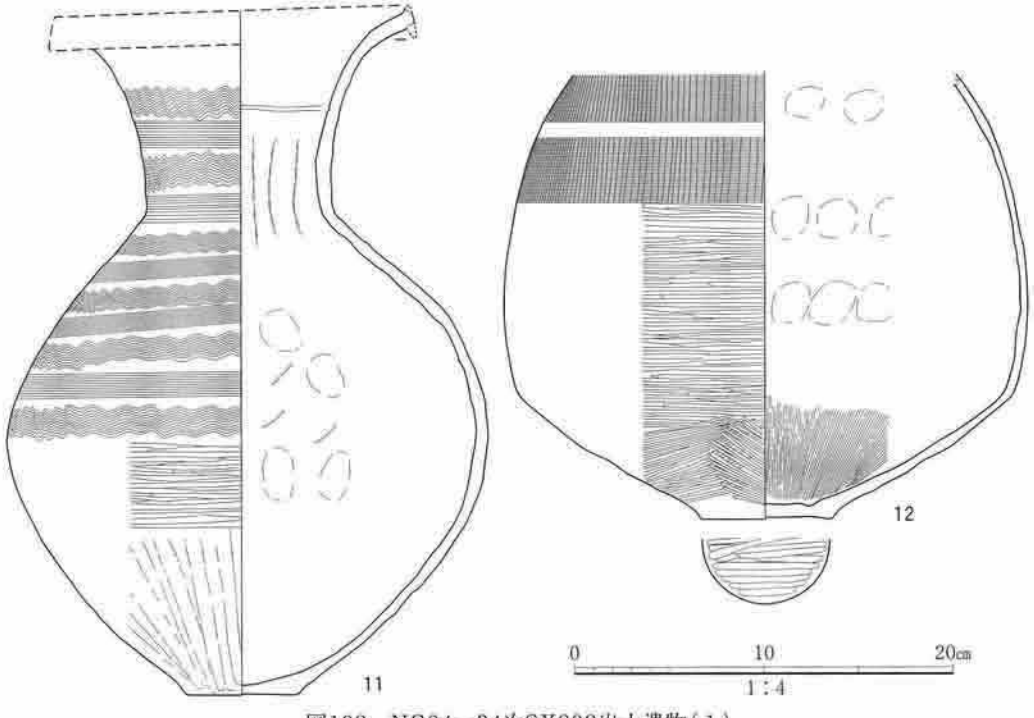


図192　NG84−34次SX802出土遺物(1)

を境にして変化しており、上半はナデ、底部付近は細かいハケが施される。

13は最大径が体部中央付近に位置し、頸部は直立し、口縁部は外反する。口縁部には２孔１対の孔が３方向に穿たれており、端面は外方へ突出する。体部外面は上半にハケメが、下半にヘラミガキが認められる。内面にはハケが施されるが、外面のハケメとは原体を異にしている。体部に焼成後の穿孔が施され、煤が付着している。

14は直立する口縁部の下半に凹線文を巡らせる。体部中央付近に最大径を置く。器面の剥離が進ん

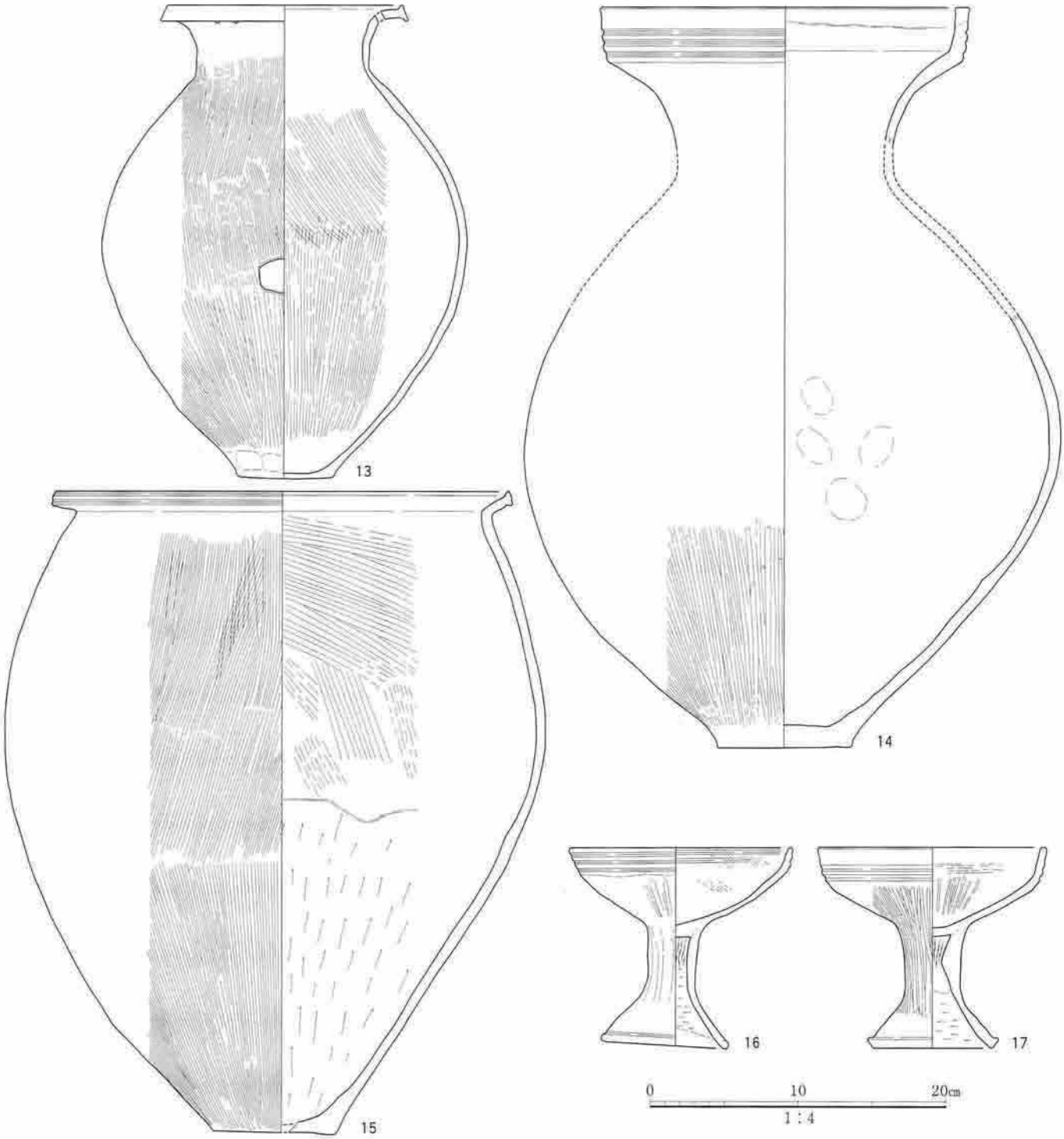


図193　NG84－34次SX802出土遺物（２）

でいるため、調整には不明な点が多いが、外面下半にはヘラミガキ、内面にはユビオサエが認められる。

15は口縁部端面に２条の凹線文を施している。最大径は体部中央よりやや上にあり、口縁径をしのぐ。外面にはハケメ、内面には外面と異なる原体のハケメが認められ、下半はヘラケズリである。

16は口縁直下の内外面に凹線文が巡るが、内面の凹線文は水平ではなく上下に乱れており、また下の一条は全周しない。脚部下端にも凹線文を巡らせており、端部は丸く仕上げる。外面にはヘラケズリの後、ナデとヘラミガキが施される。脚部外面には縦方向のナデ及びヨコナデ、内面にはヘラケズリが認められ、シボリメも残っている。17は口縁よりやや下がった位置に凹線文を配している。杯部内面にはナデの後、ヘラミガキが施される。外面は脚部までヘラミガキで、裾部はヨコナデである。脚部内面はヘラミガキとナデで、シボリメを残している。

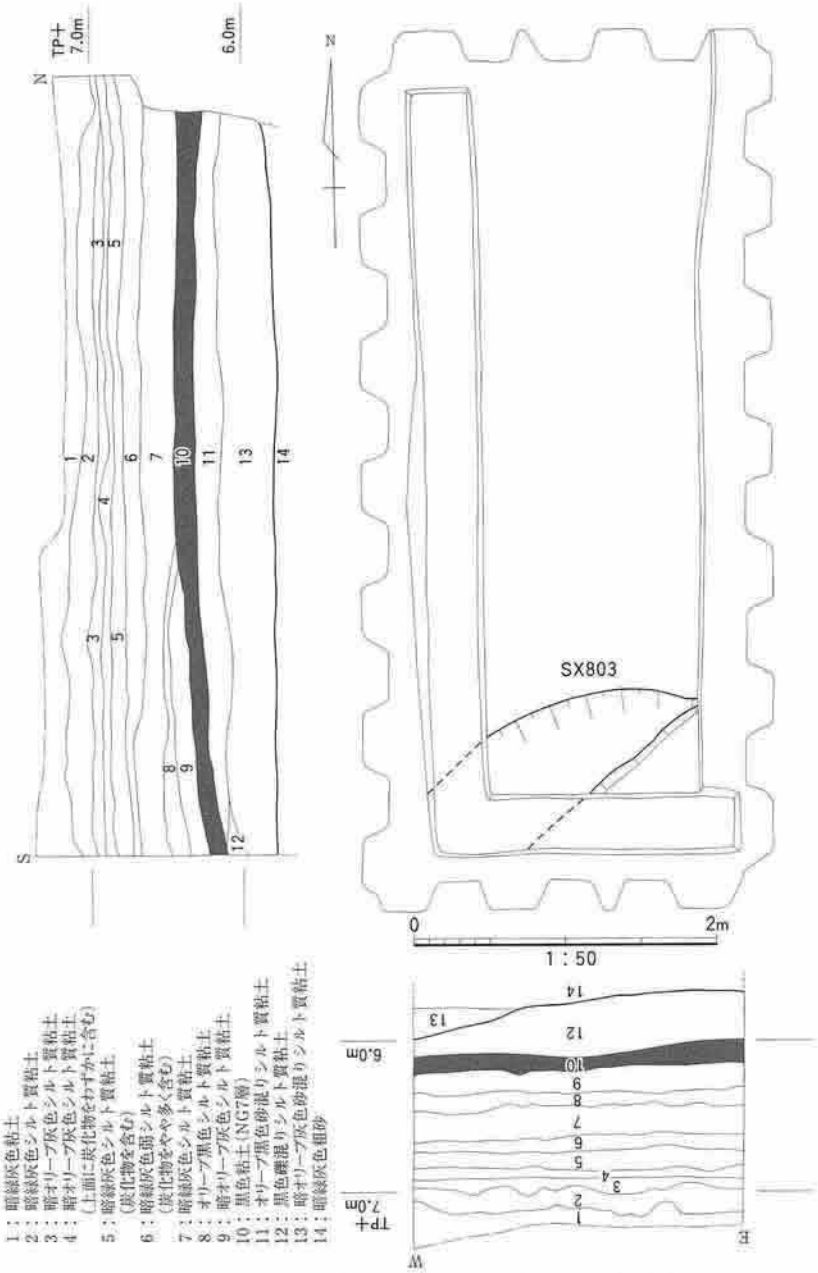


図194　NG84－34次４区断面図およびSX803平面図

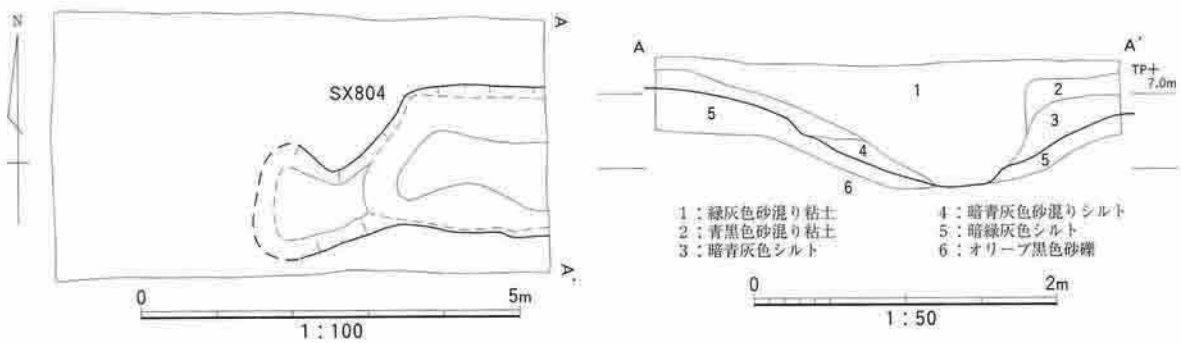


図195　NG23次SX804実測図

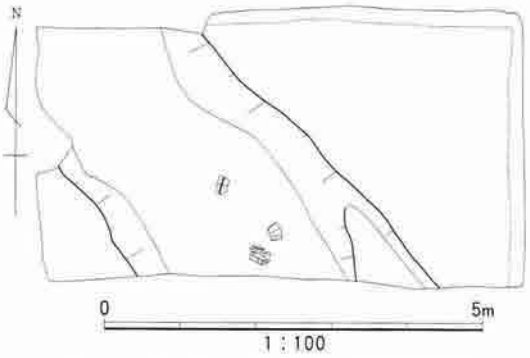


図196　NG23次長原100号墳周溝平面図

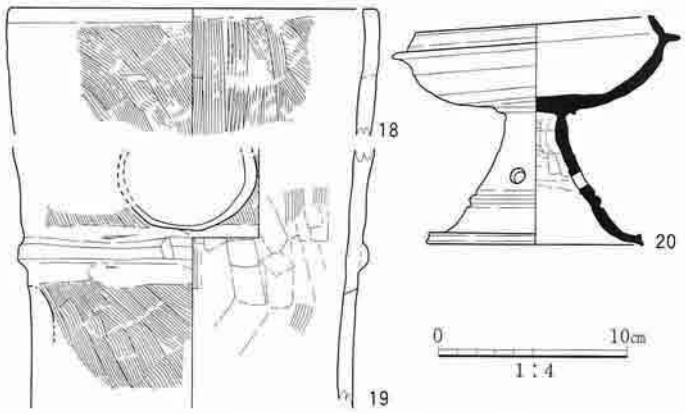
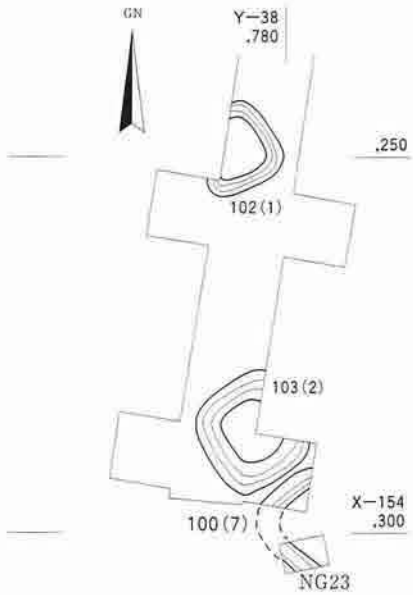


図197　NG23次長原100号墳出土遺物



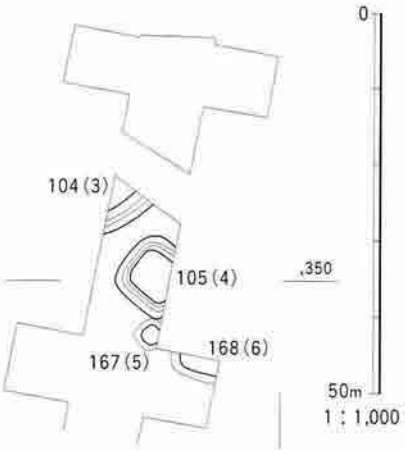


図198　長原100号墳と周辺の古墳分布
括弧内は城山遺跡の古墳番号を示す

以上の遺物について、河内Ⅳ－２様式に相当する。

SX803：４区の南側で検出した幅１ｍ以上の窪みである(図194)。南側に墳丘をもつ方形周溝墓の周溝と思われる。

NG23次調査

SX804：幅2.0m、深さ0.7mの溝状の落込みである(図195)。位置関係からこの落込みは城山遺跡の42号方形周溝墓の南側の周溝になる可能性が高い[大阪文化財センター1986a]。

ｃ．古墳時代の遺構と遺物

NG23次調査で**長原100号墳**(城山７号墳)の周溝に直交する方向の溝を検出した(図196・198)。位置関係からみて同一古墳の西側周溝と判断した。隣接する103号墳と同規模で一辺10m前後の方墳になると思われる。調査地内では墳丘盛土は検出されなかった。周溝は幅3.0m、深さ0.6mあり、円筒埴輪**18・19**やTK216型式に該当する須恵器有蓋高杯**20**が出土した(図197)。なお、大阪文化財センター調査地では周溝から土師器高杯・須恵器有蓋高杯蓋に加え、Ｂ種ヨコハケが施される円筒埴輪が出土していることから[大阪文化財センター1986a：pp.140－143]、本古墳は長原２期に位置づけられる。

３)まとめ

本節で報告した調査はいずれも小規模なトレンチ調査であったが、方形周溝墓や古墳の一部が見つかった。本節で報告した方形周溝墓はいずれも弥生時代中期後葉であるが、墓群自体は中期前葉から続いていて、長原遺跡でもっとも方形周溝墓が集中する。NG23次調査の**長原100号墳**は長原古墳群の北群を構成するものである。近隣の大阪文化財センター調査地でも須恵器型式でいうTK216型式の頃の古墳が７基検出され(図198)、組合せ式木棺を主体部とする古墳(城山４号墳＝長原105号墳)も見つかっている。　(寺井)

第Ⅵ章　東南地区の調査

第１節　NG83－８次およびその周辺の調査

１)調査地と周辺の概要

本節では長吉川辺３丁目の西端でNG81－12・83－８・86－23・87－72・89－47次調査を報告する(図199)。

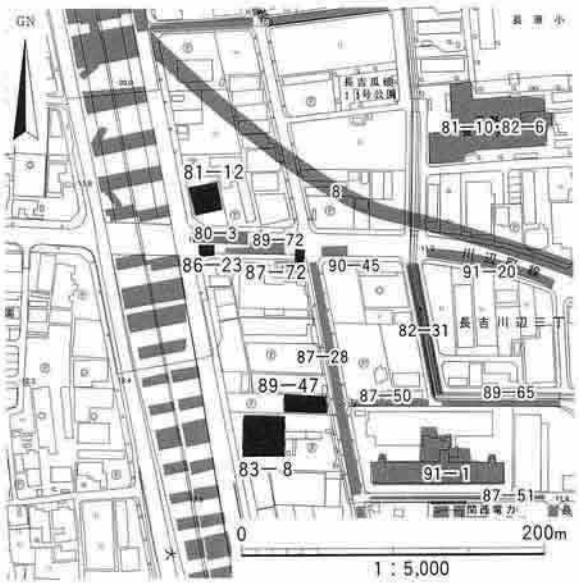


図199　NG83－８次などの調査地位置図

NG81－12・83－８次調査地は中央環状線沿いに位置する。前者は４面の遺構面の調査が行われ、飛鳥～奈良時代の水田や平安時代の火葬墓が検出された。後者は敷地内に南北２個所のトレンチを設定して、調査を進めた。その結果、庄内式土器が出土した落込みや飛鳥時代の道路状遺構、飛鳥～鎌倉時代の水田が検出された。

NG86－23・87－72次調査は飛行場幹線下水管暗渠工事に伴った小規模な調査である。前者の調査地は北端がNG80－３次調査地と重なる。奈良時代の水田や流路などを検出した。NG87－72次調査では長原13層と思われる地層からサヌカイト製フレイクが出土したが、顕著な遺構は見つからなかった。

NG89－47次調査地はNG83－８次調査地の北東に位置する。遺構検出は計５面に及び、特に長原4B層基底面では掘立柱建物や柱穴、溝が密集して検出された。

２)調査の結果

ｉ)層序

NG83－８次調査地の南区南壁で地層を観察した(図200・表26)。なお、南区では長原５層は見られないが、北区では10cm程度の厚さで残っていた。

ii)遺構と遺物

ａ．旧石器～弥生時代の遺構と遺物

NG83－８次調査

長原９層(図200の第９層)から凹基型石鏃1が出土し、また、遊離資料であるが、後述する畠状遺構の溝や長原８層(図２の第８層)から木葉形石鏃2、剥片石器3・4が出土した(図201)。3・4はいず

表26　NG83－8次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	現代作土	30	作土				近・現代
2	2	灰褐色砂質シルト	10	作土		▼鳥畠		江戸時代
4a	4A	淡灰褐色細粒～粗粒砂	40	水成		←水田・SD401・402		鎌倉時代
4b	4B	淡灰色粘土質シルト	10	作土				
4c	4C	灰色砂混り粘土	10	作土				平安時代
5	5	黄褐色砂礫	※	水成		↓轍跡		奈良時代
6a	6Ai or 6Bi	黄褐～褐灰色砂混り粘土質シルト	10	作土		▼畦畔		
6b	6Bi or 7Ai	暗灰褐～灰色粘土混り中粒砂～砂混り粘土	10	作土		↓畠状遺構		飛鳥時代
8	8	黄褐色シルト混り中粒砂	10					弥生時代
9	9	淡灰色シルト	10				石鏃	縄文時代
13	13	黄色シルト質粘土			乾痕			旧石器時代

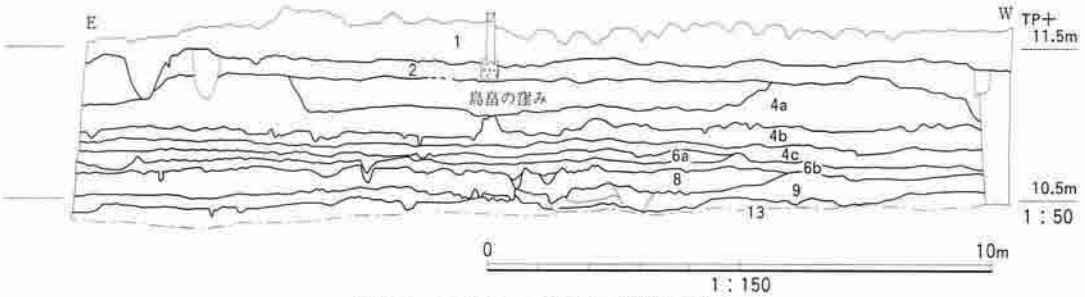


図200　NG83－8次南区南壁断面図

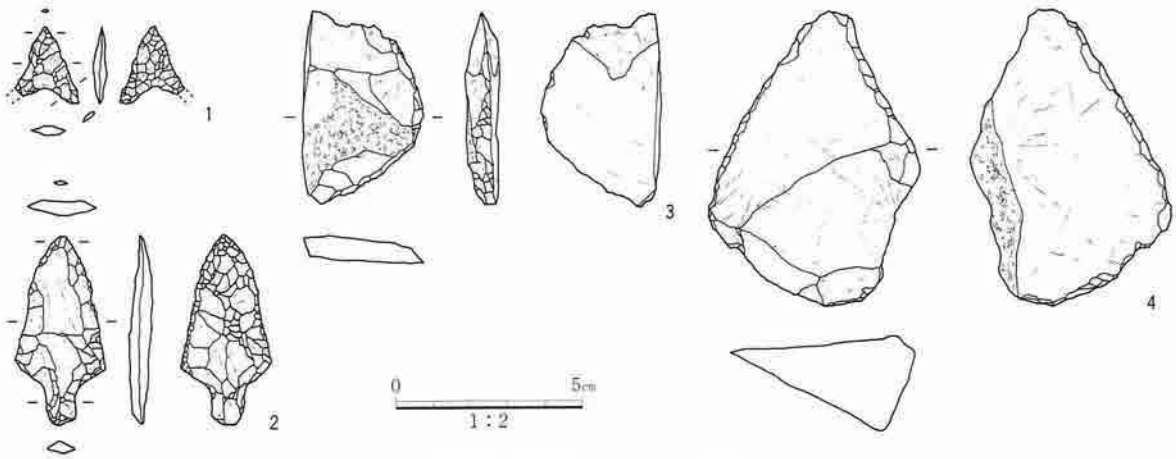


図201　NG83－8次出土石器

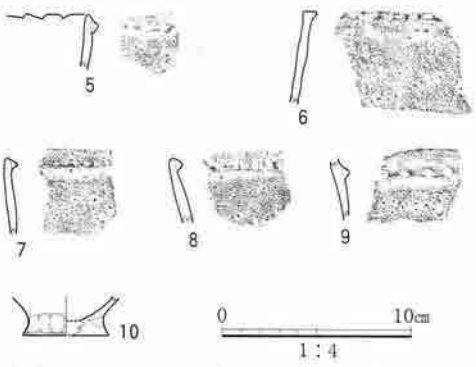


図202　NG89－47次出土縄文時代晩期土器

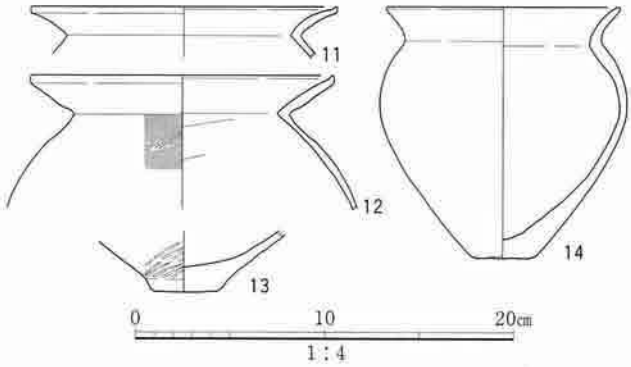


図203　NG83－8次出土庄内式期土器
SD701(12)、SX701(11・13・14)

れも細部調整が施されており、縄文時代のものであろう。

NG87－72次調査

長原13層と思われる地層の上面でサヌカイト製剥片が出土した。不定形な貝殻状の剥片で、背面や打点付近には原面が残っていた。

NG89－47次調査

長原9B層に相当する地層から縄文時代晩期の土器片が多数出土した(図202)。5は突帯にD字状の刻み目を有し、口縁端部にも刻み目が施されることから滋賀里Ⅳ式の可能性がある。6～10は長原式である。

また、長原8B層下面では溝SD801が検出された(図204)。南東－北西方向に延び、幅1.1m、深さ0.3mある。生駒西麓産の胎土を有する土器片などが出土したのみで、詳細な時期は不明である。

b．庄内式期の遺構と遺物

NG83－8次調査地の第7層(長原6Biもしくは7Ai層)基底面で溝・落込みが検出された(図205)。

SD701：南トレンチ南西隅で検出された溝で、幅0.5m、深さ0.2mある。ここから出土した庄内式の甕12は体部外面に細かい平行タタキが施され、内面はヘラケズリが頸部まで施されている(図203)。

SX701：南トレンチ西端で検出された、南北4.5m、深さ0.6～0.7mの落込みである(図版27上)。

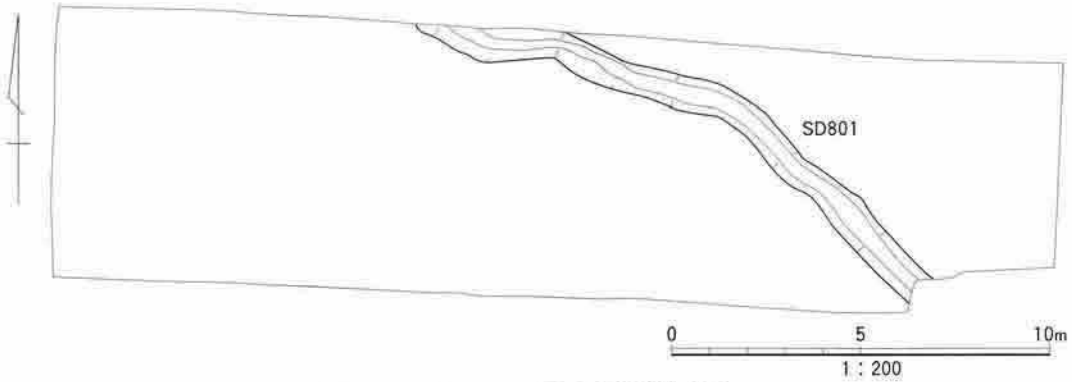


図204　NG89－47次弥生時代遺構配置図

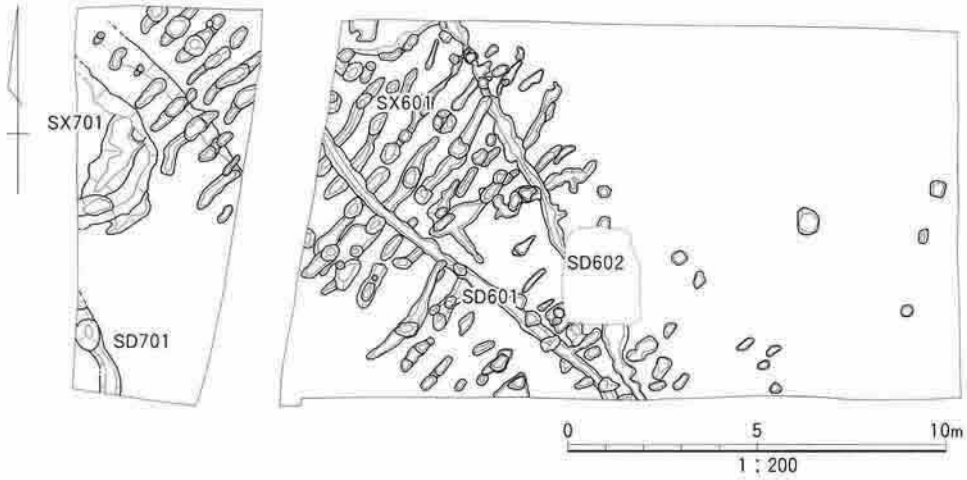


図205　NG83－8次南区庄内式期～飛鳥時代遺構配置図

埋土は長原13層(図200の第13層)の偽礫を含む黒灰色粘土で、人為的に埋められたものと思われる。畿内第Ⅴ様式末の甕13・14や庄内式の甕11が出土した(図203)。14は完形に復元できる平底の甕であるが、器面が荒れており、調整を観察することができなかった。

c。飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG83－8次調査

南区の第6b層(長原6Biもしくは7A層)下面で南東－北西方向に延びる2条の溝SD601・602と、それらの溝に直交する方向の短い多数の溝群SX601が検出された(図205・図版27中)。

SD601・602はいずれも幅0.3m前後、深さ0.1mの浅い溝である。SD601はSD602よりも北から西に振った方向に延び、南壁近くで両者が接近するが、切合いはわからなかった。埋土は第6b層に共通する。

SD601・602に直交するSX601の短い溝は深さは一定ではなく、土壙状に深くなる部分もある。埋

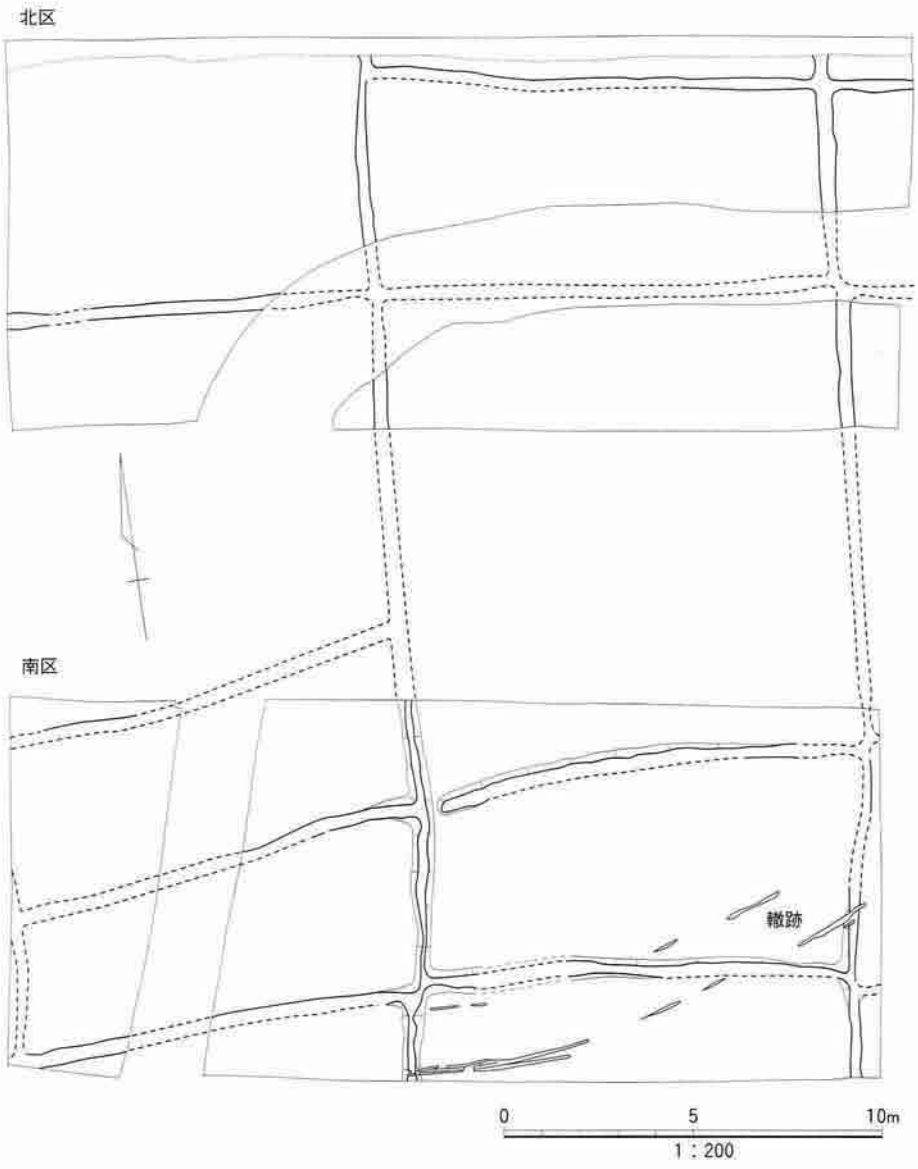


図206　NG83－8次奈良時代水田平面図

土は第6b層にほぼ共通するが、やや汚れた観がある。調査時は畠の畝間と思われたが、近年では道路という考えもある[京嶋覚2001b]。

第6a層基底面では削り残された畦畔が検出された(図206)。調査時は第6b層上面の畦畔と理解されたが、上位の第6a層が作土層であることから、上面が残るのは困難と考え、前述の通り第6a層が耕作されている段階の畦畔と考えた。畦畔で区切られた水田の一筆は東西11～12m、南北4～5mの東西に長い長方形で、大体50～55㎡である。

また、南区では第5層(長原5層)が堆積した轍の跡が検出された(図206)。東西方向でやや弧を描いて延びる。轍が深く食い込んだため残ったと思われる。

NG81－12次調査

長原6Biもしくは7Ai層上面で畦畔が残る水田が検出された(図207左)。T字状に接続し、水口は検出されなかった。

また、長原6Ai層上面でも畦畔が残る水田が検出された(図207右)。一筆全体を検出できていないが、一筆の南北が約5m、東西が7m以上あり、NG83－8次の同時期の水田と同様に一筆が東西に長い長方形になると思われる。



図207　NG81－12次飛鳥～奈良時代水田平面図

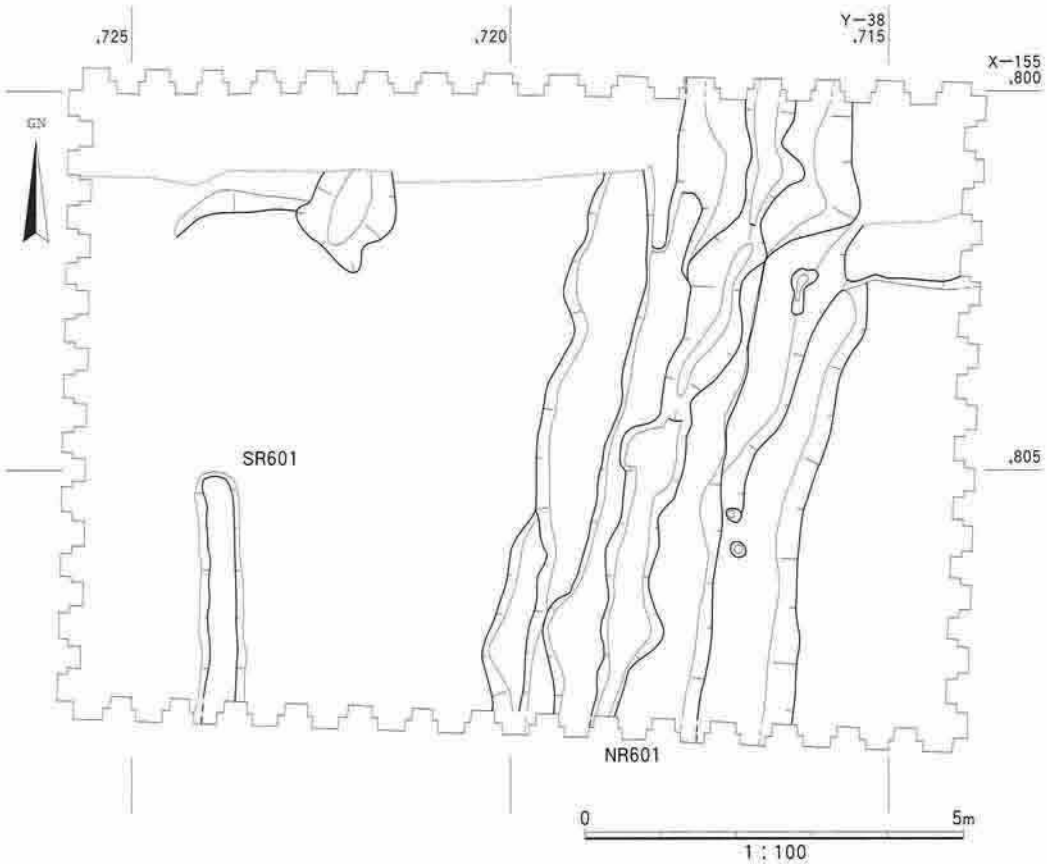


図208　NG86−23次奈良時代遺構配置図

NG86−23次調査

長原6Ai層上面で水田畦畔SR601と流路NR601が検出された(図208・図版27下)。SR601はNR601と平行する方向に延びることから、これに規制されたものと思われる。

NR601は幅約４ｍ、深さ0.7～1.3mあり、断面はＶ字状である。底面に凹凸があり、自然流路と思われる。この流路の延長は北側で接するNG80－３次調査に加え、さらに北側のNG8次の流路03A[大阪市文化財協会1982：pp.107－108]や南側の大阪文化財センターの自然流路１・３、さらに流路Ｃに繋がり[大阪府文化財調査研究センター2000：pp.88－91]、本節で報告したNG81－12・83－８・89－47次調査地では検出されていないことから、長吉川辺２丁目と３丁目の間をやや蛇行しながら流れていたと思われる(図210)。

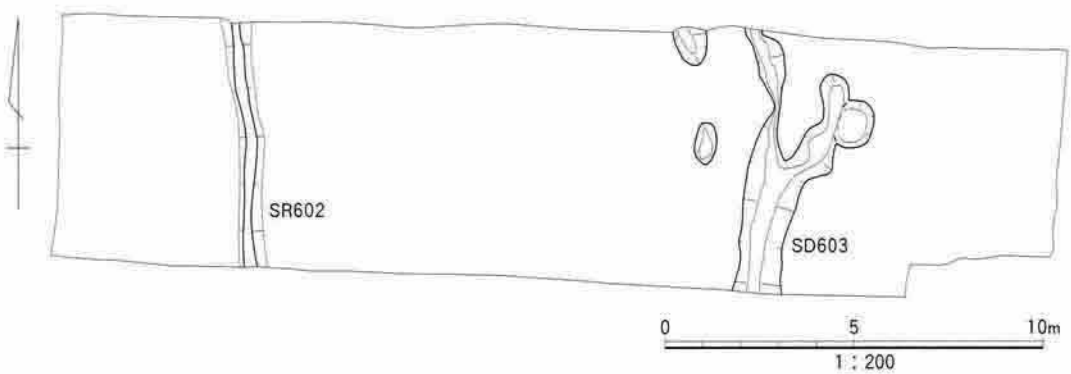


図209　NG89－47次奈良時代遺構配置図

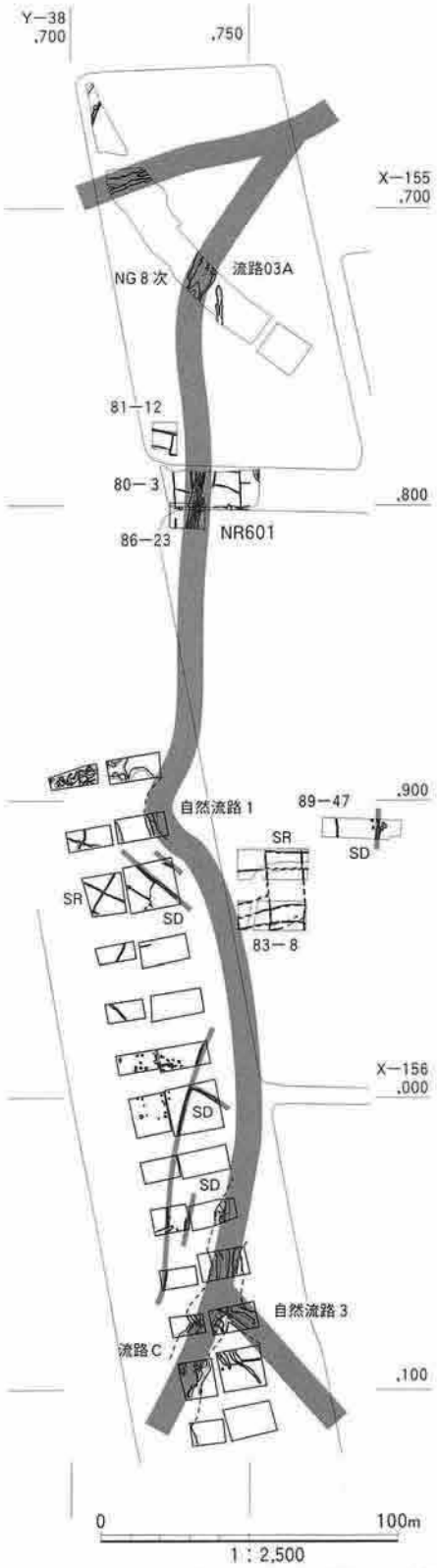


図210　NG86−23次NR601および周辺の遺構

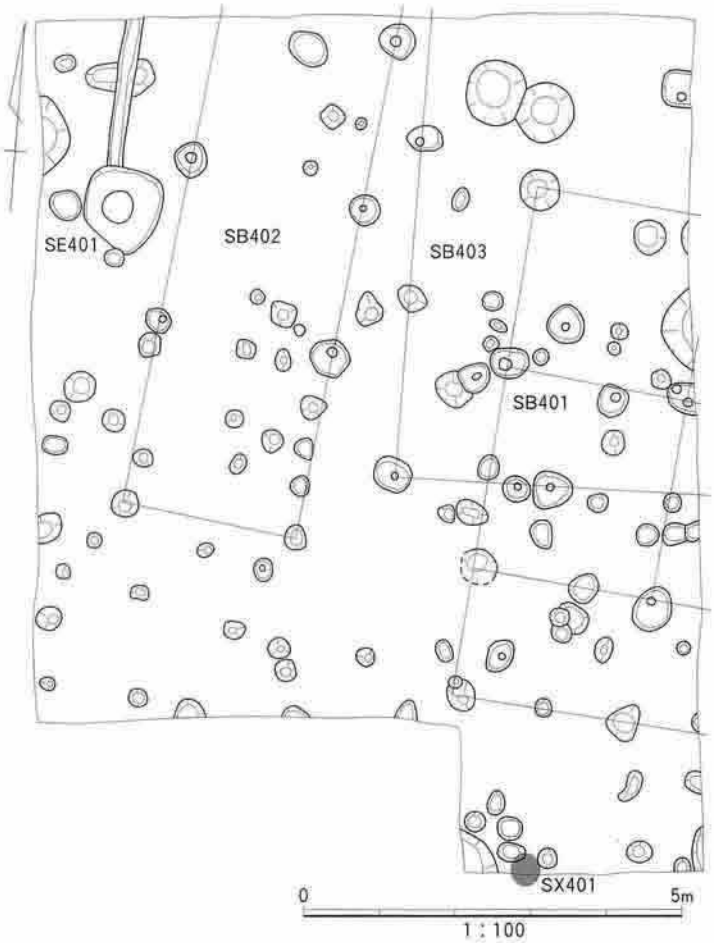


図211　NG81−12次平安〜鎌倉時代遺構配置図

NG89−47次調査

長原6Ai層上面において水田畦畔SR602と溝SD603が検出された(図209)。水田畦畔は高さ0.1m程度であるが、SR602を挟んで東西の水田面で高低差は認められなかった。SD603は幅1.1m、深さ0.3mあり、長原5層で埋没していた。

d．平安〜鎌倉時代の遺構と遺物

NG81−12次調査

長原4B層基底面で火葬墓SX401や掘立柱建物SB401〜403、土壙が検出された(図211)。

SX401：土師器甕18を小型の甕17の底部で塞ぐようにして組合わせた火葬墓で、調査地の南端で検出された(図212・図版28下)。17・18はいずれも球胴で、器表はユビオサエで仕上げられている。18の中から土師器小皿15・16が出土したが、骨は残っていなかった。遺物の特徴から平安時代Ⅲ期古段階に属する。

SE401：土師器羽釜を5段重ねて側に使用した井戸である。羽釜の形態から室町時代に位置づけられる。

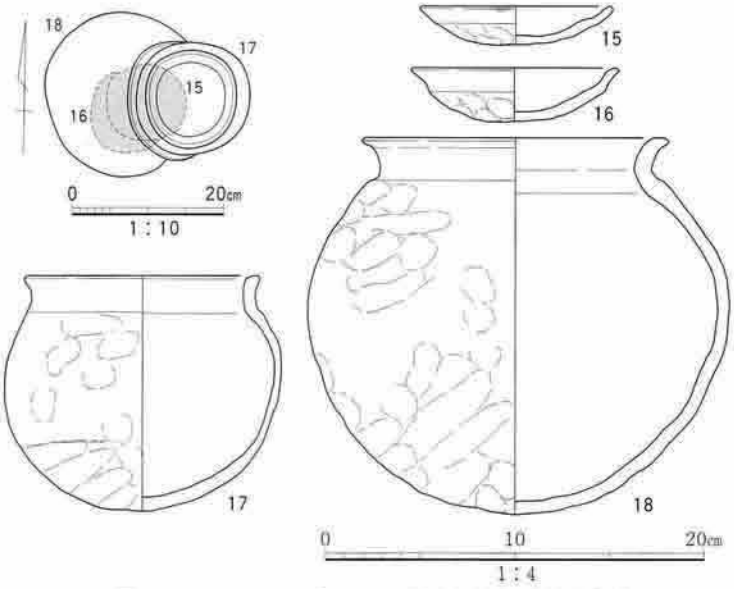


図212　NG81－12次SX401平面図および出土遺物

SB401：南北２間(5.0m)、東西１間以上で、南側に庇を有する総柱建物である。

SB402：東西方向の梁行が１間(2.4m)、南北方向の桁行が３間(6.7m)の細長い建物である。

SB403：東西および南北がいずれも２間以上ある側柱建物で、ほぼ正方位である。

以上の建物について切合いもなく、時期を決めることができる遺物も出土していない。ただ、近隣の状況を参考にすると、平安時代末から鎌倉時代にかけての建物がより正方位に近い傾向にあることからSB403がその時期に、SB401・402がそれ以前に位置づけられると思われる。

NG89－47次調査

平安～鎌倉時代の遺構が多数検出された(図213・図版28上)。

SB404：５間×２間の東西棟である。建物は条里地割に規制され、ほぼ真東西方向に柱筋を揃えて建てられている。柱掘形は直径0.5～0.6mの円形または不整円形で、間仕切の柱になると思われる柱穴はやや小さく、直径0.4mを測る。柱間寸法は桁行、梁行ともに２m等間である。隅柱および梁行の掘形内には、石製礎板が据えられていた(図版28中)。石製礎板はいずれも偏平な石を用いている。柱穴からは土師器椀19が出土した(図214)。

SB405：２間×２間以上の南北棟と推定される。ほぼ真南北に柱筋を揃えている。柱掘形は直径0.3m前後で、他の建物よりやや小さい。柱間寸法は桁行2.3～2.6m、梁行1.9～2.2mとばらつきがある。

SB406：東西２間分と南面する庇を確認した。身舎部分の柱穴は、攪乱により上部を削平されていた。掘形は推定直径0.4～0.5mの円形を呈する。庇柱の掘形は直径0.2～0.3mである。柱間寸法は東

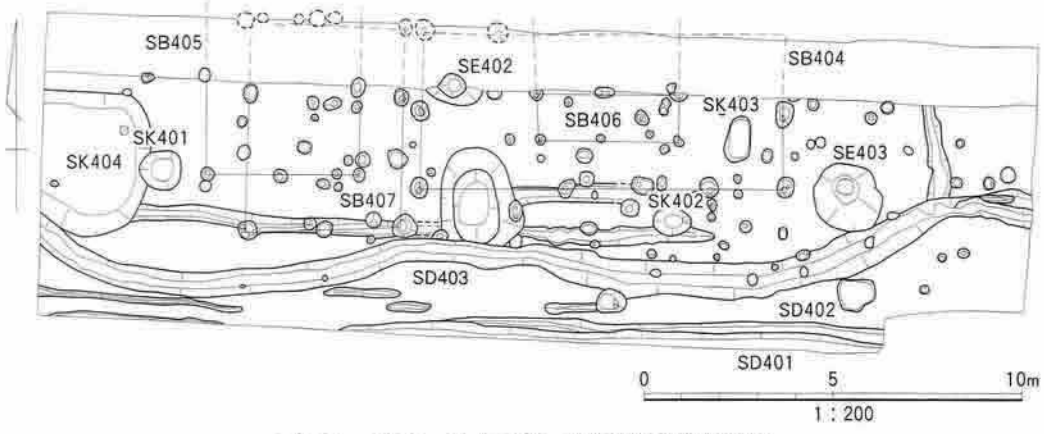


図213　NG89－47次平安～鎌倉時代遺構配置図

から2.20m、1.75mを測り、庇の出は1.20mである。また、身舎の東南隅柱から1.6m東、西南隅柱から1.2m西に柱穴が認められ、三面庇の建物であった可能性もある。

SB407：3間×2間の南北建物である。柱掘形は直径0.4～0.6mのほぼ円形である。隅柱は深さ0.5mあるが、他の掘形はきわめて浅く、痕跡をわずかに残すものがほとんどである。柱間寸法については、柱筋が揃わず、柱痕跡も確認できないものがあるので不確定ではあるが、桁行は1.7～2.1m、梁行は2.1mとほぼ等間になる。柱穴からは土師器皿20、椀21・22が出土した(図214)。

このほか100基近くの柱穴が検出され、中には根石を有するものもあったが、建物としての組合せはわからなかった。

SE402：転用した曲物を井戸側にもち、掘形は直径0.60m、深さ0.85mある。平安時代Ⅳ古段階に位置づけられる土師器皿23や曲物の底板35が出土した(図214)。

SE403：転用した曲物を井戸側にもち、掘形は直径1.8m、深さ1.6mある。曲物は4段重ねであり、上2段が直径50cm、下2段が30cmある。井戸底から底部外面に「井」字状のヘラ描きのある黒色土器A類椀24が、埋土上層から瓦器椀30が出土した(図214)。24は内面の器面が荒れて暗文の有無は確認できない。29はⅡ－1期に位置づけられ、12世紀前半に属する。

SD401・SD402：調査地南端を東西に走る溝である。両者には切合い関係が見られ、SD402が後出する。埋土は灰黄色粗砂～細砂が主体となる。SD402からは平安時代Ⅲ期古段階に位置づけられる土師器椀29が出土した(図214)。

SD403：これも東西に延びる溝である。断面形はU字状を呈し、幅0.7m、深さ0.2mを測る。この溝の北側で掘立柱建物をはじめ数多くの遺構が分布する。そのため、これが屋敷地を区画する溝のようにも考えられるが、その規模や、建物等の施設にあまりにも近接していることから、屋敷地内にお

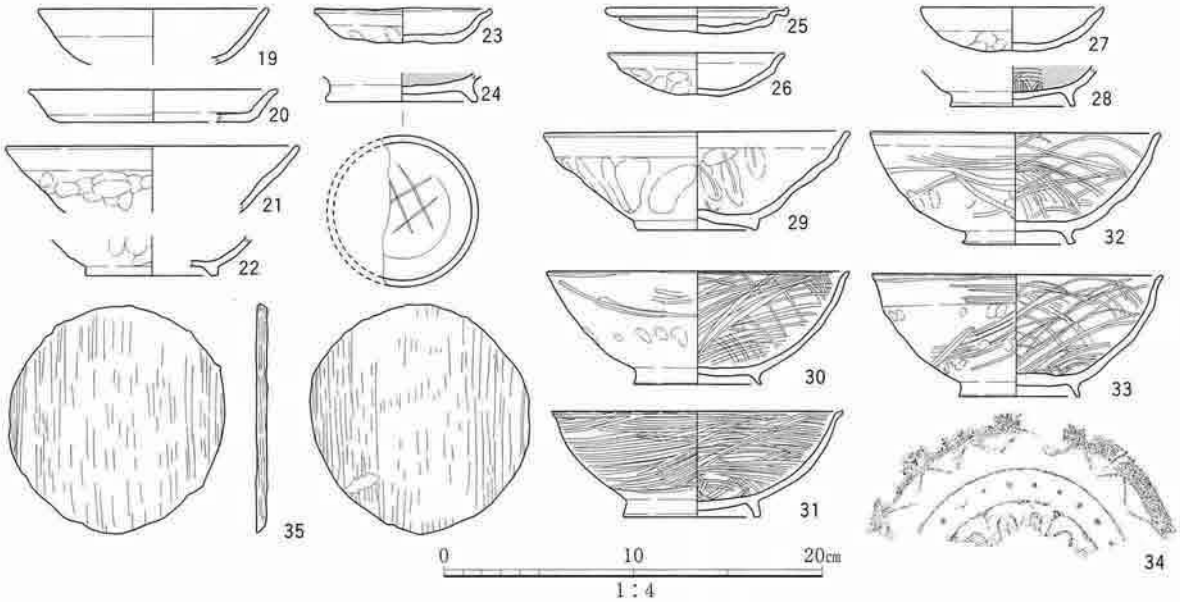


図214　NG89－47次出土平安～鎌倉時代遺物

SB404(19)、SB407(20～22)、SE402(23・35)、SE403(24・30)、SD402(29)、SD403(31)、SK403(32)、SK404(25～28)、長原4B層(33・34)



図215　NG83－８次鎌倉時代遺構配置図

ける小区画のようなものと考えるべきであろう。外面に密なミガキが施される瓦器椀31が出土した。Ⅰ－２期に位置づけられる。

SK401～403：隅丸方形のプランを持ち、断面はU字状を呈する。SK403では完形の瓦器椀32が、穿孔されて、口縁部を下にした状態で出土した(図214)。

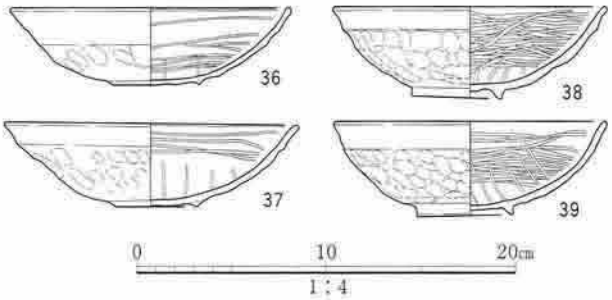


図216　NG83－８・86－23次平安～鎌倉時代出土遺物
NG83－８次SD405(36・37)、NG86－23次SD406(38・39)

SK404：SK401に切られる浅い土壙である。土師器皿25～27、黒色土器Ａ類椀28が出土した(図214)。25は口縁端部のつまみ上げが明瞭で、平安時代Ⅲ期古段階に属する。

このほか、長原4B層からは瓦器椀33や複弁蓮華文軒丸瓦34が出土した(図214)。

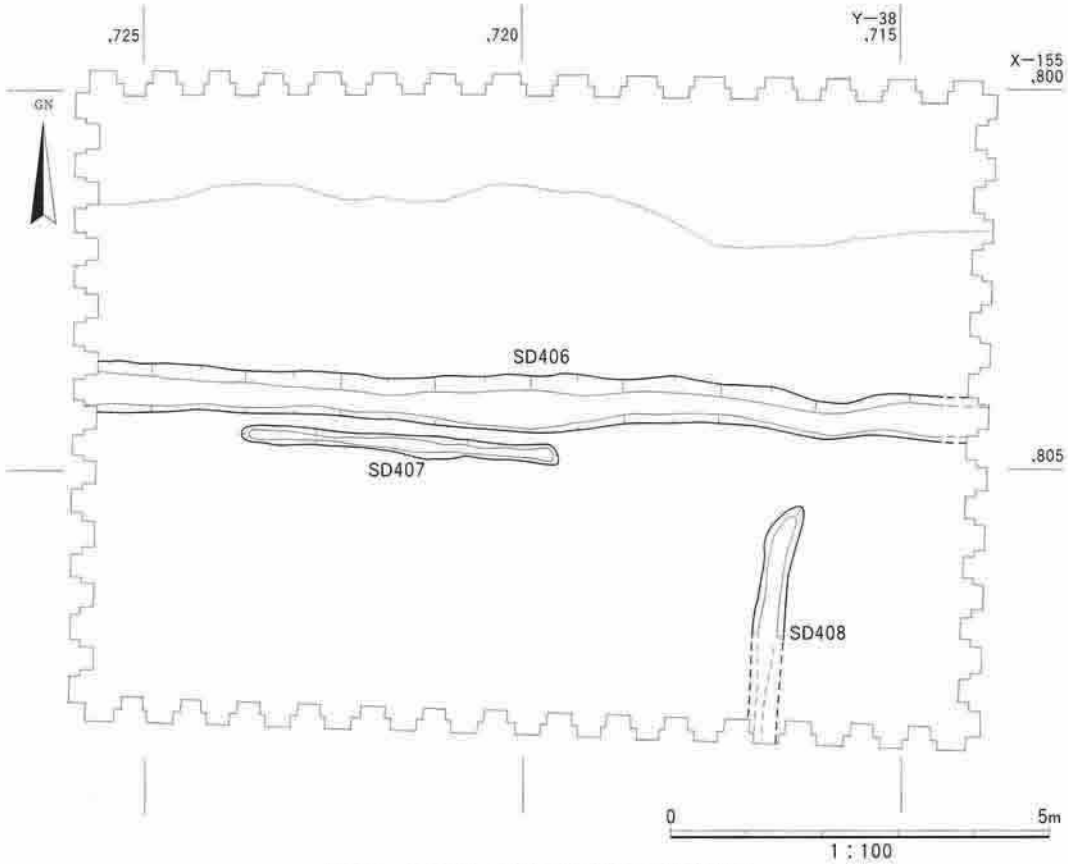


図217　NG86−23次鎌倉時代遺構配置図

NG83−８次調査

長原4B層（第4b層）上面で水田畦畔１条、溝２条が検出された（図215）。

SR401：南区で検出され、南北方向に延びる。幅0.5m、高さ0.1m未満である。

SD404：幅1.7m、深さ0.3mあり、底は平坦で断面は逆台形を呈する。長原4A層に相当する第4a層で埋まっている。SD402から0.5mほどの間隔を置いて掘られていて、南側でも途中で止まっていることから、水路ではないことはわかる。

SD405：幅1.2m以上、深さ0.7m以上ある東西方向の溝である。条里の坪境溝と思われる。Ⅲ−３期に位置づけられる瓦器椀36・37が出土していることから（図216）、遺構の時期は13世紀中頃と想定される。

NG86−23次調査

長原4B層基底面で溝が３条検出された（図217）。この中でSD406は幅0.5〜0.7m、深さ0.2〜0.3mあり、東西方向に延びる。Ⅱ−３期に位置づけられる瓦器椀38・39が出土していることから（図216）、遺構の時期は12世紀後半と思われる。SD407・408は浅いが、SD406と直交もしくは平行する方向に延びる。

３）まとめ

当地域は近隣で平安〜鎌倉時代の建物群が見つかっていることで知られている［植木久1983］。長

原遺跡では平安時代末から鎌倉時代にかけて集村化が進み、西隣の大阪文化財センター調査地では方形の区画とそれに囲われる建物群が検出されている[大阪文化財センター1978]。SD402・403やSB403といった、区画溝を有する4棟の掘立柱建物をはじめとする遺構群はちょうどこの時期に該当する。

掘立柱建物はSB404とSB406、SB405とSB407が重複していた。しかし、柱穴どうしの切合いが認められないうえに、出土遺物からも明確な前後関係はつかめなかった。だが、SB404と407はあまりにも近接しており、同時存在の可能性は小さい。SB404は最も規模が大きく、石製礎板を用いていることから母屋と考えられる。SB405はその付属屋だろうか。同様に、庇を備え、石製礎板をもつSB406が母屋、SB407がその付属屋と考えてよければ、前後2時期に分かれることになる。

これ以前で時期が確実にわかるのは火葬墓SX401のみで、平安時代Ⅲ期古段階である。地下鉄谷町線延長工事に伴う調査[大阪市文化財協会1982]や前述の大阪文化財センター調査地では平安時代Ⅲ期の遺物が多く出土していることから、11世紀初頭から散在的に建物が存在し、12世紀に方形区画を有する建物群に発展的に変化したことがわかる[佐藤隆1992]。（寺井）

第２節　NG91－１次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではNG87－85・89－60・91－１・92－５次調査を報告する（図218）。近隣では1987～89年度にかけて区画整理に伴う調査が多く行われ、旧石器～古墳時代の遺構・遺物が検出されている。

NG91－１次調査は2,300㎡を越える調査で、この地域の調査では非常に大きい方になる。調査の結果、古墳４基（**長原183～186号墳**）や飛鳥時代の溝に加え、前期旧石器時代の調査では長原15層基底面でナウマンゾウの足跡化石、長原16Bi層準で広葉樹を主とする化石林が検出された。当調査では古墳の調査終了後に、一般市民を対象とした現地説明会が行われた。

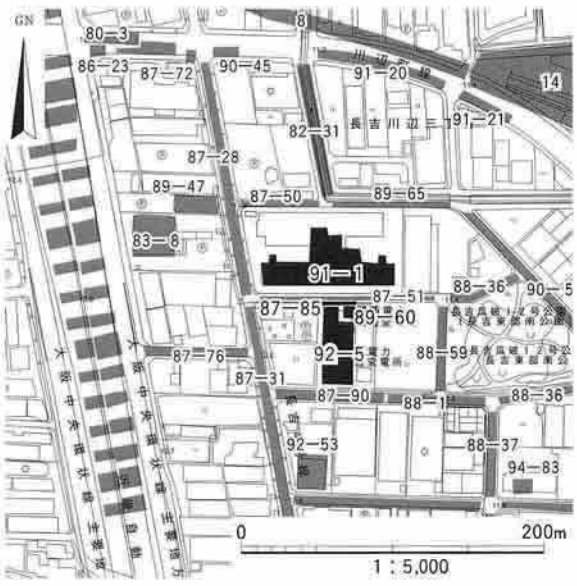


図218　NG91－１次などの調査地位置図

NG87－85・89－60・92－５次調査は関西電力の変電所建設などに伴う調査である。NG87－85・89－60次調査は40㎡未満の小規模な調査で断片的に遺構を検出したに過ぎなかったが、NG92－５次調査では1000㎡近くを調査することができ、**長原198号墳**や飛鳥時代の溝に加え、長原16A層上面でナウマンゾウの足跡化石が検出された。

２）調査の結果

ｉ）層序

NG91－１次および92－５次調査では前期旧石器時代の調査のため、GL－４～５ｍまで掘削し、地層の観察を行った（図219～222、表27・28）。いずれの調査地でも長原２～７層が薄く、発達していない。前者の調査地は東を古川辺川、西を古長原川に由来する谷筋に挟まれた舌状台地の上に立地する。そのため、中央部分がもっとも高く、東・西側に向って緩やかに落込む。中央部分は場所によっては現代作土直下で長原13層が検出されるところもある。なお、長原13C・14層も確認されているが、断面図に記録されていなかったため、表27や図219・220には掲載していない。

ii）遺構と遺物

ａ．前期旧石器時代の遺構

NG91－１・92－５次では前期旧石器時代のヒトの痕跡を探すため、深掘を行った。その結果、石器や遺構は見つからなかったが、化石林やナウマンゾウの足跡化石など当時の自然環境を推測する材料を得ることができた。

NG91－１次調査

表27　NG91－１次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0・1	現代盛土・作土	20～50					近・現代
2	2	にぶい黄褐色砂質シルト	5	作土				江戸時代
3	3	黄褐色砂質シルト～シルト質細粒砂	5	作土				室町時代
4	4A	黄褐色粗粒砂	※	水成				鎌倉時代
5	4B	灰オリーブ色粘土質シルト ～オリーブ褐色含砂粘土	5	作土				
6	6	オリーブ褐色粘土	＜5	作土		▼古墳・溝		奈良時代
7	8Ci	黄褐色粗粒砂	10	水成				弥生時代
8	8Cii	黄褐色粘土	10	水成				
9	9A･B	灰黄色粘土～粘土質シルト・ 黒褐色粘土～粘土質シルト	＜5			←SD801・802		縄文時代
10	9C～13A-B	灰黄色～黄褐色シルト・細粒砂質シルト	＜5					
11	15	オリーブ灰色シルト～粘土 ・オリーブ灰色砂礫	180					旧石器時代
12	15	暗緑灰色砂礫	20	水成				
13	16A	緑灰色シルト～粗粒砂の互層	120			←ナウマンゾウの足跡		
14	16Bi	褐色粘土				←化石林		

※土壙や溝などの窪みにのみ分布

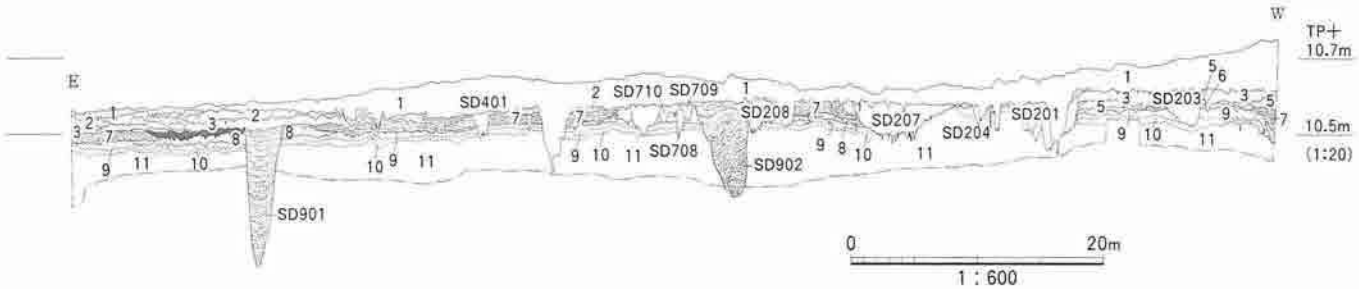


図219　NG91－１次南壁断面図

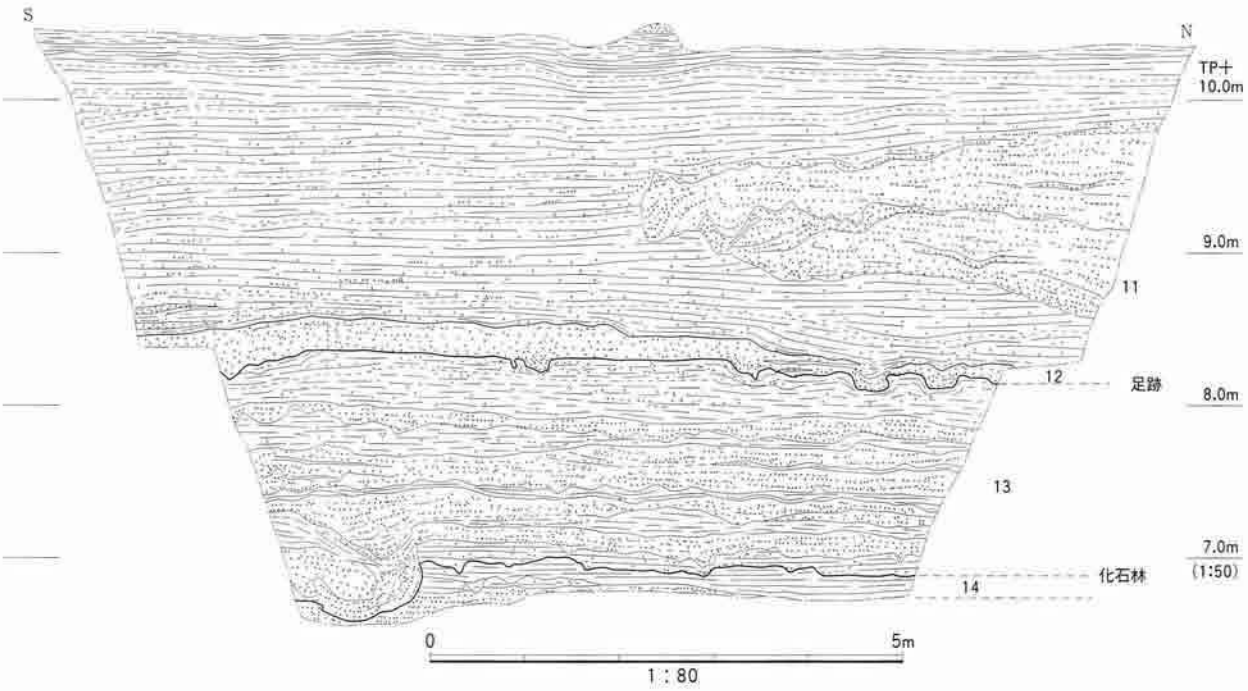


図220　NG91－１次西壁断面図(長原15～16B層)

表28　NG92－５次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	2 or 3	にぶい黄褐色中粒砂質シルト	10	作土				江戸～
2	2 or 3	にぶい黄色粗粒砂質シルト	＜5	作土		▼古墳・溝		室町時代
3	8C	オリーブ褐色粗粒砂	10	水成				弥生時代
4	9A·B	暗灰黄色シルト	10			←SD803		
5	9C～12	灰黄褐色細粒砂質シルト	10					縄文時代
6	12～13A·B	黄褐色粘土質シルト	＜5					
7	13C	明黄褐色シルト質粘土	10					旧石器時代
8	15	にぶい黄橙色含粗粒砂シルト質粘土	100					
9	15	浅黄色粗粒砂質シルト	60					
10	15	黄褐色細粒～粗粒砂	20～90	水成				
11	16A	緑灰色細粒～粗粒砂	5～10	水成				
12	16A	緑灰色極細粒～細粒砂		水成		←ナウマンゾウの足跡		

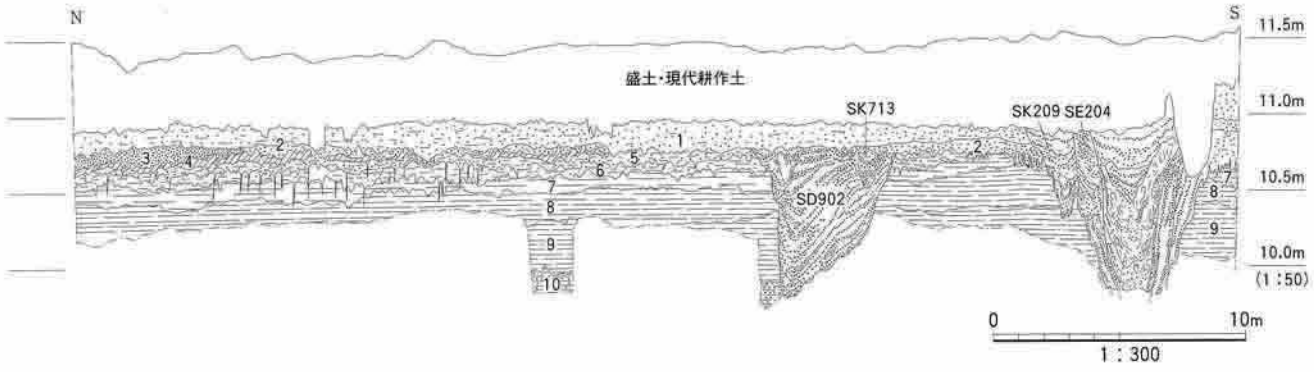


図221　NG92－５次東壁断面図(～長原13C層)

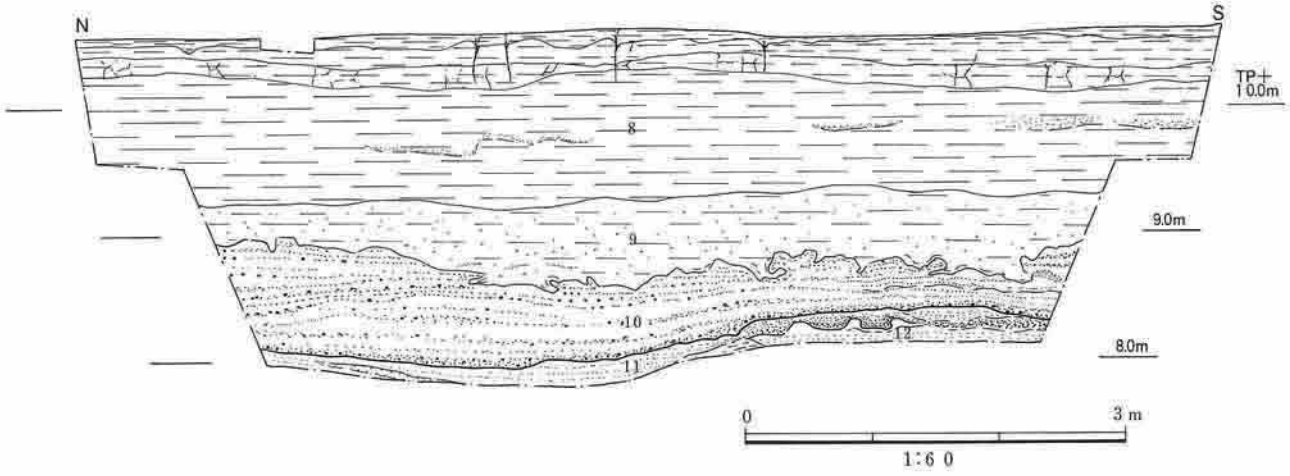


図222　NG92－５次東壁断面図(長原13C～16A層)

長原16Bi層上面では広葉樹を主とする化石林が検出された(図223・図版29上)。本層上にもいくつかの凹みが認められたが、足跡と断定することはできず、人類の足跡および生活痕跡は今回は認められなかった。さらに下方の状況を探るため、部分的な深掘りを行った結果、TP+6.1m付近のシルト質極粗粒砂層およびTP+5.7m付近のシルト質粘土層のそれぞれ上面においてナウマンゾウの足跡状の凹みが検出された。

長原16A層下部からはオニグルミ・エゴノキなど多くの植物遺体が見つかった。また土壌洗浄の際

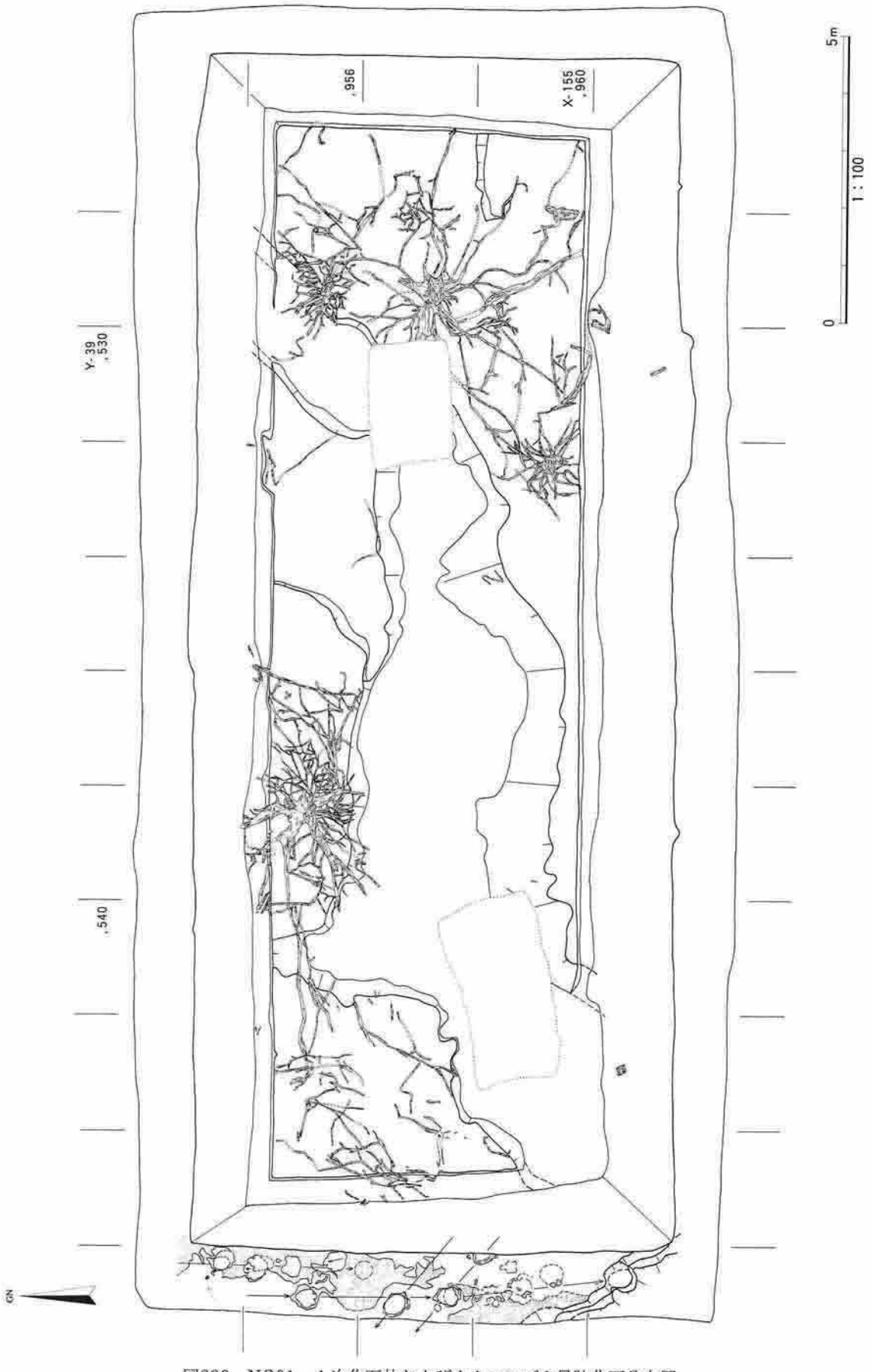


図223　NG91－1次化石林およびナウマンゾウ足跡化石分布図

にサヌカイト細片が1点見つかった。

長原15層基底面ではナウマンゾウの足跡が検出された。当層準は当初調査予定になかったものである。掘削深度が深いため、途中に一段テラスを設けて掘り下げて化石林の調査にあたっていたが、断面精査中に長鼻類の足跡と思われる凹みが確認された。この高さが偶然テラス面に一致したことから、西側のテラス部に限って調査を行った。

足跡は約10個確認された。シルト質細粒砂層の上面、および細礫混り砂の薄層内のラミナ面が支持基体である。前足と後足とが重なって見つかるため、前足部の残りはよくない。前足跡は直径30cm強の円形、後足跡は長軸が35cm前後、短軸が30cm弱の楕円形である。残りのよいものには指の形も認められ、それを追うことによって2列の行跡が確認された。ナウマンゾウと判定したのは後期更新世に本州地域で生息の知られる長鼻類はナウマンゾウだけだからである。この面ではヒトの足跡および遺物は見つからなかった。また、ナウマンゾウの行跡にもヒトに追われたような乱れは認められなかった。

なお、古環境としては河川沿いの水際、あるいは浅い沈水三角州が推定できる。



写真23　NG92－5次ナウマンゾウ足跡化石
(SX1601・1609・1619)

NG92－5次調査(図224)

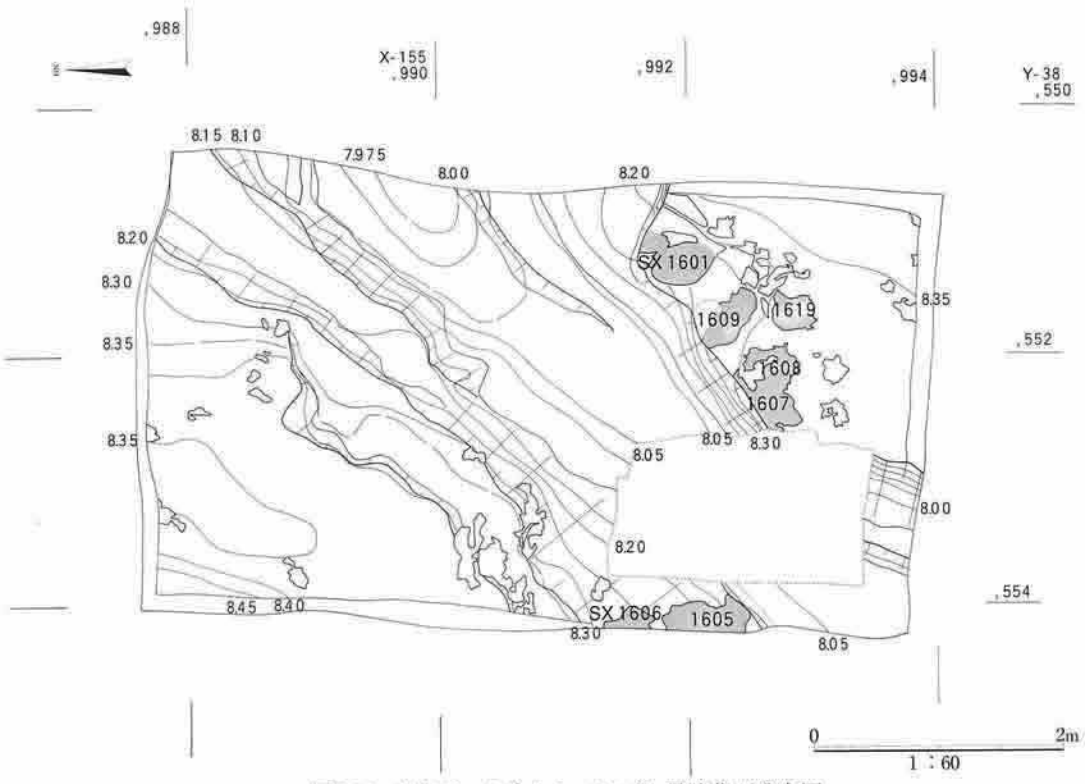


図224　NG92－5次ナウマンゾウ足跡化石分布図

調査区の北東寄りで南北9.2m、東西5.5mにわたって調査した。南西から北東へ伸びる自然流路によって、深掘部分の約70%が削平されていた。人間活動にかかわる遺構を見つけることはできなかったものの、ナウマンゾウの足跡化石を数個同定することができた。このうちもっとも支持痕、離脱痕の明瞭なSX1601は、左前足、左後足が重なったもので、開口部は長径60cm、短径34cmの楕円形を呈し、深さは15cm前後である(写真23)。SX1619の開口部は長径35cm、短径30cmであり、後足の大きさをほぼ反映しているものと思われる。足跡が少なく、その行跡は復元できなかった。また、断面観察によって、下位に足跡化石を確認し、長原16層中に足跡化石の見つかる層準が少なくとも２層準存在することが明らかになった。

ｂ．後期旧石器～縄文時代の遺構と遺物

NG91－１次調査

調査地西部でNR901が検出された(図225)。通例、「古長原川」と呼ばれる谷筋である。本流から南東に膨らんで蛇行する部分と谷筋にいたる斜面がおもに検出され、本流部分は北西隅で確認できたにすぎない。この谷筋はこれまで埋土下層の砂礫が長原9C層の一部であるのか長原10層以下のものか判断できず、形成の時期がはっきりしなかった。今回の調査でも砂礫から時期の判定できる遺物は出土しなかった。この砂礫で埋没した後、長原9A・9B層の黒色の暗色帯が形成される。本層には長原式土器をはじめとする縄文時代晩期の遺物が多く含まれる。その後、分厚い長原8C層の砂礫によってほぼ平坦化されるが、完全に平坦になるのは長原４層の時期である。

蛇行部分には水流によってできた孤状の凹みが多く認められる。蛇行部分の形成要因はまったく自然の状態で単に川筋が蛇行したためと考えることもできるが、断面観察の結果、興味深い事実がわかった。埋土下層の砂層の一部にラミナが波うった部分があること、もっとも岸よりの孤状の窪み内に岸が崩落したような多量の地山偽礫が認められたことである。さらに断割って断面を観察したところ、長原15層内の粘土層に挟まれる細流砂薄層のラミナにも乱れた部分があることがわかった。谷筋がある程度埋まった段階で大きな地震があり、長原15層の細粒砂層でそれ以上の部分が谷筋方向に地滑りを起こした。そのため残った岸側の部分との間に孤状の窪みが生じ、そこに水流が入り込んで蛇行部分が形成された可能性もある。推定の部分も多く可能性のひとつとしておきたい。

調査区南西部には石器の集中した部分が認められた(図225・図版29中)。南は調査区外にあたり、東は島畠溝によって失われているため，本来の範囲は不明であるが直径３ｍほどと思われる。石鏃３点を含む約40点のサヌカイト片を現地で確認した。土を持帰り洗浄した結果、さらに多くのサヌカイト片が補集された。出土したサヌカイト片は指の爪以下の大きさのものがほとんどであり、石鏃の未製品も含むことから、石鏃などの小型品を製作した跡と考えられる。縄文土器片が伴うこと、および石鏃の形態から縄文時代のブロックといえる。また直接には当ブロックとは無関係と思われるが、珪質頁岩製と思われる石鏃も見つかった。

調査地中央南部では長原９層内から、５cmほどの卵形の礫が直径50cmほどの範囲に11点集中して見つかった。この部分には風倒木の痕跡と思われる凹みがあり、礫はこの中に転がり込んだ状態であった。この部分あるいは付近に礫を使った遺構が存在したようである。

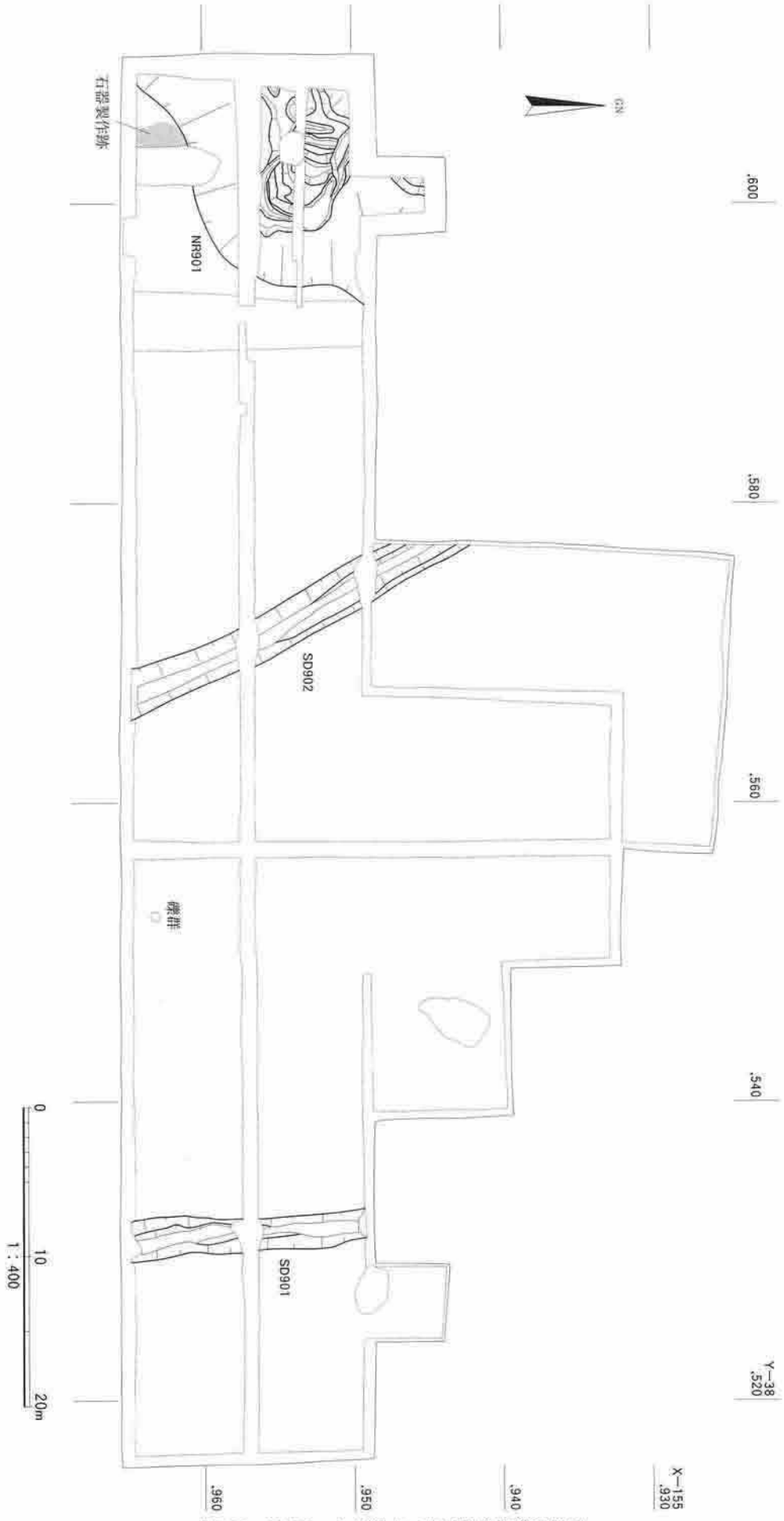


図225　NG91－1次縄文～弥生時代遺構配置図

その他の遺物は石鏃を中心として調査区全域に散漫に分布する。旧石器も存在したと思われるが、風化の影響を受けて、確実に長原13層としておさえられる層が遺存していないため、断定できるものはない。ただ周辺の調査結果から、この場所は旧石器時代の遺物の分布が希薄な地域なのであろう。

NG92－5次調査

図221の第5層(長原9C～12層)、第6層(12～13A・B層)から石器遺物が計23点出土した。層厚が薄く、上位層の擾乱を受けており、個々の出土層位を特定できないものが多い。内訳は、石鏃10点、有茎尖頭器1点、コア2点、フレイク9点、スクレイパー1点である。図232に示した有茎尖頭器9はチャート製であり、第6層から出土した。サヌカイトフレイクは調査地北端から8点、南端から3点がまとまって出土しており、それぞれに接合関係が認められる。前者の一群は長原13層相当の層準から出土した。

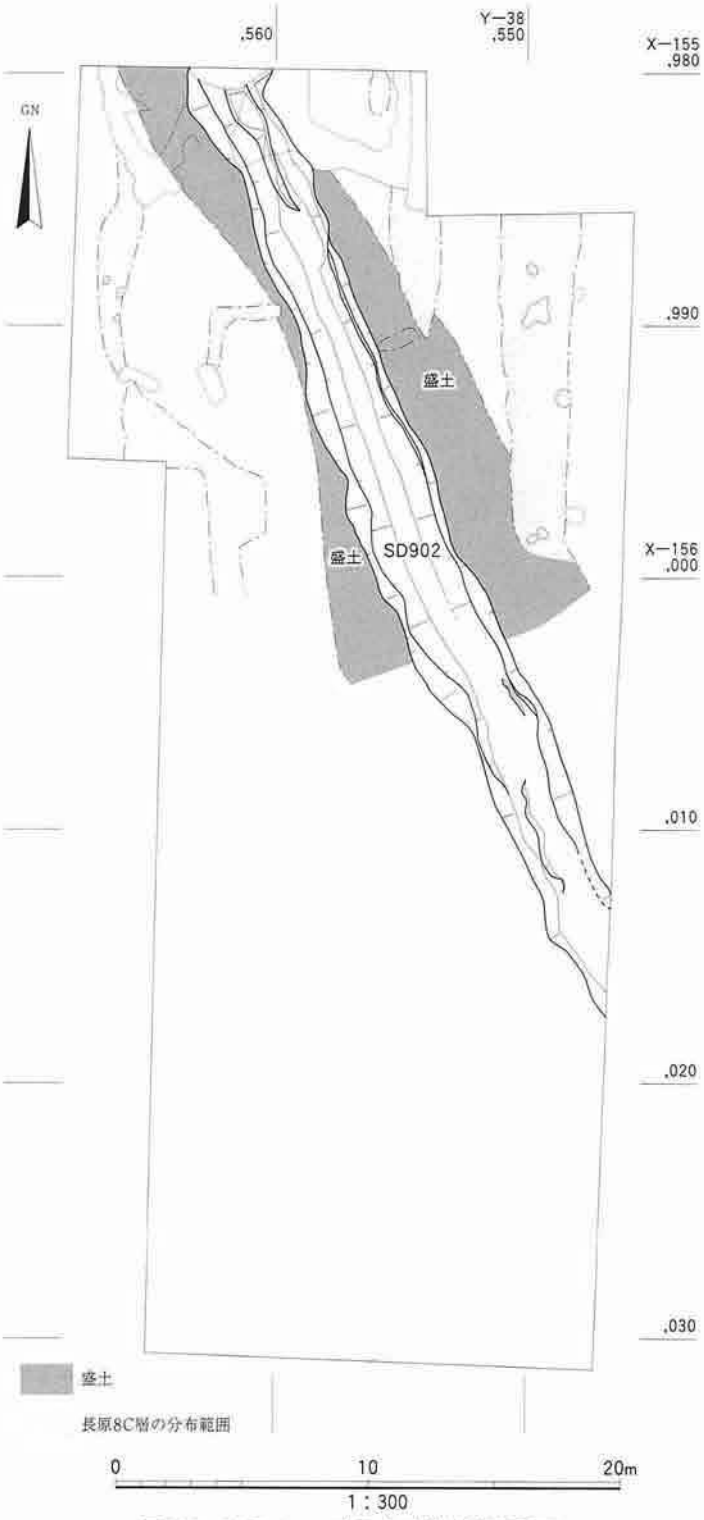


図226　NG92－5次弥生時代遺構配置図

c．弥生時代の遺構

NG91－1次調査

溝が2条検出された(図225)。

SD901は幅約3m、深さ約1.4mの南北方向の溝、SD902は幅約3m、深さ約1.2mの南東－北西方向の溝である(図版29下)。埋土はいずれも長原8C層の砂で、部分的にシルト・粘土の薄層を介在する。弥生時代前期の水路であり、両側に盛土を行っている。洪水によって盛土が崩れ、外側に広がった部分もあり、本来の盛土幅をつかむのは容易ではないが、断面観察からは5m程度であったと思われる。高さは最高で20cmほど残っていた。遺物は少なく、縄文時代晩期の土器細片とSD901から流木が出土したのみである。この時代のほかの遺物としては石鏃、SD902の西側盛土下からの弥生時代前

期の壺の破片がある。

NG92－5次調査

長原8Cii′層上面の調査区北寄りで、南東から北西に延びる水路SD902が検出された(図226・図版31上)。断面はU字形で、幅3.5m前後、深さ0.9～1.2mあり、NG91－1で検出されたものと一連である(図235)。盛土によって土堤を築いており、残りの良いところで、高さ0.2mある。弥生土器の細片が砂層から数点出土したが、この水路の掘削時期を特定できる資料は得ることはできなかった。

d．古墳時代の遺構と遺物

NG91－1次調査

4基の古墳(長原183～186号墳)が確認された(図227・図版30上)。このうち長原183・184号墳は拡張調査によって全体を確認したものである。4基とも上部が削平を受けており、主体部・盛土は遺

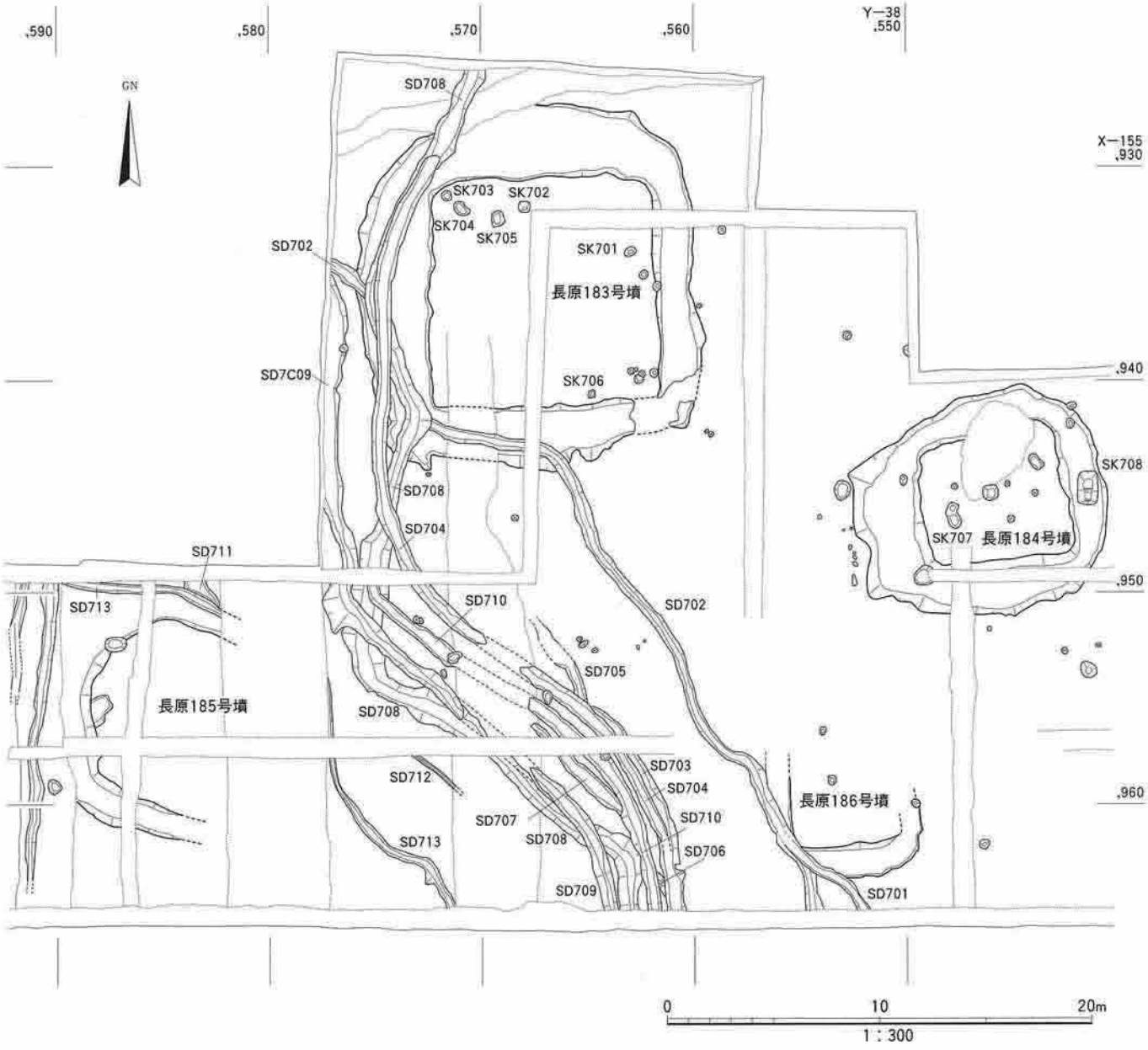


図227　NG91－1次長原183～186号墳配置図

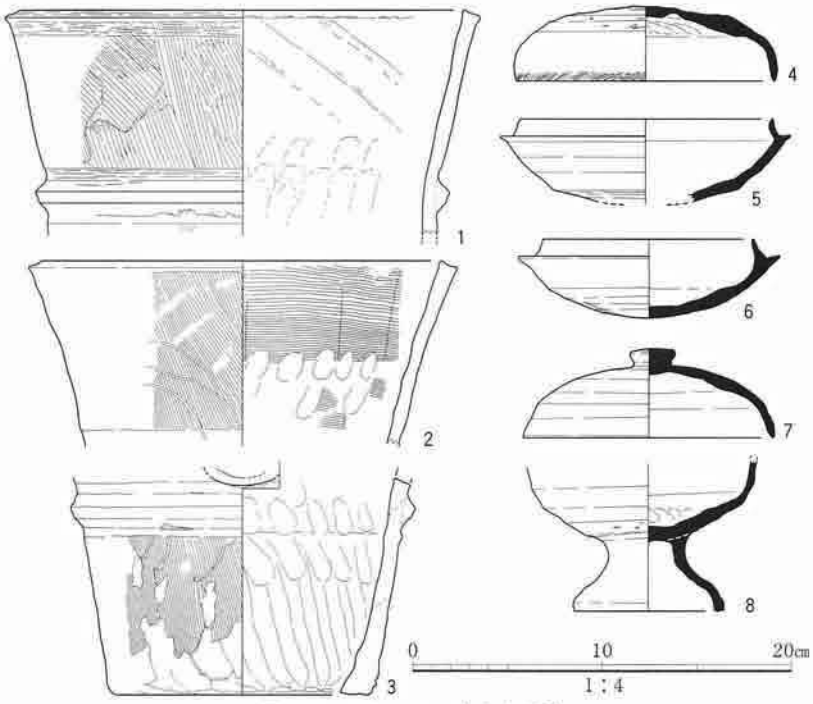


図228　NG91－1次出土遺物
長原183号墳（1～3）、SD708（4～8）

存していなかった。

長原183号墳：調査地北部で検出された方墳である（図版30中）。墳丘部で一辺が10.8m、周溝を含めると17.0m×16.3mである。周溝はコーナー部分で浅く掘られており、底には掘削時の凹凸が見られる。長原古墳群では高廻り1号墳（長原169号墳）などとともに規模の大きな方墳である。周溝および周溝を壊した溝からは円筒埴輪1～3が出土した（図228）。いずれも無黒斑で一次調整のみのものがほとんどであるが、二次調整のヨコハケが施されるものもある。口縁部には上向きの孤状線刻を2～3条施したものが多いようである。北東コーナー部では須恵器甕が見つかった。粉々の状態で出土しており、意識的に砕かれた可能性が高い。掘形は認められなかった。また、周溝内の土を水洗したものの、鉄器および玉類は確認されなかった。築造時期は5世紀後半～末と考えられる。

長原184号墳：墳丘部で6.3m×6.8m、周溝を含めると10.8m×12.0mの大きさの方墳である（図版30下）。西側の周溝が広く掘られている。周溝底には掘削時の凹凸が顕著に認められる。また南西コーナー部、周溝底には直径0.8mほどの土壙が掘られており、掘削の際に生じたと思われる偽礫が周溝底に残っていた。周溝掘削時に同時に掘られたことは明らかであるが、遺物などは出土せず、目的は不明である。周溝内の遺物は須恵器・土師器の細片が見つかっただけである。周溝埋土の土を洗浄したが主体部に伴っていたと思われる遺物は検出できなかった。

長原185号墳：削平によって東側周溝が失われているが、一辺約8mの方墳に復元できる。周溝から埴輪片が出土した。

長原186号墳：調査地南部で検出された。もとは約7mの方墳と思われる。4基のうちでもっとも残りが悪く、周溝の深さも0.1m以下である。遺物は出土しなかった。

NG92－5次調査

方墳1基（**長原198号墳**）と土器埋納ピット2基が検出された。

長原198号墳：小型の方墳で、周溝の内側で長軸9.7m、短軸8.7mある（図229・図版31中）。主体部は削平されて残っていなかった。周溝は残りの良いところで幅2.8m、深さ0.15mである。周溝からは遺物が少ないが、古墳周溝を切る飛鳥時代の溝SD720・721や近接する土壙SK713からは円筒埴輪10～14が出土しており、これらが本来この古墳に伴っていた可能性が高い（図232）。



図229　NG92－５次長原198号墳平面図

SK709：やや歪な隅丸方形の掘形であり、黒色の粘土質シルトで埋め戻されていた。TK10型式の須恵器杯蓋20、口頸部の欠けた壺21が出土した(図232)。遺物は２個体とも倒立した状態で底に置かれていた。

SK710：平面は楕円形であり、長軸0.55m、短軸 0.40m、深さ0.15mを測る。木製箱のような容器の痕跡は認められなかった。TK216型式に属する須恵器杯身16・17、杯蓋15、高杯18、把手付椀19が出土した(図232・図版31下)。16は手持ちのヘラケズリが施されている。

SK714：調査区南部の壁際で確認された、深さ0.4mの土壙である。長原198号墳のものとは異なる断面三角形のタガをもった硬質の円筒埴輪の破片が出土している。

ｅ．飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG91－1次調査

SD701～713：調査区中央部で重複して見つかった溝である。これらの溝は古墳の間を縫うようにして南東－北西方向に蛇行しながら掘られている。幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.6mである。各溝からは須恵器・土師器・埴輪が出土している。特にSD708からはTK43型式もしくはTK209型式の時期に比定できる須恵器杯身5・6、杯蓋4、高杯8、同蓋7が出土した(図228)。また、長原183号墳の周溝と重なる部分では、183号墳のものと思われる埴輪片が多く見つかった。SD704の最上部からはTK217型式の須恵器杯蓋が出土したことから、これら溝群が機能していた時期はおおむね6世紀後半～7世紀前半とすることができる。

溝底には水成層である砂のラミナが確認でき、水が流れていたことがわかる。機能としては水田に水を導くための用水路が考えられるが、それぞれの溝が同じように曲がり、同じような位置に繰返し掘られていることから、用水路としてだけではなく、何らかの区画も兼ねていた可能性がある。

溝のいくつかは古墳の周溝を壊して掘削されている。また、溝の方向をよく見ると周溝部分は掘削しているものの、墳丘部分は迂回していることがわかる。これは溝の掘削時には古墳がまだある程度の高まりとして残っていたことを示している。長原185・186号墳を古墳と判断した理由のひとつである。用水路として水を流すため、掘削距離は長くなるものの、高まりを避けて低い周溝部分を選んだのであろう。

SD714：調査地の東部で見つかった南北方向の溝である。砂で埋没する弥生時代の水路上に位置する。降雨などの際にこの砂の部分が削られ、溝状の凹みとなったのであろう。須恵器片が出土した。

SD715・716：調査地西部で見つかった。この部分は北西部に落ちる斜面上に位置することから、人為的に掘削されたものではなく、雨水などが流れてできた自然のものであろう。須恵器・土師器・埴輪が出土した。

SD717・718：坪境の溝部分で見つかった。それぞれ幅0.5mの南北方向の溝で平行して延びる。坪境の溝によって上部がかなり削られていることを考慮にいれれば、規模はかなり大きくなり、本来は1条で底が2条になった溝の可能性がある。

また、長原183・184号墳の付近では多くの土壙が確認された。これらの中には飛鳥時代の完形の土器を含むものがあり、いわゆる「土器埋納ピット」として把握できる。SK701で土師器小壺、SK702で土師器杯、SK707で土師器杯2点、SK708で土師器杯が見つかった。

SK707：長原184号墳の墳丘部に掘られた、1.15m×0.60mの南北に長い不整形の土壙である。平面および底の形から、北と南の2つの土壙が重なったもののように見えるが、断面では切合いが認められなかった。この北側部分の底に土師器の杯2点が正置した状態で置かれていた。

SK708：長原184号墳の東周溝部に掘られた、1.40m×0.65mの南北に長い長方形の土壙である。埋土には地山偽礫などを多く含み、掘ってすぐに埋め戻されたようである。深さはもっとも深いところで0.9mであり、底が北から南に下がるよう階段状に掘削されている。3段分を確認した。もっとも深くなる南壁の部分はオーバーハングしている。この最深部に土師器の杯が正置した状態で置かれていた。杯内および周辺の土からは多数のウリ類の種子や水草の種子・サンショウが見つかった。出



図230　NG91－1次古墳～飛鳥時代遺構配置図

土状況からウリ類を杯内に容れて供えられていたことが明らかである。これまで「土器埋納ピット」は祭祀に関係するものと推定されていたが、今回の発見によってその可能性は強くなったといえよう。土器内(土器の検出されないものは有機質の容器内)に食物を容れて供える行為が行われていたのであろう。水草の種子は周溝の土を水洗した時には確認されなかったので、土壙内にのみ、あるいは土壙を掘るときの地表に存在したと考えられる。もし土壙内のみのものであれば、食物を容れた土器の上に水草をかぶせる行為があったことを意味するかもしれない。地表に存在していたものであれば、当時この付近が水草の生えるような環境にあったことになり、水田であった可能性もある。この地域における当時の土地利用には、層序が残っていないことから不明な部分も多く、その解明は今後の重要な課題のひとつであろう。

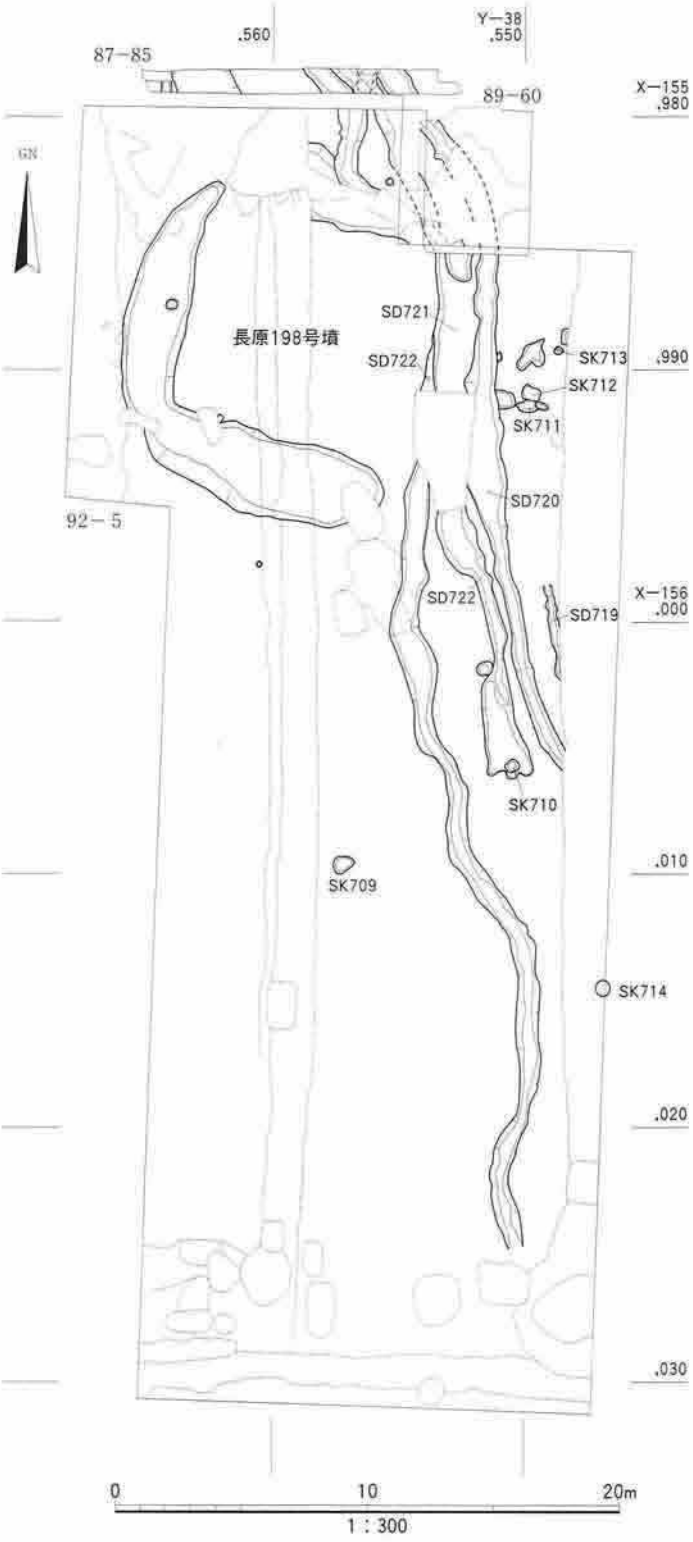


図231　NG92−5・87−85・89−60次古墳〜飛鳥時代遺構配置図

SE701：調査区西部の突出部で検出された。形状から井戸と判断したが、大半が調査区外であるため規模・時期ともに不明である。

NG92−5・87−85・89−60次調査

4条の溝SD719〜722、土壙が検出された(図231)。

溝はいずれも南から北に流れ、調査区北方で方向を西に向け、さらに北上する。いずれも古墳周溝を踏襲している。溝の規模については、SD722ではもっとも良く残っているところで、幅1.3m、深さ0.4mである。切合い関係から、SD722→SD721→SD720の順に掘削されたことが判明した。溝からの遺物は古墳に伴うと考えられる須恵器、円筒埴輪のほか、SD722からはTK43型式や209型式に属する須恵器杯31〜33、同蓋27〜30、SD721からはTK209型式や217型式の須恵器杯身23、杯蓋22、SD720

からは土師器甕24、須恵器杯身26、杯蓋25が出土した(図232)。24については外面にハケ調整が施され、下膨れの体部を持つことから、飛鳥Ⅱもしくは Ⅲに属すると思われる。

土壙はプランが方形のもの、楕円形でのものなどさまざまである。SK711は意識的に埋め戻されているが、ほかは自然堆積によって埋まっている。いずれも、柱痕跡及び抜取り穴は認められず、柱穴とは見なしがたい。遺物は全体に少ないが、SK712からは飛鳥Ⅱ～Ⅲの土師器杯Ｃが出土している。

ｆ．鎌倉時代以後の遺構と遺物

NG91－１次調査

南北方向の坪境溝・南北方向の島畠・小溝群・土壙などが検出された(図233)。長原4B層準と２・

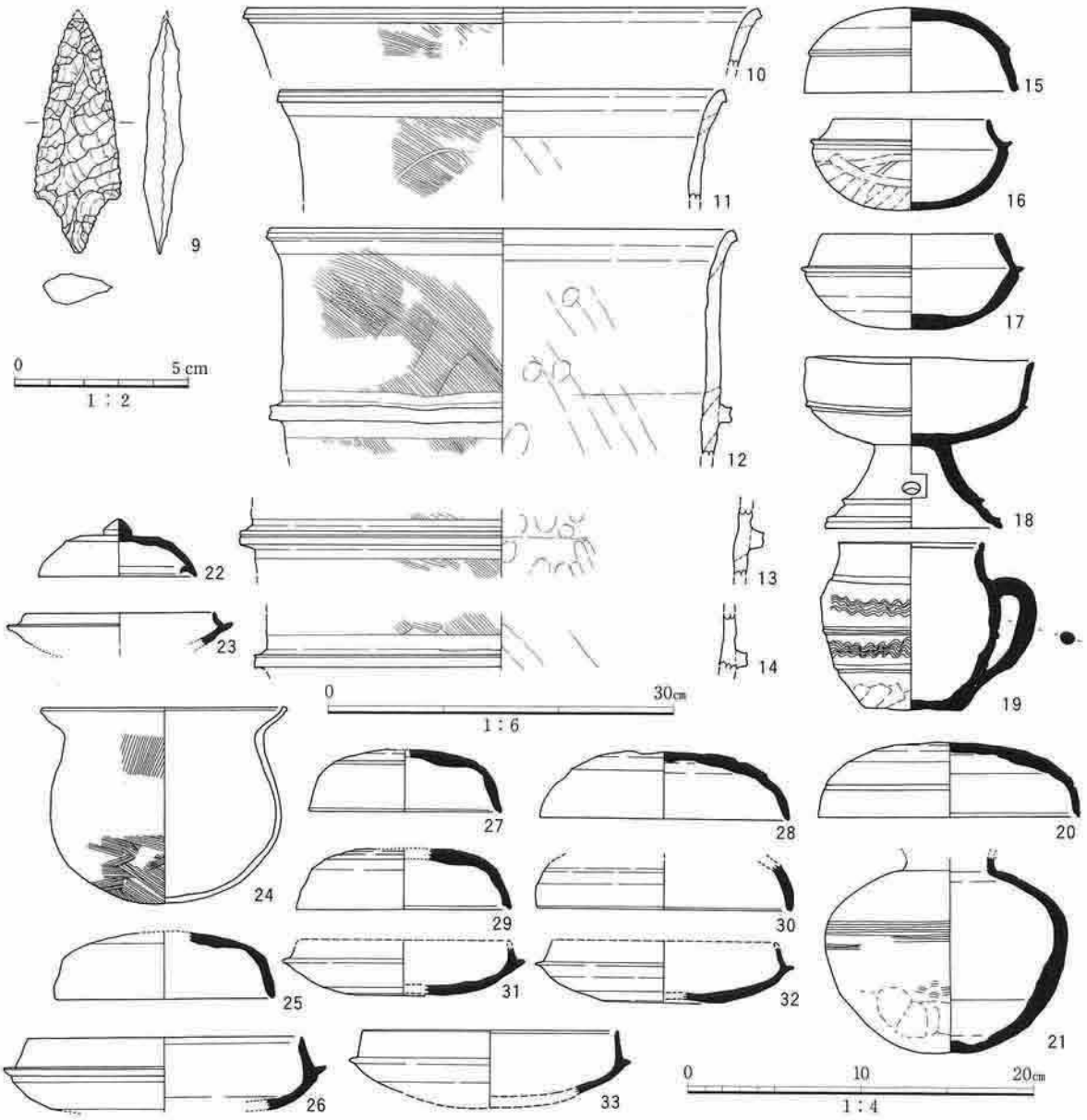


図232　NG92－５・87－85次出土遺物(30～33以外はNG92－５次出土)

長原12～13A・B層(９)、SK709(20・21)、SK710(15～19)、SK713(14)、SD720(10・24～26)、SD721(11～13・22・23)、SD722(27～33)

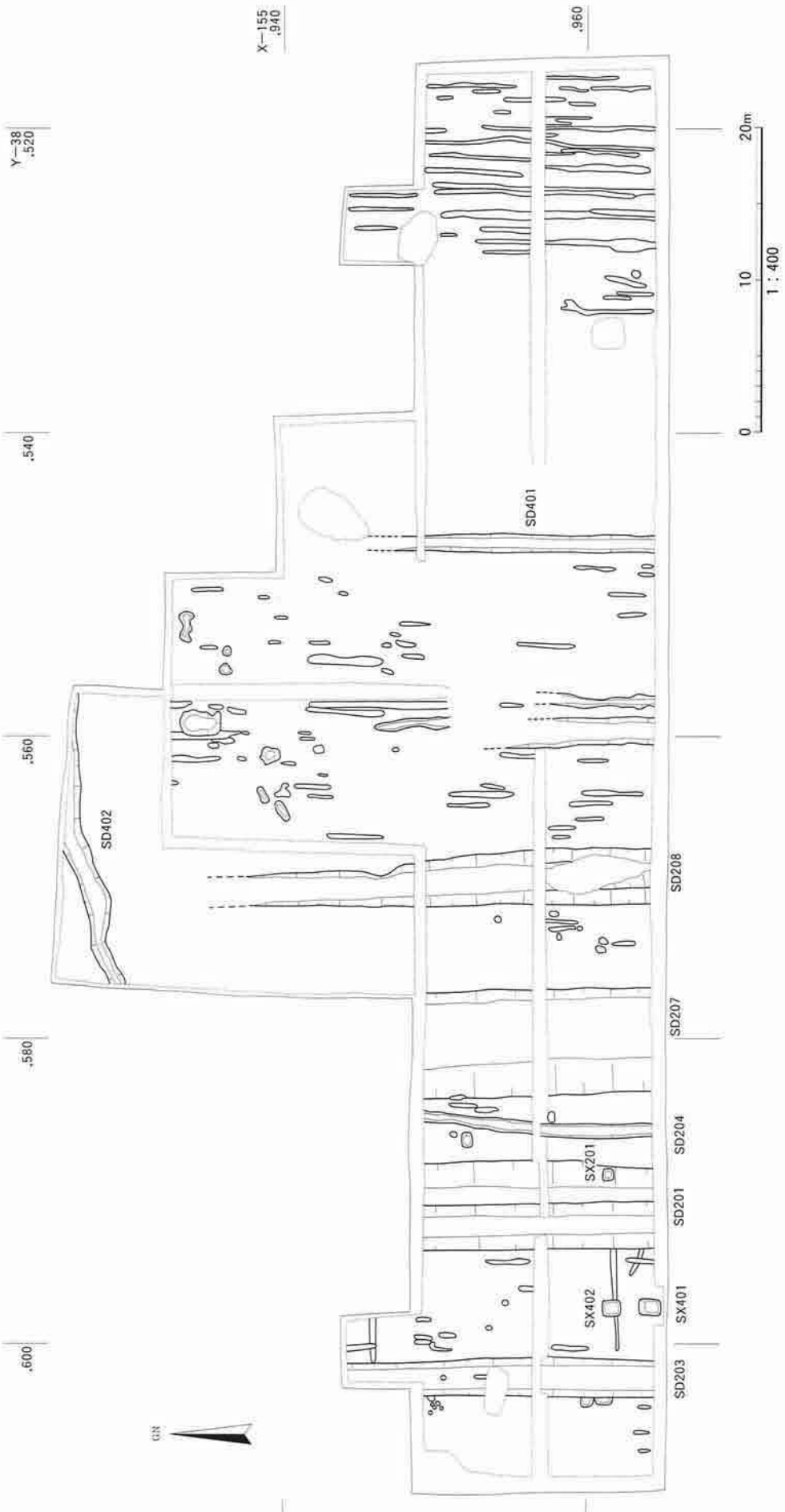


図233　NG91－1次鎌倉～江戸時代遺構配置図

3層準のものがある。

SD203・207・208は中央以西に存在する。島畠に伴う溝と考えられる。

SD203は約2.8m、SD207は約7.0m、SD208は約3.8mのそれぞれ幅をもつ。SD207とSD208の間は約5.4mである。SD207には埋土の途中に平坦面があり、この平坦面上に東西方向の畦状高まりが存在していた。溝の底には牛と思われる偶蹄類の足跡が多数認められた。SD208には南側に周りより1mほど深い部分がある。この部分の遺構ベースは弥生時代の水路の埋土である砂層となっている。溝の掘削当時に周囲より柔らかいために深く掘込まれたか、あるいは溝が機能していたときに水によって削られたために深くなった可能性がある。これらの溝は掘込み面および出土遺物から近世のものと思われる。

SD201：調査区西寄りで検出された。坪境の溝である。何度も掘り直しが行われている。掘削当初の時期は把握することはできなかった。護岸のための杭が多数打ち込んである。陶磁器を主体とする近世の遺物が多量に出土した。この溝は区画整理事業施工前まで機能していたものである。

SD204：中央やや西よりで検出された。幅約1m、深さは0.3mほどで、北でやや東に向きを変える。遺物が少なく時期は決めがたいが、長原3層以降のものであろう。鉄製の手斧の刃先が出土した。

SD401：幅約1m、深さ約0.3mの南北溝である。埋土途中に層理面があり、ここに偶蹄類の足跡が検出された。この面で機能していた時期が存在することを示す。長原3層の遺構と考えられる。

SD402：拡張部北端で見つかった。幅は約1.8m、深さは0.4mほどの蛇行しながら東西方向に延びる溝である。埋土は水成層である長原4A層の砂礫である。埴輪・須恵器・瓦器などが出土した。調査区北部に同じく長原4A層で埋没する土壙が多数あり、その中に含まれる瓦器に12世紀後半の時期のものが含まれることから同様の時期と考えられる。

SX401：調査区南西部で検出された。長辺1.4m、短辺0.8mの南北に主軸をもつ隅丸方形の土壙である。深さは0.4mで、北端に0.2mほどのテラス状部分がある。底は平坦に近い。長原3層基底面の遺構で長原4B層を掘込む。埋土は長原4B層以下の大きめの偽礫を多量に含んでおり、掘削後すぐに埋め戻されたことがわかる。これに加えて、底が平坦に近いこと、南北に主軸をもち整然とした形をしていることから、墓の可能性が考えられるが、地層観察用の土手を残しながら慎重に掘下げたにもかかわらず、木棺等の痕跡は認められなかった。遺物は土壙埋め戻し時に紛れ込んだと思われる土師器の小片が出土しただけである。

SX402：SX401の北約1.2mで検出された。主軸はSX401の延長上で長軸約1m、幅は約0.8mとやや方形に近い。埋土はSX401と同じであるがやや浅い。遺物は出土しなかった。

これら土壙と似たものはNG90－5次調査のSK301・302とSK303・304で、報告書では土壙墓と推測されている[大阪市文化財協会1997b：pp.81－85]。そこでは主軸は東西方向であるが、長方形のものと方形に近いものとが隣接し、同じ主軸をとる、長方形のものはテラス部分をもつ、埋土に偽礫を多く含む、といった共通点をもつ。墓と推定されているが、2つセットという関係が多く認められるようになれば、別の機能を推定する必要があるかもしれない。今後の類例の増加に期待する。

SX201は坪境溝の東斜面で検出された。SX402よりやや小振りの方形を呈する土壙である。埋土に

は多くの偽礫を含むが、SX401・402に認められなかった層の偽礫が確認されたことから、少なくとも１層準は新しい遺構であろう。その他の遺構としては小溝群がある。南北方向のものが多く全域にわたって認められる。西側では長原２・３層それぞれの下面で、東側では数枚にわかれる長原２層のそれぞれの下面および長原３層の下面で検出された。特に東側の小溝には底に水成層である薄い砂層が存在することから、畝間として機能していたと考えることができる。

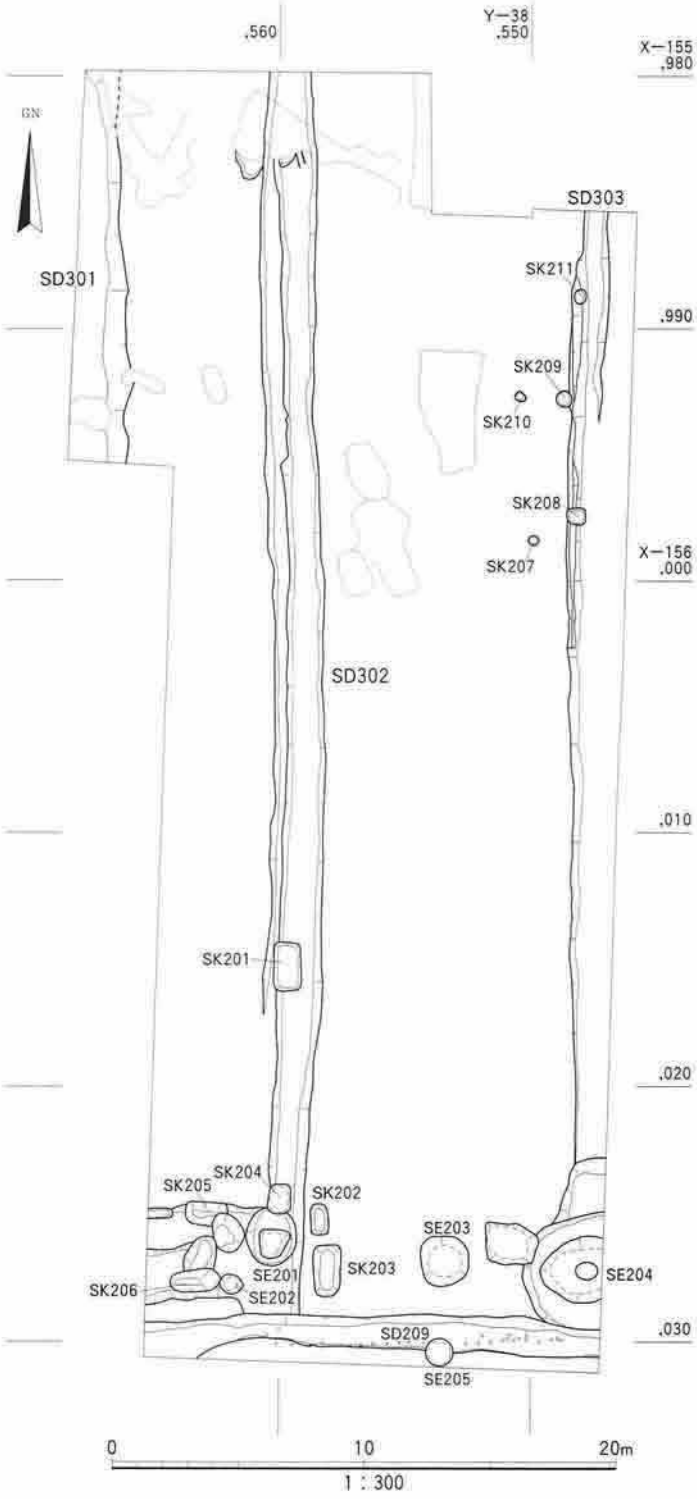


図234　NG92－５次鎌倉～江戸時代遺構配置図

NG92－５次調査

島畠溝、坪境溝、井戸、土壙が検出された(図234)。長原２層準と３層準の両方がある。

SD301～303：南北方向に延びる島畠溝である。このうち、SD302は調査区南端で東に屈曲し、SD301に連なるものと思われる。SD302は全長約49m以上、幅2.1m、深さ0.2mを測る。SD301との間隔は5.4mである。出土遺物の大半は瓦器、土師器の細片であり、国産陶磁器がごく少量含まれる。

土壙は平面形態が隅丸方形あるいは楕円形をなし、長軸を南北にとるSK201～204、あるいは東西に向くSK205・206が、調査区南寄りで検出された。いずれも凹凸なく整然と掘り上げた後、埋戻しており、墓の可能性がある。埋戻す際に遺物が混入しているが、木材の痕跡、供献品はまったく見られなかった。島畠溝が埋まった後につくられたものがあり、周辺から採集された遺物から、18世紀以降のものであろう。調査区の東北部でも土壙SK207～211が見つかっている。SK208・209・211は隅丸方形の掘形であり、底は凹凸がなく、埋土は埋戻しによるという共通性がある。土師器、須恵器の細片が出土している。時期決定は困難であり、下位層準の遺構である可能性もある。

SD209：調査区南端で発見された坪境溝である。出土遺物の大半は近世・近代の国産陶磁器、屋瓦であるが、埋土の下層からは15世紀頃の瓦質羽釜が見つかっている。周辺の例と同様、この坪境溝は区画整理事業直前まで踏襲されて、用いられていたものだろう。

井戸は調査区南寄りで5基検出された(SE201～205)。SE204からは縦板材からなる井戸枠が発見された。この井戸とSE203・204の埋戻し土からは18世紀後半の国産陶磁器が発見された。

以上の遺構は、調査区南端の坪境溝の周辺に集中する傾向がある。

3)まとめ

本地区の調査では旧石器～江戸時代までの遺構・遺物を検出することができた。各時期の成果について、以下で順に述べる。

i)旧石器時代

長原15層基底面や16A層上面で調査が行われた。長原16Bi層では8.6万年前と推定される吾彦火山灰層が含まれていることから[趙哲済2001]、上記の足跡化石はそれより新しいことになる。調査当時は長原遺跡で1・2例目であったが、現在では足跡化石は10個所近くで見つかっており、長原遺跡西地区に当るNG96－76次調査では長原17Biii層からナウマンゾウの臼歯の化石も出土している[大阪市文化財協会2001a：pp.107－126、趙哲済・樽野博幸1997]。ナウマンゾウなどの大型哺乳類はヒトにとっては狩猟対象動物である。今後は、ヒトの痕跡に注意を払わなければならない。

なお、長原13層準から出土した旧石器は近隣調査地に比べ、非常に少ないのが特徴である。上位の地層に削剥されたことも考えられるが、本来どの程度存在したかはわからない。

ii)縄文～弥生時代

NG91－1次調査では縄文時代の石器ブロックが検出されたが小規模なものであった。

弥生時代の遺構としては南北に延びる2条の水路がある(図235)。特に、SD902はこれまで「川辺2号用水」と呼ばれてきたものである[大阪市文化財協会1995：pp.414－415]。一方、その東側のSD901は「川辺1号用水」である(註1)。いず

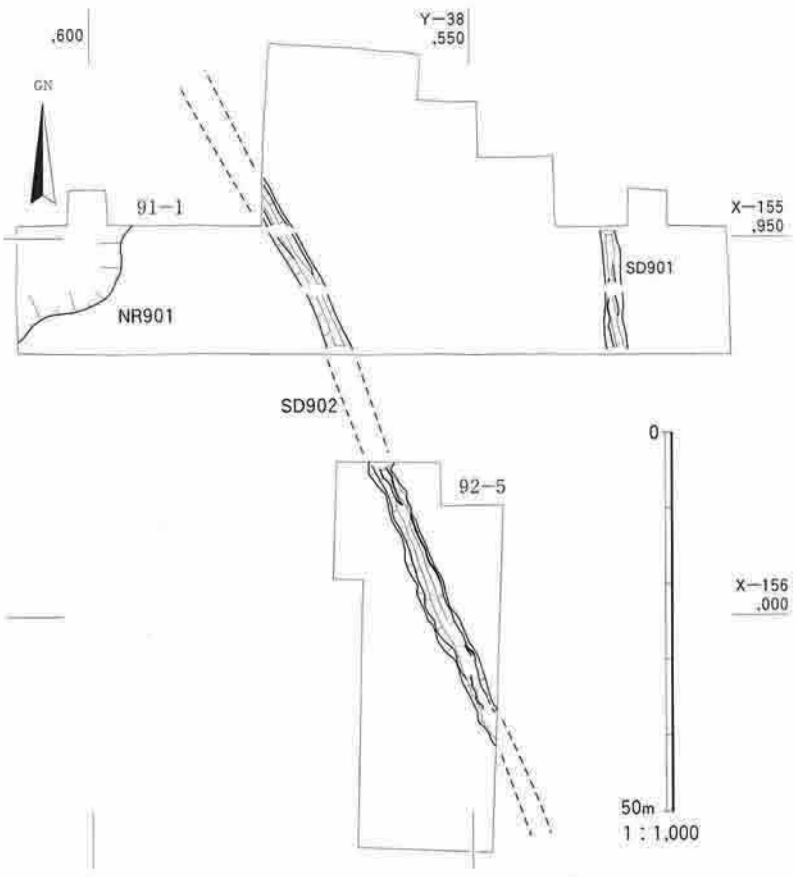


図235　NG91－1・92－5次弥生時代遺構配置図

れの地点でも両側に土手を築いているのが確認されている。また、周辺の調査成果から、この水路は台地の傾斜面を、斜めに切るようにして、400m以上にわたって直線的に伸び、調査地の北西にある谷地形に連なる大規模な水路であることが判明している。これらの水路によって灌漑された水田は未発見であるが、西川辺川から導水して西側の浅い谷(NR901)に存在した水田に水を供給していたのであろう[大庭重信1999]。

iii)古墳時代以後

古墳は全部で5基検出された。これらの古墳は南から北に張出した低い舌状台地上に築かれており、長原古墳群の中心部が造られた台地とは浅い谷によって隔たっている。この台地上に17基の古墳が確認されたことになり、今後の調査によってさらにその数が増すことを考えれば、長原古墳群の中の南東部の一群としてとらえることができよう。もっとも規模が大きい**長原183号墳**は現在のところ、台地の先端部、この一群の最も北に位置している。

古墳時代末から飛鳥時代になると、古墳の間を縫うように何条もの水路が南北に延びる。近隣で飛鳥時代の水田自体は見つかっていないものの、水田開発が盛んになってきたことを示すものであろう。

(寺井)

註)

(1)[大庭1999]では本節の**SD901**を「川辺2号用水」、**SD902**を「川辺1号用水」と呼び、[大阪市文化財協会1995]と逆であるが、ここでは初出の[大阪市文化財協会1995]に従った。

第３節　NG93－１次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではNG89－48・92－27・92－53・92－63・93－1・94－83次調査を報告する(図236)。近隣ではNG82－41次調査などで弥生時代前期にさかのぼる水田が検出されており、河内平野の水稲農耕を考える上でも重要な地点として知られている[大阪市文化財協会1999a]。

NG89－48・93－１次調査は大和川の堤防のすぐ北側に位置する。調査の結果、後期旧石器時代の石器ブロックや弥生時代中期前葉に廃絶する水田、古墳時代の集落関係遺構などが検出された。

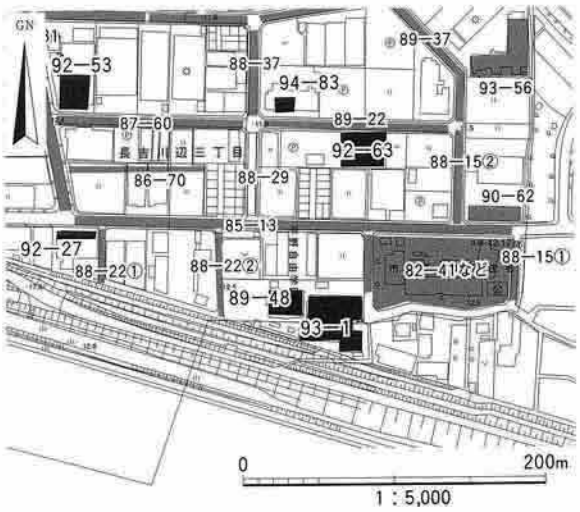


図236　NG93－１次などの調査地位置図

NG92－27次調査は試掘調査で縄文時代の地層が認められたため、石器遺物の有無を確認することを目的として、幅１m、長さ15mのトレンチを設定して本調査を行った。調査の結果、後期旧石器～縄文時代の地層は残存していたものの、石器遺物は出土しなかった。

NG92－53・92－63次調査は小規模な調査で、検出した遺構・遺物は少なかった。NG92－63次では坪境溝が検出された。

NG94－83次調査は試掘で後期旧石器～江戸時代の地層が良好に残っていることが確認されたため、建物の基礎の範囲に限って調査が実施されることになった。その結果、庄内式期や古墳時代中期の遺構・遺物に加え、後期旧石器～縄文時代中期の石器ブロックが検出された。

２）調査の結果

ｉ）層序

NG93－１次で観察した層序を示す(図237・表29)。長原２～７層はきわめて薄く断片的で、長原８～12層が総じて１m近くの厚さを有する。隣接するNG89－48次調査地でも同様の地層が広がっていた。水田の作土である長原8Cii′層(図237の第９層)は調査地の東半に分布する。

ii)遺構と遺物

ａ．旧石器～縄文時代の遺構

NG89－48次調査

調査地南東部で長原13層に相当する地層において、ナイフ形石器２点を含む50点の石器遺物のブロックが検出された(図238・図版32上)。直径約３mの広がりをもち、最大の高低差が0.3mあることから、擾乱を受けている可能性が高い。石器はいずれもサヌカイト製で、２点のナイフ形石器は典

表29　NG93－１次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0	現代盛土	60					近・現代
2	1	暗灰黄色砂礫混りシルト	10	作土				
3	2	オリーブ褐色砂礫混りシルト	＜5	作土				江戸時代
4	8A	浅黄色シルト混り細粒砂	10	水成				弥生時代
5	8A	灰黄色極細粒砂質シルト	5	水成		←SK801		
6	8B	灰オリーブ色シルト混り砂礫	20～40					
7	8Ci	オリーブ色含シルト砂礫・灰色極細粒砂混りシルト・浅黄色砂礫	20～60	水成				
8	8Cii	明黄褐色極細粒砂質シルト	10～20	水成		←水田畦畔		
9	8Cii'	灰色粘土質シルト	15～20	作土				
10	9A	黄灰～黒褐色シルト質粘土	5～25	古土壌				
11	9B	黒褐色シルト質粘土～粘土	10					縄文時代
12	9C	黄灰色シルト質粘土	5～10					
13	10～12	黄灰色含極細粒砂粘土質シルト	15				サヌカイト剥片・石鏃	
14	13A･B	黄灰色粘土質シルト	20～25				サヌカイト剥片・スクレイパー	旧石器時代
15	13C	灰～暗灰色シルト質粘土	15					
16	14	灰色シルト質粘土	10～30					
17	15	緑灰色含砂礫粘土質シルト～粘土	＞70					

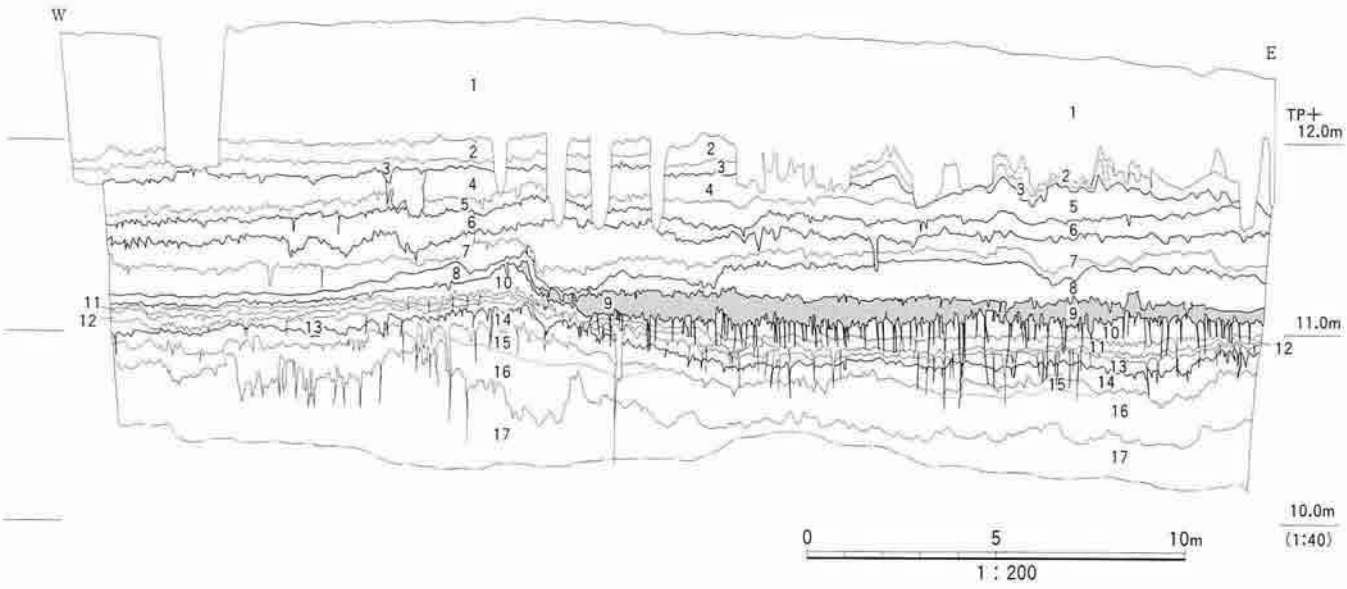


図237　NG93－１次北壁断面図

型的な国府型ナイフに属するものではないと考えられる。

また、長原9C～12層が凝縮した地層から、縄文土器２点、石鏃４点、サヌカイト剥片４点が出土した。

NG93－１次調査

旧石器～縄文時代の石器ブロックが検出され、石器遺物が多く回収された(図239)。

旧石器時代の石器やサヌカイト剥片は、調査区の北西部に集中する傾向にある。図237の第14層(長原13A・B層)上部でサヌカイトフレイクが９点、下部でサヌカイト剥片およびスクレイパーが各１点出土した。これらの石器は小規模ながらブロックを形成していることから、石器製作に伴う遺物と考えられる。

第13層(長原10～12層)の長原12層に相当すると思われる部分から縄文時代前～後期の石鏃27点、

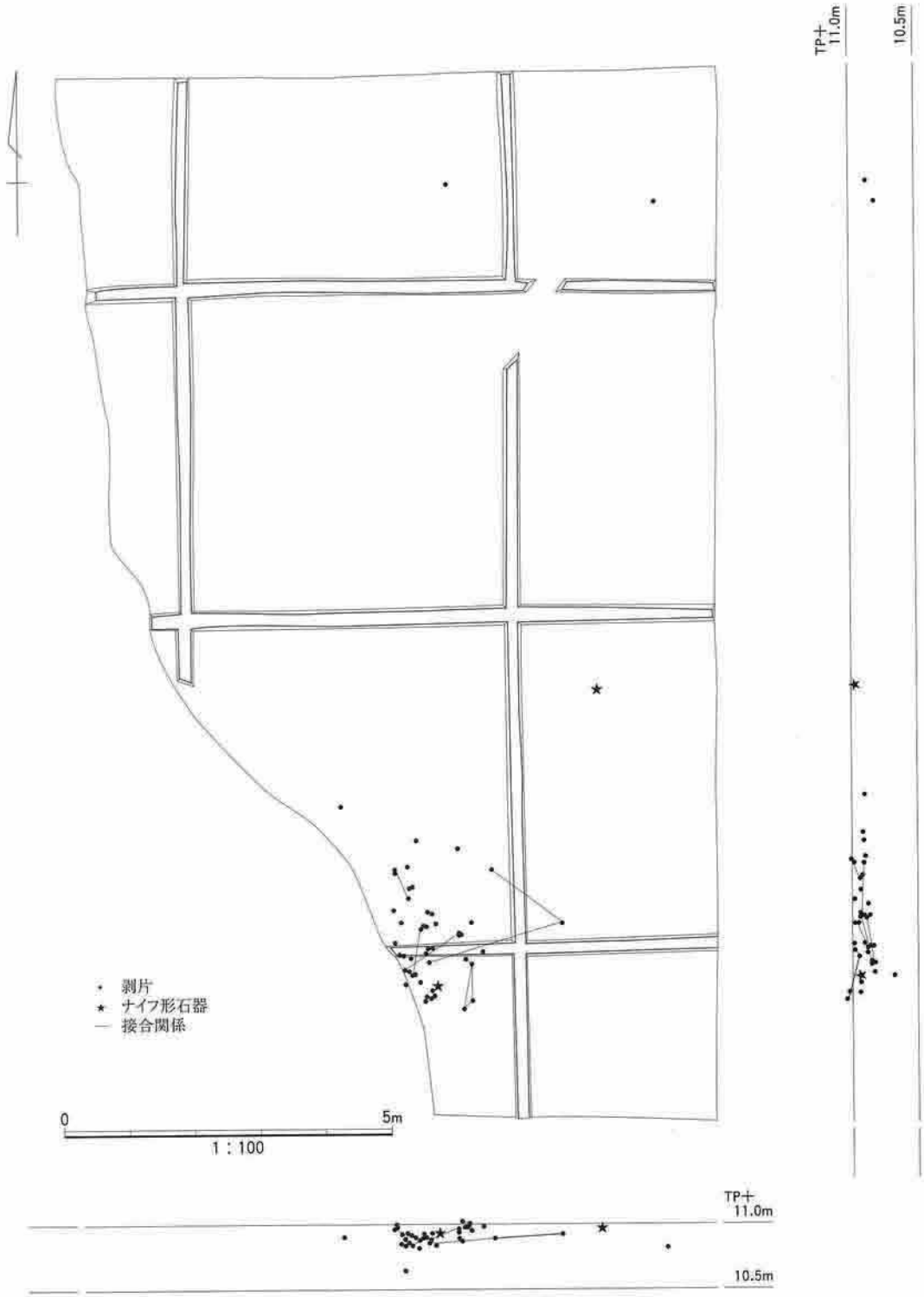


図238　NG89－48次長原13層石器分布図

サヌカイト剥片３点が出土した。石鏃の大半は基部の中央が大きく抉れた細身の凹基式石鏃で、石材はチャート１点以外はすべてサヌカイトであった。

NG94－83次調査

長原13A層に相当する地層から、調査地の東部を中心に直径約４ｍの範囲から11点のサヌカイト剥片が出土した(図240)。

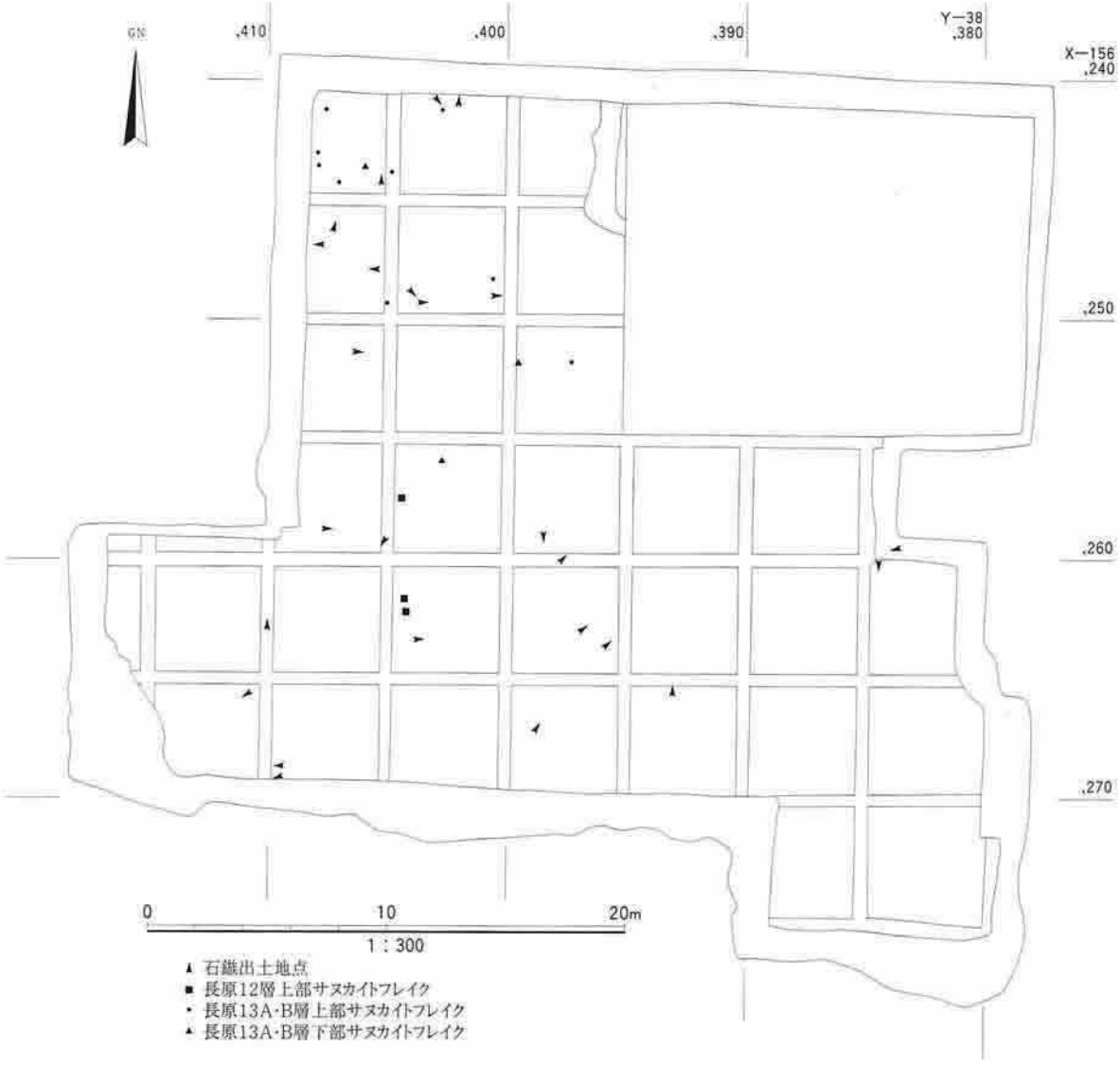


図239　NG93－1次石器分布図

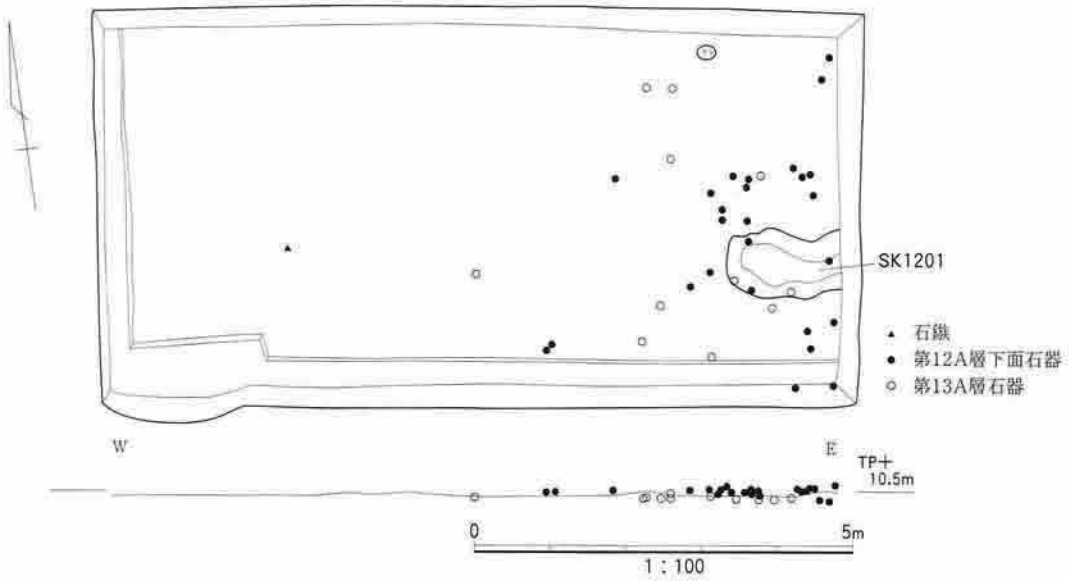


図240　NG94－83次長原13A・12A層石器分布図

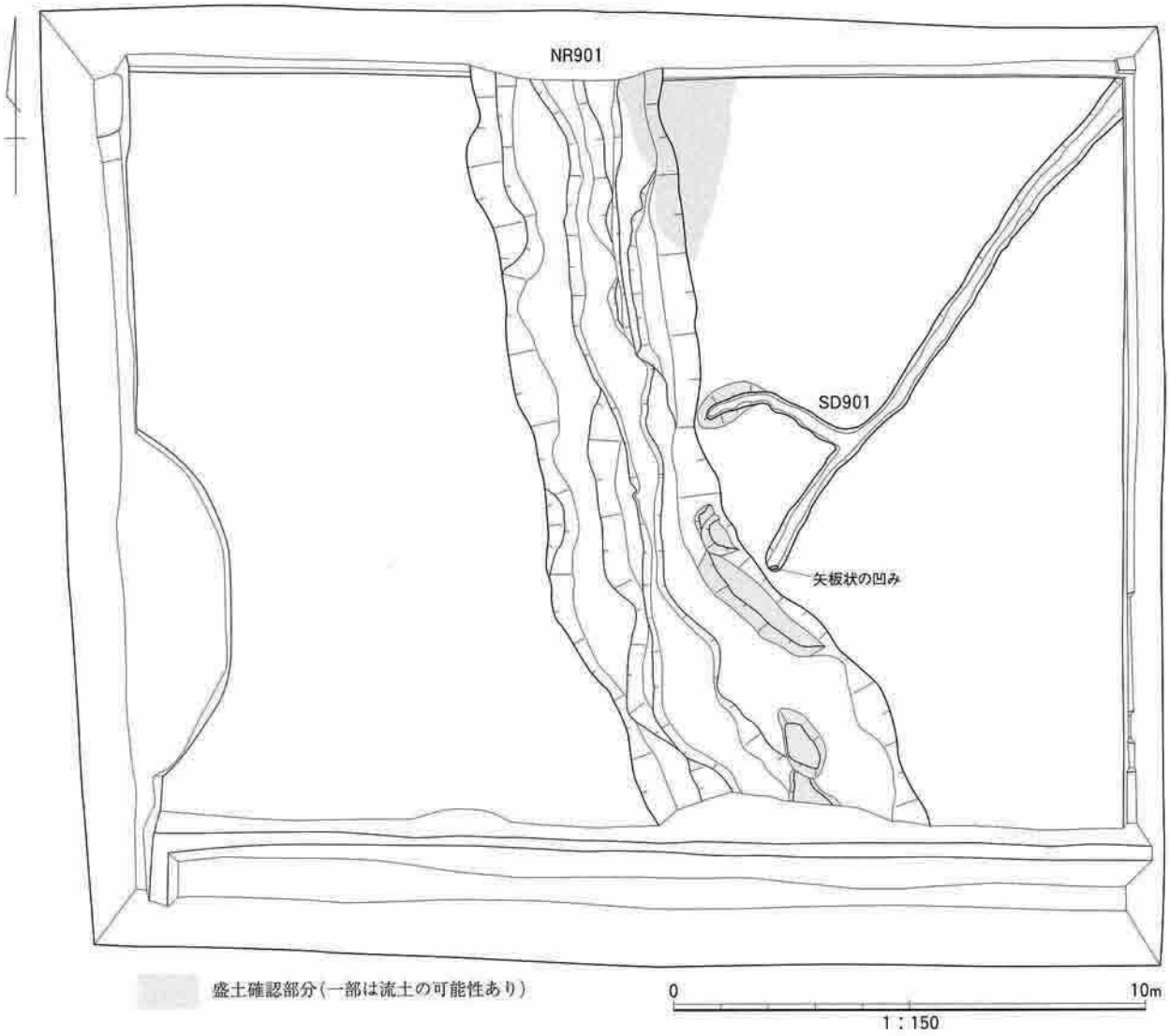


図241　NG89－48次弥生時代遺構配置図

また、調査地の東部の東西４ｍ、南北５ｍの範囲において、長原12A層に相当する地層から、調査時に27点のサヌカイト剥片が出土し、調査後の土壌洗浄では200点以上の剥片やチップを回収した。石核や未製品・製品が見られないことから、短期間の石器製作の痕跡と思われる。なお、この石器ブロックに重なる土壙SK1201からは、比較的大きなサヌカイト剥片が出土し、埋土中には多量のサヌカイトチップが含まれていたことから、石器製作に係わる遺構と思われる。

ｂ．弥生時代の遺構と遺物

NG89－48・93－１次調査

NR901：両調査地で見つかった(図241・242・245、図版32中・34上)。幅約４ｍ、深さ約1.6ｍあり、長原8Ci・ii層で埋没する流路である。両岸に長原9A～13層に由来する偽礫が落ち込んでいることから、本来土手があったと思われる。この流路は調査地の北側400ｍにわたって見つかっている「西川辺川」に該当する[大阪市文化財協会1995：pp.414－415]。

SD901：NG89－48次調査で検出された(図241・図版32中)。幅0.45ｍ、深さ0.15ｍの、平面プランがＹ字形を呈する溝である。NR901の盛土を切って、南西から北東に流れていることから、北東の



図242　NG93－１次弥生時代遺構配置図

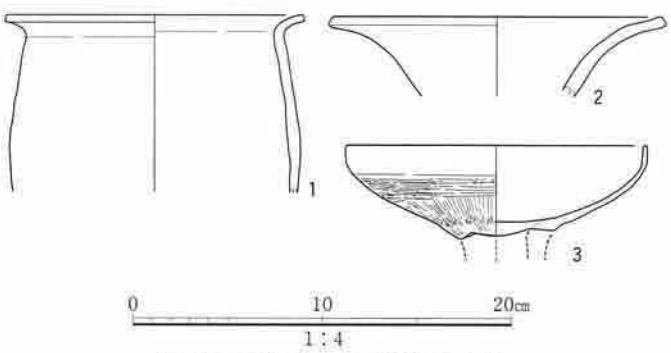
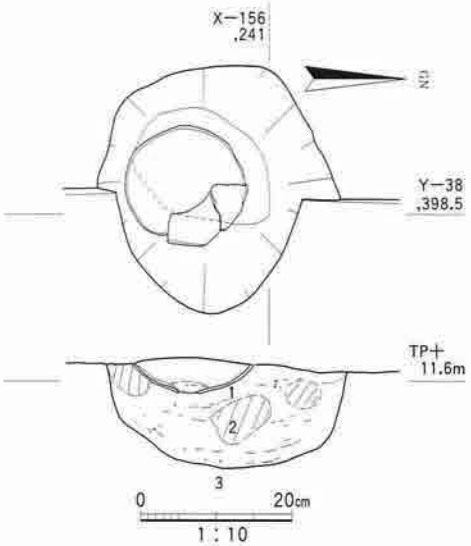


図243　NG93－1次出土弥生土器

水田上面（１・２）、SK801（３）



１：黒褐色砂礫混りシルト
２：にぶい黄橙色砂礫混りシルト
３：黒褐色砂礫混り砂礫

図244　NG93－１次SK801実測図

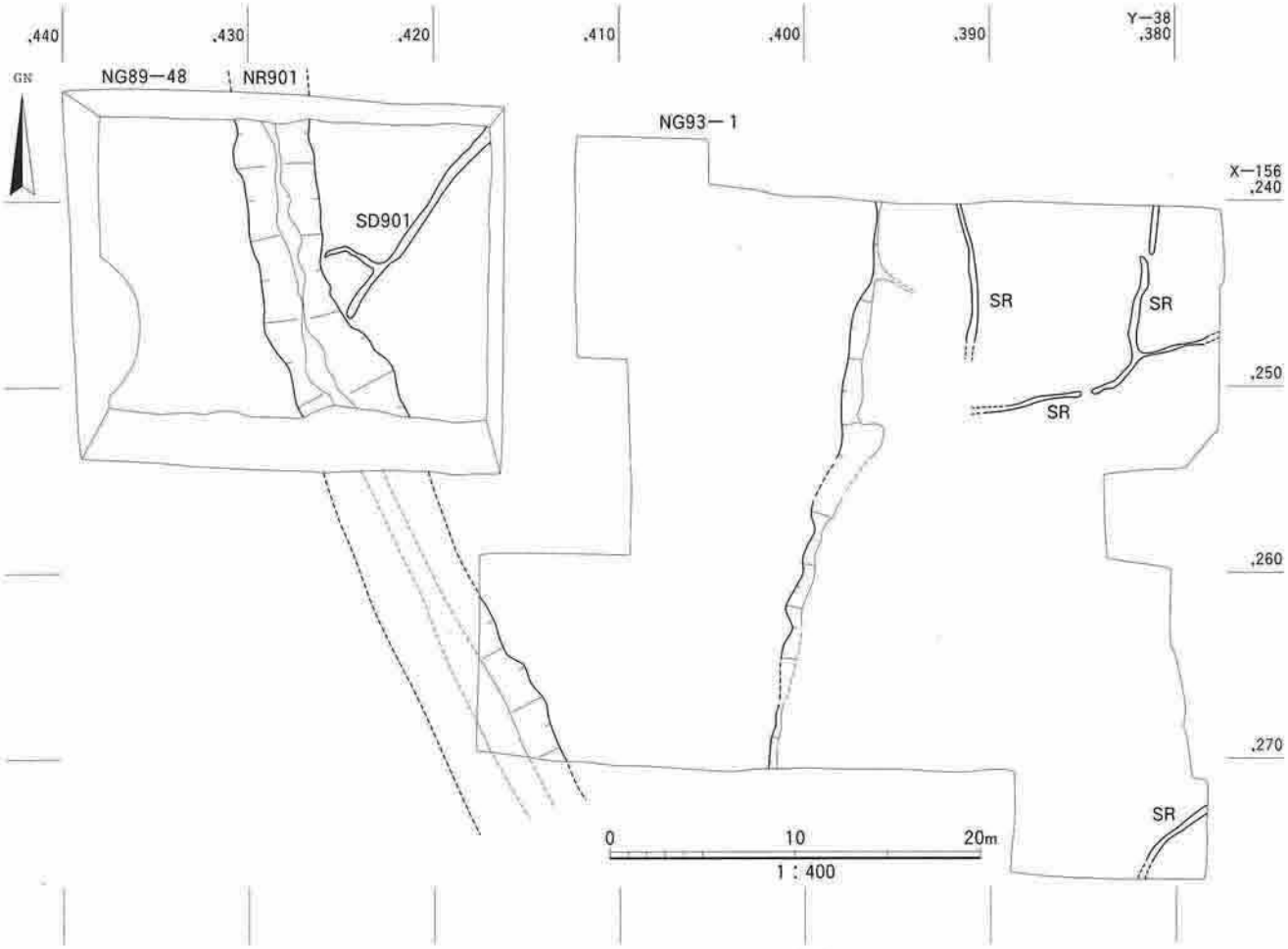


図245　NG89−48・93−1次弥生時代遺構配置図

水田に溝を送る溝と思われる。溝の底には掘削具の跡が無数に残っていた。長原式土器の細片が1点出土した。

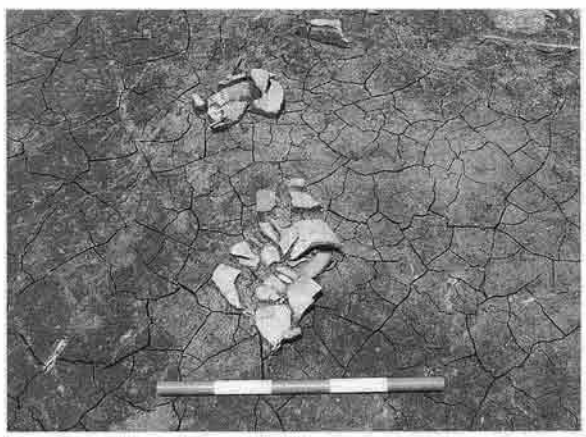


写真24　NG93−1次水田上面弥生土器出土状況

水田：NG93−1次調査地の中央以東に広がる(図242、図版33中・下)。水田の西側にはTP+11.25～12.0mの微高地があり、水田はこの微高地の東側に広がる緩やかな傾斜面に位置することになる。調査地北東では高さ0.15～0.2m、幅0.2mの畦畔が確認され、そこでは踏込みも多く見つかった。水田は長原8Ci・ii層に覆われている(図版33上)。微高地で長原9A層上面に密着して、弥生時代中期前葉(畿内第Ⅱ様式)に属する甕1や壺2が出土したことから(図243・写真24)、この時期が廃絶の時期と思われる。また、開田の時期については、NG82−41次調査などの成果も踏まえるなら、弥生時代前期中葉と推定されている[大阪市文化財協会1999a：p.34]。なお、1・2は器面の剥離が進んでいて、調整を観察することができなかった。

SK801：長原8B層の上面で検出され、位置は図242に示した(図244・図版34中)。直径0.4m、深

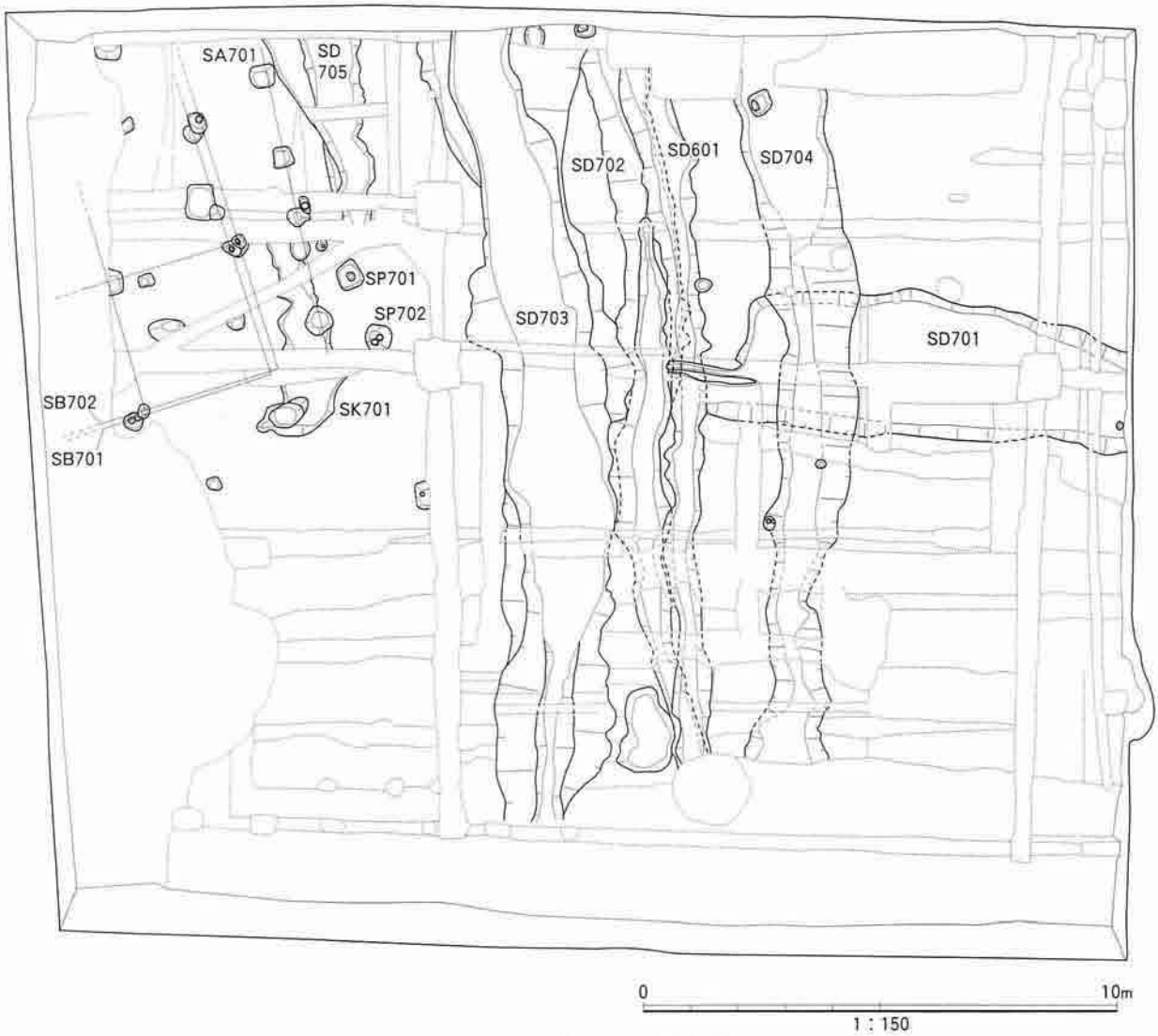


図246　NG89－48次古墳～奈良時代遺構配置図

さ0.15mで、埋土の上部で脚部を打ち欠いた畿内第Ⅳ様式の高杯3が出土した(図243)。3は縦方向のヘラミガキののち、横方向のヘラミガキが施され、口縁部はヨコナデで仕上げられる。

c．古墳時代の遺構と遺物

NG89－48次調査

掘立柱建物・柵・柱穴・溝が検出された(図246)。

SB701・702：調査地の北西で2棟重なって検出され、SB701の柱穴がSB702に切られている(図版32下)。建物はいずれも東西1間(2.9m)以上、南北2間(5.6m)以上で、SB702には床束と思われる柱穴が検出された。柱穴は直径0.3m程度の不整円形で、柱痕跡の直径は0.15m程度であった。

SA701：SB701・702の東側で検出された。4基の柱穴が約1.8m毎に北からやや西に振った方向に並び、柱穴は直径0.3m程度の不整円形であった。柱痕跡は見つかっていない。

SP701・702：一辺0.5m程度の隅丸方形に近い形態の柱穴で、深さが0.2m、柱痕跡の直径が0.15mある。両者の間隔は約1.8mあるが、建物としてほかに組合う柱穴は見つからなかった。

SD701：幅2.1m、深さ0.25mの東西方向の溝である。SD702・704に切られ、SD703につながる。

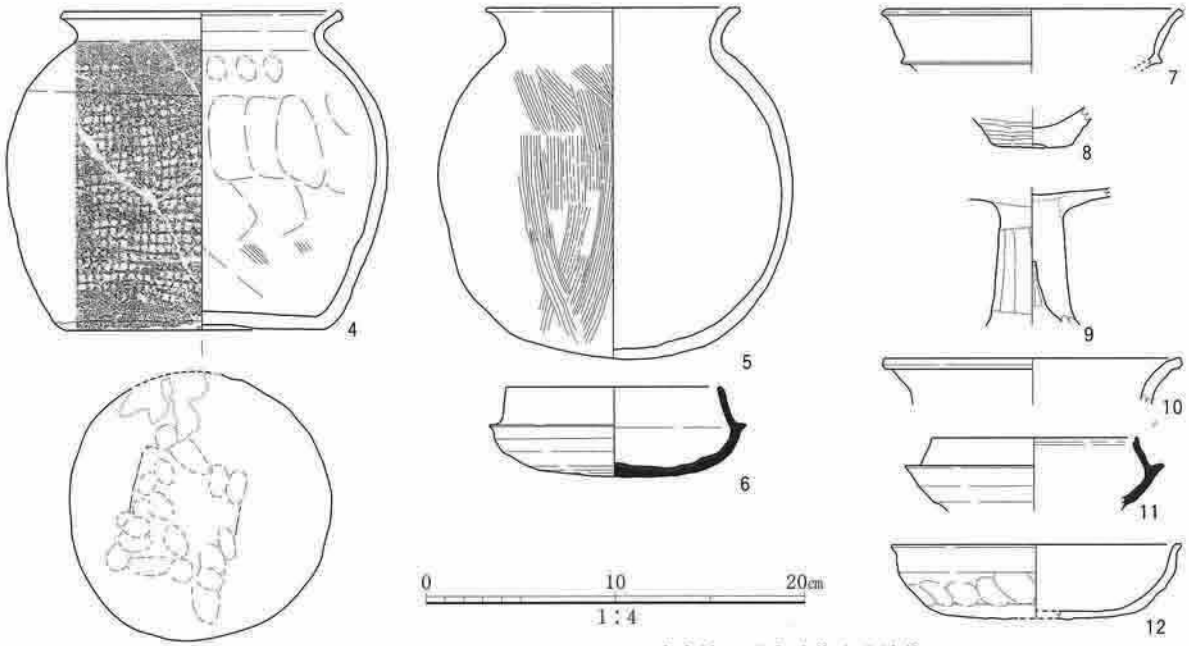


図247　NG89−48・93−1・94−83次古墳〜飛鳥時代出土遺物

SD703(4)、SE701(5)、SD707(6)、SD708(7〜9)、SD709(10・11)、SD602(12)

底では有機物のラミナを観察することができた。

SD702：SD703・704と同じく南北方向に延びる溝で、幅1.0m、深さ0.2mある。大半をSD601に切られる。

SD703：幅2.5m、深さ1.0mの南北方向に延びる溝である。下部には灰色中〜細粒砂の水成層が堆積する。出土遺物には5世紀後半から7世紀初頭までのものが含まれ、この中には韓式系土器平底深鉢4がある(図247・写真25)。4は完形で、頸部が締まることから平底の短頸壺と呼ぶべき形態でもある。外面には正格子タタキが施され、底部との境界にはヘラケズリが施される。格子タタキの凹部は一辺3〜4㎜の正格子で、凹み内には木目と思われる横方向の筋が観察できることから、木製のタタキ板で横方向に叩いたことが考えられる。また、底部には下駄跡と思われる凹みが残っているが、ユビオサエによって消されていた。



写真25　NG89−48次SD703平底深鉢(4)出土状況

SD704：幅1.7m、深さ0.15mの南北方向の溝である。

SD705：調査地の北西部で検出された、幅1.2m、深さ0.1mの溝である。

NG93−1次調査

長原2層基底面で掘立柱建物・井戸・溝などの遺構をが検出された(図248)。

SB703：調査地南東隅で検出された掘立柱建物で、柱間は東西1.3m、南北1.8mである。柱穴は直径0.2m前後で、柱痕跡は直径0.1mあった。

SB704：調査区北西隅で検出された掘立柱建物で、東西2間(3.4m)、南北2間(2.6m)以上ある。

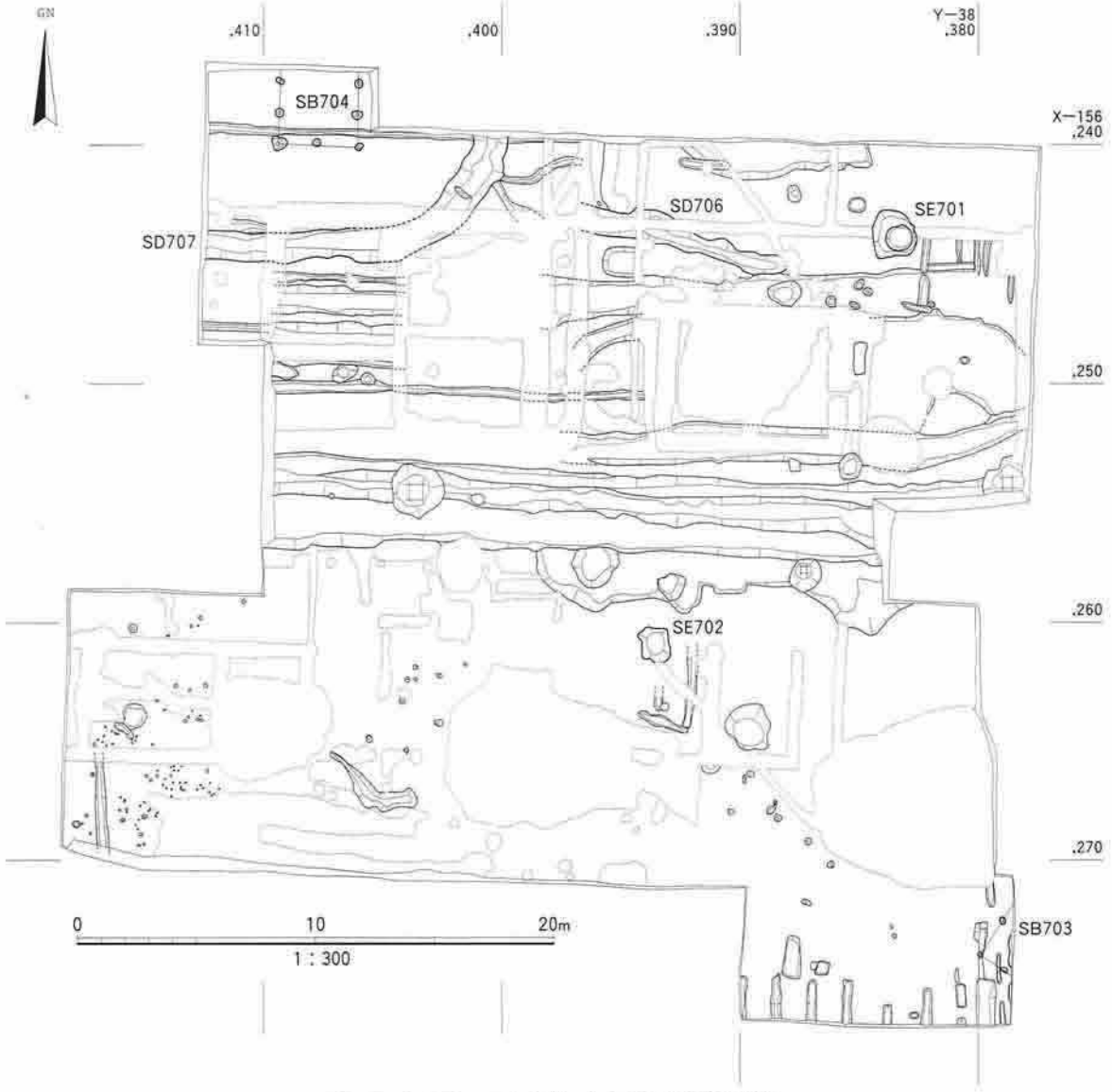


図248　NG93－１次古墳～江戸時代遺構配置図

建物の方向はほぼ正南北で、柱穴の掘形は一辺0.6mの方形のものや直径0.4m程度の不整円形のものがあった。

SE701：調査地北東隅で検出された井戸で、平面形が一辺1.5～1.8mの不整方形を呈し、深さが約1.2mある(図249・図版34下)。内部は黄灰色シルト混り砂礫、灰色砂礫混り粘土質シルトが堆積した後、黒褐色粘土質シルト、暗緑灰色粘土質シルトで埋戻されていて、最終的には水成の黒褐色砂礫混り粘土質シルトが堆積していた。底から約0.2m浮いた状態で土師器甕5が２つに割れて出土した(図247)。5は球胴の甕で、外面はハケで仕上げられる。

SE702：一辺約1.8m、深さ0.9mで、平面形が不整方形を呈する遺構で、井戸と判断した。掘形は東部が２段に掘込まれており、内部には下から黄灰色シルト混じり砂礫、オリーブ黒色シルト混り砂礫、黒色シルト混り砂礫が堆積していた。黒色シルト混り砂礫からは酸化焔焼成の韓式系土器の細片が出土し、埋土の状況からも古墳時代中期の井戸と思われる。

SD706：幅0.6～1.1m、深さ0.15mで、断面の形状がU字形を呈する東西方向の溝である。古墳時

代中期の土師器甕や壺が出土した。

SD707：幅1.6m、深さ0.3m前後の断面逆台形を呈する溝である。埋土からON46段階の須恵器杯身6や杯蓋が出土した(図247)。6は口縁端部が丸く仕上げられる。

NG94－83次調査

長原7Biii層基底面で南北方向の溝SD708・709が検出された(図250)。

SD708：幅0.9～1.5m、深さ0.3m前後あり、断面は逆台形を呈する。また、下端にそって三日月形の窪みが多数見られた。掘削具の痕跡と思われる。ここから土師器甕7・8、高杯9が出土した(図247)。7は山陰系の二重口縁を有する甕で、8は胎土に角閃石を多量に含み、外面に粗いタタキメを残す甕の底部である。9は脚外面には縦方向のヘラミガキ、内面にはシボリメが残る。これらの遺物は庄内式期に位置づけられる。

SD709：南北方向に延び、幅0.5～1.1m、深さ0.3mある。南側でSD701を切る。土師器甕の口縁部10やTK47型式に該当する須恵器杯身11が出土した(図247)。

d．飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG89－48次調査

SD601：幅1.1m、深さ0.2mの南北方向に延びる溝である(図246)。長原6層に相当すると思われる暗黄灰色砂礫混り粘土質シルトで埋まっていた。

NG94－83次次調査

SD602：幅0.7m、深さ0.1mの南北方向の溝である(図250)。溝内には長原6B層に属する灰色砂礫混りシルトが堆積しており、北端近くからは飛鳥Ⅲに位置づけられる土師器杯C12が出土した(図247)。12は内側の器表面が磨滅して暗文の有

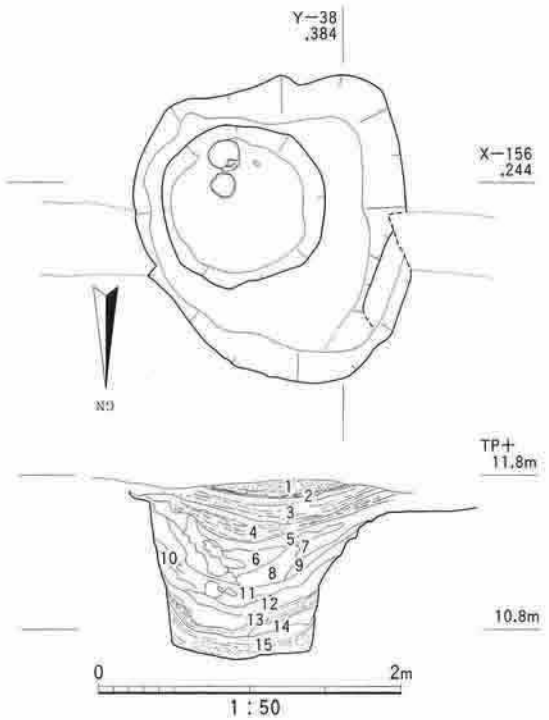


図249　NG93－1次SE701実測図

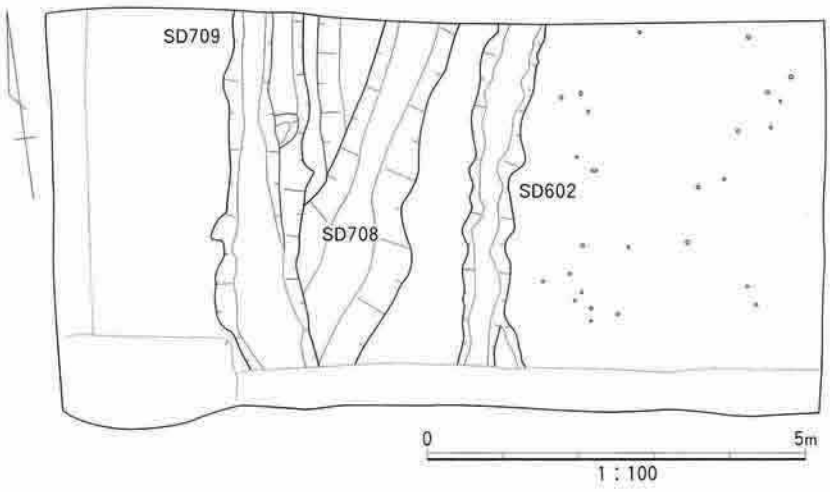


図250　NG94－83次古墳～飛鳥時代遺構配置図

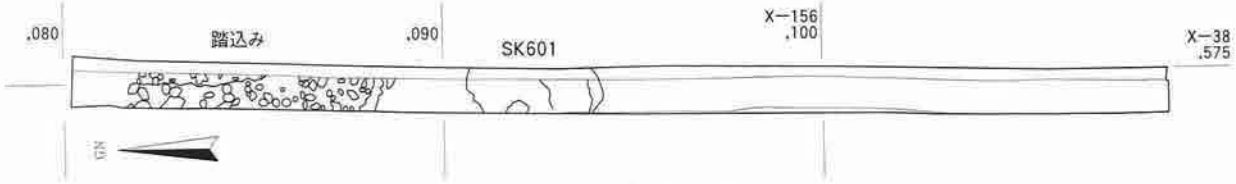


図251　NG92−53次古代遺構配置図

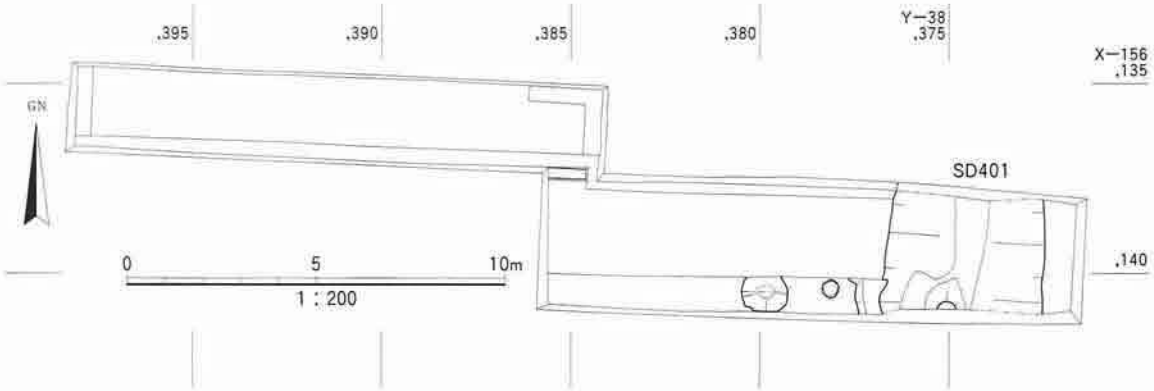


図252　NG92−63次中世遺構配置図

無を確認することができなかった。

NG92−53次調査

土壙１基と踏込み群が検出された(図251)。いずれも時期を決定する遺物が出土しなかった。長原６～７層準の遺構と思われる。

SK601は南北3.6m、深さ0.3mあり、東と西は調査区外に広がる。

踏込み群は北側に広がる。上位に本来作土層があったためと思われる。

ｅ．中世の遺構と遺物

NG92−63次調査

SD401：中世の南北方向の坪境溝である(図252)。幅約４m、深さ1.1mある。瓦器などの中世の遺物が出土した。

３)まとめ

まず、NG89−48・93−１次調査で弥生時代の水田が検出されたことが特筆される。この水田は瓜破台地東斜面から派生した沖積微高地上に立地しており、東・西川辺川に挟まれた緩斜面に営まれている(図253)[大庭重信1999]。東隣のNG82−41次などでも水田が検出されており、総面積は13,000㎡に達する。本節で報告したように、畿内第Ⅱ様式の土器が水田上面に貼り付いて出土していることから、弥生時代中期前葉には廃絶していたようである。

古墳時代では集落関係の遺構が検出された。東隣のNG82−41次調査地では長原106・107・208号墳が検出されており[大阪市文化財協会1999b]、それらの時期が長原古墳群の３期に位置づけられることから、集落の方が若干古くなる。

なお、本節での報告対象調査では石器遺物が多量に出土しているが、整理作業が間に合わず、十分に報告することができなかった。いずれ報告する機会を作りたいと思う。　　(寺井)

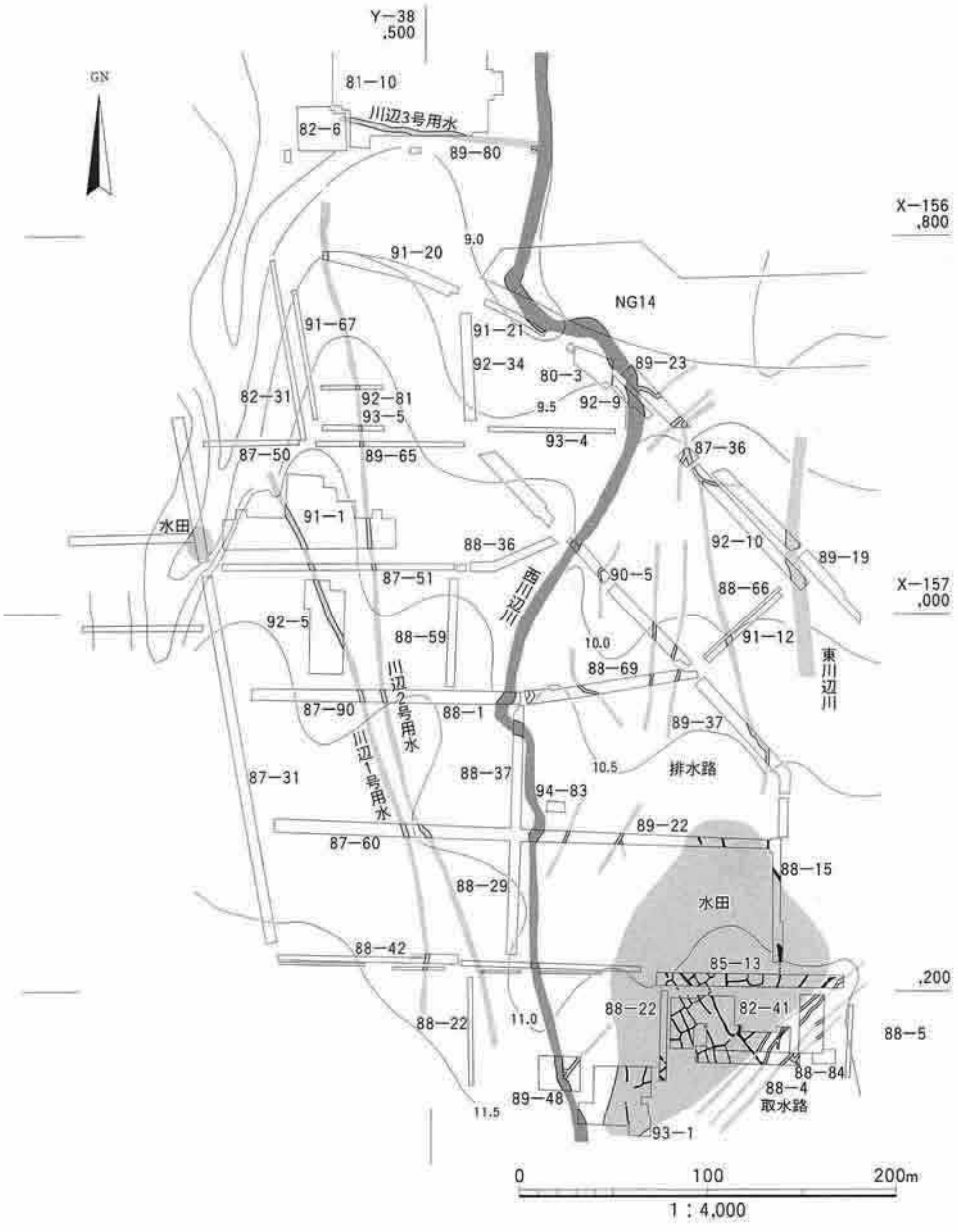


図253　NG93－1次調査地周辺の水田と遺構([大庭1999：図81]を一部改変)

第４節　NG86－３・64次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではNG86－3・64次調査およびNG85－63・87－36・93－56次調査を報告する(図254)。これらの調査地は長原遺跡東南地区でもっとも東南隅に当り、特に旧石器のブロックが検出されることが多いことで知られている。また、隣接する八尾南遺跡ではYS87－８次調査などで古墳時代中期の古墳や集落関係の遺構が多く検出されている[八尾市文化財調査研究会1995：pp.1－130]。

NG86－3・64次調査は住宅供給公社による共同住宅建設に伴って行われた調査である。調査の結果、旧石器時代の石器ブロックが検出された。

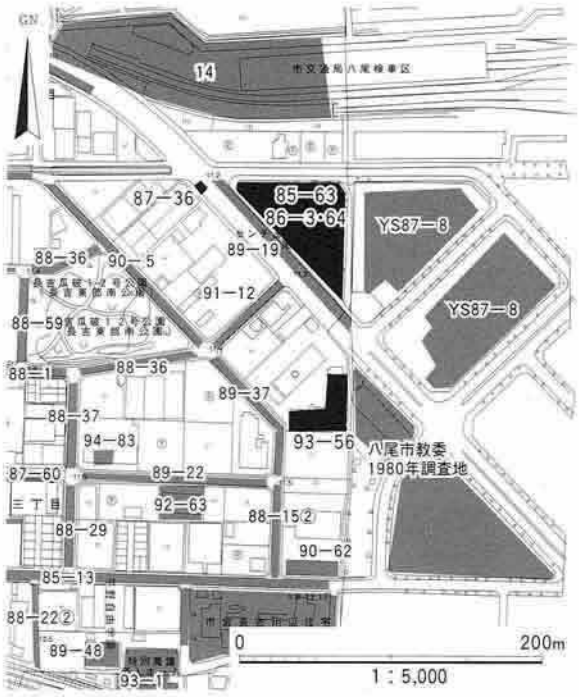


図254　NG93－１次などの調査地位置図

表30　NG86－３・64次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	現代作土	20					近・現代
2	2	黄褐色砂礫混りシルト	20	作土			近世以降の陶磁器・瓦	江戸時代
3	4B	灰オリーブ色シルト	20	作土			瓦器・土師器	鎌倉時代
4	6	暗褐色シルト質粘土	10	作土			土師器・須恵器	奈良時代
5	8	暗灰黄色粘土質シルト	20					弥生時代
6	9A	黒褐色シルト質粘土～粘土	5～10					
7	9B	灰黄褐色シルト質粘土	15～20				植物遺体	縄文時代
8	9C	黒褐色シルト質粘土	5				石鏃	
9	10・11	灰～暗灰黄褐色粗粒砂質シルト	40					
10	12Bii	暗灰黄色粘土質シルト	5～10				(火山灰の２次堆積)	
11	13A	明黄褐色粘土質シルト	10～15		上面から乾裂		サヌカイト剥片など	旧石器時代
12	13B	にぶい黄色シルト質粘土	5～10					
13	14	灰オリーブ色シルト	>40					

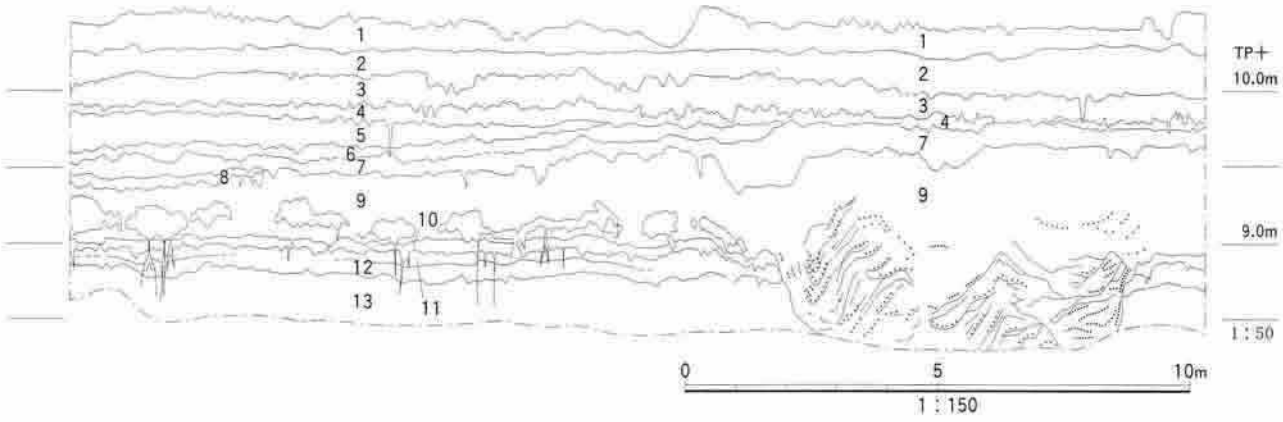


図255　NG86－３・64次南西壁断面図

NG85－63次調査はカルバート(暗渠)建設に伴って行われた調査である。ただ、この調査終了後にNG86－3・64次調査が引き続き同一敷地内で行われたため、調査地が重複することになった(図258)。

NG87－36次調査は飛行場南幹線下水管渠築造工事に伴って行われた。67㎡と狭い調査ではあったが、縄文時代晩期から弥生時代前期の溝や、古墳時代中期の土壙墓と思われる遺構が検出された。

NG93－56次調査は試掘調査(NG92－78次)で長原2～12層の地層が良好に残っていることが確認された。当初の予定では旧石器時代の調査に照準を絞り、東西2本、南北2本の平行するトレンチ(幅3m)を設定し、GL－1.5mまで掘削することになっていた。しかし、予想外に古墳時代中期の遺構がまとまって検出されたことから、面的な調査が必要になり、平行するトレンチの間の未調査部分も調査範囲に加えることとした。その結果、古墳時代中期の集落構造を考える上での重要な成果を上げることができたが、弥生時代以前の調査は残された期間がわずかであったことから、不十分になった。なお、古墳時代集落の成果については[京嶋覚1994]で一部紹介されている。

2)調査の結果

i)層序

NG86－3・64次調査では、南西壁で地層の観察を行った(図255・表30)。

NG93－56次調査では、東西方向の断面で地層の観察を行った(図256・表31)。重機掘削で現代作

表31　NG93－56次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	現代作土および床土						近・現代
2	2	暗褐色砂質シルト	2～5	作土				江戸時代
3	3	淡灰色砂質シルト	＜5			▼SK301～304		室町時代
4	3 or 4	灰色砂混り粘土質シルト	※			↓島畠の溝		
5	7B	暗褐色砂混り粘土質シルト	＜5					古墳時代
6	8Ci	黄褐色細～粗粒砂	50～60	水成				弥生時代
7	8Cii	黄褐～黄灰色粘土質シルト～粘土	20～30	水成		←踏込み		
8	9A	灰色含砂粘土	5～15	暗色帯				
9	9Bi	灰色細～粗粒砂	30～40	水成		←SD901		縄文時代
10	9Bii	灰色粘土質シルト	9～20					
11	9Ci～iii	暗灰色粘土	20～30					
12	10～12	灰色含砂粘土質シルト	10～20					
13	10～12	黄灰色粘土質シルト	10					
14	13B	灰色粘土質シルト						旧石器時代

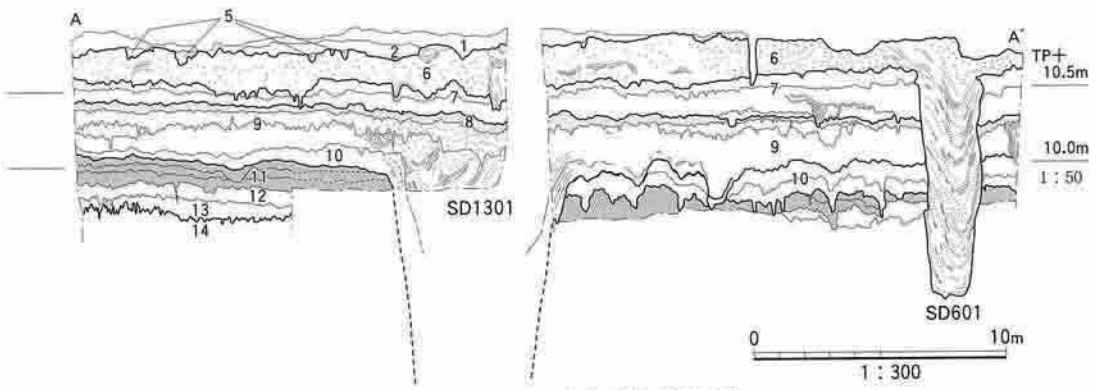


図256　NG93－56次東西方向断面図

土まで除去したため、それ以下の地層を記録している。長原7B層に相当する第５層は、調査地の西部では遺構の埋土でしか確認できないが、東部の北端では薄く遺存する。下位層が砂である部分は砂質シルトである。

ii)遺構と遺物

a．旧石器時代の遺構と遺物

NG86－３・64次調査

西側調査地の北東端において、長原13A層(図255・表30の第11層)中で旧石器のブロックが検出された(図257・図版35)。このブロックから約40点のサヌカイト製の石核・剥片と多数の小円礫が出土した。石核・剥片はブロックの中央では非常に密に分布し、周辺にいくにつれて徐々に疎になる。小円礫の分布もほぼ同様で、約２m四方の範囲に集中する。

個々の石器の出土状態はさまざまで、ほぼ水平のもの、垂直に立ったもの、斜めに傾いたものが認められる。垂直分布は石核・剥片だけを見ると比較的水平に近く分布するが、小円礫を加えると20cm前後の幅がある。小円礫は本来、当地の長原13A層には含まれないもので、しかも小円礫の分布が石核・剥片のそれと一致することから、両者は有機的に関連して、ひとつのブロックを形成していたと判断できる。

石核・剥片の内訳は、縦長剥片石核・縦長剥片・剥片素材石核・横長剥片で、石核には原面打面を

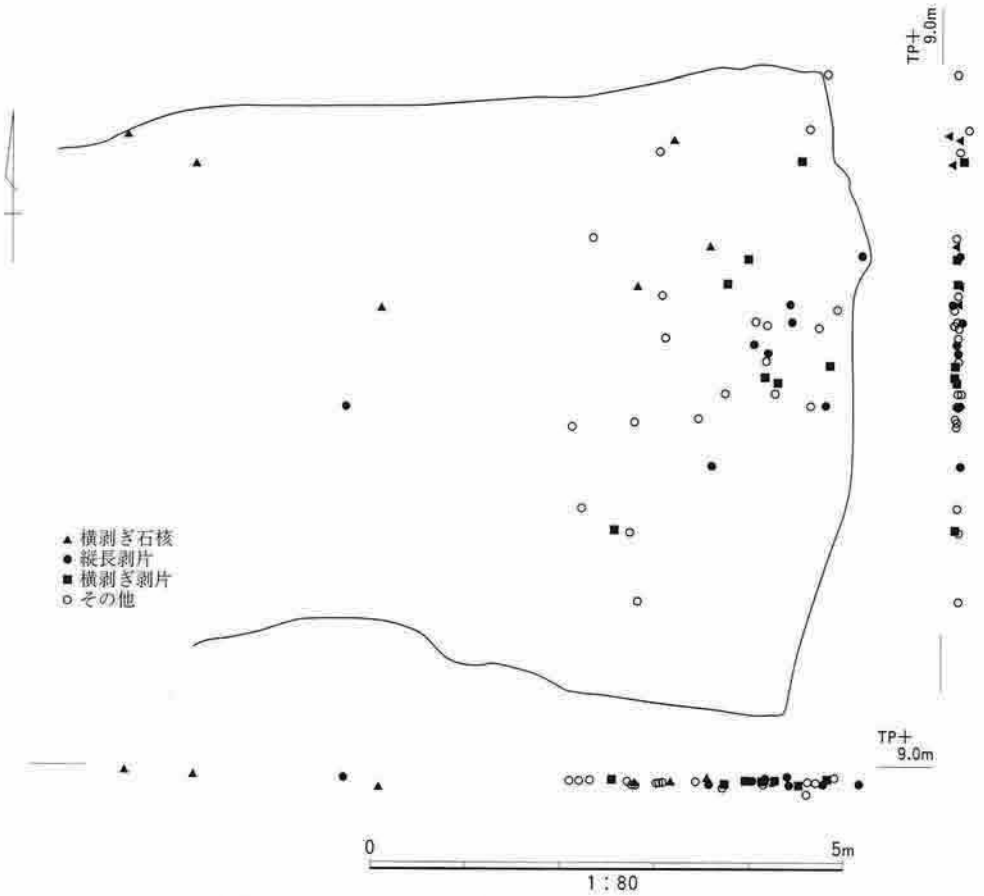


図257　NG86－３・64次旧石器平面・垂直分布図

もつ円錐形のものと剥片素材の2種がある。前者の石核はブロックの中心部からやや離れた位置で出土したが、それに対応する剥片はブロック中心部に見られる。剥片素材石核と縦長剥片などはおおむねブロック中心部付近に分布する。なお、石核・剥片はすべてサヌカイト製であるが、いわゆるハリ質のものは1点も含まれない。また、ブロック内には若干の炭が認められた。

石核・剥片の観察から、連続的に貝殻状あるいは縦長の剥片を剥離する技術とともに、剥片素材の石核を用いた横長剥片剥離技術の存在が予想される。また、石核やかなりの数の剥片の打点周辺にはサヌカイトの原面が残っており、剥片剥離が原面打面の石核から行われたと考えられる。

b．縄文時代の遺構と遺物

NG86－3・64次調査

長原12Bii層（図255の第10層）上面で自然流路**NR1201**、長原9C層（図255の第8層）上面で**NR901**が検出された（図258・図版36）。前者は幅7.5m、後者は幅4.0m、深さ1.5mあり、いずれも埋土は上位の砂で、遺物は出土せず、流木と植物遺体が見つかったに過ぎない。

NG87－36次調査

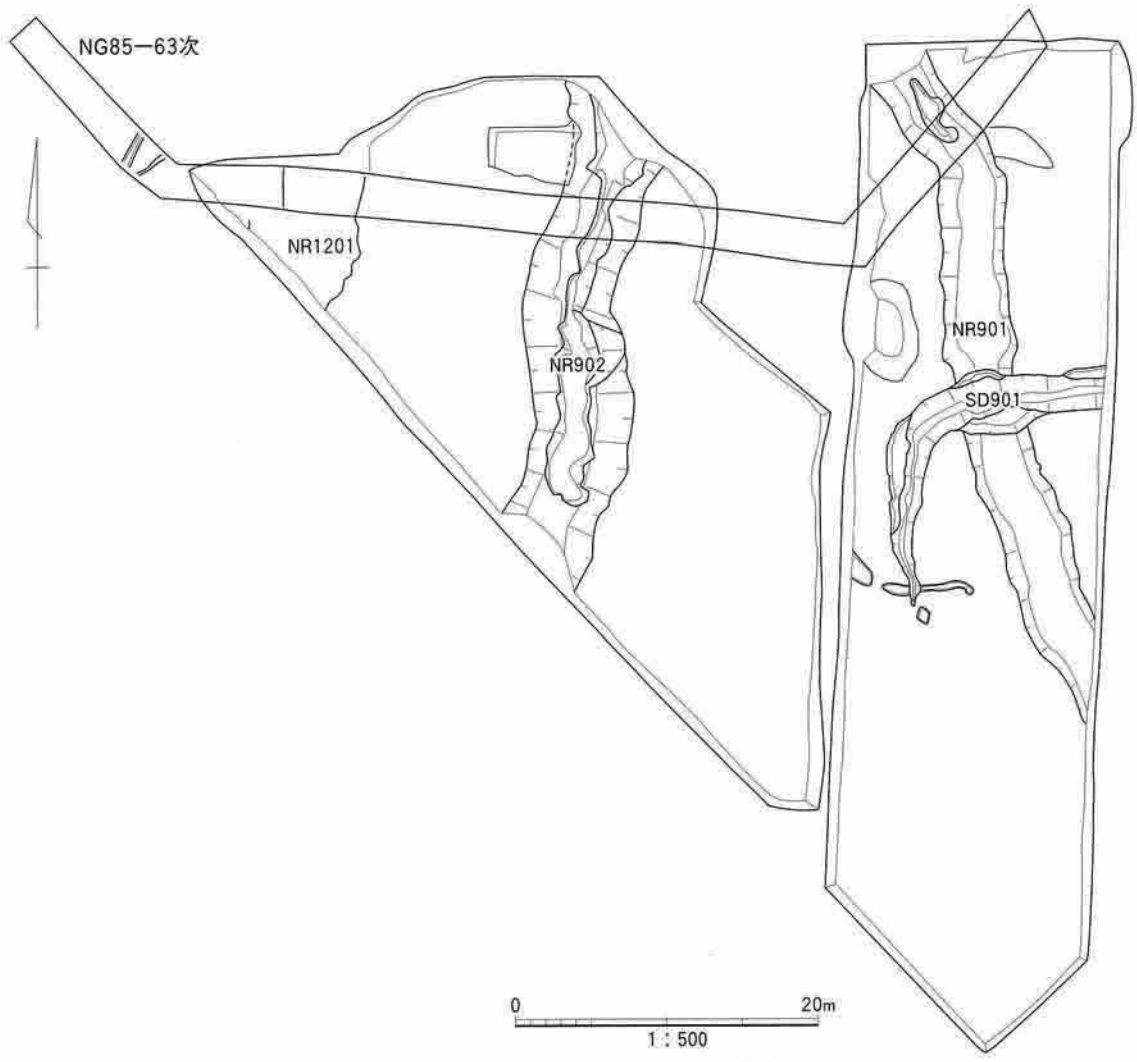


図258　NG86－3・64次縄文～弥生時代遺構配置図

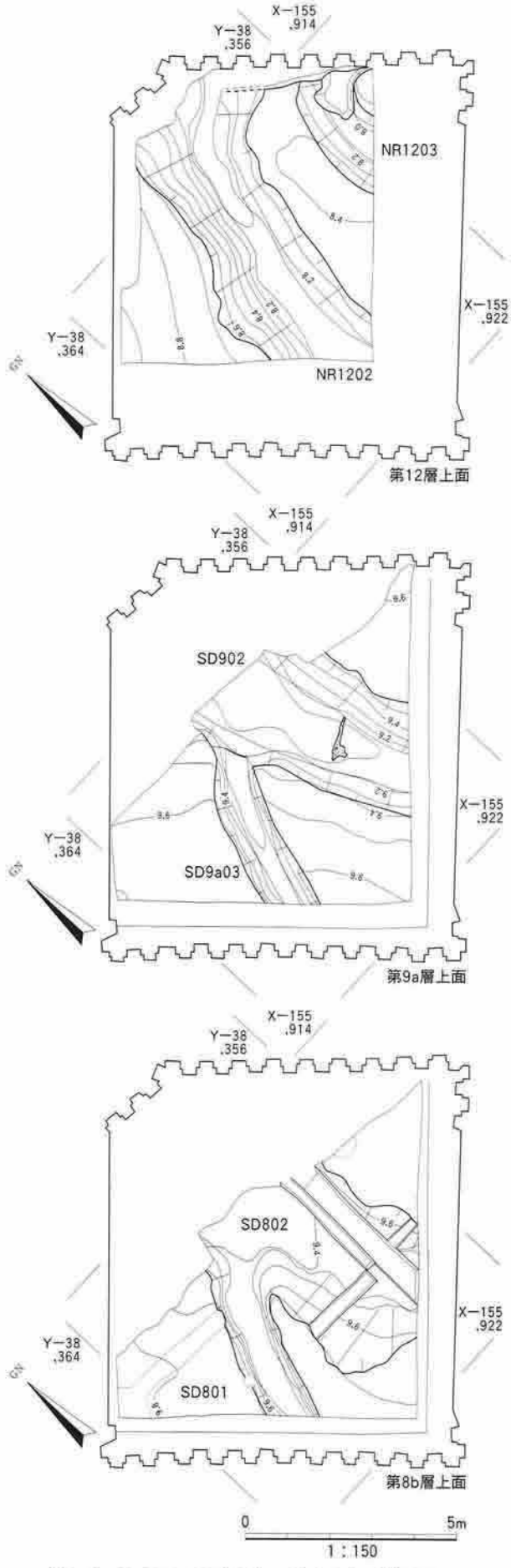


図259　NG87−36次縄文〜弥生時代遺構配置図

長原12B層と思われる灰白色粘土質シルト層の上面で自然流路NR1202・1203が検出された(図259)。NR1202は幅2.0〜2.5m、深さ0.8mあり、黒色粘土質シルト〜シルトで埋まっていた。NR1203は幅1.2m、深さ0.4mある。

NG93−56次調査

長原9Bii層(図256の第10層)上面で南北方向の自然流路NR903が検出された。幅約7m、深さ約2mある。埋土の上部はにぶい黄褐色細粒砂、下部はにぶい黄橙色粗粒砂〜細礫で、長原長原9Bi層に該当する水成層で埋まっていた。なお、いずれも調査期間が十分残されていなかったために、平面図を作成することができなかった。

c．弥生時代の遺構と遺物

NG86−3・64次調査

長原9A層(図255の第6層)下面でSD901、同上面でNR902が検出された(図258、図版36中・下)。NR902は幅6.5m、深さ2.3mあり、長原8Ci層の砂礫層で埋まっていた。出土遺物はなかった。

SD901はL字状に曲がる溝である。最大幅4.0mで、深さは0.6mである。埋土はシルトや粘土で、長原式土器や畿内第Ⅰ様式と思われる土器片が出土した。

NG87−36次調査

長原9A層上面で溝SD902・903が検出された(図259)。SD902は幅2.5m、深さ0.5mの溝で南北方向に延びる。SD903は幅1.0m、深さ0.3mあり、北側でSD902に合流する。いずれの溝も暗褐色粘土で埋まっていた。

NG93−56次調査

長原8Cii層(図256の第7層)上面では南東から北西方向に延びる自然流路NR801が検出された。幅2.5m、深さ1.5mで、長原8Ci層の水成

層で埋没していた。なお、調査期間が十分残されていなかったために、平面図を作成することができなかった。

d．古墳時代中期の遺構と遺物

NG93－56次調査

長原8Ci層によって形成された標高10.5～10.8mの微高地上で、掘立柱建物1棟、井戸3基のほか、土壙および溝といった多くの遺構が検出された(図260・図版37)。

SB701：2間(3.4m)×2間(3.3m)の掘立柱建物で、中央にも1基の柱穴がある(図260左上・図版37中)。柱穴の大きさは一辺が0.3～0.4mの方形ぎみの平面形を呈し、側柱のうち、四隅の柱穴が深

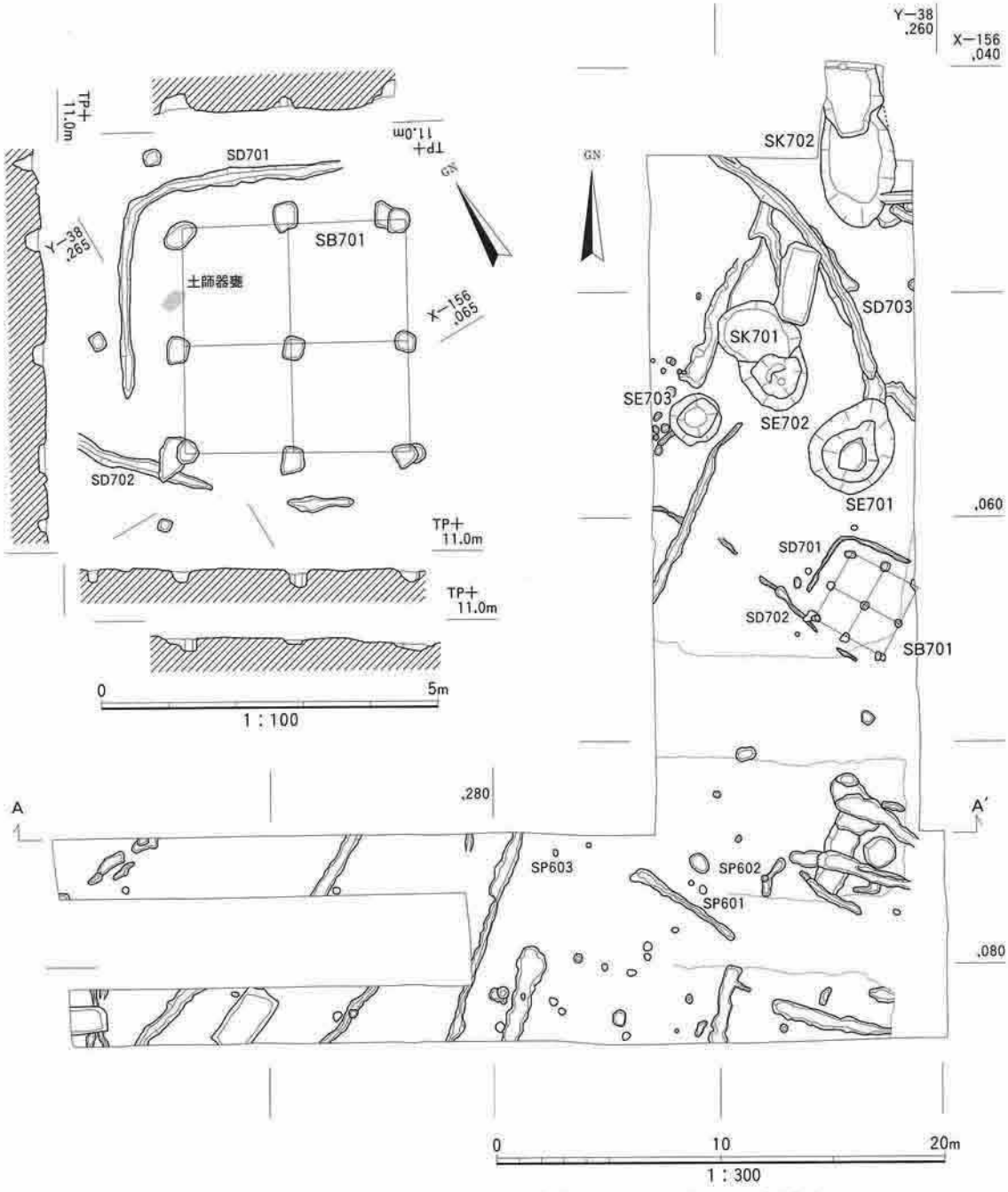


図260　NG93－56次古墳～飛鳥時代遺構配置図およびSB701実測図

く、建物中央の柱穴は四隅の柱穴と同じくらいの深さがある。柱痕跡は不明確であったが、確認できたものは直径0.1mほどであった。建物方位はN30°Eである。

SB701の北西隅および南西隅の各柱穴からそれぞれ北および南に1.2m離れて、一辺0.15～0.25mの小柱穴があり、西側柱列の中央の柱から西にも1.2m離れた位置に同様の柱穴がある。軒を支えるなどの補助支柱の穴と思われる。

SD701：SB701の北および西側に、柱筋から0.7～0.8m離れて存在する溝である。幅0.15～0.2m、深さ0.05mある。

SD702：SB701の南側に延びる溝で、幅や深さはSD701とほぼ等しい。この溝はさらに建物の西方に延びて、調査範囲外までの約20m以上続いている。

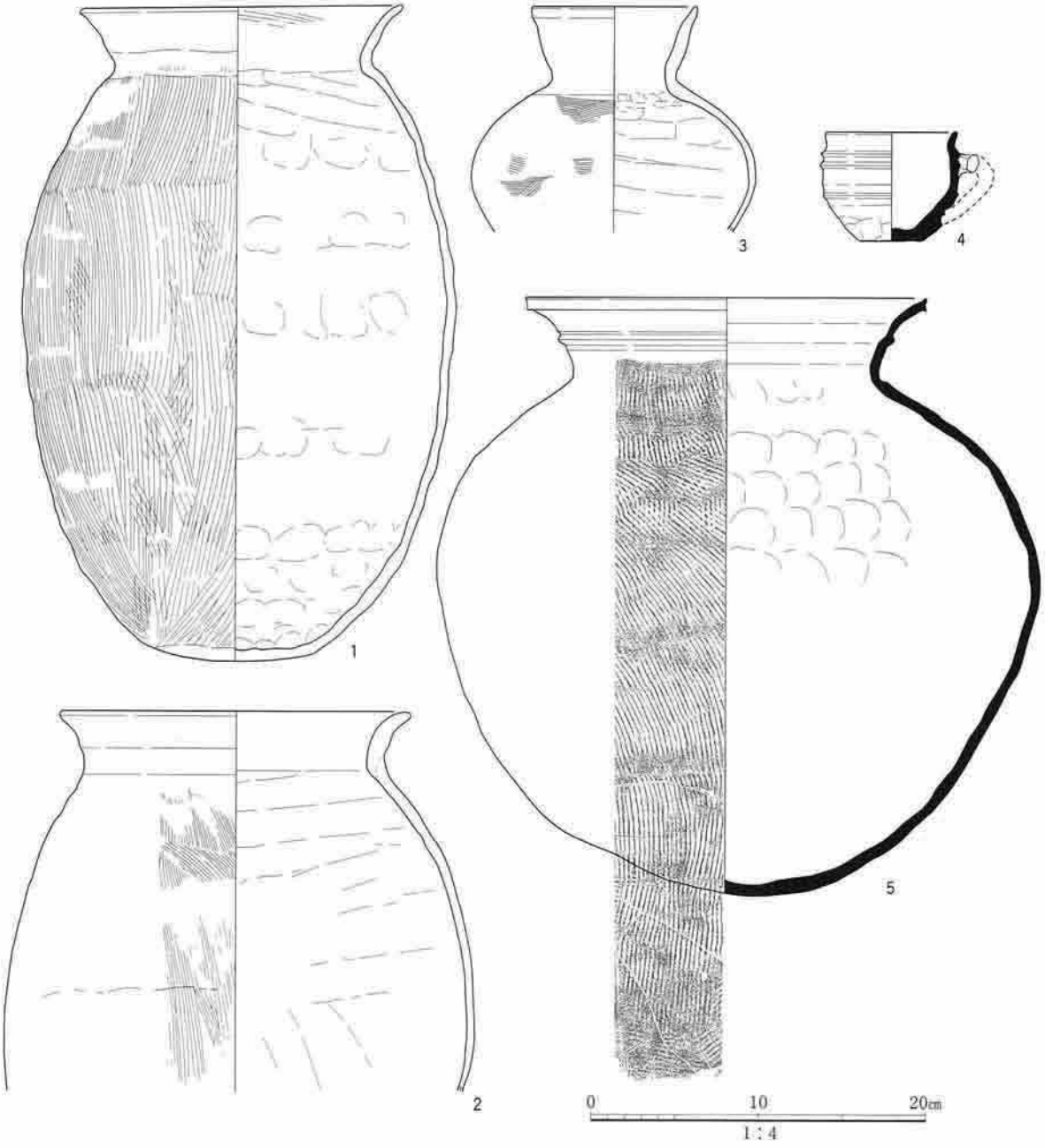


図261　NG93－56次SD703出土遺物

SD703：SE701から北西に弧を描くように延びる溝である(図版37下)。幅0.5～0.8m、深さ0.35mである。この溝のSE701との接続部は深さ0.06mと浅く、井戸から0.8m離れたところから深くなっている。また、溝の底は検出された範囲内においてはほとんど高低差がなかった。古墳時代中期の地形が北西方向に低くなっていることから、井戸水を北西方向に送水するためのものと考える。埋土は水成と思われる黒褐色粘土層で、中部に砂を多く含む。底が深くなる地点では水成の中～粗粒砂が薄い層をなしていたが、それ以北は粘土層であった。また、SE702・703からも浅い溝が延びており、SD703に取付いている。

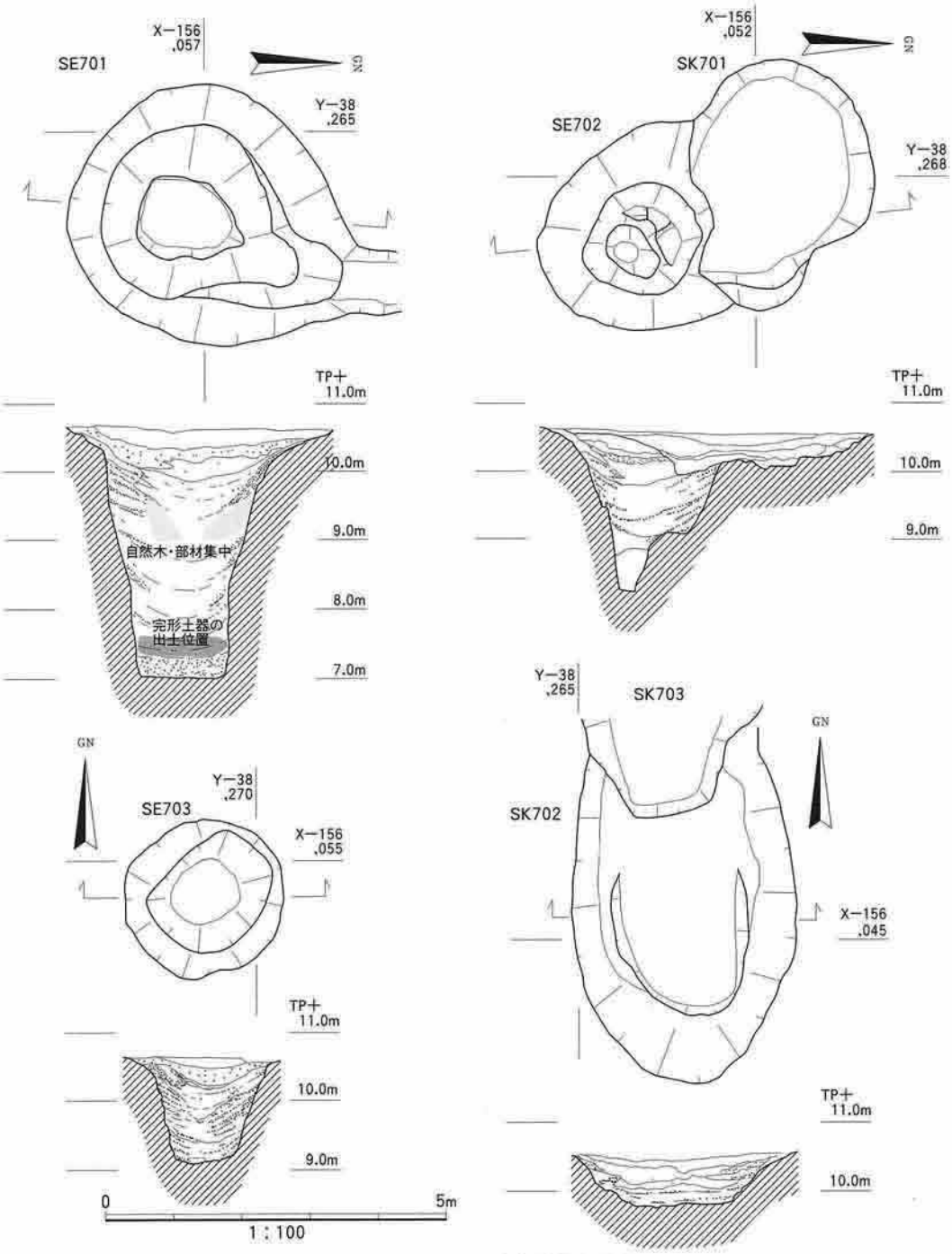


図262　NG93－56次各遺構実測図

SD703からは土師器甕1・2、壺3、須恵器把手付椀4、甕5が出土した(図261)。1と4は北部の溝底に完形の状態で正位に置かれていた。さらに北側２ｍの位置には、完形に復元できる須恵器甕5が割れた状態で出土したが、これも本来は置かれていたものと思われる。

SE701：調査地北部で検出された井戸である(図262)。上端が3.4ｍ×4.1ｍの楕円形で、最上部から2.3ｍ下方では直径1.5ｍ程度の円形であり、深さは3.6ｍある。東北部は突出する形状で、壁の傾斜は緩やかになり、SD703が取り付いている。埋土は上から約0.7ｍまでは黒褐色粘土質シルトで、それ以下は2.5ｍの厚さで周囲から流れ込んだ砂の薄層を介在する黒色粘土または粘土質シルトとなり、下方にいくほど汚れている。そして、最下部の0.3ｍは汚れの少ない淡灰色中～粗粒砂である。

遺物は上から1.7ｍまでのものと、底の砂層に堆積した粘土質シルト層から出土した遺物に分けられる。前者については、上から1.0～1.7ｍの間に大量の加工木が出土した。図化できていないが、それらは建築部材と思われるものが多くを占めており、梁桁の一部と思われる丸太材や垂木および板材、角材や鼠返しなどがあった。多くは焼けており、火災にあったか、建築廃材を燃料などにしたものと思われる。また、自然木や落葉樹の葉などの堆積が突出部付近に見られた。

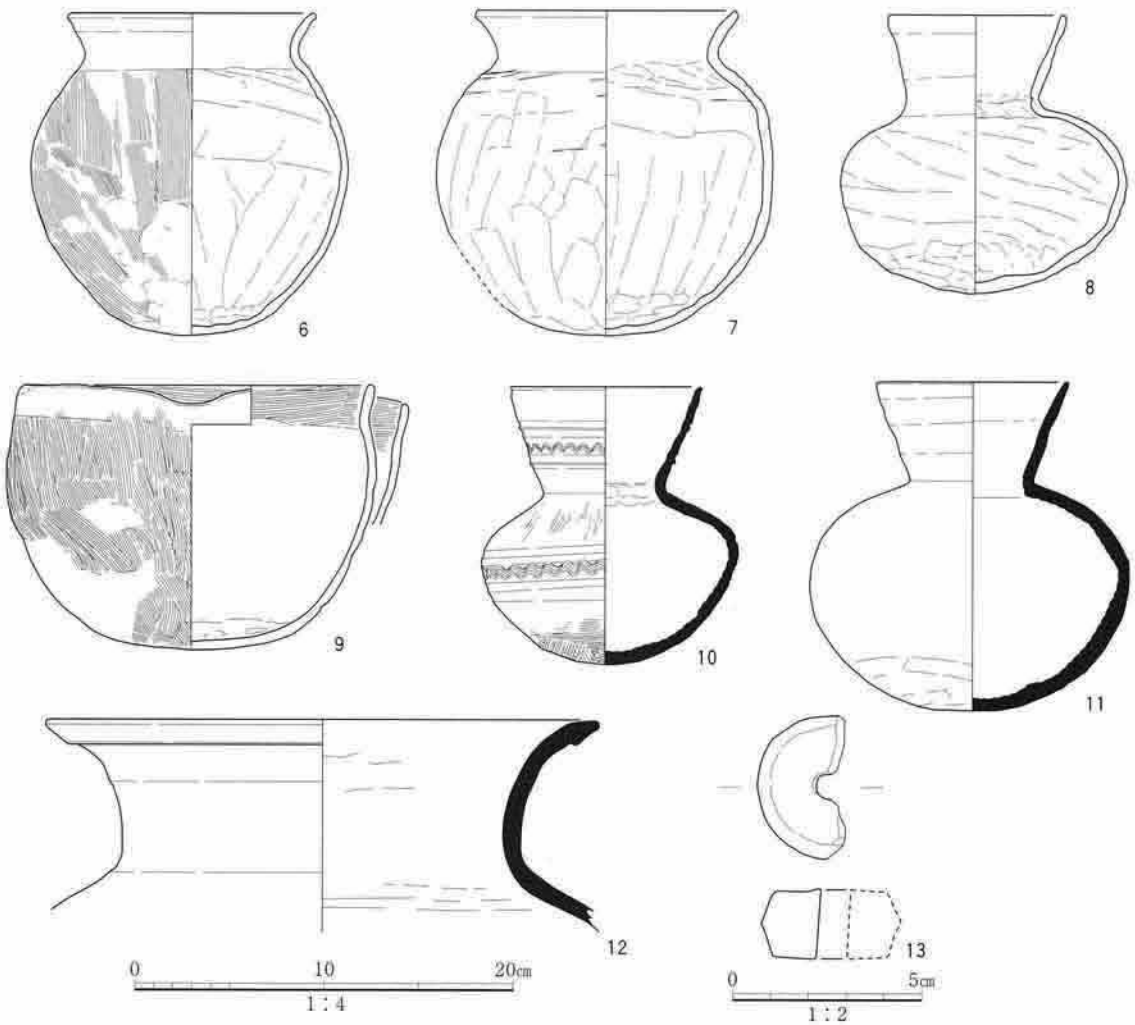


図263　NG93－56次SE701・702出土遺物

SE701(6～12)、SE702(13)

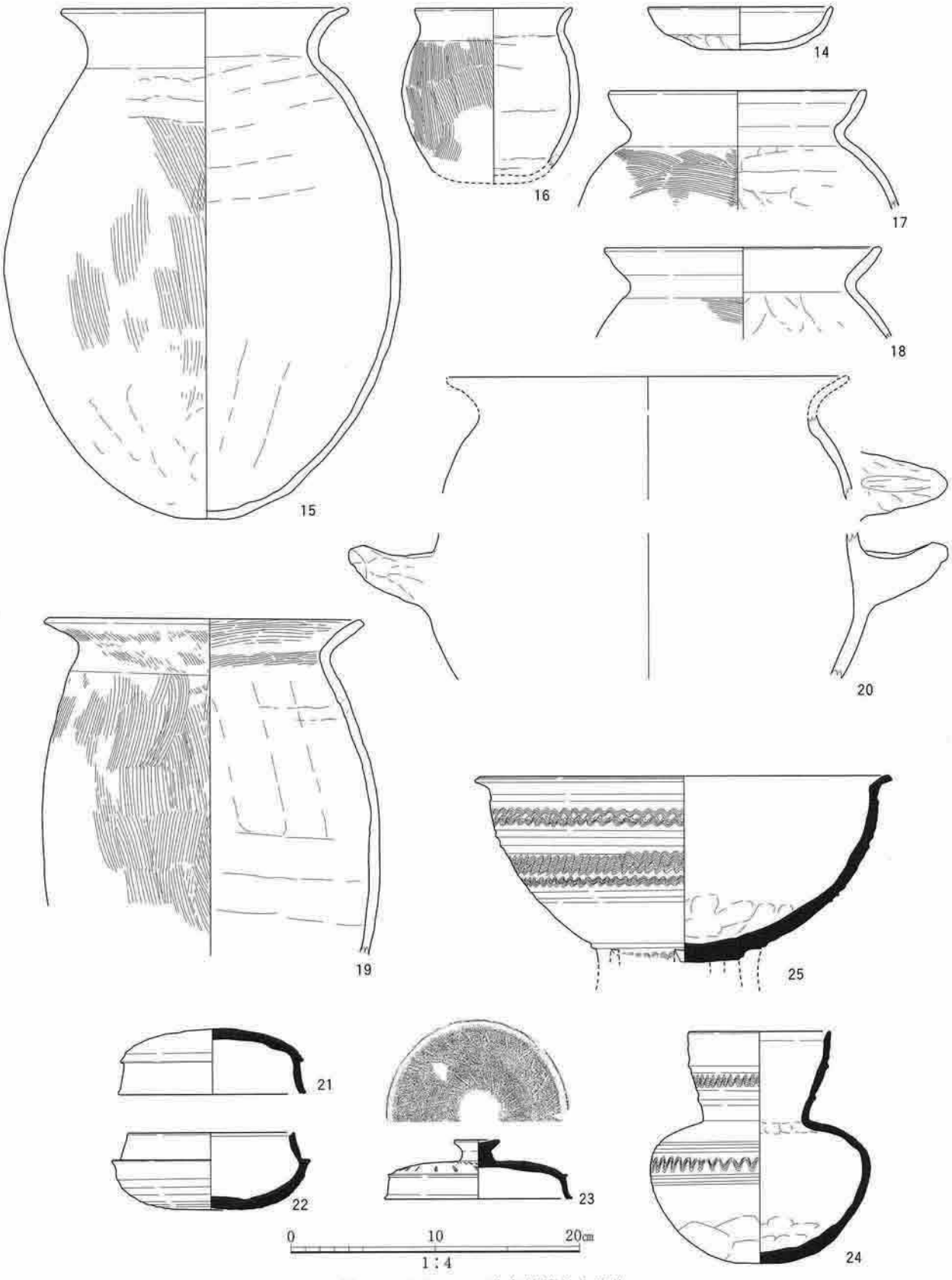


図264　NG93－56次各遺構出土遺物

SK701(15・16)、SK702(17～24)、SK703(25)、SP601(14)

これらの加工木の堆積のやや上位で完形の土師器甕6・7、壺8、片口鉢9、須恵器壺10・11が出土したのに加え、須恵器甕の口頸部12も出土した(図263)。須恵器におけるTK73型式からTK216型式にかけての時期のものと思われる。

SE702：SE701の北西で近接して検出された井戸である(図262)。上端は直径2.8mで、深さ1.5mのところで直径0.8mになり、最終的な深さは2.3mになる。埋土は下部が黒色または灰色粘土質シルト、中部は黒色または灰色シルトの薄層を介在する細～粗粒砂となり、上部は黒色粘土である。井戸がほぼ埋まり、浅い窪みになった段階で、北側にSK701が掘削され、最終的にはこの土壙とともに埋まっている。この井戸からの出土遺物は少なかったが、埋土の中部から須恵器壺の口縁部や、酸化焔焼成の算盤玉形紡錘車13が出土した(図263)。なお、須恵器壺の口縁部は後述するSK702から出土した壺24と接合した。このことから須恵器におけるON46段階のころに埋没したと思われる。

SE703：上端は直径2.3mのやや方形ぎみの円形を呈し、深さが1.6mある井戸である(図262)。埋土は下部が灰色粘土質シルト、中部が薄いシルト層が介在する細～中粒砂、上部が炭化木の細片を含む黒色粘土、最上部は褐色ないしは黒色のシルトまたは粘土質シルトが堆積している。埋土中部から土師器甕の底部が出土した。

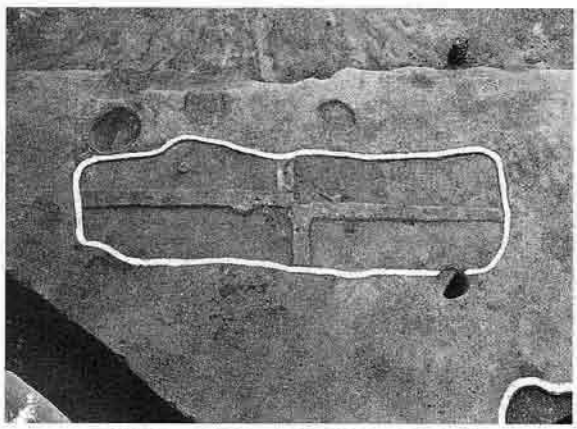


写真26　NG87－36次SX701(南から)

SK701：平面形が長径3.6m、短径2.9mの楕円形で、深さは0.45mと浅く、井戸SE702を切っていた。埋土は下部が黄灰色または褐灰色粘土質シルトないし砂質シルトで、上部は砂を含む黒褐色粘土であり、炭を多く含む部分があった。ここから

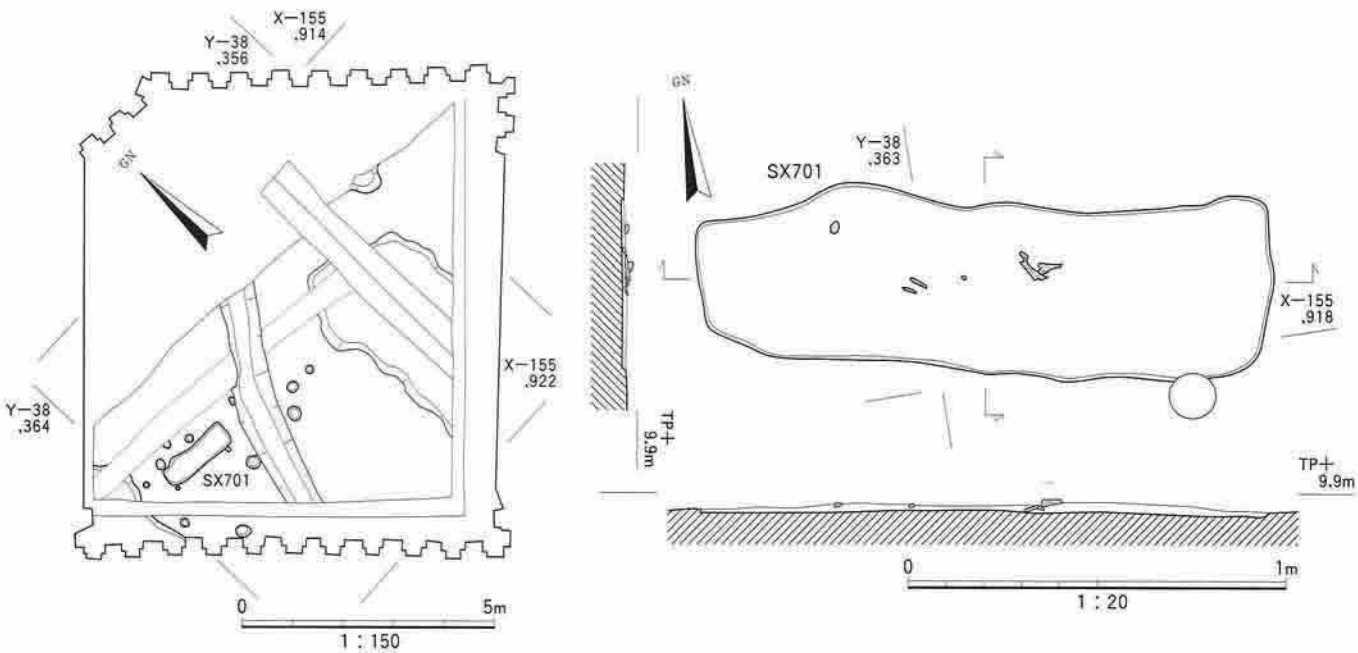


図265　NG87－36次古墳時代SX701の位置と実測図

は土師器長胴甕15や小型の平底深鉢16のほか、多くの土師器・須恵器片が出土した(図264)。

SK702：調査地北端で検出された南北５ｍ以上、東西3.3ｍの土壙で、北部は別の遺構に切られていた。深さは0.75ｍで、埋土は黒褐色シルト質粘土または粘土である。出土遺物には土師器甕17～19や鍋20、須恵器杯身22、杯蓋21、高杯、同蓋23、壺24などがあり、完形もしくはそれに近い状態で出土した(図264)。須恵器はおおむねON46段階に属する。

SK703：SK702を切る土壙で、拡張した北端部で検出された。須恵器器台25などが出土したが(図264)、調査期間の関係で完掘できなかった。

NG87－36次調査

調査地の西隅で長原7B層準のSX701が検出された(図265・写真26)。1.54ｍ×0.43ｍの長方形に近いプランを有し、深さは数㎝以下である。埋土中に土師器や須恵器の細片に加え、骨片も出土しており、埋葬施設であった可能性がある。なお、本調査地の西約100ｍの地点に位置するYS87－８次調査では弥生時代後期の方形周溝墓１基、古墳時代中期の方墳３基が見つかっている[八尾市文化財調査研究会1995：pp.77－95]。

ｅ．飛鳥時代の遺構と遺物

NG93－56次調査でピットSP601～603が検出された(図260)。検出面は古墳時代の遺構と同一であるが、埋土が明らかに違っていた。SP601からは飛鳥Ⅳに位置づけられる土師器杯Ｃ14が出土した(図264)。

ｆ．中世の遺構

NG93－56次調査では長原３層基底面においてSK301～304が検出された(図266)。これらは平面形が1.2ｍ×0.8ｍの隅丸長方形を呈し、ほぼ同じ大きさであるが、深さは0.15～0.4ｍと差がある。SK301はもっとも深く、埋土下半部は灰色砂質シルト、上半部は砂の偽礫や粘土を含む暗灰色シルトで、後者の下面で木製の箸１本と少量の土器片が出土した。ほかの土壙からは遺物は出土していない。このような土壙はNG91－１次調査(本章第２節)などでも検出されており、時期は室町時代かそれ以降と思われる。

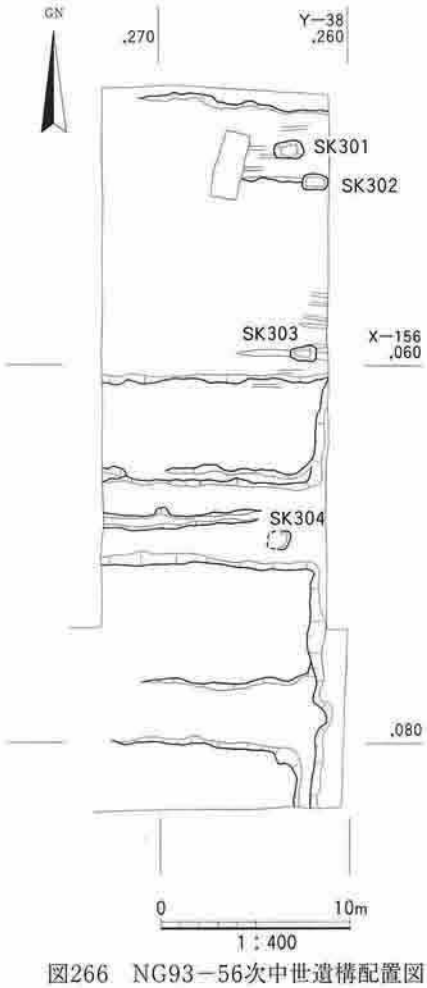


図266　NG93－56次中世遺構配置図

３)まとめ

旧石器のブロックについてはNG86－３・64次調査で良好な状態で検出することができた。ただ、残念ながら本節では整理時間の不足で、十分に検討して報告することができなかった。今後機会を作って十分な報告をしたいと思う。

古墳時代中期についてはNG93－56次調査で集落遺構をが検出された。この遺構群は八尾市側のYS87－８次調査地を中心

とする集落の西南端が検出されたものと思われる[八尾市文化財調査研究会1995：pp.1－130]。この集落を含む八尾南・長原遺跡東南地区の特徴は、竪穴住居が認められず、早くから掘立柱建物のみからなること、須恵器型式でいうTK216型式もしくはON46段階の時期で終わるということであろう。YS87－8次調査地では井戸から木製の鞍が出土しており、調査地内の空閑地を馬の放牧地と考えている[八尾市文化財調査研究会1995：pp.118－121]。なお、集落が廃絶する要因としては、古墳群の築造が考えられ、YS87－8次調査地やNG82－41次調査地では須恵器型式でいうTK208～TK47型式の方墳が検出されている[大阪市文化財協会1999a：pp.50－59]。

（寺井）

第５節　NG85－18次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では長吉長原東３丁目の西部に位置するNG85－18・87－56・87－81次調査を報告する（図267）。

NG85－18次調査地は塚ノ本古墳（長原１号墳）の北側に位置する。試掘で古墳の存在が確認されたので、本調査に至った。調査の結果、**長原29号墳**の東側周溝の一部と**長原129号墳**が検出された。

NG87－56次調査はマンション建設に先立って行われた。調査は通路に当る中央部分を残し、南・北の２区について実施した。近隣では古墳や平安時代の建物跡が検出されているが、本調査ではそのような遺構は発見されず、古代の水田が検出された。

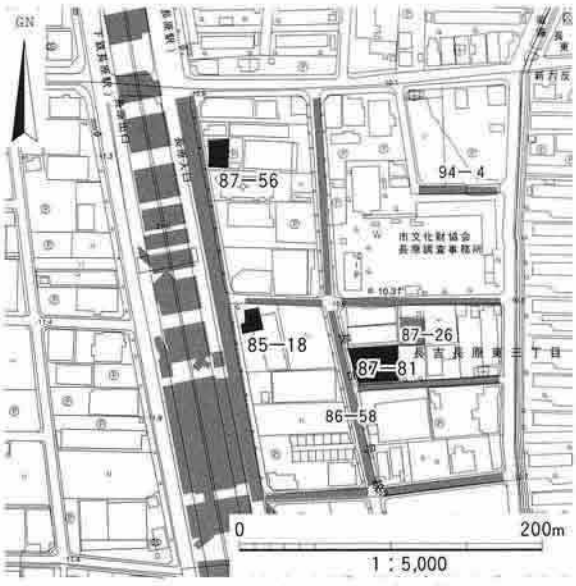


図267　NG85－18次などの調査地位置図

NG87－81次調査は長原150・151号墳が発見されたNG86－58次調査地の東側に位置し[大阪市文化財協会1993b：pp.145－240]、北東部にはNG87－26次調査地がある[高井健司・高橋工1989]。調査では幅３ｍの東西方向のトレンチを２本設定して、中世の地層以下を精査した。その結果、**長原178号墳**が発見された。

２）調査の結果

ｉ）層序

NG87－81次調査地の北壁で**長原178号墳**の墳丘がかかっている部分で地層を観察した（図268・表32）。当地は東側に低くなる地形で、長原５層（第７層）は東側にのみ堆積する。また、長原7B層の暗色帯は古墳墳丘盛土の下でのみ確認された。

ii）遺構と遺物

ａ．古墳時代の遺構

NG85－18次調査

古墳が２基検出された（図270）。

長原29号墳：地下鉄工事の際に行われたNG1次調査[長原遺跡調査会1978]で明らかになった古墳の周溝東側が検出された。今回の成果から本古墳は一辺15ｍと推定できる。なお、NG1次調査では本古墳の周溝よりTK216・208型式の須恵器が出土した。

長原129号墳：調査地南側で検出された方墳で、南隅を除き、墳丘をほぼ全部明らかにすることが

表32　NG87－81次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	暗オリーブ灰色シルト	20	現代作土				近・現代
2	2	灰色含シルト中～粗粒砂	20	作土				江戸時代
3	3	灰色含粘土中～粗粒砂	5～10	作土				室町時代
4	4	灰色含砂シルト	10	作土				鎌倉時代
5	4	灰色含砂粘土質シルト～粘土	20	作土				
6	4	灰色含砂礫シルト	20	作土				
7	5	灰白色細礫～中礫	40	水成				奈良時代
8a	6Ai	暗青灰色含砂粘土質シルト	20	作土				
8b	6B?	暗緑灰色含粘土中粒砂	15					飛鳥時代
9a	7Ai	褐色粘土質シルト～黄灰色シルト	5～10	作土				
9b	7B	黒褐色粘土	＜5					古墳時代
10	13	黄橙色シルト～明緑灰色含砂粘土						旧石器時代

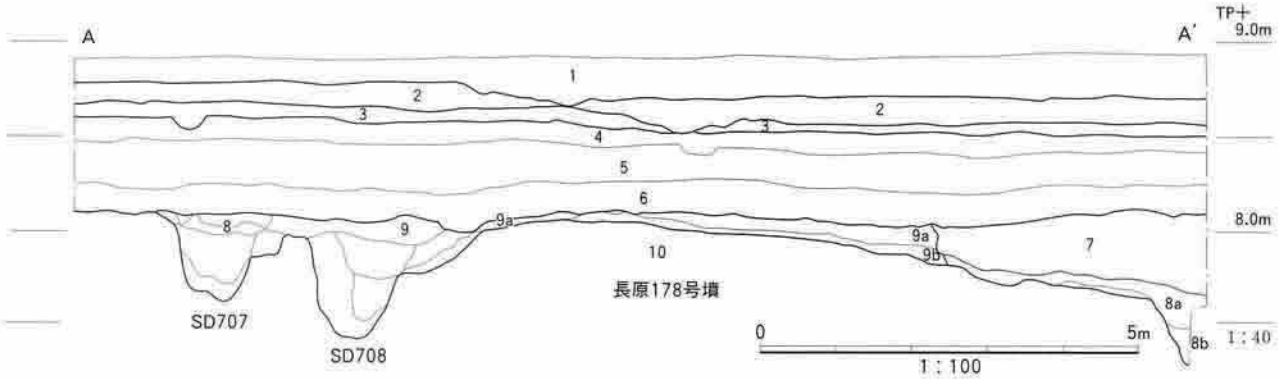


図268　NG87－81次北区北壁中央断面図

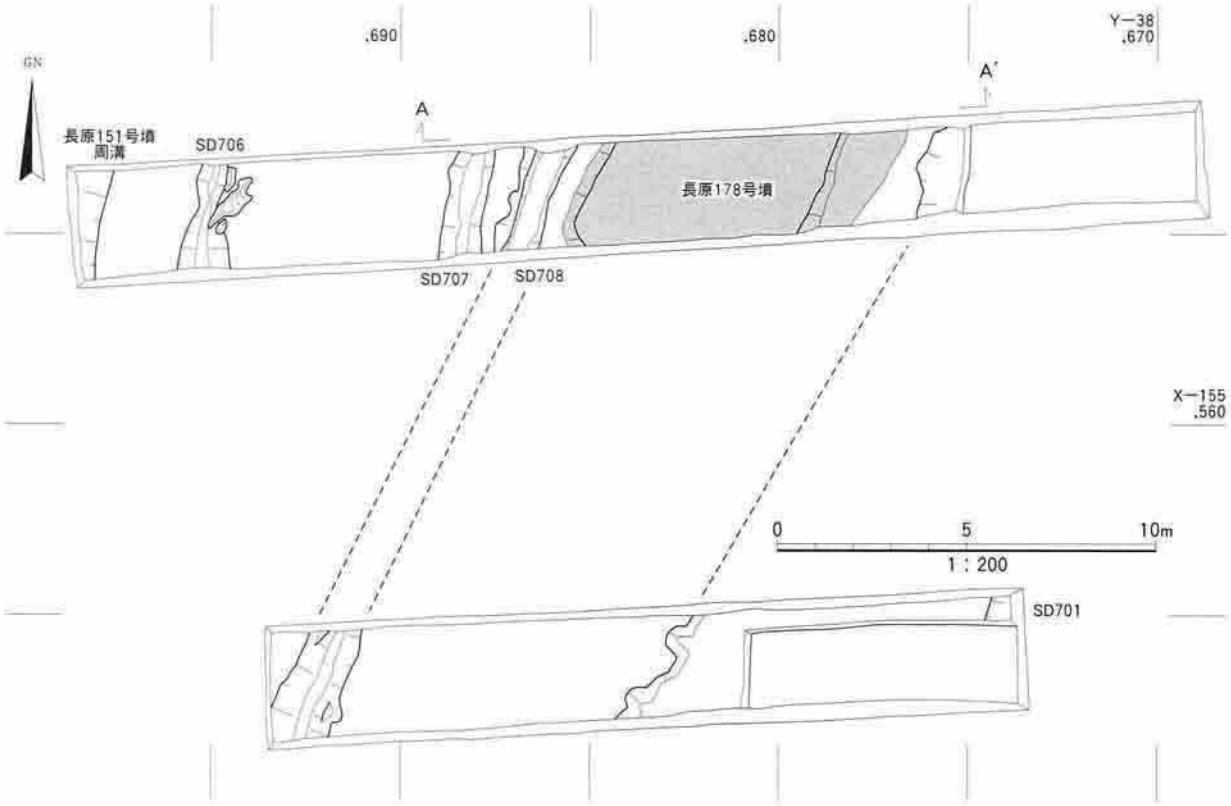


図269　NG87－81次古墳～飛鳥時代遺構配置図

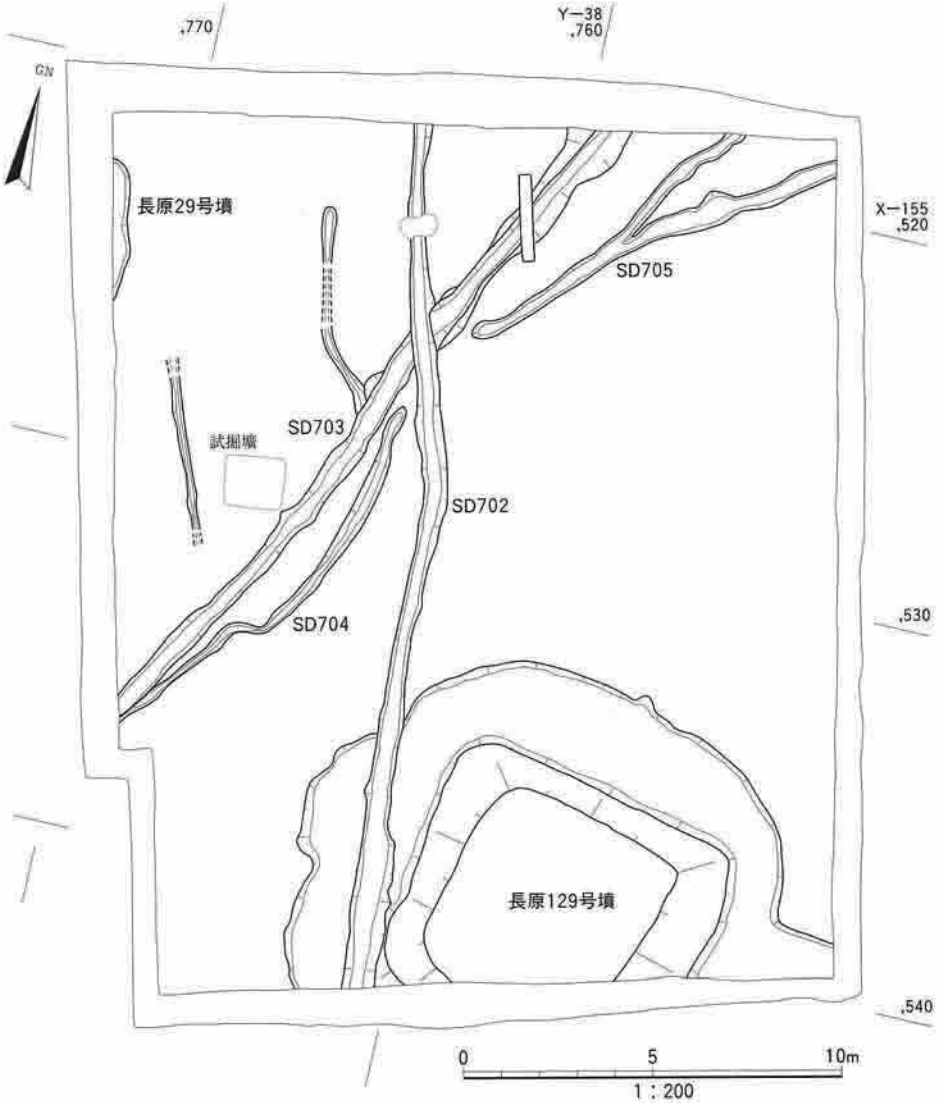


図270　NG85－18次古墳～飛鳥時代遺構配置図

できた(図270・図版38上)。墳丘は基部が長辺8.5m、短辺７m、周溝幅2.5mである。周溝底から墳丘最高部までの高さは0.4mで、盛土は削平のため0.1m程度しか残っていなかった。周溝からは５世紀中葉頃の土師器・須恵器の破片が少量出土した。

NG87－81次調査

北区中央で**長原178号墳**、北区西端で**長原151号墳**の周溝が検出された(図269・図版38下)。また、古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられる溝**SD701**も検出された。

長原178号墳：一辺6.5～７mと推定される方墳である。西側の周溝は**SD707・708**に切られており、ほとんど残存していないが、墳丘側の斜面と盛土を確認した。墳丘東側には周溝埋土の痕跡と思われる黒褐色粘土が踏込み状に残っており、この踏込みが途切れるところが本来の墳丘裾であったと思われる。墳丘中央部には古墳が築造される前の表土であった長原7Bi層が残っており、その上に長原13層に由来すると思われる黄色粘土を主体とする盛土がウロコ状につまれていた。なお、本古墳は長原塚ノ本古墳の周辺に分布する古墳としては一番東側に位置する。なお、時期を確定できるような遺物

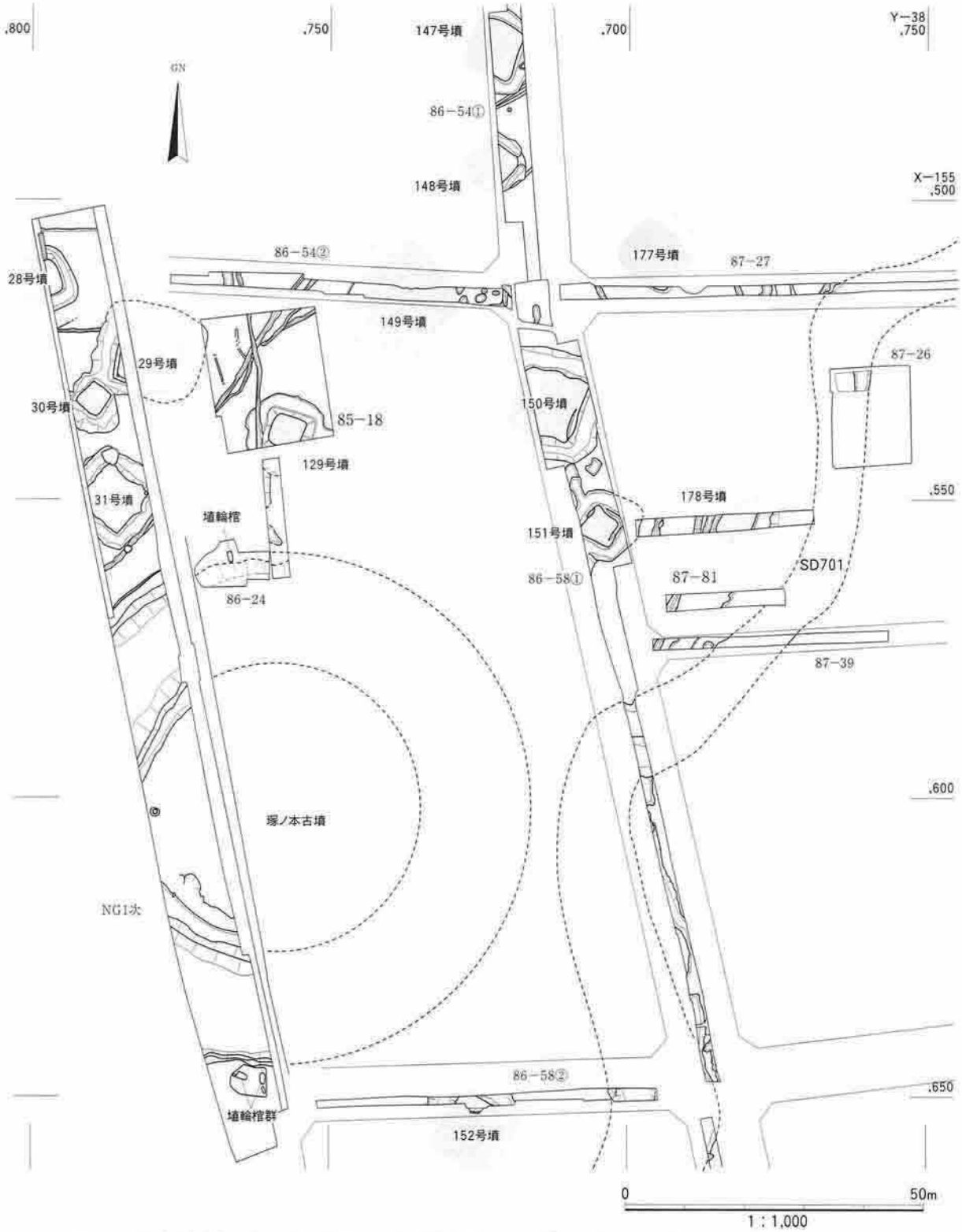


図271　長吉長原東3丁目西部の古墳～飛鳥時代遺構配置図([大阪市文化財協会1993b]の図150を改変)

は出土しなかった。

長原151号墳：北区西端で本古墳の周溝の一部が検出された。NG86－58次調査で検出された古墳の位置や向きから判断して、東側の隅に当る[大阪市文化財協会1993b：pp.183－184]。なお、以前の調査では少量の遺物しか出土していないが、窖窯焼成でB種ヨコハケが施される円筒埴輪片が出土

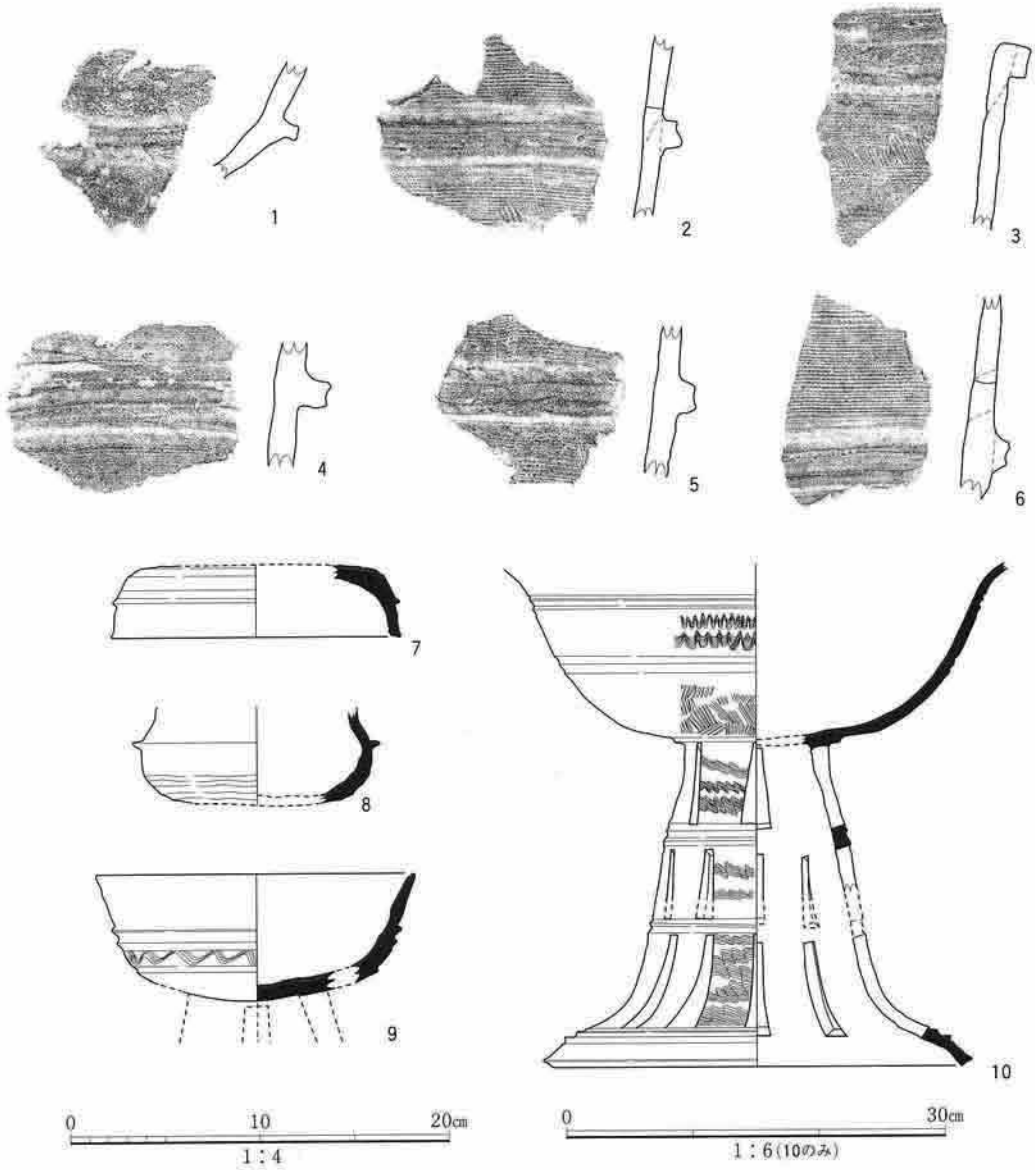


図272　NG85－18次長原7Ai層出土遺物

している。

SD701：北区と南区の東端で水成の砂や粘土で埋まる溝の肩が検出されたが、本調査では十分な断面観察はできなかった。この溝は[大阪市文化財協会1993b：pp.166－168]でSD03、[大阪市文化財協会1994：pp.79－80]でSD701と報告されたものと一連である(図271)。それらの報告によると、長原8A層で埋まる流路を長原7Bi層準で掘直されており、長原7Bi層が堆積した後、最終的に長原7Ai層で埋没しているということである。NG86－58次調査では長原7Bi層に相当する粘土層から古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられる土師器や、塚ノ本古墳に使用されていたと思われる鰭付朝顔形埴輪が出土した。

b．飛鳥時代の遺構と遺物

NG85－18次調査

長原7Ai層基底面で溝が4条検出された(図270)。ここでは肩がしっかりしているSD702・703につ



図273　NG85−18次SD601平面図

いて説明する。

SD702：調査地中央を南北に延びる溝で、幅0.6m、深さ0.5mある。埋土の下位には青灰色シルト質粘土に灰白色粘土質シルトの偽礫を含む加工時形成層が堆積していた。

SD703：南西から北東に向って延びる溝で、幅0.6m、深さ0.4mである。埋土の下位はSD701と同様に偽礫を含む加工時形成層が堆積していた。SD701に切られているが、埋土の状態からあまり時期差はないと思われる。

なお、本調査地の長原7Ai層から朝顔形埴輪1、円筒埴輪2〜6、須恵器杯身8、杯蓋7、無蓋高杯9、高杯形器台10が出土した(図272)。埴輪やTK216型式に属する須恵器7〜9は本来古墳に伴っていた可能性があるが、10は受部の底部に平行タタキメを残していることから、TK10型式かその前後の型式に属し、古墳よりも新しいものと思われる。

長原6Ai層上面では「コ」字状に巡る溝SD601が検出された(図273)。溝の幅は0.2〜0.3m、深さは0.1mである。北接するNG

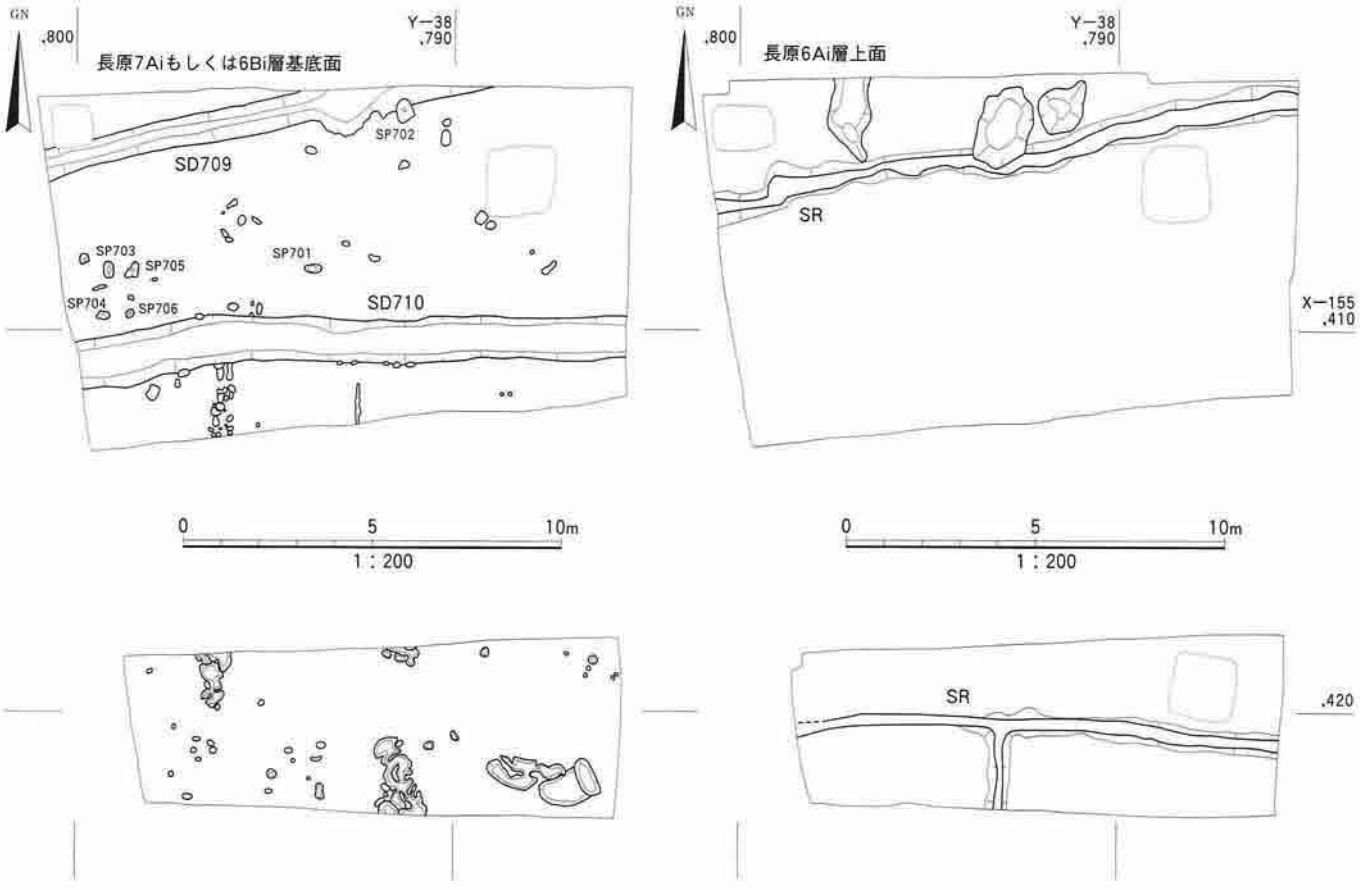


図274　NG87−56次飛鳥〜奈良時代遺構配置図

86－54②次調査地でも続きが検出されており、総合すると南北21m、東西3.8～4.1mの長方形の空間を囲うことになる。これがいかなる目的で掘られたのかは不明である。

NG87－81次調査

長原178号墳の西側で溝が３条検出された(図269)。いずれも出土遺物は少量である。

SD706：幅0.6～1.3m、深さ0.1mの浅い溝で、北区でのみ検出された。底面は凹凸が著しく、長原7Ai層を作土とする水田が耕作されている段階に形成されたものである。

SD707：幅1.0m、深さ0.5mあり、北区でのみ検出された。下部には灰色粗粒砂が堆積するが、上部は長原13層に由来するシルト偽礫で埋められていた。

SD708：幅1.0m、深さ0.55mあり、**長原178号墳**の西側周溝を切る。下部には暗灰色含砂粘土が堆積するが、上部はSD707と同様に長原13層に由来するシルト偽礫で埋められていた。７世紀代と思われる土師器鉢の破片が出土した。

NG87－56次調査

長原6Biもしくは7Ai層に相当すると思われる地層の基底面で溝を２条、ピット６基が検出された(図274左・図版38中)。

SD709：幅0.7m、深さ0.15mあり、東西方向に延びる。埋土は若干の粗粒砂を含む粘土を主体とする。

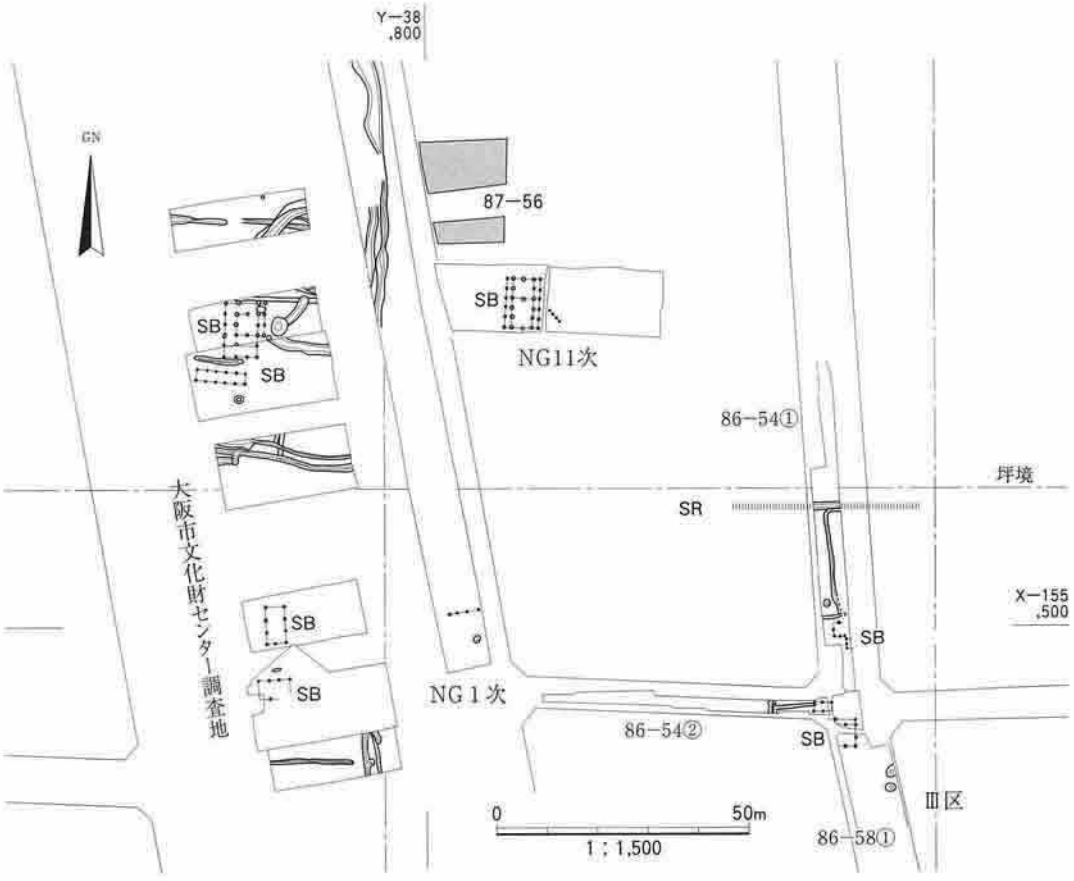


図275　NG87－56次調査地周辺の平安時代遺構配置図([大阪市文化財協会1993b]の図190を改変)

SD710：幅1.0m、深さ0.2mあり、東西方向に延びる。埋土の最下部には水成層と思われる灰白色中～粗粒砂が堆積し、その上には灰白色粘土が堆積した後、黄灰色シルトで埋め戻されていた。東側の底のレベルが低いことから、東側に水を流していたことがわかる。

SP701～706：長軸が0.2～0.6mあり、不整形なピットである。SP705は検出面からの深さが1.0mあり、直径0.07mの柱痕跡を確認した。これ以外のピットでは柱痕跡は確認されなかった。

また、長原6Ai上面では水田畦畔が検出された(図274右)。

c．平安時代の遺構

NG87－56次調査地では長原4B層に相当すると思われる灰オリーブ～灰黄色シルト層が残っていて、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器が多く含まれていたが、遺構は検出されなかった。当調査地の南隣のNG11次調査地では10～11世紀の大型建物SB351が検出されていることから[大阪市文化財協会1982：pp.108－109]、当地は空閑地であったのかもしれない(図275)。

3)まとめ

本節では塚ノ本古墳の東側に分布する方墳を新たに2基、既報告のものを2基、計4基を調査して報告した。新たに発見された**長原129・178号墳**については、時期を決定づけるような遺物は出土しなかったが、近隣の古墳は須恵器型式でいうTK73～208型式の時期に当り、おそらくこれらの古墳も同時期であろう。塚ノ本古墳周辺の古墳群の広がりについて、SD701よりも東では確認されていないため、この溝が東を画していたと考えられる。　(寺井)

第Ⅶ章　東・東北地区の調査

第１節　NG87－67次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本章では長吉長原１・２丁目に当る東地区の調査を報告する（図276）。本地区や長吉六反地区（長原遺跡東北地区）では1980年代末から現在まで市営住宅の高層住宅への建替えに伴って多くの発掘調査が行われてきた。その結果、弥生～古墳時代の遺構が濃密に分布していることが明らかになっており［大阪市文化財協会2002a・2002b・2003a・2005a］、それを基にして研究も多く行われている。ただ、本章で報告するのはいずれもこの地区で高層住宅化が進められる以前の調査ばかりである。

NG81－３～６次調査は下水工事に伴う一連の調査で、遺構が検出されたのはNG81－３次調査のみである。その他の調査はGL－2.5～３ｍまで掘削したが、攪乱が及んでいたため、遺構や包含層は

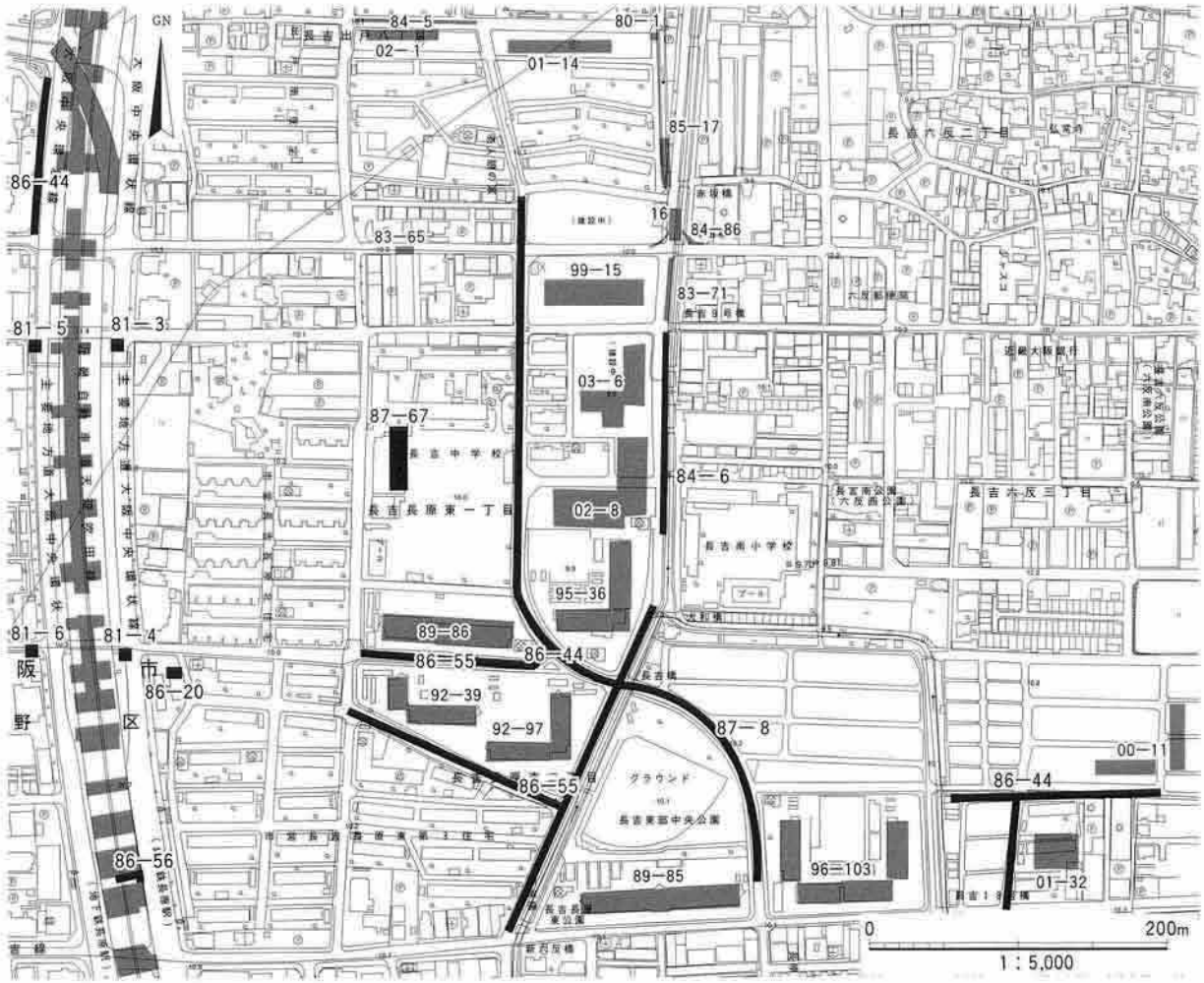


図276　NG87－67次などの調査地位置図

検出されなかった。

NG84－６・75次調査は下水管渠築造工事に伴う調査である。この中でNG84－６次調査は大正川沿いの南北に細長い調査地を５区に分けて進められた。その結果、弥生時代後期の溝や、庄内式期の方形周溝墓に加え、上層では初期須恵器や形象埴輪が出土した。

NG86－20次調査は給油所の石油タンク設置に先立って行われた調査で、GL－３ｍまで掘削した。調査の結果、古代の水田や溝が検出されたが、出土遺物は非常に少なかった。

NG86－44次調査は長吉長原２～３丁目、長吉長原東１～２丁目、長吉六反３丁目にわたって行われた下水工事に伴う調査で、計74個所の試掘坑で断面観察を行った。ただ、掘削がGL－1.3mまでに留まったため、時期のさかのぼる遺構・地層の確認はできなかった。

NG86－56次調査は地下鉄谷町線の長原駅につながる階段の建設工事に伴う調査である。近隣では小方墳が多く見つかっている。本調査では古墳は検出されなかったが、飛鳥時代の水田畦畔が調査された。

NG87－８次調査は下水管渠築造工事に伴う調査である。４個所の人孔が調査対象となり、最大GL－３ｍまで掘削し、長原7B層や長原15層と思われる地層を確認した。長原7B層からは布留式の甕が出土した。

NG87－67次調査は中学校の体育館増築に伴って行われた。調査の結果、弥生時代中～後期の竪穴住居や古墳時代中期の土壙が検出された。

以上のように本書で報告対象となったこの地区の調査は下水工事などに伴う小規模なものが多い。よって、本節では遺構を把握することができたNG84－６次やNG87－67次調査を中心に報告する。

２）調査の結果

ｉ）層序

本節で報告する調査は前述の通り、小規模な調査が多く、十分な断面図が作成された調査はない。ここでは長原7B層に焦点を置いて調査が進められたNG87－67次調査地の断面模式図を示すことにした。図277の通り、長原7B層を第7a～e層に細分されている。

第7a層は緑灰色砂礫混り粘土層である。SD709・714・715は本層下面の遺構である。埴輪や須恵器が含まれる。調査区南部には第7a′層で構成される高まりが存在する。

第7b層はオリーブ灰色粘土層である。SD712・SK701は本層下面の遺構である。

第7c層はオリーブ黒色粘土層で、下部は緑灰色シルト層である。SD710・711・713が本層下面の遺構であるが、各溝の底には砂礫が顕著に含まれる。須恵器が出土した。

第7d層は黒色砂礫混り粘土層で、トレンチ全体に広がる弥生～古墳時代の包含層である。本層基底面でSB701・702・801が検出された。また、南側では本層途中面で畿内第Ⅴ様式の甕がかたまって出土した。

第7e層は緑色砂礫混り粘土である。中央部の窪んだ部分に堆積する。本層基底面で弥生時代後期の土器を多く含む大溝SD707が検出された。

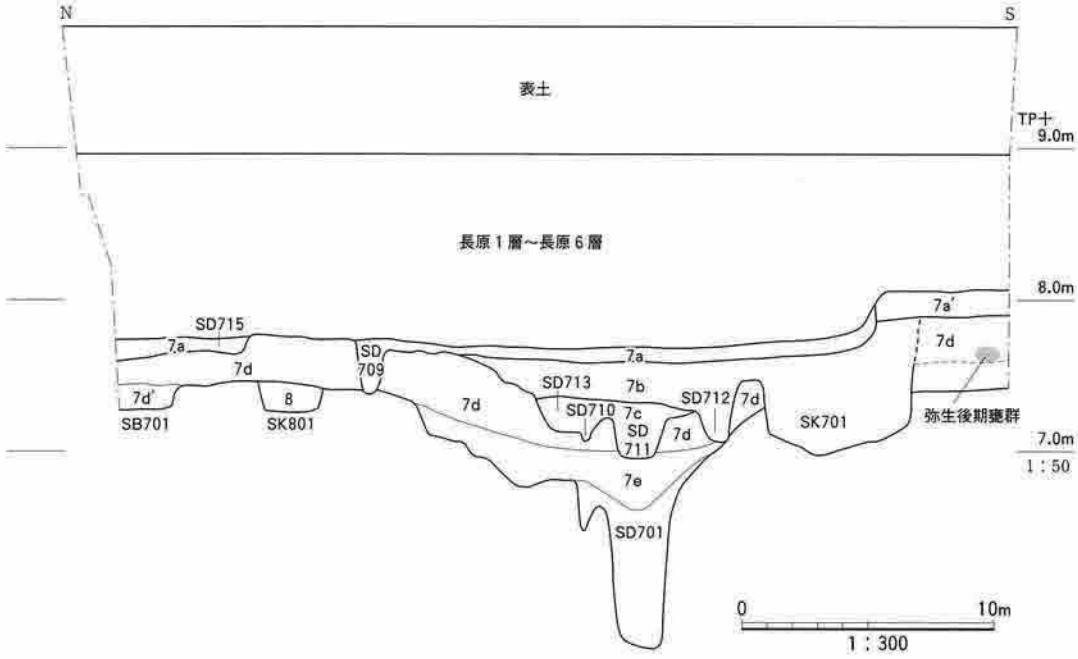


図277　NG87－67次断面模式図

ii)遺構と遺物

a．弥生時代中期の遺構と遺物

NG87－67次調査

第7d層(長原7Biii層に相当)基底面で、方形の土壙SK801が検出された(図278・図版39上)。SK801は南北2.8m、深さ0.1mある。東側は側溝にかかったため、不明であるが本来は正方形に近い形であったと思われる。底面は平坦で、小型の竪穴住居の可能性もあるが、明確な柱穴や周壁溝は見つからなかった。

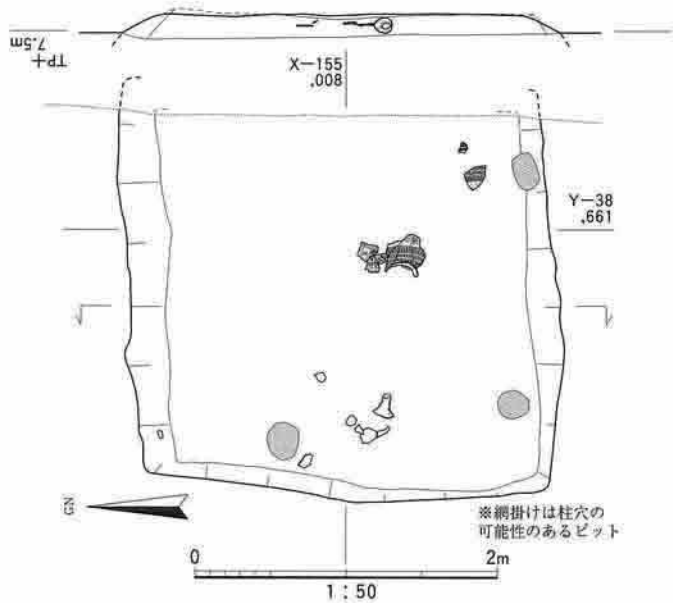


図278　NG87－67次SK801実測図

SK801からは畿内第Ⅲ様式の甕・壺・高杯が出土し、壺2・高杯3を図示した(図281)。2は口径22.8cm、体部最大径27.2cm、残存高30cmの広口壺で、口縁端部及び頸部から体部上半に簾状文が施される。最大径以下には横方向のヘラミガキののち、縦方向のヘラミガキが施される。胎土は石英・長石・チャートを多く含む非生駒西麓産である。3は高杯の脚部で、外面に縦方向のヘラミガキが施され、脚内面にはシボリメが残る。これらの遺物は河内Ⅳ－1様式に位置づけられる。

b．弥生時代後期～庄内式期の遺構と遺物

NG81－3次調査

土壙や溝、ピットが検出された(図279)。この中で弥生時代後期の壺片が出土したSK701について説明する。

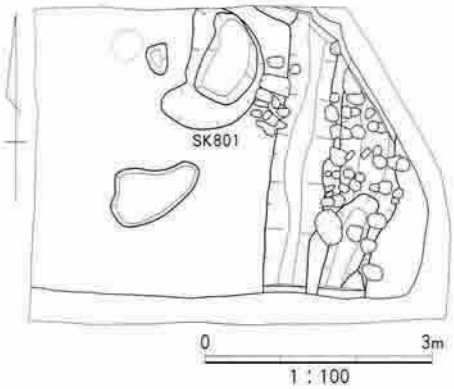


図279　NG81－3次遺構配置図

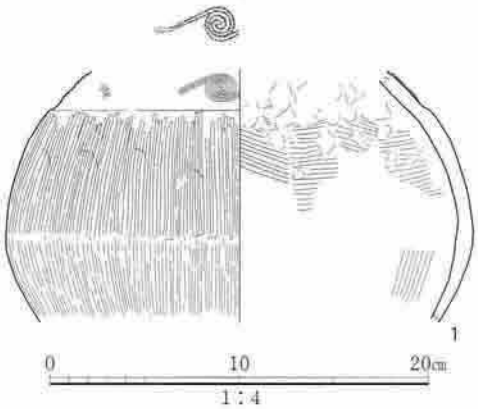


図280　NG81－3次SK701出土遺物

SK701は長軸1.6m、短軸1.0mの不整形な土壙で、深さは0.55mである。埋土は黄色粘土偽礫を含む黒色粘土であった。ここから弥生土器壺1が出土した(図280)。1は胴部に縦方向にヘラミガキが施され、肩部には強いナデの後、渦巻きのスタンプ文が施される。弥生時代後期前半頃のものであろう。

NG87－67次調査

竪穴住居および溝・井戸が検出された(図281)。

SB701：直径約6mに復元される竪穴住居で、やや角張る部分があることから、本来の平面形は隅丸多角形であったと思われる。また、明確な周壁溝は検出できず、見つかった柱穴は1基だけである。住居の中央付近から遺物がかたまって出土し、この中で壺4・甕5・甑6・高杯7・土製紡錘車8を図示した(図282)。

4は広口壺の口頸部で、口縁端部がやや拡張気味に面を有する。5は甕の体部上半で、口縁端部は上方に摘み上げられる。体部には粗い平行タタキが施される。6は鉢の底部を焼成後に外側から穿孔したものである。7は脚裾が広く、中実の脚柱部をもつ。8は土器片を転用したものと思われる。この中で7がは庄内式期に属するものである。

SB702：北東隅で見つかったため、規模・形状は不明である。廃絶後に埋め戻されており、その後にSB701がつくられていることから、時期はSB701の直前と思われる。

SD701：幅約3m、深さ0.8mの断面逆台形を呈する溝で、北東－南西方向の窪みの深い部分に沿っ

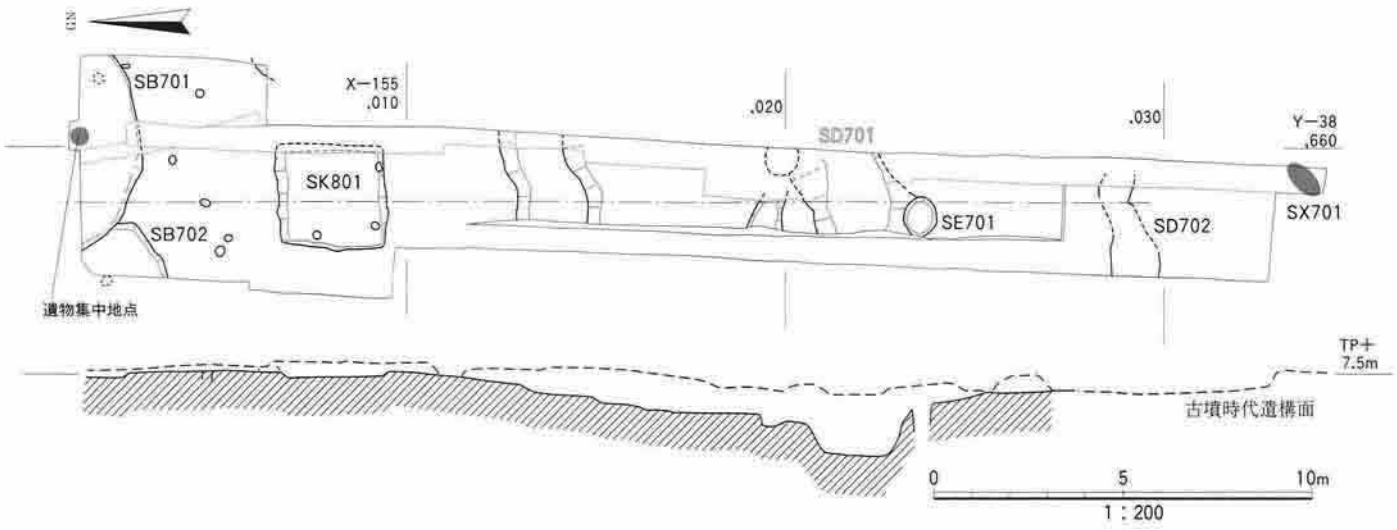


図281　NG87－67次弥生時代遺構配置図

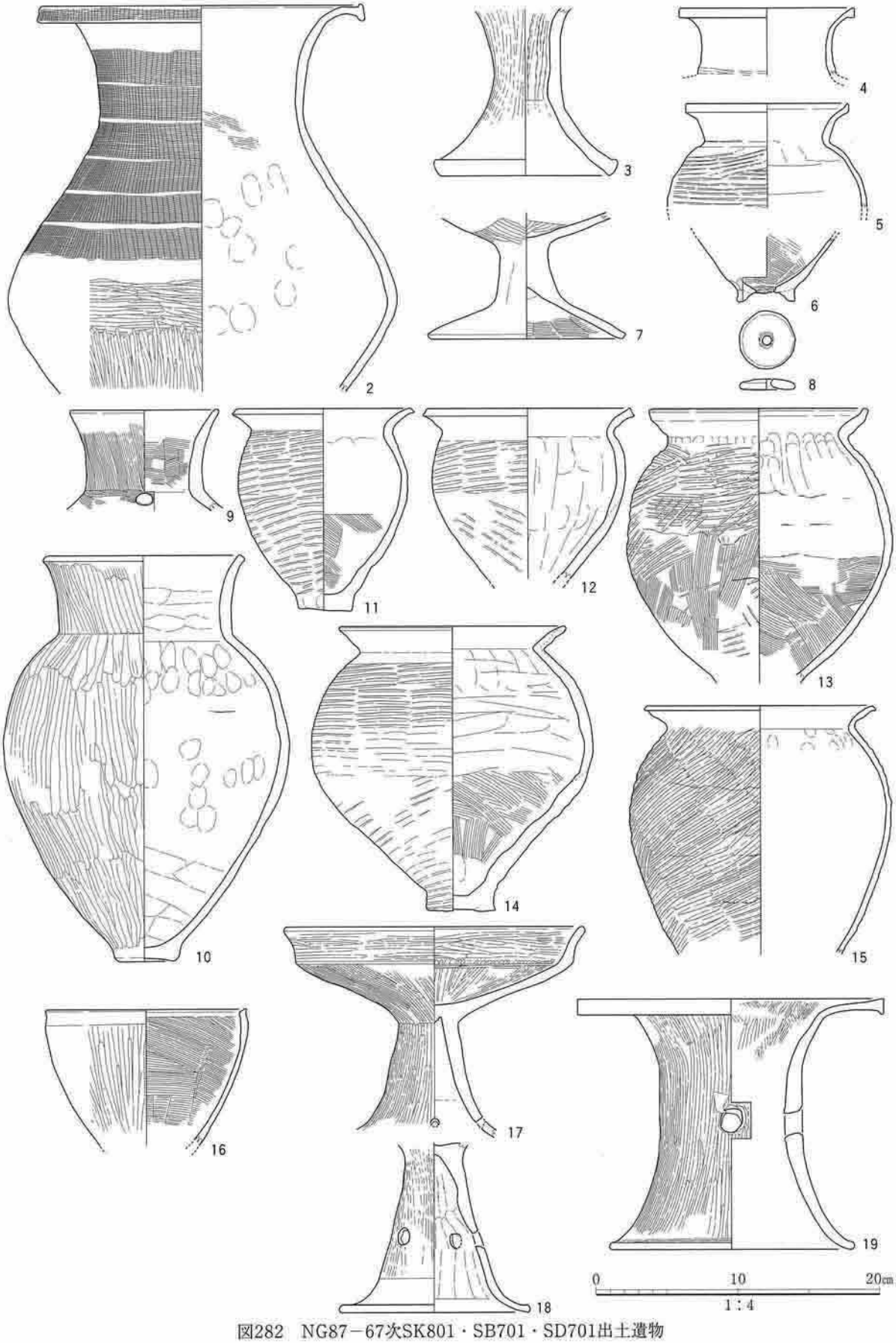


図282　NG87－67次SK801・SB701・SD701出土遺物

SK801(2・3)、SB701(4～8)、SD701(9～19)

て延びる。埋土はオリーブ黒色粘土で、弥生時代後期の遺物を多く含み、図282には壺9・10、甕11～15、鉢16、高杯17・18、器台19を図示した。9は小型化した長頸壺で、肩部に円形浮文が貼付けられる。10は外面に縦方向のヘラミガキが施される壺で、口縁は直立して外反する。11・12・15は体部下半があまり張らないのに対し、13・14は張りが比較的きつい。17は杯部が屈曲して稜をもち、口縁部はやや外湾する。脚部には4方向に円形スカシが穿たれる。杯部内外面および、脚部外面にはヘラミガキが施される。18は外面ヘラミガキで、5方向に円形スカシが穿たれる。19は脚裾部の屈曲についてははっきりしないが、受部については上部で水平近くに屈曲を見せる。外面および受部内面にはヘラミガキが施され、体部には4方向に円形スカシが穿たれる。

以上の遺物について、10・17～19は河内Ⅴ－2様式の特徴を有するが、9・13・14は河内Ⅵ－2様式に属すると思われる。

SD702：SD701の南側で検出された溝である。調査終了間際に発見したため、輪郭が検出されたのみで、掘削はできなかった。幅は1.3mである。

SE701：SD701の南肩のところで検出された直径1m強の井戸状の掘込みである。SD701掘削後に見つけたため、SD701以前の遺構の可能性があるが、切合い関係は十分確認できていない。また、調査終了間際に発見したため、掘削はできなかった。

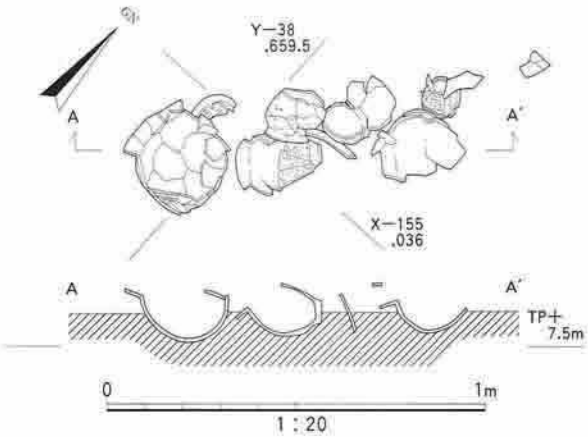


図283　NG87－67次SX701実測図

SX701：調査地の南東隅で検出された、甕がかたまって出土した土器溜である(図283・図版39中)。甕は数個体出土し、中には口縁をそれぞれ合わせたものや、ほかの甕の体部に口縁部を密着させたものがあった。ただ、この土器溜には掘形は見当たらず、盛土も確認されなかった。体部が張る20の特徴から、河内Ⅵ－2様式かそれ以後のものと思われる。

NG84－6次調査

方形周溝墓や土壙・溝が検出された。

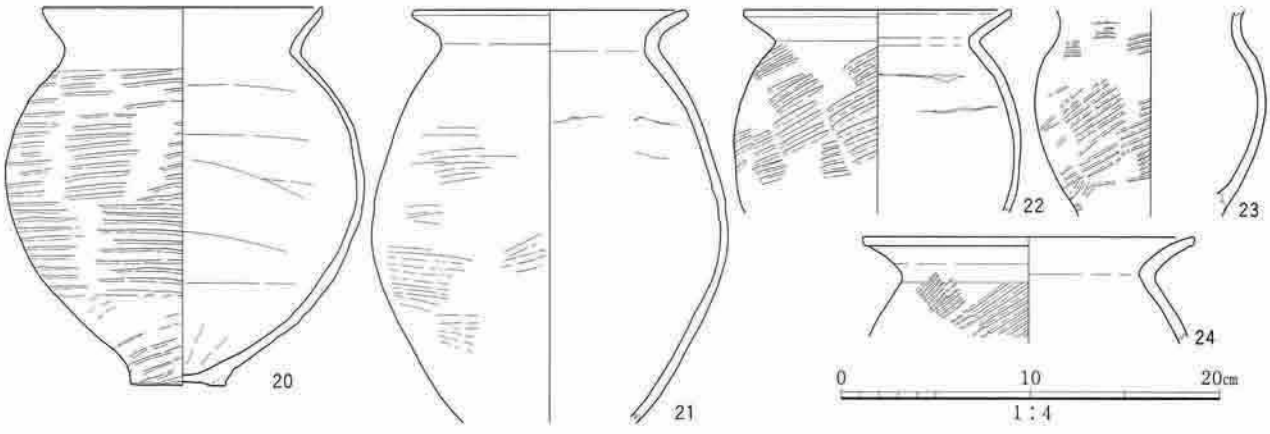


図284　NG87－67次SX701出土遺物

SD704：１区で検出された、幅0.5m、深さ0.2mの溝である（図293）。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。

SD706：４区で検出された、幅2.0m、深さ0.5m溝である（図292）。庄内式期の土器が出土した。

SD707：４区で検出された２段掘りの溝で、上端の幅1.5m、深さ0.5mある（図292）。底から畿内第Ⅴ様式の壺38が出土した（図289）。

38は平底で、やや縦にやや長い球形の体部を有する長頸壺で、器壁が荒れているため、器面調整は観察できない。肩部に１個所粘土粒が付着するが、不整形であるため、装飾用かどうかはわからない。河内Ⅴ－１様式のものと思われる。

SD708：幅３～４mの南北方向に延びる溝である。湧水が激しく、完掘することができなかった。検出面から0.3～0.4m下がったところで畿内第Ⅴ様式の甕25～30、壺31～33、高杯34～37が出土した（図287・288）。

25～30は外面に２～３条／cmの粗い平行タタキが施され、25・26・28・29は内面に縦方向のナデで仕上げられる。

31は細頸の長頸壺で、外面は縦方向のヘラミガキで仕上げられる。32は口縁端部が外反する長頸壺で、外面にはハケメ、内面には接合痕が残る。33は頸部に断面三角形の突帯を巡らせ、やや上げ底気味の平底を有する壺である。口縁端部には刻み目があり、体部には縦方向のヘラミガキが施される。内面には接合痕

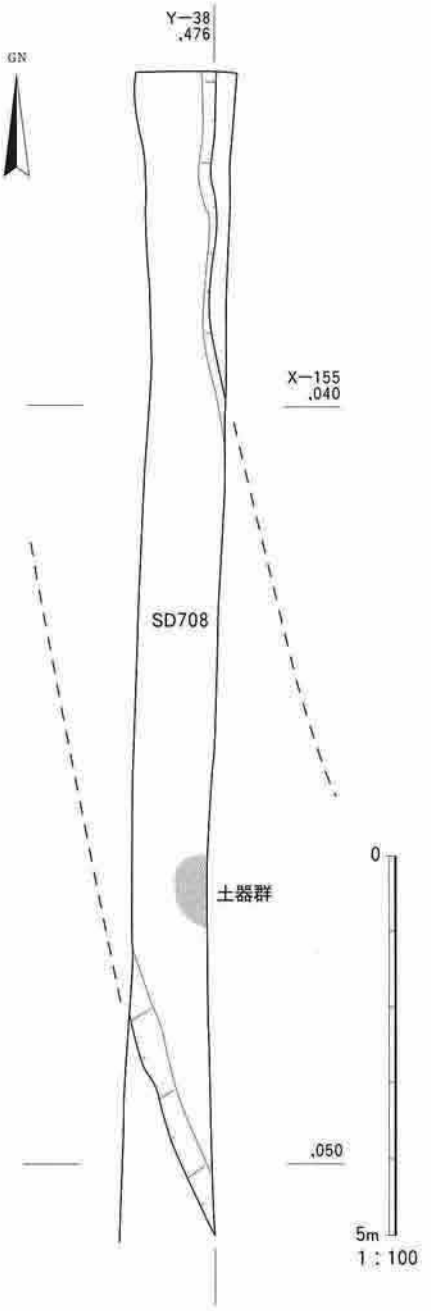


図285　NG84－６次５区SD708平面図

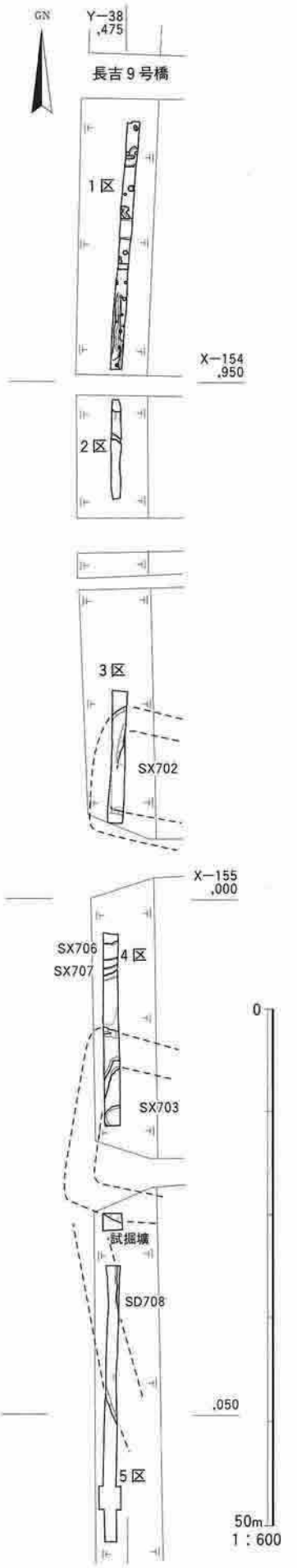


図286　NG84－６次調査地全体図

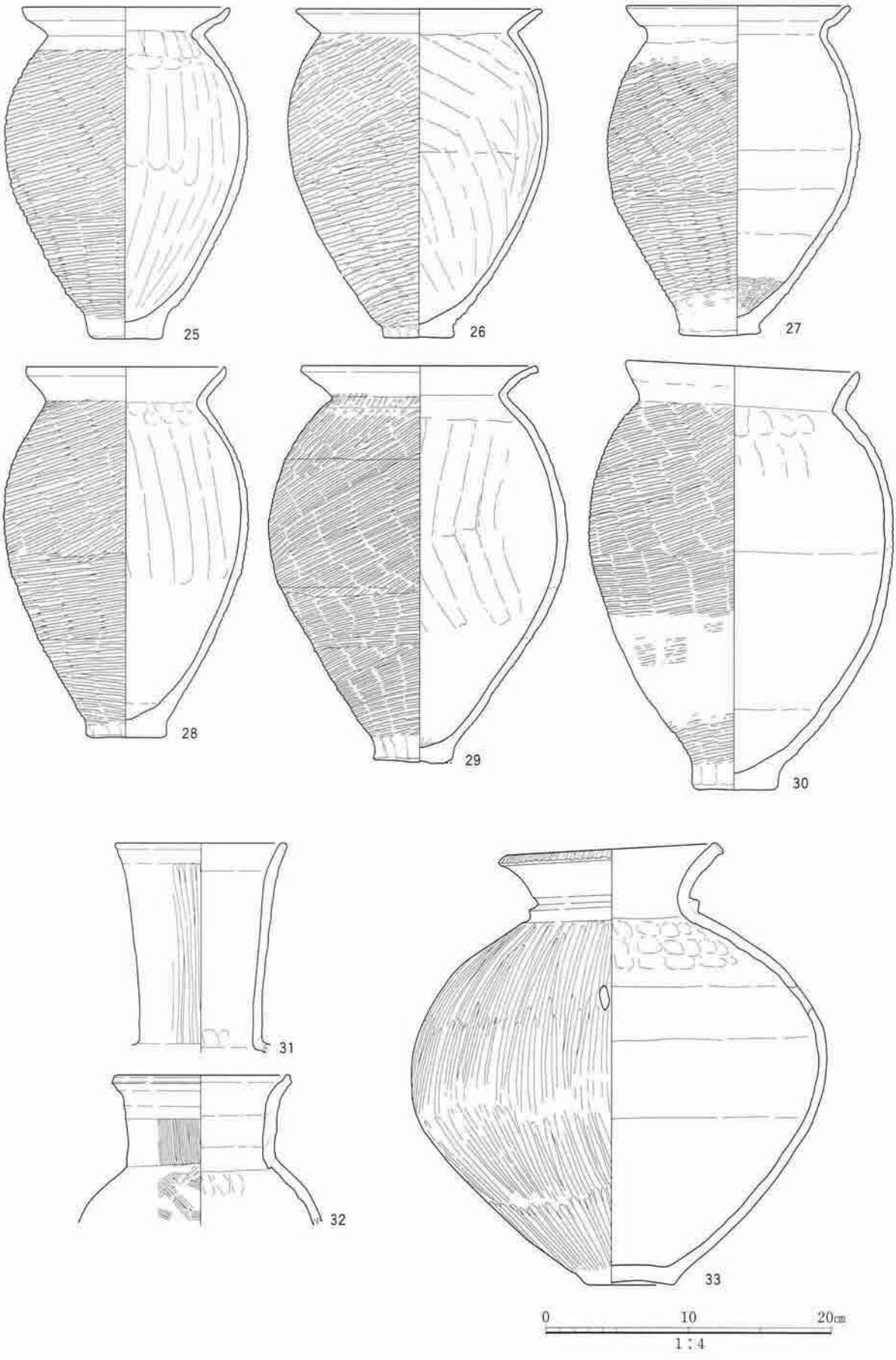


図287　NG84－6次SD708出土遺物（1）

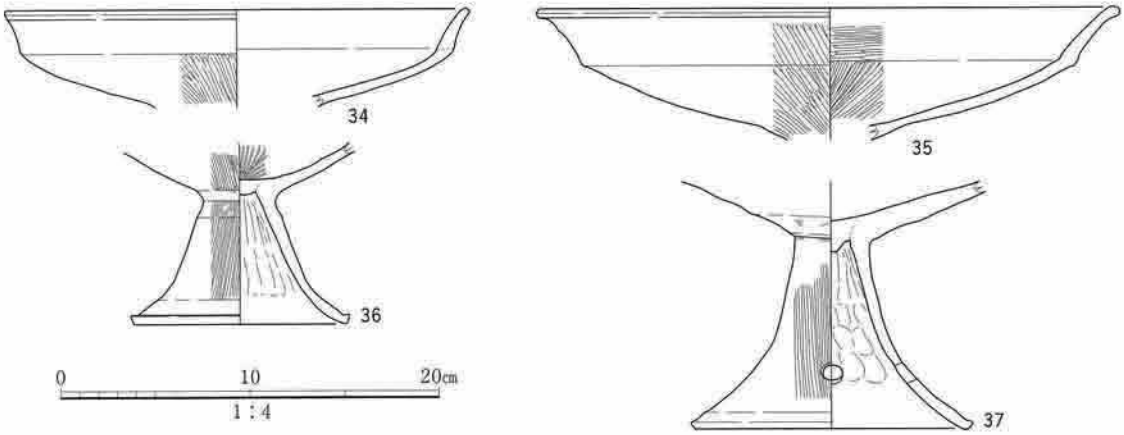


図288　NG84－6次SD708出土遺物（2）

が残る。

34は35より口縁部が外傾する。36・37は杯部と脚部の接合部分では円板充填が認められ、脚部は裾がやや外反する円錐形を呈する。

以上の遺物について、一連の溝と推定されるNG99－15次のSD807の中・下層出土遺物の時期とほぼ等しく、河内Ⅴ－2～3様式に該当する。

SX702：幅2.0m、深さ0.4mの「コ」字状に巡る溝が検出された（図290・図版40）。盛土は認められなかったが、一辺約8mの規模の方形周溝墓になると思われる。溝北半部の底面に積み重なるようにして20個体以上の土器が並んで出土し、南側でも甕・高杯が出土した（図291）。

40は外面に粗い平行タタキが施され、内面はハケの後、ナデで仕上げられる甕である。最大径は中位にあり、丸底である。四国に分布する粗製の甕に類似する。41・42は外面がタタキのちハケ、内面がヘラ

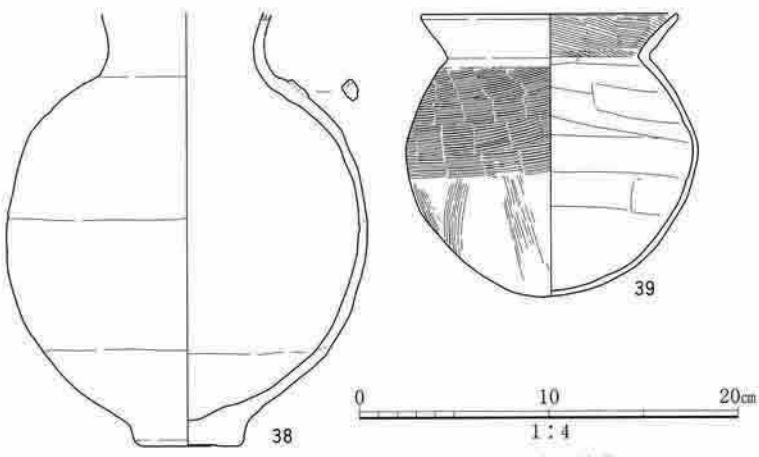


図289　NG84－6次SD707・SX703出土遺物
SD707(38)、SX703(39)

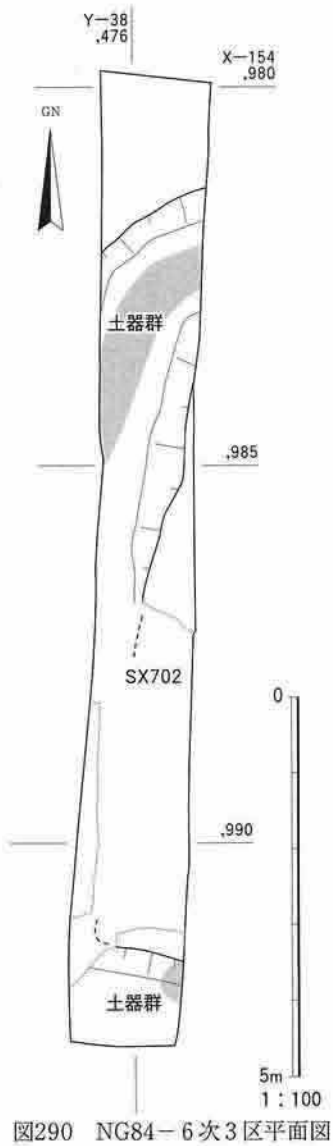


図290　NG84－6次3区平面図

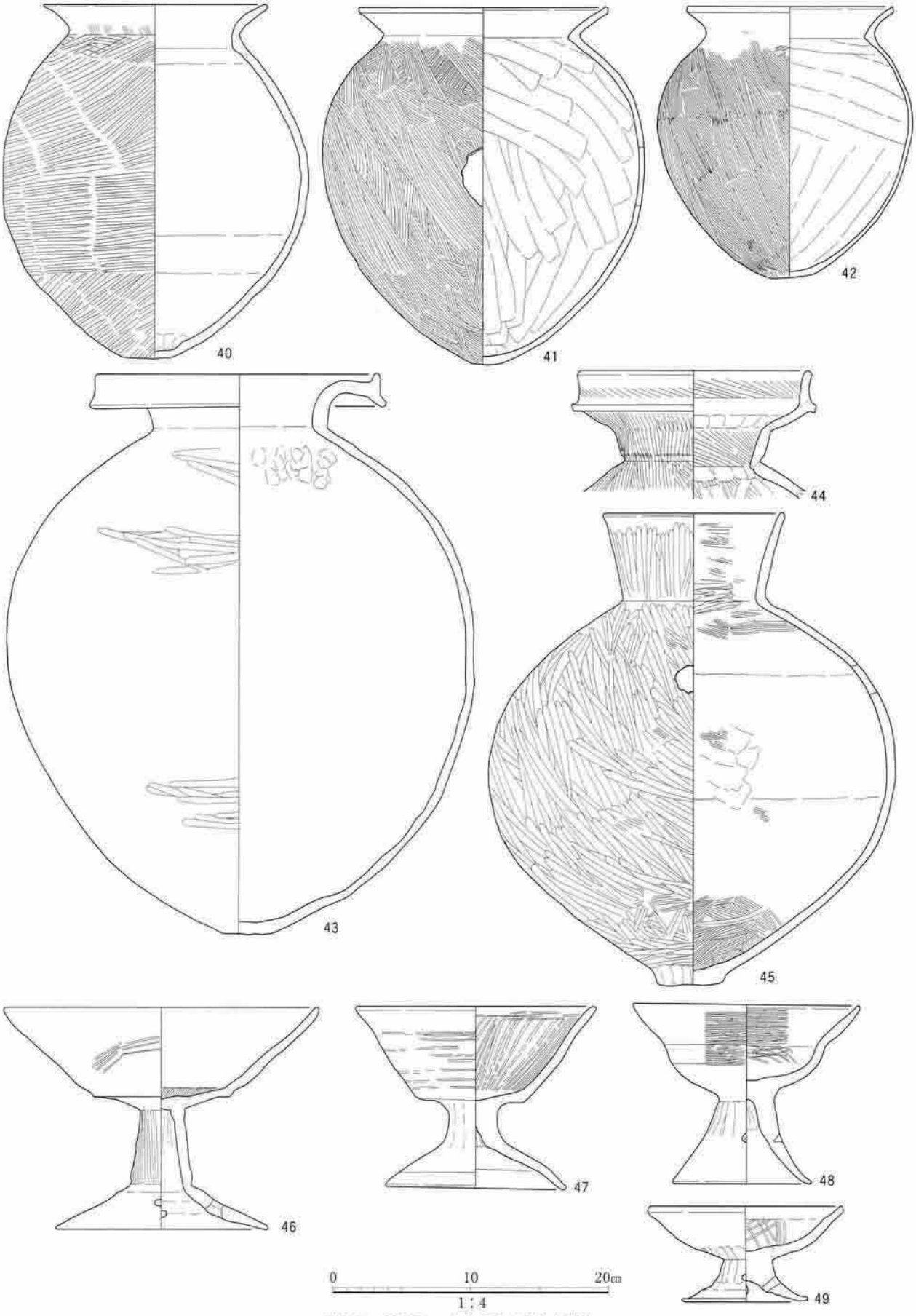


図291　NG84－6次SX702出土遺物

ケズリで仕上げられる庄内式甕である。いずれも最大径が上位にあり、底部には平底の名残がある。41は体部に焼成後に穿孔されている。

43は器高40cmを越える壺である。口縁部は強く外湾し、口縁端部は上下に拡張する。44は複合口縁を有する壺である。内外面ともハケが施され、口縁端部や屈曲部にはナデが施される。讃岐系と思われる。45は直口壺で底部は突出した平底である。外面はミガキで仕上げられる。肩部に焼成後穿孔がされている。

46～49は高杯である。46は口縁部が直線的に伸び、中空の脚柱部を有する。全体的に薄手でていねいに作られている。47も口縁部が直線的に伸びる。短い脚柱部の内面にはシボリメが残り、脚裾部は大きく開く。杯部内面には放射状の暗文が、外面には粗い横方向のヘラミガキが施される。48は杯底部が丸みがあり、口縁部は外傾して伸びる。脚部は円錐形状に開く。49は低脚の高杯である。

以上の遺物について、甕41・42の形態から庄内式期Ⅱに該当すると思われる[米田敏幸1991]。

SX703：幅3.0m、深さ0.6mの屈曲する溝が検出されたことから、方形周溝墓の北東隅と思われる。周溝から内面に赤色顔料が付着した庄内式甕39が出土した(図289・図版40)。なお、直径約2m、深さ0.35mあるSK702は、この方形周溝墓の主体部という可能性も考えられたため、慎重に掘削したが、土器の細片が出土した程度で、主体部の痕跡は見つからなかった。

39は体部に丸みのある庄内式甕である。体部上半にやや右上がりの細かい平行タタキを施し、下半はハケやナデでタ

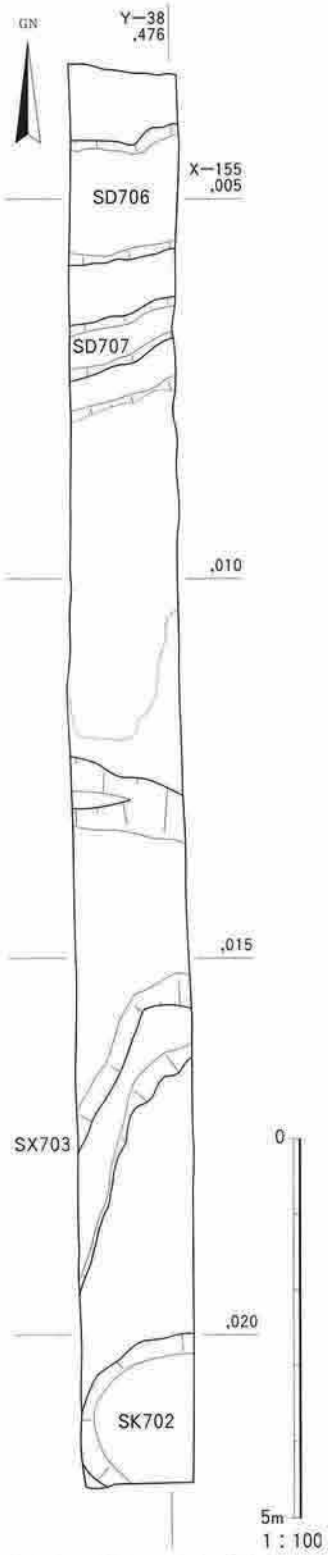


図292　NG84－6次4区平面図

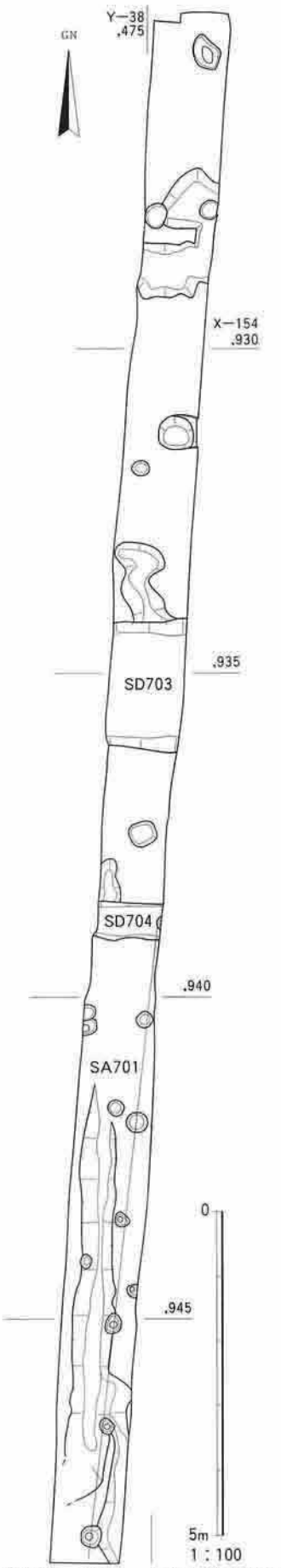


図293　NG84－6次1区平面図

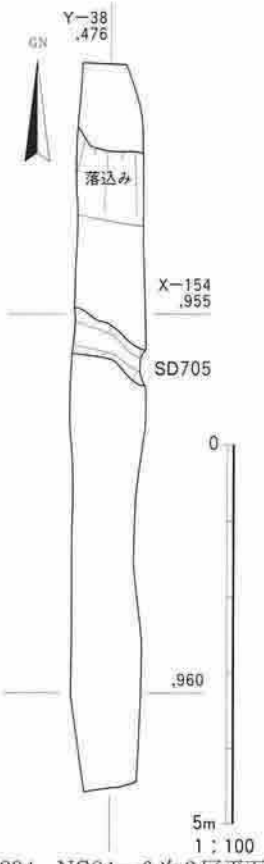


図294　NG84－6次2区平面図

タキメが消されている。内面は頸部までヘラケズリが施されている。庄内式期Ⅳのものと思われる。

c．古墳時代中期の遺構と遺物

NG84－6次調査

柱列や溝、土器溜が検出された。

SA701：1区で検出された。南北方向に1.6～1.7mのほぼ等間隔に並ぶ柱列である(図293)。柱穴は直径0.3mの円形で、柱痕跡が残っているものもあった。柵か建物を構成する柱列と思われる。北端の柱穴がSD704を切っていることと、後述するSD703から古墳時代中期の土師器・須恵器が出土したことから、この時期のものと判断した。

2区落込み：2区の北部で検出された落込みである(図294)。古式土師器の甕50、鉢形の甑51に加え、須恵器杯身53が出土した(図295)。50は受口状口縁を有する甕で、近江地方の特徴を有する。53は口縁端部が丸く仕上げられ、底部に回転ヘラケズリを施す。TK216型式のものと思われる。

SD703：2区で検出された。幅2.0m、深さ0.6mある。SA701の北端の柱穴から北に2.5m離れたところに位置し、SA701の北側を画する溝になる可能性がある。古墳時代中期の土師器・須恵器が出土した(図295)。

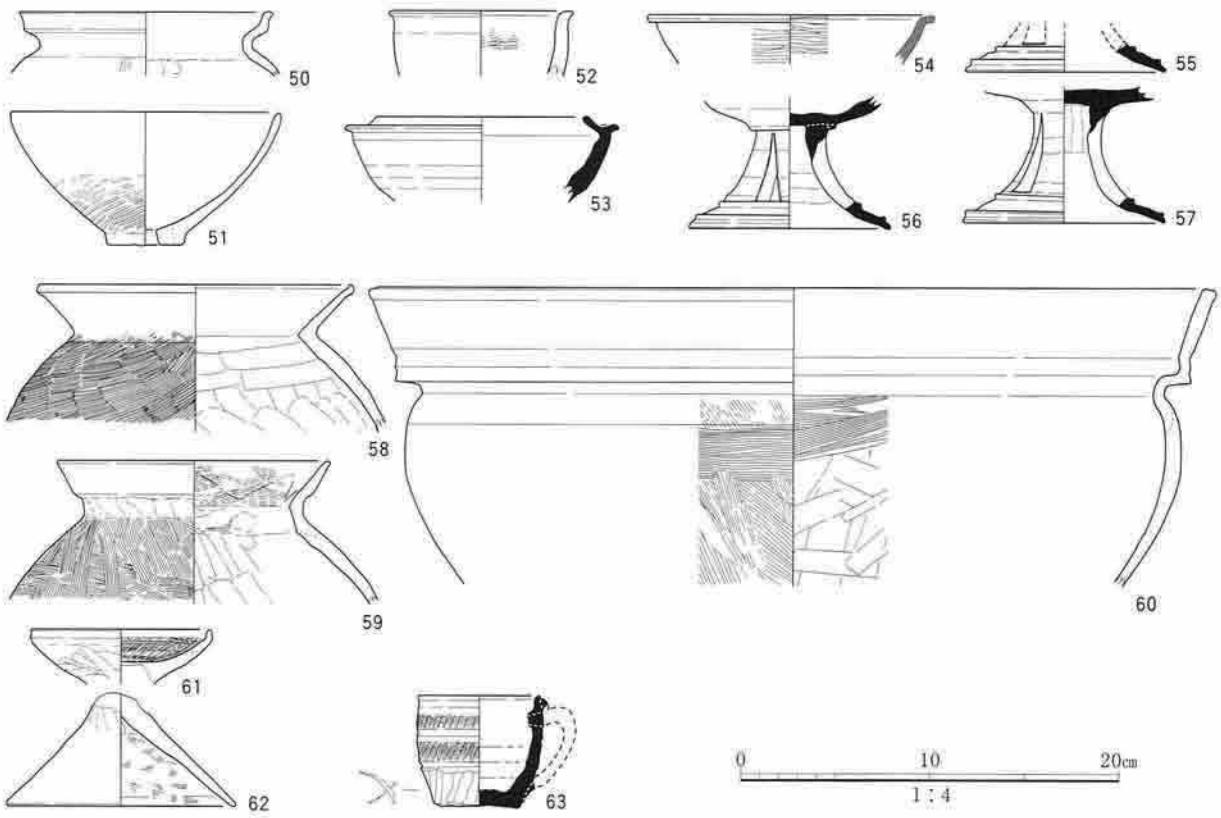


図295　NG84－6次2区落込みおよびSD703・705出土遺物

2区落込み(49・50・52)、SD703(51・53～56)、SD705(57～62)

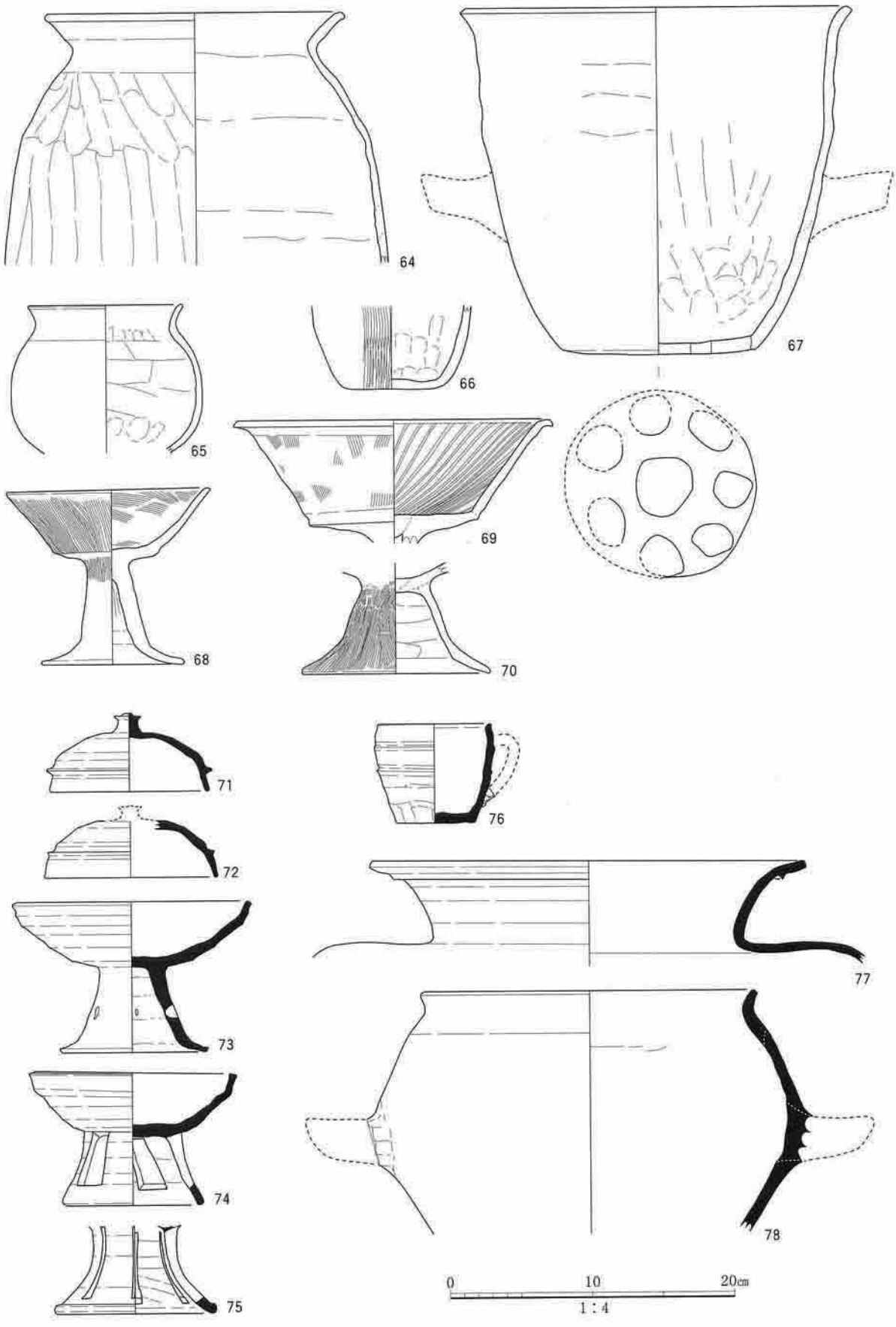


図296　NG84－6次SX703上層土器溜出土遺物

52は平底深鉢の口縁部と思われる。外面はタタキメのような痕跡が見られるが、器面が荒れているためはっきりとは見えない。内面には炭化物が付着する。54は瓦質焼成の高杯口縁部である。内外面には横方向のヘラミガキが施されている。55～57は須恵器高杯の脚部で、３方向に三角形のスカシ孔が穿たれる。

SD705：幅0.5m、深さ0.3mの溝である。土師器甕58・59、鉢60、小型器台61・62に加え、須恵器把手付椀63が出土した(図295)。この中で58・60～62は古式土師器の範疇に含まれるものである。63は凹線によって文様帯をつくって、波状文を施し、体部下部には縦方向の手持ちのヘラケズリが施される。

SX703上層土器溜：SX703周溝の埋没途中の窪みから古墳時代中期初頭の土師器・須恵器に加え、衣蓋・船・家・人物といった形象埴輪がまとまって出土した(図版40下)。形象埴輪は家形を除いていずれも明瞭な黒斑を有するもので、出土状況から近隣の古墳が破壊された可能性が高い。

土師器には甕64・65、平底深鉢66、甑67、高杯68～70がある(図296)。64は内外面ともにナデで仕上げられる。65は外面はナデで、内面はヘラケズリが施される。66は外面にハケが施され、底部から体部にかけての立上がりに丸みがあることから、土師器化したものである。67は外面の剥離が激しいため、調整はわからないが、内面は体部下半にユビオサエ、その上にはユビナデが観察される。蒸気孔は中央に１つとその周囲に８つの円孔がある。69は大型の高杯で、杯部内面に放射状の暗文が施される。

須恵器には高杯73～75、同蓋71・72、把手付椀76、甕77、鍋78がある(図296)。73・74は杯部が椀形を呈しする無蓋高杯である。73の脚部には刺突が５個所に認められ、貫通していないものもある。

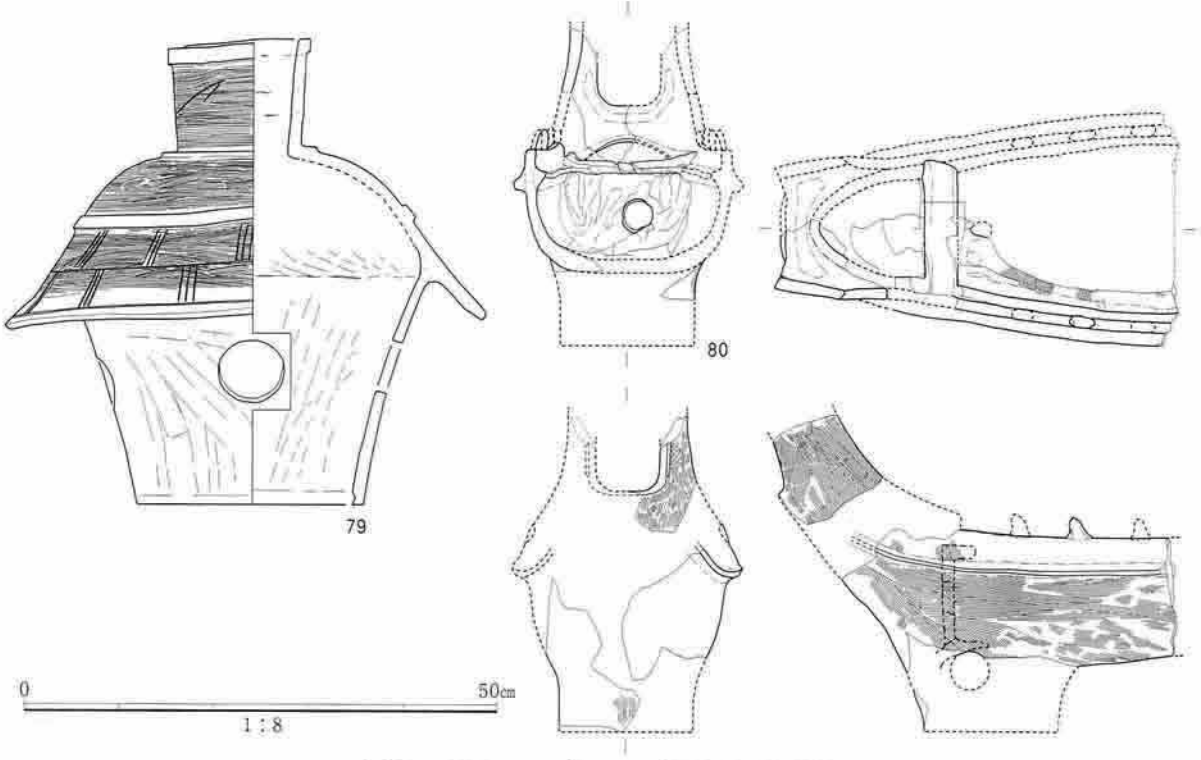


図297　NG84－６次SX703上層出土形象埴輪

74は5方向、75は8方向に方形のスカシが穿たれる。71はつまみの頂部が隆起し、裾の稜が明瞭な蓋である。72も同様の形態になると思われる。76は体部に稜が2条巡り、最下部は断続的なヘラケズリである。77は口径が30cmあり、口縁端部の下には稜が1条巡る。78は胎土に砂粒を多く含み、土師器の胎土に類似するが、還元焔焼成であるため、窯で焼かれたことがわかる。

埴輪には前述のように数種類の形象埴輪が含まれるが、ここでは衣蓋形埴輪79と船形埴輪80を図化した(図297)。

79は完形に復元できる衣蓋形埴輪の笠の部分で、器高が49cm、笠の直径が51cmある。立飾りを受ける筒部は外面に筋の長いヨコハケを施した後、ヘラ記号が施され、頸部には断面方形の突帯が巡る。笠部の外面は筋の長いヨコハケが施された後、断面方形の突帯で上下が2分される。さらに下部は沈線で区分され、3条単位の縦方向の沈線が施される。

80は全体の約半分が残り、残存長は45cmである。船首(もしくは船尾)は先端が破損しているが、反り上がり、円筒形の脚台が付く形態である。船首(もしくは船尾)の近くには仕切り板があり、断面

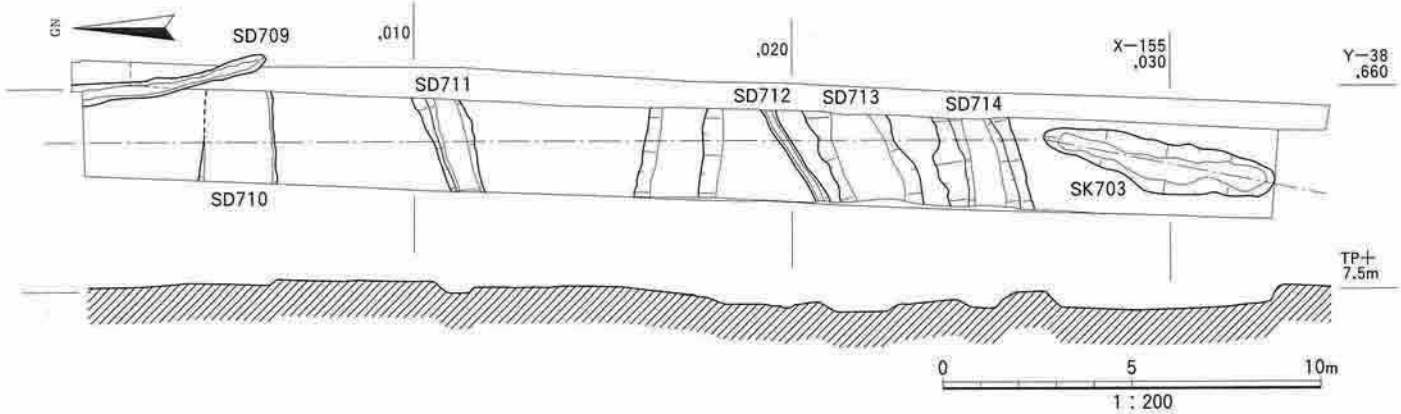


図298　NG87－67次古墳時代遺構配置図

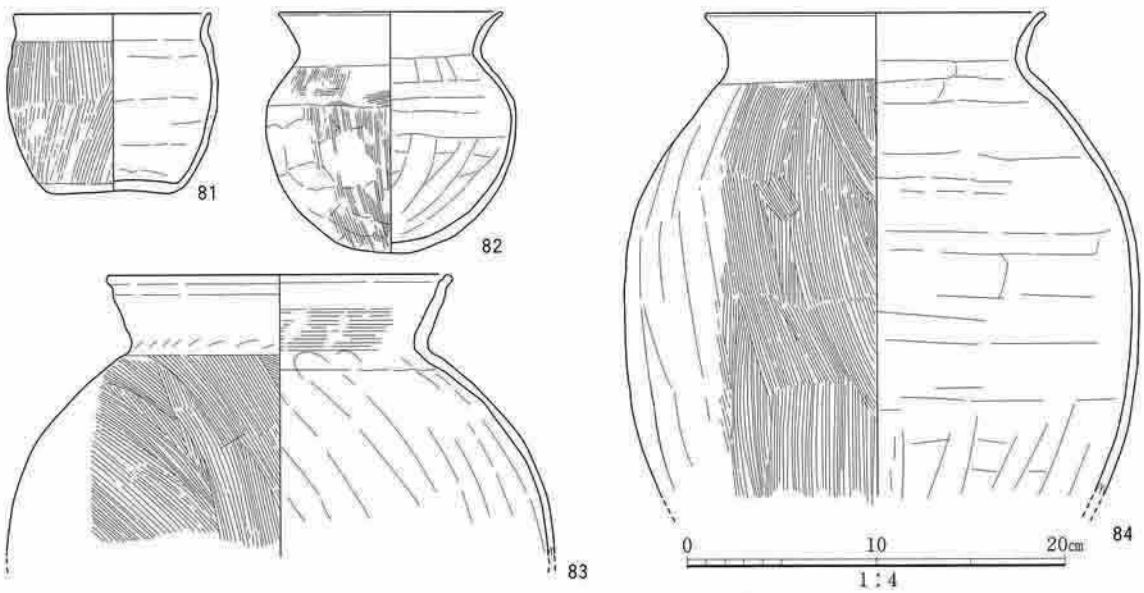


図299　NG87－67次古墳時代遺物
SK703(81～83)、長原7B層(80)

L字に曲げることによって、上面に平坦面を作り出している。側面にはフェンダーを表現したと思われる突帯が巡り、それ以下は断面がU字形を呈する。舷側端部にはピボットの表現がある。線刻による表現はないが、全体的に高廻り1号墳(長原169号墳)出土の船形埴輪に類似する[大阪市文化財協会1991：pp.51－53]。

NG87－67次調査

土壙・溝が検出された(図298)。主要なものを説明する。

SK703：調査地の南側で検出された長さ6.1m、幅1.3mの土壙である。土師器甕・須恵器甕などが出土し、土師器甕82～84を図示した(図299)。

溝SD712～714はいずれも東西方向に延びる(図版39下)。この中で、SD712・713はSD701の窪みを掘り直したもので、底には水成の砂礫が堆積していた。

この他、遺物では長原7B層から韓式系平底深鉢81が出土した(図299)。口縁が短く折れ、体部はハケで仕上げられる。

3)まとめ

本節では弥生～古墳時代の遺構・遺物を報告した。

弥生時代後期では大溝を2条検出した(SD701・708)。SD701は東西方向に延び、東150mの地点に位置するNG95－36次調査地(註1)で検出された東西方向の溝と一連のものと思われる。なお、この溝が延びている部分は周囲よりやや低くなっており、自然の窪みに沿って掘られ、排水などの機能があったと思われる。

一方、SD708は出戸自然堤防の東裾に沿って南北方向に延びる。このような南北方向の溝は近隣ではNG99－15次調査地のSD807[大阪市文化財協会2002a：pp.51－67]やNG03－6次のSD037[大阪市文化財協会2005a]がある。方向的に見て、SD708とSD037は一連の溝と思われ、集落を区画した可能性が高い[大庭重信2005]。

古墳時代ではNG84－6次調査地で船形や衣蓋形といった形象埴輪がまとまって出土したことが特筆される。本調査が行われた当時は、近隣で古墳は確認されていなかったが、2003年に本調査地の西隣で行われたNG02－8次調査において、長原古墳群の1期に比定される長原213号墳が発見された[高橋工2003、大阪市文化財協会2005a]。しかし、この古墳は築造された直後に新たに展開する集落によって破壊され、近くに家形埴輪が投棄されていた。本調査で見つかった形象埴輪も本来近隣に分布していた古墳に備わっていたが、直後に破壊されたことを物語るのであろう。　(寺井)

註)

(1)1995年8月から翌年2月にかけて行われた調査で、位置は図276に示したとおりである。調査成果は部分的に[櫻井久之1996a～c]などで紹介されているが、未報告である。

第２節　NG84－86次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では平野区長吉出戸７・８丁目で行われたNG80－１・80－２・83－65・84－５・84－18・84－74・85－17次調査を報告する(図300)。この地域は近年では長吉東部地区土地区画整理事業や市営住宅建設などの事業に伴って広い面積の調査が行われているが、本節で報告するのは下水工事などに伴う小規模なものばかりである。

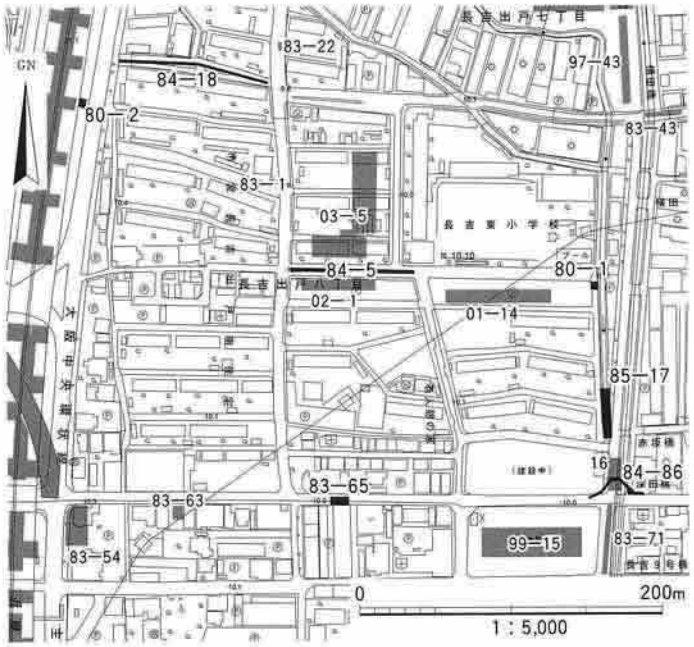


図300　NG84－86次などの調査地位置図

NG80－１・84－５・84－18次調査は下水工事に伴って行われた。NG80－１次調査では５ｍ×６ｍのトレンチを１個所設定し、奈良時代の土壙が検出された。

NG84－５次調査はNG02－１次と03－５次調査地の間に位置し、NG03－５次調査では弥生時代中期の方形周溝墓が検出されている[辻美紀2004]。調査ではTP＋8.1～8.3ｍの標高で中世の水田が検出されたが、顕著な遺構・遺物は発見されなかった。

NG84－18次調査ではGL－2.5ｍまでしか掘削できなかったため、平安から鎌倉時代の水田と流路が検出されたのみである。ただ、深掘りをした人孔部分ではTP＋7.1～7.6ｍで長原式土器や弥生時代中期の土器を含む包含層を確認した。

NG84－74次調査は道路のコーナーを１個所掘削したが、顕著な遺構・遺物は見つからなかった。

NG83－65・84－86次調査は関西電力による管路の新設工事に伴う調査である。NG83－65次調査は夜間に行われ、GL－3.5ｍまで掘削した。調査の結果、弥生時代中期と飛鳥時代の遺構が検出された。NG84－86次調査は深田橋のすぐ北側で、大正川を横断するトレンチが設定された。トレンチの中央はNG16次調査地と重なる。調査の結果、古墳時代前期から中期の遺構が検出され、井戸からは大量の庄内式期の土器が出土した。

NG85－17次調査は大阪市土木局によるカルバート建設に伴う調査である。上部は近世の流路で壊されていたが、下部ではTP＋５ｍ前後のところで縄文時代晩期の土器片を出す地層が残っていた。

２）調査の結果

ｉ）層序

表33　NG83－65次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	7A	灰色粘土	>30					飛鳥～奈良
2	7A	暗灰色含砂粘土	<10	SK706埋土				古墳
3	7B	暗灰褐色含砂粘土質シルト	30				土師器・須恵器	
4	7B	黒色細粒砂質粘土	20					
5	8C	青灰～青緑色粘土質シルト	50					弥生
6	8C	灰オリーブ色細粒砂	10					
7	8C	青緑色細粒砂	10~20					
8	8C	青緑色シルト	10					
9	8C	緑灰色粗粒砂	70					
10	9C	黒褐色シルト質粘土	10	暗色帯				縄文
11	9C	黒褐色粘土質シルト	10	暗色帯				
12	13	緑灰色極細粒～細粒砂	10					旧石器
13	14	青灰色含礫シルト～砂礫	>100					

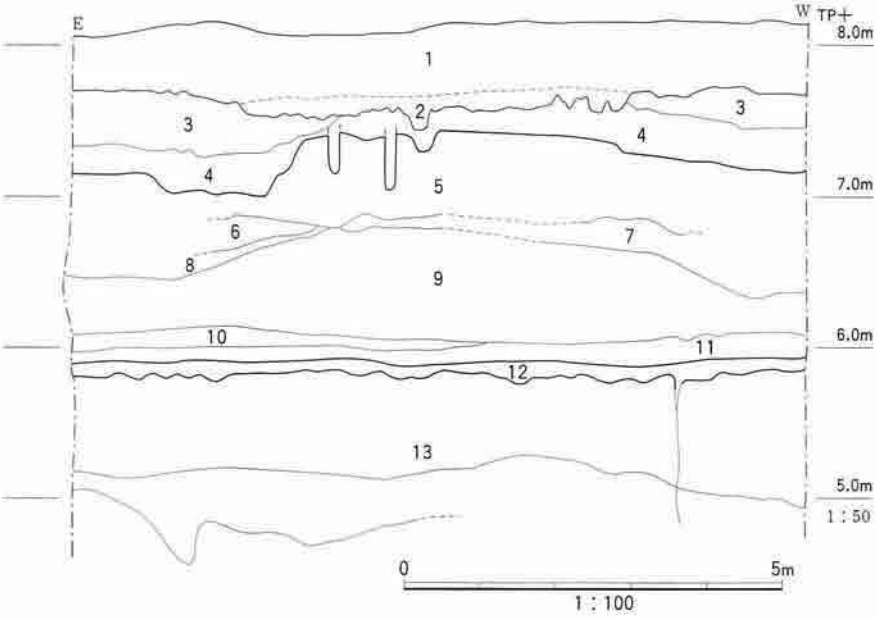


図301　NG83－65次南壁断面図

NG83－65次調査地の南壁で層序の記録を行った(図301・表33)。GL－2.7mまでは重機で除去したため、長原7A層より上は記録できていない。なお、当地はNG83－63次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985]とともに、「出戸自然堤防」でもっとも高い位置と考えられている[高橋工1999]。

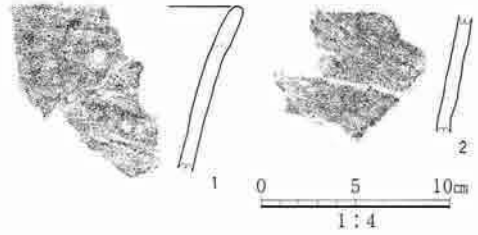


図302　NG85－17次出土縄文土器

ii)遺構と遺物

a．縄文時代の遺物

NG85－17次調査地の長原9C層と推定される黒色粘土層から縄文土器1・2が出土した(図302)。これらは口縁部を若干肥厚させ、頸部が外反する粗製の深鉢である。口縁の特徴から縄文時代後期中頃の北白川上層３式に該当すると思われる。

b．弥生時代の遺構と遺物

NG83－65次調査

長原8B層基底面で土壙、ピットが検出された。

SK801：調査地の東際で検出された。東西2.5m以上で、深さ0.25mである。埋土は黒色細粒砂質粘土で、畿内第Ⅲ様式の土器が出土した。

SK802：調査地の西際で検出された。東西1.7m以上あり、深さは0.4mである。埋土はSK801と同じく、黒色細粒砂質粘土である。

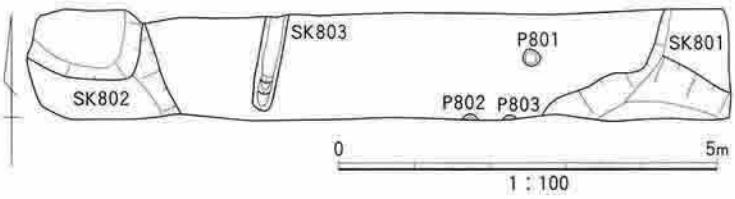


図303　NG83－65次弥生時代遺構配置図

SP801～803については図301の4層(長原7B層相当)の途中面から掘られている柱穴である。長原8B層基底面で検出されたため、ここで報告したが、弥生時代後期以後の遺構になる。

また、NG80－1次や85－17次調査では遊離資料ではあるが、弥生時代中～後期の土器が出土している。3はNG80－1次調査地のSD601から出土した弥生土器片で、シカと思われる線刻画が描かれている(図304)。

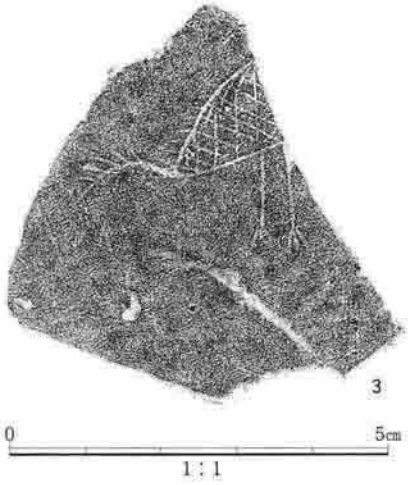


図304　NG80－1次絵画土器拓影

c．古墳時代の遺構と遺物

NG84－86次調査

長原7B層の途中面で古墳時代前期から中期の遺構が検出された(図305～307)。

SB701：東区で検出された掘立柱建物で、南東－北西方向の柱間は2.5m、南西－北東方向は1.8mある。コーナーの柱穴には柱材の一部が遺存していた。

SP701・702：西区で検出されたピットである。距離は1.8mあるが、組合うかどうかはわからない。古墳時代中期の土器片が出土した。

SK701～705：西区で検出された土壙である。深さはSK701が0.4mあるが、そのほかは深さ0.1m前後の浅い皿状を呈する。いずれからも須恵器が出土していることから、古墳時代中期のものである。

SX701：東区の東側で検出された落込みである。「出戸自然堤防」の東斜面に当ると思われる[高橋1999]。埋土には須恵器が含まれる。

SE701：東区で検出された井戸である(図308・図版41上)。一辺1.8m程度の隅丸方形を呈し、深さは検出面から1.3mであるが、土器はそれよりも上から出土していることから、本来は1.5m程度あったと思われる。土器が多量に出土し、その取り上

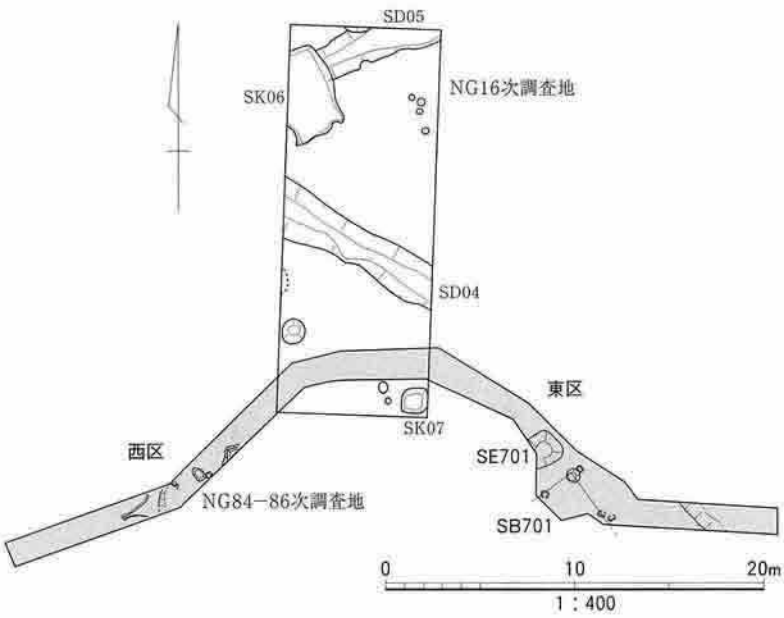


図305　NG84－86次とNG16次調査地の関係

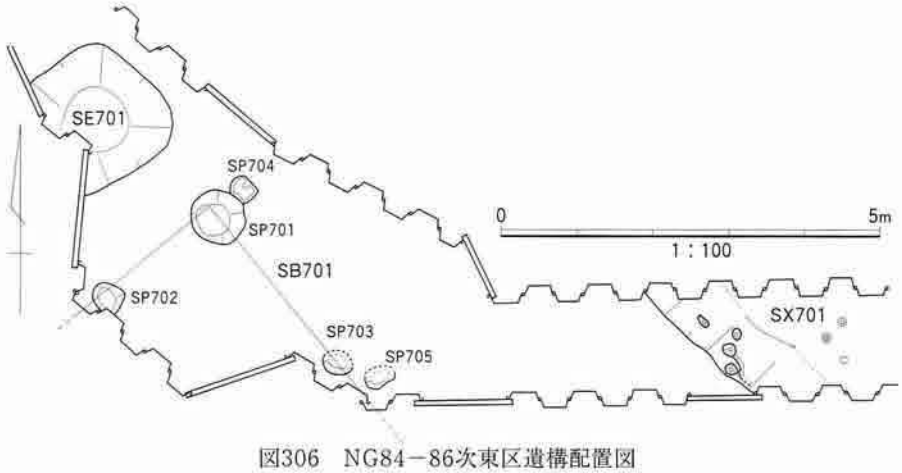


図306　NG84－86次東区遺構配置図

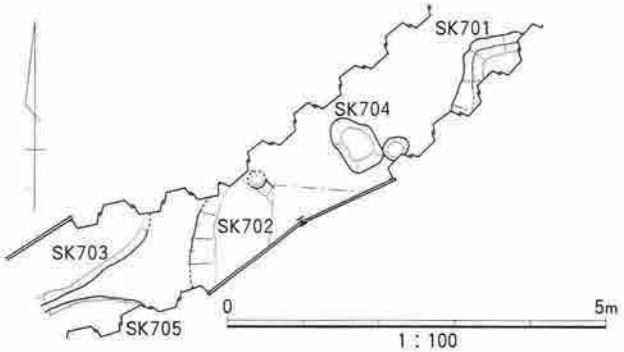


図307　NG84－86次西区遺構配置図

げに手間がかかったため、十分な断面図が作成できなかったが、大まかに廃絶後の堆積層（１層）と機能時堆積層（２層）に分けることができる。さらに前者は上部の黒色シルト質砂層（1a層）と下部の黒色細粒砂混り粘土層（1b層）に細分される。

（寺井）

SE701から多数の土器が出土した。完存率の高いものを中心に、時期的な特徴を示したり、非在地と推測される資料を図示した（図309～311）。遺物はSE701の機能時堆積層である２層から出土した38～56と廃絶後の堆積に含まれる4～37がある。後者は1a層から出土した4～30と、1b層から出土した31～37に分けられる。

4～10は第Ⅴ様式系の甕である。4～6は小型、7～10は中型である。中型のものには肩部の張り出しが顕著な7・8とそうでない9・10とがある。

4は外面をタタキで整えた逆円錐台部の上に粘土紐を積み上げて体部上半をつくり、外面に右上がりのタタキを施す。タタキは５条１単位とし、左のものが右のタタキを切っている。逆円錐台部とその上に積み上げる粘土紐の接合痕は明瞭に残る。内面は逆円錐台部と上半部において、それぞれ右下から左上方向にハケを施す。5も4と同様に逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕が明瞭に認められる。口縁端部を上方に立ち上げ、外面に２条の沈線を入れる。また、底部は外側縁に粘土紐を接着し

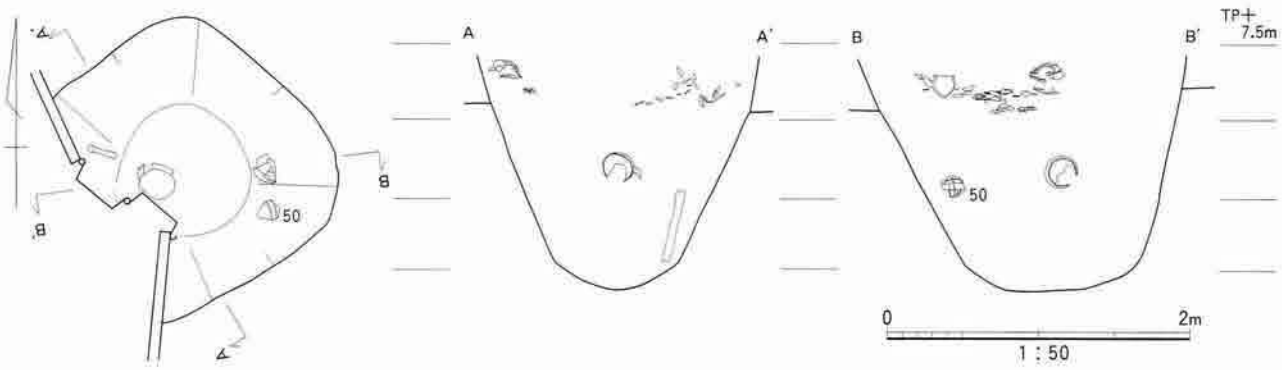


図308　NG84－86次SE701実測図

て、輪台状に成形する。6の逆円錐台部は下位から上位に連続してタタキを施す。逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕は丁寧にナデ消しがなされる。その後、上半部において腹部、肩部の順にタタキが施される。7は逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕がわずかに認められ、その接合痕の上からタタキが施される。8は外面のタタキを部分的にナデ消し、ハケ調整を施す。口縁部はていねいな横方向のナデで整える。9は逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕をナデ消しするが、接合痕がわずかに遺存する。内面はナデ調整であり、逆円錐台部では縦方向、それより上では横方向に施す。10は逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕を消去せず、直接その上にタタキを施す。内面は右下から左上方向にナデを施す。

11～13は庄内式甕である。いずれも非生駒西麓産の胎土である。

11は体部が張り出し球形を呈する。底部を欠損するが凸レンズ状の狭い平底に復原される。タタキの単位は粗いが、主軸を合わせ連続的に施される。肩部を細かなタテハケで調整する。ハケは上から下方向に施される。口縁部は内面をハケで整えた後、内外面にヨコナデを施す。端部には1条の沈線が入る。内面のケズリは体部下半が下から上方向、上半が右下から左上方向に施す。頸部やや下に接合痕が観察されるが、その直下でケズリは止まる。胎土には1～2㎜の長石の角礫、0.5㎜の石英・長石が多く、微細な雲母も含まれる。12は肩部が張る外形である。図示していないが狭い平底の底部片があり、同一の胎土・色調を呈することから12と同一個体である可能性が高い。タタキの単位は8条／1.5㎝である。体部下半から肩部までをタテハケで整える。内面は下半から肩部を縦方向、肩部を右下から左上方向、頸部直下を右から左方向にケズリを施す。肩部には部分的に施されたハケ調整が残存する。口縁部内面には端部から2㎝下の所に接合痕が見られ、外面においてもそれに対応する位置までタタキが認められる。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、端部は丸く整える。胎土には2㎜大の花崗岩の角礫や1㎜の長石・石英が多く、微細な雲母も含まれる。13も12と同様に肩が張る。体部外面は粗いタタキを施した後、縦方向のハケを施す。タタキメは口縁部下半まで達する。内面はケズリで整えており、体部下半は下から上方向、腹部から肩部は右下から左上方向、頸部直下は右から左方向と部位ごとにそれぞれ方向が異なる。口縁部は内外面を横方向のナデで整え、端部にわずかに面を持たせる。胎土には0.5～1.0㎜大の長石・石英が多く、0.5～2.0㎜の赤色斑粒も含まれる。

14は丹後・丹波系の甕である。二重口縁であり、外面には3条の擬凹線文が認められる。しかし、この擬凹線文が明瞭なのは口縁部の1／6であり、1／2では横方向の強いナデとなっている。やや上げ底ぎみの平底であり、外面にはヘラ切りの痕跡とそれに伴う砂粒の移動が認められる。外面は縦方向のハケ調整後、植物繊維状の原体による斜方向の調整を施す。植物繊維状の原体は幅2～4㎜の繊維を3～5条を束ねたものと想定され、起点は不明瞭である。内面は頸部から胴部上半を右下から左上方向にケズリを施した後、さらに胴部下半を縦方向のケズリで整える。口縁部内面はヨコナデで調整するが、工具の痕跡が遺存しており屈曲も鈍い。退化した擬凹線文と頸部のしまった外形が特徴であり、白米山式[高野陽子2003]に属すると判断される。胎土には4㎜大の花崗岩片や2㎜前後の長石、石英の角礫の他、チャートや1㎜大の赤色斑粒などが含まれる。

15～19は北・東四国地域の甕、あるいはその地域の影響を受けたとみられる甕である。15・16は

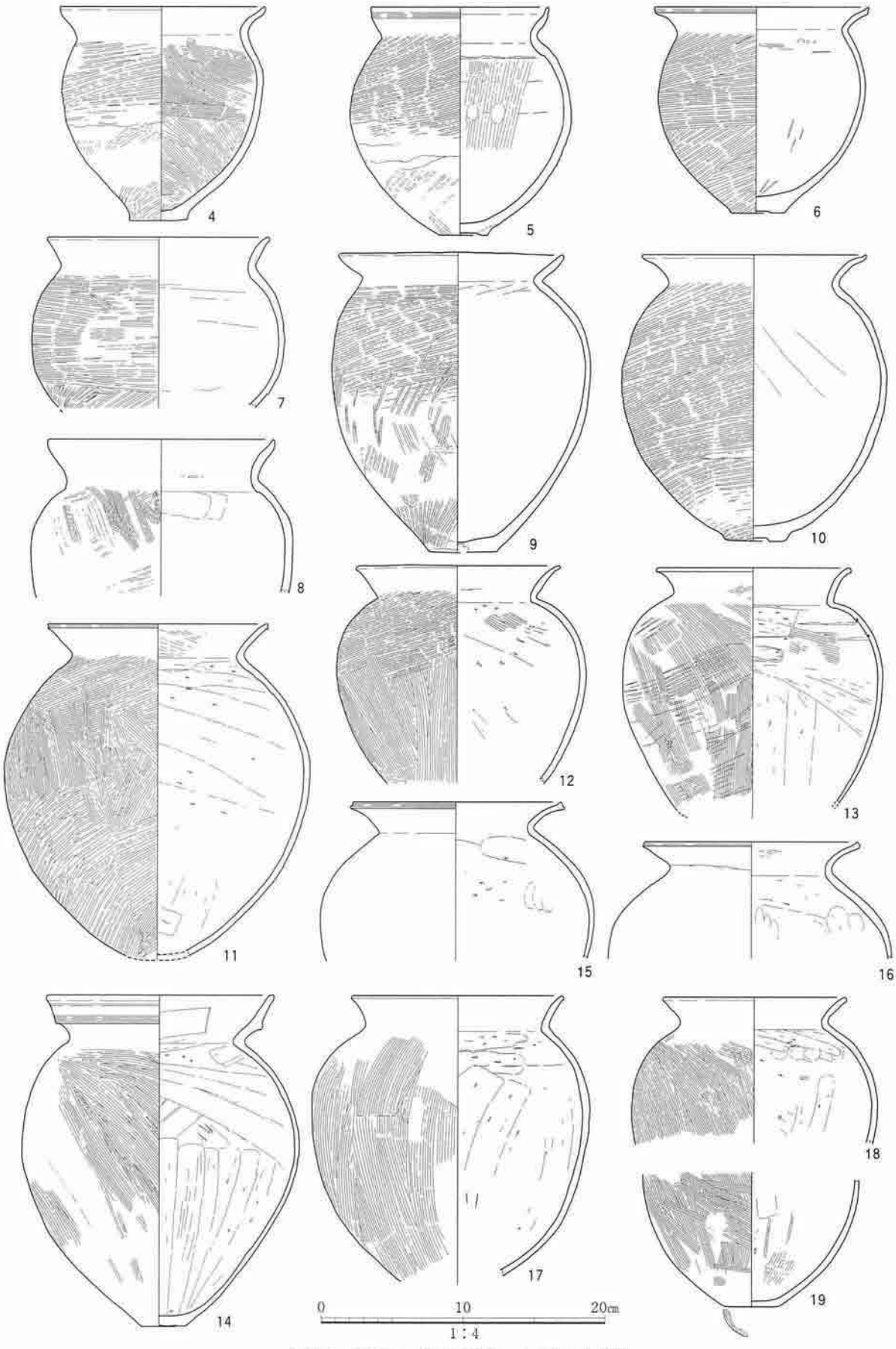


図309　NG84－86次SE701－1a層出土土器

阿波型甕である。いずれも肩部が張り、外面はナデで整える。内面はナデ調整後、肩部に左から右方向のケズリを施し、部分的にユビオサエをする。17は頸部直下に右から左方向のケズリを加える。いずれも口縁端部はわずかに上方につまみ上げる。15には口縁端部外面に明瞭に1条の沈線が認められるが、16は沈線というよりも鈍い凹凸である。

17～19は外面をハケ、内面をケズリで整える。内面のケズリは肩部より下が縦方向、肩部から頸部にかけて横方向である。17の肩部のケズリは左から右方向であるが、18は右から左方向である。いずれも口縁端部には15・16のような沈線は認められない。19は底部外面にもハケ調整が認められる。

20は庄内式甕のように口縁端部をわずかにつまみ上げる。胴部外面の煤や底部の被熱痕は認められず壺に分類される。内外面をハケ調整し、口縁部はていねいなヨコナデで整える。21は外面に縦方向のミガキを施す短頸壺である。22は直口短頸壺である。口縁部外面に浅い凹線を施す。頸部から口縁部にかけては外面をナデ、内面をミガキで整える。内面頸部直下にはシボリの痕跡が残る。

23は広口壺である。口縁端部に2条の凹線を施す。体部外面と口縁から頸部内面にかけて横方向のミガキで整え、部分的に肩部内面にもミガキが達する。頸部直下にオサエが認められる。24は壺の体部下半である。最大径位付近には横方向、下半には縦方向のヘラミガキが施され、内面はハケ調整である。内面には成形時の接合痕があり、この接合痕を境にして内外面の調整方向がそれぞれ変化する。

25は長頸壺である。逆円錐台部に粘土紐を付加しながら、体部上半部、頸部を成形する。体部外面はタタキで整え、肩部から頸部、口縁部にかけて縦方向のハケを連続的に施す。内面は体部下半部を縦方向のハケで整えるが、肩部から頸部にかけては接合痕が残存する。頸部内面は下方から螺旋状にハケを施す。口縁部は内外面ともにヨコナデで整える。また、口縁部直下には記号文として、ヘラ描き沈線を縦方向に2条入れる。

26～28は高杯である。26は椀形高杯の杯部である。内外面をナデで整えた後、縦方向のミガキを施す。27は低脚高杯の脚部である。脚裾部は外面を縦方向のミガキ、内面をハケで整える。スカシ孔は4個所である。28の杯部は屈曲位から口縁部にかけて緩やかに外反する。外面は杯部上半と下半でそれぞれ縦方向のミガキを施す。内面は下半を放射状のミガキで整えた後、屈曲位を横方向にミガキを施し、さらに上半部を縦方向のミガキで平滑にする。杯部内面の屈曲位に横方向のミガキを施す。脚部は中実で、内面上部にシボリメが残る。外面は幅広い縦方向のミガキである。スカシ孔は4個所である。

29は器台あるいは壺の口縁部である。外面にヘラ描き鋸歯文を施し、上・下縁にキザミメを入れる。鋸歯文の谷部には2個1単位の円形浮文を貼り、その上から竹管文を押圧する。30は丸底の鉢である。口縁部を横方向のナデ、底部を浅いケズリで整える。底部内面にはユビオサエの痕跡が認められる。

31は第Ⅴ様式系の甕である。逆円錐台部の上に粘土紐を付加して体部上半を成形する。体部外面のタタキは肩部に位置を保った状態で施しており、肩部は平行であるが、それより上では右上がり、下では右下がりとなっている。底部は円盤充填によって成形したことがうかがえる。

32は庄内式甕である。0.8㎜前後の大きさの長石・石英の角礫を含む。角閃石は観察されず。非生駒西麓産である。底部は直径2.2㎝の凸レンズ状の平底である。肩部に右上がりのタタキが認められ

る。タタキの単位は８条／2.2cmと粗い。内面のケズリは肩部までは縦方向、肩部は左から右方向、頸部直下は右から左方向のケズリを施す。

33は北・東四国系の甕である。体部外面を縦方向のハケで整えた後、腹部にナデを施す。口縁端部に１条の沈線を施す。内面は縦から斜め方向にケズリを施す。

34・35は鉢である。34の口縁部は内湾して立ち上がり、内外面に接合痕が残存する。主に外面をナデ、内面をハケ後ナデで整えており、底部外面には浅いケズリ調整が加えられる。丸底であると推測されるが、丸底で外面に浅いケズリを施す内湾口縁の鉢は北・東四国地域で多く見られる。35は外面を斜め方向のミガキ、底部内面を放射状のミガキで整える。また、底部外面にケズリを施して尖底にする。36は椀形高杯の杯部である。内外面を横方向のナデで整えた後、口縁部外面と端部に多条沈線を施す。内面は口縁部に精緻な横方向のミガキを施した後、放射状に暗文を入れる。37は高杯杯部である。杯部上半は外反しており、屈曲部の稜線は明瞭である。器面は磨滅しているが、内外面に精緻な横方向のミガキが観察される。にぶい橙色の胎土であり、含まれる砂粒は細かく量も少ないため精良な胎土に分類される。これらの特徴から吉備地域の低脚高杯である可能性が高い。

38～44は第Ⅴ様式系の甕である。38～42は小型、43は中型、44は大型である。いずれも逆円錐台部の上に粘土紐を付加して体部上半を成形する。いずれの底部も短く外反して立ち上がる。

38の外面には、逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕が残り、接合時のオサエのみの無調整部分が約２cm幅で帯状にめぐる。内面は工具でナデ調整を施す。39は内面に逆円錐台部とその上との接合痕が明瞭に残り、体部上半にも粘土紐の接合痕が認められる。外面上半部のタタキは左の単位が右のものを切っている。40は外面に逆円錐台部とその上との接合痕がわずかに認められるが、上半部のタタキが逆円錐台部にまでおよび、逆円錐台部のタタキと切合いを持つ。41は逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕が明瞭に残る。上半部のタタキは接合痕の直上にまでおよぶ。上半部に右下から左上方向にハケ調整する。42は外面に逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕が認められる。上半部から逆円錐台部にかけてタタキが連続している部分が認められ、タタキによる整形が、成形後に胴部上半から底部にかけて連続して行われたとみられる。工具を用いたとみられるナデの痕跡が右下から左上方向に明瞭である。口縁部は先が細くなっており、端部がわずかに上方を向く。43は体部が張り出し球形を呈する。外面には逆円錐台部とその上との接合痕が残り、内面にも体部上半に粘土紐の接合痕が残る。縦方向のハケが施されるが、これらの内面の接合痕は完全には消去されていない。44は肩部、腹部、底部で外面の調整や整形手法が異なる。底部即ち逆円錐台部は内外面ともにナデ調整する。腹部は外面にナデとタタキを施すが、内外面とも粘土紐の接合痕が明瞭に残る。肩部は主軸をそろえて連続的にタタキを施す。

45・46は甕の逆円錐台部と相同形の鉢、47・48は口縁部が屈曲し外側に開く鉢である。外面は前者がタタキを施し、後者がナデで整える。

49は手焙形土器である。「く」の字口縁の鉢の内側に蓋部を取り付ける。開口している側の鉢口縁部には抉りが入れられており端面をナデで整える。外面全体と内面覆い部に縦方向のミガキを施す。体部中位に１条の突帯がめぐり、口縁部と突帯上にはキザミメが密に入る。

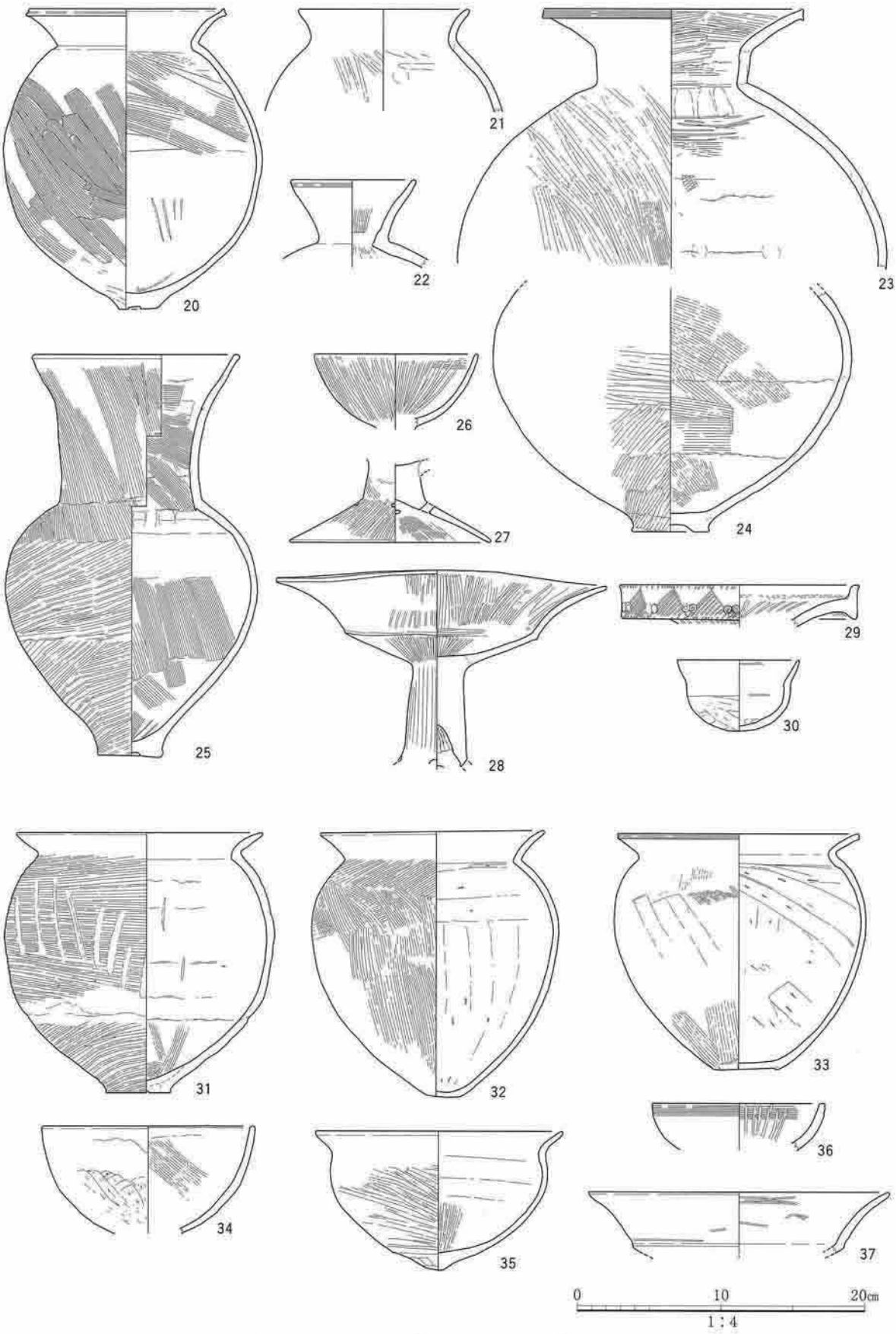


図310　NG84－86次SE701－1a・1b層出土土器

1a層(19～29)、1b層(30～36)

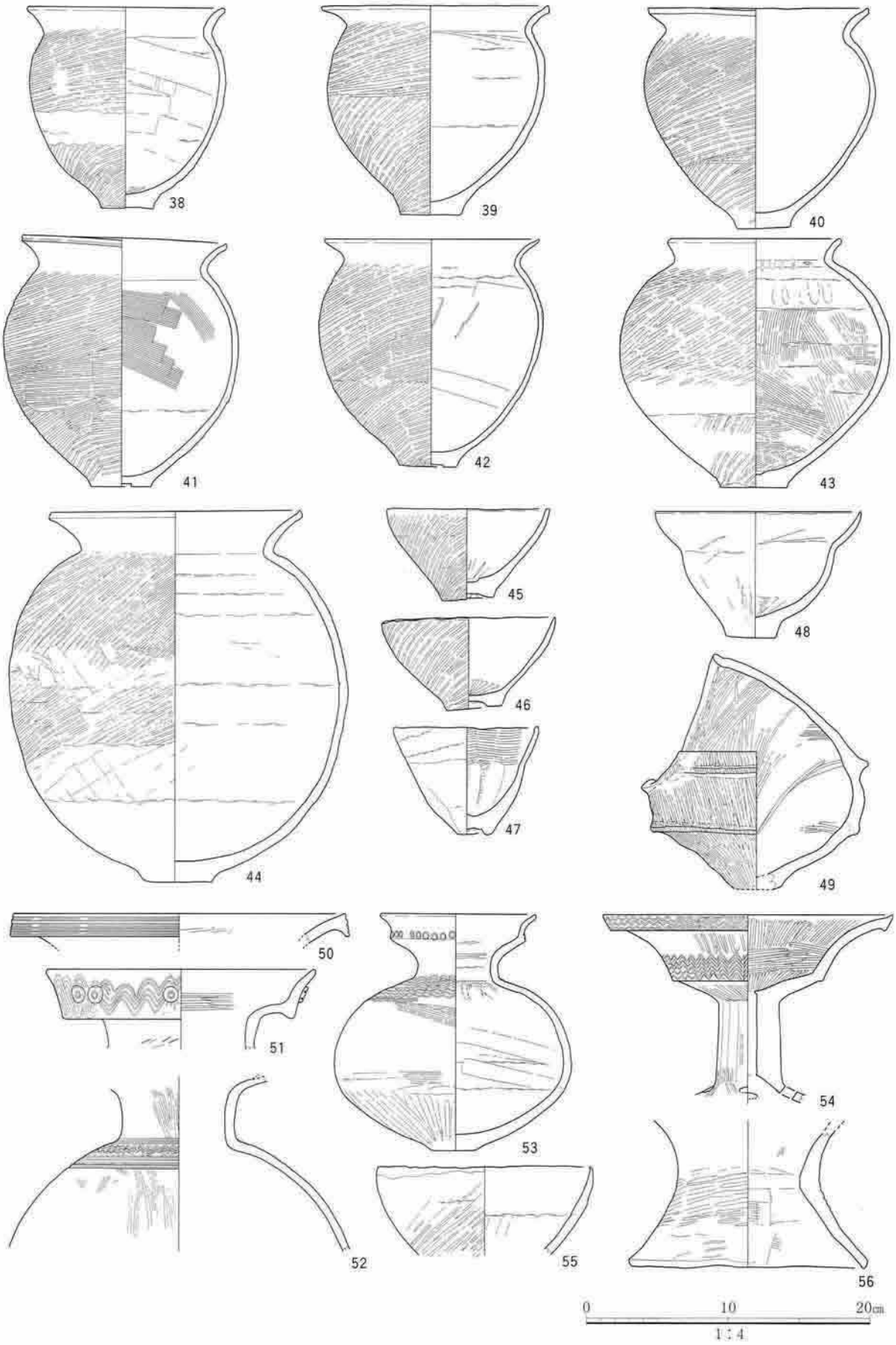


図311　NG84－86次SE701－２層出土土器

50は外面に凹線文を施す広口壺である。51・52は中型、53は小型の二重口縁壺である。いずれも櫛描文で装飾する。51は５条１単位の櫛描波状文を口縁部外面に施した後、２個１対の円形浮文を貼り、それぞれの浮文の上から竹管文を押圧する。口縁部内面には屈曲部付近に横方向のミガキを施す。52はハケ、ナデを順に施した後、肩部に櫛描直線文と波状文を施す。櫛描文は３条１単位であり、各文様帯は２単位で構成される。施文は上から下へ行う。また、文様帯より下には櫛描文施文後に縦方向のミガキを施す。

53は口縁部を竹管文、肩部を櫛描波状文で飾る。櫛描文は４条１単位で、上から下へ行う。施文後に肩部は斜め方向、腹部は横方向、底部は縦方向のミガキで整える。

54は櫛描波状文を施した有段高杯である。口縁端部は上下に拡張して面を持たせる。櫛描波状文はこの口縁部と段部分の外面に施す。３条１単位とみられる。内面は主に縦方向のミガキで整えるが、屈曲部から段部分にかけては横方向のミガキである。脚部は内面に軸芯棒の痕跡があり、外面はハケ調整後に面取りを行う。スカシ孔は４個所である。

55は被熱の痕跡がある鉢である。口縁部内外面に接合痕が残り、タタキ調整も不完全である。内面下半は縦方向のナデで、接合痕より上から口縁部にかけて横方向のナデで整える。56は器台と考えられる。外面には粗いタタキメが認められる。端部はオサエで整える。

SE701の機能時堆積層である２層から出土した土器群には庄内式甕が含まれていないが、廃絶後の１層から出土した土器群にはそれが含まれる。そして、1a層から出土した庄内式甕は肩部の張ったものと体部の張った球形の胴部のものとが共伴する。一方、1b層からは肩部が張った外形のもののみ出土する。SE701の埋没後に投棄されたこれらの資料は、定型化する庄内３式より前の資料であり、1a層が庄内式期２の新段階、1b層が庄内式期２古段階から庄内式期１に属する資料とみられる[米田敏幸1991]。

また、２層出土の第Ⅴ様式系の甕はいずれも底部が短く外反して立ち上がる。一方、1a層のものには直線的あるいは内湾ぎみに立ち上がる個体も含まれる。直線的あるいは内湾ぎみに立ち上がる底部の第Ⅴ様式系の甕は、庄内式期１の基準資料である中田遺跡刑部土坑出土資料にも見られる。比較しうる他の形式が無く、甕の底部という限定された要素からの推測に過ぎないが、２層出土の土器群は庄内式期１よりやや古い時期のものとして位置づけておきたい。（杉本厚典）

NG85－17次調査

遊離資料であるが、近世の溝から庄内式期の甕・壺が出土した(図313)。57は体部外面に平行タタキが施された後、頸部にハケが施され、内面はヘラケズリである。58は波状文の後、竹管文が施された円形浮文が貼付けられた二重口縁壺で、59は東海系の丹塗りの壺である。

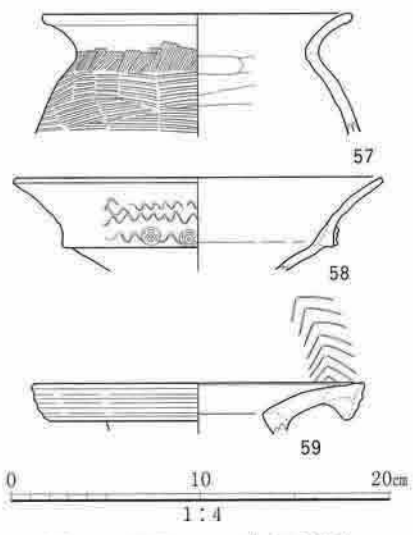


図312　NG85－17次出土遺物

ｄ．飛鳥～奈良時代の遺構

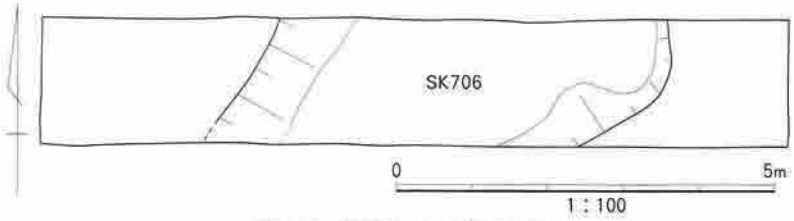


図313　NG83－65次SK706

NG83－65次調査

長原7A層上面で土壙SK706が検出された(図313)。東西幅4.7m、深さ0.1m未満で、埋土は暗灰色砂質粘土である。土師器・須恵器の細片が出土した。

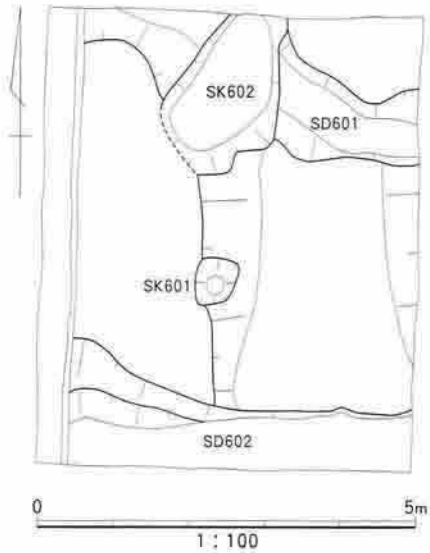


図314　NG80－1次奈良時代遺構配置図

NG80－1次調査

TP＋7.2m付近で奈良時代の溝SD601・602、土壙SK601・602が検出された(図314)。SD601・602は東西方向の幅1m程度の溝で、埋土は砂と粘土が互層になっている。SD602から奈良時代の須恵器が出土した。

なお、本調査地の西30mに位置するNG01－14次調査地では蛇行しながら東西方向に延びる奈良時代の流路が検出され、平城宮土器Ⅱ～Ⅲの土器がまとまって出土した[大阪市文化財協会2004b]。

3)まとめ

本節で報告した調査はいずれも小規模なものばかりである。この中でNG84－86次調査のSE701からは庄内式期の良好な一括資料が出土したのは特筆できる成果である。土器の中には14の丹後・丹波系の甕のように、他地域の特徴を示すものもいくつかあり、NG85－17次調査地の東海系壺59とあわせて当時の地域間交流を知る手掛りとなる。

近隣では庄内～布留式古段階にかけての遺構が多く見つかっている。NG84－86次調査地と重複した位置にあるNG16次調査地(註1)では井戸や土壙が、南西のNG99－15次調査地では井戸や落込みが検出されている。一方、それより南のNG84－6次(第Ⅶ章第1節)やNG02－8・03－6次調査地[大阪市文化財協会2005]では円形・方形周溝墓が検出されており、NG84－86次調査地周辺が居住域で、それ以南に墓域が分布していることがわかる。　(寺井)

註)

(1)1979年2～4月に長原遺跡調査会によって行われた。未報告。

第３節　NG84－４次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では平野区長吉六反で行われたNG84－４・84－49・88－６・93－77・95－77次調査を報告する(図315)。この地域は近年では長吉東部地区土地区画整理事業や市営住宅建設などの事前調査で広く深い調査が行われているが、本節で報告するのはいずれも小規模なものばかりである。

NG84－４次調査は下水道管渠推進工事に伴って６個所の推進ピットと全長98mの管路部を対象に

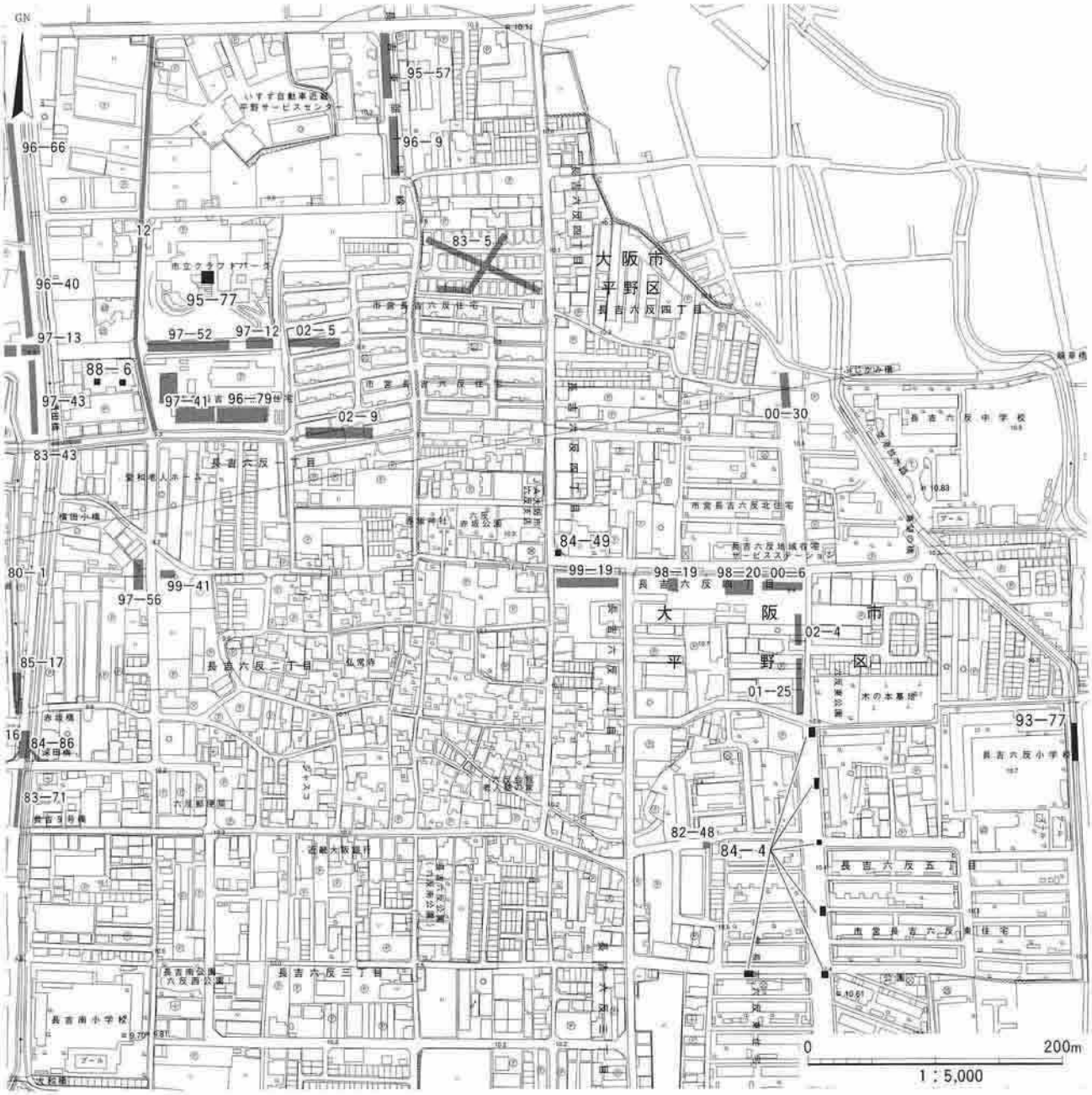


図315　NG84－４次などの調査地位置図

行われた。その結果、古墳時代中期の溝から多量の遺物が出土した。

NG84－49次調査は地下送電線工事に伴って行われた。調査の結果、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、長原9C層（六反10C層）までの地層が良好に残っているのを確認した。

NG88－６次調査はマンション建設に伴って行われ、一辺５mの正方形のトレンチを２個所設定して進められた。その結果、飛鳥時代の溝が検出された。

NG93－77次調査は大阪市と八尾市の境に位置する平野川の分流に対する改修工事に伴って行われた。調査の結果、弥生時代前期の土器や石庖丁が出土した。

表34　NG95－77次層序表

層序	長原層序	六反層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物など	時代
1	1	1	暗灰黄褐色極細粒砂質シルト	10	作土				近現代
2	2	2	黄色粗極細粒砂質シルト(3層に細分可能)	20	作土				江戸時代
3a	3	3	オリーブ褐色細粒砂質シルト	10	作土				室町時代
3b	3	3	黄褐色シルト質細粒砂	20	作土				
4a	4A	4A	黄褐色粗粒砂	10	水成				鎌倉時代
4b	4B	4B	にぶい黄褐色砂質シルト	15	作土		←踏込み		
4c	4B	4C	黄褐色シルト質粗粒砂	15	作土			「て」字状口縁皿	
4d	4B	4C	褐色シルト質中～細粒砂	10	作土				奈良時代
5	5	5	黄褐色細粒砂	5	水成				
6	6	6	極細粒砂質シルト	15	作土				飛鳥時代
7a	7Bi	7Ai	暗緑灰色シルト～シルト質極細粒砂	70～100	水成				
7b	7Bi	7Aii～iii	灰色細粒砂～砂礫	200	水成			須恵器・土師器	古墳時代
7c	7Bi	7Av	暗緑灰色砂質シルト	20			←SX701 ↓SD801·SK801		
8a	8B	9B	暗オリーブ灰色極細粒砂質シルト	20	暗色帯				弥生時代
8b	9A'	9Cii	オリーブ黒色シルト	5					
9a	9A	10A	黒色シルト	15	暗色帯				
9bi	9B	10Bi	オリーブ黒色粘土質シルト	15					縄文時代
9bii	9B	10Bii	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20					
9biii	9B	10Biii	オリーブ黒色シルト	30					
9biv	9B	10Biv	暗オリーブ色シルト	15					
9bv	9B	10Bv	オリーブ灰色極細粒砂質シルト	5～10					
9ci	9Ci	10Ci	黒色シルト	10	暗色帯			多量の植物遺体	
9cii	9Ci	10Cii	黒褐色シルト	10	暗色帯				
9ciii	9Cii	10Ciii	灰色シルト	10		横割れ(地震？)			
9civ	9Cii	10Ciii	灰色シルト	5					
10a	10・11	11i	暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂質シルト	10					
10b	10・11	11i	暗緑灰色極細粒砂質シルト	20					
10c	10・11	11i	暗緑灰色極細粒砂質シルト	15					
11a	10・11	11ii	オリーブ灰色シルト質粘土	5					
11b	10・11	11ii	オリーブ灰色シルト質粘土	5					
12ai	12A	12Ai	黒色粘土質シルト	5	暗色帯				
12aii	12A	12Aii	オリーブ黒色シルト質粘土	5	暗色帯				
12bi	12B	12B	灰色シルト	5	暗色帯				
12bii	12B	12B	灰色粘土質シルト	15					
12biii	12B	12B	オリーブ灰色粘土質シルト	15					
12biv	12B	12B	暗オリーブ灰色シルト	10					
12bv	12B	12B	暗オリーブ灰色粘土質シルト	15					
12bvi	12B	12B	暗オリーブ灰色シルト	15					
12ci	12C	12Ci	灰色砂質シルト	5					
12cii	12C	12Cii	灰オリーブ中～細粒砂	5				磨面ある礫	
12di	12C	12Diii	黄灰色シルト～砂	10	生物擾乱				
12dii	12D	12Div	黒灰色シルト～砂	30	生物擾乱				
13	15	15B	灰白色砂礫	80		不整合面			旧石器時代
14	16A	16A	灰白色シルト質砂礫						

NG95－77次調査は大阪市立クラフトパーク建設に先立って行われた。工事予定地のほぼ中央に一辺10mのトレンチを定め、シートパイルを打設してから、GL－7mまで掘削した。調査の結果、長原16A層以上の地層を良好な状態で観察することができた。

2)調査の結果

i)層序

NG95－77次調査地の北壁と東壁で地層を観察した。これによって得られた見解を、下位層から順に説明する。なお、以下の地層については六反層序で述べることにする。

TP＋1.8m付近では、RK15B層と16A層の不整合面を確認することができた(表34・図316の第13・14層)。これは中位段丘面が低位段丘構成層に相当する水成層に削り込まれたことを示している。

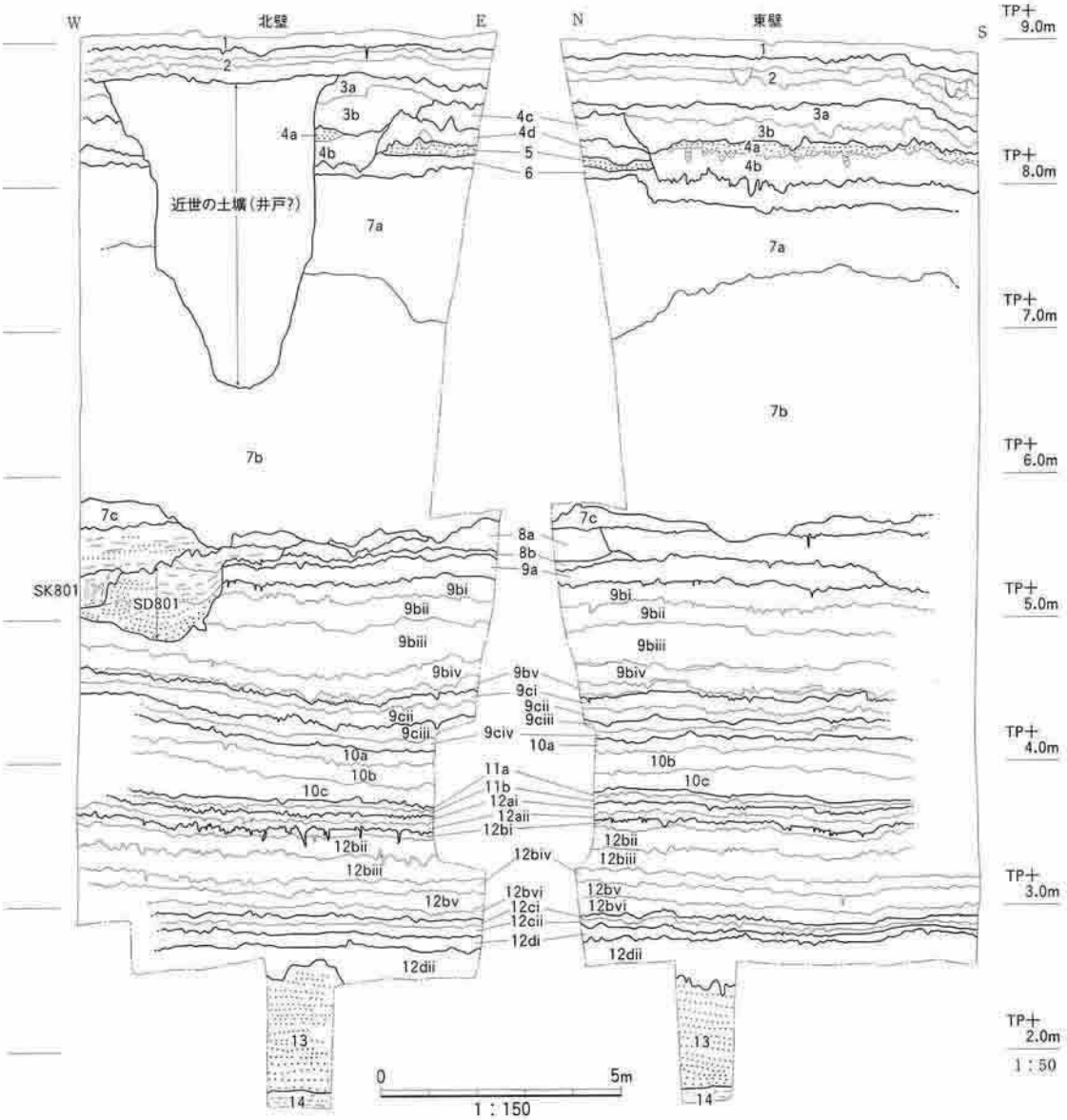


図316　NG95－77次北壁・東壁断面図



写真27　NG95－77次磨面のある礫

TP＋３m付近では縄文海進時にできた巣穴が多数見つかった(図版42上)。第12di層と第12dii層は激しく擾乱されていたため、分層が困難な状況であった。当調査地の約60m南で行われたNG97－52次調査地でも同様の生痕が見つかり、第12di層に相当する地層で横大路火山灰が検出されたことから[大阪市文化財協会2000b：pp.19－29]、第12di・12dii層はそれぞれRK12Dii・12Div層に相当する。また、その上位の第12cii層からは磨面のある礫が出土した(写真27)。

TP＋３～５mまでは静水状態で堆積したシルト～シルト質粘土が堆積しており、しばしば暗色帯が介在する。RK10Ci層に相当する第9ci層の上面では葦科の植物が大量に倒れた状態で検出された。これはこの一帯が一時的に水が少なくなり、葦科の植物が繁茂したことを示す。

また、第9cii・9ciii層では、これらの地層を斜めに横断する横割れを確認した。

第8a層より上位では地層・遺構から人間活動が確認できる。第7c層上面では土手状遺構SX701が検出された。第7b層は六反地域でよく見つかる河成堆積層で、６世紀初頭を下限とする須恵器が出土した。

ii)遺構と遺物

a．弥生時代の遺構と遺物

NG93－77次調査

RK10A層に相当すると思われる地層(TP＋７m付近)から、弥生時代前期の土器と石庖丁が出土した。弥生土器は削出し突帯に沈線を施す壺体部片や、口縁端部に刻みを入れ、体部に沈線を施す甕片、底部などがある。石庖丁は刃部と背部の一部を残す破片で、紐孔が１つ認められた。背部と刃部は平行せず、三角形に近い形状であったと推定される。灰色を呈する石材を使用している。

NG95－77次調査

溝SD801が検出された(図317・図版42中)。幅約３m、深さ0.8mあり、北からやや西に振った方向に延びる。南側の延長上には、NG97－12次調査地のSD903があり、おそらく一連のものと思われる(図318)。なお、SD903からは弥生時代中期初頭の土器が出土している[大阪市文化財協会2000b：pp.68－70]。

また、断面観察によってSD801を切る土壙SK801が検出された。断面で確認したため、平面形態はわからない。深さ0.2mあり、多量の偽礫で埋まっていた。弥生時代後期の壺底部1が出土した。

b．古墳時代の遺構と遺物

NG95－77次調査

調査地の南西隅で、地層観察用の土手を壊しているときに、土手状遺構SX701が検出された(図版42下)。杭は７本確認され、いずれも水平に近い角度で南側から打込まれ、その上には植物繊維が被

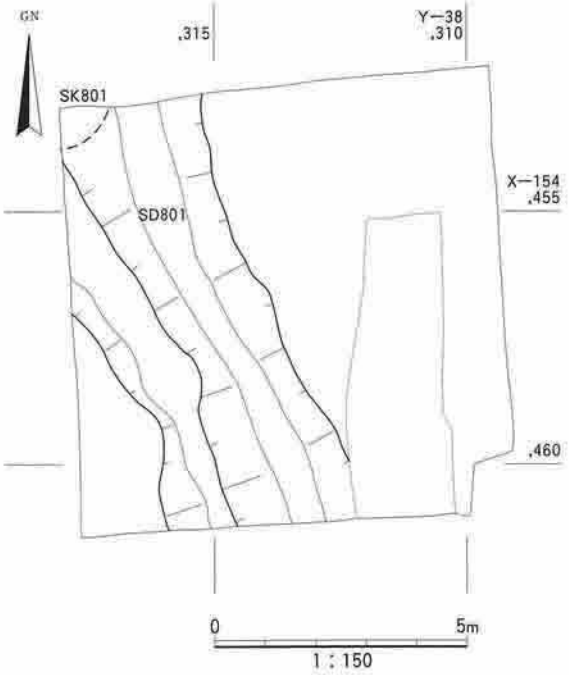


図317　NG95−77次SD801・SK801平面図

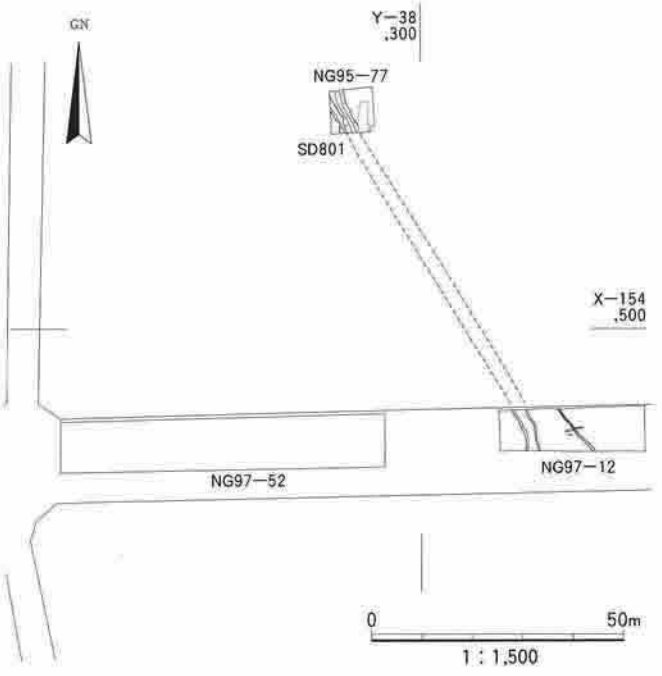


図318　NG95−77次SD801と周辺遺構との関係

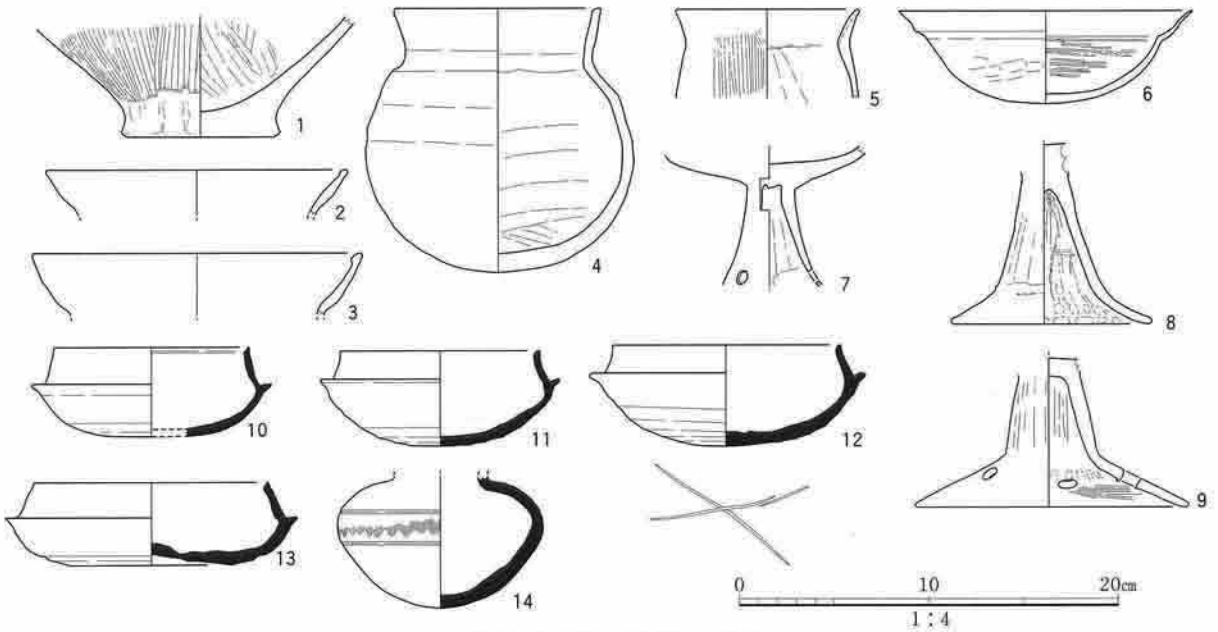


図319　NG95−77次出土遺物

SK801(1)、SX701(2・3)、RK7Aii～iii層(4～14)

せられていた。ただ、調査前のシートパイル打設時にかなりの破壊を被ったため、どのような構造であるかは十分確認することはできなかった。なお、植物繊維の下から布留式新相以降の特徴を有する土師器甕の口縁部2・3が、上位の砂層からは土師器4～9、須恵器10～14が出土した(図319)。13はTK10型式に属することから、砂層の年代の下限は6世紀中頃と推定される。

NG84－4次調査

本調査では6個所にトレンチが設定された。各トレンチの名称は調査時に従って、1702～1707区と呼ぶ(図320)。古墳時代の遺構は1705・1707区で検出された。

SD701：1705区で検出された。幅1.9m以上、深さ0.6mの断面逆台形を呈する溝で、北でやや西に振った方向に延びる(図321左・図版41中)。また、西肩直下では写真28のように、２個所に枘穴が穿たれた建築部材と思われる板状木製品が杭で留めた状態で検出された。遺構内には植物遺体や流木を多量に含む暗灰色砂質シルトや暗灰色極細粒砂・シルト混り砂礫が互層になって堆積していた。

この溝からは土師器甕15～17、小型丸底壺18、鉢19、高杯20～22、須恵器把手付鉢23、陶質土器壺24～27、木製品28～30が出土した(図322)。25～27は体部外面に縄文タタキが施され、その後に沈線が施される。

28は全体の１／２が残る盤で、全長49.3cm、残存幅9.6cm、高さ6.0cmある。平面形は長方形で、器体の刳込みは上面から行われ、深さ4.5cmの内底面は平坦に刳抜かれている。内外面とも木目に平行に削り上げた後、さらに全体をていねいに磨いて器面を整える。29は板状の木製品である。30は鉄斧柄の着装部分で、柄の大半は欠失するが、残存長17.6cm、幅2.6cmあり、着装部は全体を細かく削出

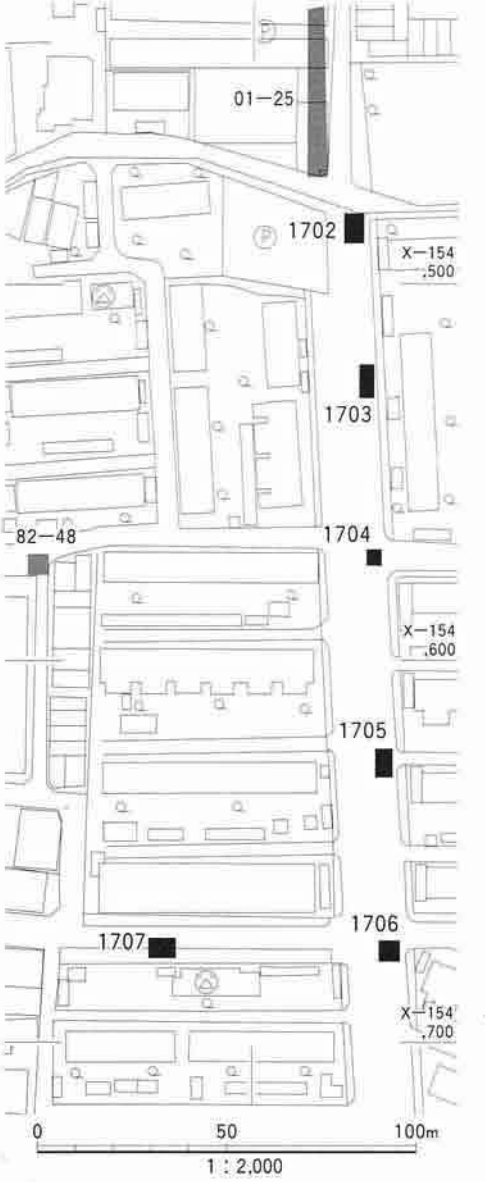


図320　NG84－４次各トレンチ配置図



写真28　NG84－４次SD701木製品出土状況

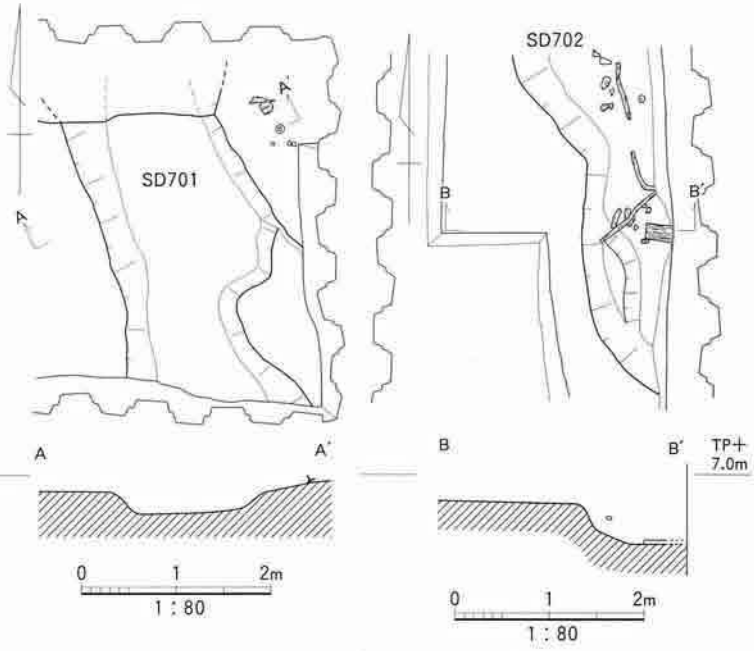


図321　NG84－４次SD701・702実測図

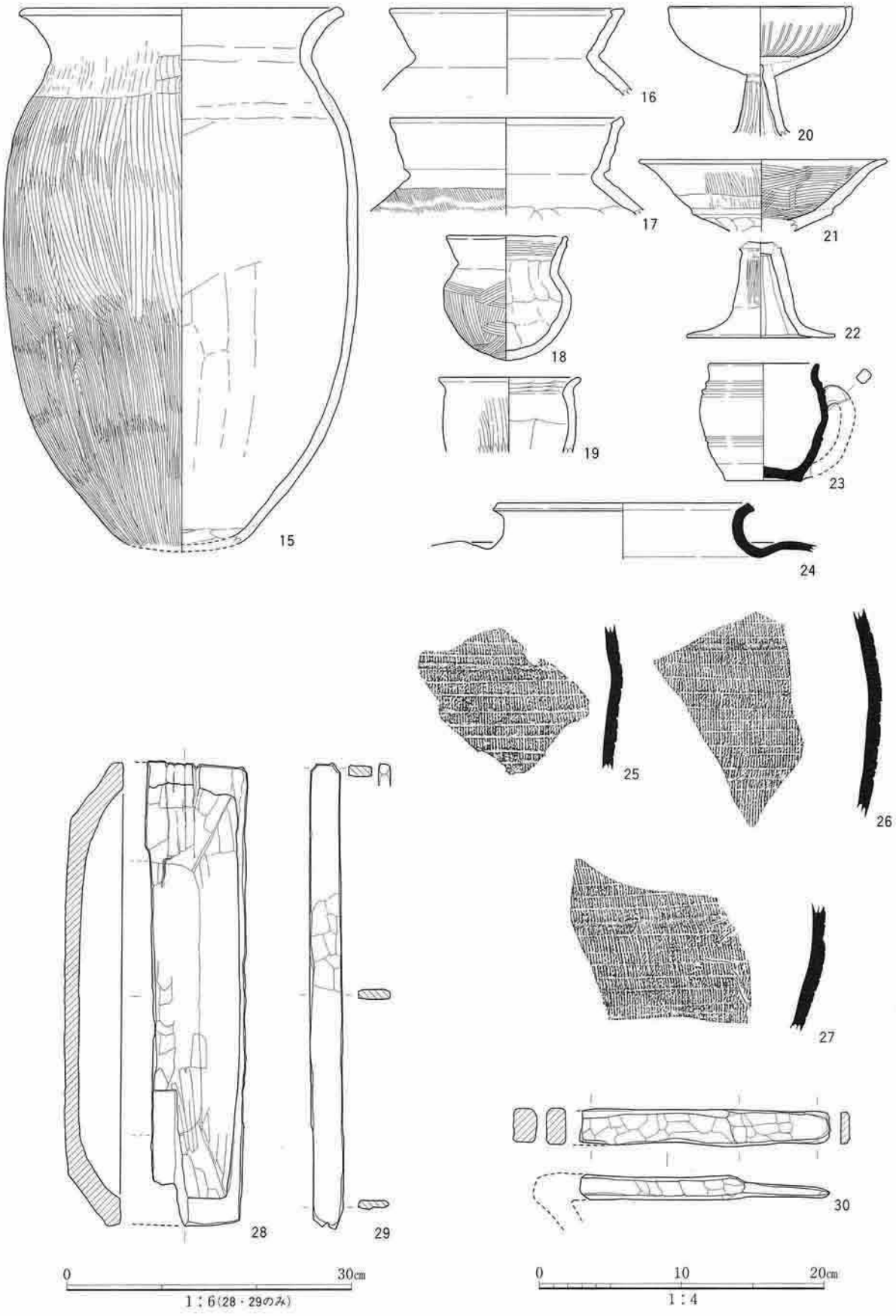


図322　NG84－4次SD701出土遺物

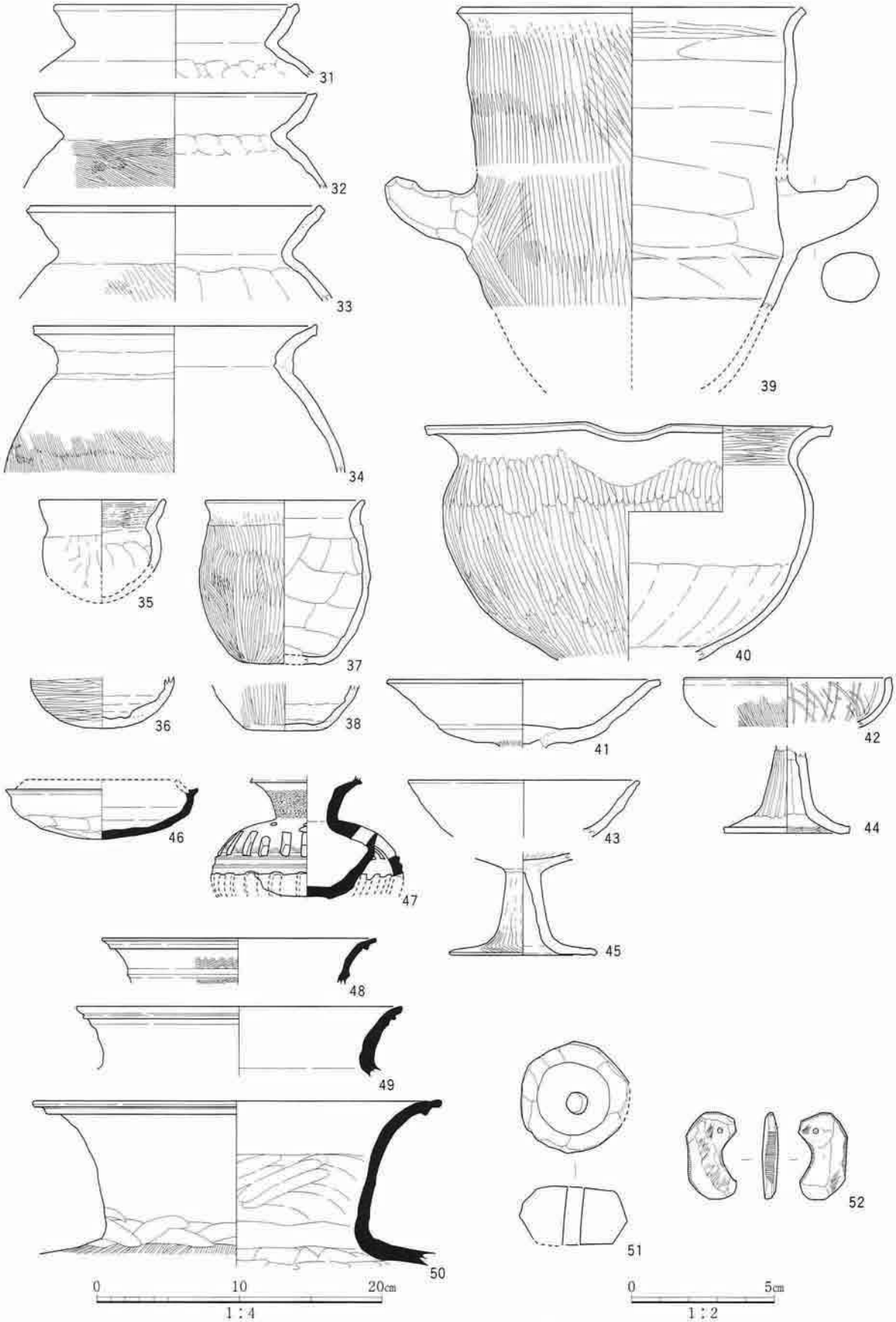


図323　NG84－4次SD702・包含層出土遺物

SD702(31～50)、RK7Ai層(51)、RK7Bii層(52)

して整形する。

SD702：1707区で検出された。幅1.6～2.0m、深さ0.3mで、断面逆三角形を呈する溝で、南北方向に延びる(図３２１右・図版４１下)。溝内には炭化物や有機物を多量に含む黒色粘土質シルトが堆積しており、溝の東肩から流れ込んだような状況で土師器甕31～34、小型丸底壺35・36、平底深鉢37・38、甑39、片口鉢40、高杯41～45、須恵器杯身46、瓶47、壺48～50などの遺物が多量に出土した(図323)。46の底部には手持ちのヘラケズリが施されており、TK73型式もしくはTK216型式に属するものである。47は二重瓶で、外側の体部には上下に方形スカシが巡り、頸部下には円孔が施される。

これ以外に、1706区のRK7Ai層に相当する暗灰色シルト質粘土層からは滑石製勾玉52、1707区のRK7Bii層に相当する黒色シルト質粘土層からは酸化焔焼成の算盤珠形紡錘車51が出土した(図323)。

ｃ．飛鳥～平安時代の遺構と遺物

NG88－６次調査

東西のトレンチで溝が３条検出された(図324)。

SD601：東側のトレンチで検出された。幅約1.1m、深さ0.2mでいびつな方向に延びる。埋土の上

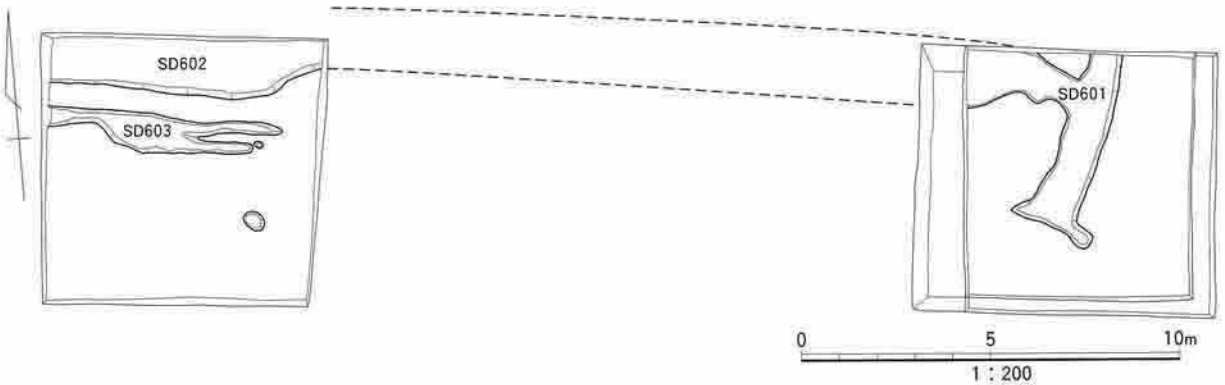


図324　NG88－６次遺構配置図

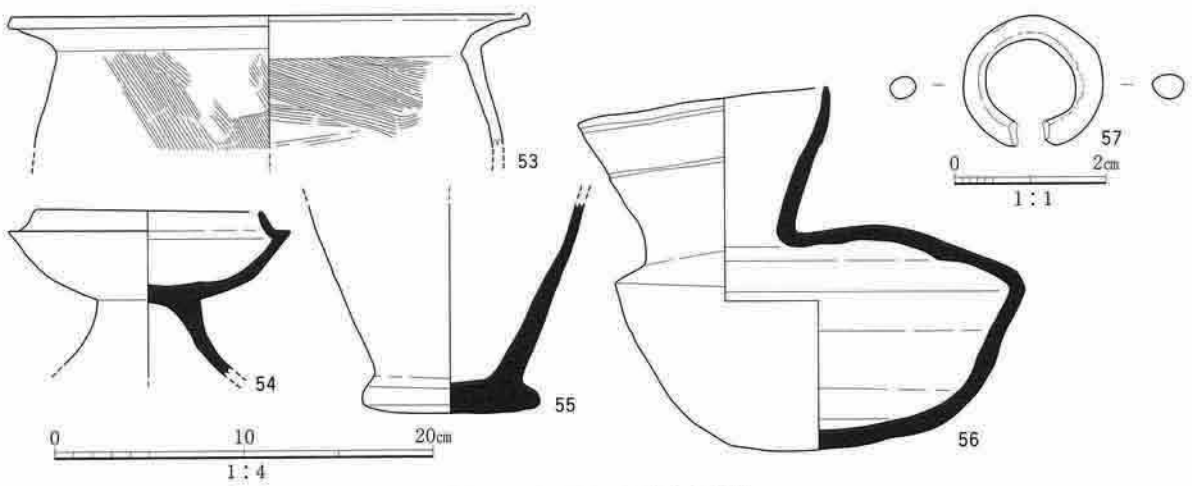


図325　NG88－６次出土遺物

SD601(54)、SD602(53・55・56)、RK3～４層(57)

部が暗灰黄色粘土、下部は灰色細粒砂であった。図325のような飛鳥時代初頭の須恵器高杯54が出土しているが、後述するように、検出面が同じであるSD602からは奈良時代の遺物が出土していることから、時期が下る可能性が高い。

SD602：西側のトレンチで検出された。北壁にかかるため幅は不明である。埋土の上部は灰色粗粒砂～シルト、下部は緑灰色粗粒砂であった。東西方向に延びていることから、SD601と一連の溝である可能性もある。遺物には土師器甕53・須恵器鉢55・平瓶56がある(図325)。56は肩部が稜をもって屈曲する形態で、平城宮土器Ⅰに該当すると思われる。

SD603：西側のトレンチで検出された。幅約１ｍ、深さ0.1ｍ未満である。

また、遊離資料であるが、本調査地ではRK3～４層に相当すると思われる明黄褐色細粒砂質シルト層から、金環57が出土した(図325)。

３)まとめ

本節で報告した調査は冒頭で記したとおり、大規模な調査が行われる以前のものばかりである。ここで近年の成果を踏まえて、本節の成果について補足しておきたい。

まず、NG84－４次調査地周辺は1980年代前半に下水工事に伴う小規模でありながら深い調査が数度行われ、古墳時代の遺物が多量に出土するものの、全体が把握できなかったというのが現状であった。例えば、NG84－４次調査地の西側で行われたNG82－48次調査では、古墳時代の包含層から古墳時代中期初頭の土師器とともに、滑石製品が多量に出土しているが、わずか20㎡の調査であったため、いかなる地層・遺構に伴うものなのか検討することができなかった(註１)。しかし、1998年度以降、大規模な調査が進み、流路に平行して盛土を行い、それに伴って古墳時代前期末から中期初頭の土器や滑石製品などの祭祀遺物が埋められていることが明らかになってきた[大阪市文化財協会2004a]。

NG95－77次調査では六反地区で初めて中位段丘構成層(RK16A層)まで確認し、縄文海進時の生痕が検出されたものの、旧石器～縄文時代にかけての人間活動の痕跡についてははっきりわからず、検討は不十分であった。しかし、60ｍ南のNG97－12・52次調査では旧石器のブロックが検出され[大阪市文化財協会2000b]、250ｍ南のNG99－41次調査では縄文時代早期の押型文土器が多量に出土し、同時期の遺構も検出された[大阪市文化財協会2002d]。

以上のように六反地域は通常調査が及ばない深い地点に、旧石器～古墳時代の遺構・遺物が良好な状態で埋没している。近年の調査の蓄積で各時期の状況が明らかになってきており、今後とも重要な地点であることには変わりない。　(寺井)

註)

(１)1983年４月１日～11日にかけて行われた調査で、位置は図320に示した通りである。未報告である。

第Ⅷ章　遺構と遺物の検討

第１節　長原古墳群集成

１）はじめに

長原遺跡では2006年10月までに213基の古墳が検出されている（図328～331、表36～41）。長原古墳群については[京嶋覚1997]や[櫻井久之1993・2001]によって全体的な検討がなされてきたが、本書で計41基（追加調査を含めると44基）を報告することができたので、この機会に長原古墳群を集成するのは有益なことである。以下で先行研究を参考にしながら、簡略ではあるが現状での到達点を整理しておきたい。なお、本節末の集成表（表36～42）は[櫻井2001]の表を追加・修正したものである。

２）時期

長原古墳群は出土した土器や埴輪によって４つの時期に区分されている[京嶋1989]。

１期は埴輪に黒斑があり、須恵器がまだ出現していない時期で、４世紀末～５世紀初頭と推定される。この時期の古墳には長原１（塚ノ本古墳）、85（一ケ塚古墳）、40、169（高廻り１号墳）、170（高廻り２号墳）、176、196、213号墳の８基が該当する。塚ノ本古墳の造営を契機に古墳群が形成され始め、各古墳は長原遺跡内に分散している。また、長原遺跡東南地区に接する八尾南遺跡や、北地区に接する喜連東遺跡でもこの時期の古墳が検出されている[八尾南遺跡調査会1981、黒田慶一1987]。なお、213号墳に関しては造営後に営まれた５世紀中頃の集落に破壊されている。隣接するNG84－６次で出土した埴輪も、この時期の古墳の破壊を反映しているのであろう（第Ⅶ章第１節）。

２期は窖窯焼成の埴輪が用いられ、TK73～208型式の須恵器が伴い、年代はおおむね５世紀中～後葉に推定される。小方墳が急増する。この頃の集落は「東ムラ」と「西ムラ」に分かれる。

３期はTK23・47型式の須恵器が伴い、年代は５世紀末～６世紀初頭と推定される。２期に引き続き小方墳が多く造営される。集落は「東ムラ」が衰退し、「西ムラ」が拡大する。

なお、２・３期の古墳は遺跡の北端、北西隅、中央、東南の４つの群に区分できる[京嶋1997]。この中で遺跡中央のものがもっとも密集する。また、東南の群には八尾南遺跡で見つかっている古墳も含めることができる[八尾市文化財調査研究会1995：pp.121－122]。

４期はMT15・TK10型式の須恵器が伴い、６世紀前～中葉に推定される。長原130（七ノ坪古墳）、153、181（南口古墳）、207号墳がこの時期に該当する。この時期の古墳は長原遺跡の西半に偏っている。七ノ坪・南口古墳は前方後円墳であり、前段階に集落であった地域に造営されている。また、対応する集落はNG84－25次（第Ⅲ章第１節）やNG93－26次（同３節）など長原遺跡の西端に分布しており、この時期を最後に衰退する。

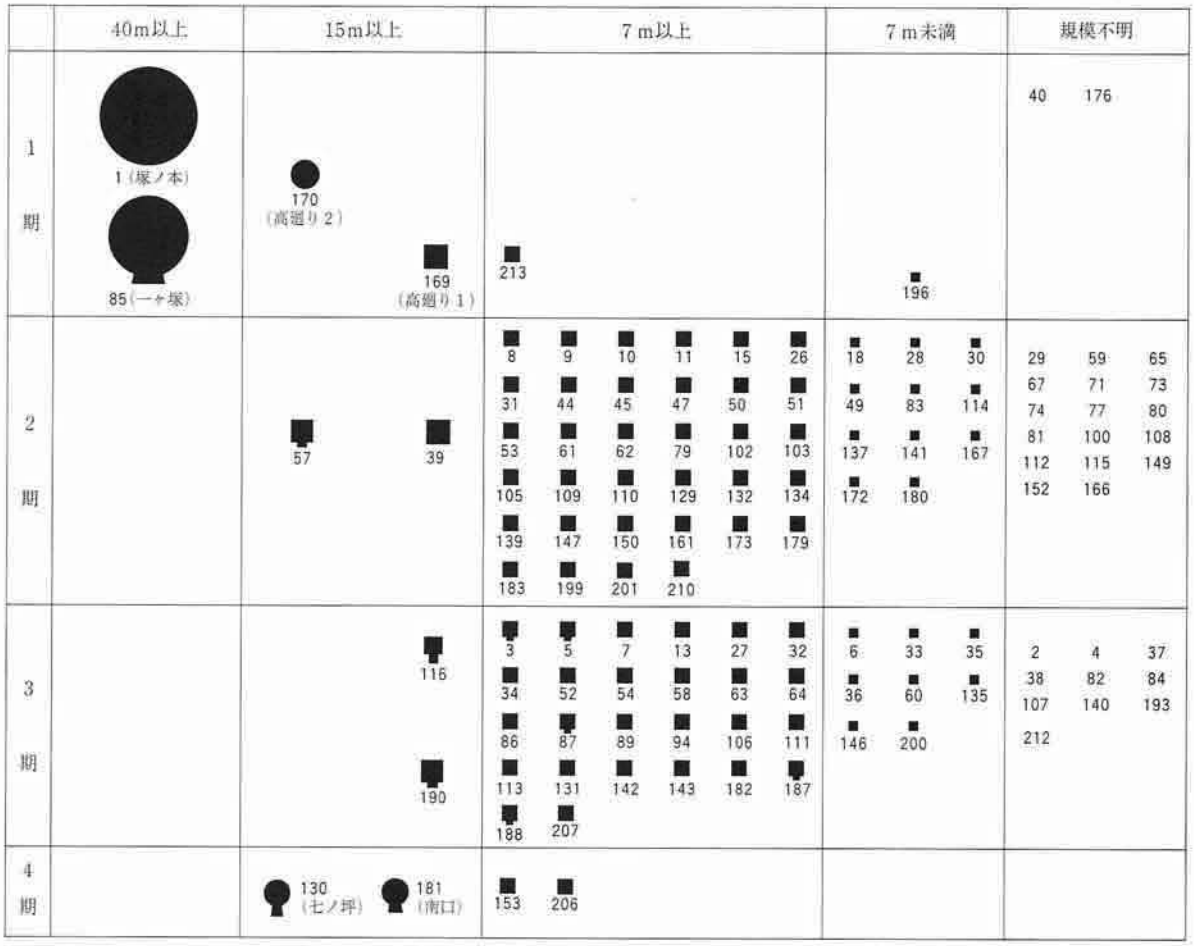


図326　長原古墳群の変遷図（[櫻井1993]の図1を加筆・修正）

3）墳丘形態と外部施設

最大規模の塚ノ本古墳とそれに次ぐ一ケ塚古墳はそれぞれ直径55m、47mあり、一ケ塚古墳には造出しが付く。これらの古墳には葺石や段築は確認されていないが、段築は本来あった可能性が高い。

墳丘が確認されている9割以上が方墳で、その大半が一辺10m前後かそれ以下の大きさである。造出しを有し、前方後方形を呈するものもある。

前方後円墳はいずれも長原古墳群の4期に登場する（七ノ坪古墳・南口古墳）。これらの古墳はそれまで集落域であったところに造営され、これらを最後に長原遺跡では古墳は見られなくなる。

塚ノ本古墳、一ケ塚古墳、高廻り2号墳、87号墳、131号墳、190号墳では埴輪が据えられた状態で検出された。本節第Ⅱ章第1節で報告した87号墳では円筒埴輪に加え、巫女形などの形象埴輪や須恵器甕が墳丘に据えられた。また、190号墳と南口古墳では周堤に円筒埴輪が並んでいた。

ただし、長原古墳群では上面が削平されているために、多くの場合が周溝に転落した状態であった。これらも含めて、墳丘の規模と埴輪の関係を見ると、15m以上の規模の古墳では七ノ坪古墳を除くと、いずれも埴輪が伴っている（図326）。ただ、7m未満の規模の古墳については、180号墳や200号墳のように主体部が残っていて上面の残りが良好であったにもかかわらず、埴輪が伴わない例もあることから、この規模の古墳では埴輪が本来据えられなかったものもあると考える。

4）主体部と副葬品

表35　長原古墳群主体部検出古墳一覧([櫻井1993]の表１に加筆)

古墳名	時期	埋葬施設	位置	出土遺物	備考	文献
１号墳	1	埴輪棺(１)	墳丘裾	(なし)	赤色顔料	長原遺跡調査会1978
		埴輪棺(２)	墳丘裾	(なし)	赤色顔料	
		埴輪棺(３)	墳丘裾	鉄鉇・管玉・勾玉	赤色顔料	
		埴輪棺(４)	墳丘裾	(なし)		
		埴輪棺(５)	墳丘裾	(なし)	赤色顔料	
40号墳	1	埴輪棺	墳丘裾	(なし)		高井健司1990、櫻井久之1991
83号墳	2	木棺直葬	墳丘上	鉄剣・不明鉄製品		大阪市文化財協会1990
87号墳	3	土器棺	墳丘上	(なし)		本書第Ⅱ章第１節
94号墳	3	木棺直葬	墳丘上	(なし)		大阪市文化財協会1979
		木棺直葬	墳丘上	(なし)		
105号墳	2	木棺直葬	墳丘上	管玉・ガラス小玉・竪櫛		大阪文化財センター1986
130号墳(七ノ坪)	4	横穴式石室	後円部	勾玉・管玉・臼玉・ガラス玉・太刀・短刀・鉄鉾・鉄鏃・ｆ字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・木芯鉄板張り輪鐙・磯金具・鞍金具・環状雲珠・方形辻金具・鈸具		高井健司1986・1987a
		土器棺	墳丘裾	(なし)		
166号墳	2	木棺直葬	墳丘上	鉄剣・U字型鋤先・鉄製ミニチュア農工具		**本書第Ⅲ章第１節**
		木棺直葬	墳丘上	金環・刀子		
167号墳	2	土器棺	墳丘上	(なし)	中心主体	大阪文化財センター1986
168号墳	2	木棺直葬	墳丘上	圭頭太刀・環頭小刀・小型鉄製品・竪櫛		大阪文化財センター1986
179号墳	2	木棺直葬	墳丘上	鉄刀		岡村勝行・清水和明1990
180号墳	2	土器棺	墳丘上	(なし)	中心主体	**本書第Ⅱ章第１節**
187号墳	3	木棺直葬	墳丘上	刀子・ガラス小玉		久保和士1992
		木棺直葬	墳丘上	ガラス小玉		
190号墳	3	土器棺	墳丘上	(なし)		久保和士1992
200号墳	3	木棺直葬	墳丘上	鉄剣(もしくは鉄刀)		**本書第Ⅱ章第３節**
206号墳	4	木棺直葬	墳丘上	滑石製紡錘車		松本百合子1995
210号墳	2	木棺直葬	墳丘上	鉄刀・鉄鏃(長茎鏃)		大阪市文化財協会1999a
213号墳	1	粘土槨	墳丘上	鉄刀・竪櫛		大阪市文化財協会2005a
喜連２	1	木棺直葬	墳丘上	鉄剣・鉄鏃・櫛		佐藤隆1992

長原古墳群は後世の削平が著しい場合が多いため、主体部が残っているケースは、検出されている古墳の数に比して非常に少ない。現在のところ表35のように18基(喜連東遺跡を含めると19基)の古墳で確認されている。

１期では塚ノ本古墳や40号墳で埴輪棺が見られるが、近年調査された長原213号墳には粘土槨の主体部があり、鉄刀と竪櫛３つが副葬されていた[大阪市文化財協会2005]。２・３期は木棺直葬や須恵器の大甕などを利用した土器棺で主体部が作られる。４期では七ノ坪古墳のように片袖の横穴式石室が採用され、馬具などの副葬品が伴っていた。　(寺井)

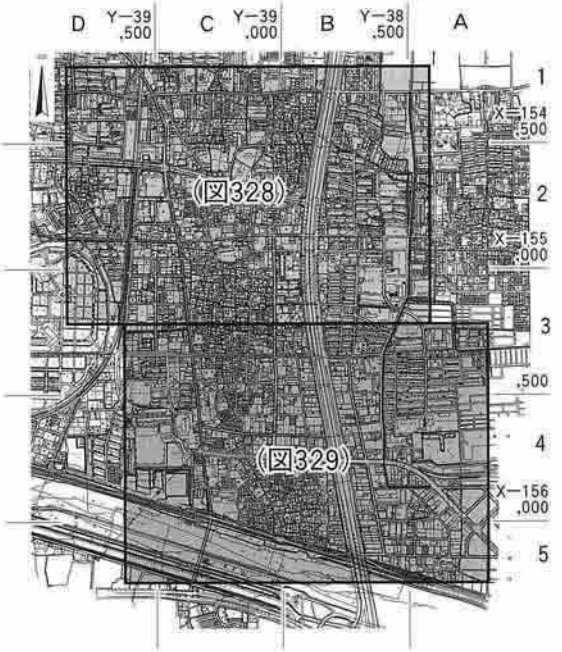


図327　図328・329の位置(縮尺１：30,000)

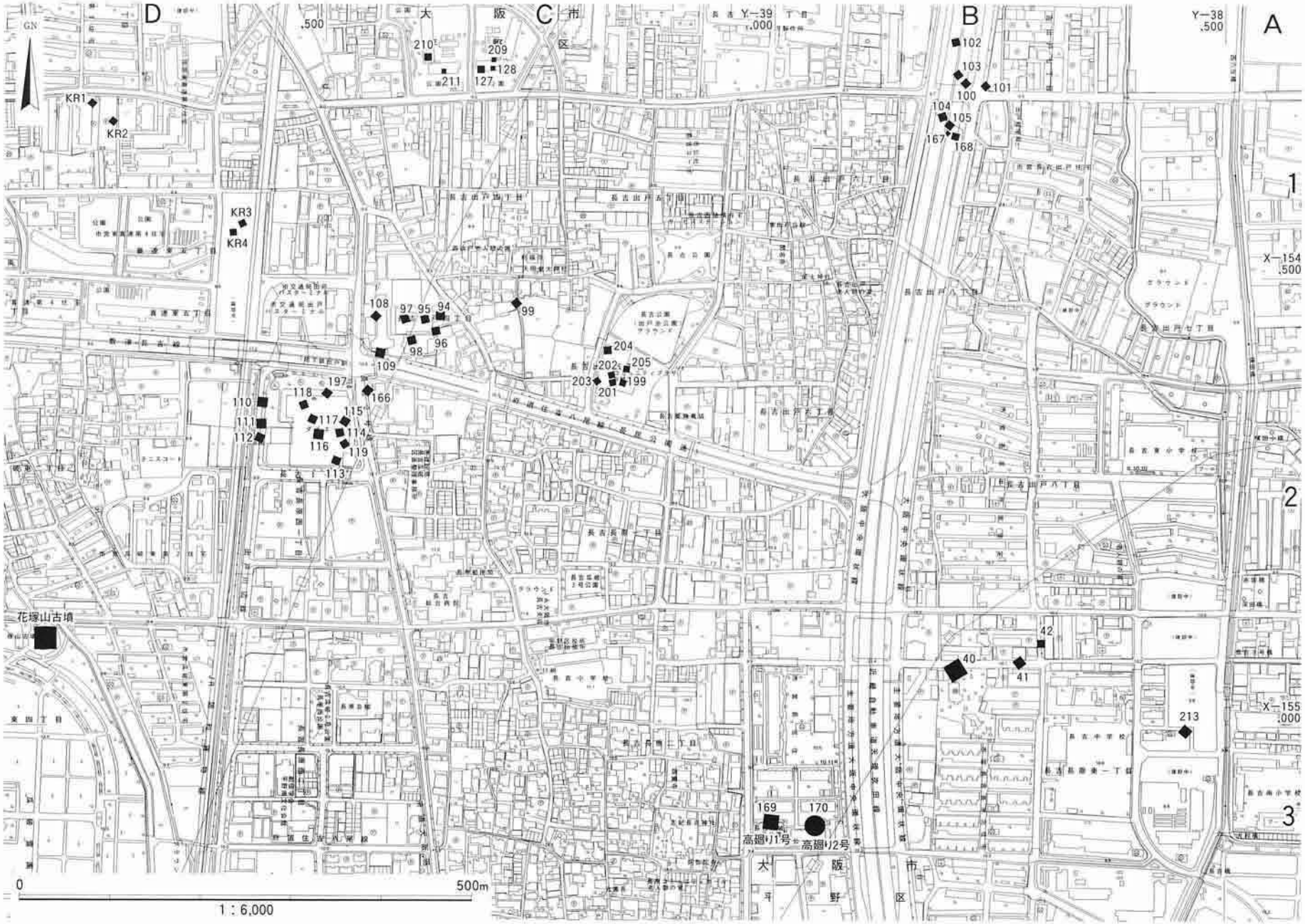


図328　長原古墳群分布図(北半)

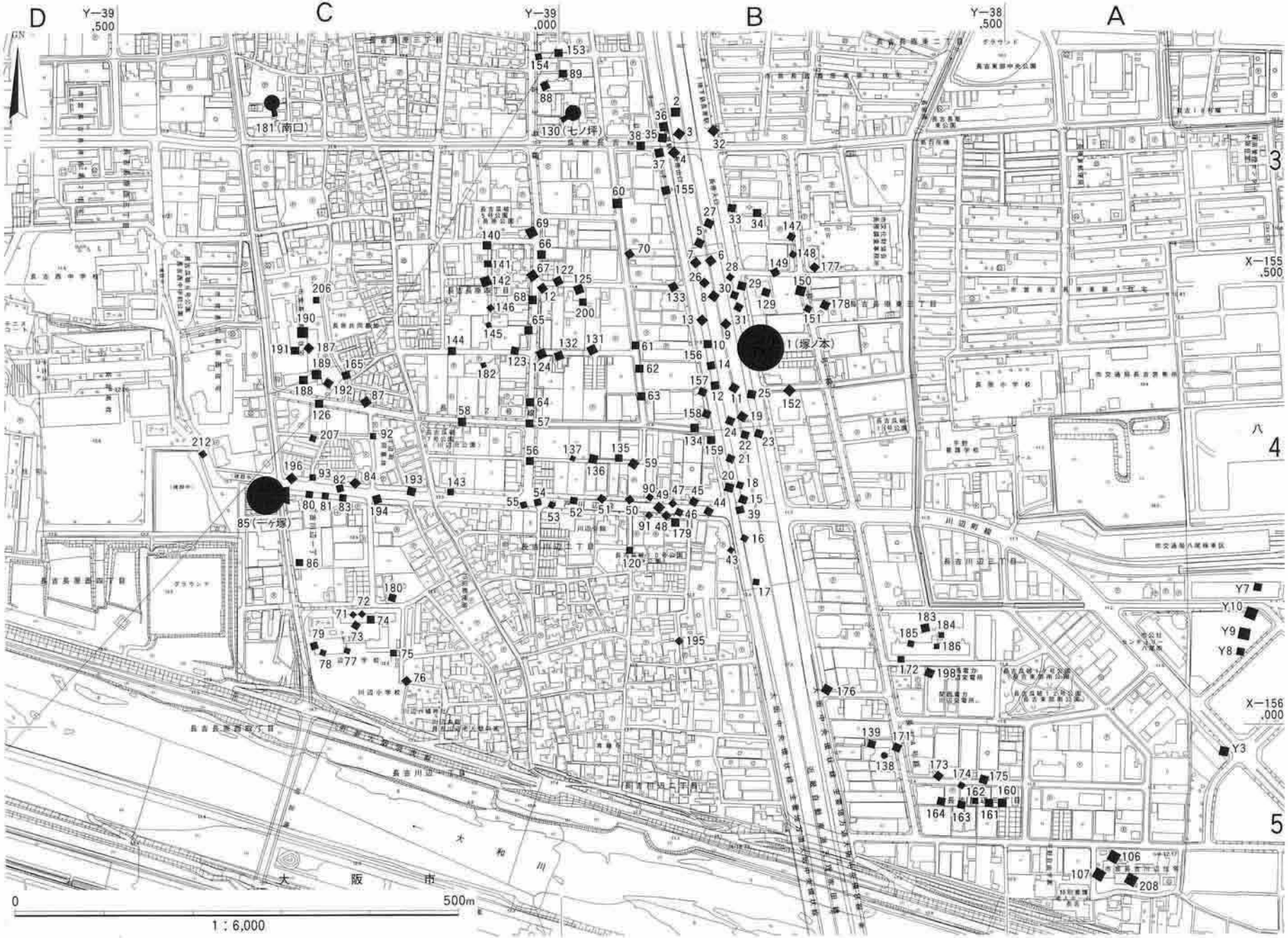


図329　長原古墳群分布図(南半)



図330　長原古墳群１・２期(時期が確定できたもののみ)



図331　長原古墳群３・４期（時期が確定できたもののみ）

表36　長原古墳群一覧表(1)

古墳番号	時期	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	土師器	須恵器	埴輪	韓式土器	備考	文献
1	1	4B	NG1 5	円	55			円筒(鰭付含む)・朝顔・家		塚ノ本古墳・有黒斑の埴輪	大阪市文化財協会1982a、大阪市文化財センター1978
2	3	3B	CENT.NG 1	方			杯・高杯・甕				大阪市文化財センター1978
3	3	3B	CENT.NG 2	方・造出	11.2		杯・甕・器台	円筒・朝顔			大阪市文化財センター1978
4	3	3B	CENT.NG 3	方		製塩土器	杯・高杯・甕・器台	円筒・家・衣蓋・盾・人物			大阪市文化財センター1978
5	3	3B	CENT.NG 4	方・造出	8	甕	杯・坩・器台・甑	円筒・鶏			大阪市文化財センター1978
6	3	3B	CENT.NG 5	方	6.9		高杯・壺	円筒			大阪市文化財センター1978
7	3	3B	CENT.NG 6	方	8		高杯				大阪市文化財センター1978
8	2	4B	CENT.NG 7	方	9.8		杯・器台	円筒			大阪市文化財センター1978
9	2	4B	CENT.NG 8	方	10.3		杯身	円筒			大阪市文化財センター1978
10	2	4B	CENT.NG 9	方	11.7		杯・高杯・壺・甕・器台	円筒・朝顔・衣蓋・盾			大阪市文化財センター1978
11	2	4B	CENT.NG 10	方	8.5		杯・高杯・甕・器台	円筒・甲冑			大阪市文化財センター1978
12		4B	CENT.NG 11	方			壺	衣蓋			大阪市文化財センター1978
13	3	4B	CENT.NG 12	方	6.8	甕	壺				大阪市文化財センター1978
14	3	4B	CENT.NG 13	方	8	甑または鉢		家・鶏			大阪市文化財センター1978
15	2	4B	CENT.NG 15	方	7		甕	円筒・朝顔			大阪市文化財センター1978
16		4B	CENT.NG 16	方	4						大阪市文化財センター1978
17	2	4B	CENT.NG 17	方				円筒			大阪市文化財センター1978
18	3	4B	CENT.NG 18	方	3.7		甕	円筒			大阪市文化財センター1978
19		4B	CENT.NG 19	方	6						大阪市文化財センター1978
20		4B	CENT.NG 20	方							大阪市文化財センター1978
21		4B	CENT.NG 21	方	6						大阪市文化財センター1978
22		4B	CENT.NG 22	方	6						大阪市文化財センター1978
23		4B	CENT.NG 23	方	5.5						大阪市文化財センター1978
24		4B	CENT.NG 24	方	5			円筒			大阪市文化財センター1978
25	2	4B	CENT.NG 25	方	5.5			円筒			大阪市文化財センター1978
26	3	4B	CENT.NG 26	方	7.8	杯	杯・高杯・壺・甕	朝顔			大阪市文化財センター1978
27	3	3B	CENT.NG 27	方	7		杯・器台	円筒			大阪市文化財センター1978
28	2	4B	NG1 1	方	6	○	椀	円筒・家			大阪市文化財協会1982a
29	2	4B	NG1 2	方			杯身・高杯・甕	円筒・家・鶏			大阪市文化財協会1982a、本書第Ⅵ章第5節
30	2	4B	NG1 3	方	4.5	甕	壺	円筒			大阪市文化財協会1982a
31	2	4B	NG1 4	方	8.5		椀・壺・器台	円筒			大阪市文化財協会1982a
32	3	3B	NG1 6	方	7		杯蓋・杯身・高杯・壺・甕			周溝内に須恵器埋納土壙	大阪市文化財協会1982a
33	3	3B	NG11 1	方	5.6		甕	円筒			大阪市文化財協会1982b
34	3	3B	NG11 2	方	10		甕	円筒			大阪市文化財協会1982b
35	3	3B	NG19 1	方	4	○	壺・甕	円筒			大阪市文化財協会1982b
36	3	3B	NG19 2	方	5.4	高杯	杯身・壺・甕	円筒			大阪市文化財協会1982b

表37　長原古墳群一覧表(2)

古墳番号	時期	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	土師器	須恵器	埴輪	韓式土器	備考	文献
37	3	3B	NG19　3	方		壺	壺	円筒			大阪市文化財協会1982b
38	3	3B	NG20−2	方		○	甕·壺	○			**本書第Ⅳ章第1節**
39	2	4B	NG24	方	15			円筒			**本書第Ⅱ章第2節**
40	1	2B	NG2　1	方?				円筒·朝顔·壺·家·衣蓋·翳·盾·靫·草履		埴輪棺、有黒斑の埴輪	高井健司1990、櫻井久之1991
41		2B	NG2　2	方?							
42		2B	NG2　3	方?				円筒			
43	2	4B	NG5−3	方				円筒			
44	2	4B	NG81−2　1	方	11.8		杯蓋·壺·甕	円筒·朝顔·盾·輪?			大阪市文化財協会1989、**本書第Ⅱ章第2節**
45	2	4B	NG81−2　2	方	11.6	小型丸底壺	杯蓋·杯身·高杯·甕·壺·甕·器台	円筒·朝顔·家·盾·靫·武人·鶏	鍋		大阪市文化財協会1989
46		4B	NG81−2　3	方							大阪市文化財協会1989
47	2	4B	NG81−2　4	方	8.6		壺·甕		壺		大阪市文化財協会1989
48		4B	NG81−2　5	方	4.8						大阪市文化財協会1989
49	2	4B	NG81−2　6	方	6.8	高杯	杯身·椀				大阪市文化財協会1989
50	2	4B	NG81−2　7	方	9.8		甕·甕	円筒·朝顔			大阪市文化財協会1989
51	2	4B	NG81−2　8	方	7.8		高杯				大阪市文化財協会1989
52	3	4B	NG81−2　9	方	9.2		杯身·甕·甕	円筒			大阪市文化財協会1989
53	2	4C	NG81−2　10	方	9.2		甕	円筒·朝顔			大阪市文化財協会1989
54	3	4C	NG81−2　11	方	7.2	甑	杯蓋·杯身·壺	円筒·朝顔			大阪市文化財協会1989
55		4C	NG81−2　12	方							大阪市文化財協会1989
56	3	4C	NG81−2　13	方	5.4						大阪市文化財協会1989
57	2	4C	NG81−2　14	方·造出	15		杯蓋·高杯·甕·壺·甕·器台	円筒·人物·馬			大阪市文化財協会1989
58	3	4C	NG81−2　15	方	13		器台	円筒			大阪市文化財協会1989
59	2	4B	NG82−12	方			杯蓋·杯身·高杯·甕	円筒			大阪市文化財協会1993a
60	3	3B	NG82−19　1	方	5.2		杯蓋·杯身·壺	円筒			大阪市文化財協会1990
61	2	4B	NG82−19　2	方	9		椀·高杯蓋·高杯·壺·甕·器台	円筒·朝顔·家		墳丘上面で鉄製品出土	大阪市文化財協会1990
62	2	4B	NG82−19　3	方	10.5		椀·壺·甕	円筒			大阪市文化財協会1990
63	3	4B	NG82−19　4	方	9.5		甕	円筒·朝顔			大阪市文化財協会1990
64	3	4C	NG82−19　5	方	7		杯蓋·杯身·椀·甕	円筒·朝顔			大阪市文化財協会1990
65	2	4C	NG82−19　6	方			杯·椀	円筒·朝顔			大阪市文化財協会1990
66		3C	NG82−19　7	方	7.5			円筒·朝顔			大阪市文化財協会1990
67	2	4C	NG82−19　8	方			甕	円筒			大阪市文化財協会1990
68		4C	NG82−19　9	方	10			円筒·朝顔·衣蓋			大阪市文化財協会1990
69		3C	NG82−19　10	方	11.5	甕		円筒·朝顔			大阪市文化財協会1990
70		3B	NG82−19　11		8.6						大阪市文化財協会1990
71	2	4C	NG18　1	方			高杯				**本書第Ⅱ章第1節**
72		4C	NG18　2	方	3		高杯	円筒			**本書第Ⅱ章第1節**

表38　長原古墳群一覧表(3)

古墳番号	時期	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	土師器	須恵器	埴輪	韓式土器	備考	文献
73	2	4C	NG18　3	方			杯蓋・杯身・椀・壺・甕				本書第Ⅱ章第1節
74	2	4C	NG18　4	方			杯蓋・高杯蓋・高杯・脚				本書第Ⅱ章第1節
75		4C	NG18　5	方							本書第Ⅱ章第1節
76	3	4C	NG18　6	方				円筒			大阪市文化財協会1999c,本書第Ⅱ章第1節
77	2	4C	NG18　7	方			甕	円筒・朝顔・家・鳥			本書第Ⅱ章第1節
78		4C	NG18　8	方				円筒・家			本書第Ⅱ章第1節
79	2	4C	NG18　9	方	9	高杯	杯蓋・脚	円筒・家			本書第Ⅱ章第1節
80	2	4C	NG82−27　1	方		高杯	杯蓋・杯身・壺・甕	○			大阪市文化財協会1990
81	2	4C	NG82−27　2	方		高杯	杯身・甕				大阪市文化財協会1990
82	3	4C	NG82−27　3	方			杯身・甕				大阪市文化財協会1990
83	2	4C	NG82−27　4	方	6		杯身・椀・脚	○		木棺直葬	大阪市文化財協会1990
84	3	4C	NG82−27　5	方			杯蓋・杯身・脚・器台	円筒・朝顔・家・衣蓋・靱・草摺			大阪市文化財協会1990
85	1	4C	NG82−27　6	円・造出	直径47m	甕		円筒・朝顔・壺・家・囲・衣蓋・盾・靫・草摺・動物		一ヶ塚古墳、有黒斑の埴輪	大阪市文化財協会1990,1999c、1999e
86	3	4C	NG82−46	方	11.5		杯蓋・杯身・高杯・器台	円筒・朝顔・馬			大阪市文化財協会1990
87	3	4C	NG83−38	方・造出	12	甕(棺)	杯身・高杯・甕(棺)	円筒・朝顔・家・草摺・巫女・鶏・馬		土器棺	本書第Ⅱ章第1節
88	3	3C	NG83−41　1	方	10	小型丸底壺		円筒			
89	3	3B	NG83−41　2	方	10		杯蓋・杯身・器台	円筒			
90		4B	NG83−46　1	方	6.7		甕	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1992b
91		4B	NG83−46　2	方							大阪市文化財協会1992b
92		4C	NG83−52　1	方	8						大阪市文化財協会1992b
93		4C	NG83−52　2					円筒			大阪市文化財協会1992b
94	3	2C	DD1　1	方	8	○	○	円筒		木棺直葬2基	大阪市文化財協会1979
95		2C	DD1　2								大阪市文化財協会1979
96		2C	DD1　3								大阪市文化財協会1979
97		2C	DD1　4								大阪市文化財協会1979
98		2C	DD1　5								大阪市文化財協会1979
99		2C	DD80−1	方?				○			
100	2	1B	CENT.JY　7	方	10?	高杯	高杯	円筒		城山7号墳	大阪市文化財センター1986a
101	3	1B	CENT.JY	方		○	○	円筒・朝顔		周溝内で立柱	大阪市文化財センター1980
102	2	1B	CENT.JY　1	方	7	壺・甕	椀・高杯・甕			城山1号墳	大阪市文化財センター1986a
103	2	1B	CENT.JY　2	方	11	鉢	高杯・甕			城山2号墳	大阪市文化財センター1986a
104		1B	CENT.JY　3	方			甕	円筒・朝顔		城山3号墳	大阪市文化財センター1986a
105	2	1B	CENT.JY　4	方	7.3		椀・脚・甕			城山4号墳,木棺直葬	大阪市文化財センター1986a
106	3	5A	NG82−41　1	方	11	小型丸底壺・甕	杯蓋・杯身・高杯・脚・壺・甕・器台	円筒			大阪市文化財協会1999a
107	3	5A	NG82−41　2	方			杯蓋・杯身				大阪市文化財協会1999a
108	2	2C	DD84−1　1	方			壺	円筒			

表39　長原古墳群一覧表(4)

古墳番号	時期	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	土師器	須恵器	埴輪	韓式土器	備考	文献
109	2	2C	DD84−1　2	方	7.8		杯身・壺	円筒・家			
110	2	2D	NG84−12　1	方	9.3		杯蓋・高杯蓋・高杯・甕・器台	円筒・朝顔・衣蓋			大阪市文化財協会1992c
111	3	2D	NG84−12　2	方	10.8		杯身・高杯蓋・高杯・甕・器台	円筒・朝顔・家・衣蓋・人物・馬			大阪市文化財協会1992c
112	2	2D	NG84−12　3	方?			壺	円筒・朝顔・衣蓋・盾			大阪市文化財協会1992c
113	3	2D	NG84−25　1	方・造出	14		杯蓋・甕	円筒・家・衣蓋・人物・馬			本書第Ⅲ章第1節
114	2	2C	NG84−25　2	方	4		杯身				本書第Ⅲ章第1節
115	2	2C	NG84−25　3	方			杯身				本書第Ⅲ章第1節
116	3	2D	NG84−25　4	方・造出	16		○				本書第Ⅲ章第1節
117		2D	NG84−25　5	方	10.6						本書第Ⅲ章第1節
118		2D	NG84−25　6	方							本書第Ⅲ章第1節
119		2C	NG84−25　7								本書第Ⅲ章第1節
120		4B	NG84−46	方	5			円筒			本書第Ⅱ章第2節
121		4C	NG84−48　1	方	7.4		甕	円筒			大阪市文化財協会1992c
122		4B	NG84−48　2	方	5.5		甕	円筒			大阪市文化財協会1992c
123		4C	NG84−48　3	方	6						大阪市文化財協会1992c
124		4C	NG84−48　4	方				円筒・朝顔・家			大阪市文化財協会1992c
125		4B	NG84−48　5	方	6.7	甕		円筒			大阪市文化財協会1992c
126		4C	NG84−73	方							大阪市文化財協会1992c
127	2	1C	DD84−3　1	方	13.5			○			大阪市文化財協会1999a
128		1C	DD84−3　2	方	5.3			○			大阪市文化財協会1999a
129	2	4B	NG85−18	方	8.5	○	○	円筒			本書第Ⅵ章第5節
130	4	3B	NG85−23	前方後円	24.4	小型壺・甕(棺)	杯・杯身・高杯(棺)・器台			七ノ坪古墳、横穴式石室	高井健司1986
131	3	4B	NG85−34−2　1	方	10.5	甕・高杯	杯蓋・杯身・高杯蓋・高杯・鉢・甕	円筒・朝顔・盾・靱・人物・馬			大阪市文化財協会1993a
132	2	4B	NG85−34−2　2	方	8		杯蓋・鉢・壺・甕・器台	円筒・衣蓋			大阪市文化財協会1993a
133		4B	NG85−34−5	方							大阪市文化財協会1993a
134	2	4B	NG85−34−4	方	7		杯蓋	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1993a
135	3	4B	NG85−34−3　2	方	5		杯身				大阪市文化財協会1993a
136		4B	NG85−34−3　3	方	10			円筒・朝顔			大阪市文化財協会1993a
137	2	4B	NG85−34−3　4	方	4.5		杯身				大阪市文化財協会1993a
138		5B	NG85−64	円?	2.7	小型丸底壺					
139	2	5B	NG85−64	方	7	○	杯蓋・甕				
140	3	3C	NG85−70　1	方			杯蓋・杯身・鉢				大阪市文化財協会1993a
141	3	4C	NG85−70　2	方	5	壺	杯蓋・高杯・器台	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1993a
142	3	4C	NG85−70　3	方	12		鉢	円筒・朝顔・衣蓋			大阪市文化財協会1993a
143		4C	NG86−28　1	方	11						
144		4C	NG86−30								

表40　長原古墳群一覧表(5)

古墳番号	時期	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	土師器	須恵器	埴輪	韓式土器	備考	文献
145		4C	NG86-43-2 1	方							大阪市文化財協会1993b
146	3	4C	NG86-43-2 2	方	5.5	高杯	杯蓋・杯身・甕	円筒		主体部痕跡	大阪市文化財協会1993b
147	3	3B	NG86-54-1 1	方	9		杯蓋	円筒・甲冑			大阪市文化財協会1993b
148		3B	NG86-54-1 2	方				円筒			大阪市文化財協会1993b
149	2	4B	NG86-54-2 1	方			杯蓋・杯身・高杯・甕	円筒			大阪市文化財協会1993b
150	2	4B	NG86-58-1 1	方	12	高杯・壺	杯蓋・杯身・高杯・壺・甕・器台	円筒・朝顔・家・武人		滑石臼玉	大阪市文化財協会1993b
151		4B	NG86-58-1 2	方	7	小型丸底壺		円筒			大阪市文化財協会1993b
152	2	4B	NG86-58-2 1	方			杯身・壺・甕・器台	円筒・朝顔・家・衣蓋			大阪市文化財協会1993b
153	4	3B	NG86-60-1 1	方	10	高杯・壺・甕	杯蓋・壺・鼎・甕				大阪市文化財協会1993b
154		3C	NG86-60-1 2								大阪市文化財協会1993b
155		4B	NG86-66 1	方				円筒・馬			**本書第II章第3節**
156		4B	NG86-66 2	方				○			**本書第II章第3節**
157		4B	NG86-66 3	方?							**本書第II章第3節**
158		4B	NG86-66 4	方?				円筒			**本書第II章第3節**
159		3B	NG86-66 5	方?							**本書第II章第3節**
160		5A	NG86-70 1	方	9		壺	円筒・鳥			大阪市文化財協会1993b
161		5A	NG86-70 2	方	9		高杯・甕	円筒・朝顔・家・草摺	鉢		大阪市文化財協会1993b
162		5B	NG86-70 3	方	11	壺		円筒・家・馬	鉢		大阪市文化財協会1993b
163		5B	NG86-70 4	方	8			円筒			大阪市文化財協会1993b
164		5B	NG86-70 5	方				円筒			大阪市文化財協会1993b
165		4C	NG86-85	方?	6.5			円筒・衣蓋			大阪市文化財協会1993b
166	2	2C	NG86-91	方			杯蓋・杯身・鼎・壺・甕・器台	円筒	○	木棺直葬2基、金環、鉄器	**本書第III章第1節**
167	2	1B	CENT.JY 5	方	3	甕(棺)	杯蓋・杯身・壺・甕(棺)		甕	城山5号墳、土器棺	大阪文化財センター1986a
168	2	1B	CENT.JY 6	方					鉢	城山6号墳、木棺直葬	大阪文化財センター1986a
169	1	3C	NG87-35 1	方	15.1	小型丸底壺・鉢		円筒・朝顔・家・船・靫・盾・靱・鏃・短甲・草摺		高廻り1号墳、有黒斑の埴輪	大阪市文化財協会1991
170	1	3B	NG87-35 2	円	19.6	高杯		円筒・壺・家・船・盾・(衣蓋)・靱・短甲・胄・草摺		高廻り2号墳、滑石臼玉、有黒斑ノ埴輪	大阪市文化財協会1991
171		5B	NG87-31	方?			椀	円筒			大阪市文化財協会1994
172	2	4B	NG87-51	方	5	○	杯身・壺・甕				大阪市文化財協会1994
173	2	5B	NG87-60 1	方	8		椀・鼎				大阪市文化財協会1994
174		5B	NG87-60 2				○	○		滑石製紡錘車	大阪市文化財協会1994
175		5A	NG87-60 3	方	8	甕	○				大阪市文化財協会1994
176	1	5B	NG87-76	方				円筒(鰭付含む)・朝顔・家・衣蓋・盾・蕨		有黒斑の埴輪	大阪市文化財協会1994
177		4B	NG87-27	方			○				大阪市文化財協会1994
178		4B	NG87-81	方	7						**本書第VI章第5節**
179	2	4B	NG88-19	方	8.3		高杯・鼎・壺・甕・器台			木棺直葬、鉄刀副葬	岡村勝行・清水和明1990
180	2	4C	NG88-56	方	12		杯蓋・杯身・甕(棺)			土器棺	**本書第II章第1節**

表41　長原古墳群一覧表(6)

古墳番号	時期	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	土師器	須恵器	埴輪	韓式土器	備考	文献
181	4	3C	NG88−54	前方後円	25		杯身·高杯蓋·高杯·瑞·壺	円筒·家·衣蓋·盾·人物·馬	甕	南口古墳、外堤あり	大阪市文化財協会1995
182	3	4C	NG89−69	方	7.5		杯蓋·高杯蓋	円筒			本書第Ⅱ章第3節
183	3	4B	NG91−1	方	10.8		甕	円筒			本書第Ⅵ章第2節
184		4B	NG91−1 1	方	6.8	○	○				本書第Ⅵ章第2節
185		4B	NG91−1 2	方	8						本書第Ⅵ章第2節
186		4B	NG91−1 3	方	7						本書第Ⅵ章第2節
187	3	4C	NG91−18 4	方·造出	7.5		杯蓋·杯身·高杯·甕·器台	円筒·朝顔·家·巫女		木棺直葬2基	久保和士1992
188	3	4C	NG91−18 1	方·造出	8		杯蓋·杯身·瑞·器台	円筒·朝顔·家·人物·馬			久保和士1992
189		4C	NG91−18 2	方	7		○	円筒			久保和士1992
190	3	4C	NG91−18 3	方·造出	17.5	甕(棺)	杯蓋·杯身·高杯·甕(棺)	円筒·朝顔·衣蓋·盾·甲冑·巫女·鶏·動物		土器棺、外堤あり	久保和士1992
191		4C	NG91−18 4	方	5.5		○	円筒			久保和士1992
192		4C	NG91−53 5	方				円筒			久保和士1992
193	3	4C	NG91−30 6	方			杯身	円筒·朝顔			
194		4C	NG91−30 1	方							
195		4B	NG91−55 2	方	7.5			円筒·巫女			
196	1	4C	NG91−81	方	6			壺		有黒斑の埴輪	
197		2D	NG84−67	方?				円筒			大阪市文化財協会1992c
198		4B	NG92−5	方	9.7		○	円筒			本書第Ⅵ章第2節
199	2	2C	NG92−90	方	9	甕·小型丸底壺	高杯蓋·高杯·壺	円筒			本書第Ⅴ章第1節
200	3	4B	NG92−92	方	6.3	○	杯蓋·杯身·壺			木棺直葬	本書第Ⅱ章第3節
201	2	2C	NG93−37 2	方	7		○	円筒·朝顔		ガラス小玉·管玉	本書第Ⅴ章第1節
202		2C	NG93−37 3	方	6	平底鍋	甕	円筒·朝顔			本書第Ⅴ章第1節
203		2C	NG93−37 4	方?	6		○				本書第Ⅴ章第1節
204		2C	NG93−37 5	方	8	高杯	甕				本書第Ⅴ章第1節
205		2C	NG93−37 6	方?							本書第Ⅴ章第1節
206	4	4C	NG94−66 1	方	7.4		杯身·杯蓋·壺·瑞·高杯·短頸壺·甕			木棺直葬、滑石製紡錘車	松本百合子1995
207	3	4C	NG97−36	方	8		杯蓋·甕	円筒			大阪市文化財協会2001b
208		5A	NG82−41 3	方	14			円筒·石見型			大阪市文化財協会1999a
209		1C	DD84−3								大阪市文化財協会1999a
210	2	1C	DD84−3	方	9.5					木棺直葬、鉄刀、鉄鏃	大阪市文化財協会1999a
211		1C	DD84−3	方	4.5						大阪市文化財協会1999a
212	3	4C	NG99−42	方			杯身	円筒			大阪市文化財協会2003b
213	1	3B	NG02−08	方	11			家形		粘土槨、鉄刀·竪櫛3	高橋工2003、大阪市文化財協会2005

表42　長原古墳群周辺の古墳

古墳・調査名	時期	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	土師器	須恵器	埴輪	韓式土器	備考	文献
八尾南1	1	欄外		方	12.5	甕		円筒			八尾南遺跡調査会1981
八尾南3	4	4A		方	(10)	○	○				八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南4	3	欄外	YS82−1	方	(6)	○	○				八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南5	3	欄外	YS82−1	方	(7.5)	○	○				八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南6	3	欄外	YS82−1	方	7	○	○				八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南7	3	4A	YS83−2	方	7.9	○	○				八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南8	3	4A	YS87−8	方	6.6	○	○				八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南9	3	4A	YS87−8	方	14.5		○	円筒・朝顔・盾・馬・人物			八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南10	3	4A	YS87−8	方	(13.5)	○	○	円筒・朝顔・盾・馬・人物・太刀			八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南11	2	欄外	YS88−12	方	6.2						八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南12	2	欄外	YS88−12	方		○					八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南13	3	欄外	YS88−12	方	7.9		○				八尾市文化財調査研究会1995:第6表
八尾南14	4	欄外	YS88−12	方	8.5		○				八尾市文化財調査研究会1995:第6表
花塚山	1	2D		方?	30			円筒			京嶋覚1992、田中清美2004
KR1	1	D1	KR87−2	方	7~8			円筒			黒田慶一1987
KR2	1	D1	KR92−5	方	7.5			壺		木棺直葬1基、鉄鏃・鉄刀・竪櫛	佐藤隆1993
KR3	2	D1	KR99−1・00−1	方	7.5		杯・高杯・器台	朝顔・円筒		報告のSX501	大文協2003e
KR4	2	D1	KR99−1・00−1	方	7.8					報告のSX502	大文協2003e

第２節　長原117号墳出土の両耳付短頸壺について

１)はじめに

古墳時代中期の長原遺跡は、朝鮮半島系の土器が多く出土することで知られている。その中には鳥足文タタキが施された土器のように、朝鮮半島の具体的な地域に系譜が求められるものも多くある。本書の第Ⅲ章第１節で報告した長原117号墳出土の両耳付短頸壺も、後述するように器形や耳の形態によって系譜を朝鮮半島の具体的な地域に求めることができる資料である。ここではまず、朝鮮半島の両耳付短頸壺の地域性や日本での出土例を概論した後、長原117号墳出土資料について比較検討し、須恵器生産開始以降の日本における両耳付短頸壺の受容と展開について若干の検討を加えたい。

２)朝鮮半島における両耳付短頸壺

朝鮮半島では両耳付短頸壺の耳の形態は、孔の穿ち方で図332の左上のようにＡ・Ｂ類の２類に大別することができる。

まず、Ａ類は縦方向に孔が穿たれるもので、原三国時代末から三国時代中頃(３～５世紀)の全羅・忠清道(いわゆる馬韓・百済地域)に分布している。底部形態は平底と丸底があり、管見による限り、前者が全羅道、後者が忠清道に多いように窺える。また、Ａ類に対応する蓋は、天井部が平坦で、両側に縦方向に孔が空いた耳が付いたり、張り出した天井部の裾に孔が穿たれたりする。口径が10数cmのもので、全羅道で多く見られ、務安郡の社倉里遺跡のように土壙墓から壺と蓋がセットで出土することもある[国立光州博物館ほか1984]。

Ｂ類は肩部に横方向に孔が穿たれた耳を両側にもつもので、慶尚道一帯(いわゆる加耶・新羅地域)に分布する。原三国時代末から三国時代初頭のものは、器高が15cm程度の小型品で、格子タタキが施され、焼成はややあまい。一方、三国時代前期(４世紀代)になると、器高が20cmを超え、無文もしくは縄文タタキが施され、焼成は堅緻になる。集落遺跡でも出土するが、おもに木槨墓や竪穴式石槨から出土する場合が多い。

以上のように両耳付短頸壺は、それぞれの形態でほぼ地域が限定できる器種であるが、互いの地域で異なる形態の両耳付短頸壺が出土することもあり、朝鮮半島内での地域間交流を知るうえでも有効な資料である。

３)日本における出土事例

Ａ類については古墳時代前期(庄内式～布留式併行期)の段階で、北部九州を中心に搬入品、模倣品および耳のみを採用した折衷品が多く出土している。この段階の搬入品と考えられるものには還元焔焼成だけでなく、酸化焔焼成ものものもある。また、在来の技法を交えて作られた模倣・折衷品についても北部九州や山陰地方でも出土している。

しかし、須恵器出現後は近畿地方に集中するようになる。この中で還元焔焼成の土器については、

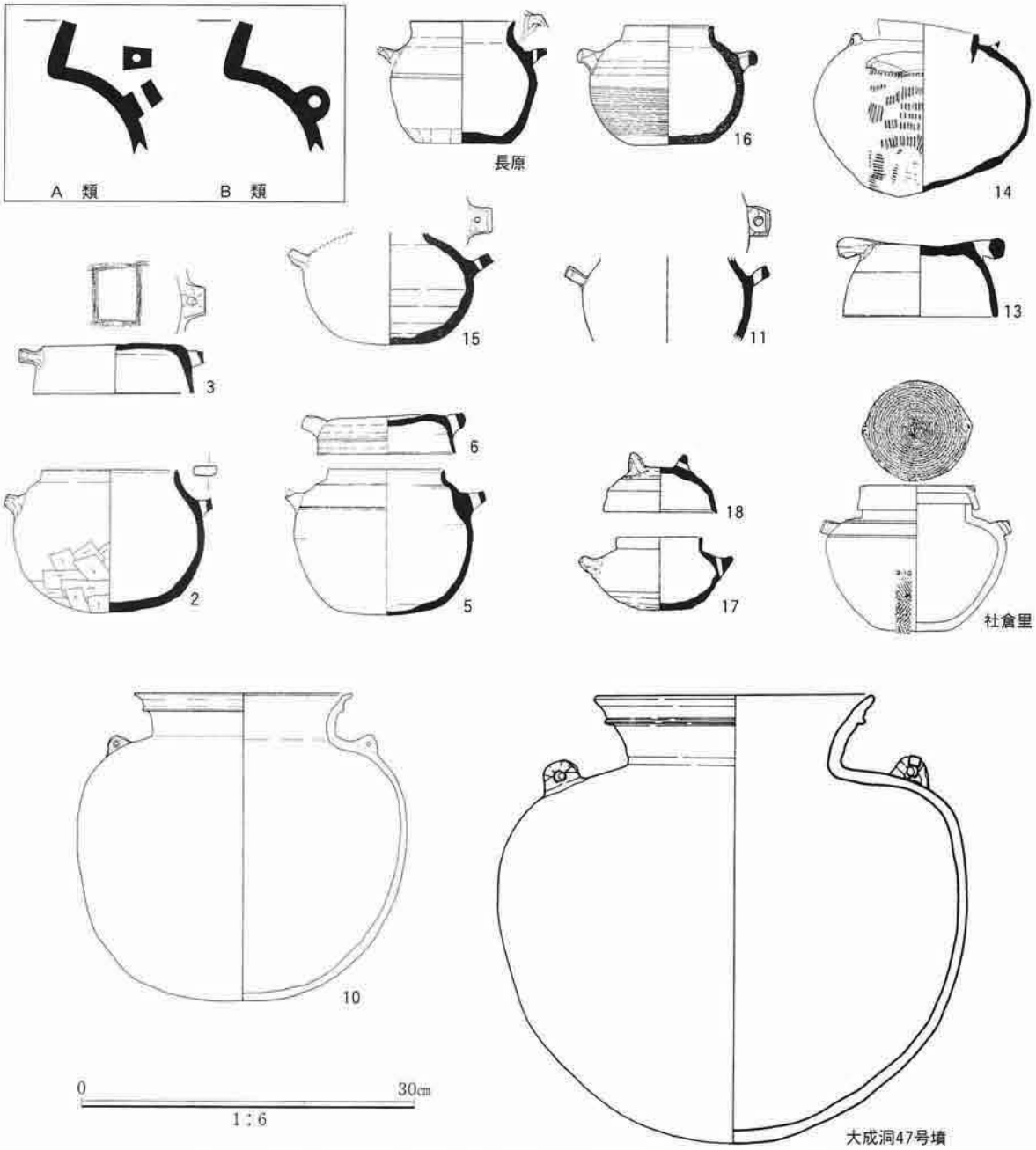


図332　両耳付短頸壺の分類と朝鮮半島・日本の類例(引用文献より転載)

朝鮮半島から搬入されたのか、それとも陶邑などの日本国内で生産されたものか判断するのが難しいものもある。焼成の堅緻さや胎土の特徴、後述するような須恵器的な技法が見られないという点から、表43のものを搬入品と考えたが、今後精査して朝鮮半島からの搬入品か否かの判断をする必要がある。この中で和歌山市六十谷遺跡の4・5は蓋と壺がセットであり、大正年間に家形磯などの陶質土器といっしょに出土したらしく[河上邦彦・奥田豊1972]、古墳の主体部であった可能性も残される。四ツ池遺跡の2は六十谷遺跡の5と形態が類似する。なお、セスドノ古墳例はつまみを有する蓋がセットで出土しているが、蓋の形態が朝鮮半島に類例がないため、須恵器の可能性も残る。

また、A類の耳を有するもので日本で製作されたとと考えたものは表44に挙げた。これらは胎土や焼成の特徴に加え、体部にカキメなど須恵器独特の技法が見られたり、焼け歪みがひどく近隣で生産

表43　日本出土の両耳付短頸壺の搬入例

番号	形態	地域	遺跡名	遺構	時期	特徴	参考文献
1	A	大阪	四ツ池	SD004	5世紀前半	外面に火襷あり。	堺市1991
2	A	大阪	四ツ池	SD004	5世紀前半	丸底の底部に手持ちのヘラケズリ。	堺市1991
3	A蓋	大阪	小阪	河川1遺物群2	5世紀前半	天井部に下駄痕。口縁部に火襷あり。	大阪センター1992
4	A蓋	大阪	久宝寺	NR5001	5世紀後半	天井部に放射状のヘラ描き。	大阪センター2000
5	A	和歌山	六十谷	古墳？	5世紀	対になる蓋がある。	河上他1972
6	A蓋	和歌山	六十谷	古墳？	5世紀		河上他1972
7	A	福岡	セスドノ古墳	横穴式石室	5世紀後半	小さな平底。蓋がセットで出土。	田川市1984
8	A蓋	福岡	セスドノ古墳	横穴式石室	5世紀後半		田川市1984
9	B	鳥取	青木稲場	包含層	5世紀後半	縄文タタキ。	米子市2000
10	B	大阪	水源地	調査地点1－溝	5世紀前半	二重口縁。	神谷・三好1985

※時期については共伴遺物でもっとも新しいもので示した。表44も同じ。

表44　日本で生産されたと思われる両耳付短頸壺A類および蓋

番号	地域	遺跡名	遺構	時期	特徴	参考文献
11	大阪	大庭寺	1－OL土器溜り中層	5世紀前半	耳は扁平。体部にカキメが見られる。	大阪府協会1995
12	大阪	大庭寺	1－OL土器溜り中層	5世紀前半	蓋で耳は欠損。一方の耳は焼成前に破損し、破損した面が釉を被る。	大阪府協会1995
13	大阪	大庭寺	1－OL土器溜り上層	5世紀前半	蓋で環状の耳が付く。12よりひとまわり大。	大阪府協会1995
14	大阪	小阪	井戸1	5世紀前半	体部に平行タタキ。他の破片が溶着。	大阪センター1992
15	大阪	陶邑	TK216号窯跡	5世紀中頃	扁平な耳あり。丸底。	田辺1981
16	大阪	大坂城下層	第7層	5世紀末	平底で、体部下半にカキメが施される。	田中清美1989
17	大阪	一須賀	I－6号墳	6世紀前葉	丸底。蓋と対になる。	大阪府1993
18	大阪	一須賀	I－6号墳	6世紀前葉	蓋で天井部に丸みあり。	大阪府1993
19	大阪	大庭寺	包含層	6～7世紀	蓋で天井部に丸みあり。	大阪センター1998
20	奈良	能峠	SD-01	6世紀中葉	小型品。	橿考研1999
21	福岡	茶臼山東	窯跡	6世紀後半		築城町1998

されたことを窺わせるようなものを含む。

代表的な例としてはTK216号窯出土の15で、面取りされた扁平な耳が付き、丸底であることから忠清道で多く見られる形態に近い。大庭寺遺跡の11もTK216号窯の15と同様に面取りされた扁平な耳が付くが、体部にはカキメが施されていた(註1)。また、大庭寺遺跡の蓋(12・13)は口径に比して器高が高く、13の環状の耳とともに朝鮮半島では見られない形態である。

さらに大阪府立大手前高校敷地内の大坂城下層遺跡の16についてもカキメがあるため、国産と判断できる。小阪遺跡の14は耳が体部の大きさに比して小さい上に、焼け歪みがひどく、他の破片が溶着していることから、近隣の生



図333　日本出土の両耳付短頸壺の分布

産地(陶邑)のものであろう。一須賀Ⅰ－6号墳ではMT15型式の須恵器と共伴して蓋とセットで出土しており(17・18)、これは時期が確認できる限りではもっとも新しい例である。蓋(18)は天井部に丸みがあり、側面ではなく上に耳が付き、朝鮮半島で見られるものとは異なる。

一方、B類については陶邑などの窯跡では見られないことから、鳥取県米子市の青木稲場遺跡(9)、大阪府高石市の水源地遺跡(10)のものは搬入品と思われる。

4)117号墳出土資料の検討

ここで再度、長原117号墳出土の両耳付短頸壺を見てみよう(図334)。

この両耳付短頸壺は、口縁部や体部、耳に欠損個所があるが、図上では完形に復元することができる。口径が9.3cm、器高が11.0cmあり、口縁部は短く外反し、平底である。外面はヨコナデが施され、体部最大径部には凹線が1条巡っている。外底面はナデで滑らかに仕上げられており、下駄痕はない。また、体部最下位には断続的なヘラケズリが施されている。これは朝鮮半島南部の平底の土器によく見られる技法である一方で、初期の陶邑でも見られる。

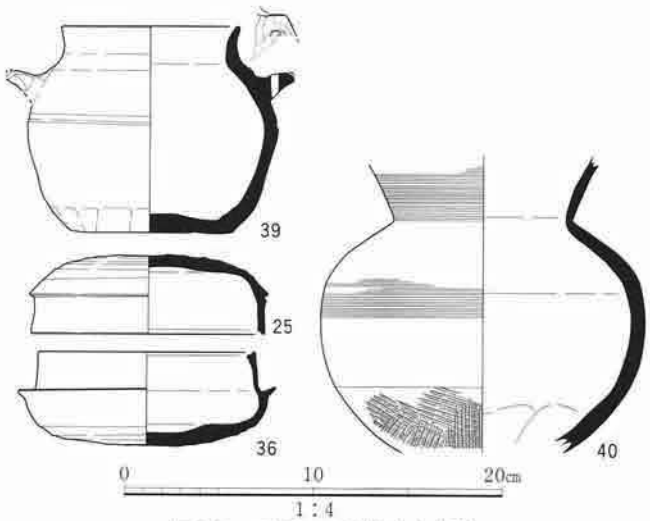


図334　長原117号墳出土遺物

内面はヨコナデで仕上げられていて、底部との境界部分には強いユビナデが施されている。破断面から接合痕を見出せなかったが、円板の上に体部を継ぎ足したことが想定できる。

耳は外面にヨコナデが施された後、肩部に対して垂直に貼付けられている。実物には1個所にしか残っていないが、対になる側の残存部には耳を接合した際のナデの痕跡が残っているため、本来は両側にあったことが容易に確認できる。残存範囲で見る


写真29　長原117号墳出土両耳付短頸壺(1)


写真30　長原117号墳出土両耳付短頸壺(2)

かぎり耳は扁平で、端部は平坦に仕上げられているが、側面は雑で、朝鮮半島の耳で扁平なものはていねいに面取りされているのとは異なる。

焼成は還元焔焼成で、堅緻に仕上がっている(須恵質)。色調は内外面とも灰色であるが、断面は紫灰色を呈する。自然釉はやや緑がかった色調のもので、口縁部内外面、外面の体部上半、内底面に付着している。よって、口縁を上に向けて窯詰めされたことがわかるが、口縁端部には自然釉が付着していない。また、窯の壁体と思われる塊が体部外面に付着している。

胎土には長石の砂粒が少量含まれる。胎土分析など科学的な検討は行っていないが、大庭寺遺跡の資料を実見した際に、類似している印象を受けた。

共伴遺物は報告でも記したとおり、須恵器型式でいうTK208型式の蓋杯と壺であり、時期は5世紀後半に位置づけられる。

本例を朝鮮半島の例に照らし合せてみると、底部が平底で、耳の形態がA類に該当することから、全羅道で多く見られるものと形態的に近いといえる。また、体部に凹線が巡る例は、4世紀末から5世紀初頭に推定される全羅南道務安郡の社倉里4号土壙墓出土資料(図332－b)にある[国立光州博物館ほか1984]。

しかし、耳の作りが雑で、胎土が陶邑産の須恵器に類似していることは国産の可能性を支持する。大庭寺遺跡で見られたようにカキメなどの須恵器特有の技法が見られない上に、化学的に裏付けられていない胎土の観察結果を基に国産とするには根拠が弱いが、初期の陶邑には朝鮮半島の器形・技法に忠実なものもあるため、とりあえず国産の可能性が高いという考えでまとめておきたい。

5)おわりに

以上、日本国内出土の両耳付短頸壺を朝鮮半島南部の資料と比較しながら検討し、長原117号墳出土資料の位置づけを行ってみた。結論的には国産の可能性が高いとしたものの、課題も残された。

古墳時代前期の段階では北部九州での出土が圧倒的に多いが、5世紀代に入ると、朝鮮半島の情報は畿内に集中するようになり、それを反映してか両耳付短頸壺の出土例も近畿、特に大阪府下に集中する。この時期、陶邑では須恵器生産が始まるが、[酒井清治2004]によると、加耶系が多いとされるTG231・232号窯の段階でも百済・栄山江流域の器形や技法が採用されているという。そして続くTK73・216号窯の段階になると、栄山江・錦江流域の影響が強く見られ、ここで須恵器が定型化したと考える。こういった影響から、須恵器生産が始まった頃の陶邑およびその周辺で集中するのであろう。この須恵器に採用された両耳付短頸壺および蓋は、採用直後から独自性があることは前述した通りである。

ただ、古墳時代前期および中期で共通するのは、両耳付短頸壺が本格的に採用されることがないという点である。古墳時代前期については土器文化に対する影響力が少なかったことが考えられるが、須恵器生産が開始されて以降についても数は少なく、細々と継承されている程度である。これは全羅道系の甕が積極的に採用され、須恵器の器種構成の一部を占めるのとは対照的であり、選択的に器種が導入されていることが考えられる。この段階には朝鮮半島ですでに両耳付短頸壺が減少しつつある

一方で、瓽は6世紀になっても継続して作られていることから、日本と朝鮮半島南西部の器種構成の変遷がある程度パラレルであったことを示すものであろう(註2)。

(寺井)

註)

(1)2005年3月に大阪府文化財センター南部事務所にて実見させて頂いた際に確認した。

(2)本節の検討に係わる資料調査については、大阪府文化財センター、堺市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所のご協力を頂いた。記して謝意を表したい。なお、本研究は平成14～16年度および平成17年度科学研究費補助金(若手研究B　課題番号14710281・17720206)の助成を得た。

引用・参考文献

今津啓子1989、「周堤をもつ竪穴住居」：大阪市文化財協会編『葦火』21号、pp.6－7

1991、「杉中駒太郎氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査報告(NG89－8)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.129－147

植木久1983、「まとめ」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.237－246

上野裕子・鈴木京子1989、「長原遺跡出土の鉄製ヤス」：大阪市文化財協会編『葦火』21号、p.8

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985、「吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－65)略報」：『昭和58年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.16－21・pp.77－87

大阪市文化財協会1979、「平野区長吉出戸4丁目所在遺跡発掘調査略報」：『大阪府下文化財担当者研究会(第1回)資料』

1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1983a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1983b、『瓜破遺跡発掘調査報告』

1989、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ

1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1991、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1992a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1992c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1993a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1993b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

1996、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅵ

1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ

1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅹ

1997c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅠ

1998、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ

1999a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅡ

1999c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅢ

1999d、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ

1999e、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅣ

1999f、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1996年度－』

2000a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅤ

2000b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ

2001a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅥ

2001b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅦ

2001c、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅳ

2002a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅷ

2002b、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅸ
2002c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XⅧ
2002d、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ
2003a、『長原遺跡発掘調査報告』X
2003b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XIX
2003c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XX
2003d、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ
2003e、『喜連東遺跡発掘調査報告』Ⅰ
2004a、『長原遺跡発掘調査報告』XⅠ
2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅶ
2005a、『長原遺跡発掘調査報告』XⅡ
2005b、『長原遺跡発掘調査報告』XⅢ
2006、『長原遺跡発掘調査報告』XⅣ
大阪府教育委員会1993、『大阪府立近つ飛鳥博物館(仮称)用地　一須賀古墳群Ⅰ支群発掘調査概要』
大阪府埋蔵文化財協会1995、『陶邑・大庭寺遺跡』　(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯
大阪府文化財調査研究センター1998、『大庭寺・伏尾遺跡』　大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書第27集
2000、『河内平野遺跡群の動態』Ⅷ
大阪文化財センター1978、『長原』
1980、『亀井・城山』
1986a、『城山(その1)』
1986b、『城山(その2)』
1986c、『城山(その3)』
1992、『小阪遺跡』
大庭重信1999、「弥生時代中期前葉の水田とその経営主体」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅶ、pp.97－100
2005、「まとめ」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』XⅡ、pp.315－324
岡村勝行1993、「古墳時代の長原ムラの調査から」：大阪市文化財協会編『葦火』44号、pp.4－5
岡村勝行・清水和明1990、「松田氏によるマンション建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG88－19)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.279－299
尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』、pp.315－337
神谷正弘・三好孝一1985、「大阪府高石市水原地遺跡出土の須恵器について」：『古文化談叢』第15集　九州古文化研究会、pp.63－78
河上邦彦・奥田豊1972、「和歌山における陶質土器」：薗田香融編『和歌山市における古墳文化』　関西大学文学部考古学研究紀要第4冊、pp.160－171
京嶋覚1982、「長原遺跡の方墳群」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.66－75
1989、「古墳時代長原遺跡の概要」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp.14－17
1992、「瓜破台地の考古学的環境」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.1－6
1994、「井戸　井戸　井戸」：大阪市文化財協会編『葦火』49号、pp.6－7
1997、「初期群集墳の形成過程－河内長原古墳群の被葬者像をもとめて－」：立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集』Ⅰ、pp.213－226
1999、「古代・中世の会賀と長原」：大阪市教育委員会編『大阪の歴史と文化財』第2号、pp.53－60
2001a、「馬と地域社会」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.133－148

2001b、「道路状遺構と「磯歯津道」－長原遺跡の交通史的検討－」：立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集』Ⅱ、pp.233－249
慶星大学校博物館2003、『金海大成洞古墳群』Ⅲ　慶星大学校博物館研究叢書第10輯
久保和士1992、「堤をもつ古墳」：大阪市文化財協会編『葦火』36号、pp.2－3
1995、「長原遺跡の花文陶器」：大阪市文化財協会編『葦火』56号、p.8
1999、「動物遺体の調査結果と検討」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.107－120
久保和士・松井章・宮地淳子・佐久間桂子2000、「長原遺跡95－14次調査出土の動物遺存体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV、pp.159－172
黒田慶一1987、「喜連東遺跡発見の方形周溝墓と方墳」：大阪市文化財協会編『葦火』10号、pp.5－8
建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
古代の土器研究会1992、『古代の土器1　都城の土器集成』
国立光州博物館・百済文化開発研究院1984、「付録1　務安社倉里甕棺墓」：『霊岩萬樹里古墳群』 光州博物館学術叢
堺市教育委員会1991、『堺市文化財調査概要報告第18冊』
酒井清治2004、「須恵器生産のはじまり」：『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集　国立歴史民俗博物館、pp.339－365
櫻井久之1991、「長原40号墳の形象埴輪」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.192－210
1993、「長原古墳群の調査」；大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.1－7
1996a、「5世紀の屋敷地のすがた－長原遺跡東北地区の調査から－」：大阪市文化財協会編『葦火』60号、pp.2－3
1996b、「鳥足文のある土器の一群」：大阪市文化財協会編『葦火』61号、pp.6－7
1996c、「なぜ、弥生土器は埋められたのか」：大阪市文化財協会編『葦火』62号、pp.2－3
1998、「鳥足文タタキメのある土器の一群」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』創刊号、pp.21－32
2001、「長原遺跡の小方墳」：大阪府文化財調査研究センター編『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料』、pp.61－74
佐々木恵介2004、「牓示札・制札」：平川南・冲森卓也・栄原永遠男・山中章編『文字と古代日本』1　支配と文字　吉川弘文館、pp.182－210
佐藤隆1989、「5世紀の建物を発掘－長原遺跡の調査－」：大阪市文化財協会編『葦火』22号、pp.6－7
1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102－114
1993、「喜連東遺跡の古墳と埋葬施設」：大阪市文化財協会編『葦火』42号、pp.6－7
佐原真1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2　東京堂出版、pp.53－72
清水和明・鳥居信子1996、「『長原里』の木簡」：大阪市文化財協会編『葦火』61号、pp.2－4
杉本厚典2003、「八尾南・長原・城山遺跡における集落構成の変化－弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の一様相」：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、pp.31－70
関川尚功1987、「畿内中期古墳出土の鉄製農工具について」：横田健一先生古稀記念会編『文化史論叢(上)』、pp.325－342
高井健司1986、「長原七ノ坪古墳とその馬具」：大阪市文化財協会編『葦火』創刊号、pp.2－3
1987a、「城下マンション(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85－23)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.149－185
1987b、「長原古墳群で埋葬施設を確認」：大阪市文化財協会編『葦火』第8号、pp.6－7
1988、「森本氏による事務所ビル建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG86－91)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.188－201
1989、「長原166号墳」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『よみがえる古代船と5世紀の大阪』、pp.78－79
1990、「黒斑をもつ円筒埴輪の一例」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.285－293
高井健司・高橋工1989、「宏和産業(株)による共同住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査報告(NG87－26)」：大阪市教育

委員会・大阪市文化財協会編『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.223－236
高野陽子2003、「北近畿における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様式」：大阪府文化財センター編『古墳出現期の土師器と実年代』、pp.307－333
高橋工1993、「小さいけれど長原代表選手～長原200号墳を発見」：大阪市文化財協会編『葦火』44号、pp.２－３
1994、「ふたつの製塩土器」：大阪市文化財協会編『葦火』53号、pp.４－５
1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79－106
2000、「弥生時代長原ムラに河内の原風景を見る」：大阪市文化財協会編『葦火』87号、pp.４－７
2003、「粘土榔をもつ古墳」：大阪市文化財協会編『葦火』105号、pp.２－３
高橋工・佐藤隆1991、「東野稔氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG89－25)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.148－167
高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.9－17
田川市教育委員会1984、『セスドノ古墳』 田川市文化財調査報告書第３集
田中清美1989、「上町台地北部出土の韓式系土器について」：『韓式系土器研究』Ⅱ 韓式系土器研究会、pp.70－83
1998、「長原87号墳出土の巫女の埴輪」：大阪市文化財協会編『葦火』76号、pp.６－７
2004、「花塚山古墳」：大阪市史編纂書・大阪市資料調査会『新修大阪市史 史料編』第１巻 考古資料偏、pp.211－213
田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店
趙哲済1991、「長原の氷期の狩人」：大阪市文化財協会編『葦火』32号、pp.4－５
2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7－28
2003、「大阪平野のおいたちと人類遺跡」：日本第四紀学会2003年大阪大会実行委員会編『大阪100万年の自然と人のくらし』 日本第四紀学会、Ⅰ～ⅩⅢ・pp.１－16
趙哲済・樽野博幸1997、「平野区の長原で、ナウマンゾウの臼歯の化石」：大阪市文化財協会編『葦火』69号、pp.6－７
築城町教育委員会1998、『船迫窯跡群』 築城町文化財調査報告書第６集
辻美紀2004、「～長原遺跡発～二つの方形周溝墓」：大阪市文化財協会編『葦火』108号、pp.2－３
寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、pp.41－146
永島暉臣慎1987、「辰巳マンション建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85－１)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.118－126
長原遺跡調査会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
花田勝弘2002、『古代の鉄生産と渡来人－倭政権の形成と生産組織－』 雄山閣
松岡良憲1997、「古墳時代以前の扉口装置」：『堅田直先生古希記念論文集』、pp.161－169
松本百合子1995、「最新の206号墳」：大阪市文化財協会編『葦火』57号、pp.4－５
宮本長二郎1996、『日本原始古代の住居建築』
村元健一2003、「長原遺跡とその周辺の古代の様相」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ、pp.86－100
森島康雄1990、「中河内の羽釜」：『中近世土器の基礎研究』Ⅵ 日本中世土器研究会、pp.55－62
八尾市文化財調査研究会1995、『八尾南遺跡』 財団法人八尾市文化財調査研究会報告47
八尾南遺跡調査会1981、『八尾南遺跡』
米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室2000、『青木稲葉遺跡・福市遺跡(大成地区)』
米田敏幸1991、「土師器の編年 近畿」：石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究』第６巻(土師器と須恵器) 雄山閣出版、pp.19－33

あ と が き

本書では1979年度から95年度にかけて行われた100件を超える調査を収録したものである。一般に10年ひと昔と言われるが、これらの調査のほとんどすべてが10年以上前の調査であり、さらに半分近くが20年以上前の調査であったことは、正直編集を困難にした。調査の中には整理途中で終わっていたり、記録が散逸していたりするものもあり、加えて、編集期間が約１年間であったため、不十分な状況を回復することはできなかった。特に、旧石器をはじめとする石器遺物については、今後の研究で補わなければならない。

以上のように本書は多くの課題を残したが、41基（追加調査を含めると44基）の古墳を新たに報告するなど、長原遺跡のアウトラインを描くための内容はとりあえず報告できたと考える。これが新たな出発点ということでご寛恕頂き、今後不足分を補いながら、長原遺跡の調査研究を深めていきたい。

（京嶋覚）

索　引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

M　MT15型式 …… 23, 83, 107, 110, 116, ~118, 290

O　ON46段階 …… 26, 64, 65, 88, 94, 99, 211, 224, 225, 226

T　TK23型式 …… 23, 42, 45, 62, 81, 83, 88, 107, 108, 110, 116~118, 123
TK43型式 …… 192, 194
TK47型式 …… 83, 123, 124, 211, 226
TK73型式 …… 72, 116, 147, 224, 271
TK208型式 …… 16, 26, 65, 79, 88, 108, 291
TK216型式 …… 26, 72, 168, 191, 224, 226, 232, 246, 271
TK217型式 …… 192

U　U字形鍬先 …… 68, 70

あ　朝顔形（埴輪） …… 16, 147, 150, 231, 232
飛鳥Ⅱ …… 127, 133, 144, 195
飛鳥Ⅲ …… 83, 195, 211
飛鳥Ⅳ …… 225

い　家形埴輪 …… 18, 250
生駒西麓産 …… 164, 171, 237, 255, 257
一ケ塚古墳 …… 11, 273, 274
井戸 …… 4, 11, 28, 30, 38, 52, 53, 56~58, 72, 76, 87, 92, 94, 99, 101, 107, 118, 119, 128, 131, 134, 136~138, 141, 155~158, 175, 177, 194, 198, 199, 209, 210, 219, 221, 222, 224, 226, 238, 240, 251, 253, 262

う　臼玉 …… 81, 83, 128
馬 …… 4, 55, 56, 88, 90, 118, 123, 124, 226, 275
馬形埴輪 …… 24, 41, 62, 64

え　延喜式 …… 142
円筒埴輪 …… 15, 16, 18, 19, 23, 35, 41, 42, 52, 62, 72, 88, 147, 150, 168, 190, 191, 194, 230, 232, 274

お　大阪湾岸系 …… 79, 118
押型文 …… 3, 272
オニグルミ …… 183

か　瓦器 …… 28, 30, 53, 56, 97~99, 138~140, 155~157, 177~179, 197, 198, 212, 234
化石林 …… 181, 183, 185
火葬墓 …… 169, 175, 180
滑石製品 …… 83, 272
唐草文軒平瓦 …… 156
ガラス製小玉 …… 150
側柱 …… 95, 101, 107, 118, 121, 176, 219, 220
川辺2号用水 …… 199, 200
棺外副葬 …… 68
韓式系土器 …… 4, 70, 72, 209, 210

き　畿内第Ⅰ様式 …… 161, 218
畿内第Ⅱ様式 …… 207, 212
畿内第Ⅲ様式 …… 237, 252
畿内第Ⅳ様式 …… 161, 208
畿内第Ⅴ様式 …… 172, 236, 241
衣蓋形埴輪 …… 62, 64, 249

吉備系 …… 258
金環 …… 57, 70, 88, 272

く 草摺形(埴輪) …… 16, 23
管玉 …… 150

け 剣形木製品 …… 94

こ 黒色土器 …… 28, 53, 97, 98, 137, 138, 177, 178, 234
甑 …… 92, 108, 110, 123, 238, 246, 248, 271

さ サヌカイト …… 13, 31, 60, 147, 169, 171, 185, 186, 188, 201, ～203, 205, 216, 217

し 滋賀里 …… 171
四国系 …… 258
自然堤防 …… 3, 4, 250, 252, 253
七ノ坪古墳 …… 119, 129, 273～275
鳥畠 …… 58, 186, 195, 197, 198
主体部 …… 11, 13, 19, 23, 26, 30, 31, 37, 45, 54, 57, 66, 68, 70, 88, 147, 150, 151, 168, 189, 190, 245, 274, 275, 288
庄内式土器 …… 169
縄文土器 …… 186, 202, 252

す 水田 …… 4, 11, 24, 26, 28, 30, 31, 32, 35～37, 41, 45～47, 49, 52, 54, 66, 83, 87, 99, 127, 130～134, 141, 155, 169, 173～175, 179, 192, 194, 200, 201, 207, 212, 227, 233, 234, 236, 251
鋤先 …… 68
スタンプ文 …… 238

せ 製塩土器 …… 76, 79, 87, 96, 117
生痕化石 …… 3
制札 …… 141, 142
青磁 …… 157
石鏃 …… 60, 121, 146, 147, 169, 186, 188, 202, 203
線刻 …… 16, 18, 19, 24, 52, 64, 147, 190, 250, 253

そ 双孔円板 …… 83, 110, 117
総柱 …… 35, 72, 101, 106, 118, 121, 128, 176
算盤玉形紡錘車 …… 224

た 高杯形器台 …… 52, 108, 116, 232
高廻り …… 140, 190, 250, 273, 274
竪穴住居 …… 76, 81, 88, 99, 101, 105～108, 117～119, 121, 123, 128, 152, 226, 236～238
樽形瓶 …… 72
丹後・丹波系 …… 255, 262

ち 中位段丘構成層 …… 272

つ 塚ノ本古墳 …… 36, 37, 227, 229, 231, 234, 273～275
造出し …… 11, 19, 23, 30, 57, 60, 62, 65, 77, 274
筒形器台 …… 52, 70, 107
坪境 …… 98, 99, 179, 192, 195, 197～199, 201, 212

て 低位段丘構成層 …… 2, 265
手鎌 …… 68
鉄鏃 …… 70
鉄刀 …… 31, 62, 64, 152, 275
鉄斧 …… 68, 268
出戸自然堤防 …… 250, 252, 253

と 東海系 …… 261, 262
陶質土器 …… 268, 288
扉材 …… 77, 78

巴文軒丸瓦 …… 156

な ナイフ形石器 …… 3, 60, 201
ナウマンゾウ …… 181, 183, 185, 186, 199
長原古墳群 …… 16, 30, 88, 128, 129, 140, 151, 168, 190, 200, 212, 250, 273～275
（長原古墳群）1期 …… 250, 273, 275
（長原古墳群）2期 …… 16, 26, 65, 147, 150, 168, 273
（長原古墳群）3期 …… 54, 64, 128, 129, 212, 273, 275
（長原古墳群）4期 …… 129, 273～275
長原式土器 …… 151, 186, 207, 218, 251

に 日本書記 …… 142
鶏形埴輪 …… 16, 23, 24

は 羽釜 …… 28, 138, 151, 155～157, 175, 199
白磁 …… 28, 157
波頭文軒平瓦 …… 156
盤 …… 268

ひ 備讃瀬戸系 …… 117

ふ 風字硯 …… 28
複弁蓮華文軒丸瓦 …… 178
袋状鉄斧 …… 68
船形埴輪 …… 249, 250
布留式 …… 92, 236, 262, 267, 287

へ 平安遺文 …… 141
平安時代Ⅲ …… 36, 54, 180
平安時代Ⅲ古 …… 53, 56, 175, 177, 178, 180
平安時代Ⅳ古 …… 30, 36, 138, 141, 177
平安神宮火山灰 …… 3
平城宮土器Ⅰ …… 272
平城宮土器Ⅱ …… 262
平城宮土器Ⅲ …… 262
平城宮土器Ⅴ …… 87
平城宮土器Ⅵ …… 87

ほ 方形周溝墓 …… 4, 161, 162, 164, 168, 225, 236, 240, 243, 245, 251, 262
掘立柱建物 …… 4, 31, 35, 52, 55～57, 72, 88, 90, 94～96, 99, 101, 107, 118, 119, 121, 123, 128, 129, 143, 150, 151, 169, 175, 177, 180, 208, 209, 219, 226, 253

ま 勾玉 …… 271
楣材 …… 77～79
曲物 …… 28, 53, 88, 128, 136～138, 155, 157, 177

み 巫女形埴輪 …… 23
南口古墳 …… 129, 151, 273, 274

む 無蓋高杯 …… 65, 79, 83, 92, 110, 147, 232, 248

も 木簡 …… 99, 132, 137, 139, 141, 142
木棺 …… 31, 37, 42, 44, 45, 168, 197, 275

や ヤス …… 119, 127

ゆ 有蓋高杯 …… 15, 76, 81, 92, 107, 108, 110, 116, 147, 168
有茎尖頭器 …… 60, 188

よ 横大路火山灰 …… 144, 266

両耳付短頸壺 …… 65, 287, 290, 291
緑釉(陶器) …… 38, 53

わ 轍 …… 46, 87, 173

〈地名・遺跡名など〉

い　生駒山地 …… 2

う　上町台地 …… 2
　　瓜破遺跡 …… 55
　　瓜破台地 …… 2, 56, 212

お　大坂城下層 …… 289
　　大庭寺遺跡 …… 289, 291

か　河内平野 …… 2, 201

き　喜連東遺跡 …… 158, 273, 275

し　城山遺跡 …… 161, 162, 168

す　陶邑 …… 288, 290, 291

て　出戸池 …… 133, 143

ち　朝鮮半島 …… 65, 287～292

な　中田遺跡 …… 261

ひ　東除川 …… 4, 11, 131, 140, 143
　　平野川 …… 3, 264

へ　平安京 …… 53

や　八尾南遺跡 …… 214, 273
　　大和川 …… 11, 201

よ　四ツ池遺跡 …… 288

Archaeological Report of the Nagahara Site in Osaka, Japan

Volume XV

November 2006

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA : Palisade or fence
SB : Building
SD : Ditch
SE : Well
SK : Pit
SP : Pit or Posthole
SR : Paddy field balk
SX : Other feartures
NR : Natural Stream

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Excavations in the Nagahara Site 1
S.1 Outline of the Nagahara site 1
1) Outline 1
2) Location and geographical setting 2
3) Introduction of the recent notable Researches 3
S.2 List of the excavations reported in this volume 8

Chapter II Researches on the Southwestern and Southern sector 11
S.1 Researches on the NG18 and the surrounding 11
1) Outline of the Researches and the surrounding 11
2) Results of Current Researches 12
3) Conclusion 30
S.2 Researches on the NG83-66 and the surrounding 31
1) Outline of the Researches and the surrounding 31
2) Results of Current Researches 31
3) Conclusion 36
S.3 Researches on the NG92-92 and the surrounding 37
1) Outline of the Researches and the surrounding 37
2) Results of Current Researches 38
3) Conclusion 53
S.4 Researches on the NG86-62 and 93-91 55
1) Outline of the Researches and the surrounding 55
2) Results of Current Researches 56
3) Conclusion 56

Chapter III Researches on the Western sector 57
S.1 Researches on the NG84-25 and the surrounding 57
1) Outline of the Researches and the surrounding 57
2) Results of Current Researches 58
3) Conclusion 88
S.2 Researches on the NG91-70 and the surrounding 90
1) Outline of the Researches and the surrounding 90
2) Results of Current Researches 90
3) Conclusion 99
S.3 Researches on the NG92-95 and 93-26 101
1) Outline of the Researches and the surrounding 101
2) Results of Current Researches 101
3) Conclusion 118

Chapter IV Researches on the Central sector 119

S.1 Researches on the NG89-25 and the surrounding 119
1) Outline of the Researches and the surrounding 119
2) Results of Current Researches 119
3) Conclusion 128
S.2 Researches on he NG92-2 and the surrounding 130
1) Outline of the Researches and the surrounding 130
2) Results of Current Researches 132
3) Conclusion 140

Chapter V Researches on the Northern sector 143
S.1 Researches on the NG93-37 and the surrounding 143
1) Outline of the Researches and the surrounding 143
2) Results of Current Researches 143
3) Conclusion 151
S.2 Researches on the NG88-90 and 91-16 152
1) Outline of the Researches and the surrounding 152
2) Results of Current Researches 152
3) Conclusion 156
S.3 Researches on the NG84-34 and the surrounding 157
1) Outline of the Researches and the surrounding 157
2) Results of Current Researches 157
3) Conclusion 168

Chapter VI Researches on the Sortheastern sector 169
S.1 Researches on the NG83-8 and the surrounding 169
1) Outline of the Researches and the surrounding 169
2) Results of Current Researches 169
3) Conclusion 179
S.2 Researches on the NG91-1 and the surrounding 181
1) Outline of the Researches and the surrounding 181
2) Results of Current Researches 181
3) Conclusion 199
S.3 Researches on the NG93-1 and the surrounding 201
1) Outline of the Researches and the surrounding 201
2) Results of Current Researches 201
3) Conclusion 212
S.4 Researches on the NG86-3&64 and the surrounding 214
1) Outline of the Researches and the surrounding 214
2) Results of Current Researches 215
3) Conclusion 225
S.5 Researches on the NG85-18 and the surrounding 227
1) Outline of the Researches and the surrounding 227
2) Results of Current Researches 227
3) Conclusion 234

Chapter VII Researches on the Eastern and Northeastern sector 235

S.1 Researches on the NG87-67 and the surrounding 235
1) Outline of the Researches and the surrounding 235
2) Results of Current Researches 236
3) Conclusion 250
S.2 Researches on the NG84-86 and the surrounding 251
1) Outline of the Researches and the surrounding 251
2) Results of Current Researches 251
3) Conclusion 262
S.3 Researches on the NG84-4 and the surrounding 263
1) Outline of the Researches and the surrounding 263
2) Results of Current Researches 263
3) Conclusion 272

Chapter VIII Examination of features and artifacts 273
S.1 Collection of the Nagahara Tomb cluster 273
1) Forword 273
2) Phase 273
3) Mound and outer facility 274
4) Burial facility and mortuary goods 274
S.2 Examination of the jar with two loops unearthed from the Nagahara Tomb No.117 287
1) Forword 287
2) Jar with two loops in Korean Penninsula 287
3) Example in Japan 287
4) Examination of a similar instance 290
5) Conclusion 291

Bibliography and References 293

Postscript

Index

English Contents and Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

The Nagahara site is located in the southeast of Hirano Ward in Osaka City (fig.1 and 2) and contains archaeological remains dating from the Palaeolithic to the Modern periods. In this volume, we report on the results of 104 excavations (with total area of 34,386 square maters) undertaken at the Nagahara Site prior to development projects between fiscal 1979 and 1995, and divided the excavated area reported in this volume as seen in Fig 2.

Several significant results are detailed below.

1) The Palaeolithic and Jomon peiood

From strata dating to 87,000 B.P., a petrified broad-leaf forest and many botanical remains were unearthed at NG91-1 in the southeastern sector of the site complex. In addition, from the upper strata of this age, the fossil footprints of a Naumann's elephant were found. But, there was no evidence of human activity.

In the several investigations of the Southeastern sector, we found consentrations of lithic materials and stone tools such as backed knives and scrapers.

Investigations of the Northern and Northeastern sectors revealed fragments of pottery and stone tools dating to the late and terminal Jomon were unearthed.

2) The Yayoi period

At NG89-48 & 93-1 in the southeastern sector of the complex, we excavated a paddy field dating to the Early to Middle Yayoi period.

In the northern, eastern and northeastern sectors we dicovered the remains of square-shaped and moated burials (NG84-34 in the Northern sector) and the pit-dwellings (NG87-67 in the Eastern sector) from the Middle Yayoi period and pit-dwellings(NG87-67) and ditches (NG87-67 and 84-6) from Late Yayoi period. The pit-dwellings and ditches were found in high spots of the eastern and northeastern sector and the burials were found in lower places.



fig.1 Location of Osaka in Japan

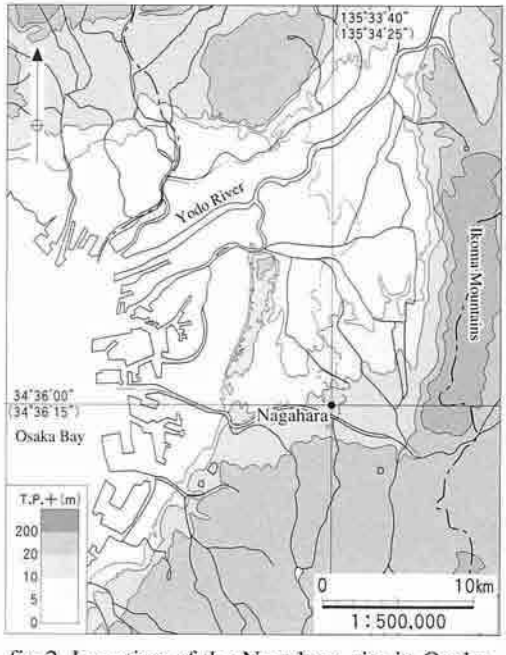


fig.2 Location of the Nagahara site in Osaka

This indicates that residential and burial areas were divided into high and low places respectively.

3) The Early Kofun Period

In NG84-86 in the Northeastern sectorof the site complex, large quantities of pottery were unearthed from a well. Some of them are from other regions, such as northern Shikoku, Tango and Tokai.

In NG84-6 in the Eastern sector, square-shaped, moated burials were excavated.

4) The Middle to Late Kofun Period

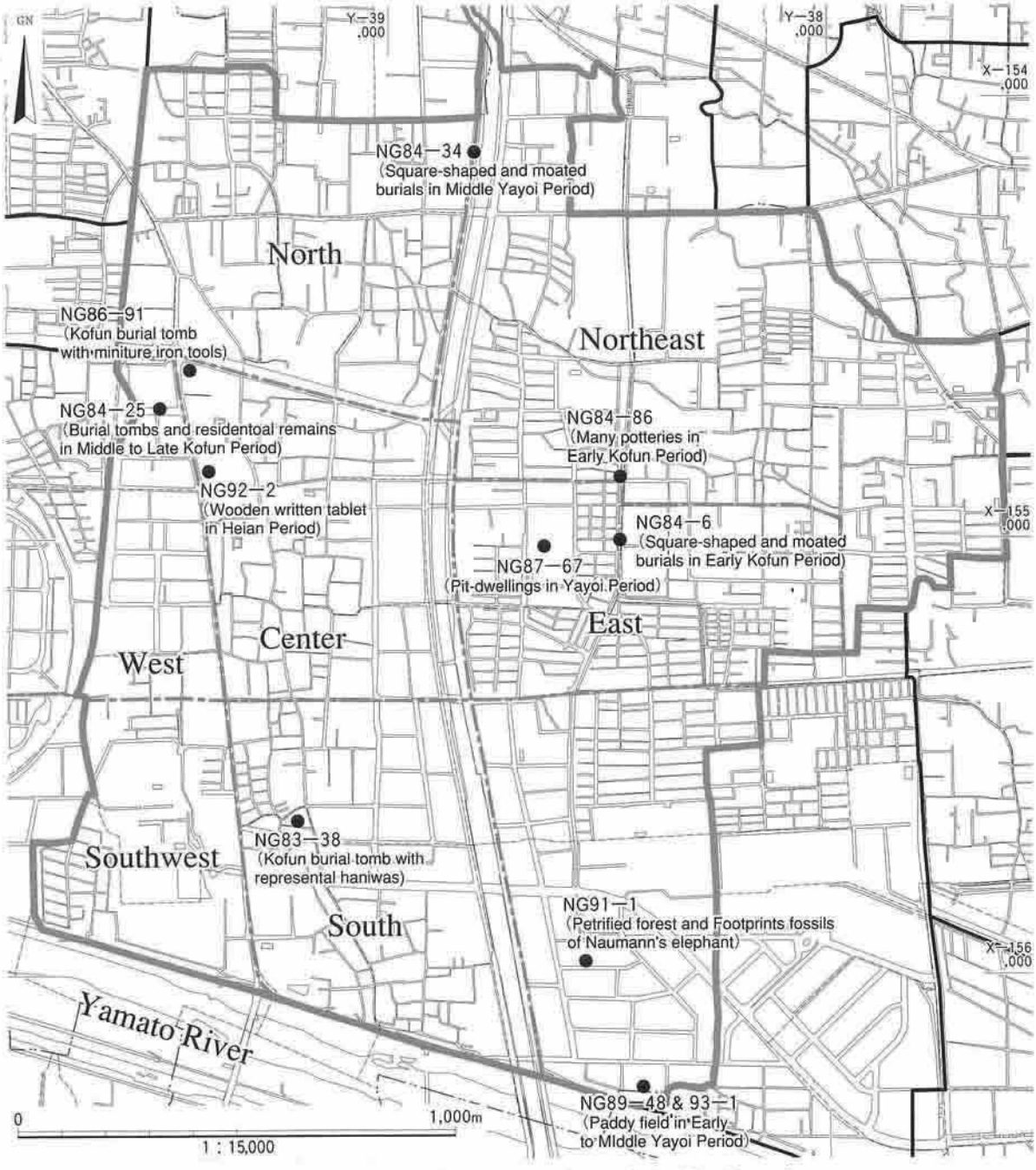


fig.3 Detailed plan of the excavated area in the Nagahara site

In this volume, we report 44 burial tombs in total and summarize all of the tombs of the Nagahara tomb cluster in Section 1 of Chapter VIII. The significant tombs reported in this volume include Tomb No. 87, from which were unearthed haniwa, such as representations of a shamaness, horses and domestic fowl, and Tomb No.166 with miniature iron tools.

Additionally, we report on residential remains, such as the pit-dwellings, posthole-type buildings, ditches, pits and so on, found in each sector of the Nagahara site. The settlements from middle 5th century were distributed in eastern half of the Nagahara site, and the ones after late 5th century were in western half. So we believe that the late 5th century the residential area was moved from eastern to western areas. But the western residential area disappeared sometime in middle 6th century.

5) The Asuka to Nara Period

In the southern, western and central sectors, we investigated paddy field, which suffered from flood in several time. We believe the whole area of the Nagahara site except the Northeastern sector became the paddy field.

6) The Heian Period

At NG92-2, in the central sector, a wooden tablet, on which the date of "Jiryaku 2 (1066)" and the place name of "Nagahara" were written, was unearthed from a well. Moreover on this tablet a sentence indicating a land dispute was written and it is a very important record for examining the land ownership system of the Heian Period.

報告書抄録

ふりがな	ながはらいせきはっくつちょうさほうこく15
書名	長原遺跡発掘調査報告Ⅹ
編著者名	寺井誠・田中清美・李陽浩・杉本厚典・京嶋覚
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所在地	〒540-0006　大阪市中央区法円坂１－１－35　　TEL 06−6943−6833
発行年月日	西暦　2006年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはら 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 うりわりひがし　ながよしかわなべ 瓜破東・長吉川辺・ ながよしながはら　ながよしなが 長吉長原・長吉長 はらにし　ながよしながはらひがし 原西・長吉長原東・ ながよしでと　ながよしみぞたん 長吉出戸・長吉六反	27126	−	34° 36′ 15″	135° 34′ 25″	19790420 ～ 19960317	34,386㎡	大阪市による公共工事のほか、民間の建設工事。 計104件。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
長原遺跡	集落	旧石器時代	石器ブロック	ナイフ形石器
	集落	縄文時代	石器ブロック	縄文土器・石器
	集落・墓	弥生時代	方形周溝墓・竪穴住居・土壙・溝	弥生土器・石器
	集落・古墳	古墳時代	古墳・掘立柱建物・竪穴住居・井戸・土壙・溝	土師器・須恵器・陶質土器・鉄器・木器
	集落	飛鳥・奈良時代	水田	土師器・須恵器
	集落	平安時代	井戸・掘立柱建物	土師器・黒色土器・緑釉陶器・白磁・木簡
	集落	鎌倉・室町時代	水田・土壙	瓦器・瓦質土器

要約

本書では1979年度から1995年度にかけて行われた計104件の発掘調査成果を報告する。主な報告内容を以下に抜粋する。

弥生時代では北地区で調査された中期の方形周溝墓や東地区の後期の溝などを報告する。

古墳時代では計44基の古墳と、中～後期の集落域での調査成果を報告する。この中には巫女や鶏・馬などの形象埴輪が伴う長原87号墳やミニチュア農工具を副葬した166号墳も含まれる。また、第Ⅷ章第１節では長原古墳群の集成を行った。

飛鳥～奈良時代では南・西・中央地区で検出された水田を報告する。

平安時代では治暦２(1066)年の紀年が記された、土地争議に関する木簡などを報告する。

原色図版



鶏形埴輪



馬形埴輪

図　　版

長原71～74号墳
（A区を南から）



長原74号墳周溝
遺物出土状況

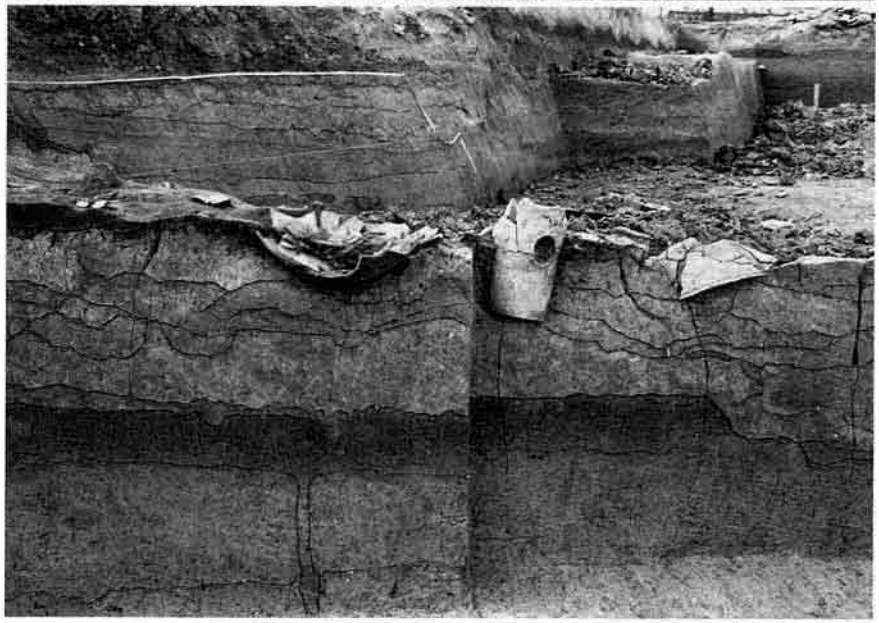


SD603完掘状況
（A区を南から）





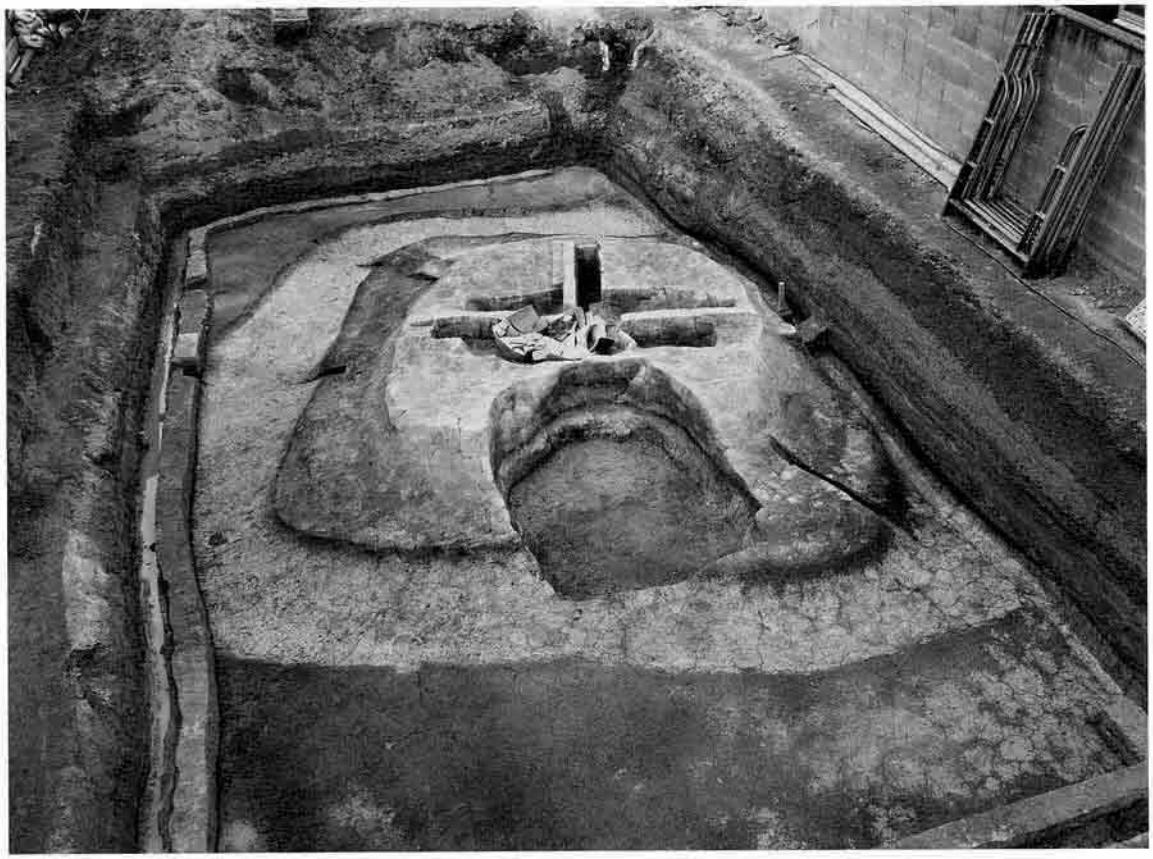
長原87号墳全景
（北から）



長原87号墳墳丘断面と
埴輪列



長原87号墳主体部
（西から）



長原180号墳全景(南から)

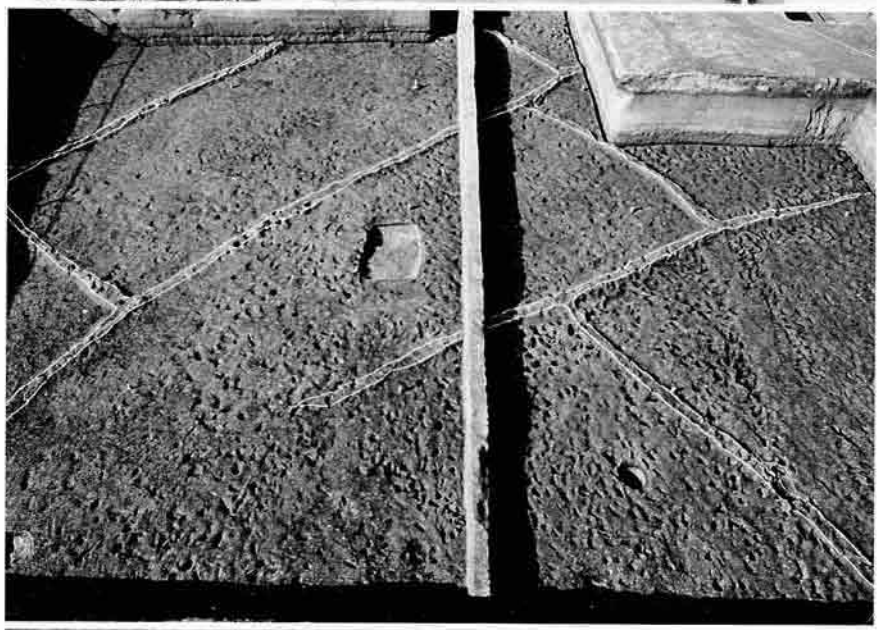


長原180号墳主体部(東から)

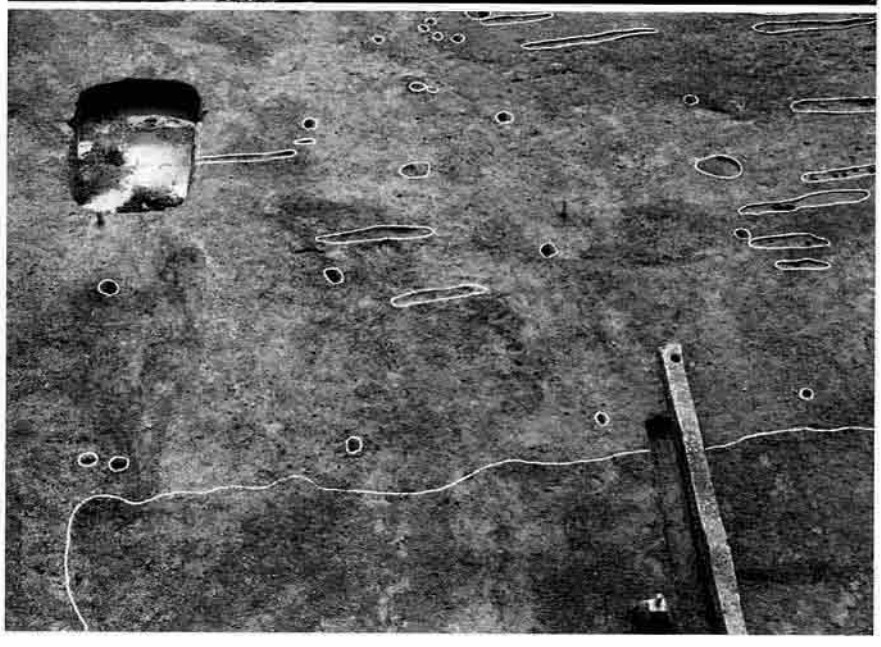
図版四　NG89—12・83—66次調査の遺構



NG89－12次
奈良時代水田(南から)



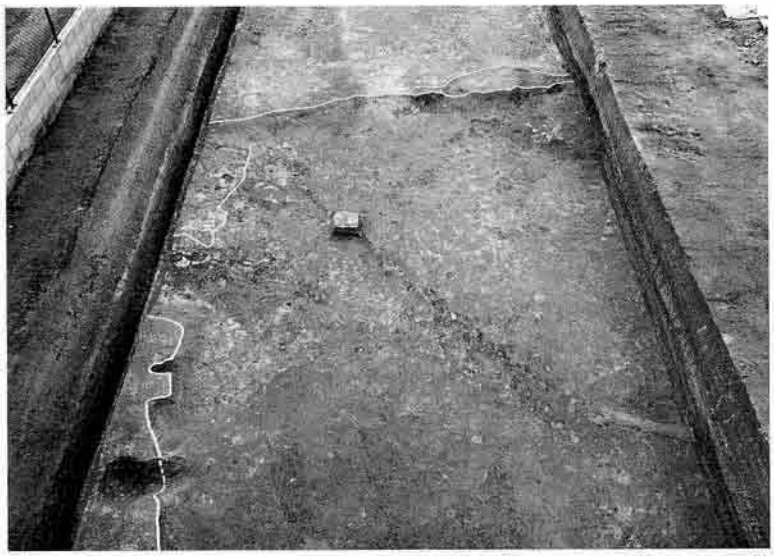
NG83－66次
奈良時代水田(南から)



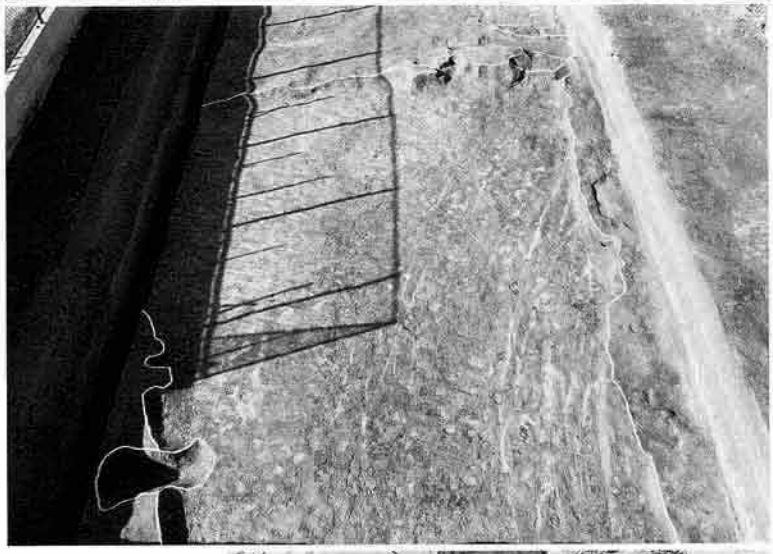
NG83－66次
SB401(北から)

図版五　NG87—70・89—69次調査の遺構

NG87－70次
長原6Bi層上面全景
（東から）



NG87－70次
長原6Ai層上面全景
（東から）



NG89－69次
長原182号墳全景
（東から）



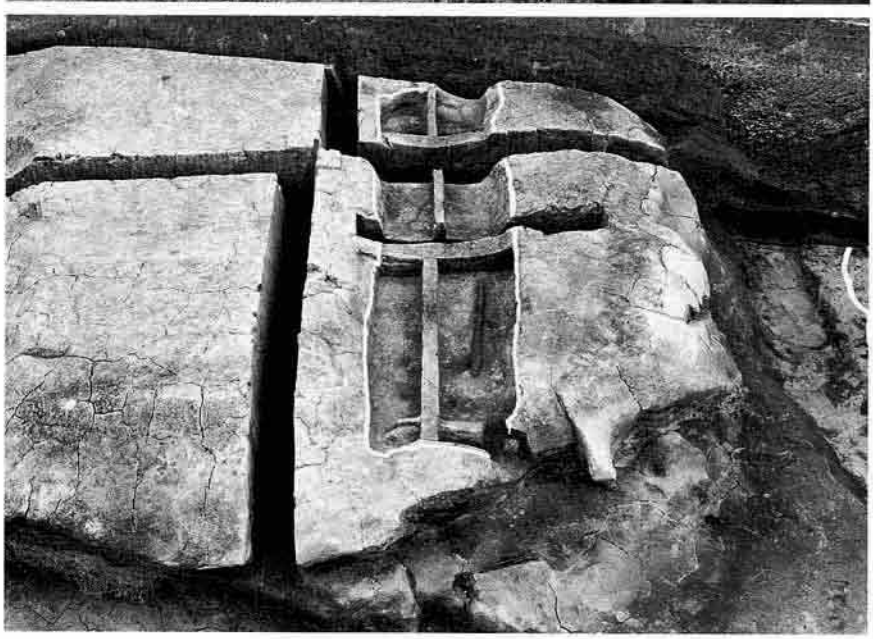
図版六　NG92—92次調査の遺構（一）



長原200号墳検出状況
（南から）



長原200号墳完掘状況
（南から）



長原200号墳主体部
（西から）

図版七　NG92－92次調査の遺構（二）

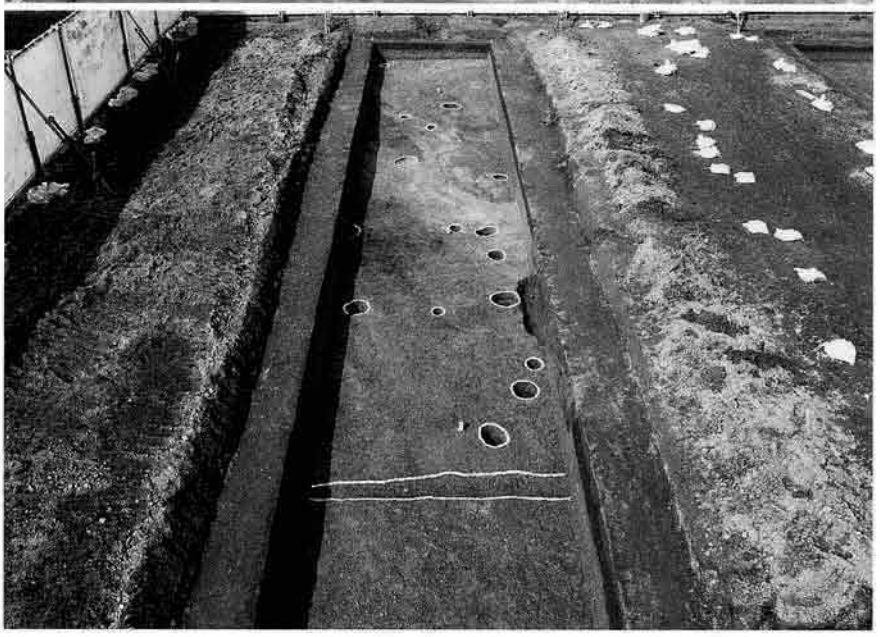
1区奈良時代
水田全景（北から）



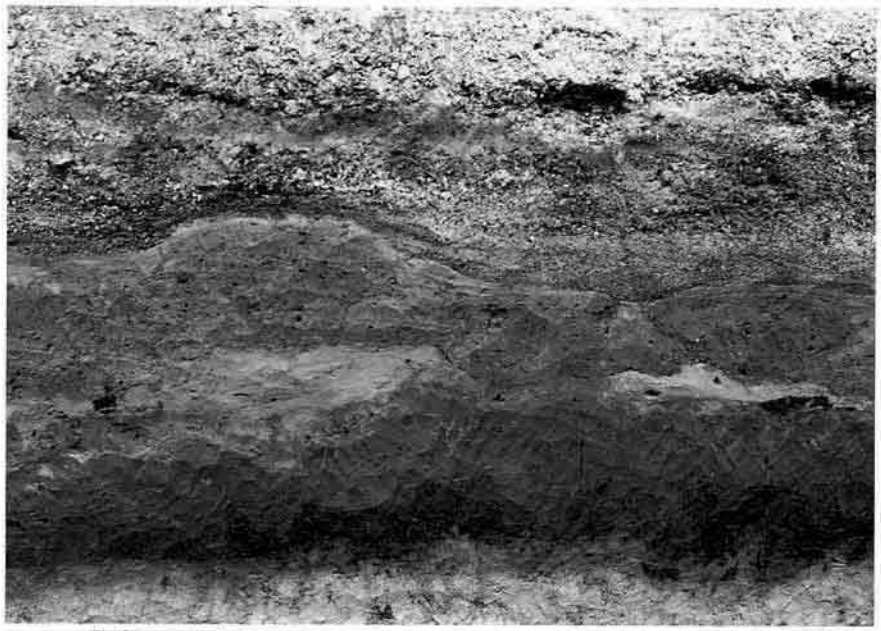
SR501埴輪出土状況
（南東から）



3区平安時代
遺構全景（東から）



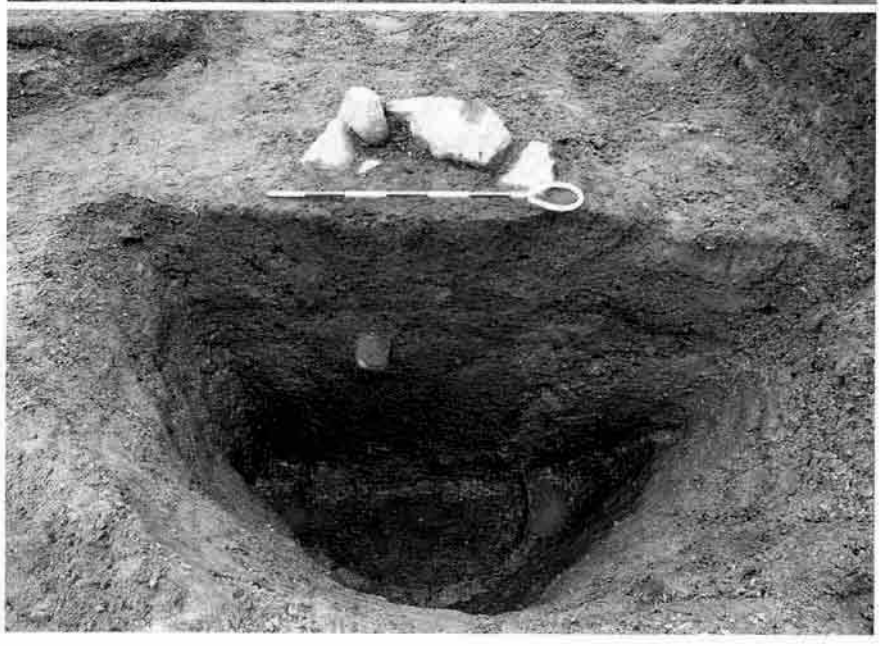
図版八　NG92—45・94—67次調査の遺構



NG92－45次
北区畦畔断面



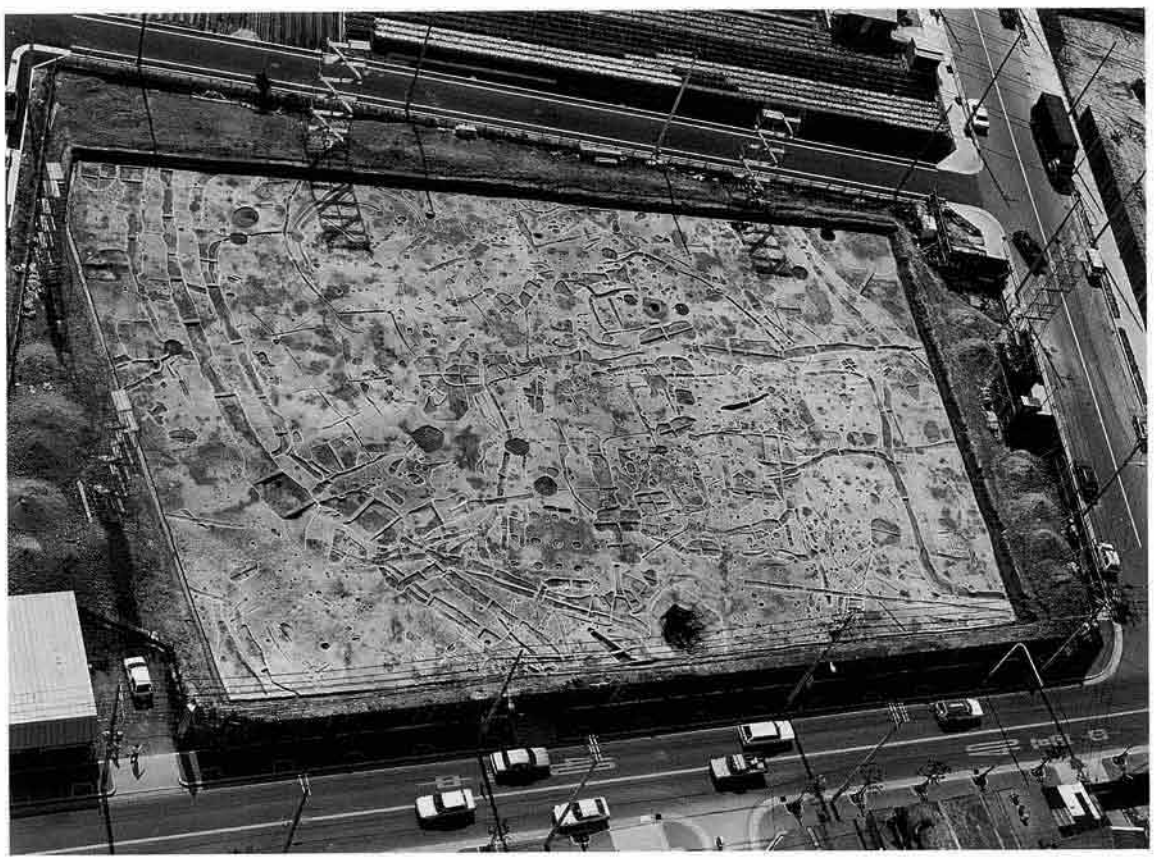
NG94－67次
平安時代遺構全景
（南から）



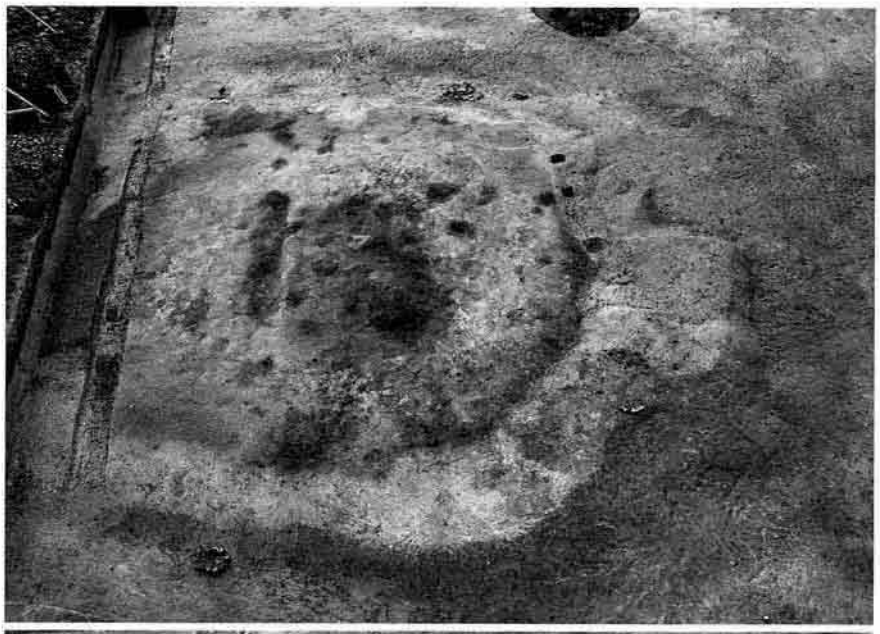
NG94－67次
SE402断面
（北から）



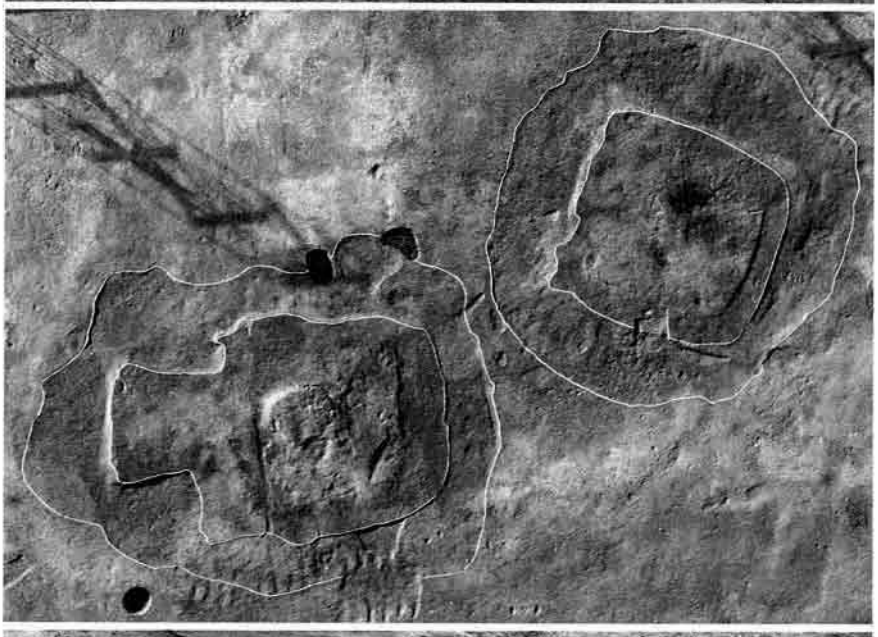
A区古墳時代遺構全景（航空写真：右が北）



B区古墳時代遺構全景（東から）



長原113号墳
（東から）



長原116・117号墳
（上から）



長原117号墳
（北西から）

SB702（南から）



B区南側の
古墳時代溝群
（南から）



SE701木器出土状況





A区奈良時代水田全景
（航空写真：右が北）

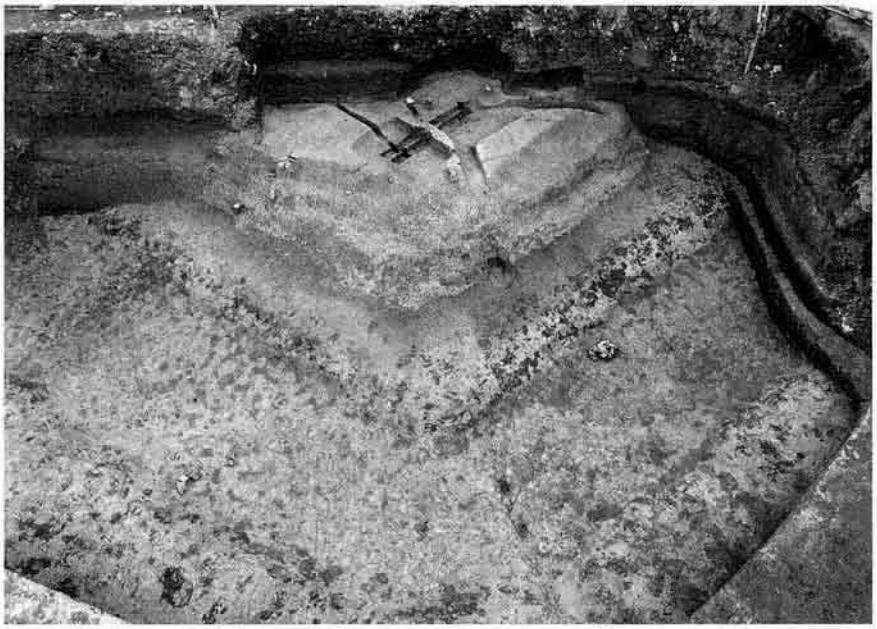


A区北東部
奈良時代水田
（航空写真：右が北）



SX601（南から）

長原166号墳全景
（東から）

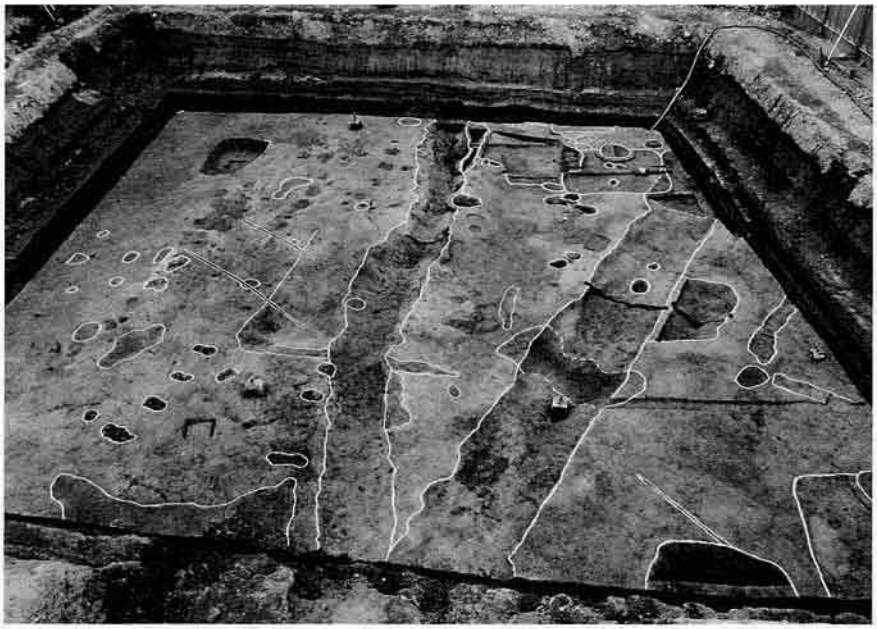


長原166号墳
第１主体部
（南東から）



長原166号墳周溝
韓式系鍋出土状況





NG89−36次古墳時代
遺構全景（北から）



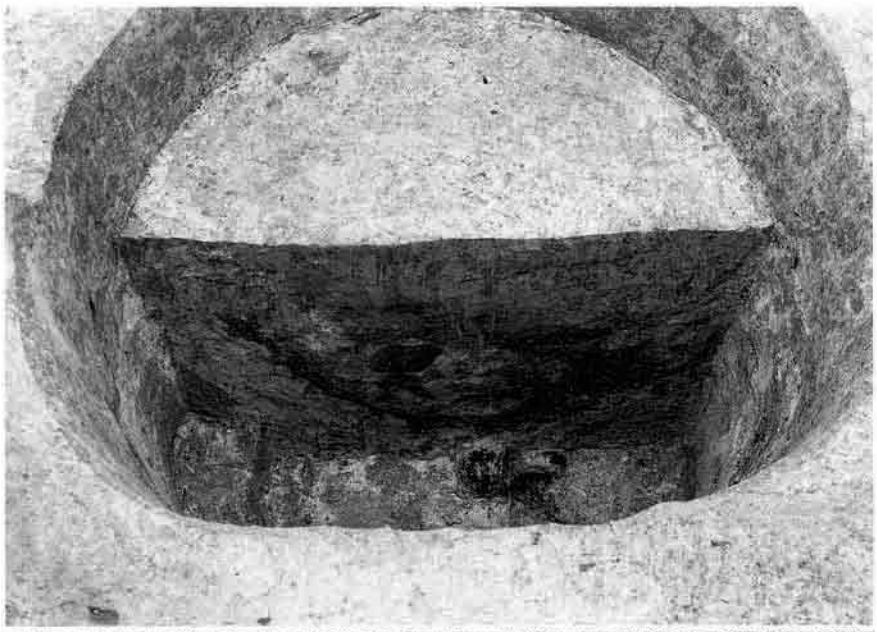
NG89−36次SX701
検出状況（西から）



NG90−66次SD407
完掘状況（北東から）

図版一五　NG91—70・93—14次調査の遺構

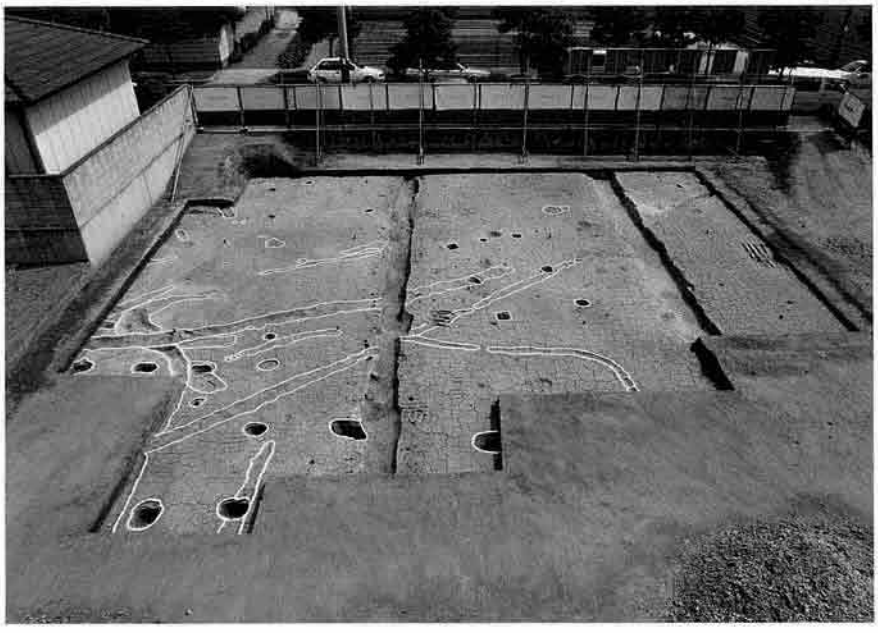
NG91−70次
SE701断面



NG91−70次
SD402断面
（北から）

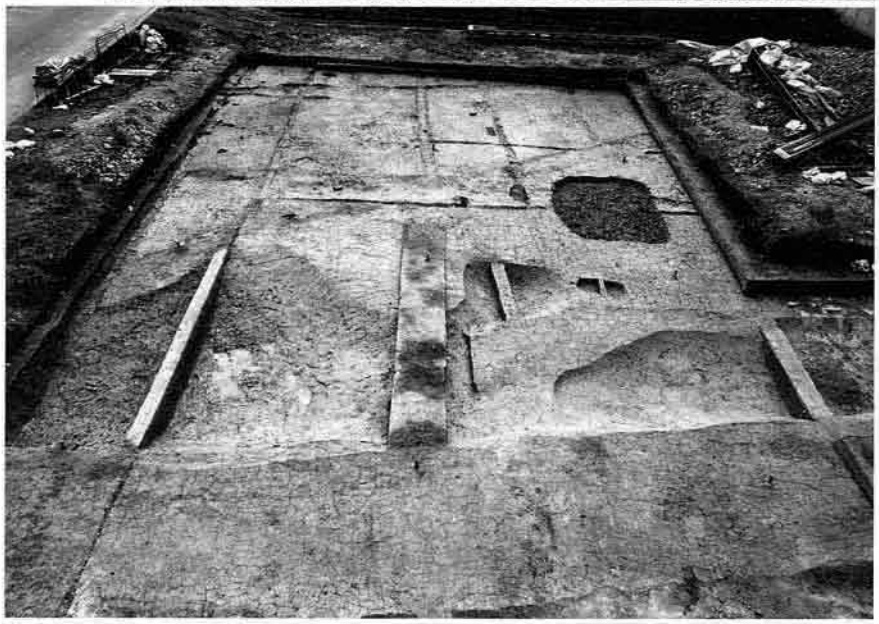


NG93−14次完掘状況
（北から）

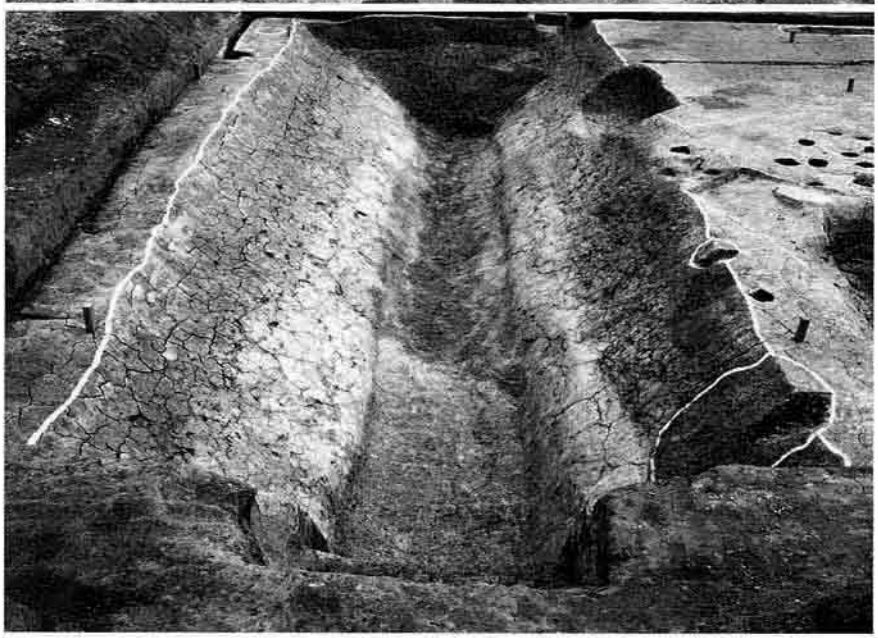




NG93−80次SD601
（北西から）



NG89−15次
調査地西部完掘状況
（東から）



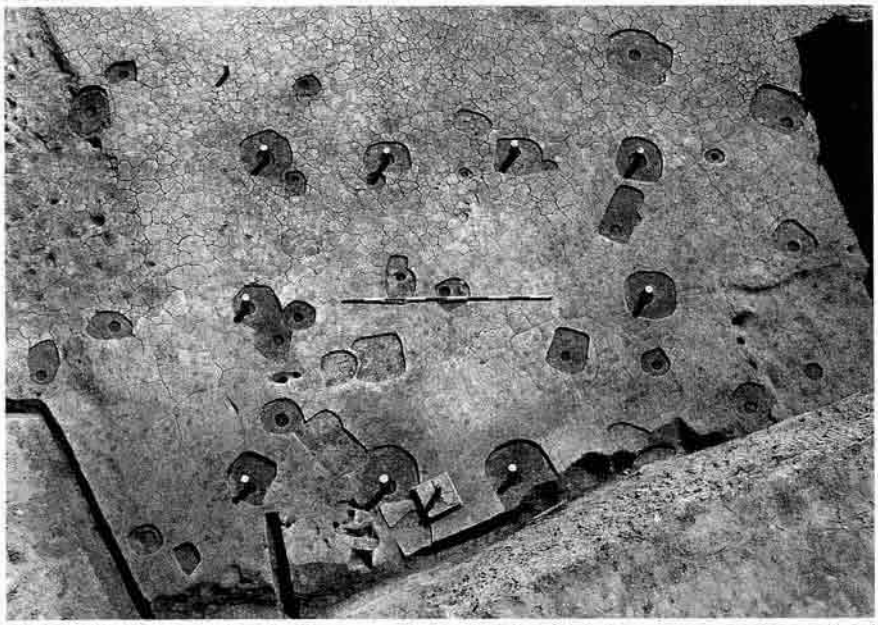
NG89−15次SD401
（北から）

図版一七　NG92—95次調査の遺構

古墳時代遺構全景
（北から）

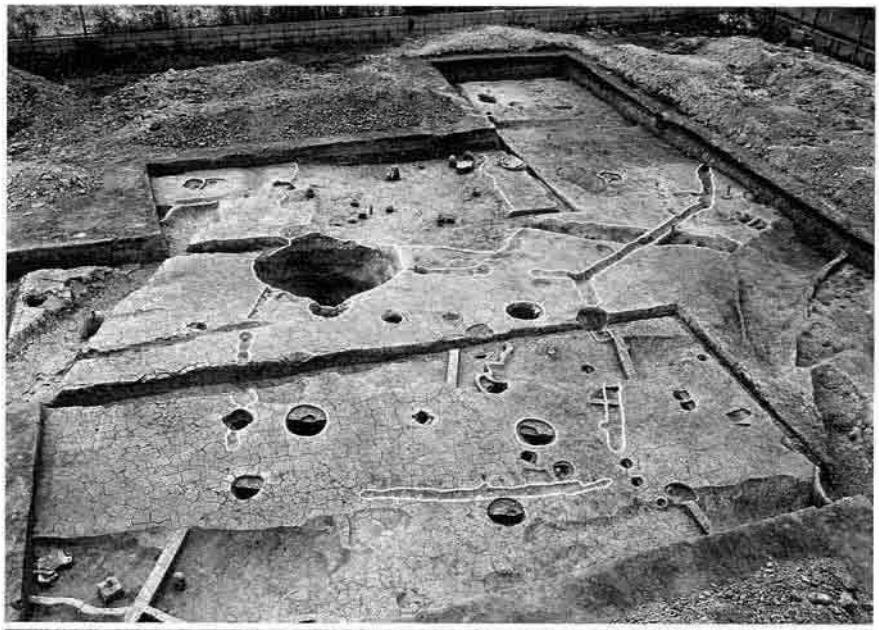


SB703

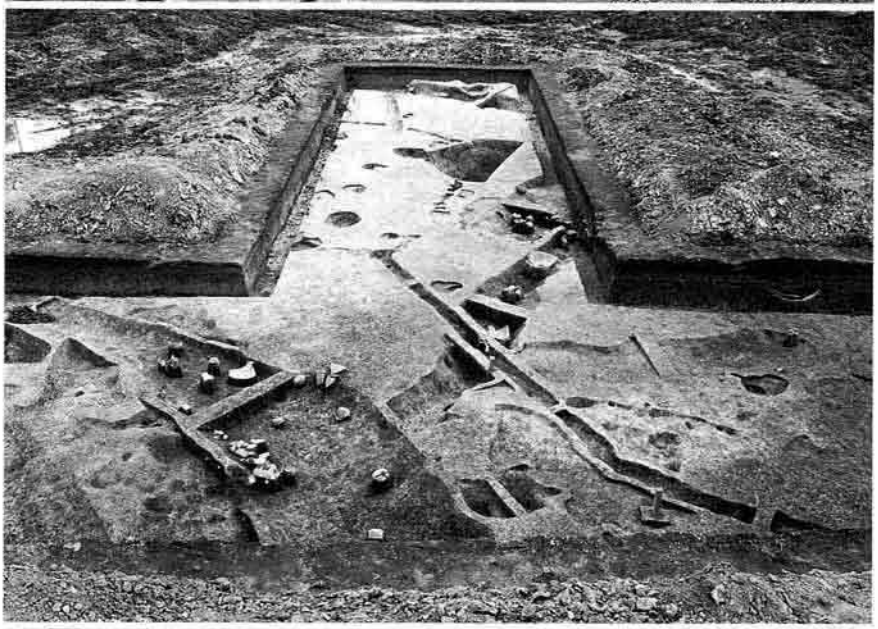


SB711～713
（北東から）





SB714・SE701
（東から）



SD709・713
（北から）



SD709遺物出土状況
（南から）

古墳時代遺構
完掘状況
（北から）



SB701（北から）



長原6Ai層上面
検出水田
（北から）

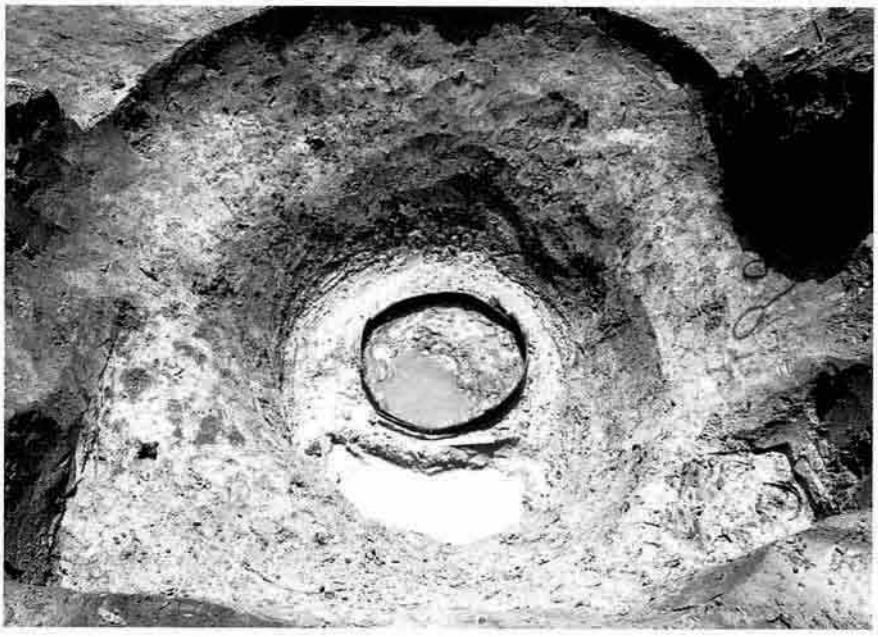




SE401～403
およびSD401
（南から）



SE401断面（北から）



SE401曲物検出状況
（北から）

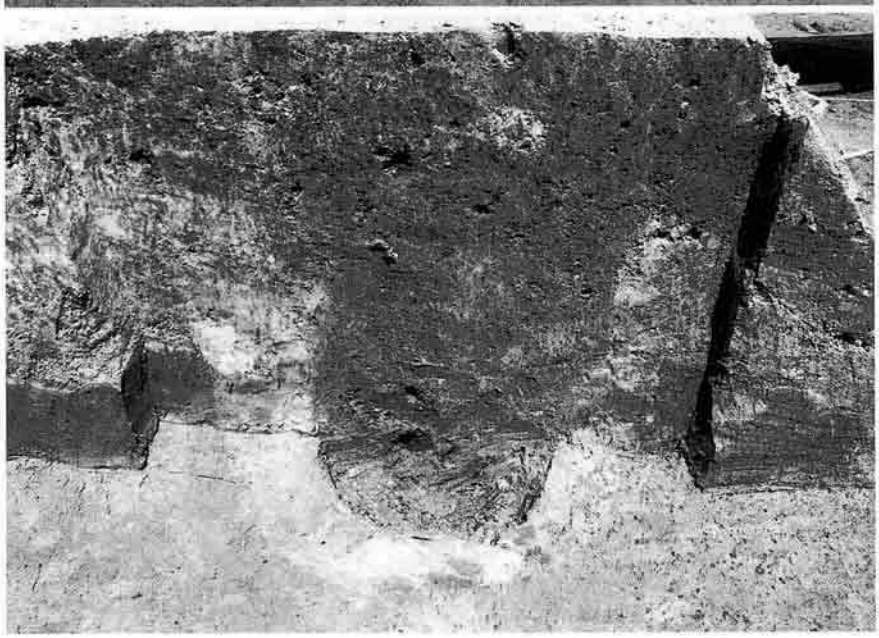
SE402曲物検出状況
(南から)

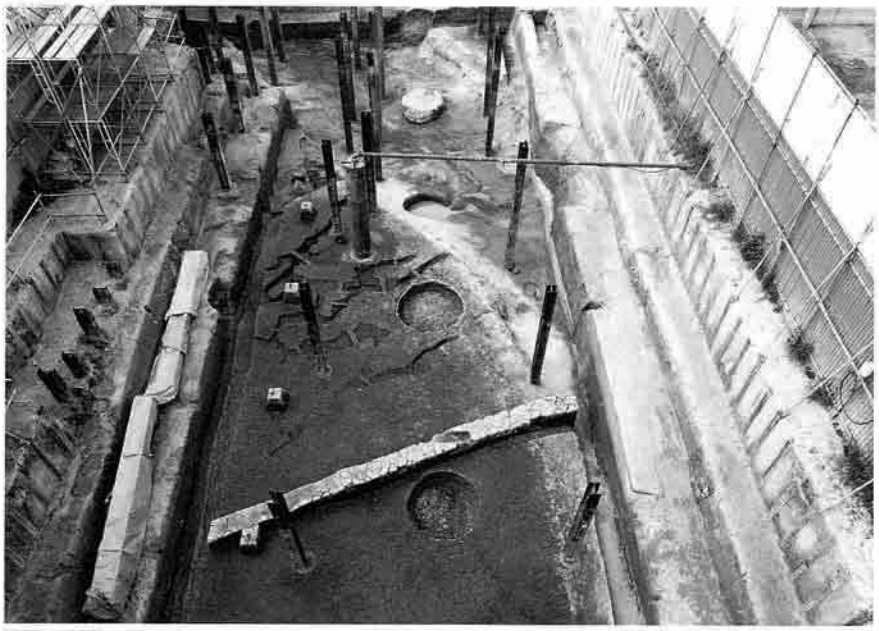


SE403曲物検出状況
(南から)



SE402断面(南から)

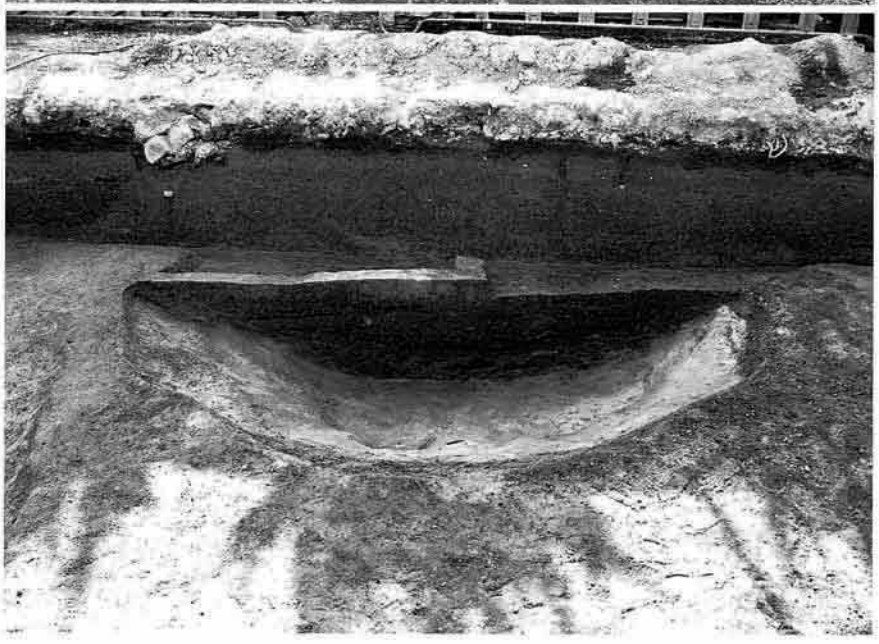




NG90－13次
SD602完掘状況
（南から）



NG95－２次完掘状況
（北から）



NG95－２次
SK402断面
（東から）

図版二三　NG93—37・87—43次調査の遺構

NG93－37次
長原199・201・202
号墳（東から）



NG93－37次
長原204号墳
（北から）



NG87－43次
第５層基底面全景
（東から）





SE301遺物出土状況

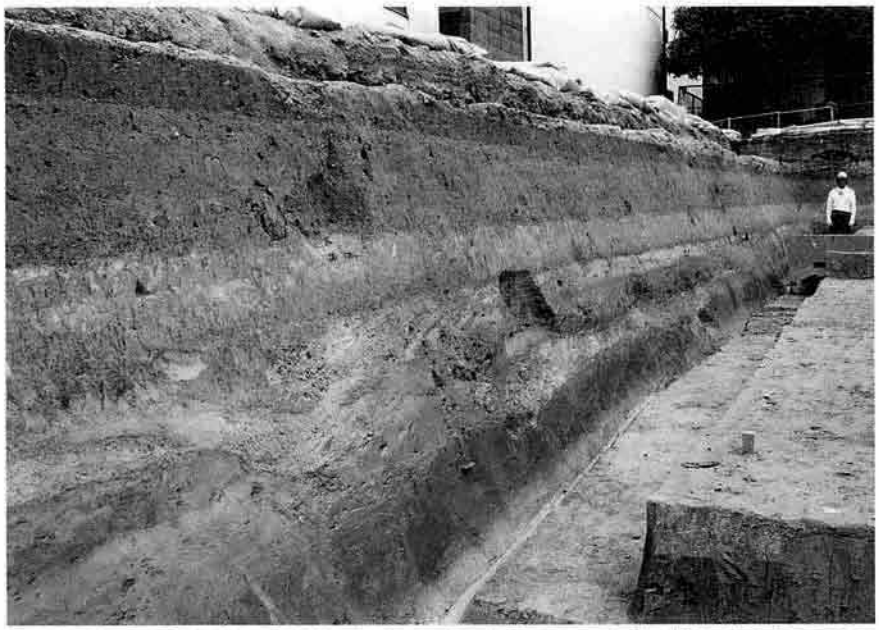


SE302



SE305

NG91－16次
東壁断面図（北西から）



NG88—90次SE401
（北から）



NG88—90次SE402
（北から）

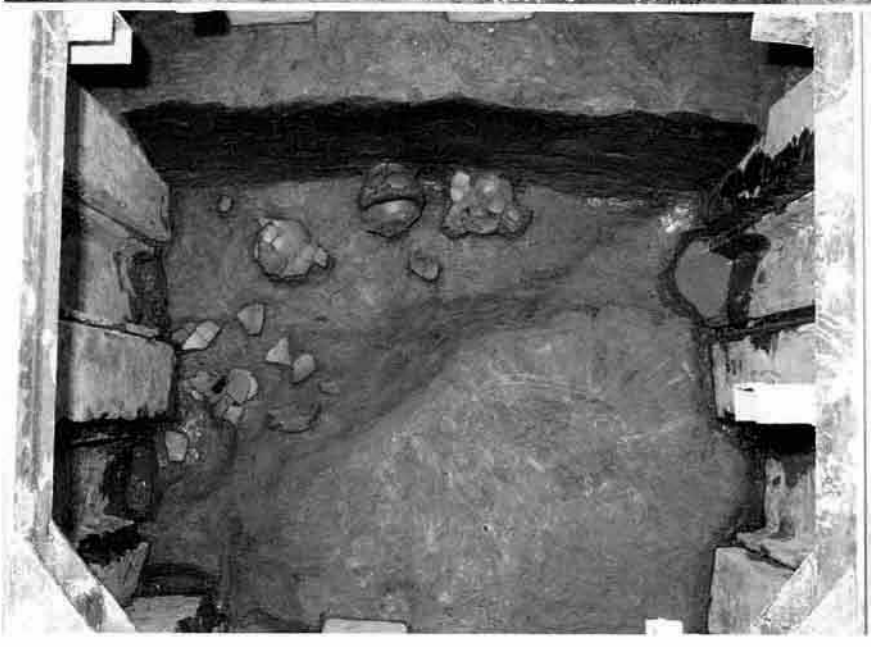




SX801墳丘断面
（2区西壁）



SX801周溝遺物
出土状況（西から）



SX802周溝遺物
出土状況

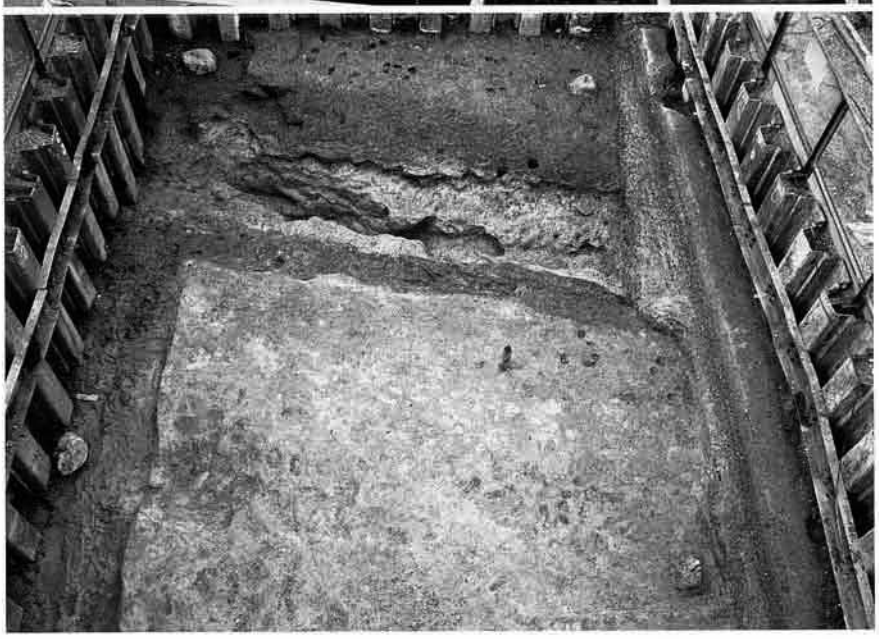
NG83－8次
SX701(西から)

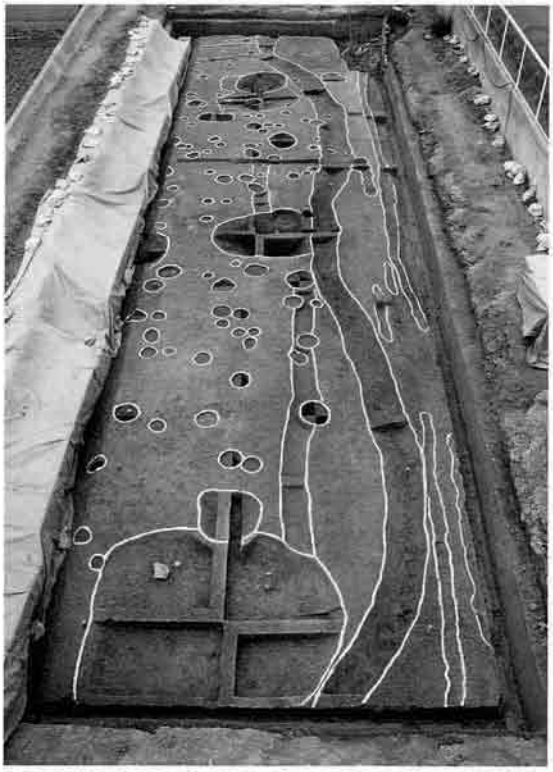


NG83－8次
SD601・602および
SX601(西から)



NG86－23次
NR601(西から)





NG89－47次
平安～鎌倉時代遺構全景
（西から）



NG89－47次
SB404柱穴内石製礎板
（南から）



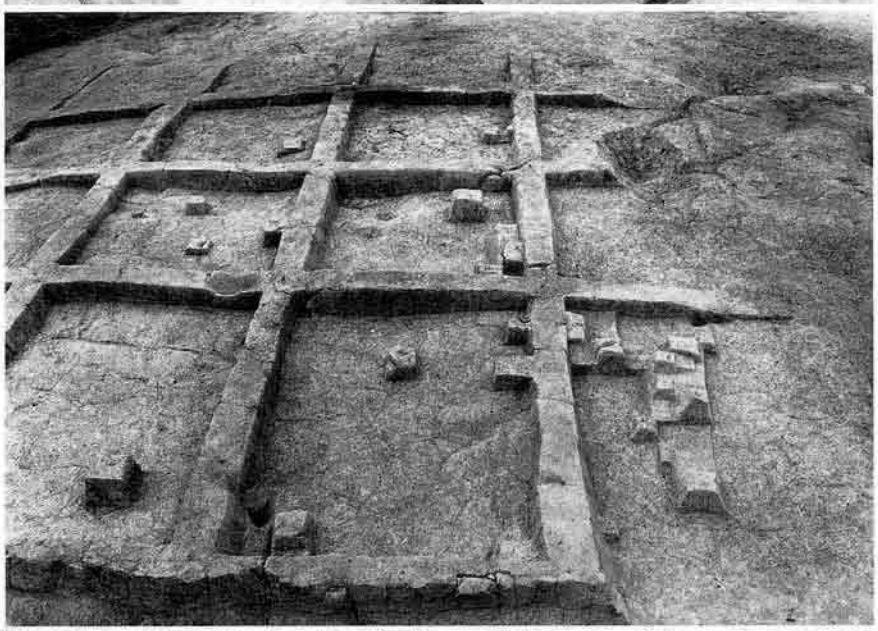
NG81－12次
SX401出土状況

図版二九　NG91－1次調査の遺構（一）

長原16B層上面
化石林全景
（南東から）



縄文時代石器ブロック
検出状況（南から）



SD902（南東から）

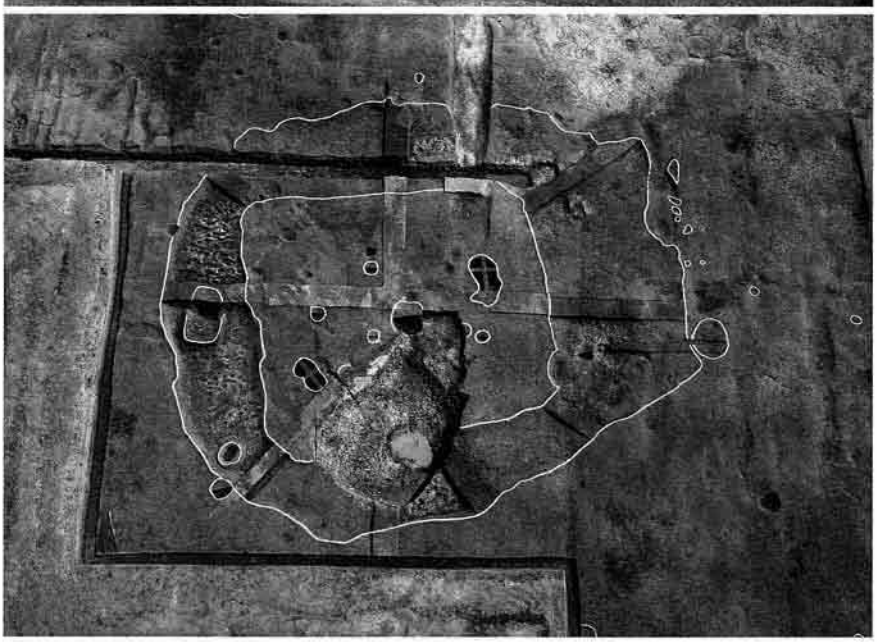




長原183～186号墳
（北から）



長原183号墳
（北から）



長原184号墳

SD902(南東から)



長原198号墳
(南西から)

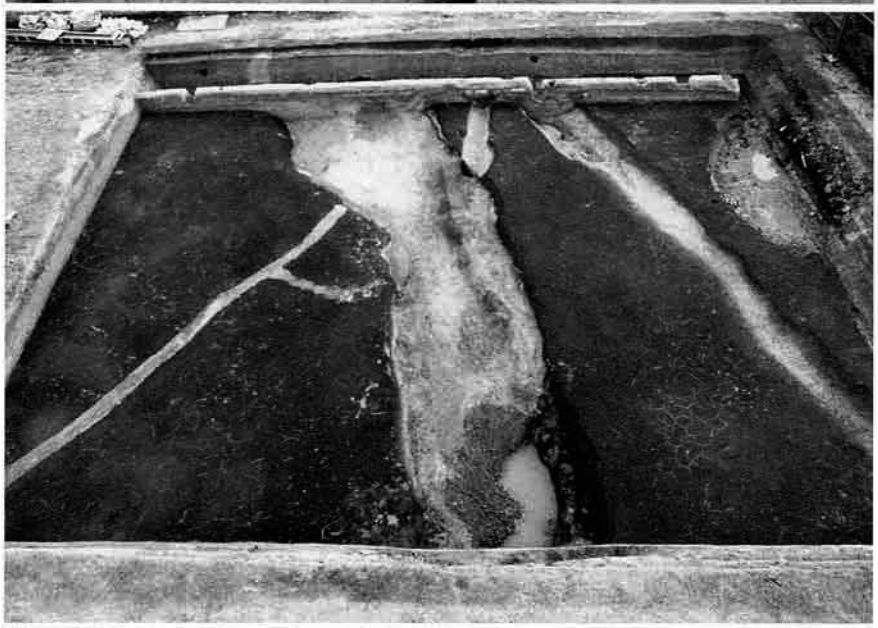


SK710遺物出土状況
(南東から)





旧石器ブロック検出状況
（東から）



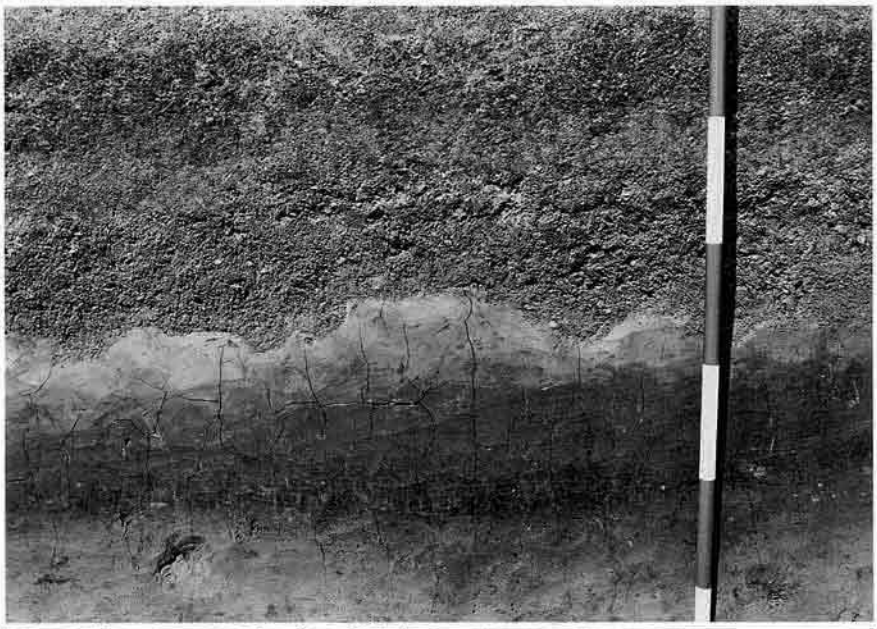
NR901・SD901
検出状況（北から）



調査地北西部柱穴群
（北から）

図版三三　NG93—1次調査の遺構（一）

弥生時代水田断面
（南から）



弥生時代水田全景
（南東から）



弥生時代水田北東部
（北東から）



図版三四　NG93—1次調査の遺構（二）



NR901（北から）



SK801高杯出土状況
（東から）



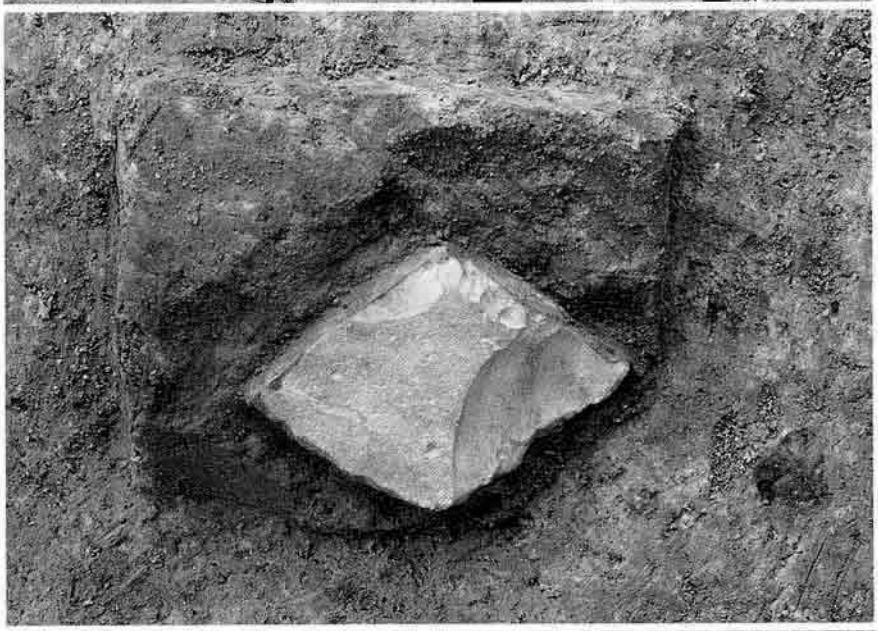
SE701完掘状況
（北から）

図版三五　NG86—3・64次調査の遺構（一）

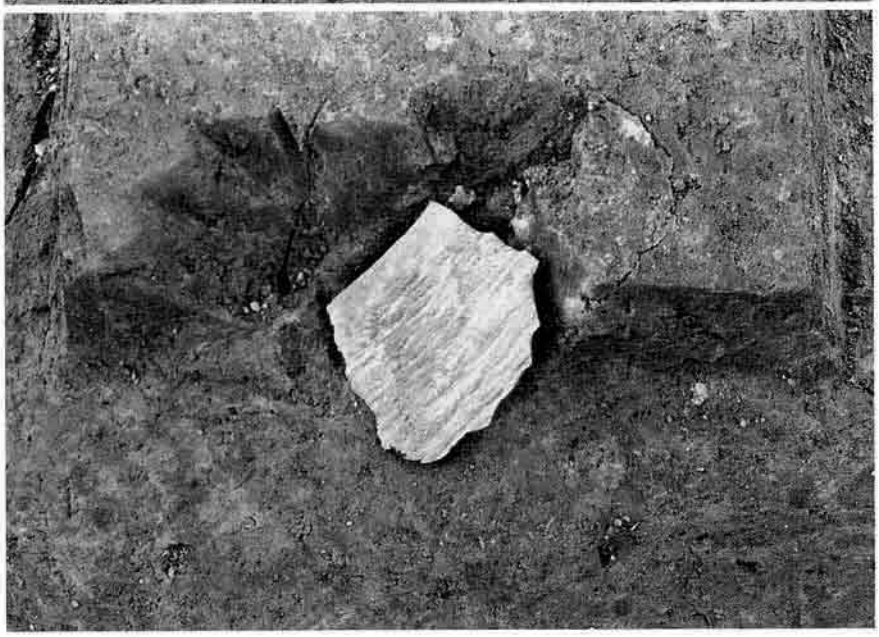
旧石器時代石器ブロック



横長剥片出土状況



石核出土状況



図版三六　NG86—3・64次調査の遺構（二）



NR901（南から）



SD901（北から）



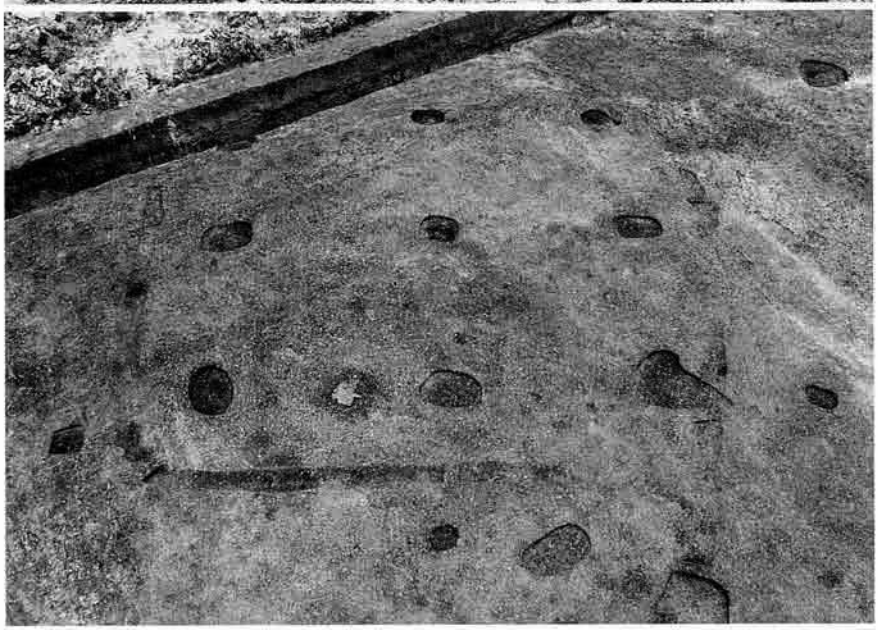
NR902（南から）

図版三七　NG93—56次調査の遺構

調査地東北部
古墳時代遺構
（北から）



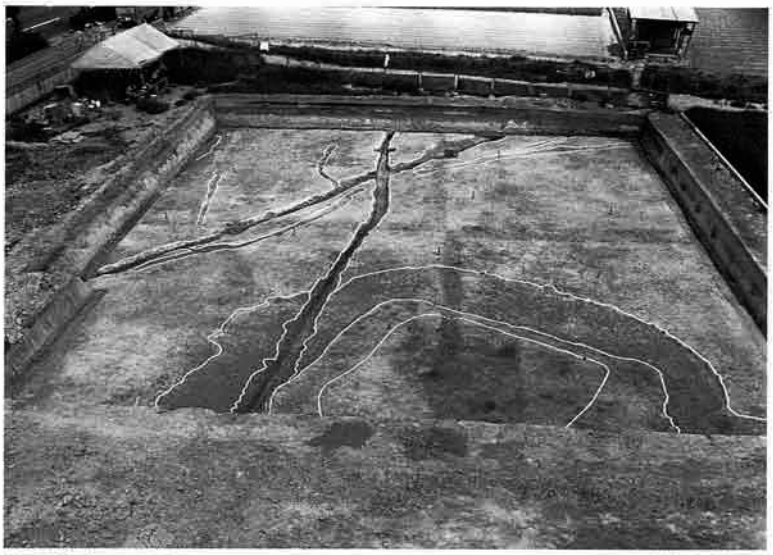
SB701（北西から）



SD703遺物出土状況
（南から）



図版三八　NG85—18・87—56・87—81次調査の遺構



NG85－18次
長原129号墳（南から）

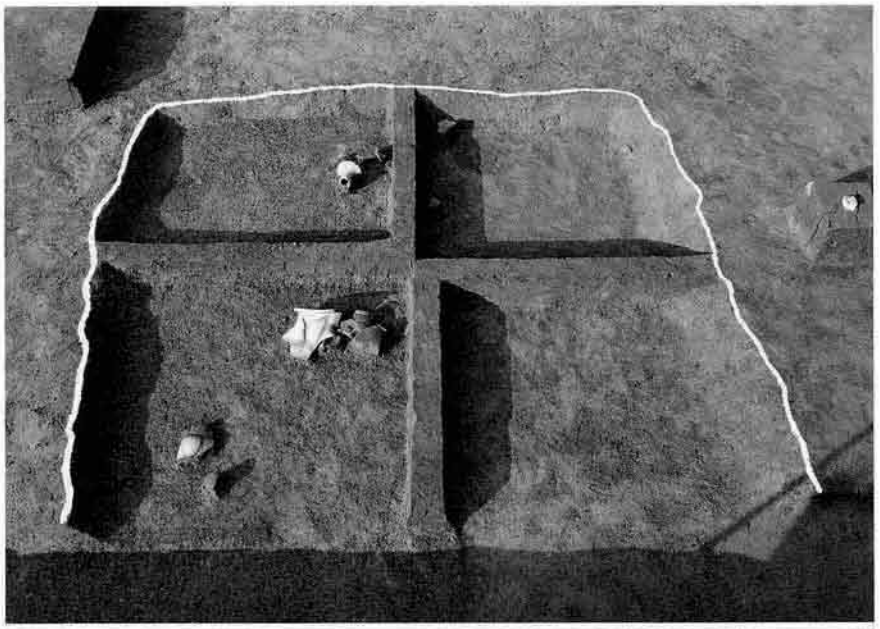


NG87－56次
SD709・710
（東から）



NG87－81次
長原178号墳および
SD707・708（西から）

SK801（東から）



SX701（北西から）



SD712～714
（南東から）

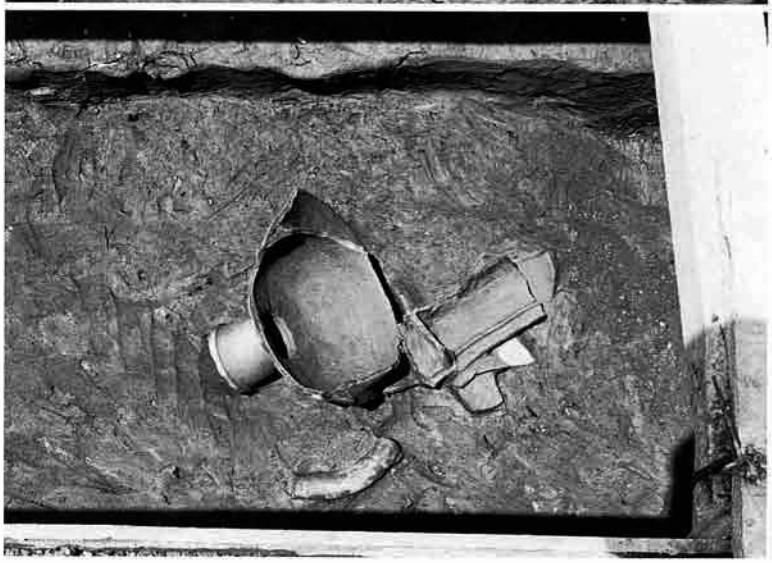




SX703周溝（北から）



SX702周溝（北から）



SX703上層埴輪出土状況

NG84−86次
SE701遺物出土状況



NG84−4次
SD701遺物出土状況



NG84−4次
SD702遺物出土状況



図版四二　NG95—77次調査の遺構



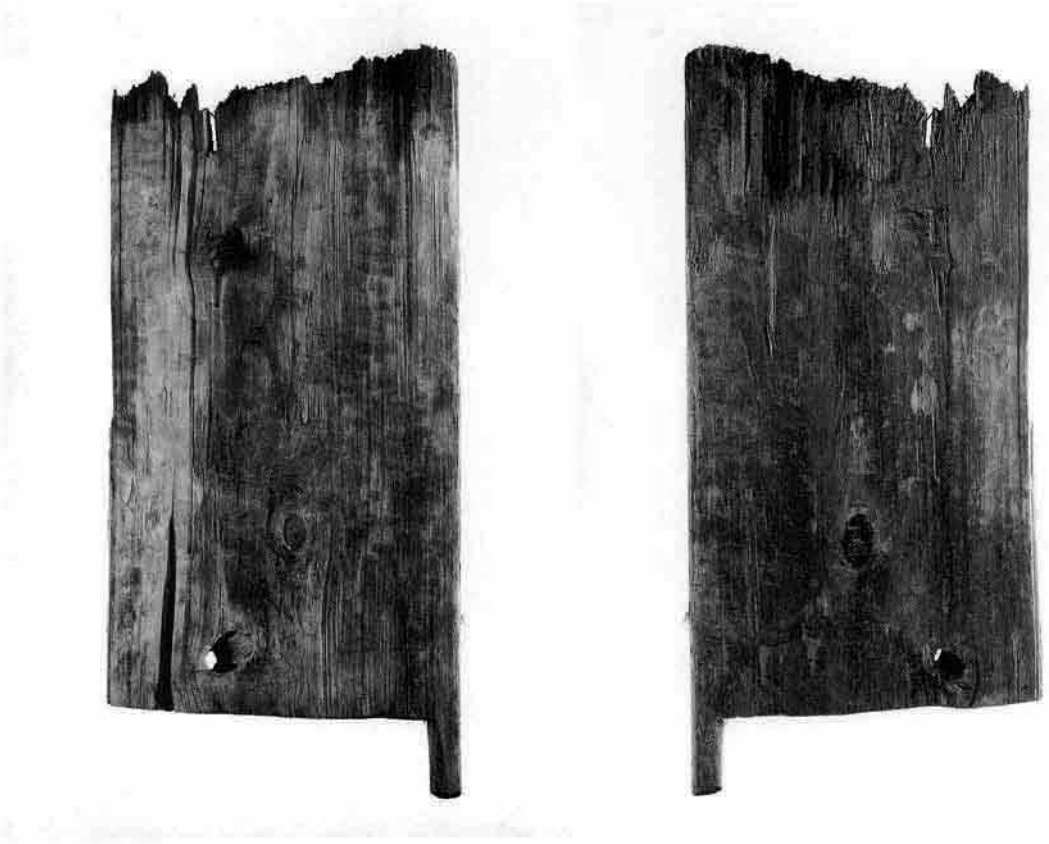
縄文海進時の
生痕化石



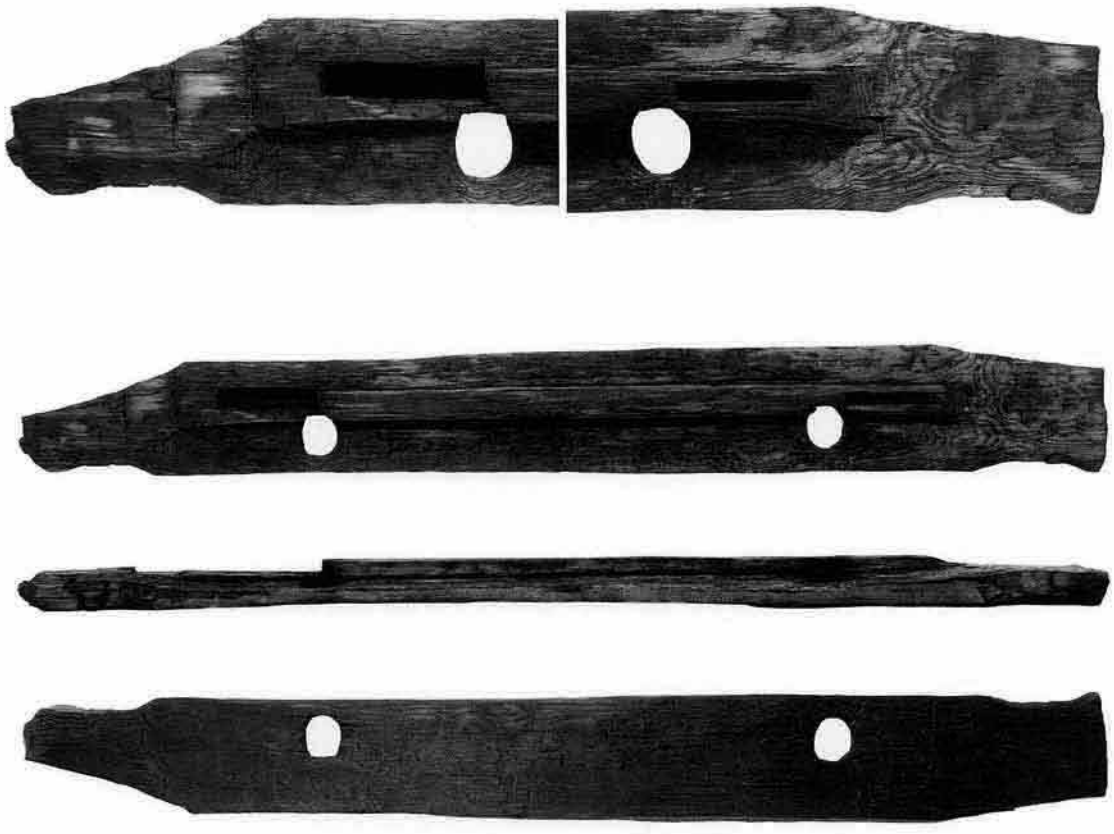
SD801完掘状況
（東から）



SX701断面
（西から）



扉材



楣材

図版四四　NG92－2次出土木簡・NG94－67次出土緑釉陶器





左：NG92－2次SE401出土木簡、上：拡大



NG94－67次出土緑釉陶器

大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 XV

ISBN 4−900687−97− 9

2006年11月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540−0006 大阪市中央区法円坂 1−1−35

http://www.occpa.or.jp/

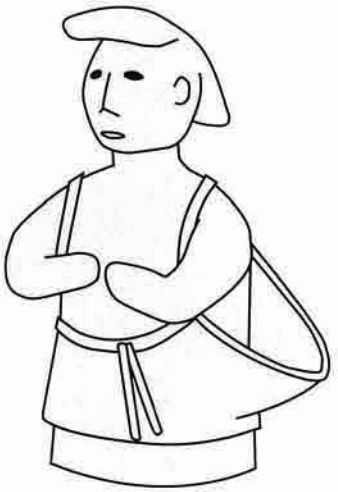
(TEL.06−6943−6833 FAX.06−6920−2272)

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541−0041 大阪市中央区北浜2−1−14

Archaeological Report of the Nagahara Site in Osaka, Japan

Volume XV



Nobember 2006

Osaka City Cultural Properties Association

Archaeological Report of the Nagahara Site in Osaka, Japan

Volume XV



Nobember 2006

Osaka City Cultural Properties Association